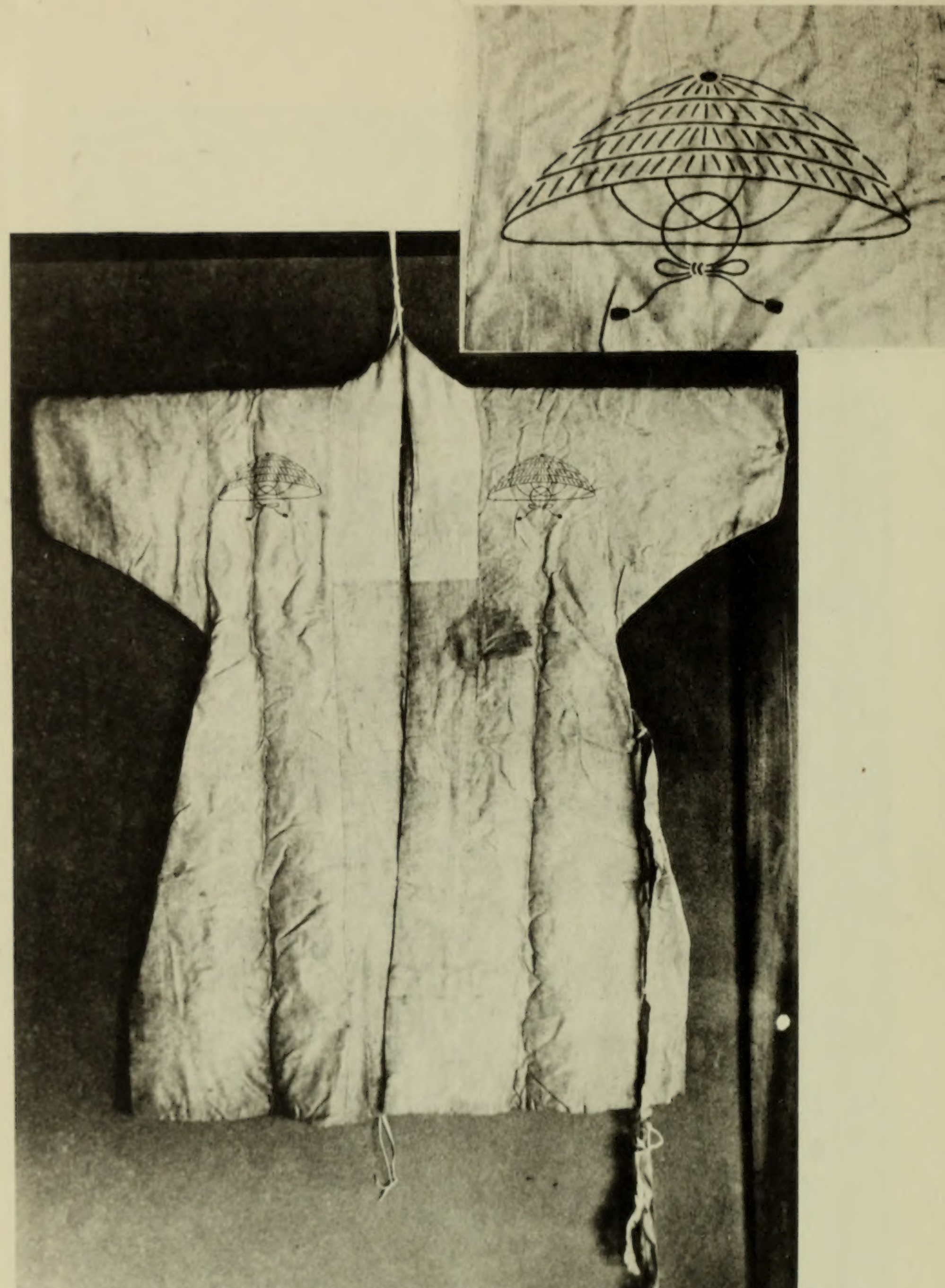
岡山縣
同教育會
同聖學會 贊助

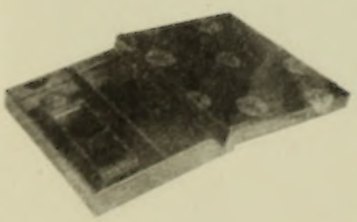
正宗敦夫編輯

蕃山全集

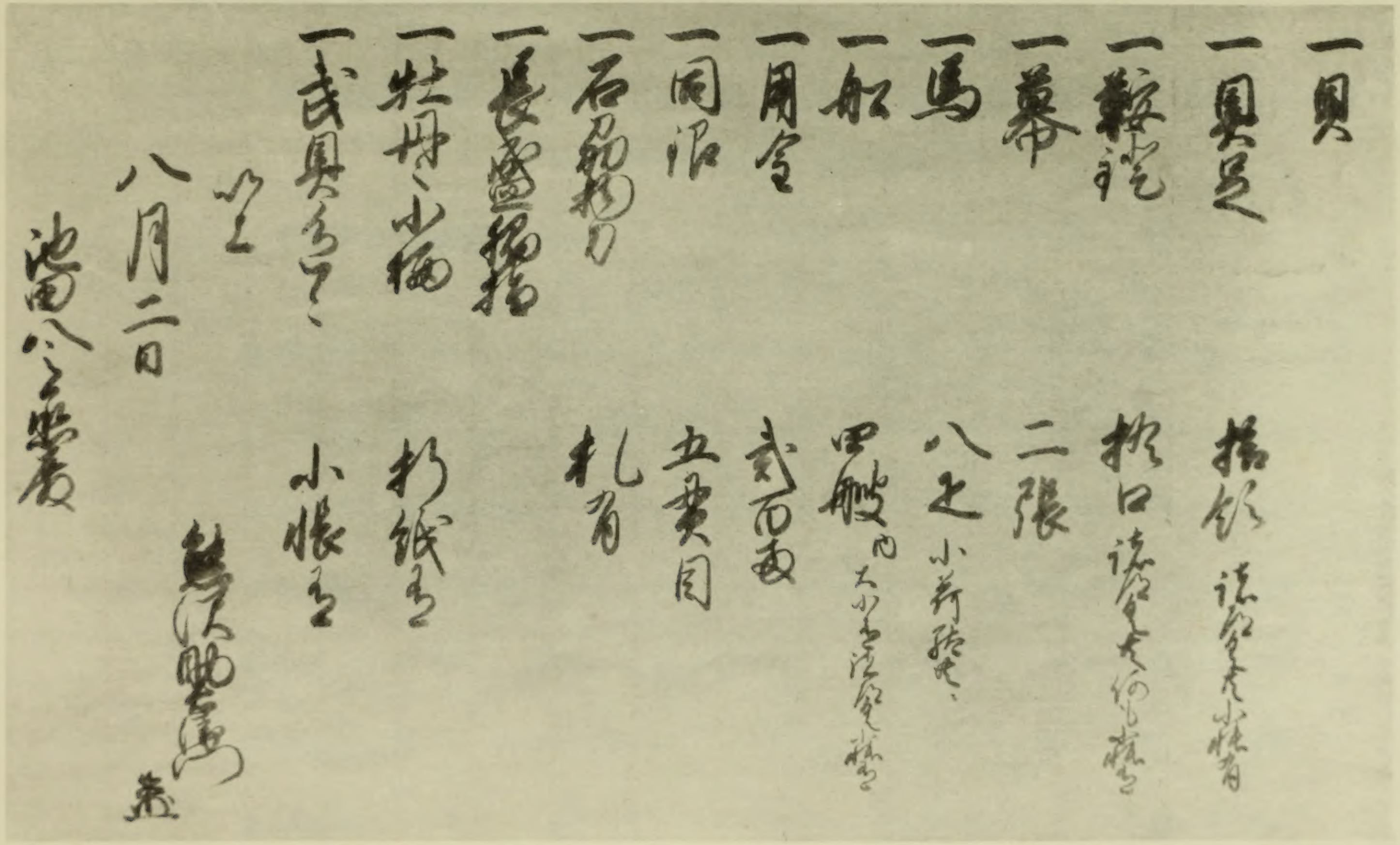
第二冊

蕃山全集刊行會發行





蕃山先生着用　鎧下小袖　池田子爵家藏
（右上は其の紋所）
蕃山先生使用　硯箱（左下）　正　樂　寺　藏



蕃山先生　讓狀の一部　正宗文庫藏
（解題の末に附せる「說明」參照）

蕃山全集第二冊目次

卷頭玻璃版目錄　（一）蕃山先生遺品「鐙下小袖」（池田子爵家藏）　同　硯箱（正樂寺藏）
（二）蕃山先生讓狀（正宗文庫藏）

解題及び口繪說明……一―二九

集義外書……一―二九三……（通頁）一

二十四孝小解……一―一八……二九五

詩經周南之解（女子訓）……一―二四……三一三

召南之解（女子訓卷第二）……二五―五八……三三七

女子訓……一―二四……三七一

女子訓異同篇……二五―四八……四〇五

源語外傳……一―一三五……四一九

集義外書解題

集義外書は蕃山先生の眞著であるとは思はれるが、編纂は門人の手で出來たかも知れない。書肆小山知常の序文に、「經世治敎の事にわたりて頗る世の忌諱をおかせるとあればにや、その徒秘してこれをつたへず」とあるごとく、秘書の一であつたと思はれる。脱論の事は俊光日記抄貞享三年潤三月七日の條に

植木七左衛門へ脱論可被爲見由先日隱〔○即ち蕃山先生〕被申に付七左へ書狀申遣

勘　脱論ハ集義外書ノウチナリ○植木七左衛門ハ廣島ノ家中

外書中の樂論〔多分雅樂解〕水土解は先生が和書の改正をして加へられんとした事は俊光日記抄貞享三年四月廿八日の條に

中院公、淸水谷公へ寄、眞靜にて三以に出合、押小路公へ同道、中公にも御出、和書改正并樂論水土之解入候て可有板行之由に付各相談。度々改正有之も如何、右兩冊追加板行も時節不宜先延引、今迄の通にて置候て可然、以來隱者百年の後は筆作之書物共同志中寄合候て成共板行可然、只今は無用と中公初被申に付其通隱者へも申參筈也

とある。樂論即ち〔雅樂解〕水土解を和書に加へて改訂板を蕃山先生が出さるゝ考があつた事と思はれる。脱論・雅樂解・水土解が蕃山先生の眞著たる事は以上でも知られる。削簡のある部分は初版本の和書の二版本の折に削られたのが一篇〔六二番〕を除いて他は總て編入せられてゐる事も和書の解題に云つた通である。削簡に就ては俊光日記抄、元祿

六年八月廿八日の條に

進藤猪右衛門へ依所望御簡三冊借遣。他見無之、尤寫被申候事も先無用に候。若益にも成、大望にも候はゞ此方者へ内談候て其上にて筆耕に成とも寫させ可進候間一覽候て先早々御戻可被成候。次々の本も又懸御目可申候。此方に書入など有之候不入本も候間左樣之物△進候樣に成とも可仕候由。小川に書物箱頼遣了。志有之候とても少々之衆へは不參秘書に候へ共貴丈御役義柄故若益にも成候へば君の爲國の爲貴樣御爲と存、三以へも内談候て懸御目候御事にて候。と申遣

勘　進藤猪右衛門ハ俊光ノ母方ノイトコニテ廣島ノ家中ナリ○御簡ハ外書ノウチナリ○小川ハ前ノ條ニ小川淀へ、用事候て上京とて被參トアリ。同ジク廣島ノ家中ナリトオボユ○猪右ハ時ニ普請奉行タリ

と見えてゐる。外書が秘書として取扱はれてゐた事は是によつても知る事が出來る

因に、蕃山先生の著述には秘書扱ひの本が多い。其に就て俊光は日記元祿九年三月四日の條に

晴。江南野水見廻對談。挨拶了て水土解同志中より入用にて取に來候故其元へ取に進候處何方へか被ㇾ置ㇾ爲ㇾ見候とて取に被遣候由令承知候。借許之節是は別て秘書にて御座候間他見他借被成間敷由申入候に外人へ御借之事御人體には似合不申不信之事に候。か樣之秘書私に秘するにては毛頭無御座候。義論書簡は受用體之事、板にも出申候故不苦候。秘書の分は先事にて候へば道德眞志不定內に珍敷書を見候ては却て志實ならず故人にたかぶり高慢の氣象も出候へば却て害に成申候故道德實志見屆候て秘書見せ候樣にと先學も申候故某の志も立不申候。先第

一約信等一言之義も無相違樣に信義を極候事人道第一之事に候。と申候へば成程至極にて候。某あやまり申候。

源氏見樣之書之事も卒忽に語申候て迷惑申候由被申、暫語被歸き

とある。是によつて蕃山先生が秘書に對する考も窺知する事が出來る

さて外書の名が俊光日記抄に見えたるは元祿四年潤八月四日の條に

蕃山武三郎へ備後索麪、宮川洗心內義へ索麪五把線香息游公忌中爲見廻遣之了——○外書十三冊三以丈本にて日向と校合不殘今日濟○集義和書の校合は主馬丈として相濟候也

五日——外書五冊今朝主馬殿へ返辨。此方に一冊も無之也

と見えてゐるのが初見であるやうであるが、元祿四年八月に先生は歿せられたので、其翌潤八月の四日には校合が濟むでゐる處より考ふるに、外書の形は先生が生前に大躰調つてゐたものと考へてよいと思はれる。多分は先生が古河に移られる前年（貞享三年）に和書改正丼樂論、水土之解を加へて板行の事が俊光日記（四月廿八日の條）に見えてゐるから（本全集第一冊解題一二頁參照）其前後に大略の編纂は出來てゐたと思はれる。其時には樂論、水土之解は和書に加はる筈故外書には加はつてゐなかつた筈である。中庸九經考以下は或は外書の外であつたのかも知れないが、こゝに外書十三冊とあるはどう云ふ內容であつたかは今の處私は資料不足で何とも知る由がない

猶此處に明記して置かねばならぬ事がある。其れは蕃山先生が三好宗甫（醫師にて先生の門人）に送つた書簡中に「外書十二冊致落手候」と云ふ事が見えてゐる事である。此の手簡は靜嘉堂に其模本が所藏されてゐる。井上先生は延寶

八年九月であらうかと考證せられた。然らば外書十二冊は先生六十二歳の時に出來てゐたわけである。十二冊がどんな内容かは判明せぬが、中庸九經考（外書十一巻）以下は或は後に添附せられたかも知れないが、其他は一應まとめられてゐた本と見てよいと思ふ。從つて私は大躰に先生の眞著であつて、編纂も先づ〳〵先生が形を整へてをられたものと考へて差支ないのではあるまいかと思ふのである。此手簡によつて從來の人々が考へてゐたのより先生自著に數歩近よつた感じがするのである

猶外に一つ考ふべき事がある。此の外書は先生が大躰まとめられた物であらうと思はれる事の一證として、外書に編入せられた第一版の和書の文章が余程の改訂を經てゐる事である。是れは最も注意を要すべき事であると私は考へる。何となれば先生がたゞ意に滿たないで捨てられたものを、門人が惜しんで拾ひ集めたものならば、斯く加筆訂補は無い筈である。先生自からは和書十二巻の終に（全集三二六頁）

心友問、和書の前言多くけづりすて給へり。五三年過なば又けづり度思ひ給ふ章有べきか　云、殘る章今も半は心にみたず。しかれども人により迷ひをとくべきことあればけづらず。後世のそしりは眼前に見ゆれども、今の人の迷ひをとくべき事は今日の天職なり。時文明の運當て人心の闇昧をひらくは、少し天恩に報ずるなり。是を以てよのそしりをかへりみず

と云つてをられる。是れによると初版の内を二版の折に捨て給うたのは先生が意に滿たないで捨てられたやうであり、外書には門人が捨つるにしのびず拾ひ集めたかの様に考ふべきであるが、實はさうでは無いので「經世治教の事にわた

りて頗る世の忌諱をおかせるとあればにや」云々と云つてゐる書肆小山知常の言に留意すべきではあるまいか。和書初版發刊後三、四年間にして大改訂板を出された原因は頗る世の忌諱をおかせる點にあつたものかと私は考へるのである。自然外書は秘書たるべきであつて、生前には出版は先生はもとより欲せられざりし事は推察するに難くない。而して其の改訂が年と共に先生の心境の變化に基づく點もあらうが、一つは忌諱の點も考慮せられたものと考へられる。其れに就ても初版と外書と對照して研究する事は、蕃山先生を研究する上には大切な事であると私は考へるのである

集義和書と外書とは內容に自然差別があつたと云ふ事は一讀すれば知られるが、書肆の卷頭の詞も、大躰門人達の差圖、或は其の談によつて書いたものかも知れぬ。何分にも一應はかの書肆の詞の如く心得てよいと思ふ。斯くて私の考ふる處では、外書も先生自から、少なくも先生の意を躰して編纂せられたもので、先生の自著と云つても差支ない位まで本書は信を置いてよいと思ふ。たゞ和書(二版本)一九五・一九六・二〇二・二二七・二二八・二二九の數篇が外書に採錄せられてゐるのは、先生みづからの編纂にしても、門人の編纂にしても一應は誤であらうやうには見ゆるが、其れは二版本和書の改訂を先生が希望せられてゐた事は、貞享三年の俊光日記にも見えた通りであるから、和書を改訂して是等の數篇をば削除せらるる御考へで、外書の方へ入れられたのでもあらう。而して今第二版の朱の改訂の處を外書によつて檢するに、すべて朱書の如く訂正してあり、全集に用ゐたる二版本和書の朱の改訂は先生の自から改訂せられたる一傍證ともなるべきである。猶考ふべきは外書(全集本一四八頁七行)「上古は年に一度の忌日の祭も云々より(十行の)今時終をしらぬ忌日をも祭るは道理なき事也」は和書には無いから、先生が增補せられたものと考へられる。外書の文章

も先生の手によりてしば〳〵改訂せられた事を考ふべきである

集義外書は奥附に

寛永六年己丑五月吉旦

帝都書肆　大和屋伊兵衞

同　　　　武藤氏祐政

東武書林　須原屋茂兵衞

としてある十六冊本がもとの版かと思はれる。而して序は寛永庚寅初夏下旬、書肆小山知章謹誌と書いてある。庚寅は七年であるから奥附と一年の差がある。版が出來上つても何か事情が有つて世に出るのが遲れて、七年の序を附けて賣り弘めたのか、又序を後刷に加へたのか、其は知る由もない。俊光日記抄に外書出版の事は出てゐない。外書を秘書とし、板行など若有之候てはいかゞ故と云つて、人々に見せる事にも注意をしてゐる記事が寛永三年に出てゐるが（全文は後に出す）同六年には板行に成つてゐて、其の記事が俊光日記に無いのは或は先生とゆかり深かりし門下ども（少くも俊光は）與り知らざる出版かも知れぬ。初版は十六冊であるが、後刷には合冊五冊本が多い。而して寛永六年己丑五月吉旦と何れも記してゐるが、後刷本は此奥附半枚の凡て日附も書肆名も改刻してゐる。本文は同一の版木と思はれるが、振假名等は後刷の方には大分加へられてゐて、十六冊の分には極めて少い。是れは讀み安くする爲に後に補入した物と考へられる。本全集では後刷の方によつておいた。其れは版本はどうせ先生自らが目を通された出版本ではな

いから讀易いやうにした本に據つたのである。但し其の振假名が全部信を置いて可なるか否かと云ふ事は問題である

やうな氣がする

〇參考

俊光日記抄寛永三年の條に

二月三日――生田道休〔〇頭註生田三郎右衛門改名道休〕來、外書所望之方有之由被申故秘することは無之候へ共前より志も存候仁は各別、無左には少遠慮の子細も有之候。其故は外書に志も不憚方へは遠慮も可然哉又は板行など若有之候てはいかゞ故にて候。と申。其段は能合點致させ可申候。黒田甲斐守家老渡部半左衛門と申人に候。支配の少にても助に成候へば人の爲にても候。と被申き

勘 黒田甲斐守ハ筑前秋月ノ城主。名ハ長重〇寛永六年ニハ外書既ニ版行セラル

〇

寛永四年三月の俊光日記抄

二十六日豐牛より生島玄蕃頭被參――隱者作雅樂・九經考右二冊少づゝ被見候て甚感信、借用申度と被申に付即座に借許。隨身にて被歸き

とあり。元來雅樂解、九經考などは外書とは別にあつかつて有つたと見える。外書を出版する時に添加したものと思はれる。されば元來蕃山先生は樂論（雅樂解）の事なるべし。水土解を添附して和書の改訂版を作られたかつたのである

から（全集第一册和書解題一一頁參照）或は九經考以下を外書に添附したのは先生の意では無かつたかも知れぬ。便宜添附出版したものかと思はれる。

○

續蕃山考（六十一頁）に我師井上先生は

近代備前藩士ニテ史學ヲ以テ世ニ聞エタルモノ二人アリ。一ヲ土肥經平ト云ヒ、一ヲ湯淺元禎ト云フ。二人殆輪ヲ相同ウセリ。又二人共ニ熊澤伯繼ト因縁アリ。即經平ハ伯繼ノ外孫ニシテ元禎ハ深ク伯繼ヲ慕ヒ之ニ傚ヒテ文武ヲ兼修シ且其行狀ヲモ作リシ人ナリ。經平曾テ書ヲ元禎ニ贈リテ云ハク

一集義外書御見セ辱、前カド一通リ見申候。久敷ニテ見申候。仰ノ通リ聖德太子ノ未來記ニハマサリ候事御座候。トカク年ヲ經不申候テハ其人ノ德見エカネ申候。イカ樣近來ニテノ人物ニテ御座候（湯土問答附錄）

ト。經平ノ伯繼ヲ慕ヘルコト元禎ニ劣ラズト云フベシ

○

集義和書解題訂補

池田侯爵家事務所に故知矩翁を訪ねた時、集義和書解題中の一〇頁の小島天樂と云ふ人の寓居雜記の事をしるせる記事中に誤もあり補訂すべき點もある事を敎へられた。萬波醒廬は岡山市の中之町に住むではゐない。猶醒廬日記を參考すれば其の時の事が出てゐると云つて其個條を一々に示され、森川助右衛門は池田の藩士で祿六百石であつたと云ふ事

など教へられた。和書版木は岡山市での事である事が判明した。歸宅して正宗文庫の醒廬日記を按すると

文政六年三月廿八日、小島清介來、清介名廣厚、清介其字也。號天樂居士、津山世臣也。有文學、曾爲衛坊都尉、性狀介、頗爲俗所憎、遂蒙譏枉、削祿廢黜、歲三十六。慷慨不自安、有去國之意。客冬濱田平橋大村成夫等、致書於余、報其情狀、托余以寄寓主人。余雖無一面之識、聞其嘗學於精里先生、不忍背棄之、粗報其意。今日始來宿。溫潤善談。覺稚度、可愛

四月五日、居士歸飯岡々々其妻兒所僑居也

廿四日、――天樂居士携家人自飯岡來、門生後藤平馬菊池初三隨焉

廿五日、午後居士移中町寓居

五月廿四日、午際與季敦過飲小島氏

七月十七日、午後天樂處士携爐訪茅山同酌

八月朔日、與季敦泛舟海門家人皆往、樂處士亦携家人而至

文政七年正月十日、――夜過樂處士、子靜季敦子制同行

十一日――夜與季敦父子清介過飯岡野氏

三月廿三日、晩濱田平橋來自津山、與清介勸次午飲、晩平橋往網濱

六月七日、津山小島正次郎來訪天樂寓居、午後與處士同來、觀校小酌而歸

閏八月十五日――樂處士移居于桶匠坊、晩往賀
十六日、處士寓舍有樓、宜于望月、今夜又邀余兄弟、家人皆行

其後も往來が有つた。醒廬が世話をした中之町の家には文政七年閏八月まで住んだのである。醒廬は學校に住まつてゐたのである。所謂官舍の內の書齋に和書の版木が額にしてあつたのを小島天樂が來て見たのであるか、其の版はを分初版本であらうと思ふが、此額の行方は今は知れぬのである。さがし出したいものである

〇正誤

全集第一册二九六頁　ひろまり、しかもハひろまりしかども／誤

二十四孝小解解題

二十四孝の事我國に傳はりしはいつの程なるか私はまだたしかめ得ない。嵯峨本に二十四孝があると云ふ事は川瀨氏の嵯峨本圖考に出てゐる。これが刊本の始めであらうが、其書を見し事が無いから其內容、即ち孝子の人名を確實にし得ない。青木敦書の昆陽漫錄に

二十四孝。世の稱する二十四孝、その作者をしらず。續文獻通考に、元の郭居敬撰二二十四孝詩一、以訓二童蒙一とあれども、郭居敬はじめて二十四孝となしたるや、詩ばかり作りたるや詳ならず。郭居敬の全相二十四孝詩選をみれば、小傳と詩ありて、今の二十四孝と次序同じからずして、江革、仲由なくして、張孝、田眞あり。林道春云く、群書備數に曰、古今書レ孝者、有二此二十四人一。大舜、老萊子、曾參、閔損、江革、陸績、郭巨、董永、丁蘭、韓伯俞、劉殷、田眞、孟宗、王祥、陳娥、蔡姑、丘武、子魯、義姑、姜詩、剡子、鮑一、黃香、趙孝宗元覺と。二十四孝は名家の撰にあらずして、童蒙に訓ふるものゆゑに、諸書一ならざるべし

とある。おとぎさうし、二十四孝諺解などは江革、仲由なくして張孝、田眞あり。今世間に稱るは蕃山先生の小解に出でたると同じやうなり。例へば合類大節用、故事熟語大辭典など、凡て江革、仲由の有る方である

二十四孝小解はたしかに蕃山先生の著であると云ふ證據は無い。書名も小解とある本と評とある本と二十四孝繪抄とある本もある。繪抄と云ふ名は書肆のつけたものであらうと推察するに難くないが、小解と評とはどちらが正しいとは

云はれぬ。北小路俊光日記には元祿五年八月十七日の條に

　晴、早起かゝり湯。息游軒初忌日主税公（○俊光ノ兄、北小路主税助俊眞）於座敷燒香拜。廿四孝の解一篇讀之。
　歸路隱山へ立寄對面。岡崎へ歸宅、息游公自筆の物取出拜見終日精進

とある。別に蕃山先生の著とは云つてないが、先生の一周年の忌日に當りて燒香後に直ちに讀んでなる處を以て考ふるに、多分先生の眞著に近いものであらうと思はれる。同じ日記元祿十年六月十九日に「二十四孝之辨書寫校合了」とあり、正德五年四月六日の條に

　岡田十之允殿――書物二冊返辨、二十四孝聞書二冊以上貳冊也

とある。二十四孝之辨と云ひ、聞書と云へる前に云へる解と同書と思はれるが、聞書と云へるが同書ならば此の書は元來聞書であつたものかと考へられる

草加定環が上木した二十四孝評に序して云く

　余幼侍家君於膝下、家君曰、二十四孝詩、汝識之乎、曰未也、曰尤淡郭居敬所作、其人事親至孝、左右承順、得其歡心、乃作詩、讃歷世孝子、以便童蒙之諷誦、蓋聖人之設敎、必有方、學之者、亦唯顧其方如何而已。童蒙之求益、此詩其庶幾乎、定環退而讀其詩、他日又趨庭、曰汝識此評乎、曰未也、曰我蕃山先生所撰、遺書雖多藏、而獨闕此評、余故未之見。不亦惜乎、定環曰、唯、爾後、負笈畿內、税駕江都、懷完輯之志、蓋二十餘年矣、未嘗頃刻忘其言也、每聞藏書者、必往問焉、窮日盡力、遂無所得也、是歳春正月、始得諸京師北小路俊冬氏所、俊冬氏高祖某君

者、先生之門人也、故家多藏其書、予幸得受讀也、因竊謂此詩便童蒙、詩豈盡其說乎、有此評、而後發蒙之益、蓋亦不尠、記以國字、丁寧反覆、可謂使人念嚮方者益務也、誦其詩而讀其評讀其評而達其意矣、嗚呼非有家君前言、何以得盡吾夙志乎、繕寫以報於家君、家君、奇之、曰先生以元祿辛未卒於古河、距寬政庚戌、整一百年、斯書之不亡、不亦天之寵靈哉、盍刻之於家塾以傳於吾黨兒輩也、定環謹受命、遂上之梓云　備前　草加定環題

と。草加定環は父親賢から先生に此の著述のあることを聞いて捜索つとめた結果、寬政庚戌（即ち二年）是を北小路俊多から得たと云つてゐる。俊多は俊光から四代目の後嗣であるから、多分俊光の手澤本を見せて貰つた事であらう。而して定環が苦心して求めた頃よりはよほど前、寶永庚寅即ち七年には、書肆小山知常が出版してゐたやうだ。小山知常はいちはやくも先生の集義外書を寶永六年に開版してゐる。（尤も序は此二十四孝小解の奥書と同じい七年のを附してゐる）。其の版本が寬政頃には見當らなかつたのかも知れぬ。先生歿後間もなく版になつてゐたと思はれるのに、定環は苦心して先生歿後百年目にもとめ得て開版したのである。今から思ふと不思議のやうだが、交通不便で古書目錄も發刊せられぬ時代故、斯かる事もあつたのであらう。本文はほとんど異同は無い。今欄外へ草加本として小異を揭げておいた

此二十四孝小解は私は天保六年未初冬求版の分に依つたが、岡山縣立圖書館には「文化十稔酉初春求板　吉田屋新兵衛」と奥書したのや、「文政八乙酉二月求版　大阪書林富川町鐵橋筋　土佐屋喜兵衛」と刷られたものもある。版は轉々としたものと思はれる。定環の開板した方は

寛政二年庚戌仲秋日　江都知音堂藏版

となつてゐる。繪抄の方は見かへしに

備前　熊澤了介編撰　播陽　浦川公左畫圖

二十四孝繪抄評註全　大阪書林　宋榮堂梓

とあつて、終に二十四孝評註終と書いてゐる。此書は本文をいさゝか改訂してゐる處がある。書き落したが寶永版の小解には一々畫が入つてゐる。定環の方にはもとより繪は無い。今繪は省略した

石川雅望の「ねざめのすさび」に二十四孝の事をのべて熊澤先生が云々と一寸評判に及んでゐる。參考の爲に揭げておく

二十四孝。初顯日記故事といへるは、もろこしにて、この國の童子敎今川狀などのごとく、わらはべのもてあそぶ物と見ゆ。その書はじめに二十四孝をあげたり。この二十四孝といへるもの、此國にもふるくよりもてはやせる物ながら、すぐれたる人のあつめたる物とも見えず。元朝の人などやつくりけむ。その中に周剡子性至孝、父母年老俱患二雙眼一、思レ食二鹿乳一、剡子乃衣二鹿皮一、去二深山一入二鹿群之中一、取二鹿乳一供レ親、獵者見而欲レ射レ之、剡子具以レ情告乃免とあり。これは孝子ならずとも獵者の人なることをしらば、いかでか矢をはなつべき。江革が賊の難を遁しとはおもむきたがひたることとなり。今考るに、この故事周の代の事にあらず、もと佛經より出たるをひがおぼえせる唐山の人の、此中に加へたる物とおぼゆ。閃睒經云、閃子父母俱有在レ山修レ道、每採二薪果一供二養父母一、身披二鹿皮一

過ニ王出獵一、誤爲ニ是鹿一發レ箭射レ之、因レ是命終、王至仁慈來告ニ父母一、至ニ其尸所一呼レ天而哭、閃睒重活、全孝感也。
としるせり。閃睒がふたたび生がへりたるをもて、孝の德とせるはことわり有。廿四孝にかけるごとくにては孝子の德のあらはれたるにもあらず。ことに剡子といへる孝子ありしこと古書に見えたることなし。おもふに剡と閃と音相近く、又父母の眼をやめると、鹿皮を着て矢に遭たると、共に同故事なれば、まつたく此經文より出たる事と覺ゆ。熊澤先生佛法ぎらひにてありしが、二十四孝の解におもはざる佛書の注釋をせられしこと、をかしとやいはむ

とあり。用もなきことのやうなれど、序に揭げおく

女子訓解題

巨勢氏の熊澤先生行狀に「女子訓五卷」とあり。草加定環は女子訓或問は余未だ之を見ずと孝經小解の序に（天明八年）書いてゐる。例の如く北小路俊光日記抄によるに、貞享三年五月廿二日の條に

中院公へ女訓一冊進

とあり、元祿四年二月九日に

女書周覽

とあり、三月六日に

女子訓、中三以より申來、主馬と半分づゝ寫

元祿四年九月十一日に

中三以より來書女子訓卷五之末昔物語一冊書寫可仕由にて來

同月廿二日

女子訓末物語此日書仕廻

同廿四日

女子訓五之末昔物語一冊病中慰そろ〳〵書寫出來校了

とあり、十一月八日に

女子訓昔物語校合

同年十二月四日に

女子訓或問上下持參借許了

元祿五年三月廿四日

押小路殿より使、赤貝十五被下、女子訓或問上下御返辨。同昔物語一冊借に來に付借許遣了

とあり、元祿七年五月廿七日の條に

女子訓五冊今日流丈賴中主馬へ借遣了

とある。女書、女子訓、女子訓或問、女子訓昔物語などある皆同一系の本であらうと想像せられる。然し蕃山先生の眞著ではあらうが、其の事は俊光日記抄にはつきりと書いた處は一つも無い。行狀に五卷と書いてあるし、日記の方も「女子訓卷五之末昔物語」とあるから多分五卷で一部になつてゐたかと考へられる。處で巨勢子映即ち先生行狀の著者が女子訓に序を書いてゐる。其の全文は後に出すが、其れには一周南、二召南、三大和西銘、四或問上、五或問下、六昔物語、七鑑草、凡七卷と云つてゐる。此序は元祿辛未春三月とある。辛未は四年である、春三月は先生まだ御在世で、此年の八月に歿せられたのである。行狀は五年秋八月の日附になつてゐるから少し變であるが、鑑草は師藤樹の著である事は申すまでもないが、是れは摘出した本であらうし、大和西銘は先生の眞著かどうか問題であるかも知れぬが、

とにかく慶安三年十月吉辰と奥書した刊本と慶安三庚寅霜月吉日と奥書した刊本が傳はつてゐる（版は別版である）。巨勢氏の書ける行狀にあげたる先生の著述目錄にはこの大和西銘は揭げてはないが、其は此女子訓の一分として揭げなかつたのかと思ふが、其れでは女子訓五卷とある行狀の記事と此序の七卷とあると、（雛草は別としても）合はない。何れにしても大和西銘を別として

周南、召南、或問上下、昔物語

とを以て五卷としてゐたと見れば、行狀に云へると俊光日記抄女子訓五冊と云へると一應は合ふやうである。そこで周南之解の事から述べる

易經小解卷二（全集六八頁）に「六五ハ黃裳元吉也」の解の處に

よく坤の六五の大善にかなひ給へるは文王の后妃也。くはしき事は女子訓、詩の周南の解にみえたり

と先生が云つてゐられる。先生の眞著に「女子訓周南の解」のあつたことは間違ひない

蕃山先生が詩經の周南、召南を珍重せられたことは論語小解に（全集本第四冊二三八頁）

子謂二伯魚一曰、女爲二周南召南一矣乎、人而不レ爲二周南召南一、其猶二正牆一面而立一也與

とある註に

二南の風は、人情の正を得て盛德至善なる者也。故に二南の心をしらざる者は理明かならず、道行はれず、牆に向て立るがごとし。志高き者は、道の大意を見といへども、人情にうときことあり、見識卑き者は、人情に近しとい

へども、道を不レ知ば正を不レ得、或は人情に疎く、或は人情の正を不レ得者は、共に人道を盡すべからず、齊家治國平天下の道にあらず、正心修身の實學にあらず。故に二南を學ブ者は正心修身より齊家治國平天下に至まで通ぜずと云ことなし。況や音に叶て誦歌し、是を琴瑟に施し直に文王の化をかうぶり、其時にあへるがごとくなる者をや

と云はれ、三輪物語巻四にも

毛詩の國風も二南の外には婬詩多し。君子ばかりの寄合ならば、政刑ほどこす所なけむ。小人のための政なれば、小人の情をしらでは叶はざる故也。或説に婬詩は後人の入たる也。聖人は人の惡をなし給はざるの論あり。尤其意奇特なりといへども、惡人の惡をなすことと必ずしも婬詩をまたず。源氏よまざる者に不義多し。よむ人にかへりて淸に過たる人あり。雅詩正風は小人に教へ、婬詩は君子齊家治國の主意を設け給へり。常人のしる所にあらず

と云はれた。其で先生が女子訓として詩經より二南を取り出でゝ解かれたのである。先生に此著ある所以は以上で明らかであらう

今世に傳ふる女子訓として二種類が存する。一種は周南の解が芣苢三章章四句で絶えて、南有ニ喬木一不レ可レ休。以下缺けてゐる本である。靜嘉堂文庫本の類である。(今是を甲本とす)一は日本教育文庫女訓篇所收本である。(今是を乙本とす)この乙本には序が有る。其序は

夫人生而必有レ教、其教也、不レ可レ有ニ教レ壯而不一レ教レ幼、不レ可レ有ニ教レ男而不一レ教女、是以周漢有ニ胎教閨門之學一、

吾　本朝之古、有二女學校（坊イ）一、有二女博士一、雖二農商之妻妾姉妹一、又産業奉仕之暇、靡レ不二向レ書學一レ行、應仁以降世風衰女學廢、官女吏婦之類、猶不レ知レ有レ學、偶攤二書典一、則笑爲二男氣象一、希教二婦道一、則疑爲二無風流一、嗟女子果不レ可レ攤二書典一乎、何爲攤二佛經法語一哉、果不レ可レ受二婦道一乎、何爲荐諂レ寺閣レ法哉、正知人道必可レ有レ教、女子必可レ有レ學、而所三以蕃山先生有二此書之訓一也、先生深憂二世教之陵夷一、著二斯數卷一、（一周南、二召南、三大和西銘、四或問上、五或問下、六昔物語、七鑑草、凡七卷）名曰二女子訓一、然先生膺二屯之一レ遯、其書不二全備一、如二周南解一、纔至二汝墳章一未レ成レ尾、乃令二仲氏補一レ之、於レ茲仲氏竊志二賛襄之業一、廣二貞節之道一、採二先生平日所レ論之意一、以爲二汝墳之末及召南之解一、先生嘗曰、如二藤樹先師鑑草之作一、則以二恠異之事迹胡談之佛性一、雜二說於孝悌明德一、是乃世風未レ識二聖學一、婦女嘗熟二佛語一泥二奇迹一、俄爾叵レ令レ聆二聖門之心法一、故專啓二迪彝倫一、不三必折二衷紫朱一、其至レ陳二人情之正一、則教二導婦人一之的中也、依レ之仲氏展二先生之言一、擢二樹師之源一、以爲二鑑草一篇一、編二入女子訓之中一、於レ是二先生之心法可レ見、而敎亦詳矣、或謂、翁問答集義和書者男子之教也、鑑草女子訓者婦人之教也、以レ吾見レ之、則翁和之兩書、可レ令レ彼二女子一、鑑訓之二篇可レ令レ覽二大夫一、何傚二一陰一陽之格言一去哉、熟味二予言一、則始知三其互顯發明如二環無一レ端耳、國家之至寶亦棄二二先生之書一何需耶、然見者徒弄レ文嗜レ語、不レ本二於躬行心得之眞一、則不レ能レ入二其精神一、而此書亦爲二蠹魚風曝之具一、冀閱者邃味敦識、致二自家日用之美一云レ爾

元祿辛未春三月巨子暎序

此序の筆者は熊澤先生行狀の著者、巨勢正德、字は子暎、號は卓軒（?）、通稱は彦仙（南天莊次第に據る）である。此の

序によると汝墳之末、及召南之解は仲氏の筆になつたと見える。仲氏と云つてゐるのは多分中根郷右衛次常のことであらう。中三貝(後には三以)と云つた。仲とも書いてゐる。後に流謙と云つた人で、先生の高弟である。俊光日記に女子訓の事で此人との往來交渉が有つた事は既に掲げて置いた。處で私の不思議に思ふ事は、周南の解は先生が筆を執られたであらうと思はれるのに、乙本は大に書き改められてゐる事である。其で私は甲本を先生の著として本全集に收めた。甲本の靜嘉堂文庫本は松井博士の舊藏本で、其もとは押小路家傳來の本である。俊光日記元祿五年に、押小路殿(公起)から女子訓或問を返して來た事が出てゐる。傳統正しい本である。さて甲本の一卷は終が缺けてゐるが、二卷は缺けてゐないが、內容が乙本と同じい。乙本の序によれば召南は仲氏が筆を執つた筈である。仲氏の筆を執つて形を整へた本が乙本とすれば、甲本は本當ならば召南は全部缺けてゐる筈である。乙本によつて加へたのならば、甲本も先生の筆を執られた處までは其のまゝとしても、其の無い處は何か注意書を加へて、仲氏のによつて補つてあるべき筈(第一卷が寫されてある位だから)であらう、とやうに考へられる。とにかく不思議である。其で私は傳統正しい甲本によつた。少なくも芣苢三章までは蕃山先生の眞著と認めてよいと思ふからである。召南の方は乙本の序によれば前述の如く仲氏の筆錄である筈であるが直ちには信ぜられぬ。先生の說がどんな鹽梅に取入れられたか。(或は周南は下を缺いでゐても、召南は出來てゐたかも知れない。或は又手びかへ位の處はあつたかも知れない)とにかく芣苢までを先生の眞著とし、召南の解は疑問を存し、乙本の方は先生の說としても一應仲氏編纂の本として眞著とは云へまい、と私は考へる。其處で本全集は周南の缺の處のみは參考の爲に乙本によつて添付しておく事としたが、あとはすべて甲本によ

つて採錄した

女子訓或問

今女子訓或問と題した本をば私はまだ見出でないのであるが、靜嘉堂文庫本、池田侯爵家所藏本、私の所藏本等はたゞ「女子訓」となつてゐるが、これが或問に當るのであらうと考へられる。池田侯爵家本には

詩經周南召南ノ詩ヲ和解シテ女子訓ト名付此書ハ其附錄也

と書いてある。即ち或問に充てよいと思ふ。

此の書又一定してゐない。靜嘉堂文庫本、拙藏本(以上甲とす)は同一系にして、池田侯爵家所藏本(乙とす)は別系本である。ともに上下二巻になつてゐるのであるが、甲の上卷は乙には全部無い。即ち甲の下卷首章が乙の上卷の首章である。然し甲本の下卷の內容は乙本のと同一ではなく、乙本は余程の增加があつて、終の方のは甲本には全く無い。順序など多少前後して入り組んだ處もあるが、乙本に婦人問、釋迦生身の佛如來にておはしまさば云々の章の處に、朱書にて、是より元本になしと云ふ事が傍書してある。其の原本なるものは不明であるが、甲本は其れ以下は無いのであるから、或は誰か增補したか、又外に有つたのを加へたのか、其邊の事は知る由がない。其他にも文章に異同あり、前後せるありて、どちらかゞ改訂本であるやうに思はれる。然し其改訂が著者の手になれるか、否かの點も亦不明である今日では、やはり傳統を重んぜねばならぬ。靜嘉堂文庫本は押小路家舊藏本にて傳統正しき本であるから、先づ其方を正しいと認める外はないから、本全集は拙藏本を本とし靜嘉堂文庫本で訂して收める事とした。靜嘉堂文庫本には附箋が

かなりある。其は誰の手になつたか不明であるが、其由をことわつて加へて置いた。乙本にのみあるは拾遺として後附した。猶文章の異同も一々には揭げ得ぬが短かきは頭注にて明らかにし、然らざるは異同篇の處へ其處を拔書しておいた

○

俊光日記抄に見える「卷五之末昔物語一冊」と見えてゐるのはまだ發見し得ない。他日の出現を待つのである

○

女子訓校訂に當り靜嘉堂文庫幷に池田侯爵家が閲覽を許され、又池田侯爵家事務所の藏知矩、八丹幸八の兩君が種々便宜を與へ給うた事を深謝する

○

追記　女子訓の下（二四頁）に

　むかし佛在世の時に釋迦を信ずる女人あり云々

の物語は外書（二一頁）に大界同文が出てゐる。互に先生の著である事の考證に役だつわけである。又女子訓異同篇（四七頁）に「欽明天皇十三年……それより貞享元年までは千百三四十年なるべし」とある。之れによれば此書は貞享元年に著はされたと見てよいやうだ。俊光日記に貞享三年五月に此書の事始めて見えたれば、かた〴〵貞享の初に成つたと見てよからう

源語外傳解題

源語〔〇一に源氏〕外傳の名は北小路俊光日記抄に所見なく、又巨勢直幹〔土肥經平舊藏本による。此人の名確定せぬ由南天莊次筆に見ゆ。〕の熊澤先生行狀中の著述書目中にも見えない。然し俊光日記抄元祿九年三月四日の條に「源氏見樣之書」と云ふ事見え、同月二十七日

　樂〔〇俊光の妻〕より源抄五册返辨、又四册來

と見え、五月二十六日源氏解拔書二册一二三四主馬自筆にて寫、樂方へ給了とある、其れに就いて井上先生の勘に

　源氏見樣之書、源抄、源氏解拔書以上三書誰ノ作ニカ未勘ヘズ。源抄ハ源語外傳ノ跋ニ見エタル息游ノ抄カ

と云つてゐられる。世に流布せる源氏外傳の奧書を閱するに

　源氏物語抄五卷、熊澤氏所作也。曾聞全部五十四卷各抄出之

とある。源氏物語抄即ち源語外傳で、熊澤氏の所作なりと云ふ事になる。此書は三輪執齋の本を丹波篠山の松崎堯臣が寫してゐたのを岡山の湯淺元禎が寫して傳へた事になつてゐる〔國文註釋全書本。三十幅本〕外傳と云ふ名は誰かゞ付けた名かも知れないが、此書を讀んで見ると蕃山先生が孝經外傳或問に

　言の外の事を述る故に外傳と云。言外といへども言の內に含蓄して有事也

と云ひ又

孝經に如レ此人品の義論はなきに、無用の事のやうなれども、是言外の意にして傳の義也

と云へる「外傳」の名にかなつてゐる内容であるから、よしや門人等の命名であつても、先生の著でありとすれば極めてふさはしい名である

此の書は先生が筆を執られたか、門人等の筆記よりなつたかと云ふ事の證據は得られないが、先生の說である事は本書を一讀すれば知らるゝ事である。從つて先生の著として差支ないものと信ずる

昭和十年十月に神山閏次氏が刊行せられた源氏物語蕃山抄は本書の傳本として最も完備してゐる本であり、石崎又造氏の解說は行きとゞきたる說である。其解說に

> 所謂源氏外傳は儒學的思想を以て源氏物語を評論したもので、文藝的批評として見る可きものではない。而も物語の文意から遊離超越した蕃山獨特の議論に逸脫して、或は王朝風俗の優雅なるを讃美し、或は王道の式微を慨し、或は修身經世の論に亙る。恰も源語を借來て王道政治の復古を說き、風俗人情を矯正せんとするが如き觀がある。即ち源語其者に即した文學的な源氏論ではなくして、それより超脫して、物語に顯はれた人物及社會に對して、彼獨特の倫理道德或は社會觀・國家觀を以て論じたものである。その議論は頗る道學的思想に捕はれ過ぎてはゐるが、源語の批評史上から見れば極めて特色あるものといはねばならぬ

と云はれたのは至言である。猶文學的の評論もはた聞くべき處が無いでもない。蕃山先生の說を究めんとする人は必ず熟讀すべき書の一つである

革加定環が孝經小解に序して、先生の著書に源氏外傳を掲げ、今猶存焉と云つて紫女物語を余未ニ之見ー也の部に舉げて居り、又天明七年同じ人蕃山先生行狀を世に公にして、先生嘗發ニ揮紫女物語ー得ニ其微旨ー。後傳ニ中院通茂卿ー。と書いてゐる。此の文章では紫女物語即ち源氏の物語を發揮する事に解してよいと思ふが、孝經小解の文によれば定環はどう考へてゐたか。行狀に云へるとは外に紫女物語と云ふ著書が有りと思つてゐたのか、少々不明になる。然しとにかく紫女物語と云ふ先生の著述の傳本は無いやうである。孝經小解の序は或は考へ誤りか

源語外傳の傳來に就いては石崎又造氏の解說が最も詳にしてかつ正である。其を抄出する

所謂源氏外傳の傳來に關して最も有力なる資料は流布本の奥書である（○奥書は本書に在り、今略す）

是れによつて左の六ケ條の事實を知る

一、著者は熊澤蕃山なること

二、もと源氏物語五十四卷の全部に亙つて抄出したもので、各冊中院通茂が朱校したこと

三、中院通茂が潤色して、時事に切なるものを擇んで五冊となしたこと

四、尭臣は執齋の本を以て傳寫したこと

五、源氏物語抄と呼んで五卷なること。即是が流布本なること

六、全部抄出したもの（通茂朱校本）は現に（享保五年七月九日）出納大藏なる者が所藏してゐること

と云はれてゐる。各條に對する考證もせられてゐるから其本に就て讀まれん事を欲する。此出納大藏所藏本が最も信

すべき本で有らう。此出納大藏の傳は地下家傳卷八（古典全集本第二冊の三五五頁）に出てゐる。父は職央、慶安二年五月十一日生、寛保二年二月十六日に卒（九十四歳）である。此人の後妻が蕃山先生の女である。（其傳は南天莊雜筆九七頁以下に出てゐる）其で出納大藏の家に傳はつたのである。石崎氏は

扨て、翌年（○元祿九年）三月北小路俊光妻樂はおふゆ兄織義へ外傳の原本と推定すべき源抄五冊を返し、更に四冊を借りてゐるから（俊光日記）此時はまだ二男織義の藏する處であつた。其後二十四年の享保五年には女婿平田職直が原本源氏物語抄（通茂朱校本で五十四帖に亙るもの）全部を所藏してゐたことになつてゐる。思ふに源抄とは源氏物語抄所謂外傳の原本に相違なく、織義は妹おさきが嫁いだ翌々元祿十一年歿し、息子九一郎は未だ幼く、他所に預けられ、妻おきよは中院家に奉公するといふ始末であつたので、此時恐らくは蕃山の遺物は四散したであらうと思はれる

長男織明は既に貞享二年二十六で歿し、蕃山の遺物は二男織義の襲藏に歸して居り、源抄九冊も亦其の一と見る即ち源抄九冊は妹おさきが平田家へ持參する所となつたものと思はれる

と云つてゐられる。從ふべきであらう

源語外傳は蕃山先生が何時頃に著作或は講說せられたかと云ふに、石崎氏も云はれたが明石の卷の源氏の謫居の說明が殊に詳細であるなどから考へて、先生が明石に住まれた後の作とは思はれる。先生が明石に移られたのは寛文九年五十

一歳である。石崎氏は

明石に轉じたのは同(○寛文)九年で、此夏岡山に歸り、翌十年夏再び明石に還つてゐるから、早くとも同十年頃以後に成つたと見られ得る。蕃山の説を受けた中院通茂が延寶三年内裏で源氏を講じ、或は外傳の説を其儘草稿に取入れた源氏註が延寶五年には出來てゐたとすれば、源氏註は既に同三年頃に着手せられたと見、隨つて外傳も亦其頃通茂の利用する所となつてゐると見られ得る。即ち外傳は略ゝ寛文十年から延寶二・三年迄の、五・六年の間に成つたものであらうと推定せられる

と云はれた。處で私は一つ考へねばならぬ事がある。蕃山先生が明石に移られた事情は南天莊雜筆一三一頁に

さて京都を追はれた先生は一時大和の吉野に隱れたがこゝにも足をとゞめかねて其年の中に山城國相樂郡鹿背山と云ふ邊鄙な地に移つた。然るにここへもなほ尋ねて來る人が多く從つて先生の噂が世間に絕えぬので遂には身を保つ事が出來まいと察してそこで播州明石に移りて一切世を避けたいと思うてかの板倉内膳正重矩に相談した所が重矩、大老酒井忠清等と相談せし上それがよからうと云ふ事にきまつて重矩から當時の明石侯松平日向守信之に賴んで明石領内に置いてもらふ事になつた

と云はれてゐる。一切世を避けたいと思うて明石へ移られたのに明石で人を集めて源氏の講説をせられ、其を人が筆記すると云ふやうな事は無いと思はれる。さうすると時折京へ上られたとした處で源氏五十余帖の要處々々を講ぜられたとしても中々の時間を要する。其等の事を考ふるとやはり先生が筆を自から執られたものと考へねばならぬと思ふ

郡山より三好宗甫宛の先生の狀に

手前座敷もあき有之候間金彌子方より此方へ御越内々の源氏抄も御覽被成候へかしと存じ申候此次でに拙者病躰も

御相談仕藥服用仕度候

と見えてゐる。講義筆記ではなく、自から筆を執られたとする方がよいやうに思はれる。眞著たる事は此狀にても明かであらう

源語外傳として流布した本の多くは其奥書によれば

中院通茂本――三輪執齋本――松崎堯臣本

となる事は前に云へる通りであるが、其次に

右源氏外傳得諸丹波篠山松崎神童之所

延享元年甲子夏五月廿七日　湯元禎

となつてゐる（國文註釋全書本・三十幅本）。然らば岡山の湯淺元禎の寫本が世に流布した一系統の本である。元禎は松崎堯臣とは親しかつた。全書本の方は次に

天明戊申仲秋七　小草居士牧焉

とあり、次に

余聞熊澤子源氏外傳久矣偶見根公詢許處々借而謄寫來嘗推古今人才焉今讀之愈滋味其識高出人意表若玩語者讀之其益非淺小也。但体裁非外傳考之跋中乃非舊稱欲更名曰源氏評　于時天明戊申抄冬　兎道山樵惶識

右源氏外傳はじめよりわかなの下にいたる大關括嚢翁藏本をもてかたはら朱書の校合并朱路うつし畢ぬ日あかしより末紙の墨跋ともに括翁の藏本にもれ侍りぬ

于時文政十一のとし卯月初八日　花鷹園

とある。兎道山樵は誰の事か。花鷹園も私は知らないが、大關括嚢翁は日本書紀文字錯亂考などを著はせる野州黒羽藩主大關增業の事である。兎道山樵が外傳の名を非として源氏評と改められたらしい。其系統の本が「源氏物語評抄」の名で傳はつてゐるのであらう。外傳の名がふさはしからぬ名でない事は前に述べた。此の兎道山樵は先生が外傳と著書に命ぜられた意を知らなかつたかと考へられる。又三十幅本の方は、湯淺元禎の識語の次に

源氏外傳二卷、備前井仲龍〔〇敦云、原本籠トアルハ誤植ナリ今訂ス〕潛所レ藏也。上卷倩二義空法師筆一、而下卷則自書、以藏二于家一、湯之祥元禎所レ謂松崎神童者、吾師觀海先生松崎君脩惟時也、時先生歳十二

寛政四年壬子暮春十一日　大田覃識

一覽之餘、叨加二朱批一耳、　覃　又　識

とある。井仲龍は井上四明の事で岡山の文學であつて常山とは極めて親しかつた。多分湯淺常山の本を借りて寫した物であらうから、全書本よりは轉寫の數が少いかと推せられる。さて三輪執齊本は中院校本に據つたものであらう。執

齋は通茂に歌を學んだ。然らば五十四帖の終迄に及ぶべきに、何故に及ばなかつたか。等の疑問が續出する

蕃山抄と名づけて昭和十年十一月發行せられた本は神山閏次氏所藏本で二冊本で題簽は共に剝落し、唯小口に「源氏抄」とあるを今題して源氏物語蕃山抄とせられた。化政頃の寫本で高力氏藏書とある由である。又蕃山抄を發刊せらるゝにあたり、京都帝國大學圖書館に中院家舊藏源氏御抄を藏せらるゝを參考せられたとの事である。神山本・中院本は同じ系統の本と見えるとの事である。但し中院本は初の明石卷迄を存し、神山本に比すれば約五分之二を缺いでゐるとの事である。つまり神山本が現在の傳本では一番よい本との事で、其考證をしてゐられる。中院本と三輪本とは同じ筈、三輪本と松崎本とは同じ筈なるに、其に大なる相異のあるを思へば、三輪本の底本たりし中院本と今傳はれる中院本とは相異ありと推せらるれば、蕃山先生の本に初稿二稿の差、又は初稿に再治があつたのかも知れない。何分出納本か其寫本北小路本かの出現を待たねば其眞は知られないやうな氣がする

扨て今本全集に收むるに當りて、神山本が現在にては一番すぐれてゐると思はれるが、何分此本は單行本で發賣中の事ではあり、かた〲便宜上正宗文庫收藏本(五冊本)を底本として蕃山抄を參考した。此正宗文庫本はやはり松崎堯臣の本から分れた本とは見ゆるが常山の識語なく、高昶氏の識語を有してゐる。但し天明四年高昶の奥書は存すれども、其の轉寫なるべく、本は化政頃の本と思はる。全書本・三十輻本と同系なれど、又蕃山抄と同じ處も少しは有る。本全集に編入するに當り、いちじるしい誤脫は流布本を參考して訂正した。而して蕃山抄によつて脫落は補つて皆「　」印を加へて置いた。源氏の本文は流布本は誰が筆寫の時に略したのか。蕃山先生が自ら筆を執られたとすれば面倒なから

省畧せられたか。更に角神山本によつて是を補つた。校訂上の形を説明すると

〔　〕の補入は蕃山抄に依つたが蕃山抄が中院本によつた處は〔(御)〕とし、蕃山抄になき文字には右傍に△印を附し、三十幅本のみの異同は……(三)とし、全書本のみの異同は……(全)とした。されば右傍又は下に（　）の註記無きは蕃山抄に據れりと思はれたし。又まゝ（湖）の印あるは蕃山抄が湖月抄によれるを用ゐたるなり○澪標より諸本本文を缺く。全書本・三十幅本も各按を加へたり。蕃山抄は頭註して最も詳細なれば、其を引用し他本のは凡て掲げず

源氏見樣と云ふ書の事、俊光日記元祿九年三月二日の條に

> 江南野水見廻對談。挨拶了て水土解同志中より入用にて取に來候故其元へ取に進候處何方へか被レ遣レ爲レ見候とて取に被遣候由令知候。借許之節是は別て秘書にて御座候間他見他借被成間敷由申入候に外人へ御借之事御人體には似合不申不信之事に候。か樣之秘書私に秘するにては毛頭無御座候。義論書簡は受用體之事、板にも出申候故不苦候。秘書の分は先事にて候へば道德眞志不定內に珍敷書を見候ては却て志實ならず候故人にたかぶり高慢の氣象も出候へば却て害に成申候故道德實志見屆候て秘書見せ候樣にと先學も申候故某の志も立不申候。先第一約信等一言之義も無相違樣に信義を極候事人道第一之事に候。と申候へば成程至極にて候。某あやまり申候、源氏見樣之書之事も卒忽に語申候て迷惑申候由被申、暫語被歸き

と有り。是れは蕃山先生の秘書とせられし事に就て重用の文献なるが、其はさておき「源氏の見樣」が先生の著たる事の一證ともなるべく考へられる。源氏の見樣の書は外傳の卷首の總說と同樣なるが故に源氏外傳も蕃山先生の著と北小

路俊光もみとめてゐるとも云へるから、源語外傳が蕃山先生著であると云ふ證據の一となるわけである。其終に近き婦人云、うけ給りしにて云々の處より相違ありて、一枚ばかり延びたり。此の源氏の見樣と云ふ本は先づ單獨にて一冊の形をしてゐた物と考へられる。本全集第三冊解題四頁に云つた福井軏と云ふ人の舊藏書の蕃山先生の寫本どもの叢書の中にも是を單獨の本として編入してゐる。本全集の外傳の卷首は此の福井舊藏の叢書本にて校合し、延びたる處は別に終に附け加へて置いた。猶源語外傳の解說は石崎又造氏のでほとんどつきてゐる感が有るから其れを見られる事を御すゝめする

○

神山氏の解說中

蕃山
├ 繼明　（○略記ス）
├ 繼義
└ さき　後冬
　　＝ 平田職直
　　　└ 女　稱妙閑
　　　　＝ 川口氏 ─ 好問
　　　　　延享四年濱庇所藏
　　　　　さきより妙閑を經て所傳
　　　　伊豆人、奥田三角友人

[illegible]　蕃山 ─ 繼義 ─（さき）─（妙閑）─（川口氏）─（好問）
　　注、括弧は推定を示す

とあるは誤であらう。南天荘雑筆一〇一頁に

冬女には少くとも一人の女があつた。即先哲叢談に

奥田嘉甫の三角集に渾不似を記して云はく。丁卯の春伊に遊びて好問君の第に留まること殆一月なり。其老川口丈は好古の士なり。一琵琶を出だして吿げていはく、此は了海熊澤子の物なり。名づけて濱庇（ハマビサシ）といふと。余接して之を見るに漆光退蝕して古雅愛すべし。蓋宋元間の物なり。其所以を叩くに曰く。主母妙閣孺人出納氏の賜なり。孺人は大藏大輔職直の女にて熊澤氏の出なり。琵琶は乃其妣より傳はれりといふ(〇原漢文)

とある。渾不似は即琵琶である。……丁卯は延享四年で冬女の歿した前の年である。伊は伊賀である。好問君は津城主藤堂氏の家老で名張の城代なる藤堂元甫である。即三國地志百十二卷の著者である。主母妙閣孺人とあるは此人の妻と思はれるが（主母は奥方といふことである）延享四年には好問齋は七十一歳である。妙閣孺人は冬女が平田氏に嫁した翌年即元祿九年に生れたと假定しても此年五十二歳であるから好問齋とは大分年がちがふ。然しやはり好問齋の配と思はれる。秋山弘道の纂賢錄に

用ふる所の琵琶、濱庇と名づく。今豆州の川口氏藏せり。……筝は遠雁と名づく。今本藩の大夫池田志津摩藏せり。兩氏共に先生の姻(〇原漢文)

といへるは右三角集の文に據つたのであらうが豆州といへるは集に伊とあるを誤りて伊豆と認めたのである。又川口氏を先生の親戚とせるは集の誤讀である

と云はれた。神山氏は集賢錄の誤をつがれたやうである。蒼山先生の外孫出納氏は名張の城代藤代元市（即好問）の後妻にて、川口老は好問の家來のみ。後世の誤らん事をおそれ、南天莊先生にもたゞして、書添へて置くのである

○

追記　源語外傳、全書本や、三十幅本は源氏外傳となつてゐる。底本が源語外傳となつてゐたから其に從つて置いた

卷頭玻璃版說明

蕃山先生の用ゐられし鎧下小袖　池田子爵藏
　質は白羽二重綿入

蕃山先生の用ゐられし硯箱　正樂寺藏
　漆塗。金蒔繪定紋付

蕃山先生が養子池田八之丞への讓狀の一部　正宗文庫藏
別に解說を必要とせぬが、讓狀は一部しか寫眞にしてないから傳記資料として其全文を揭ぐ。目錄は奉書全紙であり、諸士名前書の方は奉書半裁卷紙様についてである

目錄

一鐵炮　百挺　內大小有　諸道具有
一弓　百八張　諸道具有
一矢　三千貳百三拾六本

一矢根　七千七百八拾貳本

一のほり　三本

一鑓　五拾五本

一押太鞁

一貝

一具足　拾領　諸道具共小帳有

一鞍鐙　拾口　諸道具共何も小帳有

一幕　二張

一馬　八疋　小荷駄共ニ

一船　四艘　内大小有諸道具共小帳有

一用金　貳百兩

一同銀　五貫目

一石刕物刀　札有

一長盛脇指

一牡丹之小柄　折紙有

一武具色々　小帳有
以上　熊澤助右衛門（花押）
八月二日
池田八之丞殿

（諸士名前書）

宇高太郎兵衛
室市兵衛
山室茂兵衛
野村小兵衛
藤澤九郎兵衛
頓宮猪左衛門
土肥源六郎
尾澤六郎右衛門
熊澤權之助

明石佐助
伊庭瀬兵衛
中野勘平
井上市郎右衛門
增田木工右衛門
梶川孫四郎
日笠太兵衛
藤澤半三郎
中村豬之助
尾澤小三郎

頤宮久太郎
堀市十郎
虫明小八郎
大村意齋
和氣平兵衛
岡崎助八
虫明九右衛門
原四郎右ヱ門
三村長太夫
鈴木五郎兵衛
江田長兵衛
丸田吉左ヱ門
湯本彌五右ヱ門
若林彌右ヱ門
中村久右衛門

奥村又兵衛
播本甚左ヱ門
有正勝左ヱ門
日笠又右衛門
杉原源兵衛
延原次左ヱ門
同六郎兵衛
小者數六拾四人
但道具持挾箱持
さうり取加子人足共
熊澤助右衛門
八月二日 （花押）
池田八之丞殿

集義外書序

集義和書及ト書は息游軒熊澤先生のあらはせるところ也。その和書はすでに世に行はれて、外書はいまだ印行せず。思ふに和書はおほく學者日用の工夫を論ずれば、もとよりはやく世にめぐめり。外書にいたりては經 治教の事にわたりて、頗る世の忌諱をおかせるとあればにや、その徒秘してこれをつたへず。故にみるものすくなし。予この比この書を得てこれをよみ、ます〱先生の道融し才ひろきことを信じ、且そのうづもれんことをおそれてかく梓にちりばめ侍る。予嘗その徒の語りしをきけり。此書載るところ、或は人のかたりつたへしまゝに、その有無をたゞすに及はずして、其によりてのべたることも有。又或はふかくそのよるところを考るにいとまなくして、しばらく世のことわざをもつて論じたることなどすくなからざれば、たゞそのむねをみて道理をわきまへむとのみ先生のこゝろなりとなん。されば今この書を見む人、事の有無にかゝはらずして、理の當否をあきらめ、なをその徒の先覺をたづねて、先生述作の奥旨をきはめむとぞ、道をもとむるのこゝろざしならん

寛永庚寅初夏下旬　　書肆小山知常謹誌

集義外書　巻一

削簡一

一幼君をもり奉らんことを尋し人に答へし。いまだ道理をわきまふべき知覺もひらけ給ふまじきときに、しゐて善をせむればかへりて善根をくじくためしあり。學問などをしふれば後に學問ぎらひになる人あり。たゞ善事を以て大がきをして、不善のたぐひを見せ奉らず。いましめざれども不善なく、つとめざれども善にならひ給ふ様にすべし。天地の間に春いたりぬれば、春にあそばざる人なく、善事家にみちぬれば、善をたのしまざる人なき道理なり。善事とて別に事有にあらず。五倫のまじはりに五典十義有ことを自然に教へならはすなり。さては六藝にあそぶも、其作法よければ皆善事なり

一幼君に禮を教奉るには、殿様どのあそびにとりなして、君臣の禮儀をしらしむべし。扨は世間にある事の、しらで不叶禮式をしらせ奉るべし。七五三・五々三などを作物にして、おとなわらはうちまじはり、たがひに客となり、主となり、かよひの役者と成て、其作法實事かけずをしへならはすべし。常の使者奏者の口上・ちぎ、あそびがてらに習すべし。太刀・折帋等一切の用に立べき事どもならはすべし

一人心は生ものなれば、うごかぬといふ事なし。善にうごかさざれば悪にうごくもの也。是以聖神の御代には、天地

の律呂をうつして、糸竹の樂をつくり、人心を正直にあそばしめて、邪欲をふせぎ給へり。今の箏・琵琶・和琴・笛・篳篥・笙・太鼓等の樂器なり。常に一二人案じてなぐさむには、箏・琵琶は一人にてもよし。何も合すれば一入にもたのしむものなり。箏・琵琶は達せざれども、二人同絃なればたのしびになるもの也。樂のけいこの初は、音律よきものを師とし、笙・笛のせうかを習たるよし。幼少におとなまじり、幾人も一度にうたひぬれば、はやく通ずるものなり。其中に音に器用なるものあれば、わき〳〵をもひきたつるものなり。樂音によく通ずれば、淫聲は好まざるもの也。昔は源平の武士、皆管絃に通じたり。奥州の忠信、陣のいそがはしきにも、水戸まで琵琶をもたせたるにて知べし

一幼少の弓馬の稽古、弓はおぼへなきほどよはきしのはりよりはじめ、馬は木馬よりはじめ、其後的をゐてあそび、輪のりをして鞍をかため、馬よりおとさゞるやうに教へ立べし。武藝は藝者にてなきよき武士の知て、武士につたへたるぞよき。器用の人あらば、一月の間にも底をふるひをしへたてゝ、師にまさる人有やうにすべし。いにしへは十六七にては弓馬に達者なる人多かりしなり。今は一色に一生もかゝるやうなるは、武藝の師を藝者におとしたると、其道を失ひたる故なり。甲陽軍鑑に此道理をあしくいひ置て、武道の煩となるとあり。武道を藝者にあづくる時は、武道のすたるゝ事をわきまふべし

一よみ物手習、おさなき人に、成人の人もまじりて、退屈なきやうに、半時ばかりほどにかはりて學ぶべし。武藝は氣もつきがたく、半時にては間もなき者なれば、一時がはり程にてもよし。幼若のまのあたりにて常にすれば、をのづからききとどめ、見とりしたまひて、苦勞なくしてならはるゝもの也。日本もむかしの武士は、武藝のみならず、文筆に

も達者なり。しかれども戰國より此かた、合戰の事にのみ專にして、文道にうとくなれり。かくならひ來りし人を、今以俄には成べからず。成人の人は、其好にしたがつてしゆべからず。八歳より十五六歳、廿歳ばかりまでは、只今よりのしなしがらなれば少づゝもをしへなすべし

一算數(サンスウ)は才知をも長じ、六藝の一にて、人事の用所なれば、なさでかなはぬものなれども、いやしき事のやうにとりなして、せざる人多し。いにしへの武士は、かくのごときのつとめをばよくして平生商人の樣に利害の物語をばせざりき。今は算數をばいやしみて、利害を事とせり。軍法にも算數を用る事あり。數の本は利をとりあつかふにあらず。律算(リツサン)などは尤風流なるものなり。右の品々幼少成人うちまじはり、二番か三番にして、一番は幼君にしたがひ奉り、二番は藝をなすべし。十七八以後はしたまはぬ事の、わらはべわざのくるひなどはくるしからず。あやまちなからんために、おとなもまじはりあそぶべし。其内成人の後まで心根のあしくこゞまるべきあそびをば遠慮あるべし。大ぐるひは利根の毒なれば、よきほどに進退あるべし。手習の後、よみ物の間、氣屈する時は、あるひはまきわらにかゝりて弓を習ひ、或は庭にをりて的にあそび、或は木馬に乘て手綱のさばき、鞍のかため、鐙をもち弓をおさめ、くつわをしかけ、くらをおく等の事まで、しらでは自然の越度可ㇾ有也。乘馬は其子の樣子次第、馬をも時々に見はからふべし。鑓太刀も流のよき、勝身つよからんを、二流も三流もなさしむべし。しあひを禁ずべし。稽古のしあひ、まるはし等は各別之。鑓太刀は、其身勝みよく上手にても、弟子をとり立ると、はかどらざるあり。弓馬もしかり。弟子をよく取立るものを師とすべし。勝負は運と一心とにあるものなれば、同じ位にてはわざに得分あり。先は身をつかひ、道

具をかろく取あつかふべきがためなり。十六七にもなりたまふときは、あそびわざ次第におとなしくなはしますべし。庭にをりくだり、城取などを學て、土をなやみたまふは、養生のたよりにもよし。惣じて人は聲のかはる時分より、廿ばかり三十までも、諸藝にいとまなくして、夜はねぶたきばかりなるやうにすれば、氣血とゝのほり、筋骨すくやかに成て、病をなさず。神知内にたくはへて、利根聰明也。父の神力精明なれば、生るゝ子も賢知あり。五體の精きと、大學の理をきはめ、德に入のとに至ては、今のいふべき處にあらず。しばらくさしをき侍りぬ

一來書略、新參の士に、志のおもしろき者侍り。主人にすゝめて、あげ用度候。いかゞあるべく候はんや

返書略、たとへ志平人にあらずとも、すぐれたる賢者にもおはしまさずば、遠慮あるべきか。人の目にたゝぬ程に、少づゝあげられ、後に諸人のゆるす所侍らば不レ存候。同じくは御家にそなはりたる家老、さては筋目ある人の邪侫ならざるを、なるべくは教化してあげ用ひ給ふべし。本より筋目あるには人情のゆるす所ありて、位の備たる所候。少よければ其よきがよきに立、不足の所ありとも、それは十人なみなれば、とがむる人もあらじ。人をこゝろむる事は、かろき役より命じ、功あれば段々にあげ用ひ候へば、あやまちなく候。いにしへの人の、微賤よりあがりしは、みな天命あり、人力の及ぶべきにあらず

一來書略、領分に塩濱を可レ申付レ所あり。又山林によつて燒物をやき申度と望者候。主人勝手不自由に付、何もよほし可レ申覺悟に候。いかゞ

返書略、五十年此かた、塩濱の出來たる事、むかしに三倍せりと老人の物語候き。又老農の申しは、塩の高直なる年は

世の中よく、塩の澤山なる年は世の中あしく候。いかんとなれば、旱には塩多くやき、雨つきよければ塩多くやけず。しかれば塩濱今の三箇一を減じても、人の迷惑に及べからず。多によつていらざる魚鳥をも澤山に塩して、鳥魚まですくなくなり候。又老人のかたりしは、茶碗皿よろづの燒物の多事、五十年以前には二十倍なり。むかし一通りもちたる者は、今は十通も持候。澤山なる故に大事とせず、わりくだき候。是は猶以今の十分一にしても、人の迷惑に及べからず。塩濱と燒物との、山林を盡す事は大なる事之。それ山林は國の本なり。春雨五月雨は天地氣化の雨に候。六七月の間には氣化の雨はまれにして、夕立を以て田畠を養へり。夕立は山川の神氣のよく雲を出し、雨をおこすによれり。山は木ある時は、神氣さかんなり。木なきときは、神氣おとろへて、雲雨をおこすべきちからすくなし。しかのみならず、木草しげき山は、土砂を川中にをとさず。大雨ふれども木草に水をふくみて、十日も二十日も自然に川に出る故に、かた〴〵もつて洪水の憂なし。山に草木なければ、土砂川中に入て、川どこ高くなり候。大雨をたくはふべき草木なきゆへに、一度に河に落入、しかも川どこ高ければ、洪水の憂あり。山川の神氣うすく、山澤氣を通じて、水を生ずる事も少ければ、平生は田地の用水すくなく、舟をかよはす事も自由ならず。これ皆山澤の地理に通じ、神明の理を知人なき故なり。國に忠あらん人は、塩濱と燒物とを減ずる事も増べからず。其上古人も山をつくすものは子孫おとろふと申傳候

一来書略、新田をおこすは、人を養ふの第一にて可然事と存候。いかゞ

返書略、國に田畠はかりにて、山林不毛の地なきに、土民共にたよりあしき物なり。野は野にてをきたるぞよく候。

其上新田をひらきて、古地の田あしく成所あり、よく／＼かんがへ有べき事に候。たとへさはりなく、よき新田なりとも、君子ならばたやすくにはおこすまじ。をこさばかならず其義あるべし。義といふは、大道をこなはれて、ありかゝりの遊民のかたづけなくば、新田ををこして有付候べし。塩濱國土の山林に過て、材木薪不自由なる時、その濱を減すべきに、塩燒ごものかたづけのために新田をおこすべし。塩濱五百石の人は田地千五百石に入候ともあきり有べく候。塩濱には人多入こむものにて侍り。如レ此のやむとなき入かへあらでは、おこすまじきは新田なり。人入こみて後、其人を迷惑せさすることは、ならぬ事にて侍れば、こゝろあらん人は、もし後世に仁政のをこなはれんために、殘し置度儀に候

一來書略、近來豐年には奉公人少く、凶年には奉公人多して、かつえに及び候事はいかゞ

返書略、世間にたはけといふ言葉は、百姓の上より出て、田分にて候。たとへば高貳百石の家督を、兄弟二人に分て、百石づゝ持たるまでは、小躰になりたるまでなり。その者又子どもを持て、五十石づゝにわけつれば、もはや地士のかどはたてがたき故に、平百姓に近くなれり。夫婦手づから農事をつとむれば、五十石にてもいまだとかくつゞき侍り。又其百姓子共を持て、二十石三十石づゝわけて、次第にわけゆきぬれば、五石三石づゝの高に成行候。それにてもあきなひ半分にて、米を食せずしてとかくわたれば、豐年にはかつえず候。奉公をいやがりて豐年にはなるべき程は不レ出。此故に奉公人すくなく侍り。凶年には其少高の百姓ども、一度にたほるゝゆへに、奉公人多のみならず、かつえ人出來候。村里に富人あれば、此たほれ者の田地を次第にかいとり候。しかれば子孫のおごろへて、本を失ふと

は此田分より初るゆへ、農人にてはなけれども、遠き慮なき、はなのさきなる者をば、たはけと申候なり。民は如レ此知恵なくして、をろかなるものなるゆへに、いにしへは上より民の所帯の法を立られしなり。あまり大作にて作にあぐみ、村里に百性数もすくなきをば見届て、子共にもわけさせ、人多なる村が、わけておころふべきをば、わけさせず。宗領分は其まゝをし立て、弟の分は幾人ありても、奉公人か職人商人にしたて、又兄の家人同前に、田地をわけずして養置、耕作の助ごもなせり。妻子共は宗領屋敷の内に、少づゝのねごころばかりのへやをかまへ、奉公人なれば奉公に出て、其給分をもつて妻子を養ひ、たらざる所は宗領よりみつぎ、餘あれば老後のたくはへ、子共の爲にもさせ候。かくのごくなれば、豊年の奉公人少き給分高きときには奉公して、餘米をたくはへ、凶年には飢饉をまぬかれ侍りぬ。民のおろかなるにまかすれば、豊年の人のほしがる時には引籠てたゞ居し、凶年の人澤山にて、をくゝ人のなき時には乞食し侍り。武士のためにも、富人小百性のためにも、此法が第一にて御座候。此法だによく立候へば、上下共に難儀をまぬかれ候なり。扨又今時武士たる者、あまり無道にして、下人をあしくつかふゆへに、奉公をせむことをば、世にくるしきことにおもひて、草の葉を食して成とも、引籠居たがり候。然ばさて下々をあしくつかふなどいへば、下々おごり、君臣の義たがへり。まかせをけば人道かけ候。たゞとにもかくにも道をしらせ度儀に候。淵明云、これもまた人の子なりと

一来書略、諸大名の、大樹君へ忠節を可レ存第一は何にて候べきや。主人幼少に候へば、家老共の心得に仕度候

返書略、大樹君の天命の御冥(みやう)加にて不レ申様に國を治られ候事、第一の忠にて候。無道の人をおこたらしめ、人道を

だり、おごりによつて仁愛を亡し、本民をしへたげて、生なきにはしかじと思はせ、山林をあらし、古人の功をけたしくするは、皆上の御冥加を滅するとなり。上にしろしめさゞれども、罪は上一人にかゝり奉り候。人は天地の子なるがゆへに、人の多所に天命あり。多の人をあづけ給ふとて、不仁の者を人の君とし給ふがあやまりなるゆへにて御座候

一來書略、世間に物いまひする者と、又物をやぶる者と候。拙者の親類中にも多候。物いまひするもの、大かた仕合悪敷ものかと存候

返書略、あしからんかとて、物いまひするは、はや凶徳にて候。物をやぶるといふも、少は氣にかゝるゆへなり。何となき心にてはやぶりもいまひもせざるなり。主君の知行を下されんとてめさるゝに、今日はわがためにあしき日さて不ㇾ出ものはなし。貳百石とるものに、四百石くださるゝに、數あしきとてうけぬものもなし。こゝにてはやぶら心も、いまふ心もなく候。しかれば物をやぶりもいまひもせぬ心が吉事なり。扨又物いまひの者の仕合あしきは、大かた左道にたより候。仏道もよきは、正法に奇特なしといへり。神道もまことの神道は無事を奇特とす。不測の神變は候へども、それは正きことゆへ、平人のしらぬ事にて候。しかれば今時の祈念者は、神明不測の理にたがふて、奇特を必とし、人心の正邪をえらばずして、祈禱をなし、めいよを云て人をたぶらかすは、皆邪法にて候。其身不吉の心行ありて、又邪法のものにより候へば、仕合あしきことはりにて候

一來書略、仏といひても、体あるは釋迦と達磨ばかりなり。其外は皆心の位に、理名をたてたるものにて正体なく候。

しかるに愛宕の地藏、清水の觀音にも、間に神靈の有やうなるとはいかゞ

返書略　仏法の實は心法にて、奇特はこのまざれども、心法ばかりを傳へむとては、好人まれなり。こゝをもつて先奇特をなして、人の信をさそり、淺法をひろめたるにて候。世に愚痴なるものは多き故に、淺き敎ほどよくひろまれり。その祖師〳〵に名利なかりしや不レ知候。地藏にも觀音にも、本知覺なきものに侍れば、愛宕山の神靈あるを見ては地藏と名付、山神の靈を地藏の靈にとりなしたる也。清水山のけしき、瀧のながれ、神有を見ては觀音堂をたて、やがて觀音の靈にとりなし候。初瀨其外皆同じく候。地藏も觀音もむかしのやうに靈なきとは、愛宕山もきりあらして草木なければ、山神の氣うすく、初瀨清水も山木あれて、瀧のながれもむかしの十分が一もなく候へば、神靈かすかなり。これによつて地藏觀音の罰利生もなく候。狐の虎の威をかるたぐひと可レ被二思召一候

一來書略、人をたすくる方といひながら、けだもののいきぎもとる事は不レ忍こゝろ候はいかゞ

返書略、生の字をよみあやまりたるにて候。なまぎもをいきぎもとよみたるより、いきながらころす說出來たりとみえたり。不仁なる事なり。しほ物、ほし物にたいしたる生にて候。生鯛とて、水にいきたるは持ありくにあらず。鐵炮にて成とも、うちころし、あたゝみの有間に、きもをとりて、藥を合するに、少も能かはりなし。仁心精明ならば合せくらべても知らるべき儀に候

一來書略、近來儒佛共に產業として眞を不レ知、よきといふも、外の事なりき。江西の學術によつて、諸家皆目をさまし、道を行の志氣あり。其上關東には實學の人も餘多おはしますと承及べり、大なる功と奉レ存候

返書略、いにしへとてもなべてあしかるべきにも侍らず、今とても實に功あるほどの事も見えず、少心の付たるかたもあるべけれども 其かはりに少學問しては異見を立て、儒も佛もしらで、儒仏の諂諛者の黨にいひあひて人多出來たり。これ又世の害なれば、善惡相半と存候。關東の人々の事は、學によつてよきにてはなく候。下地いづれも仁厚の人、勇強の生付にて、平人にあらず候。文學によりて、其平人ならぬ所あらはれ候なり。うはべにおゐてそみたる習のけがれなどは、學によつて覺給ひしもあるべし。其まゝなをけば世にほめらるゝ人の、學によつてそしらるゝも候へば、是も相半にて候。去ながら自己に得處あるべく候はゞ、幸甚なり

一來書略、世人のまどひと、民の困窮はいづれの根より生じ申候や

返書略、世人のまどひは異端の渡世よりをこり、民の困窮は世の奢より生ずるとにて候。しかれども數十年奢によりて、渡世するもの餘多あれば、急に奢をやめむとすれば、うゑに及もの多き者にて候。異端の渡世はなを以て數十万人あるべければ、是も急には制しがたかるべし。人の迷惑せぬを仁政と申候。大道行はれ候はゞ、一人も迷惑するもののなく、人のまどひも困窮もやみ可ㇾ申候

一來書略、傳に云、國無道時は五穀かはるがはるみのらず。もし豐年あれば、却て妖なりといへり。それ豐年は常にあらずや

返書略、豐年は有道の常なり。國道なければ天氣不順にして、五穀全くみのる事なし。民其すくなきに習ひて常とす。其間もし一年など豐年あれば、數歲の凶年に氣をつめて、たまたまの豐年をいわひ、いつもかくあらんとの樣に

心をゆるむる故に、後のつまりとなれり。是を以て妖といへるか。米高直にて悦べる後、武士大につまるも同事にゆ

一来書略、貴老祭禮を重じ給ひて、喪禮を輕くし給ふ事、心得ずと申ものゆ由うけたまはりゆ

返書略、我等祭禮を重じて、喪禮を輕くするにはあらず。喪は哀感を本とし、祭は誠敬を本とす。天子の富貴より庶人の賤しきに至まで、誠敬哀感の實は損益なし。禮は上下の品となり。且家の有無にしたがふもの也。又國の有無をはかるとなからんや。日本は小國にして山澤ふかゝらず。地福よくして人多し。中華のごく死をおくるの禮を備へがたし。尤いま日本國中をかぞへてわづか數十八に過ざる儒者の道を行ふ人の棺槨は、何程美を盡したりとも、害あるべからず。聖人の禮を知べきたよりにもよかるべし。しかれども天下に道の行はるべき通法にはなりがたし。人死して魂氣はもとより虚中にあり、行ずといふとなし。魄體は上に歸す、理の常なり。すみやかにくちぬるはまされり。しかれども孝子の心に、親の体を直に土中におさめ、螻蟻にあたふるにしのびず、しばらくへだておほふは情なり。我身の後にをひてはあけて谷にすつるとも可なり。けぶりとなすとも可也。生て明德ある時の身だに、義に害なきとには、風俗にしたがふとおほし。ましてもぬけのからに心をとゞむべきにあらず。人のとにをひては、しばらくおほふの義を取はかるなり。我國神代よりの遺風、けだし國の有無をはかるもの成べし。日本國中に道行はれて、儒法のごくせば、富貴の人はよかるべし。貧賤のものは、恨をいだき貧をかなしむべし。もろこしにても此あやまりあり。晉亡び文過て、万民喪祭の禮の重きに難儀したる折ふし、我國の仏法來り、喪祭の法はなはだ易簡なりしかば、これによりてしたがふものおほかりしなり。愚が祭禮を重ずると申は、國の財を盡すにはいたらず。天下に及

ぼしてうらみなかるべきことをはかり、心の齋明は致を盡し、身の盛服は分を盡し、年々に生ずるものをさかりて、禮を行ふなり。世の學者の、貴賤共に禮を備るもよし。道學の微なる時には備へずば道あらはれじ。我中華の禮を以備にし、備へざるもよし。後世天下に道の行はるべき事をかんがへて、後の君子を待ものなり

一來言略、貴老には敵多く候。仏者の仏敵と申候は、貴老を不レ知候へば尤に候。朱學の者の中にも、大にそねみ憎り、貴老をなき者にもしたく存候者あるよしに候。王學の流と申者の中にも、御座候躰に候。其外人の用たる悪ハ其、虚説造言をとりあつめて、讒言仕候間、御心得有べき事に候

返書略、人はいか樣にも候へ、此方には學者をそしり給ふまじく候。非ありともかくして、其非をあげられまじく候。予同志の義論に當て、不レ得レ已して他の學流のついえを申事候へども、名をさへかくして不申候。たゞ其義論の道理だにすみ候へばよく候。もし物がたりの留書などありとも、學者の非をいひたる所は除き給ふべし。たとひ予が學見に非あり、他の學者の過ありとも、世をまどはし民をしゆるの左道にはまさりぬべし。たま〳〵雨夜の星の光ほどかがやき出て、仏者と多少をくらぶれば、万分が一二にも及ばず。すくなき學者の中にて、たがひにそしりなみし、聖學の身方うちするは、是非は外にしてあさましき凡情たるべく候。又予を方々よりそしりこめて、遠方より尋る人にも、近里の同志にも、道德の物がたりするともならざる樣にし、他出も不自由なる躰に成候は、外より見ては困厄のやうにあるべく候へども、予が心には、天のあたふる幸とおぼえ候。配所の月、罪なくてみんとあらまほしといへり。世をのがれたるごくなる靜なる月は、世にある人の見がたき事也。配所なればこそ、うき世の外の月も見るにて候

へ。たとひ富貴にして、世間ひろく共、我心に實に罪過のおぼえあらば、心は困厄の地なるべし。たとひ外には罪のとなへ有とも、我心に恥る事なくば、心は廣大高明の本然を失ふべからず。和漢ともに昔の賢人君子、名ある人々の流罪にしづみ給へるも、罪の至極したるやうにいひなし、とりなしての事に候へば、其時にはいひわけもなく、世人實に罪ありともおもふべく候。しからば賢人好人とも申間敷候。たゞ自己の心にくもりなき故に、日月の蝕のはるゝごとく、後世に至てひかりあらはれ候へば、其流罪等の事ほまれと成て、疵とはならず候。北野の天神も讒によりてながされ給はずば、かくのごときのほまれはあるまじく候。古の人の數にはあらざれども、予も内にかへり見ておぼえなきのみならず、世間よりも何を罪ことはりてうつされたるにもあらず。たゞ造言の多きがために、うたがはるゝのみなり。これほどのふさがりにて、かゝる靜なる月を見候事は、なにの幸かこれにしかんや。其うへ予病氣に成て後、甚だ氣力乏しく候。ふせぎなくして人にまじはらば、とく死すべし。造言の悪名は予がことぶきをのぶるものなり。朝に道を聞ては、夕に死すとも、おもひのこす事はなく候へども、書の一章をもます〱見熟し候ば、又幸なり。たとひ命あり共、世にもてはやされなば、生付篤實ならず、聰明を好の病根いよ〱長じて、徳を知事遠かるべし。困厄して内にかへりみ、徳を知に近きは幸甚なり

一來書略、此比東より來り候學者の申候は、世間に儒學をする人は、仏者をそしらずといふとなし。市井の中にても聲をあげて甚退くれども、仏者もこれを敵とせず、仏を退るの名もなし。先生はむかし東にをゐて、度々講明義論し給ふを聞しにも、仏をそしり給ふとなし。人のそしるをもとゞめられしなり。しかるに天下の仏者を退るの罪をば先

生一人に歸する事は何ぞやと、拙夫申候は、儒者仏者共に天下の學者の眼を付かへたる事に、先生によれり。儒者も仏者も心有者はかくいへり。かくれなき事なり。是をもつて天下の儒宗のごとし。此ほまれあれば、此そしりあり。たとへば海は水の宗なり、天下の下流の歸する所也。天下の儒學する者の、仏を退るとの、先生一人に歸するは、儒宗の地にたてる故なるべし、と申候へば、學者云、本へ罪を歸せば、孔子の罪なるべし、といひて、一笑仕候

返書略、不徳にして虚名をかうぶりたる故に候。仏者の事のみならず、すこしも不レ知事どもをとりあつめて、拙夫に歸し申候。人のあしく仕なしたる事をもおふせ候。當世に申わけはならず候　後世には虚言をのづからしられ申べく候。後世の名も望なく候へども、當世の名を好は利に近く候。百歳の後は、ほむるものそしるもの、ともにのこらず候へば、公論に成て虚説造言は跡なく消(キヘ)うせ、仁義忠信の誠ならでは、とゞまり申さず候。武士の心の位三段御座候　德を好を上とし、名を好を中とし、利を好を下と仕候。利を好者は義理をも恥をもかへりみず　逆(ギヤク)心をしても國郡を得、立身する事にはおもむき候。臣下にしても朋友にしてもたのまれず候。名を好むものは不義無道の悪事をば仕らず候。去ながらあやまりて當世の名を好候へば、本の邪(ジヤ)正をかんがへず、人のほむる事にしたがひ候。當世の人のほむる事を書に記して見候へば、後世のそしりと成事あるものに候。當世には其時のならはしにて、道にたがひたる事をもほめ、にくみてはよきをもあしきと申なし候。此餘多のあやまりにしたがひ候へば、名を好みて不義に入ともあるものに候。畢竟(ヒツキヤウ)生前の名は利に便ある事に候。死後の名は利心なく候。孝子・忠臣・貞女・友黨・約信・仁勇・無欲などの事ならでは、後世の名とはならず候

一來書略、此間江州へ罷越龜泉庵老僧と參會申候へば、御うはさ申出され候。內々承及候は、仏法そしりの高慢人にて近付ともなるまじき樣に思ひしが、扨々無我なる人にて、學者ぶり少もなし。かたのごとくよき人なるに、何こて世間にはあしくいふやらん。去ながら儒學せられずば、いよ〳〵よかるべきと申され候。一笑いたし罷歸候

返書略、此物語被ニ仰聞一候にて益を得候。世間を見申候に、公家には公家意知あり、武士には武士習あり、儒者には儒者かたぎあり、予も儒者意知ならひたる事をさとり候。聖人の學は、人倫を明らかにせんこなり。よく學ぶ人は、平かなる好人となりて、何のかたきも有まじき道理にて候

一來書略、其身正しければ令せざれ共行はるゝと御座候へども、國郡の主、其身正しくて下不レ從者候。又下したがひ候へども、長久ならざる者候。不長久候へば正しき益はなく候。不レ從こもとかくかゝはり候はまさり候かこ存候。いかゞ

返書略、後世其身正しくて、下不レ從は柔正にて御座候。下從は強正なる者御座候。ともに其中を不レ得候。柔正は亡びをそく、強正ははやく候。柔強にして不正は一向いふに不レ足候。夫いにしへの大正は、君臣上下正を不レ覺して大に正し、小正は君正を心にかけ、臣は正耳目にありて久しからず。故に大君國侯の正こ申候は道德の樂みありて、心ひろく躰ゆるやかに、禮時にかなひ樂正を得て、億兆の君師たり。人情時變に通じて式あり。故に紀綱のしまりありて、禮儀いたづがはしからず。天下其樂をたのしみ、其利を利とす。天の四時のごとし。節のうつり日月の代明、やくそく正しこいへども、急ならずせはく〳〵しからず、たのしめる君子は民の父母なりといへり。其ゆたかなる德を知給

ふべし。人民の正と申すは、善をする事を樂て、悪を忘るゝものなり。人は士以上位あるものを申す。民は士以下位なき庶人なり。後世の正と云は、善の教なく善の爲べきなく、たゞに上行儀つよくて、下究屈なり。故に君柔なれば下不レ從、君強なればおそれて從といへども心服せず。此日いつか亡んの意思あり。正しき事は正しけれども、やぶれざる者すくなし。今貴公などニ三郡の主の正あり、七八郡の小國の主の正あり、大國の主の正あり。政は大身ほど大躰にて事備り、小身ほど小躰にて事すくなし。禮儀は大身ほど嚴かにて小身ほど心やすし。今貴公の御身上にて、政法多く禮儀嚴ならば、家中の士困究すべし。大國また政をこぎりめに、せはしくしたまはば、人民手足を置に所なかるべし。共にやぶれずして何をかまたん。大身は人多が故にかはり多し。かくれて息を伸る隙多し。故に禮嚴なれ共行ひ易し。それだに近習は外樣の樣になく、君臣心安き處あり。小身は近習は云に及ばず、外ざままでも君臣心安し。かはりすくなきがゆへなり。今町人百姓の主從同座にねころび居れり、言葉にて主從と知ばかり也。かはりなく、かくれ所なき故也。貴公御身上にては、ニ三十万石の家中よりは、ゆるやかなるやうに常に心を付給べし。夫善を爲ことをたのしみて、悪を忘るゝとは、道德を尊て六藝にあそぶなり。弓馬鎗太刀鐵炮、山野の達者、水の稽古は、武家のわざなれば、武士たるものなさずといふことなし。然れども、をこたりがちなるは、主將のあやまりなり。家業とおもひながら、師上手ならざればたいくつしておこたるものなり。上手の師家頼と成て不レ來ば、客としてまねき給ふべし。山野の鳥獸をもしまず、池川の魚を制せず、狩すなどりせしめて、士の体氣をすぐやかにす。然ども法ありてみだりならず。戰陣にしてよき武士を、是非なく失ふ事あるは馬川なりといへり。鐵炮は敵にあれば、身方にも

備るものなり。狩に用ては損あり。鳥をうちおどろかしなくすれば、士の武事を習はすたよりすくなし。故に弓の殺生は制禁せず。今の士の弓にてはあたる事まれなり。あたらざれどもねらいを力として歩行するものなり。昔なければ鳥もおどろかず、主將一人鐵炮の殺生し給には、家中の弓のねらいさまたげとならず。たとひ少しさはり有とも、士の武事にはかゆべからず。士はいふに及はず、主將より初て、狩のために田畠をそこなはず。鳥獸の田畠を害するを除き、武事をならはして、民の煩なきはかりの正也。百年以前までの弓は、今の鐵炮よりもまされり。今も鐵炮の殺生をとゞめて、弓をゆるし給はゞ、數年して上手出來べし。たゞ鐵炮は奥山家にて、猪鹿の田畠を害するをうちおどろかし、且軍用に用べきのみ。これもむかしは弓の狩人にて事たれり、むかしにかへるとも有べし。後世の主將は文を不知のみならず、武をも好む人まれなり。文武共に教なければ、士民善をなすべき事をなさゞるものなり。是によりて制禁多く罰つよし。人民を惡にみちびきて、惡をするものを罪せば、いかんぞ民の父母たるものならんや。是を本をしらずと申候なり

一來書略、仏法の神通妙用と申に、僞らしき事多く御座候。或は佛は人間にあらず、神妙通力自在なり。理あればかならず事あり。ふしぎなくて不叶と云。或は其事も其理もなけれども、權說とて方便にいひたると云。或は皆僞にして皆まことなり。大地われて塔のわき出たると云は僞なり。然ども法華說法の時の、ありがたくたつとかりしとは、何ともいふべきやうなし。たちまち大地もわかれて、塔も出て、多寶佛も出らるゝ樣なりといふ事なり。又釋迦生出て天上天下唯我獨尊といへると、是尤僞なり。しやかのかしこかりしと、生たちより如此の事もありさうなると云事な

り。又云是寓言なり。生れ出たる時の心は、誰も獨尊なり。釋迦死期のこき、蚓かはづまでもなきたるこ云は、仏弟子の悲しかりし心よりきけば、虫の聲までもなくやうにありしこいふとなり。事は僞なれども、主意ありていへば、まとなりと云ものもあり。いや何も非なり、しからず。釋迦の仙人につかへて、學問せられしこ云は幻術也。天竺南蠻には幻術の上手があるなり。仏法をひろめんための方便に、幻術をならはれたる也。塔の地からわき出るこ云事など、何の理にも有べきやうなし。水にて物をやくこいふがごとし。幻術なると明かなり。今の吉利支丹の人をたぶらかす事も、幻術のたぐひなりといへり。或は觀音を信ずれば災難に及て、たちまち切刀もをれくだくるこ云。觀音こ云ものありて、如此きもるとも云。信心の力にてさやうの奇特ありこもいひ、又情欲の佛心をそこなふ事は、刀の身をきるがごとし。戒定惠の功德によつて、惡のつるぎ段々にをれて、仏身を生ずこいふと也ともいへり。仏法の說は、西といへば東といひ、こゝといへばかしこといひ、人によつて色々申傳り、此内いづれが是にてゆはんや

返書略、仙術の藝も孝行なるものか、慈愛あるものにてなければなりがたきこ申侍り。釋迦は慈悲の深き人にて、仏法のおこりも衆生を不便に思ふ心より出たれば、さだめて幻術もすぐれたる上手なるべし。愚のついえはあれども、名利有我の心なく、慈悲よりいたさるゝ事故、方便とも被申ゆ。後世の佛者名利有我の心ありながら、たとひ修行は淸僧なりこも、方便はあやうき事にてゆ。幻術と申ものは、ひろくなるが久しくすれば、ばけのあらはるゝ故に、知あり學ある國にてゆへば、もろこしへはわたさず、たゞ仏菩薩の通力このみ申傳へたり。もろこしにも仙家には少ばかりゆき。まとに天地神明の理をしれば、不測の神よりいでたるか、幻術か、魔法かは、きくとしられ侍りぬ。仏教の奇

特、因縁物語の中に、たゞ一神理にあたりたることをきゝ侍り。仏在世の時に、釋迦を信ずる女人あり、身に瘡出て法座にのぞむことならず、しかも遠路なれば心もとなく念じ居たるに、あるとき釋迦佛乞食して忽然と至りたまひぬ。女人禮拜して、しか〲のことをかたり申。釋迦其ときに藥をあたへて、これを煎じて身にかゝるべしとて去給へり。女人をしへのごとくせしかば、たちまち瘡愈て本の身のごとし。いよ〱ありがたく信心をこりて、やがて遠路を經て靈山にいたり、不慮の來迎、藥のしるしを申せば、釋迦我は不レ知、其比他行もせずとのたまへり。諸弟子も女人も其理を不レ知。其時釋迦云、我世をすくはむと思ふ慈悲至らざる所なし、女人の信心にたへかねて、そこにぞ現じつらん、我不レ知と。此物がたり一ぞ眞の神理なり、たとへ其事はなく共あるべき理之。其外の御たづねども、一々御返事申入度候へ共、貴老など經傳をよむ人の爲には、しらでも事もかけず候。又常人は申たりとも得心も仕間敷候。まして仏家の人は、同し仏者にても見解まち〱なり。其家にてもなき者が、何をしらんと申さるべし。せんなき事に氣力を勞せじと指置候也

僧の殊勝なるを尊信する武士に告て云、それ士の義は三綱五常の德を行ひ、弓馬禮樂の藝にあそび、文武二道の士と成て、名を後世に揚べし。天地神明の理、人道より尊きはなし。廣大に至て精微を盡し、高明を極めて中庸により、幽明死生うたがひなし。何ぞ仙仏をたのまんや。一向に武士をやめ、僧とならば是非に及ばず、さらなからんには三綱五常をすてゝ、大樹國主立給ふべきか、天下國家の政をこなはるべきか、士の道立べきか。たとひ仙佛大悟道をきはめ妙法をなすとも、人道を背て彼にしたがふ時、世中いかんとみるべし

一來書略、王法仏法車の兩輪と申候。仏法のわたらざる以前には、王法の片輪車にてめぐり候しや

返書略、神代には神道といひ、王代には王道といふ、其實は一なり。大道の世を行めぐる兩輪は文武にて候。仏法の輪なき以前、天神地神の御代、人王の初めには、大道行はれて人民至治の化をかうぶれり。仏法ひろまりてより後、王者は武の輪をかきて仏の輪を入、知仁勇の徳を失て王道おとろへたり。武なき文は眞の文にあらざれば、終に天下を失ひ給へり。武家は文の輪を欠(カキ)て仏の輪を入、文なき武は野人に近して君子の風ならず、治道全からず、佛法は出世の道にて大に高しといふなれば、神道は神道にてをき、人道は人道にてをき、佛ひとり高上にかまへつべきを、また兩輪と云て交り入て、神人の道を亂れり。これ又仏法にもあらず不レ可ニ不レ察

一來書略、生死は人の常の理なり、しかるに三年の悲哀は甚すぎたるがごとし。貴老は三年の喪をなし給はんか

返書略、古人の悲哀は死をかなしむにあらず、別をかなしむ也。こゝに行べき義理ありて奥州へ行人あらば、父兄ともにすすめて行しむべし。しかれども旅立の朝は必ず泪をもよほすべし。これその奥州に行を歎くにあらず、しばしの別を惜むなり。死生は天地の理なり、何ぞ死をおしまんや。只一生の別をかなしむなり。古の人は利うすくして情厚(アツシ)し、父子別れ夫婦はなれて、五年も十年も歎くものあり。或は一生に及ぶものあり。死を以て生を亡すものあり。こゝを以て聖人其過る情ををさへて、三年の喪を定め給へり。しゐてなさしめ給ふにあらず、今の時道をおこさむと思ふものは、實義を以て本として、禮法を以て先とすべからず。かく孝弟忠信の風俗おとろへて情うすくならひたる人に、俄(ニハカ)に三年の喪をせめば、必偽のはしとなりぬべし。其人の罪にあらず、代をかさねて百千歳このかた、習ひ

來りし世の勢のかく成ぬるものなり。もし我等喪をつとめ候とも、たゞ一人心につとめて人にてらひ候はじ。我にをゐて其可あるべく候

一來書略、拙者に國政をとれといふ者あり、又あづかるとなかれといふ者あり。いづれにかしたがひ申べく候や

返書略．中比の難義をおもひまうけて、大勇力ありてとぐべしとおもはゞあづかり給へ。貴殿國政をとり給はゞ、國中のならしめ五成あらば後まで五にて通るべし。家中四成ならば四にて通るべし。君の藏入ちさのみ不足あらじ。不時の公用などにて借金出來るとも、家中の物成三五分五七年かり給はゞつぐのふべし。君臣民ともに今のごくにてあるべし。しかれども今の人情にては、民を愛し用捨すぐる故に公用もたらず。其上百姓奢て奉公人すくなしなごゝそしるべし。民は天下の人を養ふものなれごも、にくまれ者となれり。故に民を愛する者をば人にくめり。民を愛するは諸人を愛する理をしらず。又民も小民は少悅ぶこも後は常と成て忘るべし。庄屋肝煎富民はうへには悅ぶ樣なりこも、內心にはきらふものあるべく候。國中一人としてよきこいふものあらじ。君も聞まごひ給ふ事あらん、君と貴殿と此人情を前に知て、變ずまじくはあづかり給へ。他人國政をとらば、世間の人情口說にしたがひ、民にこるとつよかるべし。しからば民つかれて奉公人多出べく候へば、かたぐ〵以て人の心にかなふべく候。人のほむるを悅び筋なき訴詔をとりつぎ、借金など所望次第にかりかしなどは、家中ほごなく大借金數多になるべし。百性困窮して五穀すくなく、家中すりきりて、奉公人給米の民間に入とすくなくば、村里亡所のごく成て、後々は是非なくめもさめるべし。二三年多くとりて、自由なりし所帶しまりがたく、君の藏入も年々に不足し、事とあらば大借金出來な

ん。後には家中の物なり永代に多く出すべく候。君臣民ともに惣づまりに成て、公役軍役難儀ならん。此時討て貴殿國政をとらば、如此はなるまじきものをと知人あるべく候。やぶれてこそはしらるべけれ、無事ならば知人あらじ。始終の存亡吉凶を知ものは神ならんか

集義外書卷一終

集義外書　卷二

削簡二

一來書略、日本國後世に至て何の道かおこり申べくゆや

返書略、聖人の道おこるべきか。いかんとなれば、王代のゆたかなりし事、千二百餘歳に及しは、神代の遺風にておはしましゆ。其後欽明天皇十三年壬申に、百濟國より釋迦仏像幷に經卷を日本へ渡す。上宮太子、聖武帝の比より王道おとろへ侍りぬ。其後佛法の盛なると年々にいやまして、仏教の世を靡かしぬる事、千有餘年也。とに五六百年このかたは、佛者無道にして驕れり。近年吉利支丹渡りしよりは、出家の心行ひたすら盜賊に同じ。驕すでに極り、亡びをまつばかりなり。中華は四海の師國なり、ここに日本に功あると大也。禮樂・書數・宮室・衣服・舟車・農具・武具・醫藥・針灸・官職・位階・軍法・弓馬の道、其外百工技藝に至るまで、一として中華より至らざるものなく、ならはざるとなし。道德の眞實大學の道ばかり、いまだ行はれず。然れども天神地神人王の始は、神聖の德おはしましかば、不言にして大道行はる。中華も日本も、有德の時を得て上におはしまし、みづから天下を風化し給ふは、教の書なくたゞ人道の美風を見るばかりなり。日本も上代の人は不レ知不レ識三綱五常の道によらざるはなかりき。是王道なればなり。かくのごとく中華は日本に大功ありながら、その道その教いまだおこらず。仙佛は日本に功なくして驕を極め、無

道にして國法をやぶれり。時運の否塞によるといへども、天定る時はまたよく人に勝の理なからんや。仏者の亡失たる所にいたるべし。先に申ごとく神代と人王ミ上古の至治は德化なれば、教學の顯れる事なし。道を修むるの學しへは、中華聖學にしくはなし。天地一元の運も、午の會の初なれば、天地いまだやぶるべからず。必道おこるべし。されども一旦は天地くらやみとなること侍りなんか。いかむとなれば、吉利支丹日本を望こと久し、亂世を待て取とあるべし。又日本の内にて、吉利支丹のごくなる佛者あり。大方勢力天下をのむにいたれり。法王などいひて、佛者の天下を取とも侍るべし。然ば一旦は國俗禽獸のごく成べく候へども、亂世のみにして安と侍らじ。しからば己が非を悔て、道をおもふべし。陰極て陽を生ずるの時至るべく候。佛者後世といふ僞を信じ、其まよひの心を本として、吉利支丹もおこり候へば、吉利支丹のひき入は佛法にて侍り。今釋迦達磨（ダルマ）出られ候はゞ、必佛法を退け、うちやぶられ候べし。いかんとなれば、佛法を置ながら、吉利支丹は退けられず。佛法をやぶりて、人のまよひをだにとき候はゞ、吉利支丹は制せざれどもなく成侍べし。むかし莊周孔子をそしれり、是大道をおもふゆへなり。天下の孔子を信ずる者、孔子の道にあらず、孔子を立て其非をいへばあらそひあくとなし。孔子ともに退て、大道を明らかにせんと思へり。孔子は我なし、我名亡びて大道あらはれんとは其ねがひなり。釋迦達磨も無我の佛ならば、何ぞ其名をおしまんや

來書略、中夏より物を習はし事をいむ人侍り。いかなる意得にて御座候や

返書略、中夏は天地の中國にして、天氣明に地精こまやかなり。故に万事万物の名人出て、東西南北に教る道理なり。

東西の人は、是を習ふを義とす。耳の用を目のせぬとていむとは侍らじ。天道のなし給ふ所にしたがふとを恥べきか。もろこしの人も聖賢を師とし、日本の人も聖賢を師とす。日本の人に、もろこし人よりもまされるあり。教へるを以てすぐれたりとせず、習を以ておとれりとせず。唯智仁勇の德あるを以てすぐれたりとするなり。本より四海の師國たる天理の自然をば恥て、西戎の佛法を用ひ、吾國の神を拜せずして、異國のほとけを拜す。我が主人を捨て人の主人を君とする事をば恥とせず。其あやまちを知べし

一來書略、伊勢太神宮に佛法をいみ給ひ、出家を近付侍らず。天照皇は佛法以前の神にておはしませば、佛の名もなき時なり。いみ給ふ法もあらじ。又第六天の魔王との手形など色々申候は、理もなき事ながら不審に御座候

返書略。禁中の名は、不正の者を禁じて近付侍らざる理にておはしましし候。太神宮にも猶以不正を禁ずべきにて候へば、佛者にかぎらず。惣じて不正の者は伊勢にも禁中にも近付られず。然る所に、中比帝王佛法を好み給ひてより、御免をかうぶり、參內仕候。伊勢は神にておはしませば、御免を可申上樣もなく、又神慮の古法まで改らるゝ事はならざる事にておはしませば、太神宮には古法の殘りたるにて御座候。神と帝王とは不及申、大樹諸侯卿大夫までも、不常のものには近付給はざるものなり。天下の人民をまどはさじの遠慮にて御座候。又大和姬の世記に、天照皇の佛法をつよくいみ給ひし事をのせられし神託は、日本の神道をそこなひ、王道をほろぼす者は佛法にて侍れば、神明の前知明白なる御事にて御座候。日本に生れたる人は、たとへあやまりて一度佛者と成ぬるとも、此とはりを聞ては悔さこらで不叶義に候。去ながら今の佛者、過半はすぎわひにせんかたなき者どもにて候へば、大道行はれてそれ

〳〵のかたづきなくば、心にこのまざるものもせんかたあるまじく候か

一來書略、まじなひと云事は、理の分明ならぬ儀ながら、しるし有ともいへば、信ぜざるとあたはず候

返書略、まじなひの理はいかにもあるとにて候。神農の醫藥の法もまじなひにて候。藥種に神靈ありてたしかにして見よきと云ばかりに候。しかれども朝夕食事として多用て何のしるしなきものを、さぢのさきに少かけ候へば、たちまち大病をいやし、生死を定候。食は我彼に勝候。藥は我まけてうけ候。たゞ微妙の神理にしてまじなひなり。梅を口に不レ入ともつたまり、物のきびあしく相するは、歯にあてざれども歯のうき候は、神の通ずる所なり。まじなひこれに本づき候なり。日本のむかし、もろこしの醫藥の方わたらざりし以前は、大方まじなひの醫術にて病を療治いたし候。三輪の明神、五條の天神兩尊してまじなひの醫術をはじめ給ひしなり。今に少づゝ傳て御座候。中に神代の遺風あるも御座候

一來書略、邪術のわざといひながら、たちまち病をいやし候は信ぜずしても叶はず候。情のこはきやうに人申候

返書略、惡物ながら用樣にて功ある事多候。まむしの毒あるも、黑燒にして藥に用とある、惡血あれば目に蛭（ヒル）をかひ候。そのどく狐狸（キツネタヌキ）の付たるにても、又は邪神のやどりたるにても、一旦用て益あらば御用あるべく候。信仰はあしく候。まむしを用て病をなをしたるとて、まむしを信仰してかひ候者はなく候。物を以物を用て、我あづからざればよく候。されども君子ならば我身の事には邪術のものはたのみ申まじく候。人の上にはしゐてふせがれず候。漢の高祖は文盲なる人にて候しだに、匹夫より天下を取ほどの豪傑（ガウケツ）ゆへ、遠來の醫師にあはずして死を安じ給へり。内に

むかひてよく〳〵御分別あるべく候

一来書略、先度承候、儒佛のおこり候事は、其人次第と御座候。少不審なきヿあたはず候。いかゞ

返書略、よき疑ひにて候。道ある世のヿにては御座なく候。世間のヿわざにも、愚人はらつこの皮のごとく、少智恵のある者は何方へなでつけんもまゝと申候。道の善悪をばしらで、其人に才知あるか、めいよをするか、難行をするか、いか様ことなるもの見え候へば、其まゝ信じしたがひ候なり。人がらよくして異學にまよひ候はゞ、其知のしかざるヿをおしみ侍りぬべし。人がらあしくして、聖學をせば道徳の罪人たるヿをにくみ侍るべし。先度の論は世間平人の事にて候

一来書略、守屋をば逆臣ともいひ、忠臣とも申候。まがひあるまじき事を、兩様に申侍るはいかゞ

返書略、守屋の大臣は、社稷の臣と申者にて御座候。且智者なり。天照皇大神の御心に應じ奉り、大和姫の神記に叶て、万歳のためをかんがへ知たる人にて候。神代の德風すでに吹たえ、聖學の心法いまだおこらざりし時なれば、他の事にをひては、いかゞとおもふ事もあれども、それはよぎなき事なり。其上厩戸の皇子にへつらひ、佛氏をひいて書たれば、守屋のよきヿを書けじ。厩戸方をば悪をもかくしたる筆法あり。しかれどもそのまゝの筆の跡にても、智者はさとるべき所あり。　故に日本の神德おとろへ、王道すたれ、國のすいびすべき事を、かへりて取たて給ふヿなれば、守屋大になげき、一命をすてゝ諫められ候へば、の心に大きにもとり、玉言耳にさかひ、おして逆臣と名付てうちほろぼし給ひぬ。守屋の家に神道の傳記、中華聖人

の書をやはらげたるなど多かりしをもあはせて亡し、ひとり佛法を興起し、和漢の書の通明も、　よき初めしごとくにせんとの我心と申說も侍り。さほどの惡心はあるまじく候へども、只佛法を至極とし、王道にならべて信じ給ふゆへに、佛を退る人をばおさへて、朝敵と申されたるにて候。中華は師國なれば、そしるの罪もあるべきか。天竺には何の恩德もなし。かへりて吾國をくらましこらるゝ所あれば、是こそ朝敵と可レ被レ申候。守屋は是をわきまへ給ひ、

はわきまへたまはず。其くらき所よりは、微々の內に我心あるべきも、しゐてあらそひがたく候。は、逢ことありといへども、たしかならず。先以守屋の臣の未來見は、少もたがはず候。くはしき事は古書の中にあり

一來書略、同姓をめとる事を諱候とは、上古よりの禮にて御座候か。今時日本にては其諱成がたく候。難波の帝は仁君にておはしましゝかど、　此例などをひきて、伯父姪もくるしからずと申候は意得がたき事にて候

返書略、同姓をめとらざるは周の代よりの禮にて御座候。上古にはたゞ服のかゝる者をいみ候き。君子の譯も小人の譯も五世にてつき候へば、五世の別ばかりにて候。母方はいとこより服なく候へば、婚姻を通じ候。父がたは俗にいやいとこと申までは服かゝり候ゆへ、婚姻を通ぜず。いやいとこの外は、夏商の世までは婚姻を通じ候き。日本には法いまだをかれず候へば、父方母方共にいとこよりは婚姻を通じ候。いかに法なきと申ても、伯父姪はあまり近きとにて、天理人情のゆるさぬ所御座候。天下無法の法にて候へば、あるまじき事にて候。難波の帝の御事は大義御座候。三年の喪は天子に達し、期の喪は大夫に達すと申て、父母は天子といへども臣としがたく候ゆへに、喪御座候。

兄弟伯母姪は皆臣にて候へば、臣には服なく候。古は淳厚朴素にして君位の尊ヿを知のみにて皆臣なれば、其兄弟の親といへども、いむべき心もつかず。古は服を以ていみ候へば、服なきにはいみを加べき様もなし。然れども兄弟伯母姪は君臣といへどもあまり近し。後世文明の時に至りては、目ばゆき勢あるによりて、服をいはずして、百世といへども婚姻不通の法、周よりいでき侍りぬ。今は天子といへども兄弟姪叔母等はさけらるべき時に候。又法なくして人情のゆるす所に候へば、いとこよりはくるしからず候。法立て後にやぶるは不義にて候。中華には神明を祭祀するに牛を用ひ候。日本にては大にいみ申候。是水土によるの義にて候。中華は大國にして、物生ずることひろきによりて、至味の物なれば用申候。然れども位祿によりて品の定あり。日本は小國なり、牛すくなくば耕作の功をなしがたし。且車をひき遠を達するヿ不叶。是以神道に牛を食するヿをいましめ、又其次に鹿をいむヿは、鹿をゆるさば鹿つきて牛に至らむヿをおそれてなり。牛鹿神をけがすにはあらざれども、法立て後をかすは不義なり。其不義のけがれをいむべきなり。婚姻の理もこれをおして辨へ給ふべきなり。牛鹿人の食すべきものなれば、なべて食せざれと云にはあらず。神明にまじはりつかふまつるにいめば、をのづから食するものすくなきゆへなり

一來書略、日本に道家の學はなく候に、三教と申候も心得ず候

返書略、中夏にも道家とて本よりの出所はなく候。仙家の徒黄帝老子をおし尊て道者の祖と申侍り。日本に仙家とて一派立たるはなく候へども、仙家の流より出たる事の、世におこなはる丶事多く御座候。高野の空海もろこしより仙術を習ひ來り、其傳來をば密して仏法をひろむる方便となせり。これひそかに仙佛を合したり。もろこしよりわ

たりたる書にも、空海と云坊主仙術を傳りてかへりたりと記せり。扨神道と聖人の道とは、名こそかはりたれども、同じく人道にして、三綱五常の道にもれず。しかるに本地垂迹と云て、佛に合したるは非なり。空海が修行の體には、仙術のをもかげ多し。其外七夕の說、月のかつらなど、仙家の說なり。今時世人の著する道服も仙家の羽衣と云ものなり。道家の服なるゆへに道服と云、いまだかくのごとき事あまたあり

一來書略、人の申候は、貴老は江西に學給へども、江西の學にあらずと、いかゞ。其故御座候哉

返書略、申所故御座候。諸子は極りある所を學び、愚は極りなき所を學び候。其時には大にたがひなく候ても、今は大にたがひ申べく候。極りたる所は其時の義論講明なり。極りなき所は先生の志こゝにとゞまらず、德業ののぼりすすむなり。日新の學者は、今日は昨日の非を知といへり。愚は先生の志と、德業とを見て、其時の學を常とせず。其時の學問を常とする者は、先生の非を認て是とするなり。先生の志は本しからず。先生いへることあり、朱子俟二後之君子一ヲの語を、卑下の辭と講ずる者あり、卑下にはあらず、眞實也と

一來書略、空海坊は水なき在所にも水を出しをき、塩なき山中にも塩の出る井を堀をかれて、万民の助と成たると申候。道理あることにて御座候や。ある眞言坊主の申には、万法一心にて候故に、心だによくおさまりぬれば、何事も心に叶はずといふことなきとの儀に候。よの常の奇特とちがひ、本ある事にて候よし申候。さもあるべきことにて御座候や

返書略、万法一心にして、天地万物皆心の外ならぬことは誰も知たる事にて候。然共事にはをのづから事の理あり、空

海も釋迦も病ある時は醫者をたのまずしては不ㇾ叶候。それ人の在所とする所は、水木をたよりに見立候。其所にあるか、又なくても他所より來るの分別ありて後にすむことにて候。しかれば其時までも水木あればこそ人も住申候。塩は濱にて燒て、遠き山中へも商人持來り候。其塩の井は有馬の山中に塩湯の出るごとく、道理ありて出るにて候。それを見立て後在所ありたる事もあるべく候。むかしの事はたしかに傳なく候。今の井堀と申ものは、地形を見立、又地に耳をあてゝ水筋を聞などして、名水いか程もほり出し候。空海が功にはまさり侍らん。空海以後奇特をする人數多出候へども、其奇特者故の害と益とをくらべて御覽被成べく候。よき事は千が一にて、あしき事は千が千にて候。惣じて邪法のすがたかくのごとくに候。其人成ほど殊勝なる行者にて、其奇特いつはりなきにして妙奇特と感じほめてとをしたる其跡を見候へば、世の中に益はなくて、大に害あるものにて候。まよひの目には益と見候も、とわざに、角を直して牛を殺すごとくにて候。空海は唐より幻術を習來て、佛法をひろむる方便となせり。日本にての奇特の初なり。是を以て何にても奇特なる事をば、皆空海がわざといひて、空海がしらぬ事も空海におふせ侍るなり。空海はかしこき坊主にて、儒學もよく學びたる者なれば、中〳〵奇特などにまよふとにてなく候。其ゆへは則空海が語にも正法に奇特なしといへり。たまさかに我なしたる奇特もかりの事にて、實の佛法にはあらずとなり。世の中の空海をほむる者は、大に空海をそしるなり。此里に水なきことは、空海が水をこひたるに、なきとてあたへざりし故に、此里ばかり河水地中をくゞりて、ながれなきなどゝ申候。佛菩薩と云もの左樣にいぢあしきものにて候はんや。其上人にさへ火のゐんをむすびて栗などやきて進らするものが、みづからの咽をかはきを水のゐんをむすんで

やめすして賤の女にこひ候はんや。守敏と行力のあらそひをして、てうぶくしあひて、しるしたかりしかば、空海は死たるとてたばかり、守敏をいのりころしたるといへり。佛菩薩といふものが、大あく人にてもなきものを、しかもわれとひとしき行者をいのりころすといふとやあるべき。さやうなるがまんじやちの坊主のかた人する神ほとけやあらん。もし實ならば空海は人に出たるきつねにて、邪人なるゆへに邪神のやどりて、たすけたるなるべし

一來書略、眞言を授唱て虎狼ごくじやのくちをもまぬかれ、魔所をものがれたりといふためし多申傳候。いかゞ

返書略、それは眞言の力にはあらず、不動心の力なり。生付臆病なる者は、空海が大事の傳授の眞言を教候ても甲斐あるまじく候。生付けなげにて愚痴文盲なる者に、大事の眞言と名付て、草木の聞しらぬ名どもを聲につゞけ、をしへ候はゞ、いか樣におそろしき所をも遁れ申べく候。人は万物の靈なる故に、心だにうごかず候へば、何ものも害する事はならぬものにて候

一來書略、先日伺公の人、身ふとり過候とて無心懸の至と御覽じ候由承及候。心得がたく御座候。貞任は大なるふとりにても、武勇すぐれたると申候

返書略、日本は小國にして貨多候へば、狄の望む所にて候。是を以て古は國法儉約朴素にて、仁義を好み文に遊び、武を勉め候き。武士たる者は國の警固にて御座候得ば、町人の樣に暫（シバラク）も逸樂を事とすべからず。獵の道も鳥獸をころむとにはあらず。小身は山野にかけり寒暑風雨に身をならはし、大身は軍法を試むとなり。聖人獵の道をはじめ給ふ事は、武道に惰らしめじとなり。愚拙十六七ばかりの時すでにふとりなんとせしに、他人のふとりて進退不自由な

ゐを見て存候は、かく身重くては武士の達者は成がたからん、いかにもしてふとらぬやうにとおもひ立、それより帶をときて寢ず、美味を食せず、酒をのまず、男女の人道を絶こと十年なりき。江戸づめにて山野のつとめならぬ所にては、鑓をつかひ、太刀をならひ、とのゐの所にもねつゞらの中に木刀と草履を入、人しづまりたる後に、廣庭の人氣なき所に出て、闇にひとり兵法をつかひ、火事の時にも見ぐるしからじと、人遠き屋の上をかけり候へば、まれに見付たる者は、天狗やいざなはんと申たるけに候。是は二十より内の事にて、あまりに過たるにて候。其以後も鷹をもたねば、夏の暑氣にも、日中に鐵炮をもち、野に出て雲雀をうち、霜月極月の雪霜を分て、山中に入候へども、夜衣・蒲團持せたるとなし。うす綿のはだ衣の上に、木綿袷かさねたるばかりにて、挾筥一つ持せたるも、半は硯紙書物にて、小袖二つばかり入たるまでにて、民の家のあばらなるに、行かゝりに泊候き。其外のつとめはくはしく申に及ばず候。三十七八歳までかくのごとく勉め候故に、終にふとり申さず候。拙者事無分別、不才覺にて國家の用に立べきものにあらざる事を、我ながらよく存候故に、せめて日本の武士の勉なりとも可レ仕と存候て、家職ばかりは心のおよぶかぎり仕候き。身を輕くあつかひ候段は、今に存たる者多く可レ有レ之候。四十前後大病切々病出し、其上に山より落、右の背をいたみ候へば、口強き馬にのられず、弓ひかれず。鑓も不自由に候へば、武士のつとめもこれまでなりと思ひて、隱居いたし候。人の國にては右の勉もならず。其上病氣にて体もかなひがたく、如レ此ふつゝかに成行候。今は琴書をたのしむの外無レ他候。我等ほど病者にてうす着いたしたる者はなく候き。せめて我等のむかしほどなりとも勉て、其上にふとりあらば微じも仕まじく候へども、緩々として何の心がけもなく、夏は日にもあたらず、冬は火燵を

はなれず、晝夜あたゝかにあつ着し、厚味を好み、酒をのみ候へば、たとへ一心はたけく共、軍陣にて寒暑にあたり候はゞ、其まゝ病出して何の用にもたち申されまじく候。天照神武の御掟にあらず、日本の武士にあらず、勇不勇は生付にて候へども、強弱は習にて候。日本を武國と申候は、神武帝よりの御ならはしにて御座候。生れ付て日本の者の強なるにはあらず候。公家武家源は同じ流れにて御座候へども、ならはしにて強弱はるかにちがひ候。武士の子にても、二代と町にならび候へば、町人の心氣に移りかはり申候。奢にならひて世樂を事とし候へば、文道もうるさく、武道も嫌にて、我せざるのみならず、人のするまでそしり申候。國家の用にこそ立ずとも、國家の賊とならざるほどにはあるべき事に候

一來書略、我等は儒にても佛にても侍らず、世中に儒者の佛者をそしるは、佛法のあしくなりきたる弊か、扨は小乘の淺き所を取て申侍り。然ば佛者これを聞て申候は、佛道をしらで申事なりと、又佛者の儒道をそしり申も、儒の末流の弊か、扨はかたはしを見て、我得がたに申侍れば、儒者又わらひ侍りぬ。又儒者の佛書を廣く見、佛者の儒經をひろく見ると申候も、其家にあらで見候へば、精神いたらざるゆへに委からず。然ば是非いづれとも申されまじきにや

返書略、儒者のあしきをそしらば、儒者と申さで何とか申侍らむや。佛者のあしきを批判せば、佛者といはで何とか申さんや。其祖師はよくもこそあらめど、其流のあしきは其道のあしきなり。あしゝといふ所あしくば、あしきに極り侍べし。祖師のよきと云空理にて、今の實事の惡はかくされ申まじく候。明慧比丘云、今の知識達の申さるゝ佛法がまことの佛法にて侍らば、世の中に佛法ほどあしきものは侍らじと。明惠の時だにかくのごとし、まして今はとか

くの批判に及ばずｿ。他よりいへば爭心おこりて腹立ｿ。其家々に明智の人ありて、あしきをあしきと申たくｿ。聖人の道にも末に成ての弊は多侍れども、益は多て害は少し。治は多て亂は少し。人道の常なれば、一日としてなくて叶はず。佛法の傳りて後は、唐も大和も益はなくて害のみ多し。治はすくなくて亂は多し。達磨(タルマ)は佛にて、佛道の害を除くべき人なれば、武帝にかなはず、終に毒害せられたり。是を以見れば釋迦達磨をからやまとへ渡して、佛法をおこさせ侍らば、今のやうにはあるまじくｿ。佛法は寂滅(ジャクメツ)の法にして、陰道なれば、世に出て政道にたづさはり、時めくべきものにあらずｿ。時めくゆへに、害のみありて益なき也。聖德太子十七箇條の憲法(ケンポウ)にて、天下治たると佛者の申事なれども、　　　　然を治りたるとは何を以申ｿや。佛法の繁昌したる所を申にて有べくｿ。如此の逆德を得て、繁昌する佛法ならば、善惡の批判に及べからず。本より世の有德無道は、兵亂のあるとなきとにはよらず。君の賢愚は、世の靜なると靜ならざるとにはよらずｿ。兵亂の運にあたりて、聖賢の君出たまひ、軍陣の法を以賊を平げ給ふは、道をたつるの初也。水旱飢饉の運にあたりて、聖賢の君出給ひ、人民のなやみをすくひ給ふとは、其時には聖賢の君おはしまさでは、世中つくるが故也。はじめ聖賢の君亂をしづめ給ひ、後太平の時に生れ給ふ君は、賢才おはしまさでも無事を樂給へり。先君の明智にまさり給ふといはんや。水旱飢饉の時過て、豐年の運に逢給ふ君は、仁德おはしまさでも、人民飢寒なし。先君の恩澤にまさるとはいはむや。君子は兵事あるを以て亂世とはいはず、君を弑(コロ)し賢をねたむを以て亂世の極とす。守屋の賢臣を亡したるは、賢をねたむ也。　扨程なく吾子

治世と云は

愚の至り也。佛道も我思ふごとく、若釋迦達磨の心根ありて、釋迦達磨に法をおこさせ侍らば、益ある時には益ありて、害ある時には害あるまじく候。たとへば佛法は一人の人なり、八宗九宗は手とり足とり、目とり耳とり鼻とりて、一人のひとなりといはんがごとし。宗と云ものはひがとなり。全体佛在世の時のごとく、出家は出家の作法にて、山号院号の旨をうしなはず、戒定慧の三學全備せば、僧の多かるべきやうも、奢べきやうもなく候。寂滅にいたり、陰道を守て、治道にかまはず、世に時めかず候はゞ、無事の時は山林の木石にひとしく、亂世の時は罪なくて殺さるゝものに衣きせて、侘言するほどの助あるべし。螢の昼は叢にかくれ、夜は水邊にひかるがごとくならん。こゝを以て申候。害あるべき時には出ざれば害なく、益あるべき時にはをのづから益あるべく候か

一來書略、大舜は諸馮に生れ給ふ、東夷の人なり。文王は岐周に生れ給ふ、西夷の人なり。かく勝れたる聖人、皆邊土に生れ給ひ候。然に中國にならでは聖人は生れ給はぬ天理なり、と被レ仰候はいかゞ

返書略、諸馮岐周は中國の内にての東夷西夷にて候。中國にても王都に成候所は、地平に山おだやかにうちひらきたる所を取立らるゝものに候。一ぺんには申がたく候へども、さやうの地にはすぐれたるよき人は生れがたきものに候。靈山と申ものはをなじ國のうちにても、すこしかたよりて御座候。靈山の麓にして聖賢生れたまふものにて候。孔子を尼丘山の申子などゝ申說御座候へどもさにはあらず。右の理を父母しろしめされしゆへ、聖賢の子あらん事をおもひて、尼丘山の神靈あるにやごりたまひたるにて候。大舜文王東西の靈地にむまれ給ふ事尤に候。日本にて

も神武帝、日本武の命をはじめたてまつり、吉備公など才德秀たる人〳〵は、みな邊地の靈山よりいでたまひ候。楠正成など高間葛城吉野の靈山につゞきたる麓より生ぜられ候。辨慶も熊野より出申候。愚もひそかに是にこゝろざしあり。先祖の孝、子孫の慈、且は天下のために賢子を得たく候へば、靈山の麓にうつり居たくねがひ候へども、こゝろざしの眞ならざるゆへか、勢なくてうち過候

一來書略、佛道を信じて堂寺をこんりうつかまつるにてはなく候へども、むかしよりくに〴〵あり來り候ものを、我等の領分ばかりにてたゞいますてをき候もいかゞと存候

返書略、當世の譽れは後世のそしりとなり、いまのそしりは後世のほまれとなる事、むかしよりためしおほし。今の人はそしり候とも、道理あるにはしたがひたるがよく候。いまの人はほめ候とも、道理にたがへることはせざるがよく候。かならず後世のそしりとなる事なり。當世には時々のはやり物あり、風俗のあやまりによりて名さだめがたし。時うつりぬればはやり物もかはり、風俗もちがひ行候ゆへに、其時にほめられしは、或そしりとなり、或はきへうせて跡もなく成侍り。たゞ道德ばかり朽なきものなる故に、忠臣孝子義士等の名は、いつも朽せず候。我等の知人に佛學廣くして、戒定慧の三をかね、釋迦のごとく行へる出家有之候。我等山林のあれて、五行つゐでざることを語りしかば、今時澤山なる堂寺をこぼちて、農工商の家の破損に遣し度候。出家共は皆盜賊なれば、還俗させ候はゞ盜人の名をのがれ、大なる出世にて可有之候。さあらば山々は大にそだち、出家共もよく成候べし。山林にある寺ばかりたて置度事に候。我等出家にて候へども、共にこぼちたゝみ度堂寺伽藍多候といひければ、かたはらに町人居申候へし

が、それは坊主衆の迷惑にて可レ有候。還俗して今の無作法わがまゝは、何として成申候はんや。俗にては一月もたてりがたく、一日も置がたき者多候へ共、坊主ゆへに見ゆるして置候。農工商は一年中のくらしよく〳〵心を入て、かんがへざれば、ばつあひ申さず候。餘銀有レ之者は、百人に一人なれば、今時出家業の樂は及びもなき事に候。佛法信心にて出家をとげ度と被レ存は、千人に一人あるかなきかにて有べく候。たゞ樂なるゆへに、還俗は迷惑と可レ被レ申候とかたりき。出家だにも心あるはかくのごとし。百千歳の後、世中はとかく道理にかたつくべき所、御分別可レ被成候

一來書略、拙者在所に神事の時諸方より人多入こみあそび申候事、むかしより仕つけ候。それにつき、あやつり狂言盡しなど仕たがり候。所の繁昌のためさせ可レ申と申者も御座候。又喧嘩などもあることなれば、無用と申者も候。又左樣に何事にも用心ばかりいたしては、人の氣の伸可レ申樣もなく候。ありてくるしからねばこそ京大坂江戸にも御制止も無二御座一候。御代靜に治たる時は、にぎやかなるがよきと申者も候。させ候はんもやめ可レ申も拙者次第に候。いかゞいづれが是にて御座あるべく候や

返書略、我等存候は雙方共に眞是にあらず候。喧嘩の用心ばかりにて、窮屈ならむも太平の時の風にあらず、又所の繁昌とある事もすゑの事也。目出度御代の繁昌と申は、左樣なる事にてはなく候。たゞ人の心根風俗のためいかんとばかり見申度候。京江戸などにて、むかしよりあり來りし事は故ある事也。愚痴（グチ）の者の欝氣をはらしたるがよく御座候。其はらしがてら善をすゝめたる事也。あやつりのじやうるり三味線は淫聲なれ共、其しやうかはむかしの

代の盛衰の事、忠臣孝子、義士貞女等の義理のたゞしき事を申候へば、本心の感を催し善心をひらきみちびきしなり。昔の様なるあやつりなればくるしからず候へども、今時のじやうるりの本を見侍るに、むかしのまひ本はたえてなく候。名はむかしの名にて、事は別のものに候。よき事の分はこりすて、、作り事を入、みじかくして、先は人に偽をおしへ、其間には譯(ワケ)もなきあだごとの、人の心を狂はするとのみ仕候。又狂言と申も、むかしのは人のをしへに仕候。貴人の下の情を知しめされざるを、たはぶれに取なして知せ奉れり。臣はおそれて御異見も申がたきを、むかしの事に取なして諷諫仕たるものに候。知ありても生ながら人に敬はれて、床道具殿様そだちにしなしたる所、老人といへども其嗜貴人にはあるもの也。故にむかしに取成て心を付奉り。此心持を以て、下々にもをしへたると也。然に今時は左様の古き狂言の風は絶て、心もなき者にまでわる心を付、今までしらぬ不行儀もおしへなど仕候。か様にうつりかはりたる事を上には御存知なくして、むかしよりのあり來とおぼしめさるゝにて御座候。人の心をうからし、風俗を亂候へば、能々御分別候て御裁判尤に候

一來書略、拙者父祖より鷹を家業と仕り、多くの鷹師預り罷有候。鳥の鳥を取候事も心得ぬものにて御座候。其上鷹師ゑさしなども習あしくおさめがたく候。世の中の業作多中に、異様なる事にかゝり申候事、こゝろよからず候間、やめて引籠、いか様の所作成共可仕と存候。何とも公私の勢も致がたく候へ共、非道なる事にて候はゞ、無理にもひきゝり可申と存候。いかゞ

返書略、鷹の鳥を祭る事は經にも見え候。人の手にて取することは、上代の作にあらず。鐵犬の事は、經にも見えた

り。これは獸に獸を取する也。野鷹の鳥取事は其天然にて候。人の手にて取せ候事も、本より其理ある故にて候。其上士君子の武をならはす事は、田獵にしくはなし。山澤のかりは人數多く入れば、常に成がたし。賤人の様にしてねらひは各別に候。鷹かりは大身といへども小勢にて成よき事候。弓鐵炮は物をそこなふ故に、また多もなりがたし。鷹にかゝづらひ山野に身をならはし、所々の地形をもしり、民の苦勞をも知べきためなり。又儉約朴素の体も、獵の中にある事なれば、古の法と主意とだに立候へば、獵の道をあしきと可申樣はなく候。されば鷹を業とするをそしり可レ申樣もなし。今は本を失て末になり、鷹によりて無道を盡し候ゆへにあしきにて候。貴殿のがれ給ひ候とも、又々相つぐ人有べし。上への忠も貴殿家の積善も、立退て身をいさぎよくせんよりは、其まゝありて少づゝも古の獵の道をおこし、みづから正しく行て、組子の鷹師ゑさしをよく御下知候はゞ、功德まさり申べく候。今時の鷹師の樣子、民間の者共の物語を承るに、あぶれ者と申にて候。田畠をふみあらし、多くの損亡ありといへども、一言のなげきを申事もならず。少も用捨の心なきのみならず、わやくにかゝりて、一しほふみちらしなど仕も有レ之由に候。御鷹と申を權にかりて、心のまゝに狼籍をふるまひ、人をなやまし、鷹師衆の泊といへば、よめ娘などは他所へうつし、宿におかざる樣に仕とも申候。亂行といひ無道といひ、とかく言語に及ばず候。貴殿道に志ありて、右のごとき事少にてもよく成候へば、珍重なる事に候。上に是ほどの事とはよもしろしめすまじく候

一來書略、國々の人の物語を承り候に、いづれの御家にもよき人にとかぎ給ふよしに御座候。むかしもか樣に候つるや、末世とやらん申物にて御座候や

返書略、今程よき人のなきに二のゆへ御座候。其本を知人なくてたゞに不審をなし末世とのみ意得られ候へども、世はいまだ末世にあらず。今を上代となして、万歳を末世になさんも此方次第にて候。今をよく改れば、中興の上代に成申事也。世の中の人がらの次第にをごり行と、其第一には諸藝の勵みすたれて、諸士榮耀に奢り、たゞ居のあまりに、男女の道時をあやまる故にて御座候。唯今六七十になる人の中には、才力ありて天下國家の諸役にもあづかるべき人あり。それにつぎて五十前後の人にも、いまだ才氣大方なるが見え候へ共、事の外少く候。四十前後より内の人の中には、自然に候へども先は稀に候。五六十年の間に俄に世が末世に成侍らんや、左樣にてはなく候。三四十年以前までの武士は、昼は文筆弓馬の諸藝に暇なく、夜はねぶたきより外のねがひなし。何にても人のする事を不レ知を恥とせり。三十歳餘までは大方妻をもたず、親伯父など知音を頼み、妻をむかへよと申せば、喧嘩眼に成ていやがり、今のわかき内に妻子をもち、家持と成ては何の稽古も成まじきとて、眞實に辭退仕候き。心やすき友と出あひては、何事もあらば、かちだちの先陣をもせんと思ふ若盛に、妻子を持ては氣力もうすく成なごゝ色々の理屈をいひて同心不レ仕候。ましで妾など持たるわかき者はまれに候き。四十ばかりに成て、漸く子孫のためとて、妻をむかへ候。廿三十にて無二是非一妻を持たる者も、顏をあかくしてねずみまひ致候き。今は二十歳の内外より吾と妻子を求候。しかのみならず、本妻をきらひ、妾を澤山におきかへなど致候ゆへに、諸士の娘は多すたり居申候。賤しき腹の子にてしかも習あしく、文武の諸藝をも心がけず、のがれとばには、たゞ一心〳〵といひて、少もよき者をばわろ口をいひ妬候。是を以て或病者になり、或精氣を散じて生付の才力半分もとげず候。聖代の法のごとく、八歲より三十まで

は諸藝にいとまなき樣に、よく國に大堤をなしてだに、才ある者は多くなきものなるに、まして右のごとくに候へば、稀に才あるも消失て、跡なく成候。むかしの樣に若き諸士、恥ある世中にて、まち／＼て妻をめとり候へば、大方の形のあしきは堪忍して、夫婦の和睦をとげ、子あれば手そだてにして、おちをもさらず、ならひよく候へば、をのづから才氣ある人出來候。才なきも無病にて、かけはしりの用を達し候也。右の弊一朝一夕の故にあらず。世中の智術を以てくだるどくはいへども、秀吉公天下の奢の本をはじめ給ひてよりこのかた、六七十年の間に、天下の風くづるゝがどく、大にあしく成て候。これ天下によき人のなき其一なり。扨は人の生るゝ事、父母の氣血をうけつぐ事とはいひながら、天地の氣質をうくる事第一なり。天氣は地の靈不靈にしたがひ候。近年山澤次第にあれて、神靈の氣うすき故に、秀才の人生れがたく候。此理は以前にも申たる儀に候

一來書略、地獄の說中世は歷々も信ぜられ侍りしが、近世は聞なれて僞りらしきこと故、無知文盲の者、女などこそまどはされ候へ、武士たる者などは書をよまざる人もまどはせざれども、しかと道理を辨へざる故、幼なき時分より聞習ひたる事なれば、底には氣味あしく候やらむ、死期に臨てわきより念佛をすゝむれば、となふる者も在之候。妻子愚人のため明白の理承度存候

返書略、愚痴の人に道理を說聞せ候は、瞽(メクラ)をあつめて文章の見物を並べ、聾をよせて管絃の聲をなすがごとし、といへり。いひても聞知べからず、先目の前の事を以て申べし。伏羲の皇天地人三極の道を敎はじめ給ふに、九々の一を太極にかへして、八々を以て六十四をなし、萬事萬物の理を盡し給へり。軒轅の皇こよみの法を明にし給ひてより、其

後の智者算數を傳へて、春夏秋冬の氣、日月の蝕にいたるまで少もたがふことなし。天地の大なる一分を知しめしたがへてはあはざる理なり。一毛をかんがへあやまりては、しるしなき事なり。神農の君、草木をなめて醫藥の本を初給ひてより、其後智者、人の一身を天地の大にあはせて知灸針藥方の委き事を傳たり。人の身を切割ほどきぬれば、血にまみれて、却てわけなきものなり。居ながら道理を以て知ること一毛をたがへず、一分をあやまらず、臟腑經絡に通ずること如此。聖人と平人と性命の理にをひてことなることなしといへども、其分量の大小各別なる所あり。たとへば山の井の水と河海の水との分量のごとし。水かはりなしといへども、其量ひろきが故に、大魚小魚をたくはへ、舟をやり風波をおこし、天下の不通をわたす。其妙あげてかぞへがたし。常人の心は此一間の空中のごとし。聖人の心は大虚の空中のごとし。其空中にかはりなけれども、此一間はともし火をまちて用を達す。天地の空中には日月星辰かゝり、風雷雲雨をおこし、寒暑晝夜をなし、神物のおこる事言語にのべがたし。一間の空中山の井の水の知べき所にあらず。然れども聖人は其知にたかぶり給はずして、たゞ一躰の理を示し、同根の性をみちびきて、聖人の聖人たる所は、三綱五常の道にあり。其分量の廣大にして、人の不レ知所の妙は、餘事として、至極とし給はず。堯舜の民は、死生を見ること晝夜のごとし。何の疑ふ所かあらん。如此(の)廣大無量の大知にして、大虚天地一目に見給ふ人の、何を見殘してか、地獄の説を佛にゆづり給ふべき。少も見殘す所ありては、暦のしるしあはさる事也。鍼灸しるしなき理なり。且天道は至善也。何の惡ありて、地獄國をなさむや。造化は無盡藏なり。人の顏の同じきだに天下を歴てもひとしき人なし。かくひろき神理にして、何に事かぎて生れかはるの事あらんや。これ程直正しき聖人の教を

ばわきになして、理もなく證據もなき佛說を用ひ、須彌山の圖をあやまり、西方南方等の佛國をかまへ、地獄餓鬼等の六道をいひ、事理二あらず、理あれば必ず事あり。心に地獄極樂の理あれば、亦其國所もなくて不叶などいへり。其理則まよひの理なり、本より天理にあらず。何の其事其所あらむや。佛說もしまことあらば、こよみのしるしあはざるべし。曆の證據正しき上は、仏說の本なき事を知べし。其上三皇五帝の御代ははるかに久しき事也。三王を近しといへども、釋迦よりは千年餘以前なり。孔子は衰世の聖人也。釋迦より少後に生れ給ふといへども、孔子の時にはいまだ佛の名もきかず、はるかに後に渡りたり。天下に愚痴なる者多ければ、おろかなる事程よくひろまれり。法然・親鸞(ラン)・日蓮等は、本かしこくてをろかなる僧にはあらざれども、かしこき故によく人の氣を見て、世にあひぬべきおろか成教をひろめたり。禪宗は名譽(メイヨ)らしき事を嫌ひたる流なれども、今は人のつきしたがふをうらやみて、名譽をいひ出ることなり。人多き時は天に勝こて、聖人の道は天道なれば、愚痴の人の多に負て、正理を知人少ゆへば、中でも詮たき事也。天定る時は又よく人に勝理はり必然なれば、一旦運命の否塞によるこも、根なきものなれば終にはたえゆべし。然ば天道至善の常に立かへるべくゆ。世中の多き無理に一二人の少き道理勝がたし、ことわざにも無理が通るに道理ひきこめと申ゆ

一來書略、一休云、うそをつき地獄にをつるものならば、なき事つくる釋迦いかゞせん。と釋迦をそしりたる樣にも聞へゆ。何としたる主意にて御座ゆや

返書略、世間の人の心に尊く思ふ釋迦は、わけもなき者にて侍る故に、其釋迦をしりぞけ、眞の釋迦をあらはさむとの

事なり。地獄極樂をまことらしく信じぬれば、釋迦をうそつきにするにて候。地獄の說と神通奇特とは、佛法の内にても末の事に候。慈悲善行をすゝめても、惡心をこらしめても、とかくうごかぬものをうごかさむためなり。うごきだにすれば、それよりは自然に佛道に取入候事やすきが故也。後まで地獄の說や、奇特などを信じさせおくは、人をまどはすにて候。佛法をあきなひに仕るには、奇特と地獄□ほどなるよき事はなく候故に、始終ともに其末の事をとぐるにて候。毒をうりて身をすぐるがごとし。昔の佛者は人に善をすゝめんため說法し候故に、うそをつき惡をすれば、地獄に落と申候き。正しき事にてはなけれども、今にくらぶればせめての事に候。今の坊主は身すぎのため也。人々心をよく持て、極樂に生ずる事なれば、寺まいりをし、坊主をたのむに及ばず。其上坊主の心持、行儀大にあしければ、人に慈悲善行をすゝめてははずあはざるゆへに、惡心惡行ながら、彌陀をだにたのめば成佛する、題目さへとなふれば佛に成といへり。是は惡人のゆるしを出すにて候。敎へずしておけば人々天性の良知ある故に、惡心惡行をば羞と思ふものを、凡夫は其はずなり。よつて釋迦・阿彌陀のあはれみ給ひて、吾をたのむ衆生をばすくひとらむの御誓願と說聞せ候故に、其はずとゆるされて、少ある天性も亡びて、不仁有欲をも恥とせず。殷の紂王の時には、天下の國々にて惡事をしにくみをかうぶり、身の置所なき者は、皆紂王の都に行あつまりぬ。本より其身惡人にて、善人をきらひ給へば、惡人の分は氣に入しなり。天下取が天下の惡人の主なれば、惡人の分は時を得ておこりぬ。阿彌陀釋迦は佛ときくを、今は天下の惡人の棟梁也。大舜の君は善を人と共にし給ひ、人の善をゆるし給ひしときく。今釋迦彌陀は惡を人と共にし、人の惡をする事をゆるせるなり。本釋迦は能仁とて、慈悲ふかき心の位の異名也。阿彌

陁は無量壽仏とて、形色聲臭を離れて不死の心の本躰之。しかるを惡人の大將とする故に、其釋迦は天下第一の罪人なりと云て、天下の坊主のいふ所、諸人の信ずる所の心の釋迦を、退けたるにてあるべく候。釋迦は無欲無我、慈悲情道の心より、凡夫をあはれみて、心をよくせんためなれば　其心根は殊勝に候得ども、いかに人をよくしたきとても、偽をいひて教る事は、正理にたがひたる事なる故に、末々には其慈悲の千倍も万倍も人のあだと成侍りぬ。我心行と人に云所と二ありては、知惠のとりまはしにして、德の教にあらず。能仁は能仁なれども、その弊の愚なるもの也。今時出家どもかしこくて、貴人の御前か又は少心ある者の尋には、いひまはしてよき程にいへる故に、これほど天下の人の心をそこなふとはしろしめされず候。人の身中に心のあると、天地の中に人のあると、同じことはりにて御座候。心あしければ身の作法あしく、人道まどひぬれば世に災難たへず、終には天下の亂と成申候。こゝを以て天下國家を治には人の心を正しくするより先なるは御座なく候

一來書略、さなき事はかくれもなきとなるを、其國に生れながら、黄帝をさへ道家の大祖の樣に申なし、老子をも仙家の祖師にしたて候へば、天竺の釋迦もまさしくこしらへものと見え候。したてものにてなく人の中どき知惠ある人に候はゞ、中國日本へ釋迦を渡し侍らば、佛法のひろめやういかゞあるべく候や

返書略、釋迦もし聰明の人にて、中國日本へ渡られ候はゞ、茫然として新に生れたるがごとく、後生輪廻の見も何もわすれらるべく候。もろこしならば聖人を師とし、日本ならば神道にしたがはるべく候。たとへ神道衰て、學べき心法なくとも、堂塔・伽藍のかたちは傳へずして、わびたる草庵を以て寺とし、山林を住家とせらるべし。今の堂寺のかた

ちは、日本の國には相應せず。中夏・天竺の大國より出たる形にて候。中夏天竺は日本程なる國、五十も百も合せたる程の大國にて、空地多く山林はてしなし。かゝる大國にて作出したる伽藍を、此小國の空地すくなく、山林あさき所へ其まゝ移し作り候事は、國をあらし万民を迷惑せさする第一なり。知惠ある人いかで如是なる事をすべく候や

一再書略、中夏の聖人を日本へ渡し候はゞ道學の教いかゞ可被成候や

返書略、儒道と申名も、聖學と云語も、被レ仰間敷候。其まゝに日本の神道を崇め、王法を尊て、廢れたるを明かにし、絕たるを興させ給て、二度神代の風かへり可申候。からめいたる事は何もあるまじく候。國土によつて風俗ありといへども、天の神道は二なく候へば、儒といひ佛といひ道と云名を、其國ならぬ國へ持來る事は、道をしらぬ者のしわざにて候

集義外書卷二終

集義外書　巻三

削簡三

一來書略、貴老は天下の眞儒と申候に、佛法を退け給ふ言をきかず。いかなる故にて候や。むかしの仏者だにあり、まして今の佛者は悪人のごとし。書をあらはしてなりとも、此無道の罪をあかしたく存候

返書略、今時儒學する者は、佛をそしるを以て役とす。しかれども仏者は一點もいたまず、一歩も退かず候。貴殿書作て明辨せしめ給ふとも、儒道も起るべからず、仏者も退くまじく候へば、筆紙の勞無用の事にて候か。拙者も同志のたづねによりて、其人のまどひを解べき事には仏法の非をも申候。かつて不申にはあらず候へども、其人にあらざれば申さず候。仏者によき人多く、儒者の心行あしからば、何程そしりしりぞくるとも、少しもしるしあるまじく候。却て仏者の威をまし候べし。儒者に好人あまた出來て、仏者の作法あしくば、あらそはず共大陽出て殘星光なきがごとく成べし。今儒者はかくのごとく微少に候へば、仏者の威勢にてはうち亡すとも、手間は入まじく候。しかれどももろこしまではふせがれ申まじく候へば、後世時有て渡らんをばいかむともする事なかるべし。秦の始皇儒をにくみ、我悪政を後世にいひつたへん事を恥て、天下の儒者學者を悉く召あつめて、うちころし、書をさがし求てやきしかども、其悪名かくれなし。儒も仏も德なくて、人力を以てなす事はあしく候。或僧の云、今の仏者は盜賊なり、仏法はとく

亡て、盗賊が仏法の名をかりて大に奢りさかむなる也。此とき釋迦・達磨を出し、眞の仏法を起しなば、寺も千が一になり、僧も万が一に成べし。出家は樹下石上とて、山居して世俗の事を不知ものなりといへり。まことにかくのごとくならば、何ぞ人道にあらそはむや。仏法も古に歸たるにてあるべし。たゞ仏法をも起し、儒道も行はれば、道ならび行れて、相害する事有まじく候。佛も實すたれ、儒も眞かくれ候故に、あらそひもある事なり。かく申せば三教一致の様に候へども、儒仏は大に別なるものにて候。別にては候へども仏法を退むよりはよくしたく候。たとひ仏者無道にして、退けつべきものなり共、人多き時は天に勝の勢ひあるべし。其上明君の仁政ならば、彼も同じ人なり。道なかりしによりて、渡世のためにかく成行たるものなれば、あはれび給てにくみ給ふべからず。赤子の井に入事は赤子の罪にあらず。まして下に居者何ぞあづかるべきや。程子朱子は天吏なり、吾人はたゞ默して己を成べきのみなり

一來書略、我等ども出合候内には、儒者と云ものあり、町人にして學問する者あり、農を務て學ぶものあり。何れを見ても言と行と不相叶候。かやうに申我等を初て、受用手に入ず候。何こそ受用の道あるべき事にて候や

返書略、各の學びらるゝ所の書も、愚が見る書も、同じ書にて道理も同じ道理にて候。學術の外物と成と、我ものと成のちがひより、千里のあやまり出來候。縦ばわれら幼少より京都に育て文學し、器用にて博學者と成侍らんに、商ひせんも本なく、百性とならんも田地なく、武士とならんも本より其家に生れず候はゞ、幸に文學の藝を天よりあたへ給ひたると存、物讀と成て奉公可仕候。外は物よみに身をくだり、人の用を達し、内には竊に理を窮め、性を盡し家内を和睦し、朋友に交て信あり、禮讓あらん事をねがふべし。其言にいはん、道は天子諸侯大夫士の任じ給ふべきもの

也。庶人は其業を務て能事もなく、悪事もなかるべし。我も又是に同じ。悪なくば可也と。其詞は遜れり共、人のみる所かならず實あらば、人々皆感ずべし。道を任ぜずしてしかも道に益あらん。又町人の家に生れて、家業ありながら學を好みぬはど、身は町人の風俗にて、能町人といふものに成て、學は竊に已が爲にし、人の目をくらまさず、大利をとらず。有べきほどの利をとりて、家職に精を出し、いたづら居せず、無用のあそびをごりをせず。諸人に理直者と信ぜられ、職を上手になり、人のゆるせる利ありて、財の有餘をなさば可なり。百性の家に生れて田地あるか、又は故ありて農に引籠るとも、農人の業に身を入て、こゝろは堯舜（ギヤウシユン）の民たるおもひをなし、逍遙して田に水入、畠に耘り、手足を土にし、耜（スキ）の柄にすがりて立とも、其心のいさぎよくして、万物の上にのびやかなるたのしびは、天地神明にも恥べからず。況人にをひてをや。むかし見たりし者、肥たる馬にのり、人多くつれて、美々しき躰にて過るは、見女のあはれみを得ども、其心根は妻妾にはづるヿなからんか。いやしむべくともうらやむべからず。市井の俗と云て、賤きものにするヿは、其心の利害にのみありて、仁義なければなり。身は市井にして心は賢大夫士もおそるべき人ならば、居士とも隱者共いふべし。昔より賢者のかくれ所は農商なり。何ぞ其職を恥べきや。門のゑびかきを抱き、拆をうちてだにかくれ仕へし。況物よみ醫師の業をや。今の人々の學によるものはしからず。儒者と云ものは、實は産業にして、外は道者の樣にいひなせり。高く淸かるべき内はいやしく、諂りかくるべき身は奢ぬれば、前に云所とは各別なり。言行のたがふヿ尤なり。又産業にてはなく、學を好侍るものは、生れつき文才に器用にて、文學ずきといふもの成べし。連哥ずき鞠（マリ）ずきといふがごとし。又は町人の賤き職をいとひ、學問してよき者に交り、身をたかぶるべ

きために、このなもあり。其市井の利心はかたくかたまりてうごかず、農によりて學ぶものもこれに同じ。賢者はわざともくだりて、かくるべき庶人にをり合たるこそ幸なれば、いよ〳〵卑下して己が爲にすべき學を、學によりて其位にもあらぬ身をたかぶり、庶人にして武士のすがたを似せ候ものは、何として眞の道德に入侍らんや。道は僻める道にしても、眞實に道に志ある者はこれに異なり。釋迦は王の子に生れてだに、學問修行のためには、人間第一のいやしき者の、人にあなどらるゝ乞食となり、天下の谿となりて上たらんと欲するの勝心滿心の火を滅し、身は人の下に居て、心は万物の上にのびむとす。まとに殊勝の事ならずや。日本の出家は、人の上に座するを以て第一の滿足とす。それ學は人にくだる事をこそ學ぶものなれ。人の父たるとを學びずして、子たる事をまなび、師たる事を學びずして、弟子たる事を學ぶ。よく人の子たるものは、よく人の父となる。よく人の弟子たるものは、よく人の師と成。みづからひいてたかぶるにあらず、人よりをして尊くす。今の學者は農に居て農を安ぜず、商にして商の身をしらず。僣して武士のまねをし、遊民の徒たらむ事を欲す。たゞ外のよきとを貪りて、身を終の義をしらず。竊に隱微の地にして、心をく所の凡位をしらず。舊習の汚を覺ず、一日みる所の書にたかぶり、滿心高尙にして言語分に過るのみなり。いよ〳〵學でいよ〳〵道に遠く候

一來書略、武道具の內に小太刀・中太刀・長太刀あり、す鑓・十文字・かぎ鑓・長刀あり。其利の爭ひまち〳〵に申候。いづれかよく候や

返書略、いづれもよく候。たゞ其身の得もの次第にて候。我得たるとて世間皆我に同じくしたく思ふは、獨夫のせば

き心得にてゆ。大將たる人は、よしあしをかたづけず、人々の心次第に被成たるがよくゆ。上手をなし、自由をなして、利のすみやかなるものは小太刀なり。位をよく取て、手ぢかく賊を切るは中太刀なり。大わざに働くは長太刀なり。且夜の太刀によし。大事の仕者などを、たしかにするは小脇指なり。大脇指はかろきに利あり。中脇指は少しおもきに利あり。しかれ共人々のおもひ入と、劍のかねによるとなり。是は大抵にゆ。一樣に定むべからず。又騎立ならびて戰には、す鑓の長きがよし。且大わざの勝あり。船軍城のりにて、かけひきの利をも得、太刀長刀にあひて往來のわざをなし、自由なるものは十文字なり。入身よきものは長刀・かぎ鑓なり。近世上手の名を得たる人々には、木下淡州・加藤肥州・備前の家中坂口八郎右衛門、是等は皆二間斗のす鑓を用たり。人により所によりて利あれば、何をよしともあしゝ共定むべからず。多勢の內には皆ありたるぞよくゆ。惣じて世中の万事、時を第一として用る事もあり、所を第一としてなす事もあり。時のはやり物に心を奪れて、我本のよきを失ふ者もあり。今時江戸男は胸高に帶をし、京女は帶を尻にかけてするなり。其本は、男たるものは恰好に合て、胴短かめに足の長めなるが本の男の生れ付となり。女は恰好には、胴のながめに、足の短かめなるが本の女の生れ付となり。このゆへに胴あいの長き男が、生れ付よき胴間のみじかき男を似せて帶を高くすれば、とかくのわきまへもなく、當世と心得て、生れ付よき胴あいみじかき男も高くすれば、帶むねにあるなり。生れ付よき男の常の腰に帶をしてこそ、刀のぬけもよからめ。又生れ付胴あい長めにて、恰好よき女を似せて、胴あいみじかき女が、帶をさげてすれば、本のわきまへもなく、しりにさげたるがよきと心得て、生れ付よき女もさげてすれば、帶しりにかゝりさがり過て、胴あいながに過てあしゝ。か

やうの事にさへ、我身をしりたる者はまれなり。武道具の用ひ樣にも其心得可被成候

一來書略、出家を異端とは申候へども、人のかたしとする飲食、男女の欲をたちぬる事は、又奇特なり。其潔き心からは、俗をいやしく見くだしぬるもことはりと思はれ候

返書略、出家ならでも常の者に生れ付て、飲食に心なきものあり。男女情欲うすきこと、赤子のごとく成もの也。たゞ人のみならず、蟲にもあり。蟬は常に樹頭に露を飲てたれり。飲食の清潔なることこれにまさるものあらじ。似我蜂は子を生ぜず、他蟲の子を取て己が子とす。出家の弟子を子とするがごとし。俗人にも何の心もなく、たゞ妻子ぎらひなる者あり。大名などの美女に自由なるが、男色にすきて子孫なき者あり。常の人さへなるに、まして出家はそれに得たるものゝなることなれば珍しからず。奇特といふも、蟬のごとく似我のごとし。幼少のときよりの出家か、或は渡世のために成たるは、隱して魚肉女色あり。法を立るといふものも男色あり。本より男色をゆるしたるにはあらず。出家は不淫の法なれば、生れ付欲うすきものは、男色もたち、酒五辛も絶ものあり、出家の至極なり。しかれども氣化に生じ氣を服する小蟲には及べからず。少しき生れつきに自滿して大道をしらず、せばきの至なり。飲食男女の欲なきものは蜉蝣にしくはなし、しかれども羽蟲の長とならず、雌雄正しき鳳凰を長とす

一來書略、今の世ほど、軍法者の多き事はいにしへとてもあるまじく候。何事ぞあらば花やかにおもしろき合戦多く有べきと存候

返書略、世中無事なるゆへに、軍法者多く候。軍國になりなば、今の軍法者百人が九十人余は名もしれ申まじく候。

太刀鍵はしあひをしてもしられ候。軍法は無事なればしあひもならず、たゞいひがちに候。勝負の利こ大將の器量こは、軍法の外なるものに候。大將の器ある人か、又は勝負の利よき人にあひて、軍法斗を出されなば大負せらるべく候。百に一二は流のよきもある躰に候間、下地のよき人存られ候はゞ、たよりに成事もあるべく候。太刀といへ共常のしあひとちがひ、まとの時は心氣變じ眼くらみ候ゆへに、勇なる方勝事に候。常の心にて太刀の流よく候はゞ、大に手がらせらるべく候。常の心ならば兵法はしらでも利あるべく候。義經鏡の宿にて、初て强盜五六人にとりこめられ給ふとき、我心のどく人をも思ひて、いかゞこ心もとなくおもはれ候所に、人は心氣變じ眼くらみ、おもひの外すきま多く成候。義經はすぐれて勇なるゆへ、常の心にてむかはれ候ほどに、心やすくしたがへ給へり。それより武勇の味をおぼえ給ふと見え候。天狗に兵法ならはれしとあるは僞に候。太刀をぬきて平家の誰が首〳〵といひて、かやの穗をきり給ひしをわきよりみて、天狗のつきたるなど申たるよしに候。劍術はけいこせざれども、生れ付て、病氣かたみすくみなく、太刀自由にのびて、空よりくだるがごとく、地より湧がごとく、太刀ばやなる人ある事に候。其上に勇氣すぐれ候へば、きり合のときは無類のはたらきあるものに候。則義經其人ときこへ申候。義經は大將の器量あり、さしあたり勝負の利に器用なり。其上文學して七書を得られしゆへに、名將と成給へり。一分の勇氣のはたらきまでかねたる人なり

一來書略、今時古の聖賢の說にもよらず、佛說をまじへなどして、私なる天地の圖をなし候へども、曆數はまた委しきも候へば、いよ〳〵人を迷し申候

返書略、其暦數は聖賢の傳を習て仕候へば、算數に得たるものは委しき事にて候。其圖と申ものは、道理にかなはずしても、人の見てさもあるべくおもふ樣にだにいたし候へば信じ候也。本をしりたる人こそ、是非をもしることにて候へ。數と圖とは別にしたるものに候。別て申は、數は聖賢の傳ならではあはざるゆへ用ひて、圖をば仏說を用ひ、或は我利口をくはへなど仕候。圖はいか樣にしても、しらざる者の目には、證據なき事なればいひがちに候。聖人の天地の圖をなし給ひしことは、四時の氣を伺ひ、民に時を授け給ふたよりばかりなり。其實事の用にもたゝず、人に見せて奇特とおもふばかりのことは、なされざる道理にて候。古の委しき圖書は、秦火にほろびたりといへども、大かたは書經に殘り候。仏者の說に大明は天地の中にあらず、其證據は夏至に景あり、天竺は天地の中なり、故に夏至に景なしといへり。これほど目の前なる道理にくらきことはなし。人の兩眼も前にあるごとく、日月も南によりてめぐれば、大明は中國なるゆへに、夏至に景あり。天竺は西なれども南によりたる國なれば、夏至に景なし。むかし周公、地の中央をもとめて、王城を營み給はんとて、土圭を作り八尺の標を立て、日の長短をはかりて、四時の序を辨へ給ふに、冬至の日景は一丈三尺、夏至の日景は一尺五寸ありき。惣じて日月のめぐり、地より外星辰とともに升降することは三万里なり。標の景一寸にて千里づゝ差ふものなれば、夏至の日景一尺五寸にては一万五千里なり。しかるゆへに地の中とす。冬至より日漸々に北の方をめぐり、夏至より漸々に南の方をめぐる。冬至には日の短きこといたり、夏至には日の長きこといたれり。故に夏至の日は北の方にめぐりて、標の景一尺五寸なり。其上天の東南はひきく、西北は高し。北極南極を天の中なりといへども、北極は地を出ること三十六度にしてあらはれ、南極は地を入こと三十六度にし

て、終に人の目に見えず。故に中國五岳の中、嵩高山を天の中にあたれりごいへり。本より天の中にはあらで地の中なれども、中和の氣あつまれば、天の中と云理なり

一來書略、世中亂れむことは、人に狐のごときもの出て、奇特をなしゝこと承及ゝ。いかなる故にてゝはんや

返書略、上治の世には天下に邪神なき故に、狐狸といへども無事なる獸にてゝ。中治の世には邪神獸にやどりゝ。亂世におよばむとては、邪神人にやどりゝ。狐狸の人をまごはす事は、まれにしてあさくゝ。人の人をまごはす事は、多してふかくゝ。或は愚によりてまどはす者もあり、或は高きによりてまごはすものもあり。すべて邪知ありて、人をまごはすものは、皆人に出るの狐狸なり。奇特をなしてまごはすは、愚によるの邪術なり。是もまどはす事の淺きにてゝ。高明によりて深くまごはす者其害甚し。又名利によりてまどはす者もあり。人の心大にみだれゝへば、樣々くらき分別裁判出來るものにてゝ。故に世亂ゝはんとては、先人心をまどはしゝもの餘多出來るにてゝ。是を以て聖人の政は、人心を正しくするのをしへを先としたまふなり

一來書略、儒書多くよみ、人に講談まで仕ゝもの、兩人まで異端におちゝ。喬木を下て幽谷に入の甚しき者にてゝ。いか成事にてゝはんや

返書略、一人は本より心の微くらき所ゝき。書をよみゝ事は、文才の器用なるばかりにゝ。まよひたるも尤にゝ。又一人は心に異學を信ずるにてはあるまじくゝ。聖學にをひて終に眞をしらず、たゞに儒學ずきにてゝき。次第に氣根おとろへ、儒道に退屈しての事たるべくゝ。儒學をつとめながら作法みだりがはしくゝへば、人も何かとそしり

候。仏に入て作法あしき分は、よのつねにて候へば、誰もとがめ申さず候。其上悟道にかこつけて、平人よりも我まゝなる事、はやりものにて候。彼是心やすきに、佛に入にことよせて、我まゝをせんとの事たるべく候。又儒學する人をば人にくみ候へば、渡世のさまたげにも成べきかとて、佛にかへ候もありと人のかたり候。いづれにしてもおしからぬ人にて候。しらぬ人のうたがひ申とのみ當分道學のさまたげにて候

一 來書略、古の儒者と今の儒者と、異る事御座候や

返書略、それ儒は古の官の名なり。初めて周官に出たり。鄕里にして人に教るは、道藝を以てするものを儒といへり。其後儒官史官相通たるか、史儒ともいひしと見えたり。博識を以て業を立たり。道德なけれども博學なれば用を達す。論語に小人の儒、君子の儒とある所をみれば、儒は文學する者の稱のごとし。大体にしたがふものを大人とすれば、文學して道德をたすくるものは、君子の儒なり。小体にしたがふものを小人とすれば、文學して產業とするものは小人の儒なり。今時儒者といふ者は、おほくは小人の儒なり。博學にして祿をうけ、國郡の主の用を達すれば、又史のごとし。是故に天性文學に器用なるもの、史儒と成て祿をうくることはくるしからざるなり。己を知ものは明なり。いまの儒者は己を不レ知か、しれども勝心のためにおほはるゝか。君子小人の儒を明言せざるによりて、儒者の行はかくいやしきかといはるゝなれば、道德の罪人なり。道藝とは何をかいふや。禮・樂・弓・馬・書・數の六藝なり。古は此六藝に長ぜるものを撰て、儒官になして人に敎しめ、士君子を助しめたり。曾子曰、籩豆のことは有司存ぜりと。日本の儒者と云ものは、六藝をもしらず、たゞ文學に長じて故事をおぼゆるのみなり。しかれども此一事は重し。士

君子の人情時變をかんがへて、國家の政道をとるべきとこゝにあり。みづからをるべき位にをり、受べき祿をうけ、己がために道をいひみだらずして、士君子の才をなし、道を達せば、古の師儒ならん。尾州の亞相、ある博學の儒者に向て、なんぢは儒者かと問たまへば、ものよみ坊主にて候とこたへき。儒者と答へなば、いひつめんとおもひ給へる氣色を見て、かしこくありのまゝにこたへしといへり。まことに妙壽院以後の儒者ははなはだくだれり。實は商人のいやしき心根ありて、外には聖經の威をかりたかぶれば、人のにくめるもことはり也。人のあしくいひなすにあらず、みづから己をいやしくせり。心だに賤しからずば身はへりくだりて、ものよみ坊主にかくるゝこともまた可なり。日本にても近比まで儒者は公家にありて、官につきたると聞えたり。才德あれば高位にものぼりたり。多はもろこしの史儒のごとく、史のごとし。文之妙壽院、出家よりすぐに儒者と成たれば、公家にも成がたく、武家にもなさゞれば、かしらは其まゝにて武家の入道のごとくにて居られたり。儒者の髮をそることは是よりはじまりたることいへり。醫者のかみをそる事も、古道三など二三人出家よりすぐに醫師に成たるが、これも武家の入道のごとくにてありしよりこのかたはじまりたる事といへり。かみを剃も上よりの命にあらず、己となしたるもの也。あやまりを知人もはし〴〵ありと見え侍れば、また己とむかしの樣に、かみを不ㇾ剃樣にも成行なん。今はかたなさすまじき商人だに刀さして、武士のごとくにしてありき侍れば、ことに儒醫の上下着て、刀さゝむは常にかへりたるにてあるべく候

一來書略、先度承候。山に草木しげりぬれば、にはか水のうれひもなく、且草木に水をふくみて、十日も廿日もしたゝりあり、河水もこぼしからずと仰られ候事を、老農にかたり候へば、似合しきたとへを申候。禿のかしらに水をかけた

六〇

ると、坊主のかしらに水をかけたるがごとくにて候との事に候。至極の儀と感じ申候。大河といふも方々の谷々のしたゝり落合、積て末に大をなせり。芳野川その水上を尋ればむぐらの雫萩の下露。と承候。しかれば山澤氣を通じて、神化のなす所ともさだかに存知られず候。如何

返書略、我山賤にきけり。大和國芳野河、紀伊國熊野川、伊勢國宮川、此三河の水上を大臺が原と云。三國晴天白日の時は、此原も晴天なり。三國のうち少うす曇、花ぐもりなど云ほどにても、此原の雲雨甚し。他より望み見れば、雲の山上をまくがごとく、霧の深谷に簇るがごとし。其上に登る時は、のぼりつくさゞるに身のぬるゝと、大雨にもまされり。國は天氣晴ても、此原には雲雨の氣猶はれず。其廣さ方一里ばかりなり。雨ふらざれども西風には宮川の水をまし、北風には熊野川の水をまし、東風には吉野川の水をます。笠さしたるばかりにてはふせがれず。空より降にあらず、只神氣原上にみち、水氣風によこぎれり。白日の時といへども、其雫たゆるとなし。これその葎の雫、萩の下露といふものなり。山澤氣を通ずるの至なり。其外高山深澤、名嶺には私雨と云ものあり、同じ理なり。谷洞より湧出る水も同じ神理なるをしらずして、迹によりてみるが故に疑ひ多し。水は高きより出て下につく、人の口上に有てつの生ずるがごとし。谷々の小水雨露のしたゝりおちそふとも勿論の儀なり。しかれども三十日ほども旱する時は、其小水はかはきぬ。たゞかの水上のみたえず。其小水といへども神氣のうすければ、其流もすこしきなり。當時深山多くもち給ふ國主は、山の運上多くして、一旦はよきやうなれ共、山をもち給ふとは大事のものなり。山川は天下の源なり。山と川の本なり、古人の心ありてたて置し山澤をきりあらし、一旦の利を貪るものは子孫亡るといへり。諸國共

にかくのごとくなれば、天下の本源すでにたつに近し。かくて世中立がたし。天地いまだやぶるべき時にもあらざれば、乘除の理にて、必亂世となるとなり。亂世と成ぬれば、軍國の用兵粮に難儀するとなれば、家屋の美堂寺の害をなすべきちからなし。其間に山々本のごとくしげり、川々むかしのごとく深く成事なり。國郡を持給ふ人々、事あるの時忠節をと思給ふはをそくして用に立がたし。事あるに至ては取かへすべからず。今治國にをひて如ㇾ此大忠ある事と承及候

再書略、古の人山川を治る政ある事に候や

返書略、上古には地を諸侯に封といへ共、名山大澤をば封ぜず。其故は雲雨を起し、材木を生じ、流川を出し、天下の用を達する神靈あれば、一人の私すべき所にあらず。故に杣を入、材木を出し、家屋をつくると、國天下の山澤をはかりて、つくすべからざる制法をなせり。くはしき事は一旦の書簡の盡すべきにあらず候。

一來書略、國々に道に志す者出來て、貴老を尋來候へども、御對面なきゆへに、江西の手筋とたづねより候へば、むかしは聞も及ばざりしもの、其學流なりといひて、敎へ候。志は實に候へども、文盲なるゆへに、陽儒陰佛など云やうなる不正の學を信じて、江西の學術と思へり。あたら志ある人をすて申候。又國所へもよびなど仕候。本より右の師をいたし候ものは、外には中江氏の學の名高きをかり、內には渡世のために仕候へば、文學さへしかとなく、何のとりしめなく候ゆへに、むさとしたる風俗に成ゆき、或は徒黨がましき口舌なども出來候。貴老かつて御存知なき事に候。右のもの共猶以貴老をむつかしき人におもひて、そしり申候へども、世人は其實を存ぜずして、學友と心得候へば、あ

しき事の罪は中江氏、さては貴老へかゝり申候。今よりは志ありて尋參候人に御あひ被成候へかしと存候

返書略、內々承及たる事に候。拙夫事病者にて人と對して久敷かたりがたく候　二三度もうちつゞきて人と出合候へば、其跡大に草臥候。學者をあつめ敎へ候事などは、おもひもよらず候。去ながら氣色もよき時分遠方より尋られ候人には、敎る事こそならず候ども、せめて一兩度づゝは對談いたし、文武の德業心法の大意、其人の受用せらるべき入德の端を少ばかり語りて返し度存候儀度々候へども、世間の勢にて、身を心にまかせず候へば、不レ及二是非一候。わき／＼にてあしき事のある罪は、しらざる此方の身にかうぶり候。一生無實の造言虛說を負て、終べき者と存候。天地神明の照覽たがふまじく候へば、なき跡にはをのづからしれ可申候。本より名利に心なく候へば、無實の罪はうかべる雲のごとくに候

一來書略、政令法度は人情をよく知て、時處位に應ずるものなりと承候。尤の儀に候。昔たま／＼道を以て政をせんとおぼしめしたる君もおはしましゝかど、時の學者、唐流を以て日本に行はんとせしかば、つかへとゞこほる所おほく、やめ給ひぬ、とうけ給はり候。おしき事にて候

一返書略、道と法とは別なるものにて候を、心得ちがひて、法を道と覺えたるあやまり多く候。法は中國の聖人といへども代々に替り候。況日本へ移しては、行がたき事多く候。道は三綱五常これなり。天地人に配し五行に配す。いまだ德の名なく、聖人の敎なかりし時も、此道は既行はれたり。いまだ人生ぜざりし時も、天地に行はれ、いまだ天地わかれざりし時も、太虛に行はる。人絕天地無に歸すといへ共亡ることなし。況後世をや。法に聖人時處位に應じて、

事の宜きを制作し給へり。故に其代にありては道に配す。時去り人位かはりぬれば、聖法といへども用ひがたきものあり。不ㇾ合を行ふときは、却て道に害あり。今の學者の道とし行ふは多は法なり。時處位の至善に叶はざれば道にはあらず。しかのみならず、今の法に泥みたる學者は、仁義をしらず。爭心利害の凡情逞く、只己が氣質の近きが爲に、事を勤め、法を用ひ、經學の文理をいふを以て道者なりとおもへり。世中の人、此德あれば此病あり。寛仁なる生付の者は、行事に非なることあり。大意をみるものは、細行を不ㇾ顧。篤實なる者は、才知不足なり。作法よくつとめて、爭心我滿なる者也。人にたがふるを悦て、學を好む者あり。初の三は德に付ての病なり。後の二は凡心を根として、外をよくする者也。然れども其生付文理にさときか、事を勤るに得たるかの處あればなり。雁（カリ）の行に長幼の序の正しき事は、格法者といふも及べからず。鴛鴦（ヲシドリ）の夫婦よく和ぎて、別たゞしく、雄（ヲ）鳥死しても雌（メ）鳥ひとりたてるとは、人といへどもよく及ぶものすくなし。これ雁は陽鳥にて火氣を多く得たり、火氣の神は禮なり、この故に不ㇾ知不ㇾ識かくのごとし。鴛鴦（ヲシドリ）は水鳥にて水氣を得たり、水氣の神は知なり。故に夫婦有別の道不ㇾ知してあり。只これのみにて他の事は皆鳥なり。今の學者、孟子に繼て道を任ずといふものあれども、只其みづからたかぶる所の者は、文義を講談し、格法をいふのみなり。或は師とし學びたる者を毀（ソシリ）ては己を是とし、或は他の學者の非を揚るを以てみづから賢なりとす。心に利欲逞（タクマシ）く、當世の名を求て、毀譽（キヨ）に動くことは、市井の凡俗に違ふことなし。況其他は只朱王の贔（ヒイ）屓（キ）をするばかりなり。佛氏の日蓮一向に似たり。たとへば能をするがごとし、公家或は武將の裝束して、是は房崎の大臣、義經などゝ名乘とも、其實は猿樂なるがごとし。凡心を不ㇾ免して朱陸王學などゝいふとも、其實は凡夫なり。た

とひ格法の學者、心志殊勝なる者ありて、行はんとする事善なり共、人情に委しからでは、遂られまじく候。又今の人情にしたがふといふものはしからず。義のまさになすべき道理をも、人情あしゝとて行はざるものあり。此は人の利欲をそだてゝ義をそこなふ者にて候。善事と義理と又分別あり。事は善なりとも人情に戻りなば遠慮あるべし。義の大なる事には、人情を憚るべきにあらず候

一來書略、他姓の子を養子とするは僻事なり。養子となるも不義なりと、今の學者被申由にて、儒道の一流の樣に承候。加樣の事にて、少し道を面白く思ふ者も退き候。いかやうの道理にて候や

返書略、生氏の始は、天地を父母とし、氣化に依て生れ候へば、人皆天地の子孫にて、いづれを養ひても同じ事に候。古の人の同姓を擇て養子とせし事は、故ある事に候。世に功ありて、天子より姓を給り、德ありて家を起したるの子孫、代々祭を奉し候へば、其有德有功の子孫あるを不ㇾ立して、無功德の子孫をたつる事をいみてなり。絕てなき時は、いづれをなり共養はで不ㇾ叶事に候。又有功の人の同姓ありても、不德不才ならば、天下國家の任重き家か、人を多く扶持する家などには立がたく、たとひ立ても、無ㇾ程家を失ふべきやうならば、他姓なりとも才德ある人に讓るべし。陶唐氏の有虞氏を立て祭を奉ぜしめ給ふがごとし。主君よりも祭をも奉ぜしめ、家をも嗣しめらるべきやうあるべき事なり。又同姓の子孫あらば、いづれの國いづれの所にても、小身なりとも祭は奉ずべし。祿は官職に依て請る天祿なれば、天下國家大小のかはりはありとも有德有才に讓るべきの義なり。同姓の子孫も、今は小身なりとも、この陰德に依て、後世又家をもおこすべき事なり。或は子とし、或はゆづり、この二の間は時の勢にしたがふべし。今

の學者、家語の故事を以て申候へども、家語にはまじはりあり。聖人の語には有まじきと覺ゆる事共御座候。子となれば其家の氏を名乘、ゆづりをうくれば氏は其身の氏なり。然共ともに其家の祭祀にあづかりぬれば、子たるの道は同じ理にて候

一來書略、學者ありていへるは、養子として我氏を名のらせながら、我娘とあはするは兄弟夫婦と成なり。甚非也と申候。然れども天下をしなべてかくのごとくなれば、其言は立がたく候。諸人の道學をうとむ一端にて候。道理の至極したる事にて候や

返書略、聖人の法にも、人の妻となる者は、夫の父母を父母とすとあり。本生の父母の喪は輕くなり、夫の父母の喪は三年に成と御座候。夫の家に往ては、我兄弟父母の服皆そがれ候。これをも兄弟夫婦となると可申候や。理屈にてはいかやうにも被申候へども、又つかへ塞る事出來候。たとひ少しは道に不叶事ありとも、世俗をしなべてあるとならば、毀るべからず。其國に入ては大夫をもそしらずといへり。況世中のならはしなるをや。あらたまるべき事ならば、世運文明の時至りて改まるべく候。たとひ事は改て善なりとも、心の德聖賢に不叶候はゞ、何の益か有べき。つとめて改むべきは我心の凡習なり。今の學者己が心の凡習をば不洗して、世俗をそしり、法を立むとす。其心は俗にもおとる者あり。人これを知てあなどり笑へり。道とする所の法は時勢にもとり、實儀は世俗にも慢らるれば、いつの時にか道學をおこすべき。吾人眞志あらば、あしゝと思ふ事は我のみせずして可なり。人を毀るべからず

一來書略、近年假名書のめづらしき書出候へば、大方貴老の筆作の樣に申候。拙夫などは見候ても、一向僞と存ずる書多

く候。又とりまがふほどよく似たるも御座候。貴老御書物の内をとりて書たるも見え候。然れども語勢嶮しく、火氣まじはり、實は各別ちがひ候へ共、しらざる人は皆貴老の作と存ずるよしに候。實の御書物の益まで淺くなり候と、きのどくに存候

返書略、まことに五倫書などはまさしく作者ありて、我等の生れざる前に出たる書に候。七十余の人は五十年前に見たると申者御座候。しかるに我等の書に極りて、此間批判の書まで出申候。其外名もしらぬ書に、愚作と申が多きよし承候。又愚作と申も無余儀ほど似たるも出候。我等の書物を朝夕見て、取用たるにてあるべく候。予不徳にて道に入事深からず、道理あさく候ゆへに、世間の人によくあひたる所ありて、取用られ候かと存候。されども予が志す所はしからず。全く當世の名利を求めず候。百歳の後は正邪明白にしられ可申候。一旦譏にあひ、難にあひ、悪名を蒙り候とても、浮べる雲のごとくにて候へば、何とも不レ存候。當世は大勢の人の好む所にしたがひ、悪む所にひかれ候へば、毀譽共に眞僞正邪さだかならず候。百歳の後は、今の譽る人毀る人、共にとゞまらず、好悪移り易り候へば、万歳不朽の公論に成候。其時ならでは君子の名も定り不レ申候。程子と東坡とは、君子と小人にて、黒白違たる人品にて候つれども、其時には程子派、東坡派とて、天下の學術二に分れて相爭ひ候。後世には東坡は一人の詩人と成、程子は万歳道徳の師と仰がれ給ひ候。愚これに比するにてはなく候へども、當世の毀をさけず、譽を求めず。たゞ後世にはぢざる實を存候。後世に恥るとなきは、わが心の神明に正してせざる所あればなり

一來書略、ある人貴老の和書を見申て、名高き人なるが、文學拙きと見えて、甚あさまなる文躰なり。かほどおろかなら

むとはおもはざりしと嘲り候。我等などは益を得候へども、か樣にそしる人候へば、御書物の世間へちらざるやうに仕度候

一返書略、人の申さるゝ處少もたがふ事なし。夫道理の深遠にして、幾度見てもあかざるものは聖經なり。高明にして親切なるものは賢傳にあり。後世の人、文筆達者にて、精を出し候ども、古の聖經賢傳にはよもをよび候はじ。愚が和書の主意は、直にして近きにあり、無學の心にも通じ易く、文章の美なきものは淺きがごとし。然れ共ちかきと淺きとは、似て大に異なり。世の學者の書に向ていふ所は、道理分明なるやうなれども、書をはなれ、平生の交になりては、無學の凡俗にもおとれる事あり。又實に道を尊て少しは行ふといへども、聖賢の跡のみ見て、其故をしらず、時處位の至善を辨へず、人情時變に通ぜず、一流となりて大同の基本ならず、これをなん淺きとはいふべき。予聖語を工夫受用して、得事あるをば人の問に答へ、或は遠方の同志の求めに應ず。聖經賢傳を心に得て、日用に行はんとす。道德の政令に通じ、學術の人倫に行はるべき一助ともなるべきか。予が和書は、人情時變をしるに便あらん事を思ふなり。道德の學の、人事に合一する益共ならば、淺にはあらで近きなるべし。世間の文學の、政令に用られざる事久し。人倫と學問と、二になりて一ならざる事をなげきてなり。實に用て見る人は、かならず疑あらん。うたがひあらば予が主意しらるべし。然らば今に益ある事あらん、古に及ぶべきにあらず、後世に傳ふべからず。予も又一人の天民なり、天の靈あり、いはざるは罪ある事に候

一來書略、天下の佛者貴老を仏敵なりと申候。仏者には我慢邪心の者多く、貴老を害ありとして、失はむ事をねがふ者

候間、御心得あるべき事に候

返書略、世間の佛者多きこと、千万を以てかぞふべからず。根を堅くせしこと千歳にあまれり。世中仏者の有ならざるはなし。予が如き不徳の獨夫、五尺にたらざる一身を以て、世間の佛者の敵となり、仏法を滅すべきか。つら〳〵おもふに、今の佛者、人間世にをひては、いまだ盛勢を失はずといへ共、天命はすでに滅亡におもむけり。その故は物皆盛衰あり。たとひ仏者あしからずとも、盛なるときはまらば、など衰る時なからんや。しかるに今の佛者、不仁無道なること凡俗に越たり。奢も又極りぬ。これ天命の絶たる所なり。故に予が如き不徳の獨夫をも、彼みづから敵とするなるべし。みづから敵を生せば、予を失ふとも絶ることあらじ。予が命天にあり、用心すとも失はるべし。用心せず共失はるべからず

一來書略、道に志あるものの、時として飲食男女の欲にうつることあるは、志の實ならざる故ならんか。又道に志なくても、行儀よき者あり。先生いづれをかとり給はん

返書略、心は無聲無臭のものに候へば、みがたき事に候。志ありといふ人も、隱微の地の實不實不存候。又志なくて行儀よき人も、隱微の所しるべからず。去ながら父母兄弟妻子を古郷に置たる人は、一日他國にあそび候へども、終には古郷に歸るがごとく、隱微の地とかく惡道にゆくまじき人の、善に實なる所あるは、道に志ありて、一日形氣の欲にひかるゝ共、終にはもとに歸るべく候。形氣衰るにしたがひて、道より外にゆき所あるまじく候。志の不實と申にてはなし。實はあれども明のしばし蔽るゝ所ありてなり。只今飲食男女欲もうすく、行跡よくても、心志の定所なき人

は、父母兄弟妻子のあつまりたる古郷なくて、たゞひとり身のうきたるごくなり。しからば往々何國にとゞまるべきやらん、はかりがたし。今日のよきは精力つよくして、愼みの苦にならざるか、名根のふかくてなすわざか。もしは生れ付て形氣の欲うすきものもあれば、そのたぐひなるべくゆ。形氣おとろへ行にしたがひて、本の志たる道德はなし。心は昧し、あぢきなくして後世などに迷ふもあり。愼みおとろへて亂るゝもあり。行過て異風になるもあり。一旦のよきはたのみにならず、月夜のしばしくもりたると、闇夜の晴との如し。雲ありとてもたのむべし、雲なしともたのむべからず

集義外書卷三終

集義外書　巻四

脱論一

一舊友問、王代にも頼朝北條尊氏の天下にも、歴々智あり名ある執權の人々も、病人あれば醫者のさたはなくて祈禱の事のみ記してあり。あまりに愚なるやうに聞え侍る事はいかゞ　云、少し學問ありて筆をもとり、書記するほどの人は、多は佛學より出たり。是故に他の事はさしをきて、仏法のいけん、仏事の盛なる事のみ書たり。これを天下第一の事と覺えたるが故なり。其上守屋の賢臣亡て後は、日本國中に少目のあきたるこ覺えたるものは皆佛者なり。公家も武家も仏者の弟子也。神道の教もむかしは明なる道理ありつらめども、守屋亡てよりたえてきかず。儒書は文字の學ばかりにて心法の事はさてをき、外むきの理學こいふものだになかりしなり。されば儒仏高下のわかちを知ものなし。たゞ何によらず物を知をもつて手がらこせり。むかしの名僧の武士に教訓したる語を見れば、皆儒の道理にして出家の言こは見えず。仏語は少もなきなり。儒仏の爭なきゆへに良知の靈によつて、自然こ出たると見えたり。しかれば仏者則儒者にてもありき。近き比まで理を云ものは、只仏者にのみあり。故に聰明なるものは、多は仏者こなりたり。修行殊勝なるものも、仏者の中にあり。然ば歴々知あり、名ある人は、佛によるとはりなり。近年は程子朱子の理學ひろまりぬれば、聰明なるものは儒に心よせあり。仏學は次第におろかに成たれば、仏學に心服す

るものは心根に愚なる所あり。後世をねがふものは、一目もしらぬ道行人も、人相にてしらるゝものなり。心の愚痴相にあらはれて、無知〳〵とみゆ。少も明なる心あるものは、聖人の學を知らでも、又天下の法によつて、宗旨はもてども心服せず。古は宋朝の理學のごときもなかりし故に、歴々聰明の人々も、道を知べき様なし。楠正成武藏守泰時など、今の世に生れ給はゞ、必ず聖學を受用して賢人たるべし　問、無欲なるものは仏者の中にあり　儒者によき人なきは、儒者の聰明ともいひがたからむか　云、尤佛者に無欲なる者もあれども、心にまよひありて、愚なる所より出たる無欲なり。それも千人に一人なり。惣じて數多者の中には、すぐれてよきもあり。又すぐれてあしきもあり。仏者の中に少よきやうなるものあるかはりには、あしきといひては仏者ほどあしきものは又なき事也。俗人ならば一日も生てはをきがたき者多し。其上仏者の無欲といふに、こしらへやうと習とあり。金銀を坊主にとらすれども、仏にとてさし出せば、辭儀もせずとれども、取ともみえず無欲がほしてすてをけ共、後生のため仏にまいらするといへば、誰も手ざゝず取べきものなければ、取あつめて坊主にやるなり。貧なるものゝ、ひとへ着たるも、志とてぬぎてやれば、奇特とほめてとりぬ。かほどいた〳〵しき事はなけれ共、やるものとるもの、わきにてみる者、共に辨へなし。欲はあり共、儒者にかく手のよきおいはぎするものはあらじ。身に着たるものを仏に供養して、後世のためになるとは何事ぞや。西方十万億土の阿彌陀、南方普陀洛山の觀世音、東方淨瑠璃世界の藥師仏などへとゞきて、後世によき所へ生るゝ功徳になると云やうなる、理もなき愚なる事やあるべき。人のもののもらひてをわきにこしらへ置て、出家は法力にて世をわたるといふ、かしこき取やうなり。それを無欲とみる目はまよひの甚しきなり。富るものは人を

愛敬して、志のしるし禮の法を用て、財寶をおくるは仁なり。貧なるものは人にをくるに物を以てせず。年若く達者なれば手足の勞を用るなり。年老たるものは人を禮するにちからを以てせず、德あれば人にをくるに言をもつてす。かくのごく道明かに、理正しくてこそ聖賢の道ともいふべけれ。貧なる者の志にはちからの勞をはからで、ひとへ着たる物を剝取て、後世のためこて難儀さするやうなる不仁無道なる事やあるべき

一朋友問て云、或云、地獄極樂は有がまとか、なきがまとか。なきがまとならば、いらざる苦勞なれば、後世をねがふまじ。事むつかしきに善事をもなすまじ。たゞ心のまゝに惡をして、ゆめの世をゝくり侍らんと、我等この返答いたしかね侍り。なきといはゞ惡をすべし、又有こいはゞ、僞なり。虛言なりとも、有といひて惡をさせぬやまさり侍らん云、昔我等にかくのごく尋し人あり。返答には地獄はなきがまことなり、心やすく思はれよ。惡をなして其方の心にこゝろよくばせられよ。小惡こ思へども積れば大をなすものなり。後々は惡がくせに成て、何ともおもはず、これを惡人と云。惡と心こ化すればなり。水はうるほふ所にながれ、火はかはく所につくごく、善人の門には吉事あつまり、惡人の家には凶事あつまるものなり。後生までもなく、現在にして吉事喜悅安樂の心はきらひにて、凶事憂悲忿逆のこゝろがすきならば、是非に及ず。しかのみならず、善人の子孫はかならず福よくさかえたのしび、惡人の子孫はかならず仕合あしくおとろへくるしび、終には亡るものなり。子孫は誰も不便に思ふものなるに、其さかえて長くつゞく事はきらひにて、おとろへ亡る事がすきならば、人の心はなきものなり。人の心なきものには何をか語侍らん。やどへ歸てよく〳〵分別せられよ、といひければ、其もの赤面して默して退ぬ。數日あつて來り、大に恥て其罪

を謝しき

一朋友問て云、さやうに辨へよき人はありがたかるべし。地獄なしといひきかせて、悪をなさばいかゞ云、我等のたごくはなし、悪がしたくばせよといふは、人の善心をそだつる也。今時の仏者の後生をねがへと云は、善心を亡すなり。人々の心に天神一躰の神明あり、涅にすれ共緇まず、磨とも磷かず、天地にさきだち、天地にをくる。不義をにくみ悪を恥るは人心の靈なり。釋迦以前地獄の説なきときは、人に善人多く、國家天下よくおさまりたるは、其證據なり。地獄のなき事をしらせ、悪をなしてこゝろよくばせよ、といひたるとて、悪のなるものにてはなし。心の神明にはづる所あつて、安からざる故なり。犬畜生といはれては、一命をもはたす。いはんや悪人といはれて、悪をなすべきや、おもはざるの甚しきなり。なまじゐに教んよりは、教ざるはまされり。手をつけずしてをけば、人々天性の神明あらはれて恥の心あり。これ愚がいふ所の善心をそだつる也。又今時後生の事を云て、人の善心を亡すとは、仏者の善悪は、欲無欲を以ていひて、義ある事を不レ知西戎の教なれば也。無欲といへば、阿龐居士が財寶を海にすつるやうなる事なり。欲といへば一向にむさぼるなり。ともに義を不レ知、義なければ恥の心うすし。故に義なきの無欲をば、畜生無欲といひ、義なきの律儀をば、畜生りちぎと云。これは仏者にしては上根の人なり。下根の人と云は、凡夫は欲悪のはずなり。戒をたもち、善行をなすは、仏菩薩の上なり。たゞ欲悪ながらたすけ給へ、妙法蓮華經、むかへ給へ、阿彌陀佛と云時は、欲悪を安むじて、恥の心なし。善心を亡すにあらずや。是故によく後生を願ふ者ほど、悪心無道なり。涅にすれども緇まざるの神明も、仏說によつて地獄に落ると、歎かしきといふもあまり有。是をなん彼ちご

くにおつるともいはゞいふべき。七竅鑿て渾沌死する成べし。昔文盲なる男の、六十計にて煩けるが、すでに死なんとせしとき、其子告て云、何れの上人和尚成とも、御のぞみ次第に請じ申べし、臨終のすゝめをうけ給へと。かたはらに儒學少したる人あり。病人これを招きて云、釋迦よりこのかたは幾年ぞ。儒者云、三千年にたらず。病人云、それより以前の聖代神代はいかほどぞや。儒者云、それは一万年二万年と云數もしらず久しきとなり。病人云、しからば其久しき神代の人のなみ〳〵にといひて終き

一心友問て曰、東坡は經傳によく達して、義を取とよかりし故に、程子朱子も其語をとり給へり。しかるに仏に落入、男色にまよひなどせし事はいかゞ　答て云、仁者は必勇あり、勇者はかならずしも仁あらずといへり。されば文才と心法とも、又兼るとかねざるとあり。心法明なるものは、文理もをのづから通ぜり。文才あるものは、かならずしも心法よきにあらず。東坡は文才に秀たるものなるゆへに、文の力にて經義にも通ぜしなり。しかれども實は我慢にして、人欲のさかむなる者なりき。この故に其身の心法にをひては、心と口とたがへり。又仏に入し事は、かならずしも心からまどひたるとにはあらじ。心根邪佞なるものにて、男色等の邪欲さかむなりしかば、聖賢の門に居ながら、無作法はなりがたきとなり。仏者にして邪知邪欲なるは、世の常なり。其上歌も舞ものりの聲にて、悟りだにすれば何事をしてもくるしからずと云事なれば、無作法をするには一段とたよりよし。こゝを以てたよりたる成べし。佛法は本愚なる法にて、愚人のみを敎しに、東坡ごとき者どもが、世々におち入て、聖賢の性理文章を以てかざりたる故に、高上なる道の樣に成たり　問、佛は其ごとく悪を以て本としたるものなるか　云、根本は善をすゝめ、悪をこらさむ

の教なるべけれども、よき渡世となりたれば、惡人多く其門に入て、惡常となりぬ。この故に仏者にしてあしきはとがむるものもさのみなきなり。聖門にしてあしきは、人のとがめつよく、其身もはづかしければ、仏に入なり。今時日本にても此たぐひ多し

一心友問て云、佛者は氣をとめて眞とす、眞理の主たる事を不ㇾ知と承れり。仏者こそかへりて天地陰陽の間にをひて、道を行ひ德をなせり。うたがひなき事あたはず　答て云、理に內外なく大小なし、天地陰陽則理なり。其ゆくとしてはなるべからざる理をしらで、氣のみとめ得たる故に、陰陽超出の見も有。むかし我友禪者に問て云、座禪して得所ありや。禪者云、終日座してもうむことなし。また火事何ぞといひてはしり出ても、息あへがず、靜坐のときのごとし。我友云、これ氣なり。我むかしわかゝりし時、はや道の馬につきても、息あへがざりしに、今は少道をいそぎても、息ぐるし、老年の故なり。貴僧も年より給はゞ、今のやうにはあるまじ。少はしり給はゞ、息ぐるしからむ。眞理の功は、年よるほどねれてよきものなり。年よるほどおとろふるは氣なり。いかなる聖賢にても、仏菩薩なりとも、大傷寒煩ひては、うはこといはぬといふことはあらじ。瘧をわづらはゞ、ふるひの出ぬといふことはなし。たゞうはごとをひて俗とかはりあるべきのみなり。釋迦に傷寒大熱氣煩せたらば、衆生濟渡の方便のたはごといはるべし。孔子ならば道德のうはごとあるべきか。氣を主とするものは、此ときにあたつて、みな亂べし。理を主とする者は、其理を知てまどはず

一朋友問て云、三教に空海が書たる地獄の說は、我もまことゝ思ひて書たるか、人に教むがために書たるか　答て云、むか

し我友に今のごとく尊し者あり。答には、まこと、思ひて書たるなり。かれほど博學にて、僞と思へば坊主しては居ざるなり、とく還俗する道理なり。三教に儒を第一淺しとて端に書、道をそれよりましたりとて中に書、仏をすぐれたりとて奥に書たり。佛者の筆なれば、仏をばよきやうに書、二教は大方に書たれ共、其書たるまゝの文にても、道よりも儒は高く、仏よりも道は高し。まよひたるものの耳目には、仏をよしと思ふべきか。まよはぬものゝ心には、第一によしといへる仏教は、第一にあしく淺ましく、愚痴なる教なり。おろかなる道故、愚なる者はよしと思へり。仏者には心根の愚なる者ならではならぬ、と思ひたまへ　問、釋迦より其ごとくなるか、空海が淺學故か　答、釋迦よりなり。諸經をみるに、釋迦はかへりて空海が半分も學問はなし。文筆もつたなし

一明友問て云、釋迦の國は戎狄とて、けだもの半分の人ときく。虫鳥けだものは、生ながら變化して生れかはるがごとくなるものあり。天竺の人は、人の形あれども、人の心全からず。故に生かはるごとくなる事もあるらむ。しかれば釋迦の國にては、輪廻の見もあるべきか。人心正しき中國日本に來て、畜類の境界をうつしいふこそくらき事なれ。仏者は氣をとめて理をしらずといふも、人倫にあらざる故なり。元本に無明法性ありといふも、陰氣のもとを無明といひ、陽氣の元を法性とみたるなり　答て云、しからむ。天地の造化に輪廻と云事なければ、畜類とても輪廻せず。しかれども邊土のものは、氣質偏僻(ヘンヘキ)にして、神理の照全からず。この故に愚痴に欲ふかし。すぐれたるものは全く理を失て、畜類にひとし。禽獸はひとむきにて、あさきものなるに、人の知識にして禽域に至れば、欲心の思ひ入もふかし。其沈魂滯魄(チンコンタイハク)化して、欲ふかきものは畜類と成、我慢(ガマン)なるものは、天狗と成、櫻のたねはさくらとなる物なるに、や

どり木とて、異形の物生ずるがごとし。根本の理にはあらね共、今日の變なり。南蠻・西戎・北狄は人の形あるのみにして、けだものなる所多し。けだもの〻境界は、人道にまじゆべからず　問、日本も邊土ならずや　云、日本は邊土なれども、大陽の出給ふ國にして、人の氣質尤靈なり。天竺のやうに、輪廻の變をなすものはなし。靈なる故に欲もうすく、仁にも有が故なり　問、むかし物語にも、日本にて輪廻妄執体の者ありし事はいかゞ　云、天竺の下國にも、釋迦・文殊・達磨ごときの靈なる人有。日本にても、万々人に一人は、天竺人に似たる者もあり。然れ共あさの中のよもぎたれば、其儘をきては輪廻体までには至らず。仏說のまよひをそふる故に、初て流魂滯魄の變も有　問、東夷は大陽の出給ふ國なる故に、人の氣質靈なり、と仰うけ給はれども、日本さては、三韓、琉球などこそよけれ。ゑぞ人などは天竺人にもおこりたると見え侍り　云、東にも西にも精粗あり、日本三韓は東夷の精國なり。ゑぞは北狄につゞきたる國なれば、東に至りて日本に近しといへども、北狄なり。西戎のあしき中にも又精有べし。日本三韓には及ばずとも、戎の精は、ゑぞ人にはまさるべし。近年まで往來せし商人の物語は下國なり

一朋友問、大和西銘に生て明かなるものは死して安の言葉、仏法の現世後生に似たると云もの侍り　云、佛法のまどひのこりあるによつてうたがひあり。仏法わたらざる以前の古人の語に、天道我を勞するに生を以し、我を安ずるに死を以すといへり。死生は晝夜の道なり。晝は種々の所作をつとめてほねをおり、夜は寢て休む道理なる故にいひたるなり。堯舜の民は、死生をみると晝夜のごとし。何のうたがひもなかりしなり。人倫に明かにして異端のまよひなき故なり。堯舜の民は皆善人にして、惡人なかりしなり。善人にしてまよひなきものには、後生のいつはりをいひ

て、たぶらかさんやうもなし。鬼神の罰利生を以おどすべき様もなし、堯舜の御代に、釋迦を出したらば、一人の氣ちがひものとなるべし。をしへて其狂病をいやすべきのみなり。道を見るものは生死を以て心を二にせず、人の身の心の中に生れ出たるは、魚の水中に生じたるがごとし。魚の出來たるために水まさず。魚の死するが故に水減ぜず。死生共に水は常の水なり。其ごとく、此身の生死ともに心は常の心なり。春夏秋冬則我心なり。心の中に此身の生出たるは、大虚の青天にうき雲の一むら出たるがごとし。死するは其雲のきゆるがごとし。身死すれば此形に付たる情欲の心はなくなる也。氣は今も天地とひとつなり。天にかへるまでもなく、今よりひとつなり。形は今も地上にあり、死すれば土中にうづみて、土とひとつになる道理なり。氣はたとへば水のごとく、身はたとへば舟のごとし。氣の有故に身もうきてありくなり。死は氣と形とはなるゝなり。はなれては地にたをるゝとはりなり。水つきては舟すはるがごとし。氣のあつまりて、人の形をなしたる所には數あるなり。數のつくる所死と成なり。晝一日うごきはたらけば、動の數きはまりて寢たくなると同じ。數より前にも鼻口をふさぎて息をつむれば、死するは氣とはなるゝ故なり。何の別事もなきに、釋迦といふいたづら者が、いろ／＼の僞をいひて、多くの人をまどはせたるものなり。此まよひあるによりて、生て明かになきものは、死する時にもまどひて、心安くは得死せざるほどに、生て明かなるものは、死して安しといひたるなり。生死を晝夜と同じく見て、何心なく死するとなり

一心友問、宋儒の說の高き事、大學に過て、實なきもの、其高きといふ所は何ぞや　答て云、たゞ言語の妙にして、見解の高上なるがごとし。然ども心の位はかへりてひくし。言語の高して心のひきゝは、過て實なきなり。心のひきゝと云

は、まよひあるなり。悟道のよき仏者と云も、たゞ凡俗の利欲と、方便のまよひとをぬけ出たるのみなり　問、利欲なくまよひなくば悟にあらずや　云、其さとりと思ふもの、則まよひなる事を不知。釋迦よりして、まよへり。まよはでは一日も出家しては居ざるとなり。造化の神理をしらで、輪廻と見たり。是故に元本に無明法性を立、生れかはるの見より出て須彌山をたて、三千大千世界を作れり。仏者の仏知とし、悟道とする所は、まよひの根より出たり。根本の神理を見そこなひ、異を立るほどなるまよひやあるべき。まよひの心ほどひきゝ心や有べき。一旦まげて造化を輪廻とせば、聖人の言みな非なり。造化に輪廻なきが故に仏氏の言みな非なり

一問、仏者に儒學ひろくして、易學をきはめ、暦律等までしるもの多し　云、根本のくみたてを仏家にてすれば、心のそこにこりかたまりてある故に、儒學するといへ共、餘事として心にいらず。心を置所と學所と、二つに成てあり。一日も眞實に仏道を行じて、出家するものは、後生輪廻のなき事を有と思ひ、又生をうけじの願ひなり。形あるものは一度はなし、草木國土悉皆成仏道なり。是故曰、仏は無の稱なり

一心友問、仁と慈悲とちがひたる事とは思ひ侍りながら、仁といひては人合點しがたき故に、慈悲と申侍り　云、仁を慈悲といひて、合點させんよりは、一向に合點させぬぞよき。仏氏の慈悲といふは、乞食に物をとらせなどする事、人をあはれむ事をこしらへて慈悲とす。これを以菩薩の修行となす。それ仁は天地の物を生育し給ふ根本の生理なり。人に有ては心の徳たり。無欲無我にして、万物を以一躰とす。其物をあはれみ、施しすくふとは、無心自然の用なり、こしらへてするとなし。天竺の者は、禽獸に近し、是故に義理の性明かならず。性理の仁をしらず。婦人姑息の愛あ

るのみなり。中國の人、大道をとり失ひたる最中なれば、自然と仁德は固有しながら、我も不レ知。長生不死の仙家の説にまよひしより、すぐに仏説にまよひて、仁と慈悲とをだに同じやうに覺えたるなり。日本にては其あやまりを受たるなり。しかれども日本は大陽の出給ふ國にて、神人靈なれば、仁德の心に明かなる事、中國に同じ。いまだ敎さとする人なかりしかば、みがゝざる玉の石にまがへるがごとし　問、しからば聖人の無欲と、仏氏の無欲も又ちがひありや。答云、大にたがへり。仏氏は其日暮しに物を蓄ず、をしまざるを無欲として、無欲を事にこしらへたるものなり。又これ理をしらで氣のみをとれり。馬の大豆がゆをくらひて、腹にみつれば口にくはへてこぼすがごとくなる事を以て、人の無欲とせんや。人道の無欲は大に異なり。たゞ義ある事を知て、利をしらず。公義にしたがつて、私心なきを無欲とす。とるべき義あればとり、あたふべき義あればあたふ。蓄べき義あればたくはへ、施すべき義あればほどこす。只心の義にしたがふを無欲とし、利によるを欲とす。とるととらざるとの上に、無欲と欲とをたてず。事の上に立るときは、無欲を作て身に利あるときは、無欲者と成事は、無欲に似たれども、心は利によるなり。それよりよきは名によつて無欲を嗜み、或はかくのごとく修行して、後生に成仏すと思ふもあり。或は無欲を作て、一生のすぎはひとする者もあり。眞の無欲はかならず儉遜なり。かならず仁愛なり

一朋友問、今時すぐれて後生を願ふ者の中には、心根あしく惡人なるもの多は、いかなるいはれにて侍るや　答云、此論有。坊主のすゝめのあしきゆへなり、と云者あり。ある婦人これを聞て云、愚痴なる故なり、と此義あたれり。後生をすぐれて願ふは、心の愚痴なる故なり。くらき所より心根もあしく、惡人ともなるなり

一僧に向て云、世中の出家の言に、慈悲善行ありても、仏縁をむすばざれば成仏するとなし、といへり。僧は何と心得られたるや　僧云、勸學院のすゞめは蒙求をさへづる、といへり。是縁なり。勸學にすまでは、さへづるべきやうもなし。佛をねがはでは、成仏すべきやうなし　云、仏に成ものはこゝろならずや。自力なき者に、縁を外よりあたふるとも、何者か成仏すべきや。悪心悪行ながら、後生を願ふとは何事ぞや　僧云、他力なくしてかなひがたし。仏を願はんと思ふ心のおこるは又自力なり　云、釋迦のあらら仙人につかへられしは、道を求るの自力によりて、他力をたのみたる也。文殊等の諸弟子は、釋迦の教の他力によつて、自力の發心あり。今仏者も慈悲無欲を教て、其本心をひらき、仏道をねがはしめば、他力ともいふべきか。今の仏縁の他力は、本心を亡じて悪心のたねをうへ、かたなきに我執あらせて、仏縁をむすびたるとはいへり。苗をぬきすてゝ、莠(エノコグサ)をうふるがごとし。仏者のいへるはよきもなし、我道にも似たる事あり。朱學に入者、王學に志す者、俗學となる者、各生付の風あり。これをもいはゞ、縁をむすぶとも、えんの衆生ともいふべきか。朱學の者は、朱學に入者ならでは、道徳を學ぶ者にあらずと思へり。王學の者は、王學に志す者ならでは、好人にあらずとおもへり。大道には何の生付かあらん、何の風のちかき者と、えんある者とあらんや。三皇五帝、三王の御代には、此かたよれる縁のものなし。世の大道なきによつてある質なり、人いへるとあり。我慢かたぎの者は禪に入、情こはき者は日蓮宗に入、愚痴なる者は一向宗となり、禍福に心あり、みこ〳〵しき者は、天台眞言となると。何にても時の人の生付、かたぎに近きをしへだにあれば、そのたくひのもの、むらがれこぞれり。我と愚との二にて、尊信する所の道には、邪正の辨へなし　僧云、仏法をしらで、たゞに儒道の理を以いひては、

仏縁をむすばでは、とかく仏になる事はあるべからず　云、其方は佛を至極と思ふゆへに、仏に成たく思へり。我は仏に成たくもなし、縁をむすびたくもなきなり。哥に云、あたら身を仏になして何かせんたゞそのまゝの一二三四五

僧云、それは地水火風の假合のかりをとめ得て常とおもふなり。甚まよひならずや。哥に云、引よせてむすべば柴の庵にてとくれば本の野原たりけり。云、大本を不ㇾ知して末にまよふ故に、かりの名あり。我其哥の返しせん。引よせてむすぶ庵の柴なればとかねど本は野原なりけり。一二三四五則空、則中なり。仏は無の稱なり。ある和尚の、をいの死たる時よめる哥に、なげくまじなきこそ本のすがたなれとは思へどもぬるゝ袖かな。不仁の者、佛縁をむすんでよく仏となる時は靈なし、仁愛ある者、一旦仏學にまよひて成佛すれども、天性の德ほろびずして靈有。靈あらば仏も神に成かへりたるなり。神と成ても仁慈の德なきものは靈なし、靈なければ仏なり。吾もと虚靈不昧なり。うたゝ身を何の用にか仏にせんや。万物は本無より生ず、形あるものはまた無に歸す。いはねども空は常住なり。有はかりなり。いらぬ所へ空の名をとり出すによりて、空の形になづめり。されば又眞空の異名をいひ、中道の名をかる。凡夫は名利色にまよひ、學者は色空中にまよふ。無病の人にくすりをあたへて、煩をなす事なかれ

集義外書巻四

集義外書　巻五

脱論二

一朋友問て云、黄金白銀は乾坤の至精なりと申侍れば、多ほり出して、異國へ渡し侍る事はいかゞと申人あり。又有を以て無にかゆるは常の理なり。人道は、文章ある事なれば、唐のおり物を來して、衣服の美をなすとも禮なり、と申人あり。いづれか是にて侍らん　答て云、日本の四海にすぐれたるといふ事は、國土靈にして、人心通明なるゆへなり。近世は、國土の靈もうすく、人もおとりゆく事は、山澤の至精をたくはへかくさずして、金銀銅鐵多ほり出し、異國へまで渡し、山あれ川淺く成たるゆへにてもあらんか。又有無をかふるといへる事は、かへずして不レ叶物なり。華種などのたぐひなるべし。糸類の物は、唐物を來たさずとも、政道のありやうにて、日本の中にて事たるべし。昔から物すくなく、日本のきぬのみ用たる時は、かへりて人道も風流に侍りき。近代から物多きて、けつかうなれども、人道いやしくなり侍り。人も才知のあらはれ過たるよりは、内にたくはへて徳を養ひ、時に用るこそよく侍れば、金銀も世中に多すぎたるよりは、國土の精と成て、山中にふくみたるやよく侍らん

一朋友問て云、拙者と今一人、兩人むかしより家の老にて侍り。同役には家中の者よくなづき侍り。家中のおもひつくは、主人への奉公と思ひて、切々ふるまひ音信、心入も致侍れど、うはむきばかりにて、とかく親みうすく侍り。何事

八四

そのときも、獨身のやうなる者なれば、其職分を失ふべきや、となげかしく侍り。何として人の親み出來侍ぬべきや

答て云、御同役の人、天質寛裕溫柔にして、又人親と成べき器量あり。御家中を引廻し給ふは幸なり。國用軍用共にうちまかせてはからはせ給ふべし。大勢のなづかぬを、親まむこ勞し給はんよりは、御同役一人を親みたまふべし。自然の時も、貴殿は一人の武勇をたしなみ、家人をよくとゝのへて、御同役を助たまふべし。無事のときは一人我身をよくし、外に用る財用を内に用ひ給はゞ、家人多してゆたかなるべし。心やすき事に侍らずや。御同役の人は、貴殿の名代をし給へば、その厚恩忘れ給ふべからず。一日のすけ番をたのみてだに、報禮ある事なり。いはむや終身のたすけなるをや。貴殿主君の忠をゑぼうしに著て、御同役に、人の思ひ付をそねみ、我にしたがはん事を欲して、つとめ給なるべし。其爭のをとなしからぬ凡心には、諸士の親み有べからず。貴殿書をよみ給ふは何のためぞや。許由は天下をだに辭して、帝堯を代官とし、天下を平治せしめて、山水田舍の間にたのしめり。いはむや一國一郡の勞を人にゆづりて、みづからたのしむ道をしらでは、いつの時にか凡情をまぬがれ給はん。夫禮儀のせむる所か、人の志にこたへ、親みにまじはるどきの不レ得レ已の振舞、音信等はし給ふべき事なり。さもなきに心を起してなす事は、無用のついへ多かるべし。主君への奉公に成べからず。家人百姓等に、めぐみ給はゞ忠ならん。閑來無事のとき、よく氣をしづめ心をすまして、凡情のまじはりを察し給はゞ、例のゑぼうしぬげて、獨笑あらん。此とき初て君子の心地を覺給ふべし

一故者の無實の流言によりて、喪する者あり。親類知音これをいきどをり、共に喪して、此讒人をうつたえんといへり。

これを聞て告て云、一人喪するだに禍なるに、親類知音又喪せんといふは、禍をかさぬるなり。今讒人は、貴方だちのあだとし思はん事を恐れん。貴方達、讒人をうつたへて利を得ば、喪せんか。然らば讒人却て貴方達をあだとせん。これ又禍の種をまくなり。罪なくして喪せば默するにはしかず。大弁は弁ぜずといへり。訥は不ㇾ言してしらるべし。且喪者は年わかし、年來仕にいとまなくして、無藝なる事憂とす。今幸に天より文武のいとまをあたへたり。此時文學武藝に達べし。親類知音の子弟までも、喪者によりて學びば、幸甚ならずや。讒人はあだにはあらで福神也恩を以て報謝すとも可なり。何ぞあだとしうつたへんや　君子陰中に陽をみる事、常にかくのごとく　禍を變じて福とするものなり。其上貧賤憂戚は天道攸好徳の慈命なり。寸陰ををしみ日を愛すべきの時なり。喪者つかへをなすべき時節に當りては、前の位祿にこゆべし。爭詔の事をなさば、十分に利を得とも、今の人情にあしかるべし。くじをせし者なりといはゞ、扶持し給ふ諸侯有べからず。一類中は年來の主君をすてゝ、徒黨を立し罪あらんか。一朝のいかりに其身を忘れ、憂を親に及すのまどひをなし給ふべからず

一心友問、剛毅木訥の質、いかゞして仁にちかきや。云、剛毅の人、道を學ぶときは、其勇力を用て物欲にひかれず、利害に屈せず。木訥の人、素朴遲鈍の生付にもとづく時は、外にはせずして、己が爲にす。故に仁に近し

一朋友問、我しれる町人に、學を好者有。見たる處より、町人の樣にもあらず、武士の躰のごとし。學力のなす所か　云、町人のやうになきことは、市井の利心なきといふ事か。武士の躰のごとしとは、貧困を助けすくひなどし、義理のたのもしき處有といふ事か　云、さにはあらず。刀をさし行儀よく、常に學者交りのみ好て、利害にかゝはらぬやうに見

え侍り　云、是實の學にあらず。町人にして問學せば、町人の風躰にて、よき町人と見えて、心ばかり衆に異なるべきこそよからめ。町人にて、風躰を武士に似せぬる事は、町人は人のいやしむる者なれば、人の下なる事をいとひて、分を過し品をこえて、人の上たらん事を願ふものなり。風は商に異なれども、心の勝心は小人よりも厚し。これをきとくとし學者とせば、人をひきいて相爭相勝の凶徳を教るなるべし。風躰は商に居て、商を行ひぬれ共、心は市井のそまりなく、義理のたのもしき所ありて、人を助すくふの仁心ありといはゞ、まことに奇特なるべし。昔人の物語せしは、長袖の家人に生付、欲すくなく實に近きものあり。問學して文才もあり、其身親の代より富有なり。しかれ共不義の富なる事を知て、あかはだかになり、ならはぬ鍬をとりて、野にたがへせり。かくてつゞくべきやうなければ、妻子のなげき耳にみち、心しほれたる折節、古主よりしゐてむかへたれば歸參しぬ。今は心ともに落入て、是非なき事と思へり。今時市井の中には、これほどなる人品もなし。おしき事なり。其舊友に、富るもの二三人あり。かほどの家人十人二十人は、幾家をも養ふべきものなるに、少のみつぎもせず。みる／＼難義をさせ、本の不義におとし入たり。此富人つねの商人なれば不レ及二是非一事なれ共、學者だてをして、天下の道學を任とすといへり。然るに餘いふがひなく、本意なきと也とかたりき　云、則たゞ今申たる富人の學者なり。少にても金銀を出して、人をたすくるなどゝある事は、する事とも思ひ侍らず　云、それが市井の常ならば、風躰も常にてよかるべし　云、いかにしても申所は道理よく侍り。また行儀も見事なる者なり　云、仁なく義なくして、行義よきは木仏なり。いふ所の道理にかなふ事は聖賢の書をよめば、書の道理なり

一學者問、鳳鳥は神聖の御代にあらはるゝといへり。然るに後世には、賢にだにも及ざる時代にも度々出たりといへり。世の學者講義を失ひて、禮をまたずして動故に、鳳も又德輝を見ずして下れるか云、これ眞の鳳にあらず。上たる人道をしらずして、たゞに虛名を求め、或は愚なるに、かくしづかなる事は、いにしへもあらじなどへつらひいへば、まことに天地に符瑞もあるかと望まるゝゆへに、又虛瑞をいへり。たとひ眞に鳳凰の形ある鳥出るとも、上の德神聖ならず、人倫明かならずば、鳳の妖怪成べし。鄕愿の君子にばけたるがごとし。これ妖物なれば、かへりて愼みあるべし。しかるに鳳を見たると云所の民には、役をゆるし、祿をたまへば、みだると云とのある理也

一問、符瑞いたれども、德うすしといひて、あへてうけ給はざりしはまことに賢なり。しからば周のなされる魚、杭に飛入たるを悅びよみして、燎給ひしは、いやしといへることはりなり。いかゞ云、諂て符瑞を告れども、みづからの德の薄きを省て、應ぜざるはまことに奇特なり。それ周の魚は自然の天應なり。王も無心にして、其天の賜をうけ給ふたり。後世の福を求るに汲々なるものゝ、さしもなき事をみても、悅とは天地隔別の心なり。虛名を好み福を祈るの心なければ、人のいはん所をはかりさぐるの意もなし。人をみるには德と功とを準的とす、ほめそしりによるべからず。この故に古人は人倫明かならず、政刑道なき世に、豐年のあるをば、却てあやしき事として、書置り。しかれば政みちなき世には、天災地天たえず。五穀かはるがはる熟せず。まことの豐年といふ事はなかるべし。近世の仏氏は、是より甚しきものあり。世の中のよからず、災害のあるをば、末代濁世の常とゆるし、國君世主の恥とも戒ともせず。かくのごときものと思はせ奉りぬ。儒者のたまたま直言するものあれば、そしると名付て、いひをとし、小人に惡人のゆるしを

出すのみならず、君子にも無道のゆるしを出すものなり。古の賢君は、時の運によつて、水旱のうれひあるをも、自己不德の罪なりとしてなげき給へり。大君は天地の萬物を生育し給ふこゝろを用ひて、王となり、上といはれ給へり。國主は主上の德により、山川のよく雲雨を起す功用にたがはずして、諸侯となり給へり。故に豐年しきりにいたりて、災害生せず、禍亂をこらず。是を天地人三才一貫といふ。聖人の禘の祭の義を知ものゝ、天下を治ること、其掌を指がごとしとのたまひしも、こゝにあり。天地日月星も、堯舜のときの天地三光なり。春秋も堯舜の代の春秋なり。万物皆かはらず、人の形ちも同じ、何ぞ心ひとつかはるべきや。おもはざるの甚しきなり

一心友道の行はれんことを願ふものあり。告て云、吾子馬を失はむか。睽の初九ニ喪レ馬勿レ逐自復。見ニ惡人ニ无レ咎と。それそむひて道行はれざる時、下位に居る者身に道學有ても、世に學を起し、道を行はんと欲する時は、遠く往むとする者の、馬を失ふがごとし。願て獨其身をよくすることは、害ある所なし。遠く往むこと欲するの思をやむることは、馬を逐求ざれども、馬自かへりたるがごとし。此時に當ては、惡人といふとも避べからず。形同して心異なるべきのみ。小人を見しらずして、心を合することは、終に必そむくものなり。初より異ならば、何ぞ睽べきや。道を學ぶものは、心寬弘なるべし。我より人をさけば、人何ぞ睽かざるべき。人は人と交るべし、小人といふこともさくべからず。䷥は火はのぼり、水はくだる。其志不レ同。しかれども体を合て一卦となる。二女同居して其志不レ同といへり。是君子と小人と、其志異にして、同く世に住の象なり。又今のこと道行はれず、學者と世間とそむけることは、世間の罪にあらず。世に道學の名あらはれ、道を學ぶと云人あれども、世にをひて益ある事をきかず、かへりて害ある事

多し。道學いよ／＼世にうとまるべし。道の行るべからざる勢なるべし。害をなすものは心のまゝに動て、害をこのむべきものは、其害をなすものゝ罪をかうぶりて、動ことあたはず。世人其本を不知、これも又命也。世人の罪にあらず。道學の名あらはれて、世に大に助あること一あり。むかしのまゝならばあやうかるべし。然共此義古人の口より出すべからず。是又人情を知所なり　問、これ人しらずして世に功あるは陰徳なり。此陽報は後世かならず道行るべきか　云、徳と害とはいづれか多少ならん、此後の事知べからず　問、終に見もせぬ人の、賢知の人をにくみ、そむくは何ぞや　云、是人情のかく成行勢あり、賢知の聞えある人をにくむものは、愚にあらず、必才知あり。勇強にして爭心あるゆへに、己にしたがふものを好し、まされるをにくむ心あり。睽の上九に云、睽孤ナリ。見ㇾ豕ノ負ㇾ塗ヲ載ㇾ鬼ヲ一車ニ。先ニ張ㇾ之弧ヲ。後ニ説ㇾ之弧ヲ。非ㇾ寇ニ婚媾ス。往テ遇ㇾ雨ニ則吉ナリ。上九は睽のときに當て、上に立り、強剛にしてみづからよしとす。賢知の助なきは、そむひてひとりなり。我知に自滿して、賢に降らざるのみならず、才徳の聞えあるものあれば、己をそしるとし、志たがふとのみ思ひて、忌悪むこと、豕のけがらはしきが、しかも泥を身に蒙りたるをみるごとく、阻で嫌へるなり。上に立人賢知をにくむとしるときは、小人是に力を得て、種々の虚説を云、讒をいるゝものなり。鬼を一車に載るとは、無きことを有とするなり。悪む心よりは、人の無ことを云をもあることゝ思へり。然共本善人にして正しき人なれば、實の敵にもあらず、にくむべき事もなし。先には弓を張て射むとするまで怒しかども、後には弓を弛してやはらぐ也。陰陽交て和するときは雨となる。婚媾の理なり。物極れば必ず變ずるは常の理なり。そむくこと極れば反て和する時有。君子たる人、一旦の災難によらずして、正理を守て時を待べしとなり。又悪

まるゝ人、必しも君子にあらず。にくむ人かならずしも小人にあらざれども、情のそむく所より、はなれゆきて、そむくものゝ所には、そむくものゝ言聚るものなり。虚説造言ともに、なきことを以てあるとゝいへり。鬼は形なければ車にのすべからず。しかるをのすると云がごとし。虚說讒言のまことしきをも、むかしの事、よその事などにはまどはざる人も、身の上になりては弁へがたきものなり。孔門の曾子は大賢なり、國中に同名の者有て、人をころせり。名の同じきがゆへに、あやまりて曾參人を殺せりと告るものあり。賢子曾參の母、杼を織けるが、少も不ㇾ驚して、はたををる事常のごとし。又來て告る人あれども信ぜず。又來て告る者あり。其時母杼をなげ捨て走れり。夫曾子の賢と、其母の信とを以てだに、三たびに及ぶときはかくのごとし。聖賢の知にあらざれば、讒を信ぜずと云となし。しかる故に聖賢は讒の入べき事を恐れて、讒者を近付給はず。凡人は吾知に自慢して、讒などは聞いれじ。何事をも廣く聞たるがよきなどゝいひて、讒者を近付ぬれば、終に善惡をあやまりて、後世のそしりをいだせり。いはんやそむくところにそむくとのあつまるをや

一朋友問、仏者には修行の功つみて、理に達し行跡よく、殊勝成者あり。儒者に好人なきとは何ぞや　云、しかり。其本をたづぬるにこの勢ひあり。しかれ共今貴殿のいへるは、億兆の仏者の中より、五人七人えり出たるものと、百人にもたらざる儒者の中にて、あしき者とをくらべたる也。佛者千人の中、九百九十人餘はあしく、五六人も無事なる凡僧あれば、これを出家らしきといへり。凡僧ならぬといへるは、五千人の中に一人、壹万人の中に二三人なるべし。故に仏者もいへり、坊主のかくあしきこそことはりなれ。子多持たる者、何にもならざる子をば、坊主にせむといへり。

みづからおもひ立ものも、成佛得脱の志にて出家するものは、万億の中に一人もまれなり。武士にはなりがたく、農工商とも成がたければ、せんかたなくして後世の爲に出家せり。まれによき坊主のあるは、子の生付あしからねども、かたづくべきやうなきゆへに、坊主の弟子にする有。これも我とおもひよらざる事なれば、つとめはよからずといへり。近代の儒者も又かくのごとし。おほくは市井の中より、渡世のために儒學したるもの也。武士の中より出たる者ありといへども、器量なき子をば醫者になりともせんとて、儒書をよませなどし、或は醫者の子の文才あるもの也。醫者出家ともに、出生は大かた筋いやしきものなり。いやしからぬは人あしくよき人はまれなり。故に仏者儒者なりたちはかはらざれども、出家は多き中なるによりて、まれに能ものあり。儒者はすくなければ、まれにも能ものありがたし。人みな何事もあてゝする事あれば、つとめ易しといへり。仏者に修行殊勝なる者ある事は、往生極樂の願あり。出離生死の志あるゆへなり。町人は大方やはらか過て、戰場をばをそるれども、唐天竺へわたり、其外海陸の難をしのぎ、あやうき所を往來することは、武士の及ばざる勇あり。かしこに行て利あることをしればなり。一時西方極樂、南方無垢淨土等の虚をわきまへ、天地の理に輪廻なき事をさとらば、何によりてか殊勝の修行あるべきや。又一種の仏者有、實は名を求め、利を好むといへ共、無欲清淨を作りて、人に信ぜらるゝあり。無欲の眞似に利ある事をしれば也。億万の中に、能僧十人あらば、五人は作り者なるべし。其眞實道心の者は、釋迦達磨より初て、根本にまよひある故なり。大半の身すぎの出家と、渡世の儒者とをくらべば、いづれ勝劣はあるべからず。就中仏者の大欲心、亂行の者をとり出せば、世間の凡人にもまれなる悪人多し。儒者ならば刑罰にもあたるべし。出家ゆへにのがる

ゝものあり。しかれば惡はまさるとやいはん。聖學の徒は、儒者と名のらざるたゞ人の中にあり。人道の常なれば、別に作りて世人の耳目をおどろかすべき事なし。歳寒して松柏を知、世亂て忠臣を知なれば、大變にあひなば、其德あらはるべし。聖人の學は、平地のごとし。異端の學は、山のごとし。山高しといへども、平地には及べからず。山にして嶮岨を行ことは、目をおどろかし、平地にして大道を行ことは、人おどろく事なし。出家にしては器量あり、をしきといへるものを、げんぞくせさせては、かはらぬ平人なり。つき山にしては高きと思へるも、ならして平地とすれば、小村にもみたざるがごとし。こゝを以て君子の德の大なる事を知べし

一朋友問、歩行の人に逢て、馬乘物より度々おるれば、乘べき隙なし。をりざれば無禮なりといへり。しかれ共近比はをりざるもの多し。人なみにしたがひてくるしかるまじきか　云、心のたてやうにて苦勞ともなり、いさみとも成事多し。むつかしきと思ふゆへに苦勞なり。故に無禮もあり。人の善をするは、仁義禮智信より高きはなし。禮を行ふは善の大なるものなり。貴殿善を行ことをたのしびたまはゞ、千度をるゝ共苦勞なく、却ていさむ心あるべし。幸に武士なり、年盛なり、馬の乘をり、乘物の出入にも、身をかろくするは、心かげの一なり。人に禮を行ふのみならず、武士のたしなみ其中に有。四國の山内對馬守殿は諸侯なり。陪臣の馬よりをりてかしこまるには、乘物の内より手を出して過給か、近臣をつかはして、色代せしめても可なり。今の風俗にては無禮とせず。しかるに每度乘物よりをりて、誰殿めしいへとのたまへり。一度此禮に逢たるものは、對馬守殿とみれば、よぎ路して苦勞かけじと思へり。親父土佐守殿より古禮を失ひ給はぬ家傳なり。其外山内一家は、禮義正しといへり。備後三次の城主淺野因幡守殿

のたまへるは、一旦の幸にて諸侯となり、城主となるといへ共、五三代前は肩をならべたる武士なるに、馬よりおりてかしこまるはあまりなる事なりと。今はそれ程まで心の付人もまれ也。しかれどもよの常と成たれば、國主城主の無禮はさのみとがむる人もなし。たま〳〵むかしわすれぬ人あれば、めづらしきやうなり。陪臣を叱ものとて嫌いやしむる事は、東夷の微賤より出たる事ともいへり。尊氏の末の代にも、此事あり。其時分の物語に、諸士の尊氏家をうとむはじめにて、ほどなく亂世と成たるとなり。齊の桓公の臣、管仲が、天子に朝せし時、三公の次、上卿の位を以て禮を受たまへば、管仲辭して下卿の位につきたり、といへり。上代聖主賢君の御代にも、陪臣にはよはひせずとて、路次座列年がさにても、陪臣はかたしたがひ、次座につくを以て直臣陪臣の至極の禮とせり。今の禮は失禮なり。王者の天下の權を失ひ給ひしも、武家の代の長久ならざるも、諸士の心のはなるゝによれり

一心友問、學校の政は人の才德を生じ、民のまどひをとけ、人君位を不ㇾ失、士民風俗あつく、天下長久の備と承侍れども、我朝王代の學校の躰はしり侍らず。唐の法はあひがたかるべし。日本の國俗にかなふべき事はいかゞ　云、和漢古今共に實はかはりなし。國俗と時勢によりて、右を先へするか、左を先へするかのかはり有べし。今日本の國俗は、武を專にして、文を用ひ侍らず。しかれ共文なくては一日も立がたき道理あれば、常に文を用て、不ㇾ知のみ。今の人情を本として、學校を取立ば、右を先とし、武藝の上手を置て、十五以上の子は、弓馬兵法を專にし、日々に武藝に進み、しるしあらば諸士學校の益を知べし　問、何をか常に文にをると云や　云、正月元日よりはじめて、太刀折帋鳥目等を以て、君臣の禮を行ふは文なり。上下羽織はかまを着し、主客の禮義をなし、音信往來するも文なり。祭禮五

節句、朔望婚禮元服病をとひ死をとぶらふまでの事、文にあらずといふ事なし。幼少は八九歳より、十三四まで寺へあげて、手習うたひ文字よみせさする、尤文なり。寺へつかはすは、氣づかひなる事多しといへども、無筆無學にては、事とゝのほらざるゆへなり。いにしへ武道の盛なりし時は、文なきを恥と思へり。此故にむかしの武士には、能書文學の人多かりき。楠正成其子に遺書せしも、勤學の事を第一にいへり。後世武道おころへてより、却て文道をいひさみして、文盲を恥とせざる風俗となれり。類多く成て其非を常とせる也。學校によき師を置、目付役人有て、口論不作法なきやうに法を立、十五以下の子に手習・うたひ・しつけかたなどを教へ、十五以上は弓馬兵法を第一として、手習文字よみをも、其身の望次第にまじへならはしめ、其中道に志有人をば、別にひきわけて、四書五經を講習し、禮樂弓馬もとりわけ委しく稽古し、文武二道の士出來れば、今の國俗をも變ずる事あるべし　問、學校こそなけれども、國主城主、家中に武藝をならはしめむ事を願ひて、弓馬鎗太刀等の上手を扶持せらるれども、其益なきもの多きは何ぞや　云、其師の所へあつまりて、稽古する者の中に、人のあしきものあり。わかきものをひきそこなふ事あり。方能一心といへることはざにて、稽古せざるものにはなんなし、稽古するものは人口にかゝる事あり。父兄たるもの、是をいとひて、つかはさず。是武藝の師ありて、益すくなき一なり。學校にては奉行目付有、其上に外にて私の參會を禁ずれば、人がらよからざるものありても、人をそこなふ事あたはず。勝れて其術をこぐべきものをば、又學校にて別に會日をこなすべし。學校の品は、蕃山の學校の立やう、武家の情にかなへり。後世法をとるゝあるべきか

一心友問、夏后氏は五十にして貢すといへり。一夫五十畝を受く、五畝をかぞへて年貢にさゝげたる也。殷人は七十に

して助すといへり。始て井田の制あり。六百三十畝の地を畫して九區とする時は、一區七十畝なり。中を公田とす。其外八家各一區、七十畝を受たり。其力を備て、公田を助耕して、其私田に税せず。故にこれを助法といふ。周人はこれをかね用ゆ。百畝にして徹す。郷遂は貢法を用ひ、都鄙は助法を用ゆ。耕すときは八家力を同じく作り、おさむるときは、畝をはかりてわかつ。故にこれを徹と云。其實は皆什一なり。貢法は十分一を以常の數とす。助法徹法とは九一なりといへ共、廬舍を公田の中より取、商人は十四畝をとり、周人は二十畝をとる。故に商民は七畝を公納とし、周民は十畝を公納とす。或は井をなし、或は井をなさずといへども、什一には過ず。日本にては貢助徹の中、いづれか用らるべきや　云、王代はいふに及ばず、武家の代と成ても、貢法を用られたり。古の制の殘りたる所まれにあるを聞に、皆十一の貢には過ず。日本の土地には、井田の法は用がたし。中國にても、日本の土地の樣成所にては、皆貢法を用たり　問、今の制は四分六分なり。四分百姓とり、六分地頭とるといへり。今日本にて、十一の法を用ひば、大身小身ともに武士は一年も立がたく、却て亂の端と成べし。古とても日本には行はるべしともおもはれ侍らず

云、四分六分にして、六分年貢となり、四分百姓とると云は、上田の水を入れば田となり、水を落せば畠と成、麥作米よりも多出來て、田麥には年貢なき所の事也。中田は六分百姓取、四分年貢となる。下田は十にして二斗年貢となり、八斗百姓とらでは立がたきものなり。むかしは中田は一年地をやすめて作せしかば、上田の取實に及べり。下田は二年やすめて作すれば、上田の取實に及たり。故に中下は地を受ると多し。かくて十にして一を年貢にさゝげたり。不易の上田は、京の東寺邊の地のごとし。今の世の勢にて、十一の法はおもひもよらぬ事也。日本も今とむかしと

は大にかはりあり。むかしは農と兵と一にしてわかれず、軍役みな民間より出たり。武士みないまの地士といふものゝごとくなり。いまのごとく城下へ出て、屋形をならべ居とはなかりしなり。士と民とわかれずして、十が一を出したり。別に士を扶持する知行とてはいらざるなり。恭儉質素にして驕奢なければつひえなし。十一にしてみちたれり。今は士と民とわかれて、士を上より扶持するゆへに、知行といひ、扶持切米といひ、多いるなり。十一の事はさてをき、十が二三とりても不レ足。農に兵なきゆへに、民奴僕と成てとる事つよく、いやしく成たり。故に農兵の風たえて後は、一旦おさまるといへども、君も士も民もはなれ／＼に成て、はて／＼は惣づまりになりて、亂世となる事はやし

問、農兵はつよきものなりと承及侍り、常ゆたかに、戰陣つよくば、是ほどよき事は侍らじ。昔のごとく農兵にかへし度事なり。しかれ共今の武士たる者、同心仕間敷か　云、急には成まじき事也。道行はれ、學明かになりなば、自然には成事あるべし。人君たる人のためにもよく、諸士のためにもよき事あり。當分は民少し同心すまじきなり。しかれども民のためにもよき事なれば、一二郡も其法行はれ、民ゆたかに成たるを見ては、いづれも同心すべし。君子は業をはじめ統をたれて、繼べき事をすといへり。世をへて後むかしにかへり、貴賤上下共にゆたかに、治世久しき事はなすべし　問、代々賢君出たまはゞこそ、左樣にも成べくゆへ。一代の間に成功なき事は覺束なし　云、誠の心ありて、道時にかなへば、相繼て功をとぐる人出來もの也。學校の政だによければ、繼君は次第によき人あり、大夫士ともに、子孫はます／＼よく成ものなり　問、其法はいかゞ　云、日本の今の時所位あり、より所ありといへども、跡によるにあらず、時に當てはなすべし、かねていひがたし

集義外書卷五終

集義外書　巻六

脱論三

一心友問曰、世間の儒者の、君子の儒にあらざる事は命を聞ぬ。今時、心學者・格法者・朱學・王學・陸學などゝて、色々わかれていへり。何れが是にて侍るべきや　答曰、三皇五帝、三王の御代には、儒者といふ者なし。儒の名は初て周官に出たりといへども、後世の儒者と云者のごとき事にはあらず。周官にある所の儒といへども、士君子の重職にはあらず。郷里にをひて、道藝を教る者とあれば、小學にして六藝を教るの師儒なり。士君子といふは、今日本にていはゞ、武士の武道に達せる人の、生付仁愛無欲なるあらん、此人に禮樂文章あらば、古の士君子たるべし。秦の代より、天下亂世なる事久し。士君子皆武事にのみかゝりゐていとまなし。子孫はいよ〳〵無學に成行て、道をしらざれば、師儒の民間にをちこまりて、其子孫にもおしへ、まれにしたがひ問者に教へしなり。されば古の事をかつ〴〵傳へたるものは、此小官の儒のみなり。鳥なき里の蝙蝠とやらんにて、王侯卿大夫といへども、此儒に聖賢の事を尊學てより此かた、聖人の道を儒道といへるなり。日本の武國も、世治てしづかなれば、武士も武道に疎く成て、儒者に武道を指南せらるゝがごとし。戦國の時、古郷を離れ、職を失ひて、日本のわたり奉公人の様なる者多くなりぬ。兵亂やむで後、此わたり奉公人、日本の牢人のごとく成て、文學して遊説する者あり。官職祿位なければ、五等の人倫の外に居て、

儒者と名乘て、道學を以產業とせり。これ異端遊民の始なり。これを見て、道家の徒出來、佛氏の流渡り、相爭て道學を說て世をわたる遊民多くなりぬ。異端は仙佛の徒のみにあらず、儒者其本也。博文の儒者は、一向に一役にへり下り、國用を達するものなれば、遊民にあらず。異端にあらず。小人の儒なれども、古の師儒のごとし、心學者・格法者・朱學・王學・陸學など名乘ものは遊民也。異端なり。いかむとなれば、或は文學につたなくて、史儒の用をも達せず、文學あれども高慢にて、人にたかぶるを事とする者も有。或は云、儒者は道學を任として、何の役儀もなきものなりと。これ佛者の五倫を離れ、五等を出テ何の所作もなけれども、佛道をだに修行すれば、法力にて其日を送るといへるがごとし。堯舜を學ずして、湯武孔孟の天地の大變にあひ給ひたる其跡を常と心得そこなひたるか。湯武の後、湯武の行をならふ者は、皆謀叛人なり。孔孟の後、孔孟の行をあやまらん者は、皆異端に入べし。顏子閔子のつかへざりしは、貧なれども、日本の地士のごとくにて家業あり。孔聖は大德にして涅にすれども緇まざるの神人なり。小官をも辭せずして、人の家臣となり、文武をおさめて、國用にあづかり給ひき。道學を說を以、產業とし給へることなし。然ども四方より來て、禮樂を學び、門人といふ者多かりし。此風堯舜の御代にはなき事なり。司徒敎官ありしかども、門人ありし事をきかず。是上より命じ給へばなり。我と道を說て世をわたるの理なし。此實孔子にはなき事なれども、外の似たるが故に、後世のあやまりの端と成ぬ。夫孔子は天吏なり、春秋を作爲して、天子の事をだに記し給へり。古なき風なれども、時の變によつてをこなひ給へば、兎角いふべき樣なし。其本をしらで、末を見て、後生の者のあやまる事をなげく也。正心を離れて、道學あるべきや。心學と云は、かへりて眞ならじ。格法と云は、腦より付た

る名なるか。時所位の至善をしらで、たゞに聖賢の跡によるは、聖賢の能狂言をするがごとし。また後儒を師とするは、全きことにあらず。いづれをも助とはすべき也。　問、禮記に儒行あり、されば聖人の道を儒道といはむも、害あるまじきや　答云、禮記には後人の附會あり、全く取べからず。儒行の初に聖人の言と見えたるは、たゞ最初の三十六字也。それより下つかたの儒行は、多は後の人のつけましたるゝ。魯の哀公、孔子に向て、夫子のめしたる服は儒服か、と問給へば、孔子對て仰られけるは、丘が若き時魯にをれり、逢掖(ホウエキ)の衣を着たり。長じて宋にをれり、章甫の冠をかうぶりせり。丘これをきけり、君子の學は博し、其服は郷にしたがふ。丘は儒服をしらずとの給へり。是を以見れば、孔子の儒者にあらざる事明かなり。儒行の語もあしきにはあらず、たゞ聖人の語勢にあらざるなり。今禮儀の風のこりたるものは武士なり。武士に學問する人多からば、よき人あまた出來べし。武士たる者、文武二道をおさめて、みづからこりおこなはでは、道は床道具になる事なり。文武を身に有したる人を士君子とはいふ也。大樹・諸侯・大夫・士みな君子なるべき道理也。文武の二にわかるゝといふ事は、世に道のなき故なり。文道は天下國家を平治し、武道は亂を鎭め、賊を討、蛇蝎猛獸(ジャカツモウジウ)をしりぞけ、天下國家を警固するものなり。しかるに中古より、公家は文道の役者、武家は武道の役者とわかれり。根本公家武家と云名はあるべからざる事なれ共、兵亂久しくおこらざりし御代のほどに、道なくて奢りければ、上つかたの人々武事にをこたり、詩歌管絃の風流のみ事とし給ひしかば、事ある時はみづから征することかなはずして、地下の受領などの、國々にかよひて、田舍になれ野人に親しき者におほせて罰せらる、これより如ㇾ此者を武士と名付たり。武功によつて大身になれば、武士は武事のみ好めり。官位たかき人々は、武士

に守護せられて女のどし。それより文武二にわかれたり。武なき文はまとの文ならねば、文の文たる道理の學はなくて、たゞに哥をよみ、詩を作るを以、文道こ覺えたる者多し。文なき武はまとの武ならねば、ほこをやむるの義をしらで、いかつにひぢをはり、よはき者をせこむるを以武と覺たる者もあり　問、文官武官といふものはむかしよりあらずや　曰、今の武家にも又あり。御右筆・御勘定かたなごの類は、文官のごとし。御馬かた・御鑓奉行・御旗奉行・軍法者などいへるは、武官のごとし。役者と云ものはあれども、皆武士なり。古の文官武官もかくのごこし。二にするにはあらず、たゞ何とも名のつかぬ武士が、まとの武士なり。いかむとなれば役者と云ものは、其役だに達すれば、外の事はとゝのほらずしても苦しからず。是故に藝者に人がらよき者はまれ也。武家も武道は床道具に成て、また二に成行とあり。尊氏の末の、公家のごとくに成て、威のうつりたる所なり

一朋友問、小笠原のしつけかたに、軍法のあるはいかゞ　云、これ古風の跡なり。軍法は五禮の一なれば、禮官の家にあるなり。たゞ軍の次第、作法を記したるものなり。此故に軍禮こいふ。軍の次第作法を知て、其上に昔の名將の合戰の跡をきけば、軍の器ある大將は、其心に軍法の勝負の利しらるゝもの也。扨敵に向て、變化する事あり。義經正成是也

一心友問、孟子は遊說にあらずや　曰、世は次第に結構に成やすし、親の功の半分なくても、子の代には位も身上も、親よりよくなる者多し。前代の德の、後にあらはるゝ故にてもあり。聖德ありて無道の時に出、しかも下に生れて孔子のごとくなるは、天地ありてこのかた始なり。是故に世人無位の聖賢を尊ぶ事をしらず。巨孔子の德あつて、謙さか

むなれば、人の氣遣もなかりしなり。子思の時ははや孔子よりも敬ひあり、孟子はなを〳〵人の尊びふかし。これ孔子の徳功の子思孟子に至てあらはれたるなり。孟子はまづしきがためのつかへに、門のゐひかきをもち、ひやうし木うつやうなる事にてもつとめて、道の行はるゝ、不行のかまひなき奉公をしたく思ひ給ひけれども、名だかければ人をかず。しかればとて人のもてかしづく高位大祿をうけては、道の行はれざるは恥也。やむことを得ずして、諸侯の賓客と成て周流し給へり。後世の遊說の者と日を同してかたるべからず。しかれ共孟子は、孔子よりもなを以後世の口實とすべき跡あり。孔子は小官をも辭せずして事へ給へど五等を出給はず。孟子はまさしく官職なし。道學を說、道德を任じて、これを以人の馳走にあひたる所あり。後世の弊(ツイエ)これよりおこれり。しかれ共孔孟は天吏也。無道の時の下に出たる聖賢にて、天下の大變を行し人なり。今の人大道の常にそむきて、道を任ずと云、我身の不德をしらず、小人にして君子の器にのらんといへり。荷物をひたる人足の鞍置馬に乘がごとし。孟子はひきゝ役を望給へども叶はず。今の道者と云ものは、工商にをるべき人がらおぼえなるも、われとたかぶりぬるのみなり。みづから聖學の罪人と成て居ながら、仏をそしるはあやまれり。道學の床道具になりたるより、世人も亦これを察せず。緇うりの子にても、醫者と成て、小袖羽織着て出れば、法橋法眼となりて、乘物にのり、笠はり・せきだ屋の子にても、出家と成て、經をよみ談義をとけば、長老と成て高座にのぼるたぐひに覺えをる也。聖賢の道を任ずると云者を、其學文を除て、常の者にして、其人がらを見給へ。奉公人ならば、代官の手代などやうの事ならでは成まじき人から多し。扨は工商にしてにあひたるものなり。世俗にはだかにして見れば、ばけのあらはるゝといふこれなり。世にたぐひな

くすぐれたらん者は、筋にも身本にもよるまじきか。大方なみ〳〵のよきといふばかりにては、身本の俗性ほどなるもの也。醫者は人がらのよきほどの事はなけれども、醫術の上手次第なるものなれば、藝にめでゝも可なり。坊主は酒肉を不ㇾ食、不婬戒をたもち、よく迷ふて、其行をつとめぬれば、本より人外のものなれば、身本人がらのえらびなきなるべし。聖學をするは、人倫を本とす、人道は人がらこそ肝要也

一志ある人の代官役と成たるが問て云、今時は民間に誰有にもならずして、すたる費へ多し。代官たる者、慈悲正直にして、此費をやめば、所により免にして、一成も其上下も出米有べし。一成あらば五分は百姓にとらせて、五分は上へ免にして被二召上一、其内を以て、下代庄屋等に給米多く遣し私曲なき樣にするとも、いまだ餘米有べし。其餘米をもつては、國中いかやうのよき事も成侍らむ。いかゞ　答云、内々其通に聞及侍り。しかれども理屈と勢と、情とのわかちを得心し給はでは、假初にも國郡のまつりごとはならざるものにて侍り。貴殿の身上、唯今祿と人數と相叶はん、其上に一兩人かゝり人有べし。其入用を別に合力して給はれ。外にをらむといふとも、別にわくる有餘はあるまじ。ひとつにをらば、とかく養はれ侍らむ。理屈にていはゞ、とても入べきものなれば、外へ出したるも、内にてついやしたるも、同じ事の樣に聞え侍れども、事の情と勢とは、左樣にはならぬもの也。目に見えずして自然と出す事はなるべく侍れども、其半分にてもきわを立て、急度免に取給はゞ、民は痛と申べし。其上貴殿の慈悲正直の心入を以て、一代はよくもあるべきか。代官替りなば、其免の上りたる所ばかり立て、其外の事は世のなみにかへるべし。しからば貴殿の代官所は、亡所に成侍らむ。君子は人の惡を殘さぬものにて侍れば、後の煩なき樣に、万事分別あるべき事た

り　問、しからばいかゞし侍らむや　曰、傳聞貴殿の代官所も、他所も、一万石の領に、下代二人といへり。よく致者は一万石一人にてたやすくなるよしなり。あしくする者は、二人にても事ゆかず、よき者を選て、一人にして其給分をかさみ遣し、百姓前より私曲なき様にせらるべし。よき庄屋ある所は、庄屋代官にもせらるべし。居ながらなれば、庄屋は今の下代の給ほどにてもよかるべし。兎角在々へは、人の入こむほどあしく侍り。毛見といふと大にあしきことなり。出免に窮めらるべし。左様にして百姓ゆたかにをこらば、飢饉米と云ものを出させをき、軍國水旱の憂に備給ふべし。惣じて物は、あれば有次第につかふものにて侍ば、免を高く取て、上へ進し給ふとも、何の目にも見えずつかはれ侍べし。とりひろげたるははじめがたきものなり。奢は天のにくむ所なれば、打續不作などせば、其免の高く成たる故に、上にも一入迷惑なさるべし。米の高直に成て、一兩年ともあり。武士の勝手くつろぎたる後に、又本の如く下直になりぬれば、武士たる者皆々すり切て、難儀に及もの也。人道はいつも常なることそよく侍れ

一心友曰、司馬遷が、伯夷叔齊と、巢父許由とを同じ様に書たるは、道を不レ知なり。伯夷兄弟の海にのがれたるは、兄弟國をゆづり、且紂が惡政をさけたる下心なり。首陽にうへたる事は君臣の義を行てなり。たゞに山居隱逸を好たるにあらず。皆時の義ありたる事也。許由は時の義の見べきなし。たゞに世中をいとひ、山水を好み、清に過たるものなり。義なきの清は、君子の清にあらず。伯夷と日を同じく語べからず　答曰、是至論也。然共許由が心を知べからず。或は予が[illegible]祿をゆづりて、山水を好み、隱居せし事をなじり、君子の道にあらずといへり。予が曰、予をよく思ひ過ての語なり。予は天下の不肖人なり。しかれ共代々弓馬の家に生れて、武士のつとめは猶きけり。氣力ある間

は心のかぎりつとめき。少問學しておもへり、古は五等の人倫の外に、道志といふものなかりき、然れば今の世に生れて、己がために學ぶ者は、武士ならば武士のつとめをよくし、農工商は農工商のつとめをよくすべし。其所作をよくつとめて、奢なき者は、盜の品をまぬがるゝ也。天下國家の政敎に至ては、予が知所にあらず。幸に傳受の心法を得ば、過て君子となり、不ㇾ及とも武士の名を失ふべからずと。是故に氣力ある程は、其業に身を入たり。然に大病度々やみ出し、其上に山より落て、右の手足をうちぬれば、弓ひかれず。大河をもわたすべき樣なる强き馬もかゝゑられず。武士のつとめ、心のまゝならで後、身をかへり見れば、居ながら人を下知すべき、本よりの士大將にもあらず。きのふけふ品をこえて、あがりたる者なれば、みづから川の瀨ぶみもし、山谷にもすゝまでは、事ある時も役儀達すべからず。人に信ぜらるべき德はなし。國家の用をなすべき才はなし。たゞ無用の者とおぼゆ。農工商の業はなを以てなるべからず。病氣にして人と久敷かたりがたし、おもはずに無禮もあれば、たゞ山中の一木石と成べき人がらなり。身の不肖をよく知たる所のみ、世に益なくとも害あらじ。これ又人不ㇾ知の義也。許由も賢なれ共、國政にあづかるべき本才なきか、一人知所の故あつて、二度勅使を出さじがために一の狂をまうけたるか

一心友問、朱子は賢人か　曰、大儒といふものならん。又賢也。經傳の註にをきては、古今一人の名人也。古人の心に叶たると、叶はぬとはあれ共、先は初學の手をくだしよき樣に手ぢかく義理の聞ゆる註なり。此一色は後生の者大に恩を得たり　問、王子は賢人か　曰、文武ある士と云者ならむ、名大將也。又賢なり。孟子の良知良能の奥旨をひらき敎へ、自反愼獨の功におきて、後生の學者をして心を内に向はしむ、吾人德をかうぶる事淺からず。内にむかひ

たる心にて、經傳を見れば、語も理も本のものなれ共、各別なる所あり　問、二子の弊は何の所ぞ　曰、朱子は文にひろ過たるついえあり、學者理學に近して心法に遠し。書はたとへば雪中の兎の足跡也。兎は心なり。聖經賢傳は皆我心の註なり。兎を得て後足あとは用なし。心を得て後書は用なし。一貫一路に大やうにこゝろ所もあり。大意を見て心を得べし。日用の功夫にをきては、委しく見る事もあり。然共それは我受用の委きがためなり。たゞに書のみ委しく見るにはあらず。朱學はあまりに章句を分過て、文句の理に落て、心を失ふ事多し。今の朱學をするものは、日蓮宗などのかたむきに日蓮を信ずるやうに、是も非も朱子の語とさへいへばよしと思へり。是故に聖經は註のためにおほはれ、心法は經義の爲に隔てらる。朱學者のかへりて朱子を聖門の罪人とするなり。王子は仁にあやまち、約に過て、異學悟道の流に似たる事あり。學者いよ〳〵其ついえを大にするものあり、又王子の罪人なり　問、二子ともに賢なる所は何ぞや　曰、二子ともに天理を心とし、人欲を去、一人の罪なき者を殺して、天下を得ことをもせざるの義は一なり。これ二子の賢人といふべき所なり　問、貴老をも王子の學者と申者あり　曰、しからむ、我年たけて問學せんとす、文才なく文字なし。氣力盛なりし時は、不幸にして學あることを不レ知。無用の事に精神を勞し、病氣に成て後、二十二歲の時、初て四書の文字讀を習ぬ。集註に仍て四書を學びき。廿四の七月高嶋に行て、中江氏に逢て、うたがはしき事をとふ。歸て又九月に高嶋に行て、來年の四月まで居て、孝經・大學・中庸を學びき。それより後は、父たる者仕へを求めんがために、江戸に行ければ、東江州の人遠き城屋敷に母并に妹どものみありければ、京都にも西江州にも行ことかなはず。家きはめて貧にて、獨學する事五年なりき。しれる人、母弟妹のあるをしり、

饑饉の餓死に入なんことをあはれみて、つかへを求めしむ。其比中江氏、王子の書を見て、良知の旨をよみこば、予にも亦さとされき。これによりて大に心法の力を得たり。朝夕一所にをる傍輩にも、學問したることをしられず、書を見ずして心法をねること三年なり。本より親しき者一兩人粗知て尋しに、聖學あることを語ければ、又傳て志す者五六人に及べり。大に悦て披露せしかば、そしり出來、風波おこり、予をおひ失はむとする者あり。これによりて、主人其是非を格しきかれき。これ世に名をしらるゝの初、主人志の出來たるはしなりき。其時は良知の旨に專なりき。江西にて學びたる者は、なを以て良知の旨を披露せり。傳て志眞ならぬものは、珍敷ことゝ得たりと思ひて、十百倍して王子の學をふれながせり。世の人のきく所たがはず、かく世にとなへざる以前に、幾程もなくて、中江氏死去なりき。中江氏は生付て氣質に君子の風あり、德業を備へたる所ある人なりき。學は未熟にて、異學のついゑもありき。五年命のびたらましかば、學も至所に至べき所ありしなり。中江氏存生の時は、予を始として皆粗學の者どもなれば、ゆるさるべき者一人もなかりしに、中江氏の名によつて、江西の學者の、名の實に過たることゝ十百倍なれば、ついえもまた大なり。予が見にも、人の上にも、學流の異端にちかき所あるを見、註をしりぞけ、末書をすてゝ、聖經のみ見れば、朱子・王子共に聖經にをきて全からず、いづれをも助とはなすべし、堯舜を師としてあやまてるものはあるべからず。如レ此見とりて後は、關東へもゆかず、病者と成て人にもあはず、たゞ人の知所は、むかしのあやまりなり　學者問、儒佛の別はいづれの所ぞ　答曰、輪廻をいふと、いはざるとなり　問、事々に異多し　答、其事々の異皆此根本より出。もし造化輪廻ならば、仏氏の事皆是なり。こゝろみに汝儒者となれ、我仏となりていはん　問、佛氏寂滅爲樂、

万物滅し盡したる所を成仏こす、我儒生その理に異也　曰、執著を解がために、皆形共に滅す、万欲除去たる所の心を寂滅爲楽とす　問、是又後人の理を付たるならん。妻子を絶はまさしく子孫を絶を以て極意とす、天道を見れば善をなす者は子孫榮へ、悪をなす者は子孫亡。しからば悪をなして子孫を亡すを佛道の善とせずして、何ぞ慈悲善行をつとむるや。善行慈悲は方便か　曰、仏氏は大虚を出、天道何ぞいふにたらむ　問、しからば何ぞ悪をなさざるや、しばらくの方便か　曰、悪をなして子孫亡るは、寂滅に似たれども、其悪心輪廻して、他生を受、今は子孫を絶がごこくなれども、又々他生にをきて子孫あり。慈悲善行にして、子孫を絶者は出家也。すでに子孫を絶、又我こゝろ清浄にして、輪廻を離れぬ　問、しからば天地万物なきにはしかざらむか　曰、やぶりすてよ、本より一物なし　問、先生いかゞ見給ふ　曰、造化輪廻ならば、我又仏こ成べし。しかれ共輪廻の理なし。元本に無明なし。是以佛氏のと非なり。仏氏本來の面目をいへども、後來より見を立る故に、無明をいひ輪廻をいへり。夫十二万歳の後は、天地萬物皆無に歸す、何ぞ小數の内に苦勞するや。堯舜の御代には、邪魔かくるべき所なし。天下の無明輪廻一時に滅す。何ぞ門々をかぞへて、終に功なきことをせんや。あまつさへ仏氏の徒、天下の輪廻人こなり。無明者となり、悪業内外にふかくつめり。妄執のふかき者、出家にしくはなからん　問、仏者云、事理不二なり。心すでに輪廻あり、何ぞ地獄輪廻なからむやと　曰、はるゝ夜の星か河邊の螢かも我すむかたのあまのたく火か。汝が輪廻こ云所を、我は燐と思へり。心に愚あれば、身に不徇あり　問、自然に輪廻の体あるものはいかむ　曰、むかし死てよみがへる者、何事をもいはず。仏法以來いふ事あり、心まよふによつて生ず。目病て空中に花を見るがごとし。空中本花

なし、眼の病によりて生ず。昔田夫あり、夜中に大なるかはづをふみつぶしたり。氣味あしくおもひていねたれば、夜もすがらかはづ來てせめたり。夜明て後行て見れば、大なるなすびなりき。これを見て後かはづ來らず。思ふとをねどにいへるなり。本後生輪廻なし、佛法によりて後生輪廻をなすもの自然にあり。むかし或僧幽靈を見て曰、後生も又もつけなるものなりと。正しく後生の説によつて、幽靈と成たる所を見付たり、奇特なり　問、怨靈幽靈などのたま／＼あるはいかゞ　曰、万々人に壹人億々に壹人あるかなきか也。氣魄のよく／＼つよきもの、後生にまよへば、暫沈魂滯魄と成ことあれ共、數あつて滅す。むかしの名僧の天狗と成たるも、數あつて皆滅したり。天性をしらぬものは鳥獸と同じく生滅す。其內執着ふかき者、其死を得ざる者、しばらく沈魂滯魄の靈となる者あり。定たる理にはあらず。人の心は人の形ある間の事也。眞の吾は形色聲臭なし、何ぞ生死にまどはんや。幽明人鬼一貫なり

問、天狗になる者は何ぞや　云、學文ありて高慢無欲なる者の沈魂滯魄、天狗となる者あり。故に昔の坊主の中になりたる者多し。近年の出家は欲あり。又高慢すべきほどの學力もなし。故に天狗にもなるとあたはず

一朋友問曰、何のつけまひ事もなけれども、帋を書物紙にうてば、各別おもくなるとはいかゞ　答曰、人のねいれば重くなることはりなり。うきたるものは氣にのり、しづみたるものは氣をさくるが故也。目をふさぎてあゆめば足かろし。精神內にあつまりて、形をのするが故なり。盲者の道の不達者なる事は、心もとなき所に、精神ちるが故なり。よく見ひらきおきて、心もとなからぬ地にて、目をふさぎあゆみて見ればしらるゝ事也　僧ありて曰、是非共に着する所には惡生ず。出家たる者、出家をよしと思ふははや着なり。それよりして爭も物我も生ずるなり　答曰、しか

り、我は聖學をすれども、儒に着せず。俗學のいやしきをも見たり。朱學・王學等の費へもしれり。すべて取べきこ思ふ學なし。天地の神道を大道と云、我國には日本の水土によるの神道あり。大道は名なけれ共、我國の道なれば、やむことを得ずしてとらば、神道をとるべし

一心友問、そこの人は、貴老の組子の中にもあるべきほどの身上の人なり。彼より來る文の、うや〳〵しきは尤なり。貴老よりも同じ様にうや〳〵しきは、過たるとや申侍らん　曰、此人におきて別に故ある交もなし。大体の朋友也。又他國の人なり。武士には本より定たる高下なし。同じ君に事へては、次第の品々あれば、其分にしたがふべきか。それだに我組子と、他の組子とは、もはや異なる禮義あり。他國の人に對しては、其身上の多少を存べからず　問、貴老他國の家老へは、狀の文うや〳〵しくおはします、他國の人にをきて品あるまじくは、小身の方よりもかまひあるまじきか　曰、祿多者には人多し、天の命也。天の命數多人ならば、うやまはざらむや。是我分を盡す也。他國の人、我組子にも有べきほどの小身の人の、我をうやまはるゝも此心なるべし。しかればとて、此方より其うやまひを受べきにあらず。これ又士の義也。彼は理にしたがひ、我は義を存ず。義理互に賓主をなせり

一心友問、そこの人は小身なれども他國の人也。はじめかれより來る文躰、うや〳〵しかりし。貴老よりの返狀、同國の他の組子などの文に、少よき様なりしかば、彼よりも今は文躰おごれり。いかなる故にて侍るや　曰、かの人は他のよしみなし、大躰の朋友にてもなし、愚に心術をきかむことを求められき。しかれども愚痴者にして、對談して人に教る事かなはず。往來の書簡をあたへたり。これを見て益を得たりといへり。しかれば愚に心術を求るばかりの知

人也。かれ大身なりとも、文躰おごるべからず。況やかの人にをひてをや。愚又かの人にをひて同じ樣にうや〳〵しくすべき事は、道理のよる所なし。たゞかの人の求めにこゝろるのみなり。愚が文のうや〳〵しからぬをみて、かれよりも初の文躰をかへて、同輩のごとくする事は、かの人の義をしらず、德を好まざるなり。義は宜なり。時所位のよろしきことをしる也。大躰の朋友にもあらず、たゞ一の故ある道理をなみするは、義をしらざるなり。愚が書によりて、益を得たりといふ恩を忘れ、此方の文のすきと、うや〳〵しからぬをとがめて、文躰おごれるは、德をこのまざるなり。これより後、此人に對して、こたへむ事を思はず。數年學に志て、無間斷奇特なる事は多人なれども、たゞ其奇特のみにして終るべし。大なる事あるべからず

一心友問、そこの人は市井の中より出たり、平士の武士にもならふべからず。然るに貴老懇懃に禮を盡し給ふことは何ぞや。彼に問尋給事も、たゞ一藝なり。何ぞ一藝のゆへにかくのごとくならんや　曰、かれ市井より出たりといへ共、武家の祿を受て、庶人の官にある人なり。其上大躰の知人にもあらず、大躰のまじはりにもあらず、かの人に求學べき事ありて、愚が方よりたづぬるなり。人に一字をも問學するうへは、我を有しさしはさむこと有べからず。位を忘れ情を盡して、したがひ問べし。たとひかれより此方へ無禮なりとも、時の義ことなればとがむべからず。況や彼も又本の士庶の分を思へばにや相敬せり

一心友問、闕內侯の貴老への文躰はなはだ敬せるあり。貴老は一藝の師をだに敬し給へば、大道を學び給ふ人は、尤の事也。貴老の文躰尤うや〳〵し。又一座の禮、同輩のどしとてそしる者有、いかゞ　曰、愚は國士なり。彼人は內侯

なり。國士と內侯と、其官位を以て交る時は、をのづから貴賤の分あり。相敬するにもいたらず。たゞ道德の親を以て、心を友とするときは、其本にかへるのみ。それ天下に生れながら尊き人なし。故に昔は天子の元子といへども、士なりといへり。故に士は君子の質なり。天下の大樹諸侯の本地なり。是故に古は天子の直臣と、諸侯の陪臣のたがひは、よはひせざるばかりなり。傍輩の中の交にては、年を以て先後をなす、これをよはひするといふ。直臣と陪臣とは、直臣は年若けれども、陪臣の先にすゝむ、これのみなりき。然ども今は今の風俗なれば、公用の交には敢てたがふことなし。心友の交は各別の事なり。我有德にあらざれ共、しれる事ありとして、愚に道を求る人は、其道を敬するなり。我も又道德の交にして、公用のかゝらぬ所なれば、へだつべきにあらず。孟獻子友五人有き。己が富貴をさしはさまず、同輩のごとくして友とせり。五人の者も獻子が富貴を見ず、己が無位を忘れて友とせり。これ古の道なり。今の世の風俗、かくのごとくの義をしらざれば、遠慮していまだ內侯を敬する事、外むきの風のこれるがごとし。しかるにいまだをごれるといふものは、士の天爵をしらず、本をわすれたるが故也。むかし予がわかゝりし時、三公の職におはします人、愚が虛名を聞召てめされき。饗膳ありしもすこしもとりつくろふ事もなく、かろき朝夕の常と見えたり。其後こひ茶出ぬ。予辭して次の間に立、しばらくして入たれば、其まゝ置て飮人なし。關內侯のれき〳〵ありしかども、皆々予にゆづり給ひき。其間に關內侯の來てかへり給へ共、次の間までもをくり給はず。予が歸る時は、玄關までをくり給る。下に居て禮し給へり。名をよび給ふにも、殿を付給へり。此人さのみ道德をしり給はざりしかども、士の本をわきまへ、且時の義をしり給へばなり。愚は諸侯の陪臣也。公用を以て來る時は、玄關より奏者

を以ていひ次て可ㇾ歸者なり。同座に食飮すべき樣なし。世の常の事にあらで、各別の義ありて來れるものなれば、其本を尊て、まことの賓客とし、又食飮の客にあらざれば、たゞ禮義のみうや〳〵しくて、もてなしの馳走なし。此時にあたりて、予をおごれるといふ人なかりき。三公だにかくのごとし。況や他の關白侯をや。しかれども德を尊び貴を尊ぶは其義一なり。貴を尊ぶものは、天を恐なり。德を尊ぶは天を樂之。予不德なれども、德ありとして貴人の尊び給ふは、貴人の德なり。予これにおごりて、尸のごとくして、ほこりをらんは愚の至なり。貴を尊てへりくだれども、貴人又予を敬し給へば、相ゆづりて同輩のごとし。これ其勢なり。又其比貴人あり、德をしたひ道を尊て、予を懇情にし給ふとはすぐれたりき。然どもみづからの貴をさしはさみ、予を陪臣のあひしらひにし給へり。愚が大躰の使者などにて來らば尤なり。たゞ顏さし出て可ㇾ歸のみなり。貴賤の席をなすまじき所にてなし給ふは、時の宜をしり給はず。婦人の懇情に似て、丈夫の懇切にあらず。大なる事あるべき人ならずと思ひしより重てゆかず

一　心友問、俗儒といへども聖賢の道をいへり。是道をまなぶなれば敬すべきか　曰、予がごとき者は俗儒といふ共、物を尋問うへは、其品よりは慇懃にすべし。先日申たるがごとし　問、公侯伯子男の位の人は、俗儒をばいかゞあへしらひ給ふべきや　曰、かれは文學を以て産業とし、身上をありつく者なり。一万石以上の歴〳〵は、是非と思召ば、扶持人とし給はんも心のまゝなり。文學の精粗厚薄によりて、祿の高下あれども、文學によりて祿をはむ事は一なり。しかれば我臣とすべき道理のものなり。世間をわたりありく醫者などに似たり。町醫者の名醫よりは、すこしよろしきあへしらひなるべきか。予がごとき者は、かれを臣とすべきやうなし。この故に物をたづね問うへは敬す

る也　問。然らば貴老もまた諸侯の臣なりき。貴老の身上ほどの人を、臣とすべきほどの大名ならば、陪臣の禮もくるしかるまじきか　曰、予わたり奉公して、他の主をとるべきものにあらざれごも、奉公するものにして、他の諸侯に見ゆる事あらばさもあるべし。予は人の臣となるべきものにあらず。況や道學の事を以ては公方にもつかふまつるべからず。むかしよりのよしみなければ、すこしの志をだにうけず。もし公方に御志おはしましてめさるゝとも、道學の事を以てめさば、予は山中の野人なるべし、臣たるべからず。公方だに臣とし給ふまじきもの也。況や諸侯をや

一心友問て曰、志ありて貴老に御奉公申たる者、今は他にあり。此者ごもの申侍るは、貴老は學者のきこえあれ共、家内の躰は學者にてはなし。たゞ世中の文盲なる武士の家風なり。さある故に我〳〵も出たりとなり。一度御扶持もうけたる者の、にくき申分と思ひ侍り　答て曰、其者の申分まとにて侍り。愚拙が學者にてなき所眞實なり。また家風の世なみの武士なる事も必定なり。其者共の心得には、愚が學問故に人親と成ことを得たりと思へり。問學は武士のかくし藝なる事をしらず、たゞ武士のみしかるにあらず、農工商共に各其職あり。學を好み道を行の志は、かくし藝のごとし。才は天のあたふる所なれば、學て至べきにあらず。故に徳を知ものは、己が才のあたるまじき役儀には居す。是を自知者は明なりと云。たとへ無學にても、其役儀をつとむべき器量ある者には、上より命じ給ふなり。問學ありても、器量なきものに、役儀を任じては、其事行はれず。俗語にもはだかにして見ればしらるゝと云事あり。たとへ道學を嫌ひて書あしくとも、其習のあしき衣裳を心にて取除て、其人の實身の生付たる才氣を見ば、必ず得た

る事の用べき所あらむ。たとへ學者にて口に至言をはき出すとも、其文學の衣裳を心にてぬがせて、よのつねの者にして、人がらの實を見ば、士君子の官職には、何にも成まじき者あらん。たゞ吾人共に天の命ぜる位に居て、問學をかくし藝とせば、初て道德の學人倫に行はれて、床道具の學なけん。むかしの學者は、文武二道なりき。今の學者は、學寮坊主に髮のある者多し。望來たる學者も、古の學者にて文武を兼たらましかば、愚がたすけとも成べし。たゞ文學義論のみ好みて學問ご覺え、出家の學寮の樣にありたく願へば、武家の風にはあひがたし。さし當て役儀かけ侍れば、世間なみの武士を養ひ扶持せんより外の事なし。よしこれも愚がはじめの過ちなり。武帝の天子の身ながら、談議說法せられしごとく、武士ながらものよみの樣に講談などしたる故なり。其あやまちは學者の氣に入、過を改めたるは、大に氣にあはず。被仰學者は、坊主に髮の有心得にて、士君子の道はしり侍らず。しかれども全く學者の非にもあらず。愚が氣力わかき時の樣に、すぐやかなるか、またはよき助を得たらましかば、文武ともに家風にかね侍りなまし

集義外書卷六終

集義外書　巻七

脱論四

一心友問、貴老もし政をし給はゞ、大簡にして人道の禮儀すたれ、牛馬に同じからんと申者侍り　云、禮儀立、人道美にして、易簡なるものあり。是を易簡の善といふ。今の禮儀を云ものは、多事多物なり。多事多物は、誠すくなく成て、僞をまねけり。然れども終に人道の大禮はたゝざるなり　問、易簡にして、大禮立べき事いかん　云、無位無官の士も、むかしのごとく烏帽子・ひたゝれ・ちいさ刀の風俗とならば、はじめて人道の美、禮儀の躰を見るべし。如レ斯ならば儉約の法は默して行はるべし。うへにひとつ着する禮衣ばかりにて、下着は幾度もあらひて同じ物を用べし。今は禮衣なきゆへに、小袖あまたとりかへ着するのみならず、思ひ〳〵の物ずき有、こはり裏付、色々の上下多あり。ちいさ刀ひとつにてたれるに、刀脇指大中小色々あり。禮儀立時は、此弊をのづからなし。奢を好むものも、過る事あたはず、文定れるが故なり。軍陣にのみちいさ刀を打刀と名付、其上に太刀をはくなり。人により時によりて、鎧とをしをさすべし。國容軍容はじめてわかれて、治世久しからん　問、今の時にもよろしからんか　云、いまだ下地なし、質なきに文をほどこす時は弊あり　問、其質は何ぞや　云、質儀なり。天下の風俗質儀になりて後、禮儀ほどこすべし。又時勢のかんがへあり。故に大禮を立んと思ふ人は、其質を基し、其時勢を來すべし　問、いかんして質

儀の風俗をなすべきや　云、易簡は實儀の質也。泰伯の吳國にいたり給ひて、禮儀を以て吳國の夷を變ずる事を先じ給はず、却て衣冠をぬぎすて、かみをきり夷の風俗に成給ふ者は、誠を尊び給へばなり。是をも人道を牛馬に同じくするといふべきか。もし此時泰伯衣冠をたゞしくし、禮儀は嚴にして、夷を化せんとし給はゞ、人の眼目を刺て、彼は中國の人といはむのみ。俗と共にして後、敎に仁義を以し、及すに德を以し給ひし故に、後代に至りては、中國の禮樂を學て、夷のいやしき風俗化しぬ。今の禮儀を先ずる者は、心に仁義の守りなし。是を人面獸心といへり。人の人たる所は、仁義あるを以て也。禮義は仁義の質をかざる文なり。質を先ずべきか、文を先ずべきか。繪の事は素にをくれたり。禮は後かとのたまへり。夏は忠を尊び商は質を尊び、周は文を尊ぶ。忠ありて後に質あり。質ありて後に文あり。尊ぶといふは其時に應ずるを用るなり。太古は忠信あまり有て文不ㇾ足。文の不ㇾ足は、人道の禮儀不ㇾ備なり。忠信あるは人心なり。禮義の不足は、獸面共いはんか。故に後世の文備の時に至て、太古の風を行へる者をば、人道を牛馬に同じくするのそしり有。中古は心に忠信あり、身に禮義有、人心人面といふべし。周の盛世を至極とす、三皇五帝三王ともに同じき所は忠信なり。文質は時の宜なり。今の時は又忠信を本とし質を尊びて、文を易簡にすべき時なり。今の時に周の禮義を尊ぶものは、仁義忠信日に損じて、人面獸心となれり。今は又太古に歸して、獸面人心たるべきのとき也　問、世間に古の人は、獸面人心なり。今の人は、人面獸心なりと申せは、太古には人の頭に角など生じて、牛頭に似たれ共、心は仁義禮智信の德全く明なり。今の人は、形は全く人の体備りたれ共、心は不仁・不義・不禮・不智・不信なる處ありといふ事なり。今承りせ、禮義の備りたるを人面とし、不備を獸面といふ事は、め

づらしく侍り　云、禮義を簡にするを以て、牛馬に同じといへる處に付て云ばかりなり。古は天地造化の工いまだ始なりし故に、形にはそなはらざる所ありて、人に獸の形有たるも有き。然れ共心には知仁勇の德あきらかなり。後世は鬼神の工化くはしくなりて、形は人躰全し。然共世の風俗くだりて、心の知仁勇、人欲のためにくらまされぬれば、禽獸に近き所有。故に予云、太古の人は獸面人心なり。中古の人は、人面人心なり。後世の人は、人面獸心なり。太古中古をとりまさりの有にはあらず、時なり。今は時にあらず、敎のなき也。世間多事多物にして、氣力たらず、財用たらず、外聞のみ專として、僞多し。これを人面獸心と云。此上にますに禮義を以てせば、とはざにいへる、重荷に小付成べし。いよ〳〵實儀うすくなりて、僞大ならん。今の時に當て、仁政を行はんと欲する人は、先ずるに學校の敎を以てし、人々に仁義を知しめんのみ。世間の多事多物を減して、易簡ならしめ、事すくなく物備す。質素を尊て、實儀を專とすべし。如此して後、人欲の僞除くべし。こゝにをひて始て人心明かに、天性全かるべし。年をかさねて後、人の氣力まし、財用たりなん。氣力生じ財用みちて、禮義の則なき時は、又人欲あふるゝものなり。此時に及て、致るに禮樂を以し、立るに人の儀を以し、定るに式を以すべし。しかれども皆水土によるべき也　問、何をか人の儀と云。曰、衣服文章これなり。烏帽子ひたゝれ、ちいさ刀は、日本の水土によるの人儀也。始て人の体立ぬ。人道の禽獸に異なる處の文章なり。何をか式と云。曰、時處位に應ずる禮儀なり。物は次第に備りやすくして、過るに至り、事は次第に多なりやすくして、亂るゝに至りぬ。故に式を定て、恭敬の人も過るとあたはず、不恭人も及ばざる事あたはず。事易なる時は知やすし。物簡なる時はなりやすし。夫式は易簡の善を不失となり。むつかしき事を作爲

して、人にしゆるにあらず。人儀は恭儉の則を立んとなり。美を盡にあらず。故に人儀式は治道の要なり　問、禮樂はもろこしの法を用べきか　云、人儀式も則禮なり、何事も唐より傳へざる物はなし。樂に春夏秋冬土用の調あり、十二の律呂あり、十二月に配す、皆天地の正音なり。今の三糸三竹三のうち物の中、いづれにても、心のより次第に學ぶべし。正樂の意味は、水のごとく米の食のごとし。常に用てあく事なし。甚面白き事もなし。其道に深からざればしられず。禮樂なくては人道にあらず。治國にあらず。長久なる事なし。予此理を知こと久し、何ぞ禮義をみだりて、人道を牛馬に同じくする事を欲せんや。たゞ日本の水土により、今の時に應じ、我身の位をはかりて、實儀を立んこ思ふのみなり。政のごときは予が不明病者、何ぞあづからん。其儀は論ずるに及ばず

一心友問、貴老志を得て、政をし給はゞ、仏法をばいかゞ退給はむや　云、徳いまだ不レ成して、事をとらんは、大匠に代て木をけづるがごとし。手をやぶらざる者少し。予が不徳何ぞ政をなすべきや。又何の志を得と云事かあらん。若賢君良將ありて尋給はゞ、古今の來暦、人情時變の愚見をいひ、且仁政の本を告んのみ。仁政行はるゝ時は、士は士の時を得、庶人は庶人の時を得、出家は出家の時を得て、各其本に歸すべし。何の退ると云ものあらんや。其盛衰のごときは天也。人のよくなすべき所にあらず　問、これほどみち〳〵て、繁昌したる佛者、いよ〳〵時を得ば、國天下をもとり侍るべし。仰らるゝ所難二心得一侍り　云、佛法の作法にかなふを以て、仏者の時を得たるとは申べし。今の佛法を、繁昌と悦び侍る者は、愚婦こ同じき凡僧たるべし。少仏法の心をしれる者は、仏法破滅の時とならでは申さず。釋迦達磨を出して、今の仏者を見せ侍らば、是は何者ぞと申さるべし。夫我道は王道也。王道は大道なり。大道は大

路の如し。仏法どきの小道は、夾中の小路のどし。異端の品々は、川流の如し。我道は大海のどし。皆受入て辭せず。何のふせぎ退ると云事かあらん。防ぎ退るは同じ小道のわざなり　問、是又中江氏鏡草のむねに近し。世の學者、鏡草を見て、陽儒陰仏とそしり申ゆ。明德仏性とならべられたるはあやまり也。人の申も理りにて侍り　云、中江氏儒仏一致と見たるにあらず、鏡草は婦人の爲也。女はとりわき文學せず、たゞ仏法のみある事をしれり。他の言語にては通じがたし。此故にしばらく信ずる所によりて、本心の慈善をひらかんとす。その志は好すべし、其言はとるべからず。世人のそしる處尤也。君子の過は日月の蝕のどくなれば、非は非といひて改めたるがよし。則中江氏の志なり。予これをかざる事を得ず。予が仏法を退べからずと云は、彼をかね用るにはあらず。とても世に有べき限はあらん者也。そしり退て我心をおこさしめんよりは、許容して彼も其道を嗜まむにはしかじ　問、程朱の退られしは非なるか　云、これ其國の時所位あらん、今の日本の時處と吾人の位にては退べからず　問、今仏道の法くだり、僧不作法にて學あさきだに、天下是に歸す。よく成侍らば彌仏法繁昌すべし。程子も婬聲美色のどくこれをさけずは、しらずしらず其中に入べしとのたまへり　云、其時のもようと、今とは各別なり。秦漢より後、聖人の教の人倫日用の間をはなれずと云を、あしくさりなして、五常を世間凡俗の上の掟とし、淺近の道理とす。廣大高明深遠の道理をば、異學にあづけしよりこのかた、氣質高きものは、多は異端に入ぬ。周子程子より道体の神妙を吾學にとりかへしぬと云共、人倫日用をはなれざれば、實にして見がたし。佛氏は世間をはなれて、深遠玄妙を說ゆへに、趣き易し。其時の佛者は見所高かりし故也。その上もろこしは文國にて、人民多は文盲ならず。仏氏の說も、世俗の教はす

たれて、高き說のみ殘り、今吾國にては、高き說はとなへ失ひて、愚痴にあさまなる教のみ也。禪天台等の大乘教も、渡世を主とすれば、先儒の心より卑淺に成て、教も凡俗と共にくだりぬ。高明の人のよりしたふべき事一もなし。閒程より此方、吾道に神理を發明する事久して、其學高く成ぬ。高明の人は多は此道に趣けり。今の仏者多といへども、恐るゝに不ㇾ足。人をまどはす事淺し。吾道に有德の君子出來て、時いたらば仏者も自戒律を持して害あらじ。是古今時異也、大國と日本は地異なり、仏氏と世俗と入かはりぬ。今は仏者の道甚ひくしと云共勢つよし、退べからず。後世勢よはくならば憐むべし。又退べからず。仁愛ありて教みちびかんのみ。君子の世に居も、時をしり勢を識を要とす。時に盛衰有、勢に强弱あり。大畜の時、初二は乾体に居て、剛健なれ共、進にたらず。四五は陰柔なれども、よく剛强の陽をとゞむ。時の勢なり。君子は勢を得て、强なる時も、仁愛を不ㇾ失。勢を失て弱なる時も、心の剛を不ㇾ失。たゞ時と共にひそまるのみ。小人は勢を得て、强なる時は不仁なり。勢を失て弱なるときはつとめへつらへり。年寒して、松柏のしぼめるにをくるゝがごとくなるみさほあるものは、たゞ仁義を知ものこれをよくす

一同志と會して、治國平天下の窮理に及ぶ。夫國の國たる處は、民あるを以也。民の民たる所は、五穀あるを以て也。五穀のゆたかに多き事は、民力餘りありて、功の成によつて也。故に有德の君、有道の臣ある代の日は、舒にして長し。其民しづかにいとま多く、力餘あればなり。道なき世の日は、いそがはしく短し。其民くるしみ、務て力不ㇾ足故也。古今日の長短かはり有にあらず。君明かに、民しづかなれば長が如し。上闇く、下亂るれば短がごし。此故に禮義は富足より生じ、盜賊は貧窮より起る者也。富足は寬暇より生じ、貧窮は日なきより起れり。故に聖人は力は民の

本にして、國の基なる𛀁を知給へり。浮侈篇に云、王者以二四海一爲レ家。兆人爲レ子。一夫不レ耕天下受二其飢一。一婦不レ織天下受二其寒一。といへり。後世の業は、困苦多して、利すくなきが故に、本をすてゝ、末に趣き、剰游手の者みちみてり。本を務るものすくなく、浮食するもの多し。故に京都幷に國城下の町屋、次第にひろごりて、商賈牛馬道路にたへず。如レ斯ならば商賈日々に富て、武士日々に貧乏ならん。武士貧乏ならば、百姓いよ／＼困窮せん。百姓くるしまば、游民ます／＼多かるべし。人は次第に多なりて、奉公人はすくなき事もあらん。古人の云、貧生レ富一。弱生レ彊一。亂生レ化一。危ハ生レ安一と、云心は、人々奉祿は次第にまして、富ども奢て節なければ、國貧し。勢强にして、人に驕者は必弱なり。國政を取て德なきものは必亂る。安平を持て、幾微を不レ愼者は、必危しと也。君の過は未發の時にいさむべし。すでに發し、事行はれ、盛なる欲に敵するがどくなる時は、功ならず。世間の惡も、其本を知て、幾微の間に止べし。すでに國に惡人多く、欲さかんにして、加るに困窮を以する時は、刑罰を嚴にすといふ共甲斐なかるべし。却て彼が勢をますべきのみ。其やぶれ甚しくば功なかるべし。易に云、童牛之牿元吉なり。いふ心は、人の欲は初に止むる時は易しと也。今世中の人の、欲すでに盛なるに近し、少時過て成がたしといへ共、いまだ止べきの道あり。是を過ば悔といふ共甲斐有べからず。剝の初は下よりす、終に盡るに至ことほどなし。國の剝は民より初る、民の困窮するは、これ國の剝する始也。易云、山附二於地一剝。上以厚レ下。安レ宅。是剝を止るの道なり。君の民に附は、山の地に附がどし。地厚ければ山靜にして安し。地うすくしてうごけば、山もしたがつてくづる。夫剝は君子退き、小人進の儀なり。小人すゝむ時は、日々に驕奢也。此故に世中奢時は、民下に剝せらる。其次には士剝せられ、其次には公侯

剝せらる。如ㇾ此なる時は天下に災害多して、終に君も剝するに至て、亂世となる物なり。今の武士民につよく取事を好てやはらか成をそしり、民の剝せらるゝ次には、己が身に及ぶ事を不ㇾ知。民の剝は世間の者によつて取からされ、公侯大夫士の剝は、國主郡主より初て武士たる者すりきりて行つまる也。かゝれば運氣變じ天命あらたまるものなり。これ君の剝なり。君の無道にして世を失ふは各別也。惡逆なくて失ふ者あり。其前表は山にあらはる。山は國に有て第一高きもの也。君の象なり。山の木草つきて、土砂の川谷に落るは、上たる人の富貴を失ひて下にくだるがごとし。中夏にても渭洛つきて夏亡といへり。玉をかしぎ、桂をたく、と詩にも作れり。玉をかしぐとは、米の高直なるをいふ。桂をたくとは、薪の高直なる事なり。山のつきたるゆへ也。渭洛のつきたるとは、水上の山の草木つきて、神氣うすく、流水次第にほそくなり、大雨ごとに土砂を落し入て、川をうづみ終には山もくづれて、川源をとゞめたる也」近年諸國にをひて山のくづるゝも又如ㇾ此。故にいにしへは諸侯に地をたまふと云共、名山大澤は封せず。有道の賢臣ありて、諸國の山川をつかさどれり。天下存亡の源を明かにし、世の長久を持し、民生を養ひ賢才を起し、ほどこさずしてすくふの仁政をなせり。春雨ふりて水四澤にあつまり、初夏は純陽の月なれば日でりして麥作みのり、五月は苗代水の雨をくだせり。是天氣のぼり地氣くだりて、氣化の雨なり。六七月は、天地の氣不ㇾ交、氣化の雨ふらざるを常とす。此二月は夕立を以田畠を養ひ、草木をめぐむ。夕立のいたる事、神氣限あり。山澤氣を通じ雷風相助くる事、神靈の行程あり。播州備州の海邊に付たる數郡のごとき、北の夕立は神氣不ㇾ及、播州は淡路嶋より起る夕立を以養ひ、備州は小豆嶋より雨ふれり。然に近年數十年は、淡路小豆嶋より夕立をこる事まれなれば、毎度日てりにあ

ひて、田作いたみ、畠物かれ失ぬ。此ついへ民間のいたみ、數十年の積り、幾千万こいふ事なし。二嶋きりあらして神氣うすければ、雷風雲雨を起すべきちからなし。むかしより此理を知て、二嶋あらさどりせば、備前播州の數十年の五穀の生幾万億といふ事あらじ。其上民養生にくるしまず。甚暑に涼風を得て、心氣涼しく病氣いゆべし。これほどこさずしてすくふにあらずや。二嶋のあれたるついえ、五穀の減少夥し。まして日本國中に、如ㇾ此所多ければその減少あげてかぞえがたし。いにしへより美質の君世々に出給ふといへども、此理を告申者なければ知給ふべき樣なし　問、山のあれたる事は、何國も同じ事なれ共、京都近江などは、六七月の日でりにも、夕立いたし侍るは何ぞや　云、湖の神氣つよきが故に、江州は夕立をこれり。京も湖水に近し。其上北につゞきて深山多、其外きりあらすこいへども、高山名嶺かさなりたれば、靈氣あり。淡路嶋のごきは、草木しげゝれば神氣もこもり、草木なければ神氣もうすし。又今時諸國共に、松山を好めり。そだちやすきが故也。松山は多しげりても、神氣のたすけにはなりがたし。却て神氣を損ずるとあり。松山には下草生ぜず。水かれて出ず。松にかゝりたる雨露、田畠に入て毒となれり。松は浦濱などに相應の木也。山は雜木にしくはなし　問、山を立るは仁政の本なれば、今以て急にありたき事なり　云、よきとて是のみ行はれば、ゆく／＼よき所までゆかず。只今人民大に迷惑すべし。君子は業を始め、統をたれてつがしむべき事せず。人の父母たる仁君おはしまさば、大なる催しありて後行はるべし。むかし一日史書を見て此理をいへり。數歳を經て當れる事あり。此後も又しからんか

一心友問、昔名の被ニ仰付ーたる池堤は、他の害なくして、後々まで堅固なりと申侍。或は川堤をなしても、他を損じ、或は

池の堤破損數ケ度に及ぶ者は何ぞや　云、易云、賢人在二下位一无レ輔。是以動而有レ悔也、といへり。此賢人は才德兼備の君子のみにあらず。人皆天性あり、人心の靈をの〳〵さとき所あり。あつめとらば賢人の知あらんか。夫山谷の深長なるは、大雨の時に水の出來る勢は、所に住者よくしれり。川流大水の時の勢も、水邊の老民ならでは委はしらず。或は池の堤、或は川堤をせんと思ふ時、其所に住なれたる老人、又は才覺ある者を呼て、其情を盡させて聞、又傍示を立て相談し、物のあるべく事のなるべきやうにする時は、他の害なくして堅固たり。是以動而無レ悔也。如此の事だに事に得たるの才、物に馴たるの情を盡させきかざる時は、なしたる事あしく成て、くゆる事あり。況や國家の政道にをひてをや。故に昔大舜は問ことを好給て、才知人情の下にうづもれとゞこほる事なかりき。後世の人は下問を恥とす。故に賢才は野にかくれて、邪佞朝に横行せり。天下の大事多事なるも、知謀の出る處は三公九卿の外に出ず。一國のひろきも、卿大夫奉行人の外に出ず。此故に政令いでゝ人情にもとり、時變にたがひ、事よろしきにかなはず。たま〳〵問尋らるゝも、其人にあらず。人情時變は賢知ありといへども、生ながら尊き人は知がたし。下になれたれ共平人は知ず。ひとり其眞を知ものは下に居の賢なり。然れ共此賢者は、小人のあだとする物なれば、隔てられて達せず。上の令命の下にたがふのそしりは、時の權威に恐ていふものなしといへども、其實は後世にかくれなし。他國本朝ともに前鑑明か也。これを全からん事を求るのそしりともいふべし。聖賢の君は其人を師として、下問に恥給はず。己は愚に人は知ありとす。國の知を用ひ、天下の才をあつめて、治平の功をなせり。其功德はたゞ賢君聖主の一人の身に歸す。國家天下是をわけんといふ者なし。是君の德なり。是臣の功なりといへり。堯舜禹の君

臣たりしとしかり。當時悦び後世望めり。賢君良相は知をかくし功をゆづり、名勢をさくるといへども、令名万歳にながれ、徳化四海に及べり。本より君子は名を求めざれども、かくのごときの大名あり。これも又はからざるのほまれならんか。臨、六五云、知臨。大君之宜。吉　程子云、夫以二一人之身一臨二乎天下之廣一。若區々自任豈能周二於万事一。故自任二其知一者。適足レ爲二不知一。唯能取二天下之善一。任二天下之聰明一。則无レ所レ不レ周。是不三自任二其知一則其知大矣。予たゞふるき奉行の功者なる者にきく。百姓の老人にならへるのみ。其始は見たる事もなければ、知べき様なし

問、しからば舊き奉行、貴老より先になさずして、貴老を待て、初て出來たる事は何ぞや　云、是をゆるせる人なかりし故なり。堯舜の知も、物にあまねからず。先つとむべき事を知て、急にし給ひぬ。堯舜の時にのみ、善人多生れたるにあらず。善をゆるし給ひし故に、善人多かりしなり。今も善をゆるす人あらば、天下の善人才能あげてかぞふべからず

一心友問、家中作法みだりがはしく侍る程に、法度を出さではなるまじきと申人侍り。法度は大躰いかやうなるがよく侍るや　云、法度は小人の心を戒め、正人の心悦をよしとす。たとへば夏の雷雨のごとし。正人は凉風を得て喜悦し、悪人は雷響を聞て恐るゝがごとし。今時の法度は、多は正人困窮して、小人こりず。小人の情は法度ありとても、専に好む事は堪忍せざるものなり。かくし忍びてもとかくおかし侍り。人を盡して、刑罰もしがたく、小事に人を失ふ事もあしければ、しらぬふりにてをくべきより外の事なし。やぶれ常と成て、三日法度などいひて、後にはあり共思はず。正人はこれは、古今人情の常なれば、くるしからぬ事也と思ひ、書に記し、後世に傳へても、恥かしからぬ事とし

れども、法度なればそむく事あたはず。度々理りもいはれず、無二是非一ひそまり居れば、心氣屈して病者となりぬ。自然の時も躰氣よはくば、思ふ樣なる心がけもかなはじ。風雨寒暑に當られて、敵にあはずして死べし。然ば今の法度は、詮なき事のみならず、正人を亡すなかだちとなり侍ぬ。大方事はよしといふも、人情にかなはざれば、益なくして損あり。不レ出にはをとれり

一心友問、下拙が傍輩、主君の氣にちがひ、牢人いたし、かくれ居侍り。親類知音も主人の前を恐れて、おとづれ侍らず。下拙のみしのびて通路いたしゆ。此者の親、下拙が幼少の時より心入にて引まはしに預りゆし、其報恩の爲と存ての儀なり。然れども君に事ては、かくす事なしと承はれば、氣味あしく侍るほどに、通路をやめ侍るべきか　云、是又義のこりやうあしきなり。貴殿學問し給はざりし以前より、天性固有し給へる義心を、學問によりて亡じ給はんは甚不可也。君に事てかくす事なきとは、かげひなたをせざる儀なり。禮儀人情にて、君前を忍ぶ事はなくて不叶事なり。其牢人君前をはゞかりかくれて居られば、貴殿も忍びてをとづれ給ふと、則主君への禮義にして、牢人の爲也。かくすにはあらず。夫恩を見て恩をしらざるは木石に同じといへり。木石は無心なれば罪なし。人として恩を不レ知は不儀なり。不義の人は君に事ても不忠なるべし。主人明かならば、貴殿の忍びてし給ふ音信を聞給はゞ、親の恩を子にむくゆるは、遠きを忘ず、義理の心ふかきものなり。必主君に忠有べし。おちめをすてず、たのもしき士也と思召て、大に感悅し給ふべし。恩をわすれ、時の勢につき、おちめを捨てかへりみ給はずば、主人聞給ひて、ふたのもしなる者也。主君の恩をもしらじ、主人の仕合よき時は、進て忠功あり共、まけ軍か、おちめに成なば、敵にも付て利を求

むべきものなりと見かぎり給ふべし。仁義は人の本なり。學の淵源之。然るに今の學者、道を行といひ、聖賢を期するといふ者も、義なき所あり。世俗文盲の中にも儀ある人多し、故に學者の流にてこそあるらんと、世にうたがひ思へり。僧の忍辱に似たるはなりがたき事といへ共、たのもしき事はなし。實はあなどる心あり。彼は世をすて、かみをそり、男をやめて、辱を受るを以て修行とすれば、各別の事也。それだに天性の義心亡びされば、恥を知て、男氣ある僧多し。とりかへたらばよからましと思ふ者あり

一心友問、國家に益あるよき事としれ共、貴老の言に出たるといへば不レ用ゆ。不レ被レ仰しては知べきやうもなし。仰らるれば不レ用。此間御了簡あるべき事と存侍り。時に相應の善言はもらされぬがよく侍るべきなり　云、當世は才知のあらそひ、そねみなどにて、善なれども人の言を用まじき凡情あり。後世はそねまるゝ人、爭人共になく成て、公論に成侍りぬ。其時は古人もかくいひし。何某もかく論ぜしなどゝて、證據にも成ものなり。今の人、後の人、かはらぬ事にても、生るにはにくみあり、死し去人にはにくみなきゆへなり。なくてぞ人はといひし、人情の常なり。當世とても、志同じく信ずる人はしたがひ、志たがひ信ぜざる人は不レ用。世の治亂存亡は命なり。才覺の及所にあらず。人生此德あれば此病あり。衆の病をすて、德をあつむる者は久し。衆の德をすて、病をあつむるものは短し。いにしへの君子といへども、病をあげそしりをあつむる時は、流人となすの罪有。予多病なり、又天のあたふる靈あり、故に其蠢をのぶるのみ。用捨はあづからず

一心友問、欲は百邪に勝と云共、常に欲を心とする時は、心氣かたよりて、空々如たりの本眞にあらざるがごとし。愼獨も

似たり　云。凡夫より聖人に至るの眞志、實學はたゞ愼獨の工夫にあり。夫敬は心の德なり。萬物皆敬有て身を全する事を得たり。敬なき時は身をやぶる。故に見聞の及所にては、君子小人共に敬あり。見聞の不レ及所にをひて、自欺ものを小人といひ、獨を愼むものを君子といふ。愼獨は敬の至れる者か。愼獨といふも、人の見聞せざる處との み見る時は、心かたよる所あり。たゞ己ひとり知所を愼ときは、心よる所なくしてもるゝ事なし　問。獨知を愼事をわすれじとするも、又偏倚する事をまぬがれざらんか　云。必獨知を愼の志、天を以て立の主意定る時は、常は心たしといへども、事に當ては必愼み生ず　問、獨知にしたがふとも、是とする所を行ひ、非とする事を去らでは、心よからじ。則欺也。事々したがふやうには、初學の者いかで及侍るべきや。たとへば弓をけいこするがごとし。初よりなをし所を一度にいひては、なをしにしばられて、いる事あたはず。故によく教るものは、大法のかねばかりなをして、少づゝの事はじねんにひとつ〳〵なをせば、勞せずして射手となりぬ。心術もかくのごときことありや　云、しかり。去ながら貴殿の獨知の、是とし非とするといへる處は、眞知の識にあらざる事多からん。格法俗習をまじゆるなるべし。程子は敬より入、伯夷は淸より入、柳下惠は和より入る。和は不恭にして敬あらざるがごとし。然れ共實たる事は一なり。賢の賢たる處は、凡情きよく盡て、同じき所あればなり。柳下惠は外不恭にして、敬なきがごとくなれ共、心にをひて思ひのよこしまなき處は、後の格法敬學の人の及べきにあらず。仁義の眞を得たるとは同じ

一心友問、いかなれば篤恭にして天下平かなるや　云。是盛德の印をいへり。黃帝堯舜衣裳をたれて天下治る。衣裳をたれていかゞ治るべきや。衣裳をたれて治る故あり。篤恭にして天下平なる故は仁なり。仁者は天地我心中にあ

り。万物已に備れり。故に幽明死生へだてなし。富貴貧賤好悪なし。安樂患難したがひて行ひ、至公にして私心なく、至明にして私照なし。洪然の氣天地の間にふさがり、靜なる時は虛にして明かなり。動ときは直にして理に當る。知至りて無事なる處を行、其氣象を見るに、篤恭にして天下平か也

集義外書卷七終

集義外書　卷八

脱論五

一心友問、養ﾚ生は大事に當るに不ﾚ足、死をおくりて大事に當るといへり。葬をあつくし、喪に居は君子の大儀なり。しかれば狂見の大簡なるはたのむべからず、うすきのみにて侍るを、何ぞ帝堯は許由をめし、光武は子陵をむかへて、大事を共にせむとし給ふや　云、養生は親目前に在す、人たる者、愛敬せずといふ事なし。死をおくるより以後は、親不ﾚ在、心の誠を盡すのみ。誠にあらざれば大事をたのむにたらず。今の人情うすく成て、誠すくなきがごとし。形躰よはく氣力乏し。且世事しげし。これにかさぬるに時處位に不ﾚ叶の格法を以てせば、誠いよ〳〵うすく成べし。かくのごときの跡を行ひ、時を不ﾚ知者大事に當るべきや。今の終を愼といふ者は、多は名聞を本とす。心には利害のみあれども察せず。名聞は誠なく、利害は義なし。誠なく義なきの實を不ﾚ知して、喪の格法を行ふを見て、死をおくりて大事に當ると思はゞ、大なるあやまり也。名利なくして情あつく、天性の誠より終を愼む人あらば、何かあるべき。今の世の君子なるべし。もし有とも質の美ならん、質の美は其一事のみなるものなり。孟宗の至孝なるも、孝子と云べきのみ。賢人君子といふべからず。國家天下の用には當るべからず。今の大事に當べき人はしからず。義理あつく利害うすく、眞實を好て名聞すくなく、仁愛にして勇知有者也。かくのごとき人といへども、父母先祖より此か

た、數百千歲うすく習來たる情なり。其上時の運によりて氣躰よはし、上世の格法には叶がたし。格法にたらざる一品を以、大德を捨べきや。或は行儀の禮に得たるがごとき者を見て賢とし、或は名聞深して、格法を行ふ者を信じて、大事をまかせば、亂の本成べし。古の人は情あつく氣躰つよし。故に欲うすく、誠あつき人は、喪を行ふ事易し。誠うすく欲あつきものは、行ふ事不ㇾ能。此故に此言あり。古今人情時變の同じからざる也

一學友鳶飛魚躍の章を問　云、道は見るべからず、見るべきものは情のみ。風雷雨露相助け、飛潜動植相應ずるがごとき是なり。學術極處に至る時は、生々してやまず。便是變化の門なりといへり。其上下の上は道をさしていへり。下は器なり。形を以て見る時は、鳶は淵に入事不ㇾ能。魚は天にのぼる事不ㇾ叶。是天地の大なるも、うらむる所あるなり。道を以て見る時は、魚も天に至り、鳶も淵に躍べし。夫婦の愚も、共に知べき所也。至理言外に明也。活潑々地なり。大鏡をかけてこれをうつせり

一心友問、國を治の法、粟ある時はこれを富しめ、富ときは是を教ときゝ侍り。今時すでに粟あれども民は衣食たらず、士は貧困也。此故に士はむさぼり、民は盜す。教べき事あたはず。今の時、士を富しめ、民を足しめん事、いかなる政かおはしまさんや　云、財用の源を開き、其入事を計、出る事を節するに有。何をか財の源を開こ云、農に利ある時は、本をつとむる者衆多也。民力餘あれば、五穀を生ずる事限りなし。女工ゆるやかにして精ければ、天下の婦人よく女事を勤めて、布綿餘あり。木こり杣人の山林に入事、時をたがへざる時は、草木蕃し。且無用の屋作をせず、無用の器作らざる時は、山しげり、川深く成て、民用とぼしからず。夫金銀珠玉錢物を用る事多して、五穀すくなき時は、

人民多欲なり。善人をたからとせずして、器物をたからとする時は驕奢なり。この故に善政は粟を以て万の物にかゆる也。今の俗、粟の字をあやまれり。俗に畠に作るあはの字は粱也。粟の字はもみの事也。米となしてはそこね易し、虫になりてすたり多故に、いにしへはもみにて納め、万の賣買ももみにてせしなり。もみはかさ多て、澤山につみかくされぬ物なる故に、をのづから人心の欲すくなし。万の物をなして、もみにかへて食する者も、功すくなくして食たりぬ。故に儉約のしめしなけれども、をのづから驕奢にいたらず。世間に粟みち〳〵て澤山なれば、大方の不作にも困窮に及ばず。五穀水火のごとく多時は、民に不仁の者すくなし。盗をなす事なし。金銀は五穀を助くるのみ。もみつかひやみて金銀錢を以て万のうりかひをなす時は、おさめたくはへてひろく用をなし、よき物なれば制すれ共をごり生ず。諸職みな美をつくさん事を欲す。故に商人富に過て士まづし。士貧乏なれば民に取事ますく〳〵多し。民と士と困窮する時は、商ひすくなく成行て、多の商人職人、うへに及ぬ。あつまる處は天下に數すくなき富人の手のみなり　問、時を以て山林に入の政は今も行はれずして不叶事也。山林つき川澤あさく成ては、あしき事多と見へ侍り　云、其本あり。其勢出來て後は、をこなはるべし。今の勢にて時を以て山林に入の法をこらば、天下ます〳〵難儀に及べし。今日の食だにやう〳〵とかせぎ出し、明日のたくはへなきもの多し。食なくいとまなくば、何として か秋冬の内に、明年春夏の薪を伐をくべきや。薪材木をきりて米にかへ、其日〳〵に妻子を養ふもののみなり。今も自然に立山ありて、草木を伐事を制禁するも、うり木こそは得せざれども、面々に朝夕の薪はぬすみきらずといふとなし。今明日の食だにもともしきものども、何として薪をかひてたくべきや。明日首をきらるゝまでも、今日は

ぬすまでかなはず。かゝる時節に、山林の制禁おほくば、罪人限なく出來ぬべし。武士町人等も、薪いよ〳〵不自由に成て、朝夕のけぶりをあぐる事もならじ。何程よき事にても、聖人の法にても、時所位にあはざる事はあしく、山川までもなく、人倫たちまち迷惑に及べし　問、近年米の高直にて、迷惑するもの多し。下直に成べき仕置もおはしまさんか　云、米俄に下直にならば、天下貴賤ともに大に難義に及べし。いかんとなれば、今大名小名共に武士たるもの借銀多からざる者はまれなり。米の高直なる時、かりたる銀を、甚下直に成てかへさば、一倍の利にもあたるべし。年貢の米を殘らずうり、衣食たらずして年をふる共、いゆる事なきもの有べし。公役といふ事あれば、左樣にもならず。とにもかくにもせんかたなきものは武士ならん。然らば民に取より外の事あらじ。不便と思ふとも、手前の不足なるには、宥めもすくひも成べからず。士民は天下の本なり。其本困窮きはまらば亂に及ぶべし。商人出家など安樂をねがふとも得べからず。又甚高直にても世中立べからず。其本にかへるべきのみ。士本をつとめば、商の姦利やむべし。本立て姦利やみ、德政にはあらで、天下の借銀なくなる事有べし。如レ此して後、武士手づかへなく、民ゆたかに、工商利を得る政道あるべし　問、其政はいかやう成事にておはしますや　云、予はたゞ古今の理をいふのみ。時に當るの政は知べからず。たとひ知侍るとも、其任なきものは、いふべきにあらず

一學士あり云、下の物を多取て、上に達するを損とするは尤の儀なり。如レ此にして國亡び、天下亂ざる事なければ也。上の物を散じて、下をにぎはすを益とするは、國家天下長久なる故なり。今侯卿大夫士、驕奢にして諸民困窮するは、損の極なり。物きはまりては必變ぜんとす。道を行て變ぜざれば、天道より逆を以て變ずる事、古今の常なり。こゝ

ろみに上の米穀を散じて、民をにぎはさんとすれば、民多して穀不レ足。金銀をほどこさんとすれば、金銀限り有て、民かぎりなし。すくふべき分別なし　云、下を損ずる者は奢也。をごらざれば用すくなし。用すくなければ、をのづから民に取事うすし。故に云、二簋可用享と、それ祭祀は禮の大なる者也。然るに二簋を用て、享祀するものは、文の簡、禮の倹なり。たゞ誠敬のみ至れり。他の事の倹知ぬべし。これほどこさずして、下をにぎはし、散ぜずして天下にみつるの道なり　問、近年は人の上たる人は、倹約を示し給へども、士の貧乏いよ〳〵きはまり、民なを〳〵困窮する事は何ぞや　云、人心の奢やまざれば也。心の奢をやめずして、事を倹にせんとする時は、東に滅して西に生ぜんとす。滅する處には、人所有を空くし、庶人職を失ふ。生ずる所には、人なき物を求め、民本を捨て末におもむく。故に士いよ〳〵貧乏し、民益遊民となれり。驕奢の風俗によつて、大身小身共に用たらず。何を以てか下をめぐまんや。たとひ今の民に年貢をかろくしてほどこすとも、民のにぎはひとも成べからず。その故は教なきによりて、士は富てはいよ〳〵をごりて無禮不仁なり。民は博奕などのあしき遊びを好て、一年の妻子の養をも一夜にむなしくす。これ士民共に教なければ也　問、天下長久の第一たる倹の法も、時にあはず。何を以てか今の世の政とせんや　云、士君子たる人、道を學時は、仁を好て人民を愛す。仁あれば無欲なり。無欲なれば自然に倹なり。仁愛無欲より出たる倹ならでは、上下の爲にならず。法に出る時は必害あり。不出にはをとれり　問、上たる人、仁愛無欲の質あり、倹約の法を示し給へども、人民の爲よからざる者は何ぞや　云、道學の教あまねからざれば、人したがはず。人の心服せざるは善なれども徒善也。故に政をするに不足。生付吝嗇なるものは、倹約を得かたに取なして、いよ

〳〵いやし。をごれるものは是を見て、儉約は吝なりとあなごり、うへにはしたがふやうにして、實はしたがはざるをよしこす。終に行はれざるところなり

一心友問、興二滅國一繼二絶世一之章　答云、民に功德ある人の、子孫おごろへて、國を失ひたるを封じて祭ををこさしめ、子孫なきは其同姓をたづねて、祭を奉ぜしむ。德ありてかくれたる者を、擧用る時はゆたか也。是皆天下の人心の歸する所なり。いにしへ農と兵とはなれざる時だに如レ此。いはむや後世兵農をはなれてよりは、國を亡し世を絶に、天下の大凶事二あり。其一は、其君一人は亡べき罪あれ共、其家中流浪人と成て、諸國に離散す。家內妻子共に數千數万人に及べり。飢饉の年に逢てはうへ死す。其歎き天地神明を感激す。其二に今風俗あしくなれり。畢竟罪一人にかゝりて長久ならず。國郡の君罪なしこいへごも、子孫なければ、同姓に及ばずして亡ぶ。是又家中の離散は同じ。或問、國郡の主亡れば、又取立の國郡の主ありて、牢人を扶持するにあらずや　云、尤抱るといへども、十が一にも不足。千人の牢人、百人ある時は、皆も有付たるやうにいへり。立身の大身、其家の譜代の者、段々に立身す。百石は一二千石にもなり、千石は七八千石にも成、切米取は五百石三百石に成、歩士は中小性、或は小知行に成、中間小者も歩士と成ぬ。知行取もむかしをたづぬれば、足輕等の上り多し。如レ此賤しきもの、思はず立身すれば、士の風俗あしく、いやしきしはき流行す。是天下の風俗のみだるゝ第一なり。本よりの歷々は落ぶれて、賤男賤女と成ぬ。ならはぬ所作なれば、賤事にたふる事あたはず。後々は牢人の果ども見えず、丸腰破れ衣著て乞食に同じ。飢饉の度々に數万の餓死あるは、過半此牢人の果なり　問、立身の大名ならでも、國々に牢人を抱らるゝにあらずや　云、もつこ

も他家のはてたる牢人かゝえらるゝといへ共、其家中より年々に牢人する者、抱ふるよりも多し　問、あしきものは改易し、扶持はなさでも不レ叶事也。いにしへとても牢人は有べきか。又大名もはてずして不レ叶あり。家中不便さ思ひながらも、牢人せで不レ叶事歟　云、いにしへとても左遷の法有て、改易なし。大身は無道なれば、其身一人罪して、子孫を立置、うしろみのやうなる人を遣はして、教化せしめたり

一問、諸國にて改易をやめ、左遷遠流せば、つかはすべき嶋なからむか　云、左遷は嶋へつかはすにあらず、位をおとし祿を減じて下し使ふなり。都の老中は遠國の代官となり、其次の歴々は代官の下代と成て、くだることを左遷といへり。遠流の罪はまれなり。大悪人にて、此國に置ては國人の害に成ものなれば、八條嶋・鬼界嶋、又は朝鮮・琉球などへつかはすを、放とも流ともいへり　問、歴々の武士がさやうに下りたる役人となりては居られまじきか　云、天下なべて其格式なれば、不レ苦ものなり　問、國郡の主子孫にも同姓にも、跡の立べきものなき時はいかゞ　云、むかしは其家中の諸士を動かさず、小身の者に才知あり、其國郡を治べき人をつかはして君とす。君と成人一人行て其家頼を家頼としたり。故に流浪人といふものなし。國々にて一家の主絶て、家人のゆき方なきも又しかり

一舊友問、世に贔負たをしといふ事有、大切なる人の事をば、ひいきせずしても不叶儀之。されどやゝもすれば、其人の害になる事有。しからば贔負にも道侍るや　云、世間に贔負たをしといへるは、甚しき事のみをいへり。惣じて贔負して人をたをさぬ者は見侍らず。若贔負をせんとならば、其人の本心にかなふやうにすべき事也。爰に愚に道を聞人侍らん、愚がいふ所は其人の惑をとき、過不及を格し、心術を自反せしめて、聖人の道の高きに登るべき階梯の

一級こせんとす。その惑こけ其過不及ひとしく、其放心をおさめばやむべし。始終の鏡とすべきは、孝經四書にしくはなし。若其人愚が和解の書を信じてこゝに止り、最負して他の學者をそしりなどしたまはば、愚が本心にあらず。愚をたをしぬる人なり。其人自己の惑を解て、一人悅ぶにあらず。自己の放心をおさめて、獨知を愼むにあらずして、たゞ我心にかなひたるものの最負をするなり。其人がら本の凡心ならば、愚が學術世におゐて何の益かあらん。道は聖人の大道なるを、かへりて一の流を結び、仁の爭の端を立て、愚をして天下の罪人となせり。最負たをし、これより大なるはあらじ。若愚が本心を最負せば、愚が書を持して、愚がいふところの惑有人あらば解べし。惑なくばやむべし。愚が說を以て、其放心をおさむべき人ならば敎べし。其人にあらずばやむべし。其人外にむきたる心を内にせば、はやく愚が說を棄て、聖經にもとづかしむべし。世中に愚が名の亡て、跡なからん事は、愚が本心也。悅びこれに過べからず。愚が本心を悅ばしめてこそ、最負するの實ならめ。愚が本心を憂しめて、最負こおもはんは、毒魚の肉を以て、親を養ふものゝごとし。それ天下に名のあらはれて、益有べきものは、孝子・忠臣・貞女・友弟・直實の人也。德大なるべきものは、聖人の業也。聖人の常道ならずして、別に道をたて敎をなして、人をそこなはざるものはあらじ。愚が淺學のみにあらず。古の大儒といへどもしかり。朱學の最負をするものは、晦菴をたをし、王學のひいきをするものは、陽明をたをす。朱子・王子共に名をこのむの中人にあらず。德をおもふの君子也。たゞ時の弊を除きて、聖人の道を明かにせんと思へり。しかるに朱學といひて一流とし、王學といひて一流とす。その學者をみれば、德を好まず、業をなさず。たゞ同異の爭のみありて、聖學起らず。朱王の本心は、聖人の道をあらはさんとせり。しかる

にかへりて、聖人の道を塞ぐ也。朱王の本心をたがへて、朱王をかなしましむるは、最負たをしにあらずや。若兩子の本心にかなひて、兩子をひかば、古今聖經を註して、人をして文義に取入しむるは、朱子にしくはなし。それより後は後學の力にも及びなん。聖語を得ばやむべし。聖語といへども、我心の注なり。心を得ばやむべし。文武の二道を兼て、其功をあらはし、且學者の心を内にむけたるは王子にしくはなし。其内に向たる心にて、聖經を見るときは、其理も其語も、昔の物なれ共、我ものとなる事各別之。王子の聖學に、益有所之。近年學は長袖のものとして、武士の業なることをしらざるもの多し。陽明によつて、學は文武の德業となすことを知べし。此二の益を得ば止べし。二子の學共に聖學に助有事少からず。しかれどもひとへに取用るときは、又害有。大賢以下の學は、熟せざる所有。其所には、弊生ずるもの也。然れ共二子の本心を學ぶものは、益のみ取て弊をなさず　問、聖人に至らざる前は、鏡とする聖經なくてはかなふべからず。心を得てやむとは、すこし心におちざるがごとし　云、しかり。しばらく本に力をつけんがためにいへり。朱注によつて、聖語のあらましを得て後、多く聖語にわたりぬれば、經をもつて經を解て、聖人の語意に通ずべし。聖人の語には、含蓄の味ひ窮なし。直に聖人に對したてまつるがごとき事有。心を得て後、いよ／＼親切なることをおぼえぬべし

一心友問、當世學者の論に、養子といふことはなき義也、といへり。しかればとてたちまち家たえ、家内のものどもを流浪させんも不便なる事也。是につきても世中の人、學問をきらへるもの多し。聖人の法といへども、心においてしのびざるが如し　答云、大君の國郡を封じ給ふも同じ理也。一人を以て國郡を治めしむ、國郡を以て一人にあたへ、其

身をたのしましむるにあらず。先君の其國に養ひ置たるものは、一人として退去とあたはず、用に立も不立もをしなべて治養ふは、國郡の主の任なり。國郡主なければ、相亂て生をたもたざるが故なり。今家も又しかり。子孫なくして絕たるは、誰にても兄弟多きものゝ、いまだ家なく其役義をつとむべきものを撰て、位祿をあたへ、其家內の男女をやしなはしむべし。諸侯と成て其國の位祿をうくれば、其國の老役を養ふがごとし。其者同姓ならばすぐに祭祀をつぐべし。他姓ならば往々同姓を求て、我後の役者とせん。同姓其器なくば、我ちからを以て、祭事をたゝざるはかりごとをなすべし。源平藤橘等の姓はひろし、委しくたづねば同姓のなきことあらじ。同姓を養子とするは古の法なり。周人の百世といへども、婚姻不通の法も、同姓の親みをひろめて、人の後をたゝじと也。もし同姓なくば他姓といふとも可也。人は皆天地の孫なり。同姓にあらざるはなし。しばらく末をわかつものは、人倫を明かにし、禮を尊て禽獸をさるを遠からしめんとなり。其上大節を守るは君子の義なり。小節をとるは小人の事也。小人は小節を取て禽獸に遠かり、君子は大節を守て小人にとなり。政は小人の人情風俗を本とす。俄にして人情を變しむるときは、大道とげず。故に聖人も三年にして成ことあらん世にして仁あらんとのたまへり。養子入聟等は、今日本の風俗と成て、人情の安ずる所なり。君子たるものは人の非をそしらず、天を以てひとり立べし。天下の風俗と習こは、下にあるものゝ任にあらず。たとひ明君上に出給ふとも、俄に法を立給ふべからず。德化のひろまるにしたがつて、漸を以てうつりかはるべし　問、子路孔子の命によつて、射をみるものを退けられし時も、人の後たる者を恥しめられしとは如何云、これ聖賢のしはざにあらじ。孟子云、仲尼は甚しき事をしたまはざる人なりと。道理は道理にても、大場にて

人に恥辱をあたふる樣なる、不仁なるとは、今日本にてだに少し心あるものはせず。いはんや孔門にをゐてをや。家語には後人の附會のとあり。ことぐ〱く信ずべからず。當世道たてする學者は、凡情の勝心をもまぬかれず。利欲の根をだにたゝず、不仁を以て力量にまがひ、古人の跡を見て變通をしらず。得がたには禮法を守り、又得がたには國風をそむく。常人の君子の大義をとらざる事をそしり、凡女にも貞女の節を守らしめんとす。羊に虎の皮をきするを以て、道をおこさんとす。是に遠き時はおそれ、是にちかき時はあなどる。大道の罪人なり。たとひ虎の實ありとも、羊の皮を着て群をみだるべからず。たとひ光あり共、やはらげて塵に同じかるべし。是に遠ければ望とあり、これに近ければ恥るとあり。君子の學は忠信を主とす、文は時に中すべし

一朋友問云、江西の學によつて、天下皆道の行はるといふ事をしれり。儒仏ともに目を付かへたるは大なる功也　答云。尤益はあれども弊も又あり。しかと經傳をも辨へず、道の大意をもしらで、管見を是とし、異見を立て聖學といひ、愚人をみちびく者出來ぬ。江西以前には此弊をきかず。世間の學者目をさましたりといへども、いまだ德を好む人まれなり。粗學の自滿ついえは一二にあらず

一學友問、格物致知の心法は、古昔の經にもなく、孔聖の語にも見え侍らず。子思初て發明し給ひたるか　答云、易の六十四卦其位に應じて格知の心法あらずといふとなし。易簡明白にいづれへも通へる樣に、初てかゝげ出し給ひしとは、堯の舜に傳たまふ執中の心法なり。孔子の顏子に傳たまふ、非禮視聽言動することなかれと。これ皆格物致知の儀なり。曾子の一貫を忠恕とやはらげ給ふごとく、子思又孔曾の傳の心を述て、經一章とし給ふ時、格物致知といへり

問。視聽言動を云て、肝要の思を殘し給ふことはいかゞ　答云、四時といひて土用をいはず。元亨利貞と云て、誠をいはず。仁義禮智と云て、信をいはず。四に應じてはなれざるものはいはずして其内にあり。視聽言動の四のもの、思を主とせずといふことなし。其上顏子には思の格は不用ことあり。中人以下の學は善を思ひ、善を行て、惡を思ひ、惡をなすにかふるなり。心思躬行共に善のみにして、惡なきを善人といふ。凡俗を出るの初也。是より信美大聖神にすゝむべし。顏子はすでに大人也。惡念の纖毫に往來せざるのみならず、善念も又往來せず、何の思の格あらんや。しかれども三月仁にたがはざるの語あり。春夏秋冬みな三月にして相易るものなれば、三月といへば一年中の事也。年月日時をへて、終に仁にたがふことなし。然れども三月違はずといふものは、たまさかに暫の間、善念のきざしあることあり。おもふともなく、する事もなく、寂然不動にして感じて通ずる、聖人の心地にはすこしおよばざる事有。しかれどもたゞ一片の浮雲の、大虛を過るがごとく、それだに平人にありては、學べき程の善なれども、顏子にをゐては自然の體にあらざる故に、其善念を須臾もとゞめず、遠からずして復する也　問、心上だに如此ならば、視聽言動の末の事を告給ふことはいかゞ　答、顏子高明廣達の事にをゐては、聖人に同じ。今さら告給ふべきにあらず、平人より聖人に至るものは、本を務るに急なり。末のことには心もつかず、のこりあることあり。仁は天地万物を以て一体とす。殘すべきものなし。これによつて末のことを告給へり。顏子治國の論にをいて、略禮等を以てこたへ給ふ所にて知べし　問、先生の論は陽明子の論に似たり、朱子・王子精致にをゐては黑白のたがひ有とはいかゞ　答、愚は朱子にもとらず、陽明にもとらず、たゞ古の聖人にとりて用ひ侍る也。道統の傳のより來ると、朱王ともに同し。其言は時によつ

て發するなるべし。其眞にをいては符節を合せたるがごとし。又朱王こても各別にあらず。朱子は時の弊をたゞすべきがために、理を究め惑を辨るの上に重し。自反愼獨の功なきにあらず。王子も時の弊によつて、自反愼獨の功に重し。究理の學なきにあらず。愚拙自反愼獨の功の內に向て受用となる事は、陽明の良知の發起に取、惑を辨るの事は、朱子究理の學により侍り。朱王の世學者のまどひ異なり、地をかへば同じかるべし。究理こて事々物々の理こ、空にいひては人のうたがひあり。たゞ學者の心のまどひある所の事物によつて、其理を究るなり。されば是は初學の時の事也。大意心に知得すれば、いまだ不辨不知の物、千万の事前に來るといへ共、まどふべきことなし。異學の一代心を盡す悟こいふものは、聖學にをゐてはちからをもいれず、心をも勞せずして、遊びながら得ことなり

一心友問、貴老の御事を知て、ほむる人はすくなく、不知してそしる人は多し。聖人の道を學ぶは、名を求るにはあらざれども、令名の質ならずや。しかるにかへりてそしらるゝことは何ぞや　答云、人のほむるは我を勞する也。そしるは我を安ずるなり。我病者にして体氣乏し、勞せんことかなひがたし。安ずることあたれり。故にそしりは我をたすくるなり。知てほむるこ云も、愚に德ありてしたしまるゝにあらず。氣象のあひかなひたる人ならん。万人に一人の知人だに、我を勞すること甚し。そしる人は我にかはりて、我病氣をとはるなり。其そしるあまたの人にほめられなば、今までながらへてもあらじ。且德をもそこなはれんか。そしりは愚が過を格し、浮氣をしづめ、身の養生をなさしむる也。きくことをいとはず、ほむるは愚が過をまし、浮氣を生じ、氣力をへらさしむ。きかんことをねがはず　問、それはさもあれ、貴老の名をかりて不善をなし、且貴老におふせ申事多し。おもひよらざる惡名をこり給ふことは、道

徳の疵ともなるべきか　云、尤しらぬ悪をおほせられて、名をけがさるゝは無實の難題也。たとへをとるはをそれあれども、聖人をだに陽虎にまがひたり。大徳の人は難も大にして、又はるゝこともすみやかなり。愚がごとき不徳ののは、わづかに悪名など樣の難あり。本より凡人の品をまぬかれざる故に、はるゝ事もをそし。しかれども我心になきことならば、いふといふともあづからず

一學友問、儒佛の辨に至て、仏學にくはしからざる故に、彼れ仏を不知といへり。吾道を明さんがためなれば、仏をも學ぶべしや　云、彼と爭はんが爲に學びば非なり。其上儒仏の辨を好むは、道をみること大ならざる故なり。江漢以濯レ之。秋陽以暴レ之。皜々乎不レ可レ尚といへり。玉の寶たることをしらば、石を以て是を亂るべからずともいへり。たとひ仏學する事仏者にまさるとも、彼を非とせば彼佛を不レ知といはん。彼仏を知といはゞ、則吾子仏者ならん。仏者に儒學ひろくしたる者あれども、其道にあらざれば、心を用ることくはしからずして、理を見る事あらし。今儒者仏學を盡すとも又同じかるべし。自己だにまどはずば可也。人にとくべからず。我仏學せざれども、形容行跡をみて其心をしれり。しばらく吾子がためにこれをいはん。仏學流多しといへども、天台と禪とすぐれたり。天台は高妙なり。仏學のくはしきこと、禪にまされり。しかれども心に惑あり。禪は學あらけれども、ちかく心法に本付て要を得たり。惑なきがごとくなれ共、實はまどへり　問、まどふ所はいかん　云、仏氏の學は死を畏るゝによれり。故に是を云てやまず。禪さとれりといへども、死を畏るゝより悟を求む。聖學の徒、死生を晝夜とす。常なれば畏るべき所なし。故に死をいはず　問、形跡いかゞみべきや　云、心迹は形と影とのごとくわかつべからず。佛氏剃レ髮人

倫を棄るは、輪廻をおそるればなり。天道輪廻なし。しかるを輪廻といへるはまどへり。むかし鬼物を見たるといふものあり。これ眼病なり。其後見たるものなけれども、傳て恐るゝは眼病を傳る也。白石夜衣を見てばけものとし、氣たえたる者あるは此傳なり。其惑に狐狸の乘ずるもあり。むかし釋迦輪廻をみたるは心眼病なり。後世の仏者此心病を傳て、輪廻ありとおもへり。又白石夜衣の狐狸ありて、其信をます事あり。故に出家してまぬかれん事をねがへり。眞實道心の出家、もし輪廻なき理をしらば、一日も出家に住すべからず。たま／＼儒學して輪廻にまどはざる坊主ありといへども、或は渡世のため、或は其家の名聞などにひかれて、學力すくなければ、心ならず終もありさ見えたり

一學者問、心學をこりてより、儒學實におもむき、諸儒の思ひ入かはりたり。たゞ儒のみならず、近年禪學のはやり侍るとも、心學に目をさまし、敎やうよく成たる故なり。さて儒學は日々におとろへ、禪學はいよ／＼ひろごり侍り。しかれば心學は禪のさきがけとなれり。遠き慮なしとそしり侍るものあり、いかん　云、しかるにあらず。世は次第に文明になれり。唐にても初は仏流わかれてひろまりしか共、他は次第におとろへて、禪學のみのこれり。日本も後はさやうに成行なん。それ人は易簡なる事により易し、一向宗ほど易簡なる立法なければ、これに歸するもの多し。淨土・日蓮も後は一向の易簡に習てひろく成ぬ。近年文明にしたがつて、地獄極樂等の說を信ずる事うすし。是より後はいよ／＼さあるべし。禪宗はむつかしき事なく、易簡に敎てしかも悟りとてさのみ後生の地獄にかゝはらず、これ文明の時にあへり。今の禪は、愚夫愚婦のよらん事を欲して妙をいふ、是利心なり。祖師の傳來にそむけり。

この事なくばいよ〳〵盛になりて、他宗は皆をされつべし　問、貴老の學はゞかりなくして、人の志に應じ給はゞ、今は天下にひろまり侍らんに、なげかしき事也　云、しからず。すみやかに成ものは堅固ならず。俄にひろまるものは、長久ならず。民九十月に麥をまきて、わづかに生ずれば、甚寒にをさへられ、雪霜にうづまれ、これによりて根をふかくすれば、春雨に長じ、卯月の日に實をむすびて、豐熟するもの也。予が道もをさへあるは、麥の寒氣雪霜なれば、後世をこる事あらんか。たゞ其德なきことを恥るなり。達磨の仏心宗世にひろまることをにくみて、毒害せられしも、其身死して道は後世ひさり盛なり。異學といへども其德あればなり

一心友問、儒道おこらば仏法はほろび侍らんか　云、道を興す人は君子ならん。君子は力を以て物の興廢をなすべからず、我道おこらば仏法もむかしにかへりてよく成べし。なげかしき事は、仏者無道にして盛なれば、天道乘除の理にて、時ありて大半亡ぶべきか。すくなく成て又ひさしかるべし。亂世の亡びはいたましき事多かるべし。しかれ共法はいまよりはよかるべし　問、儒法には年に一度忌日の精進あり。毎月精進といふ事は、仏法より出たるにや　云、仏法にも本はなきことなりといへり。むかしは出家の作法よかりし故に、坊主になるものすくなくて、年に一度の精進にて僧のとき米たれり。後世は仏法渡世になりて、法すたれ戒やぶれ、難行なき故に、坊主澤山に成て、とき米たらず。親の事なれば、毎月おもひ出してよかるべしなどといひて、かくなりたるといへり。其死せる時の月日こそ終身の喪有べけれ、其時にてもなきに、毎月精進すべき理なし。故に君子は不ㇾ用。しかれども祭をせざる人は、俗にしたがふも可なり　問、一年に一度はおろそかなりといへるものあり、いかん　云、忌日は終身の喪にて、親死したる其

時月の其日は、終にあへるがごとく思ふなり。四時の祭は吉禮なり。孝子の心に親を死せりとせず、いける時もてなすがごとく、しかれ共神としてまつれば潔齋して我身をも神明にする道理なり。神はしば〳〵すればけがるゝ事あれば、むかしは潔齋して祭る事は、春秋と忌日と三度也。後世四時に成て五度となれり。其外五節句・朔望の拜は備て不祭とて、潔齋はせず。たゞ生る時、親の所へ禮に行に同じ。或は君のたまもの、或は遠來の珍物、或は初もの等を備へ、他行のいとまごひ、歸て又告るごとき事は、子の心入次第にて數なかるべし。年に一度の忌日の外は、皆吉禮なり。これ神道の義なり。毎月忌日なれば時ならず、吉凶あひまじはりて神道をけがすに近し、禮にあらず。故に君子は不レ用、生るにはつかふるに禮を以てし、死せるにもつかふるに禮を以する儀なり。上古は年に一度の忌日の祭もなかりしと見えたり。三年の喪の中ばかり凶禮にて、喪を除くはすべて吉禮の神道なれば、忌日の祭はなき道理なり。後世孝子の厚情より、一年に一度の月日は、親の死に逢たる事を思ひ出して、終身の喪の心なれば、むかしはなく共義を以て起してくるしからじとて、初たるとなるべし。今時終をしらぬ忌日をも祭るは道理なき事也　問、耆老毎月出家にとき米つかはし給ふ事は何ぞや　云、坊主は在家を賴て居者也。家々より養はずしては何とすべきや

一心友問。今の武士のよきと申は、弓馬兵法をたしなみ、昼夜これにかゝり居れり。武藝も世中の用に立とはなし。事あるときの心がけといふばかりなり。兵器は凶器なり。しかれば武士も遊民ならずや　云、日本は小國にて金銀多し、異國よりのぞむといへども、武國ゆへにとり得ず。武士の武藝をたしなむは、國の警固なれば遊民とはいひがたし。武士ながら武道武藝のたしなみなきは、遊民なるべし　問、吉利支丹あらためも、異國の敵をふせぎ給ふ事と承

れり、弓刀もいらず、人心をなびけてとるべき謀と申侍れば、むつかしからんか　云、しかり。北狄は外邪なれば治し易し。吉利支丹は内病なれば治しがたし。此内病の生ずる根本は、人心のまどひと、庶人の困究によれり。迷とけ困究やまば、根を絶べし。仏法の後生のすゝめにたよりて、それよりまさる法を作てみちびくなれば、後世のすゝめは吉利支丹のよる所之。中夏は制禁なけれども、すゝむるとあたはず。聖賢の國にてまよひなく、又農兵にて民の困究もつよからざれば也　問、しからば日本にも儒道ひろくならば、吉利支丹ほろびんか　云、尤無理にて侍れども、今の儒道には儒宗なし、各異見を立ていひがちの樣なり。いづれの儒學も、此國の水土にあひがたく、今の時に叶がたし

集義外書巻八終

集義外書　巻九

脱論六

一心友問て云、佛者には輪廻をいひ、儒道にはいはず。目の前に毛虫の蝶と成て、飛行をみれば、生れかはると云事も有なんか　答て云、むかし我友禪者に說て云、坐禪する事は何のためぞ。卽心卽佛何の益か有。禪者の云、衆生皆輪廻をまぬかれず。悟て成佛する時は、二度生をうけず。我友云、たね只ひとつにて、めぐると見たるな、花は根にかへると思へるが、造化の眞理をしらずして、まどへるもの也。たね一粒うへて、千にも万にもなれり。只造化の無盡藏よりわかし出す也。ひとつたねといふ事なし。又物の化生する事は、造化の氣のむし立るによつて、變化する也。ぬかわらも朽ぬれば虫と成て出生す。ぬかわらに何の輪廻の心あらん。自然の變化の理をしらず。夫生物に四あり、氣化・形化・卵化・變化なり。氣化といふは、父母なくして氣中より生ずるもの也。新池に魚は入ざれ共、魚の出來るは氣化なり。其外父母なくて生ずるに虫多し。人も初は天地を父母として氣化にて生じたり。すでに形有て後は、形相交りて生ず、是形化なり。四足の物は形化す、鳥魚の類は卵化也。雀海水に入てはまぐりとなり、きりうじの蟬となるたぐひは變化之。此變化の跡を見て、生れかはるの見出來たるか。變化するもの、其精神のこりて、生ずるにあらず。藥種の中より虫の生ずるがごとし。汝寂滅（シャクメツ）を眞空とす、聖人は寂感と仰られたり。こればかりにても、得心すべき

事なれども、かたぶきたる我慢にて、其非をしらず。汝寂滅といへ共、帷子のまゝにて冬までは得居ず。寒き感あれば、綿入を重ぬ。飢て飯を食す。かほど感ずる道理をしりながら、無理に滅せんとす。心の活物たる事を不レ知なり

一朋友云、眞言坊主のいひしは、佛法はよければこそ、如レ此繁昌して、次第に多く成、儒道はよからねばこそ、尊信する者まれ也。今仏者にくらべては、儒者の少き事は、大海の一粒のごとし。何と申さるゝ共、仏者には成まじきとの事也。是にはまけ侍り　答て云、それ則儒道のすぐれたる故也。日本の眞言の祖師、空海書にも、賢知は優曇花のごとく、愚痴は鄧幹のごとし。善をあふぐ類は、麒麟の角よりもまれに、悪に耽る類は、龍の鱗より多しとかけり、儒道はよき故に尊信する人まれに、仏法はあしき故に、したがふ者多し

一むかし我が友、禪者に問て云、今の淨土・日蓮・本願寺宗はいかゞ。禪答て云、釋家の糟糠、佛を願ふの瓦礫なり。眞言はいかゞ。仙をまじへ神をまじへて、仏者の形あるのみ也。陰陽師の愚痴なるもの也。天台はいかゞ。經說になづみて、雪中の兎の足跡を、跡へこむるがごとし。又眞言にも似たり。其餘はいふにたらず。禪はいかゞ。我が宗は佛心宗とて、悟りを以て至極とす。我が友の云、人の上にをひては明かゝ。身の上には、何としてくらきや。天台・眞言・禪共に、むかしはよくもこそ有つらめ、今は人民の賊也。禹湯の子孫なれ共、桀紂が悪はうたではかなはず。糟糠瓦礫は事の害ならず。今の佛者は、天下の害になる事甚し。米問屋の心行は、稲のはらみて、花のある時分には、大風吹がなとねがふ。夏はひでりを待てよろこべり。天下の万民をいためくるしめ、餓死させて、己一人の利を得んと思へり。如レ此のもの共、一向日蓮等の弟子にて、寺参すれば、其悪心をば露もさとさずして、念仏の功德を以て、欲悪なが

ら成佛すといふ。日蓮寺へ參れば、法華をそしりたる者だに、かへしては成佛すと。其故は、そしるもきゝたる故なり。況や一聲にても、南無妙法蓮華經と唱（トナフ）るときは、主親をころしたる惡人にても、成佛疑ひなしと云。これにましたる世界の惡魔（マ）はあるべからず。糟糠といふは最貧也。禪は是より甚しき事あり。むかしの禪は、悟道の機有者ならねば、あへしらひもせざりしときく。今の禪は大名富人にてだにあれば、いかやうの惡人にも、悟道をゆるし諂（ヘツラ）へり。昔の禪は、後生のまどひをはらしき。今の禪はまどはぬ者をもまどはす也。さとりだにすれば、何をしてもくるしからずといひて、歷々大身の心を亂ぬれば、淫（イン）亂にながれ、奢（ヲゴリ）を樂て、百性を虛（ムナシウ）し、諸士をくるしめ、文武の家業（カゲウ）を忘れ、人君の心行なし。是亡國の相なり。如レ此のあしき敎なくては、禪者のかくのごとく多して、時を得と云事はなきと也。いひわけせよといへば、禪者面を赤くして不レ言

一佛者問て云、耕也餒（タイ）在二其中一。學也祿（ロク）在二其中一。何とてかくいやしきや　答云、義の取やうとなり。たゞ義を行て、食を求ることなかれと也。天命と云ものあり。耕は食を求むがためなれ共、かへりてうへて死する者あり。學は道德を求んがためなれ共、自然に天祿ありてうへをまぬかる。利は求て得べきものにあらずとなり。むかしよき仏者の言に云、寺領を求め、物を蓄（タクハフ）るは、大に佛道にそむけり。よく心法をおさめ、仏道を行ずれば、法力にて其日はわたすもの也と。汝はじめより、法力の食を求て、佛道を修行するか

一心友問、何をか君子の儒といひ、何をか小人の儒といふ　答て云、儒といふは學者の稱（セウ）也。道家・仏家など云者のごとく、五等の人倫の外に、儒といふべき者有べきにあらず。小躰にしたがふものを、小人とするなれば、學問を名利のた

めにする者を、小人の儒と云。大躰にしたがふものを、君子と云なれば、學問して、性命に至り、産業（サンゲウ）は別に在て、學にかゝはらぬ者を君子の儒と云也　問、しからば今時儒者と云て、文學に長じて祿を受る者は非なる歟　曰、心ある者は非也。心なき者は非ならず。天性文才に長じ、文藝（ケイ）によつて祿を受る者は、天職（シヨク）を食なり。古はこれを史ともいひ、儒とも云。其實は一なり。この故に文才のみ有て、德すくなき儒者は、くだつて文筆の用をつとめ、道德ある儒者は、のぼつて高位大祿をも受たり。かたちは小人の儒に似たれ共、無心にして天命にしたがふが故に、小人の儒にあらず。心有と云は、實は利のために學びながら、色をはげしくし、言をたくみにして、己が非をかざらむがために、正道をあかさず、君子の儒をまぎらはすもの也　問、理學實學などゝて、人に敎へ、それを渡世とするは、出家の法力によつて、一生を過すがごとし。これを非といはんとすれば、人を治る者は、人に養はるゝの語有。これを是といはんとすれば、異端に相爭て五等の外の人のごとし　云、文才なければ史の職も不ㇾ叶。定見なければ理學にもあらず。德を好まざれば、實學ともいひがたし。武士の家に生れても、武道はきらひなり。農工商に生れたる者も、人の下にをる事をいとひ、すこしきゝ所を以て、異見を專にし、己が文才なきを以て、文才ある者の産業をそしり、言親切なれ共、心實ならず。語たかけれ共、心いやし。口に正道を論じて行そむけり。世に愚痴の人多ければ、實をば虛とし、虛をば實とす。三綱五常の道天道の善に福し、惡に禍し給ふ。目の前の正しき事をば信ぜずして、地獄極樂と云、なき事をば信じしたがふ者多し。異端の徒の人をまどはす所之。大道に志あるものは、言を以てただに世の非をためんとす。いはんや行を以てたむる事なからんか。たとへ心に私なく共、異端にまぎるゝの行はなすべからず

一問、善戰者は重き罪人なりといへり。然ば今の軍法者は非なるか　云、是又いふにたらず。古の軍者は、法にくはしきのみならず、大將の器量ありて、勝負の利をしり、たゝかへばかならず勝て、人を殺すの害多かりし故に、上刑に服べき者也といへり。戰に勝、國を合するといへども、天罰にて終には其主人も亡び、其身も絶たり。終に天下を取事は、合戰の勝負にはよらず。よからざれども其世にて、大やうなる寛仁にちかき人にかたづくもの也。唐日本ともに古今のためしあきらかなり。今の軍者には、將の器なく、勝負の利を知べき樣躰ならざる者多し。時代無事なる故にしられず。戰國になりなば、大方名もなき軍法者あるべし。大將の器量有主君をとりあはせたらば、其勝負の理にひかれて、少は用に立事も有べし。ひとり功を立べきほどの者はまれならん。唐の軍者は、大方將の器有て、將軍の任を得たり。日本にては、其器なきもよし。若あらば害いよ／＼大なるべし　問、山本勘介は軍者なれども、信玄家にをひて功を立たり　云。勘助は勝負の利に器用なりしもの也。其上信玄と云大將の器量有主君につかへたる故に、其得たる所あらはれたり。他の主人につかへなばしらるまじきなり。然共軍者にて道をきかざる者なれば、軍は上手にても、不仁なる主をとりたる故に、君臣ともに終には絶亡たり　問、聖人の道を學びて國をよく治め、士民を安むじたり共、軍法をしらで、戰國の時、信玄どきの功者にあひてはまけをとるべきか　云、軍法は本聖人の始め給ふもの也。六藝の中の禮にこもれり。吉凶軍賓嘉とて、禮に五の品あり。軍法は其一なり。戰陣にては一人作法正しくとゝのほらではならざる事也。古の軍禮者は、事をよく知て、勝をとる事は將の任なり。今も古の事をよく覺たる軍者は、重寶にても有べし。信玄景虎ほどの事しりの功者、よき大將にても、君子の陣に敵する事は成まじきなり。

景虎も信玄も、やう〳〵小ぜり合の功者也。合戰をだにも得もたざる大將なれば、おそるゝにたらず。況や今は此人々を祖としたる軍法者なれば、何ほどの事の有べきや。信玄景虎は坂東の名將之。毛利元就は、兩將よりも大にすぐれたり。大勇にして寬仁なり。軍法は義經正成の遺風あり。其跡大にして近代の及所にあらず。故に人しらず。信長秀吉の運つよき故に、元就はやく死去なり　問、或は唐の諸葛孔明流、源義經・楠正成流などゝいひ傳るはいかゞ　云、孔明流とて立たる軍法はなし。名をかりたるばかり也。其流ありとても跡のみ也。今の時處位には不レ合。義經流・正成流といふは、猶以名將の上手をせし其跡をいへり。今の人の位にはかなはず。なま兵法大疵の本となるべし。君子の學には軍法をば事とせず。しかれ共聖賢君子の道德には、文武を兼備たるものなり。天に陰陽有、人に文武有、心に智仁勇あり。君子の位に至ぬれば、大將の器量はをのづから備る也。智明かにして、時のよろしきをはかり、心うごかず、敵をおそれず、勇にして死をにくまず、仁にして土民の父母たり、衆の下知につく事、子の父にしたがふがごとし。しかれども戰をばこのまず、不レ得レ已して戰時は、必勝ぬ。正成どきの天質能人は、皆したがつて子弟となるべし。何の敵する事かあらん。若虎狼の姦勇にて、君子をも見しらぬ程の者ならば、つよしといふとも、うち亡すにをひては、何事の有べきや。此後亂世となりなば、唐の諸侯を連ね合せ、戰しむるやうなるもの出來て、庭鳥をあはするやうに、方々にて大名をいさめいざなひ、人を殺すを以て事とするもの有べし。久しく亂て治るべからず。今の軍法者は、其先兆成べきか。歎かしき事也　問、善戰て人を殺すを以て業とするが罪重き事は、今のすべもの切に、十百倍することをさとりぬ。新田畠をおこす者、それに次て罪重き事は何ぞや　云、是又不仁の君を富しめて、勢をつ

よくする事なれば、惡逆の根をます也。其上新田畠は、多は古地の害になるものなり。隣郷の害になるも有。國に不毛の野山多きは、牛馬を養ふにたよりよく、薪をとるによきもの也。新田またこれらの害に成ものあり。大方後の惡をのこすものなれば、軍者に次ての惡逆なり。堯舜の代ならば、重き罪人なりといへり。堯舜の代には、かやうのものはをのづからなければ、罪すべきやうもなし。まうけていへるなり

一心友問、治國平天下の條目ありや　云、孟子云、諸侯之寶三。土地・人民・政事。寶ニ珠玉一者殃必及レ身ニ。傳云。寶得ニ其寶一者ハ安シ。寶失ニ其寶一者危。といへり。後世君臣共にあしからざる時代有といへども、道を不レ學故に、大法を不レ知。たま／＼文學を好める人も、經書の上にのみ過去て、今日の人事に用る事を不レ知。道の行はれ、人民の安居する事かたし。其器量ありても、大法を不レ知者は、行事あたはず。細工に器用成者ありとても、規矩縄墨を得ざる時は、屋を作り、方圓を製する事あたはざるがごとし。學て大法を知といへども、其器量なければ行事不レ能。拙工に縄墨をあたへたるがごとし。其器あり、其法を知とも、人情時變に達せざれば、ひろくほどこす事不レ能。つかへとゞこほりて不レ通ものなり。其器あり、大法をしり、人情時變に達しても、時を得ざれば行事あたはず。鎡基ありといへども、時を待にはしかず。智恵有といへども、勢に乘にはしかずといへり。後世の人、政事の寶たる事を不レ知にや。法度を出す事かろ／＼しくあさはかなり。三の寶一もかけては國其國にあらず。土地ありても、人民なければ居こと不レ能。人民有ても、土地なければ養ふ事不レ能。土地人民ありても政事よからざれば長久ならず。政事はよければ寶となり、よからざれば害となれり。君と大臣との心にあり。愼むべき事の第一なり　問、後世器量も常人にすぐ

れたる主將の、文學ある者をめして、道をもきゝ給ひ、又下の事をしろしめさんがために、方々へ横目を廻し、世間の取沙汰までをもきかせ、又いやしき者の入道したるなどを、そばちかくをき給ひて、四方の物語せさせて、聞給ひたる有。しかれ共政道よからざるは何ぞや　云、むかしより學者餘多ありこいへども、道學と仕置こは各別に成てあり。一致になすべき者をいまだきかず。器量有人は知惠有故に、唐の法の行ひがたき勢ひを知て、用ひ給はず。されどもすてがたく貴き道なれば、聞給ふばかりなり。知惠なき人は、古の跡と法この今に行はれざる事をわきまへず。よきことゝはしりて、行度をもへり。然ども器量なきが故に、行と不ㇾ能。下に居ものは、勢ひなければ行事あたはず、是又幸也。又下に居者は、下の情を知べきとなれ共、肝要の事は不ㇾ知者なり。學力ありて道德に志ある人の、下に居者ならでは、政の本とする人情は不ㇾ知ものなり。たとへば民間にそだちたる地士をあげて、郡代・郡奉行・代官などにせばよかるべき事なれ共、道に志なきものは、民間にそだちながら、民を治る事はしらざる者なり。世間の取沙汰聞事も、少しの益はあれども、大なる益にはならざる事なり。いやしき者の入道などはとに人情にうときものなり。市井の者は、我得かたの事ならではいはず。上たる人心ありて聞給ふこしれば、後には害になる事多し。聞さるにはをされり。赤子をたもつがごくの深愛なく、眞の道をしらでは、何事もあさはかに成行て、是に似たる非となり、善なれどもあしくなる事多し

一　心友間、小節なれ共、公事訴詔なあづかりきゝ侍り。肝要の心持承度候　云、國郡道を失ふ事久し、故に士そむき民はなる。古の罪人は今の常人なり。悪人を穿鑿(センサク)しもこめば、無事なる者はまれなるべし、あるは民間の士のいへるは、

おびたゞしき悪人にて、天道も罰にあぐみ給ふべしと。まことに人多して、天に勝の勢なり。下の勢を見侍るに、多くは善人、不善人におさるゝ躰之。たゞうつたへ出ざるのみ。出る者は忿爭きはまれり。非道の者有共、あはれみてにくむべからず。教訓しことはりをいひきかせてなだめ決すべし。其上に非道の者、みづからやぶるゝ事あらば、不レ得レ已して罪をかろくすべし。悪のきざし出來て、悪人すくなき時は、罪を重くしてこらしたつ事も有べし。今の世のごとくに悪人多きときは、悪人の罰を重くすれば、悪人ますく〵多なるものなり。其故は左様に大勢かさねぐ〵死刑流罪にも行がたければ、後々は聞のがし見ゆるす。其勢を小人見知て、おそれざる者之。古人の過錢の法を立しは、罪過をかろくして、悪の類を斷むことなり。過錢をとられて身上のやぶれにはならざれ共、悪をする度にとりて、悪に益なきやうにすれば、後にはせざるものなり。奉行は悪人多く出來ても、人をそこなはず、家をやぶらぬ事なれば、あぐまずして見のがし聞ゆるすといふ事なし。世間盜賊亂行の本となる博奕をとゞむるに、殊更此法よし。過銀は主人の有とせずしてほどこしに用べし。それ姦悪のかくれたるを察し得る共、我知の明を悦べからず。知に自慢する者は、姦悪をにくむこと甚し。其人の罪にあらず。上道を失ひて、いたす事を知べし。道理を持ながら、をしこめられたる者有。よく心を付て、其いきどをりを散ずべし。をしこめたる者をも、罪すべからず。只教訓すべし。理非の賞罰に心をとゞむべからず。はなれて慈恵は上よりくだるの活法を行べし

一心友問、中夏にては、儒書醫書共に人の爲によき事をば天下にひろめて、秘する事なし。日本にては、秘するもの多く侍るは何ぞや　云、秘するにも秘せざるにも、主意餘多有べければ、いづれをよしともあしく共いひがたし。一旦世

にもてはやしても、跡なく成行書多し。發明らしく、利口なる事をばいへども、根なき書成故に、後まで傳はらざるあり。小知にして名聞の心よりひろむるも多し。又ひろめて人の害になる書もあり。みづから愚にして、人に愚を教るも有。これらはひろめてあしきなり。功利の心より、人に奥ふかくおもはせむ爲に、秘するもあり。あらはしてはあさまになる故に、秘するもあり。世のそしり人の嘲りをかへりみて秘するもあり。初學のために書をあらはせども、十分心におちざれば、後學をあやまらん事をおそれて、出さゞるもあり　問、翁問答にて志のをこり、それより問學してひろく成たる者餘多侍り。志だに出來侍れば、四書五經を傳習して、いか樣にもすゝみぬれども、志をおこす人なき故に、能生付の者、餘多むなしく終侍り。天の此民を生ずる事、先覺をして、後覺をさとさしむる理なれば、人のまどひを解き、邪を正すべき言の出るは、天のあたふる所なり。しかるに其書を秘し、其書をかくして、數千の英才をひらかざるは、天の罪人なり。たとへば一國の人民を養ふべき天祿を取て、ひとりたのしみをきはめ、數万の飢寒をかへりみざるがごとし。貴老の書も、出次第にして、さのみふせぎ給まじき事と思はれ侍り。江西の學流とて、無學無知の者共、みだりに説ひろめて、異端の樣に成たるもあり。世間に貴老の學術をしらざれば、罪一人に歸し侍り。第一には江西の學術のまどひを解、第二には世間の唱へあやまりをもひらき度事なり。あまりに人情をはゞかるも害をおそるゝに似たり　云、しかり。愚がかな書も、無學不文字の者の、吉利支丹にまどはされぬほどの益には成べし。天地文明の運と見へ侍れば、百歳の後は文學盛なるべし。かな書などはみる人も侍らじ。たゞ二三十年の間の助とするのみ。今も經傳をみる人のためには用なし。やはらげて無學の者のためばかりなり

一學友問、むかしより借錢公事きかずといへる法あり。人の物をかりて、かへさゞる道理なし。横道にて初よりかへすまじきの心にてかるものあり。左樣の善惡是非は、奉行所に沙汰すべき事ならずや　云、理屈をいへば、左樣なれども、世の勢をいふものはしからず。むかしより借錢公事きゝ給はざるは、情勢にあたりたる所あり。天下は天下の天下なりといへり。金銀米穀は天より天下の人の爲に生ずるものなれば、一人の私すべきにあらず。生れ出たる時は、貴賤共に一衣を着ず、一物をもたず。金銀は貧賤富貴の命によりて、しばらく來往す。代々子孫に傳る事あたはず。今日己が有かと思へば、明日は人の物となる。天下國郡も又しかり。貧なるものは、富る者にかる。初はかへすべきと思ひてかれ共、本より不足なるによりてかりたる故に、其元利を出せば、いよ／＼不足して、かへすとなりがたきものあり。又奢て用たらざればかり、いよ／＼奢て借錢おほくなりて、かへさゞる者あり。又あぶれ氣にて、初より何のをぼえもなく、かへすまじき心根にてかるものあり。かやうの品々まじはりて、しりがたし。末はあしき品のもの過半之。其罪をたゞすときは、理非はさる者にて、事のさはぎともなるべし。善惡共に吟味なく、きかざるはまされり。人にかすものは、利をとるべきためにかす事なれども、其財不仁不義にしてあつまれば、散ずべき時節到來して、利心によりて失ふものあり。又さのみ不義のあつめならね共、天物を久しくわたくしにせしをこたりによりて、おとろふべきときに及て、損ずべきとてかす者あり。これ財用の流行する勢なり。勢のうつり行にまかすれば、無事なり。この情勢をしらず、家中へは主人よりかし、百性には代官などかす時は、とらざればならず。出さではかなはざる事になりて、せんかたなき時は、家中百性ともに困窮して、後々はやぶれにちかくなるものなり。四海困窮せば、天祿なが

く絶んと聖人ののたまひしごとく、國郡も變出來るものなり。故に貧富の命分は、主君奉行下知をくはへずして、勢にまかすべし。主君は武士の不ㇾ得ㇾ已の難をみて、微なるときに心をつけ、奉行は民の困窮を初にすくふべし。大になりてはちから及べからず　問、しからば君子もかりてかへさゞる事あらむか　云、君子はこれを初にふせぐものなり。身の分限をはかりて、出入し、よく貧を安じて困窮にうつされず。其上名聞利害によらされば借錢せず。善不ㇾ得ㇾ已、世の勢によりてかれ共、必ずかへすべき道理あり。國政は君子の爲ならず、小人を治るものなれば、小人の情と、世の勢を知べき事肝要なり

一學友問、達磨より初て禪家、妙奇特をきらへるは尤なり。しかれ共元祖の釋迦、神通妙用をいへるは何ぞや　云、是も其國人によりて、かはれる道理殊勝なり。もろこし人と、天竺人とは性質かはれり。釋迦は大慈大悲の心を以て、衆生の惡をやめ、善をなさしめんとす。幼少の子どもをおどすが如くなる方便あり。これ天竺人の愚蒙によれり。後世の佛氏、奇特をいふは、釋迦の心とは各別なり。人に尊信せられむとおもふ心よりをこれり。古人これを利心なりといへり。釋迦に此利心はなし。釋迦を中國の聖代、我朝の上世に渡しなば、佛法をとかんと思ふ心は出來べからず。達磨も中國にて、聖學のすたれし時節にわたりしゆへに、直指人心見性成佛の旨を教られたるなるべし。聖教神道にてよく治りたる者を、我仏法に引入むの我心は有べからず。同じ仏法にても、日蓮は他宗をそしりて、我宗に入むとす。淨土一向たがひに彼を非とし己を是とす。彌陀といひ、妙法といふ。言のかはりはあれども、其我執風行は同害なし。利心のをもむき一なればなり　問、後世をいひておどさずは、愚人はおさまらざらんか　云、天竺はさ

もあらん、善人は成仏し、悪人は地獄に落こいはゞ、せめて可ならん。今淨土・一向・日蓮宗の教は、いかなる惡人も、釋迦阿彌陀をたのめば、成佛うたがひなしといふ。これ善を退け惡をすゝむるなり。しかれども人々をして、惡をなさしむる事あたはざるは、仁義禮智は天道なり。人皆固有して生ず。故に惡人こいはるゝ事をはづかしく思へり、今佛法の教を以て、此天性の靈明を涅にすれ共緇まず、磨こも磷がず。いはむや佛法の教なくば、今よりはよからん

一心友問、世間次第によき人の生れざるは何ぞや　云、風俗のおとり行がゆへなり。王代には天子みづから三種の神器を師こし給ひて、御身をはなたれず。智仁勇の德ありて、天下にのぞみ給へり。しかのみならず、いにしへは大學あり。勸學院・淳和院・奬學院・學館院の學校あり。守護・國司・受領の人がらをゑらびて、諸國に敎しめ給へり。國郡いづれも學校あり。此風をころふるにしたがひて、王者の威くだりて、武人大君となれり。武家の代こなりて後は、人民に敎るの道なく、たゞ爭闘をおさむるを以て事こす。心をおさむるの敎は、佛者にのみまかせたり。佛敎の初は、人の惡をやめて、善をなさしめんとす。其說王道の正にあらずといへ共、小補有に似たり。近來は人の善を亡して、惡をなす事をつこめこす。出家の心行甚無道にして、欲心深厚なり。愚がわかき時分までは、武士たる者、金銀米穀の事、利得のものがたり、料理ばなし、色欲の言を恥とす。文武の二道ならざればいやしこ思へり。詩哥管絃のあそび、弓馬のわざ、代々の名將勇士の物がたりなごなりき。今の武士の物がたりは、あき人の會のごし。文學は儒者坊主のわざとし、詩哥管絃は、公家の事こいひ、武勇は武藝によらずといひて、衣服・飮食・家居・諸道具等に美を盡し、酒色にふけり、用たらざれば下をくるしめ、民をむさぼるのはかりごを、心とするのみなり。生れ出るより、是を習の

外、道ある事をしらず。人才のくだり行事、むべならずや

一學友問、貴老誓言誓紙したまはざるは何の義ぞ　云、信義亡てちかひしげし。朋友の道は信なり。日々に誓言を以て信とするは信なき也。事どにちかへば、心にもいらず、忘るゝ事もあり。今は誓言を信ぜざると半なり。君臣義を失ふによりて、誓紙を以て事をなさしむるなり。誓紙の上は横目も吟味勘定も、有まじき事なれ共、又其上に奉行あり、横目あり。勘定吟味をとぐれば、上より誓ひを信ぜざるなり。故に下も誓を事とせず。うたがふべくは、誓紙はいらざるもの也。うたがふまじくば、誓紙の上には何事も入まじき事なり。予心に信義を立んと欲す。故に人にちかひを求めず、みづからちかはず。人の信ぜざるは、人のうたがひなれば、われあづからず。我信にをひて損なし。ちかひを以て信こせば、ちかはざる事は皆僞ならんか。君子は事として信ならずこいふとなし。ちかはざれども、一言の約をたがふは自欺なり。則天理にそむくなり。天理にそむく處には、則神罰あり　いかんとなれば、鬼神は福善禍淫なり。善は仁義禮智信より大なるはなし。惡は五常をなみするより先なるはなし

一心友問、程子云、老子曰、非$_{二}$以明$_{一}$民。將$_{二}$以愚$_{一}$之。其亦自賊$_{二}$其性$_{一}$矣と。佛氏も亦云、智慧を殺せ〳〵、利那も殺生せざれば、地獄に入こと矢のごとしと。淨土・日蓮・一向の宗門、其言かはれるがごとくなれ共、愚智に佛を念ぜしめて、明盡なきは老佛よく相かなへるか　云、程子は老子の主意を察するにいとまあらず、其時の老者の賞えによりていへるなるべし。老子民を愚痴にして、頑妄ならしめんこ思へるに非ず。世間機巧の知、利害の謀は、万患の源なれば、此源をふさがんこす。機巧謀計、利害の知を尊ぶ者の目には、無欲正直の人をば、愚なりこ思へり。誠の道に明かなる

ものは、をのづから謀計邪僞につたなし。世の道を說者、人をして德に入しむる事不能して、才を長ぜむとす。誠を思はしめずして、機知をひらかんとす。これ世の明かにするといふ者は、僞に近し。故に老子歎てしかいへり、德は拙に似て愚なるがごとし。愚にせんとすとは、德に近付しめんことなり。其言抑揚甚し。今の佛氏の說は、人の良知良能を亡し、天眞の神明をくらまして頑愚とす。故にいにしへの愚は直なり。今の愚は僞のみ

一心友問、聖人おこり給はゞ、井田復すべきや　云、聖人おこり給はゞ、大道復すべきのみ。井田などの事は、聖人其一時の利によつて、制し給へり。これその跡なり。いにしへと今と、時勢大に異なり。古法の今に行べからざること多し。井田其一也。ことに日本の地形に相應せず。よく學ぶ者は聖人の意を取て、あとによらず。聖人の意は仁政なり。仁政はいづれの國にも、行べからざる時なし。今の時所位によりて、仁政を行はゞ、大道の復せるなるべし　問、日本の地形井田にたよりならずとのたまへども、算用づめにする時は、ならざる地なしといへり。もろこしにても、地の高下廣狹、不同なる所にては、算用づめの井田ありといへり。いかゞ　云、民の田地を奪ひて、井地とせんは、井田の實を失へるなり。又民に井田の十一をとらば、武士飢て亂逆出來べし。いまだ民の手にわたらざる新地にして、井田をせんは、聖代の法をうつしてみるえ。しからばなを算用づめは詮なし。正しき井田をなすべき事なり。もろこしにても、先正しき井地をなし、地形の井田にならざる所は貢法あり。貢法は井田の形をすてゝ、實をとりたるものなり。井田の實は十一なり。故に井田のなしがたき地形にては、たゞ十一をとるのみ。先井田あり。其かたはら井地になりがたき處、貢法と二にするもたよりならざる事ありて、算用づめにしたるもありと見えたり。いまだ井田の

正しき地形、ひと所もなきに、算用づめの井田をせんよりは、實をとりて、貢法をなすべし。日本のいにしへは貢法なりき。故に其名殘にて、今も年貢といへり。もろこしもむかしは農兵にて、士民わかれず。軍役民間より出たりき。故に貢物十一也しかども、公用不足なし、井地は八家を一組とし、死生相伴ひ、疾病相助け、患（クハン）難相すくひ、軍陣あひはげまして、一人すゝまず、一人しりぞかず、八家一人の手足のあひたすくるがごとし。貢法は五人を一組とす、國用軍用備りて、文武車の兩輪のごとし。農のいとまに應じて、學校の政、孝第忠信の教ありて、五倫和睦し、禮樂弓馬のあそび有て、風俗美なり。風雨にあたり、寒暑をしのぎて、身躰すくやかなり。山野にかりし、川澤にすなどりするは、農の害を除て、武事に鍛錬せしめんとなり。故に軍士は、農兵よりつよきはなし。農兵となれば、をのづから十一の貢法行はるゝ勢あり。治世には士ゆるやかに、民困窮せず。軍國には士民相和して、勇强なり。戒めずして質素なり。しかりといへ共、今のならはしにては、賢君良相ありとも、俄にはかへしがたし。仁君相續おこり給ひ、業をはじめ統をたれて、士民相好むやうになりなば、治世永久なるべし

一舊友に告て云、貴方戰國ともなりなば、何の用にも立給はじ。武士の名をぬすみ、知行をぬすむは、貴方達なるべし。舊友色を變じて云、何といふ言ぞや　云、貴方家内の者にあはれみなく、民に不道なり。是を以て軍用達すまじき事を知なり。貴方常に云、事あらば侍下人かけて二十人あり。百性をかり出して、以上三十人の覺悟ありと。大坂陣、嶋原陣のやうなる事ならば、小屋場までも供すべきか。此二陣は天下一同の時にて、敵はたゞ一城のみなれば、家頼百姓等の、主人地頭をあなどり、うらみを報るにたよりなし。若北條の末の亂れ、尊氏家の中比よりの兵亂のごとき事

あらば、貴方三十人の者、戰場へは一人もしたがふべからず。筋目あり、代をかさねてつかふるもの、幸に心剛ならば、一人も供すべきか。少しよはめあらば、小屋までも行者あらじ。水くみ飯かしぐものなく、小屋をはり馬をかふものなくば、勇氣へり、心躰つかれて、すゝむ事あたはじ。馬つかれ足損ずるとも、くつを作てはかする者あらじ。たとひ死をいたすとも、歩侍一人武者の勇なり。これ死すといへども、知行盜にあらずや。歩侍は、常に諸事をかろくして、身無病に、手足つよし。貴方達俄にかちたち、一人武者となり給はゞ、彼歩侍のはたらきも叶べからず。難苦をしのぐ事もおとるべし。心斗はたけく共、歩侍の行所までゆく事なるべからず。これ名をぬすむにあらずや。高知行をとる人は、人多きを以て貴しとす。人多く扶持せんための知行ならずや。あれ共なきがごく、君の大事の用にたゝざる人の持樣は、不忠の至なり

一學友云、今の世の武士の情は、民に不仁なるを以て、其道を得たりとし、仁なるをば、其道を不ㇾ得とす。たま〱民に憐みある人あれば、大にそしりいかりて、慈悲に過て、百姓のみをめぐみ、家中にはおろそかなり。事あらば百姓のみ用に立べし、とあざけり、百姓は富て奢といひ、饑饉凶年にて、民にうへたる色あり。奉公をのぞむ者、男女となく道路にみち、給分とらず共、つかへんといへども、かゝへをく者もなし。乞食すて子をほきを見ても、不便とはいはず。國主郡主仁君にて、うへを助け給ひ、もしはわらびの根をほり、草を食すといへども、乞食に出るもの見えざれば、百性共たくはへあれどもなき言にならずといふといひなせり。民はいかなるあだかたきの末にてか、かくにくまるゝならん。きのふけふまで、同じ樣に百性をにくみし者も、郡奉行代官と成て、目にちかく民の困乏を見ては、あはれむ

心出來て、むかしの心を變ず。しかれ共多くの傍輩、組頭用人の歷々ににくまれてはあしき故に、不便と思ひながらも、無二是非一人情にしたがふと見えたり　云、近年も民の困窮きはまりし天罰にてや、凶事出來、主君國を失ひ、家中の者牢人し、難義に及たるあり。若戰國とならば、國亡び妻子とらはれて後、日來百姓になさけなかりし、其うらみの程をしるべきのみ。主君をたをし、身を亡し、妻子に難義をせさする事を願ふは、愚の至なり。武士は常の祿あれば、たとひ凶年なりとても、難義なるといふばかりにて、饑寒には至らず。百性は年中辛苦(ク)して作出したるものを、のこらず年貢にとられ、其上にさへたらずして、未進となれば、催促(サイソク)をつけられ、妻子をうらせ、田畠山林牛馬までをもうらせてとらるれば、其百性家をやぶりて、流浪し、行方なきものは乞食となり、たま／＼村里にはさまり居といへども、凶年には餓死をまぬかれず。甚しきものは、有無の差別をもしらず、水せめ・簀巻(スマキ)・木馬などのせめをなす。これによりて、病つきて死し、或は病者になりて用にたゝざるもあれども、いむ事なれば、うつたへもならず。凶年にて百性の迷惑する時には、よき田地山林屋敷等を、下直に買得などして、富人はいよ／＼身代よろしくなるものあり。村里かじけて、とるべきやうなくして、兒をさぐれば、富人も諸百性につれてともに兒さがりて、ます／＼富有なり。此富有の民、五十家百家の中に一二家有を以て、百性ゆるやかにて、奢といへる成べし。豐年には薪蕢をこり、木の實などをうりて、何ぞの祝義事には、酒肴を求る事あり。大勢の事なれば、一村より一二人づゝ出ても、城下の町にてみる時は、多きやうなり。これらをみても、百性はたくはへ有やうにいへり。彼も人なり。かやうの事までも、ならざるやうにと思へるは、あまり不仁なり。春より冬にいたり、あくるよりくるゝまで勞苦して、武士をやしなふ者なれば、少

し酒肴にても求るをみては、悦べき事なるを、武士の心くだりて、いやしく成たるゆへなり。わかき人々は、幼少より見習ひきゝをきて、たゞ如ㇾ此ものと思へり。心をつけてかへりみば、はづかしき事ならん。風俗いやしきゆへなり。なげかしき事ならずや

一學友云、世の勢といふものは無二是非一事也。一國の中、何の用にもたゝざる者、親の跡とて知行を取、家人をいかり、百姓をしへたげ、俗に催促人といへる者のごとくなる者多し。用にもたゝざるはせめてもなり。君のため國家のため、害になるものも、知行をとりて驕泰(キヤウタイ)なる者あり。隨分よき士ありといへども、民間におちぶれ居て、よび出さるゝ事もなし。牢人なればましてかゝへらるゝ事もなし。主人かゝへたくおもひても、いひ出す事成がたし。臣すゝめたくねがへども、あたはざるものあり。同じ樣に用にたゝざる者には、肝煎も有て、かゝへらるゝ事也。一國二國のみならず、大方如此し　云、君子は天命をだに我より改べし。いはむや此勢ひは、君たる人の不德よりなれるものなり。君に勇知あれば此勢ひ生ぜず、用にたゝざるものも、親先祖の跡にて、やしなはれ居とは、包荒の仁なればよし。其催促人のごとく、家人百性等をくるしむる事は、敎なければなり。國家の害になるものは退くべし。善人あらば擧用ゆべし

一舊友云、彼小人近年勢ひを得て貴老の敵となり、あだをなしたる事あげてかぞへがたし。天罰にて此間は、散々首尾あしくなりて、氣味よき事也　云、是小人女子の心なり。彼が勢を得て、虛說を作り、あだをなしたるは、彼が惡なり。其時に其惡はにくむべし、いま彼が惡積て、おほふべからず。人罪せざれば天罰するの時いたれり。おちめにな

りて心氣かじけ、廢亡するは小人の常なり。かへりてあはれむべし。其衰にのりてにくまんは、彼に同じき心なるべし。戰場におひて、敵打物を持て我にむかひ來らば討べし。すでに敗軍してにぐる者の背をきり、落人を求めてころさんは、君子の軍にあらず。人を多く殺したりとて、軍に利あるにあらず。勇武知略の勢を以て、敵をとりひしぎ勝べし。其勢によりて、彼みづから死せん事は、不レ及二是非一也。敵といふとも力おとろへて、手むかひする事あたはざる者は、助てさらしむべし。いはむや人のよはめをみて、あだをむくひんは、あさましき事なり。かの東西をもわきまへざる百性などの、地獄をおそれ、佛を拜し、念佛題目よりほかの事をしらざる者こそは、年來つらかりし地頭の亡ぶる、そのおちめをみて、其妻子をはぎとり、或はとり者にし、殺しなどもすなれ

一學友問、我舊友三年の喪をつとめむとて、山家へ引こもる有。平日の心にあらず。又病者なり。心得がたく侍り　云、是かならずゆへあらん、喪の名によせて、世をのがれんとするなるべし。事なくてのがれば、人のためよからぬ事もあり。のがれがたき勢もあり。三年は久しき事なれば、喪といひて退居せば、其中には人も忘るべし。其まゝに出ざらんは、目にも立まじきと思ふなるべし。それいにしへの君子の禮を行事は、人の相繼てなすべき事をするなり。日本は小國にて地氣うすし。人の根氣つよからず。其上に數百年のならはし厚からず。たとひ志ありといふとも、數世習ひたる氣したがふべからず。万人に一人すぐれて氣力あり。喪をつとむるといふとも、機者有がたくて、かへりて他の善行をふせぐに至るべし。たとひ無病有力の君子出る共、今の時三年の喪はなすべからず。後世道行はれ、人の氣力すぐやかになりたらんときはしるべからず

一學友歎きて云、藤樹の學は陽明流の學といへり。朱學にたよりなきが爲に、ふせぐ人多し。しかりといへ共天下の公地にをひて、藤樹の學と稱して、數百人をあつむる者あり。又諸大名の國に行て、藤樹の學流と号し、爭逆の事出來たるも二三所あり。しかれ共公義の寛洪、何のとがめもなし。たゞ貴老の學のみ、教學共に困窮す。其故をたづぬるに知人なし。これ何の罪かあるや。不孝子も孝子となり、不忠臣も忠臣となりたる事は聞しなり。しかれ共世の虚説によりて、親は子をいましめ、君は臣をふせぎて、此道學をきく事あたはず。親しき同志のみ、諸方をかぞへて、二十人には過べからず。公の學を聞て、世のさはりをなしたる者なし。しかるに罪あるものはふせがれずして、罪なき人ふせがるゝは何ぞや　云、予徳をつむ事なくして、學淺し。此不徳淺學にして、當時に人に用られ、さはりなくして教學相長せば、學は淺きに終て徳に入事なかるべし。戒めて徳を内につましめ、學を後にふかくせしめんとの慈命なるべし。其命に應ぜざらん事をはづるのみ

一いにしへの人、凶年には衣服・飮食・家屋・器物よりはじめて、万事をはぶきて、民をめぐめり。後世凶年なれ共、はぶく事なし。用たらざれば民をむさぼり、家人の扶持をはなし、或は其物成切米を減ず、かくて其身の衣服常を變ぜず。しかのみならず、一門他門振舞の往來あり。國郡の主の公義は、家中をうごかさず、民を窮せしめず、禮用軍用備有を第一とす、しかるに是をば内所の私事としてかへりみず。同じ無道人とのみ寄合て、飮食衣服家屋器物、無用のついへをなすを以て、公儀とす。この故に民に取事凶年に應ぜず。民間日々に困窮し、流浪人年々に多し。人を扶持はなし、祿米を減じ、民に飢たるいろあり、かくのごくにして、一種のさかなをもとめ食するも、はづかしき事ならずや。

恥べきをはぢざれば義心ほろぶ

一禮は治國平天下の大用なり。禮おとろふるときは、亂日々にすゝむ。後世の人、無禮を美目として、貴賤の分なきがごとし。無禮のものをいましめず、かへつて立身するものあれば、禮讓日々におとろへて、相たがふるのみなり。妖怪これより大なるはなし。天に出るの夭をおどろきて、人に出るの夭をしらざるなり。一分己を利すれば、一分人を損す。人の怨つもれども、勢ある人はしらず

集義外書巻九終

集義外書　卷十

論脱七

一心友問、帝堯許由に天下をゆづらんとし給へり。許由は狂者なれば、其治道大僴ならん。親の喪をもせじ、祭をもそなへじ。棺槨はなはだ省略なるべし。聖人の禮儀政刑は、絶るに近からんか。又狂も思へば聖となるといへば、ゆづりを受て天下を治めんと思ふ心だにおこらば、禮樂政教も聖人のごとくなるべきか　答云、禮儀法度は聖人の糟粕なり。そうはくを尊て、神聖の眞を不レ知こと久し。誠有ときは禮文法令は次第におこり易し。たゞ立がたきものは誠なり。狂者は情のまゝにて禮法にかゝはらざれども、質素にしてかざりなく、無欲にして求なし。財散じ民集り、金銀珠玉器物をたからとせざれば、あらそひうばふものなく、おかしぬすむ事なし。美を見ざれば夷狄もきたらず、物欲の害する物なければ、天眞こゝに存ぜり。これ上世の至治也。帝堯は太古の至治を欲し給ふ故に許由を思へり

一心友問、世の學者のいへるは、貴老の道學は老荘の道に近し、法は道にあらずと云てより給はず。いにしへの法の今に用べきものあり。其格法の中に、道をのづから寓せり。貴老は聰明の質なるに、異端に落給ふはあたら事也。我學に入ば、世の助となるべき人なりとの事也　答云、まとに過分なるひはん也。今の朱學と哉らんにて、後世に道おとり、天下平治せば何かあらん。れき／＼道學を任ぜらるゝ人々あるときけば、予がごとき者なくとも、何か事かけ侍

らん。予が見る所非ならば、予一人むなしからんのみ。みづからをしからぬ身也。人何ぞをしまん。予が見る處は、今の王學朱學、格法などいふものは、たゞ一流の學たるべし。後世は今よりも多なるとも、其流に器用なる人のみ集り、禪宗律僧などの世にあるごとくにて、治國平天下の教とはならじ。もし國主世主など、すこし用給はゞ少害あるべし。多用給はゞ大に害あるべし。予が學は格法より見る時は大簡にして、莊老の流に似たり。政教にほどこし、天下に用る時は水土によるの道ならんか。もし王者あらば、必ず法をとらんか。是ならば大に是ならん、非ならば大に非ならん。其人を待のみ

一學友問、をびたゞ敷佛法の繁昌也。かくてもたゆる時節あるべきか　答云、我實の仏者にかはりて見侍るに繁昌にてはなし、仏者の驕奢無道と申ものにて侍らん。しかれば今の繁昌は、仏法すいびの凶相なり。百年の間には今の半分か、三分一になる事有べし。よき事だに盛衰は道理の必然なり。まして無道にして、奢をきはめばいかでか長久なるべき。さりながら奢を天よりそがれたる斗にて、すいびと見るも、今の繁昌よりは、佛法の實のためにはよからん、たゆる事はあるまじきと思ふ處あり

一學友云、僧たる者、千人が九百九十九人までは身すぎにこそ出家し侍れ。眞實道心の坊主はまれなり。俗もしだひにかしこく成て、心からなどはさるゝ者は、すくなく成行、近年はきりしたんにかゝりて、出家の身すぎ澤山なれども、佛法にて吉利支丹のふせぎもならず、せんさくのたよりにもならざる事おのづからしられ侍れば、のち／＼せんなき事に思ひて、請人にも取侍らじ。さあらば本より人の信はなし。請人貧にはくるしめり。寺をたのむ者まれに成行、

たゆるに近かるべし。其内亂世にもなりなば、三十年の間には十分一ものこり侍らじ。かさねて治世の時節には、文學ひろく成て、人々の眼あき侍らば、誰か仏者の言を信ぜん。こもし火消なんこして、光をますごく、近年の繁昌は亡んこての奢こ存ゆ。百年の後は儒道興起して、天下大平なるべし。さもなくば吉利支丹の國こなるべきか。いかさまにも仏法はたえなんと思ひ侍り。答云、道理は至極し侍りぬ。予もむかしはさ思ひしが、近比日本の水土により、山澤草木人物の情こ勢とを見侍れば、易簡の善ならではあまねからず、長久ならざる道理あり。佛法には不仁なるこころありといへども、易簡なる處ありて、日本の水土に相應せり。この故に千餘年に至てかく行はるゝ也。近年は仏者の奢に、仏法のいのちなる易簡を失ひ侍れば久しかるまじ。天より奢をそがれ、すいびのごくならば、又々久しかるべし　問、仏者は不仁なるだに、易簡一つにて立侍らば、我が道の仁政、易簡ならば、いかばかりまさり侍らん。しからば終に聖神の道行はれて、西戎の異法は亡び侍らざらんや　答云、易簡の善を行て、水土に叶ふ學者ありがたかるべし。朱學王學なごゝて、世にあらそひ侍れども、皆易簡の善には遠し。予たま〳〵大道をいはんこし、行はんとすれば、莊老の道也、異端也、などいひ、あらぬそしりまでもつけまし侍り。予は一人にして助なし。彼は助多ければ、終に悪名をかうぶりて獨身となりぬ。日本の水土には、周の禮のやうなる文備たる事は、あまねく久しくは行はれざる道理必然也。周の禮法にくらべては、老莊の道ともいふべきまで、大簡になくては、天下に用て後世に行はるゝ事はならざる也。實は老莊にも、何にもあらず、上天の時にのつこり、下水土によるの大道之。跡を見て眞を不ㇾ知人とは、こもに道をいひがたし。云まじき者にいひ、そしりを得ば、予が不明也。然ごもそしりをおそれていはずば、

後世知人あらじ。格法を用て亂に及たる時、予が言のこらずば、道はやむに近かるべし。願は上古の神道をかへし、誠を立てもろこしの法にもかたよらず、仏家の流にもならはず、易簡の善を用て知やすく、したがひやすき大道を行はん事なるを、今の學者は、儒道を興起するとて、みづからおさへ、仏を退るこて、助立るの勢をしらず。それ仏者の不仁と、儒者の理滯と共に神道をなみする事は一也。その中に、仏法は水土にかなふ處あり、儒法は水土に應ぜず。是を以しれり、仏法もたゆべからず、儒道もおこるべからず。儒道おこらで仏法たえずば、終に吉利支丹の爲にうばはれぬべきか。然ば神道も儒道もこと〲くうちやぶらで、畜生國となり、禁中もなくなるべし。天地やぶれたるにはおとりなん。後世と輪廻を立ていふさきは、吉利支丹は後生の手だても、仏者よりは上手也。理を云事も、仏道よりはまされり。仏道の力を以て、ふせぐべき事かたし。今の儒法は、天下國家の政道となるべからざれば、終に一流と成て、吉利支丹の爲に失はるべし。これによりていへり。神代の遺德をあらはし、王代の法令をかんがへ、今の人情時變をつまびらかにして、化育を助るの大道有。信厚からで法を先ずれば、民の僞をみちびき、無事を行はずして、禮いたづがはしければ人欲生ず。それ禮法は、人欲の堤也。大河のほとりに住居する者は、堤堅固たれば生全し。しかるに源遠らぬ小河の水の憂もなき地に、堤餘多所に大にせば、民の身命を養ふ田畠も、多は堤の爲にとられて、うゑに及べし。もろこしは大國にして、地の生厚し。就中周の代は天地ひらけてこのかた、太平無事の時運に當れり。天地の物を生ることかぎりなく、財用の多こと水火のごとし。人民大に富てなすべき事なし。故に驕者にながれ、情欲あふるべき勢あり。聖人是を憂給ひて、禮文法令條多作て、いとまなからしめ、賓祭の爲に用をついやして欲をふせぎ

給へり。其時だに禮文あらはれて、いまだ取行には及ばざりし事ありき。後世に及て、政令道を失ひて、人心正しからざるより、四時の氣不順にして、地の物を生ずる事すくなし。貴賤分をこえて、士民まづし。事しげくしていとまなし。此故に多欲になりて、情うすくなりぬれば、其國にてだに行がたし。況や他の國にをひてをや。近年は草木金石だに姓よはくなれり。まして人は病氣無氣力のみ也。其上に家貧しく、世間事しげし。いかむして大國上世の法を行はんや。今の學者、我身は富ていとまのみあり、武士の貧にして朝夕のいとまなきものにも、其禮をうつして行はしめんとす。我身事をとらざれば、氣力あまりありてなす事を、奉公につかれたる士にせむれば、おこたらざる者すくなし。道は大路のごとしといへり。衆の共によるべきこころ也。五倫の五典十義これなり。一文不通の人といへども、その實は學者にまさりたるあり、天にうくる處なればなり。禮はこれをかざり、これを助たるもの也。時處位をはかりて衆と共に行べし、心は天地の爲に立、道は生民の爲に立ともいへり。今時周の禮を用て、道を行はんと思ふ者は、自己の氣質の禮に得たる處ありて、其上に富といとまと氣根とを得たる者もあり。名根ふかくして譽れを求め、なす者もあり。此人々といへ共情のうすき事は、天下數百歳の習なれば、人とかはる事なし。其實を見ればつとむべき人にあらざる者あり。況や此餘多のより處なき人にをひてをや。しかれども此格法の流もまた世にたゆる事あらじ。いかむとなれば世中にこれに得たる人あり。各氣質の近き處よりおもむくもの也。ことわざに情のこはき者は日蓮宗となり。高満異風なる者は、禪宗となるといへるがごとし。今の朱學格法はあまねく行はるべき流ならねば、日蓮宗の世にあるごとく、一流と成てあらんのみ。此流仏者をにくむと甚しといへども、却て仏者を立べき所あ

り。佛者は戎狄の異端ながらも、日本の水土時節に相應の處あり。朱學は理をいふ事はよくても、水土に應ぜぬ事多し。其上今の朱學者、聖賢の法を用ゆといへども、心の凡情は小人と同じき者多し。仏のために衆をかるに近し。今の仏者は又きりしたんのみちびき也。かなしむべし　問、日本にてだに、近年少文學はやりぬれば、かな書にても讀侍る者は、眞實に仏道にまよふ者はまれなり。もろこしの文國にて、いかであまねくはひろごり侍りけん　云、これも儒者の方よりひろめさせたる也。周の代の富有なる時の禮をもち來て、後世の貧乏困窮の民にくわへ、無事の時の法を以て事しげく、つかれたる者になさしめ、上世の氣力盛なりし人のなしたる事を、後世のおとろへたる者に行はしむ。貴賤ともに周の禮法にくるしめる處に、佛法渡りて喪祭共に易簡にて、財用をついやさず、事少くて勞せず。故に實に信ぜざる者も、佛法にだに入ば、心身やすくして家財つゐえず。凡民は是を悦で、風に草のしたがふがごとし。公侯大夫士たる人も、世にひかれて、是非なく儒道を行者は、大に内外あり。名聞にて行者も、少づゝは内外なきとあたはず、恥ある士も心勞し、氣つかれ、財たらずして、是非なく僞をなす事をかなしめり。仏法にだに入ぬれば、此あまたの憂なし。この故に高き人もみな仏道に入て、儒道はたゞ外むきの事となりぬ。もし此時に明君良相ありて、時運のおとろえを察し、人氣のとぼしきを見、情のうすきを知、財用の不足に叶て、易簡の禮法を作爲し、誠を立て太古の質素の風をかへさましかば、高きもいやしきも、誰か仏道にまよひ侍らん。かくて時運も盛になり、人氣もつよく情もあつく、財用たりぬる時に及て、後の君子を待て禮をおこさしむべし。すべて其人にあらざれば、人情時變をしらず。有德にあらずして法のみをおこすことは、よきことといふも、大盜の僞に仁義共に合せぬすまれぬ。よからざる時

はぬすまるゝにも及ばず。異端の小道に歸したるこ、いづれかおこりまさる事を不ㇾ知。何ぞしゐて佛者をしりぞけそしらん

一儒者云、我は俗儒にて、道を行者に非ざれば、身すぎの僞こ人にあなごられ侍り。今時道を行と中學者をみれば、內心は我〳〵などのおし出て、身すぎとする者にはおとりて、凡情名利の欲たくましくありながら、外に道だてをし、君子ぶり仕は、にくゝ思はれ侍り。人に道者こいはれ、分にこえてうやまはれぬるを悦て、精を出し外に格法を行者もあり。氣根つよくて、人のせぬ事をするを自滿して、己が得たる處を行者も有。富有にしていこま多く、氣力つよければ、名を求て行者もあり。我は行たる事もなくて、人のなるならざるをもわきまへず、人にのみせめて、道者顏する者もあり。小學の灑掃應對進退（サイソウヲウタイシンタイ）より初て、小子にせむる者もあり。いにしへは人の氣根つよく、大國にては天下のならはしとなり、つこむるとも思はでなしたる事也。それだに後世は十が一も行はれざりしを、今日本にて、聞もならはぬ事をなさしめんこすれば、よはき者はたえずして病者こなり、或は成人にしたがひて、こりて道學ぎらひこなりぬ。三年の喪を行ふなどゝいひては、こゝ〴〵しく服を用意し、富士山まうでの百日行のごく、喪のていをみせぬれごも、實は喪をつとむる者のやうすにもあらず。大か小か、心のとはゞこたへがたき內外ありとみえたり。かくて喪をつこめたるといふ虛名をとるもあり。或は幼少の時か、又は學びざる前に親に別れて、今ならば喪におらん顏にて、人にせむる者もあり。りちぎにてはたらきなき人は、しゐられて是非なく、喪に居かゝり、たえずして死するもあり。大かたは僞多けれごも、國所をへだてなんこして、過て後みづから云もあれば、其實は知者なし。又世俗にいへるがきの

斷食さやらんにて、左なくともたしなまで不レ叶けうがいに居かゝり、或は已が質の近き處より、少はつとめたる事もあり。學寮坊主や、まきの尾の律僧などの、つとめのごくなるもあり。一々其實情をたづねみれば、奇特とは申がたし　答云、喪をつとめたるこいふ人を、二三人もよそながら見聞及侍り。十の物二三、大かたにつとめたるは上々なり。それだになべての人のなるべき事にはあらず。氣質にかれはつとめんと思ふ者あり。今時在々所々にも、無學文盲にて、何のわきまへもなく、他の事はみな凡夫なれども、親孝行ばかりはいにしへの孝子に及ぬべく、奇特なる者有。これは天質の美なれば、眞實志の學者こいへども、つとめて及がたき處なり。予が喪をつとめん者なりこ日きゝいたし侍るも、かくのごときたぐひなり。又氣質はつとむべき者ならねども、壯年の氣力つよき時、志の大にすゝんで何事をもなすべき器量の者あり。此者年さかりならば、つとむべきか

一心友問、貴老かねて親の喪をつとめんと被レ仰、今母の憂に逢ては、其言たがひ、喪はなるものにてはなし、との給ふこ云者あり　答云、さいふ人もありなん。予は各の見給ふごとく、喪をつとむべき生付にあらず、されども壯年の時ならは、少はくはだて及事もあらんか。十四五年此かた、病氣の身となり、年すでに五十に過たり。かたがた以てつとむべき者にあらず。しかれども喪によることとあらんと思ふ子細あり。その主意をばいはで、その事のみたゞ壹人に用ありていひし也。その主意は、予は世に無益の身なれば、父母なき後は、喪によりて跡をけし、庶人となりて、しばらくなりとも、德を養はんと思へり。其ゆへは、初學の時より、人の師となり、見聞衆の道理を口に費し、内につまざりし故に、德をなさゞるの損あり。俗にかくれて知人なくば、經傳に見る處、みな内につまん事を願へば也。予は天下

に名を得たる者なれば、世間名聞の爲に、喪におらむと思ふ人もありといへり。予は一人の武士なり。學は已が爲にすれば學業を以世をおくる者にあらず。もし予法に落て喪をつとめば、少の事にも內外はせじ。全くつとめばやがて死すべし。死を以て生を亡すは大不孝也。その上八十に餘れる老父有。たとへつとめんと思ふとも、なすべき時ならず。聞も及給はん。予より年もわかく、予ほど病氣もなくて、喪をつとめて死たる者あり。たとへはじめはあやまりて、勤めかゝりぬとも、我身のほどをはかりて、すみやかにやむべき器量もなく、よき心友もなかりしかば、元氣を失ひて後、養生せしか共不叶し也。內外なく眞實なる者なりしに、あたら事也。且予先へ道を聞て、各にかたりしといふばかり也。氣質變化の君子にあらねば。實は各も予もかはる事なし。同志の中に生れ付は予よりも拔群よき人あり。其よき質にても、喪をつとむべきほどの、篤實深情氣力はみえず。予が喪によるの志も、老父の天年今明年をもしらず。又讒言によりて、いまだ身のおり處心のまゝならねば、のがるべきやうもなし。一人にも此義はいまだかたらず。口のたがひたるやうに思へるか、予が實をしらば、たとへ主意をきかずとも、ゆへあらんと思ふべし。予壯年の時は、つとめんと思ふ心ざしありき。二十歲より內にては、三年精進したる事あり。二十歲以後、文學をつとめ居たるときは、わらはべのごく、人道をわすれ、腎水かたくとぢて、顏色うるはしく、聲にほひありとて、人に稱美せられき。牢人の間、五六年は江州下民の食、ゆりこぞうすいといふものを食し、ぬかみそをさいにして、汁肴酒茶なく、淸水紙子もめんぬのこにて、寒をふせぎ、衣食共にむかしをわすれて、書をたのしみて居たりき。その比ならば三年の喪は心やすくつとめ侍らん。今時勤めたりといふ人にもこえて、世に名をとる事もあらんか。しかゐは誰もなるべ

きやうにおもひて、人の生れ付の精力に强弱ある事をもはからず。無病病者をもわきまへず。年の盛衰をもいはず。時勢のしからしむることはりにて、人の情のうすく習來てしゆべからず。おして行はしむる時は、僞の端となり、罪なき人にきづをつくべき事をもかんがへし。病氣老衰の後に憂にあひ、其上多年人情時勢を知ことくはしく、人をしゐざるは幸也。およそ世間の人を見るに、才知聰明なる人は、つとめ行こと不足也。不才にて分別なき者に、篤實の生付ありて、つとめ行こよき者あり。凡己が長じたるを以て、人のみぢかきをせめ、己が得たる處には、人をそしれり。凡情の憂こゝにあり。日本王代の盛なりし時、三年の服を期にし、其よりうときは、だん〳〵にそがれたる法あり。衣色の制あり。是水土によりての義也。上世とても、日本は小國也。小國に生れたる者は、精力うすし。同じとき同しこゝろざし、同じ學力にても、大國の人には及びがたし

一心友問、佛法は易簡なる處のみ日本の水土に相應す、と被レ仰由承侍れども、火葬などは、甚不仁なり。親の身を葬るとて、目の前に餘をあぶるやうにはまかせがたき事也　答云、しかり、されども我なす事はせじ、仏法の流、世俗の習にて、なすなればそしるべからず。又今の時處に叶たるいきほひもあり。吾人共に世の勢さけがたくば、まかせても可也。たとへば戰陣にをひて、身方亡る時は、城に火かけ、炎火の中へ腹かき切飛入て死するは義なり。敵の手にわたり、古郷にをくられ、棺槨に入にはまされり。何ぞ外物を必とせん。上世は土地廣く、人すくなかりしか共、いまだ器物なく、家屋なかりしかば、生ては野にすみ、死ては谷に葬れり。他日これを過て見るに忍びず、土を以これをおほへり。人の死するは、形は數ありて、魂氣こはなれ地に落ぬ。氣は本より天にゆき、形は土に合す、理の常也。何ぞい

とはん。後世器物家屋いできしより、死を送るにも棺あり、槨あり。はやく土に合するは理なれども、死に事ること、生るに事るごとくするは、孝子の情なり。葬するに生を以し、安ずるに死を以す。死生一なり。變ふべからざるは理の常也。しかれども別をなげくは人の情也。いにしへは土地ひろく、人すくなく、用たれり。又質素也。故に棺を作ることやすくして、そのかたきをとれるのみ。土地餘ありて送る事處多かりき。後世は人の多なるにしたがひて、土地せばく用たらず、かざり多して實すくなし。常の產ある者だにも、棺槨を作るにたえざる者あり。況や民の常の產なき者は、死のかなしびはわきになりて、棺作る事を憂とす。かゝる事を察せずして、これを以て先王の道を行と思へるは不知也。其本を不レ知がゆへに、時處位によりてかはるべき道理を弁へず。とりわき日本は近世、人の多と百ばいせり。このゆへに土地せばく用たらず。庶人のすゑ〴〵は生て衣なく、死して棺なし。又葬べき土地なき處あり。火葬も又時のついゐに當れり。天地ひらけてこのかた、近世ほど人多土地せばき事はあらじ。氣運ふさがりくらふしてしかり。時に仏法あるも又かなへり。火葬も又可也。今の時に當て、家禮の儒法を庶人までに行ん事は、聖賢の君出給ふとも叶ふべからず。庶人は生る時の衣食だに不レ足、家屋も風雨をふせぐにたらず。農人は農業をなすがためのみ。町人は工商のためのみ。それだに用にかなひがたし。何のいとまあり、有餘ありて、葬祭の禮をおさめんや

問、氣運ふさがりくらふして、人多とは何ぞや　云、春の氣は溫にして悠々たり。鳥獸草木も異なる物のみ生ず。多がどくなれどもみたず。三皇五帝三王の時のごとし。夏の氣はむしたてゝくらし。多は無用の物みち〳〵て生ず、今の時のごとし。鳥獸魚草木の靈なるは、用にのみ取てみだりにとらざるの制禁ありてだに、なをあまねく用ひがた

し。夏のゑんせうの氣の生ずる物は、用なけれども人々これをかり、ころすといへどもつきず。いにしへは人すくなくて人あり、今は人多て人なし。氣運否昏によりて、人の多ことさとるべし。今の時に當て、先王の道亡びぬ。法のみ行はれば、世中三年とも立がたかるべし。道おとろえ、愚人多時に、幸に仏法あり。易簡にして事ゆきぬ。これも又天命なり。後世に及て人すくなく成て人あり。土地ひろく用たり、誠立て質素なる時には、法もまたむかしにちかき事有べし。云、しからば今の時には儒道は行はるべからざるか　答云、儒道といふは、道のすたれたる名也。大道には名なく定法なし。天地の神道は、時に中して行はれずといふ處なし。たゞ天理の誠のみを立て、事と法とを必とせず。自然の勢にまかせて可也　問、貴殿親の葬禮に、儒法の棺をなして、あつくはうむり給ふはいかに　答云、予が家、生て親を住しむる家屋有、飲食衣服あり、死して棺作るべき力あり。處にさはりなし。兄弟朋友うちよりて助なせり。財あり人有、又さはりなし。儒法本よりあしきに非ず、何ぞ用ひざらんや。或は時勢のなしがたきにしゐてなし、或は助る人もなく、財もなきに、しゐてなさしめ、或は我をたて他をそしるをあしきと云のみ也。たとへば生る親に魚肉多を食せしめずして、粗食を作るも不可也。蔬食の中に居てあたはぬ珍物を求るも不可也　問、世間のならはしをそしり、己が好む處にひとしくせんとするの非なる事はさとりぬ。日本の神道にも、杉檜を用て宮社に作り、槙を用て棺槨に作ると見え侍れば、火葬の事はなし。佛者も土葬をしゐていましむるにも非ざれば、しのびざる心ある者の葬はいかゞし侍らんや　答云、神書に槙を棺槨に作るとあるも、上世材木澤山にて、なりやすかりし時の事也。今も士以上、又は富める庶人は、貧くとも二分三分の板を用て、棺作るとはなるべし。其日をくらの者は、いか

で及べきや。火葬に忍びざる者はむしろを用て成とも、首足の形をおさめてはうむらば可也　問、富る者は棺を用ひ、貧き者はむしろを用ひば、親に孝をするも、貧にしてはならぬ事の恨み有べきか　答云、理をしらしめば、うらみもなかるべし。死を送るのみならず、生る時の飲食・衣服・家屋敷・物器に至まで、富貴貧賤命異なり、うらむべからず。況や形は土に合する事、理の常也。しばらくおほふは、孝子の情なり。棺とむしろと何ぞ異ならん。其上日本は土地せばきが故に、近比まで寺なりし跡も屋敷となり、畠となるもの多し。百年の内外には、人もうつりかはりぬ。はやく朽て土となり、後の憂なきぞまさるべき

一心友問、貴老男色くるしからずとゆるし給ひ、其上中江氏は、其理得心なくて、男色を戒られたり、と仰らるゝと申者あり。不審なる事にて侍り　答云、取成といふものは、いか様にも成ものにて侍り。君子の讒を恐るゝは、かくのごときの小人の言をしれば也。夫男色をつよく戒たる事は、佛書に見えたり。佛在世の時よりもありて、しやかの直に戒られたれ共、やむる事あたはず。もろこしにては、孔子の時代にも男色ありしとみえ侍り。はじまりは久敷事と見えたり。しかれどもそのかみの聖人、有無の論をなし給はず。周子程子朱子などの時代には、いよ／＼さかんなりしかども、いましめふせがれしことをきかず。人情の勢の、とゞむべからざる事を知給へば也。少き名儒の語には、そしれるもあり。孔孟の有無の言を出したまはざる主意をしらざれば也。近比中江氏、仏者の言によりて男色の事をいへり。壮年の論なれば甚し。いまだ人情時變にくはしからざりし時のことなり。後年ならば、かくはあらじといひし。これ中江氏を助ていへり。予何ぞ中江氏は、其理得心なくて、男色を戒られたりとそしらんや。中江氏をなんずるの

みならず、自我身をしる事をしらざらんや。中江氏去て後、藤樹に遊べる人々、甚男色をにくみて、不義なりこいへり。其比予今のこゝろならましかば、ふせぎそしることをばとゞめやうも有べきに、いまだ年若く、來暦すくなかりしかば、まかせ置たり。四十歳の比思ひしは、ゆるされはせず、退るは無用の事也とおもひし也。されば事のついでに、同志中にて云たる事もありき。其實を不ﾚ知人は、予を以てこれをそしる本人こせり。終に世間に達して、此學流の大禁こなれり。これによりて英才をとぢて發せしめず。道學の流行をふさぎて、通ぜしめず。大禁にはあらで大害こなれり。大道の行はるべき、千歳の後に、おくれて發すべき小戒を、いまだめぐまざるの前におけば也。近比男色の事をさがし出して、人を失へる者あり。予これによりて云、男色をふせぎ、佛者を退るの事は、道學のおこりなんとするめぐみをおさゆる也。たとへば草木の土中より生出る二葉の上に、大石を置がごとし。たまたま此理をさとるといへども、今にしていひわけも成がたし。幸にか樣の時節、ほり出しせんさくせずして、無事になさば可也　問、しからば男色はくるしからざる事とすべきか。予が云、左思はゞ幸也。世間の常に歸して害なからんにはしかじ

問、男色ふせぐ事の、道學に害ある事しかと心得がたし　答云、ふせがずゆるさず、默せんにはしかじ。むかしより靈明の生付ありて、道を學びざる者、多は色を好めり。義經義貞などの類也。いかんとなれば其靈明を道學に用ひざる故に、人の大欲なれば色にうつれり。此ゆへに才知ある者は、大かた此病あり。其好む事をゆるさずおさへず、かまはずして、靈明なる所をそだてゝ、道をきかしむる時は、大河のふさがりをきりおとして、ふせぐべからざるがごとし。其後はみづからおのが非を知て格去べし。一言の禁戒を用べからず。夫大道の行はるゝは、よき人皆多道に入

風俗にまかせば可也　問、しからば學者の若年も、男色をふせぐべからざるか　答云、世間の若年のさかんなる者の、いましめがたきと云は、道藝にこゝろを用ざれば也。道藝に心氣を用て、いとまなき時は、年わかき者は猶以いましめやすし。いかんとなれば、水氣多くて火しめりぬ。其上かんにんの精つよし。其精を道藝に用て、いこまなければ、忘れてすごすものなり。つゝしみやすき事の第一なり

集義外書卷之十終

集義外書　卷十一

中庸九經考

一齊明盛服。非禮不動。所以脩身也。去讒遠色。賤貨而貴德。所以勸賢也。尊其位。重其祿。同其好惡。所以勸親親也。官盛任使。所以勸大臣也。忠信重祿。所以勸士也。時使薄斂。所以勸百姓也。日省月試。既稟稱事。所以勸百工也。送往迎來。嘉善而矜不能。所以柔遠人也。繼絕世。舉廢國。治亂持危。朝聘以時。厚往而薄來。所以懷諸侯也。齊明は、思邪なく胸中清明なるをいふ。心は身の主なれば、心正しきときは、身をのづから正しきなり。脩身の本也。盛服は禮服なり。外を正しくして、邪をふせぎ内を助くるなり。天子十二章を著御ありて、日月のかうぶりを首に置給ふとは、天地と德を合て、造化を助けたまふ義なり。君子錦をきてうはをそひす。其身を神明にする道理なり。非禮は、天子は不正の色、不正の形を見たまはず。不正の聲、不正の香をきゝ給はず。不正の言、不正の事にうごき給はず。山野にかりし給へども、地の難易、民の苦勞をしり、戰陣の法をならはし給ふ意也。あしくみれば窮屈なる樣なれども、凡夫の放埒に遊びたのしむよりは、心の樂はるかにゆたかなり。一度ははり一度にはづすは文武の道なり。弓もはりつめにしてはうはづるたるみて用に不レ立。衣冠正しく、終日夜

もすがらつとめ給はゞ、たとひ御一人の氣力はすぐれたりとも禮にあらず。夜はよるの御衣あり、くらきに向て休息したまふは時なり。君夜の四つ時に御寢なれば、臣は宿へ歸ていぬると九時にもなり、又其下人は子半刻にもいぬべし。明日はまた下ほどはやくをくるものなれば、其心おはしまして、御用なきにははやく入給ふなり。晝といへども公事終ては、時物に感じ、后・女御・更衣などゝ音樂の遊びし給はゞ、白衣にても座し給ふべし。此時は和を專として精神を養ひ給ひ、天地の和をも助給時なれば、南面の盛服は、かへつて時にあらず。ときにあらざるは禮にあらず。又衣冠にて禮樂かね給ふ時も有べし。皆中庸の理にかなふを禮と云なり。身を脩の則なり。或問、天子御一人の御遊の和、いかで天地の和を助くべきや。云、禮は天地の節なり。樂は天地の和なり。天子安所にして、正しき事に遊び給ふヿ、則天下の風俗となりて、人民安ずる所正し。故に天地の和を助くるなり。去ㇾ讒遠ㇾ色は、賢を用る第一の戒なり。君子は小人のあだにならぬものなれども、小人をのれとあだとす。故に賢者のあげ用ひらるゝをば、その外にいみにくみ、虛說造言をなして、讒言ちまたにみつるものなり。あげらるべきかと思ふ事有ても、はやいろ〳〵の事をいふものなり。君子其機を見て、出むヿを欲せず。たとひ不ㇾ得ㇾ已して出ても、知力を盡さず。知力を盡せばいよ〳〵小人にさはりて害あるものなり。君子知力を盡さゞれば、ありてもなきがごとし。故に明君は、先讒人を退け給へり。上明かにして威あれば、虛說讒言ならず。必しも讒人を放流せざれども、去たると同事なり。しゐて善をさまたぐるものをば、放流し給へり。國の存亡天下の安危こゝにかゝればなり。上たる人色を好むときは、内緣より讒言も入、又好色の心にたよりて、小人とり入ものなれば、好色の君の下には、賢者不ㇾ立なり。このゆへに明君は、色を遠ざ

けて好み給はず。實は人をさくるにあらず。好色の心なきなり。天子は十二人、諸侯は九人と宮女の數定れり。皆禮儀の應接にて、貞女のもてなしなれば、内縁と云とも有べきやうなし。宮女をのづからいやしき凡情絶て、春風和氣の中に遊べるがごとし。好色の費（ツイエ）少もなきなり。或問、好色の心なくば、十二人・九人はいかゞ。云、身上の大なるにしたがつて、衣服・飲食・器物・屋作、万事數多は、自然の理なり。いにしへの人は、好色の心なき故に氣もつかず。貴賤大小万事同前にするは分の義なし、理にあらず。賤レ貨而貴レ徳は、人君の金銀・珠玉・珍器等を、たからとしもてあそばるゝは妖（ヨウ／ワザハヒ）なりといへり。寶は民のためのたからなり。民のためのたからは五穀なり。金銀錢などは、五穀を助たるものなり。五穀に次たり。しかるに金銀を重くして、五穀をかろくする時は、あしき事多し。道なきときの風俗は、金銀を第一の重寶としておさめたくはへ、五穀をばかろく思ひて、たくはへなきものなり。軍陣に多用る物は米なり。飢饉の年、金銀は食とならず。金銀をいだきてうへて死したる者多し。故に明王は、五穀を民のために多くたくはへさせて、万のうりかい物も、五穀にてすれば、民間に五穀みち〳〵てあり。されば軍國にも、少の金銀もちゆけば、先〳〵に食あり。金銀をたからとしてたくはへ、うりかい物金銀にてする時は、諸國在々所々に米なく、軍國には金銀持ても、先々にて扶持方なく、飢饉には民人多餓死するなり。其上商のみ次第に富て、士貧く、民窮するものなり。金銀は多持よければ、手倒をして、手くろ成よければ、奢長じ易し。五穀は多もたれぬものなれば、五穀つかひにすれば、商の利をあふすること成がたし。故に物下直に成て、奢長ぜず、士民ともにゆたかにして、工商常の產あり。たからを賤するとて、なげすつる樣にするにはあらず。五穀を第一とし、金銀これを助け、五穀下にみち〳〵て、上の用

達するを、貨を賤すといふなり。民の字を御たからとよませたり。民のみならず、多もの天下のたからと成也。魚にてはいわし也。或問、高直なるだに常の工商利すくなく、渡世難義なり。下直ならばいかんして立べきや。云、高直は大商大利を取て高直なり。常の工商の手前は、むかしより下直なり。されば万事廉相にてやぶれ易し。其上高直の物を相易るによりて、をのづから下直にてはならぬ勢も有なり。もみづかひとなれば、下直にて、高直なるよりは渡世なりやすき勢あり。或問、もみづかひに何の利有や。云、粟と云はもみの事なり。十年過ても正實損ぜす、虫に成てすたる費なし。米納ともみ納との得失は、天下の多を以てはからば、作毛下なりとも、粟納め粟遣とせば、中には當るべし。中ならば上にあたるべし。民の藏納めに費なく、苦勞なき事は、大なるたすかりなり。小扶持方取などは、加增をとりたるに當るべし。いよ／＼五穀澤山に成て、邪心やむべし。粟を時々にすりて食さすれば、人の元氣を養ふと各別つよし。病人もすくなかるべし。大身小身ともに、米をうりて、金銀としつかふときは、米下直に、物高直なれば、大に迷惑す。故に米を費しすつる所多からではらひ所なし。粟遣となればこのうれいなき故に、米のすたり所なき政出來る者なり。しかれば五穀水火のごとく澤山に成て、不仁の者なく、おかしぬすむものなし。亂をねがふとも得べからず。人の道を敎べきのみ。又金銀下に多くなれば、天下衰微する事あり。いかんとなれば金銀多ければ奢長ず。奢長ずれば民にとる事多し。後には米は大かた上へとられて、民の食、牛馬に同じ。故に常に人の往來する大路の外は、民間に宿すれば、一夜の食米もなく、行かゝりたる旅人めいわくする事也。まして人數など遠く出す時、むかし米遣の時の樣に心得て、金銀持行ても、諸勢うゆるものなり。夷狄のためにとらるゝ事もあり。常は奢

によりて、諸侯大夫士までも、金銀不足なれば、民より米を多こりて、金銀にかゆる分別のみなり。故に米のはらひ方なければ、天下に酒屋多なり、水となしてなく成、或は藏の下の虫となり、海中に入など、米のすたる事さま〴〵多し。此すたり所なければ、諸侯大夫士の米のはらひ所なし。米のあつまる津には澤山なれども、國々所々には盡くこりあげられて米なし。國に兵亂の事あれば、軍兵の扶持米なく、津々より米をとりかへさんとすれば、米俄に高直に成て、盜賊所々にをこり、小亂も大亂となりしためしあり。さなくても少不作つゞけば、米高直に成て、貧賤の者餓死し、少豐年つゞけば、米下直に成て、金銀不足し、諸侯大夫士大につまりて、末々の者、扶持はなされ、流浪人多し。これ盜賊のたねにして、亂國のきざしなり。是上たる人、財用の道を知給はざればなり。北條前の相州は、諸大名よりめづらしき道具、新渡の唐物等を奉れば、その外に氣色あしく、この器の德別に有まじ。めづらしきといふばかりなり。これに米金をつひやさるゝと、士民のつかれなれば、不忠の至なりとて、其代物をつかはして、其道具をばうちすて置れしとなり。この故に天下の人、器物をもてあそばず。又大友の淸正、三條の宗近が打たる太刀を、百貫にてかはれしを聞たまひて、宗近が太刀の德、何事にか侍る。物の骨のよくきるゝといふにて侍らん。物きれの太刀は、はじめより御家にも傳て持給ふらん。古きめづらしき太刀、持たるといはれんためばかりに、百貫を出し給ふことは、物の輕重を知給はざるなり。百貫にて在鎌倉中、貧き郎從にめぐみたまはゞ、自然のときの御用にも一入立侍らん。此太刀一色はくるしからず、一を以て万を知なれば、よろづ入ざる道具を愛して、百姓に過役をかけ、諸士難澁せば、國亡して亂の本とも成ぬべし。天下に不忠の人といはれしこなり。このゆへに其比のうりかいに、三十貫より上の太刀かた

なはなかりしこ也。又其時代は、新身こても、金よく精神ありしかば、よくきれて、古身にもをこらず、代物も古身におとらざりしこなり。其比の三十貫は、今の米三十石なり。武士の第一とするものだにかくのごとし。いはんや其外の器物は、一向もてはやさず。故に諸士文道を學て、道なる事を好み、寳を好まず、色を好まず。武道にをこたらざるを、よき士といひて賞翫し、積學の人あれば、これを崇敬せり。諸大名在鎌倉の事は、二年又は三年に一度、百日或は二百日なり。それさへ鎌倉にて、米金を多つひやさゞる樣にこて、さま〴〵心をつけられしこなり。是によりて諸國ついへすくなく、九代まではつゞきし也。是前の相州貞時、貨を賤して士民を愛するこを知給へばなり。相模入道の時の風俗はしからず。器物を愛し、金銀をたくはへ、色を好み、飲食をえらび、奢によりて用たらざれば家來をくるしめ、或は扶持をはなし、百姓をしへたげ、所をあらしてもなをたらず。故に諸大名、一國の一年の物成にて、一度の在鎌倉の用たらざりしこなり。大身小身共に、參會の物語は、金銀米麥の事、道具衣服料理の事、甚しきは好色の事なり。武士の家業なれども、武藝をもたしなまず。いはんや、文學をや。のがれ言葉には、學文は坊主のわざなり。武藝は藝者の事也。武士はたゞ一心なりといへり。これいにしへ名將勇士の言にあらず。義經は文學あり、七書にもよく通じ給ひき。辨慶も文才の達者にて能筆なりき。弓馬兵法の達者は、人のしれる所也。楠正成子に遺言せし書に、勤學をこたる事なかれこ書て、武藝の事はいふに及ばざればかゝず。足利家にも、今川の良俊は、文武二道の名將なりといひて、西國の探題にをかれたり。其比良俊におとらぬ武將は有しかども、六十餘州の中にて、一人えらび出されしは、文道ある故なりといへり。この故に人もそねまず。大田の道觀は、文を好て名將の聞えあり。今も文武共

にきらへる人の口實あり。豐臣秀吉文盲至極にて、天下をとりしより、武士の風俗いやしく成て、文道をこのまず。儒者の學は市井に落て、渡世の事と成たり。故に文盲にても、生付よき人にはをとれり。武藝も藝者に落て、武道のはげみなければ、無手の者にをとれるあり。是等をひきて、文武の二道をきらへるは、其本をわきまへざるか、又しれども己がきらひのにのがれ言葉なるべし。むかしは生付行跡、牛角の士にても、文學あればこれをまされりとし、崇敬せり。今は武士の學文して、なみよりはよく、前よりはまされたる者あれども、己にましたる所有をばかくして、其非のみいひてそしれり。心に文を好む者も、このそしりにおそれてせず。むかしは同じ一心のよき中にては、武藝あるをまされりとす。今は同じ位の武士なれば、武藝あるを以て疵とす。相弟子の中によからぬ者などあれば、それをいひ立て、武藝の稽古をさまたぐるもあり。藝能もなく、無作法なる友とより合、亂行なるもの多けれども、それをば却てそしらず。これ皆讒を遠ざけずして、小人多ほしいまゝなる故なり。貴レ德は有德の人を尊ぶなり。天下國家のためには有德の人ほどなるたからはなし。賢者上にあれば、國ゆたかに天下長久なればなり。勸レ賢は賢をして知力を盡さしむるなり。又聖人の大寶を位といひて、富貴の權をとりて、天下を平治し、天地の造化を助くるものなれば、國天下の政は財用の心得大事なり。貨財は君子のいやしむものなれ共、財用の權をば下にわたさぬものなり。庶人はいやしき者なれども、是を制する權は上にあり。君子有德を尊く、貨財をいやしとすれ共、天下の貨を制する權は上にあり。四海の困窮は、財用の權の商にくだるよりをこる事あり。上の天祿ながくたえて、士氣さたる時は、富有の大商どもは寇賊のために害せられて、年來天下の者をくるしめし天罰のがれざるものなり。賢ニ其位一は、一向の凡人

に、高位をあたふるにあらず、其分に應じて尊する也。帝堯は民間の舜をあげて賓客とし、九人の御子達をも、馳走人に付給ひ、後に攝政を命じ、天位をゆづり給ひしにて知べし。位祿共に天位天祿なれば、人爵天爵相應の道理なり。房玄齡言二テ大宗一ニ云ク、奉府ノ舊人未ルレタ遷レラ官者ノ。皆嗟怨ノ曰。吾ヲ屬ヨ奉二事スル左右一ニ幾何年ゾ矣。今除レテ官一反テ出二前宮齋府人之後一ニ。上ノ曰。王者ハ至公無私ナリ。故ニ能服二ス天下之心一ヲ。設レケ官ヲ分レテ職ヲ以テ爲レニス民ノ也。當下ニ擇二テ賢才一ヲ而用上之。豈以二テ新舊一ヲ爲二ン先後一ヲ哉。今不レメ論二其ノ賢不肖一ヲ而直ニ言二嗟怨一ヲ。豈ニ爲レ政之體ナランヤ乎。といへり。この故に有道の代には、君といへども私し給ふべきにあらず。故に御子なれども、其德なきには、位を傳へ給はず。武王周公の先祖にをくり号ありしも、文王王季大王までは、王号ををくり給ひ、それより前は、其まゝ諸侯の位にて、祭禮ばかり天子の禮樂を用ひ給ひしにて知べし。大舜さては漢の高祖のごときは、親先祖よりのゆづりにあらず。其身よりの位なれば、父といへども凡人なり。故に無位にしてたゞ舜のみ父母を愛敬し給ひ、天子の父母たる榮花あるのみ。大舜は五十に成ても父母をしたひ給ふ事、赤子のときのごとし。天子と成給ひても、父母には位を用ひ給はず。匹夫の時のごとくなり。父母も天子をば子とすれども、諸侯公卿にはたかぶり有べからず。大方は參會も有べからず。もし參會ありとても、天子の父なれば、上座に置べきばかりにて、言葉はたがひに慇懃なるべし。天子の師のごとし。尊して位なく、高して民なきものなり。我ゆづりたる天下にあらず。我もと匹夫なり。天子こそ子なれば心安かるべけれ、諸侯百官にたかぶるべき道理なし。諸侯大夫も父匹夫にて、子諸侯大夫となりたらんは、其父母たるもの心得有べし。天理人情を知べし。或問、舜の弟は惡人なり。しかるを有庳の國主とし給ふは、其人ならねども、其位を尊するにあらずや。

孟子の言と相違のごとし。云、舜は堯のゆづりをうけて、堯の先を先として祭をつかさどり給へば、舜の父死して祭主たるべきは象なり。舜も象を助て祭給ふべし。故に舜の本生の父母先祖のために、有庳に封じ給ふべし。堯も黄帝の孫なり。舜も黄帝の孫なり。民間に入て久しからず、四代までの間には、善人も有べし。舜より代官をつかはして、有庳を治めしめ給へば、象は一國の祿を受るのみなり。象が凡情を國に及さじとなり。我朝王代に、一任四箇年の受領をつかはして、諸國を治めしめ、百官は國々の貢物をたまはるばかりなりしは此遺風なるべし。山川あるゝ事なくして、國ゆたかに天下長久なりき。中夏は大國なるゆへ、なべてさやうにはならざれども、名山大川のよく雲を出し、風雨をおこして民用を助くるをば、諸侯に封じ給はず。とりわきて天子より下知し給へり。大舜の象を有庳に封じて、貢物のみ給はりしは、時の權道なり。常にはあらず。日本もこれに習ひて、久しく治りしか共、國々に侯有は、天理自然の勢なれば、後はをのづから諸侯のごとくにて、在國の大名出來たり。後醍醐の帝の時、天下本に歸したりしを、　諸侯をむかしの受領のごとくし給し故に、天下又武家に歸したり。此とき足利新田を大納言になし、楠を中納言とし、赤松ならびに長俊などを宰相とし、其次は中將少將侍從になして、諸大名皆昇殿をゆるされ、公家武家ひとつにし給はゞ、他の事は　天下はゆるぐべからず。其間に　いよ／＼かたかるべし。足利家の中比より權威を失て、公家のごとくなりしも、道を失て、天下の士いきどをりしゆへたり。三種の神器は王者の心法なり。知仁勇の德を表せり。人情時變を知　聖の學行はれざればなり　問、漢の高祖、其父匹夫なるを、太上天皇の号を奉りたるはいかゞ　云、道を不知人なればた

り。天に二の日なし、死後のをくり号は不知。生前に王号有べからず。舜のごとく父母にのみ位をわすれ、匹夫のむかしの心にて愛敬して、天子の父母たる榮花有べきのみ。高祖は賢人の德なしといへども、天命を得て天子たり。父母は道德なく、天命なし。死後とても王号は有べからず。父士たり、子大夫たる道理にて、天子の禮樂を用べきのみ。親類は人により、或は位をあげ、或は祿をあたへ給ふなり。その位祿は公侯子男の事にあらず。祿とあるにて國郡にあらざる事を知べし。公侯子男卿大夫は、定りたる地あり。其外は一日にいかほどにて、今の扶持方のごとく給はりしを、祿といへり。公界へ出して、いやしからぬには位をあたへ、無骨にて公儀成がたきには、祿のみあたへ、心に善を好み、器量もある人には、地をあたへらるべし。同ニスル好惡ヲは、兄弟伯父甥諸親類を君子の心にしての好惡なり。君本より聖賢なれば、君と好惡を同するにて知べし。勸レ親レ々は、親族皆道理に服し、善にすゝむなり。君にちかきを以て敢て人にをごらず、無禮をもつて恥とするなり。官盛任使は、万事の用人備て、大臣は惣つがねを聞、諸臣の上に座してゆたかなり。大臣の才を用ひて、さへぐ\しきは、下いそがはしく成ものなり。大臣は才知ありとも人に先だゝず、諸人の才知を用ひて、善なるをば好して、いよ\/大にし、及ばざるをば助て善にいたらしめ、我分別より出たる善をも君といひ、君過あれば、我不足といひ、進ては忠を盡し、退ては過を補ひ、まとを以て大臣の職分とするなり。如此大臣は、君の權威をうばふ心なければ、いよ\/万事うちまかせて、小臣の讒を入ざる時は、大臣もいよ\/忠に進て心を盡すものなり。後世如レ此大臣はまれなり。まかすれば權威下にうつり、まかせざればうらむる事あり。故に後世は、家に備りたる大臣は、うしろみの樣にてあり。執政は、時に當りて、小臣倍臣民間をいはず、才德有人をあ

げて、宰相の職にをき、職に付たる祿を給はりて、一代ぎりに用られたり。是によりて君威も下にうつらず、大臣も不ㇾ亡。さのみ賢君ならねども、三百年四百年つゞきたり。家に備りたる大臣の權を取て、子孫に及すは、君の子孫亡、其身の子孫もほろぶる事は、君威かろくなれば、格の備たる人をのみ用ひて、下よりあぐる事あたはず。日本王代も、延喜の時代までは、王威つよかりし故に、北野天神は儒者にて、文章生なりしを、大臣になして、天下の政をなさしめ給へり。其後攝家などいひて、數定りたる家の外は權をとらざる樣になりたり。是によりて王威日々に衰たり。君威をさへうばふ事なれば、まして大臣の威をうばふ事はやすければ、武家の天下となれり。學問はなく共、少し物のわきまへあらば、政にはあづかり度事にあらず。人間五十年夢幻のごとしといへり。其中にも病苦憂哀いろ／＼さはり有て、心安たのしむ日はすくなし。執權は天下國家の苦をになひ、多の人につかはるゝなり。人にをぢうやまはるゝを悦ぶばかりなり。これによりて一生いそがはしく、夢のごとくにてをはらんははかなき事也。勢にをされて、外はうやまへども、心にはあなどりにくむもの多し。俗語にも三の末とて、家の衰微するは、家老の末、町奉行の末、代官の末といへり。大臣は代々知行に不足なし。執政を以て渡世とするにも非ず。諸方よりあつまり來る音物の多きも、心氣のついへとなれり。かぎりなき欲のために、かぎりある生をうばゝるゝもはかなし。無二是非一うやまひを言とゝおもひて、天下をのぞみ、即時に亡びたるもあり。何の益なくて害のみ多とをしらば、才知相應の人をすゝめあげて執政とし、うしろみしてゆたかにありたき事なり。其身一生のたのしびを得のみにあらず、君臣ともに子孫長久たるべし。中夏にて下よりあげられて、天下の執政と成たるを、宰相職といへり。祿大分なれども國郡は給はらず。今

の合力扶持方のごくありしなり。公用には公儀の諸役人を使なり。直臣なれば直に殿中に往來して、用もよく達す。給はる所の祿は、其身今日の自由と、子孫一類のにぎはひなり。子孫に傳へざる祿なれば、人をばかゝへず。我家内事すくなく苦勞なく、公用一遍に心をつくすなり。才德少ありても、俄大身なれば、其郡の政家中の仕置、公用にさしつどひ、一方はをろそかになるものなり。代々の大身にあらざれば、諸士もより合者にて、風俗あしく、其人の心を害する事多ければ右のごとし。宰相年老、或は病氣などにて職を辭すれば、民間より出たるは、本の民間に歸し、小臣倍臣よりあげられたるは、小村を給はりて、山水に隱居し、しづかにたのしめるもあり。家中なく民なくて、給はりたる大祿なれば、五七年の宰相にても、子々孫々の富有となれり。公儀のためには、藏入の地減せずしてよし。小身を大身にして、地を給はり、其人死すれば、子孫にすぐに給はらでもかなはず。又あげて郡地をたまはれば、一二百年の間には給はるべき地なし。故に下よりあぐる事あたはず。下地よりして大身なる人の、筋目あるが中にてえらべば、其器にもあらざるに政をこらしめて、君臣共に家を失ふ事右のごとし。倉入の地すくなき故に、世の絕を繼ず。國を廢するをあげず。みだるゝを治めず。危をたもたず。國郡のあくを悅ぶ樣なる非道も出來る事あり。これ亡國の端なり。一のあやまりより、万のひがごと生ずるものなり。忠信重祿は、誠ありて禮義正しく、大やうなる士を貴して、祿を重くし、人の頭とすれば、風俗あつく成て、輕薄ならず。世間いそがはしからず、いとま多て、文武の道藝をつとむるものなり。利發才覺なる者をば、忠信の人の下に付て、小事に用ひて可なり。人を用る事あたれば、天下の士善にすゝむものなり。時ニ使薄レ斂は、農のときをさまたげず。年貢をかろく取なり。宋衡陽王義季、嘗テ春月ニ出テ畋ス。有ニ老父一。

被レテ苦ァ而耕ス。左右斥レ之ヲ。老父ノ曰。盤ニハ于遊畋ニ古人ノ所レ戒。今陽和布レ氣。一日不レ耕民失ニ其時一ヲ。奈何ッ以ニ從レ禽之樂一ヲ。而驅リ斥ケシ老農一也。義季止レ馬曰。賢者也。命ノ賜ニ之食一ヲ。辭ノ曰。大王不シテレ奪ニ農ノ時一ヲ。則境ノ內ノ之民皆飽ニ大王ノ之食一ニ。老夫何ッ敢テ獨リ受ニシ大王之賜一ヲ乎。義季問ニ其名一ヲ。不レ告而退ク。むかしは農兵にて、武士民間にあり。田畠にも手傳し、山野にかりし、川澤にすなどりし、風雨にあたりて身堅固なり。軍陣に出るもの、皆一在所の者なれば、にげて以來面目なく、主從數代の恩儀あれば、五人七人つれたるものも、主人を見はなさず。其身つよく、下人思ひ付たれば、殊の外つよきものなり。この故に聖人、農兵を用ひ給へり。今の高まはりなどいふもののごとし。軍役農より出しゆへに、年貢かろし。むかしは日本も農兵なりしゆへに、大方十分一の年貢なりき。農に利あれば、百姓農業にすゝむなり。日省ミ月試ァ既稟稱事ニ。既稟は今の扶持方なり。百工の家業をよくつとめて功あるには、其事ほどに扶持をまし、すぐれざるにも常の扶持をば給はるなり。或は五日十日に一度、或は一二月に一度、其つとめ、をこたりを考へ、屋を作り、器物を作るも、堅固不堅固を吟味する也。故に百工も、心まめやかにて、家業をよくする也。送リ往迎レ來は、人を出してをくりむかへせしむるにあらず。天下の旅人商人往來自由にして、氣づかひなき事、をくりむかへの有がごとし。又實はをくりむかふる道理なり。川にのぞみてわたらんとするものに、舟を出してむかへをくらば、淺からぬ事に思ひて、よろこぶべし。橋をかけをけば、うれしきとも思はざるがごとし。聖賢の代には、旅行するもの、路糧をもたで往來せしなり。所の主より旅人のまかなひを出し置て、役人をつけ、馬をまでかしたり。其代には禮式ありて、人の往來いそがはしからず。いたづらに横行するもののなかりし故なり。むかし僧の行脚とて、皆

すくなかりし時は、一錢をもたで諸國修行し、所々にて宿をかし、朝夕を養ひて通せしがごとし。近世は出家餘多になりて、作法あしく、しかのみならず、人を殺害などする者も、僧の中に多ければ、眞の僧にも宿かしがたく、かせども宿ちんとるがごとし。今の風俗にてみれば、此政はなるまじき事の樣なり。嘉レ善矜ニ不能一は、四方より帝土へあつまるものの、よきをば賞美して、いよ〳〵其善を大にし、よからぬをば、ひきなをし、教たつるなり。文學なども、夷中にて書まかせにひろくみて、達者なるもあれども、夷中學問にて一偏なる所あり。帝土は四方の名人あつまるによりて、四方の中をとりてよきものなり。ことばづかひさへ、都の士はいづく共さだまらず、一偏ならでよきものなり。諸藝も又かくのごとし。取分文學は、數百歲數人の手をへて、ひとつ〳〵も、中にかなひたるよき事をいへるが、あつまりていつとなくよみならへり。故に京學は書にはさのみひろからでも偏屈になく、ひろき所有。又一人にも善ニ不能とあるなり。少すぐれたる事有者は、一生に一度帝土へと志して來るなり。帝土にも天下の善をあつめて、風俗うるはし。むかしは日本よりも、中夏の都にゆきて、物を習しなり。遠人をめぐみやはらぐる政ありし故なり。繼ニ絕世一學ニ廢國一は、子孫なく成て祭リ絕へ、又あれどもをちぶれて、其人ともなきを、絕世と云。國郡の主の子孫なくて絕たり共、同姓をたづね、ゆかりを求めて、祭をあげしむるを、繼と云なり。子孫有ながら、國郡を失ひ、流浪してあらんをばよび出し、先祖の國郡をあたへて、代々の家來を扶持せしめ、祭をなさしむるを、廢國を學と云也。治レ亂持レ危は、家中に口說など出來て、國みだれんとし、子孫不覺語にて、家を失はんとするどきと出來れば、天子よりよき人をつかはし給ひて、口說をしづめ無事になし、惡人あらば、其者ばかりを刑罰して、跡をよくし、子孫不覺ならば、教化して覺語

をなさしめ、不改をば隱居させ、先祖の子孫の中にて、よからんをえらびて家を立、上下ともに師とすべきよき人をつかはして、道學を敎へ、風俗をよくし給ふなり。後世はしからざる事あり。君の氣に入たるものに、國郡をあたへ、取立むために、闕所の地あらんことを願へり。故に子孫なきをば家を絕し、あれども嫡子ならざるおはとりあげず。またしてすたれたるをば取立ず。家中に口論など出來れば、しづめはせで、それにかこつけて、身代をはたし、子孫の不覺なるを敎はせで、惡事出來次第に、所をめしはなてり。この故に流浪人多出來るなり。扨小身のもの、思ひよらず郡國の主となれば、本めしつかひたる小者中間は士になり、かち若黨は高知をとり、いやしきゆかり、かろき朋友までも、分に過たる身上と成ぬ。これ世中の風俗のいやしく成はじめなり。主從共に才德なくて、あがりたるものなれば、三代五代七代の間には、又亡る事あり。子孫奢に習て、本の賤きわざも得せず、在所もとり失ひて、歸るべき所なければ、淺ましき体に成もの多し。いやしくそだち、下の事知べきものはあがりて驕をきはめ、代々よくそだちたるものは、牢人して下にくだれり。下のわざも得せざれば、うゑこゞえに及て、妻子共に悲哀す。末々のかろき牢人は、勇氣にたよりて、盜賊を事とするもの出來ぬ。勇氣もなきものは、遊民となりぬ。治平の政は、遊民盜賊のたねをまかざる樣にするを肝要なり。故に士の罪あるは、左遷の法ありて、他國に流浪せしめず。左遷とは流罪にあらず。近世は左遷流罪同じ事に覺たり。流罪は嶋へ遣し、山澤に置なり。これは死罪に近き罪なり。左遷は位をさげて、ひき・役をさするなり。下々の罪あり、死罪をなだむるは、入墨をして、米つき・水汲・薪とるやうなる事に使なり。骨をりわざもならぬものは、遠くゆかれぬ樣に、足の筋をたちて、門番などをさするもあり。後世は死罪につくものは、多は

をひはらふなり。是盜賊遊民の種をまくなり。いはんや大身の亡て、牢人多をや。賢君は此勢を知給へば、天下の古き家のたえざる樣にし、流浪人の出來ざる樣にし給ふなり。此時下より進て立身するものは、皆善人なり。主の仕合によりて、立身するものは、千人が九百七八十人まで善人はなし。たゞ家久しきもの、ゆかりのものと云ばかりなり。むかし國都の主の跡たえたるとき、取立の人を大身になしてつかはさるゝに、其家中の士うごかず、國付にしてたまはり、一人も他國せざるやうにせしもあり。これは又一道なり。いにしへの農兵に同じ。取立のもの多して、我身子孫までの用心と思へども、おちめに成ては少も用にたゝざるものなり。古今明白なり。武士の農をはなれて、城下にあつまり、足輕中間までも城下に住居するは、治亂ともにあしき事なり。むかしは士たるものも、農を本とし、在所を持て住居せり。才あり德有もののみえらばれて、京師にも國都にもよび出され、其官職に付たる祿を受て仕るなり。子孫はそのまゝ在所にをれば、官職を辭すれば、本の農に引込なり。故に牢人といふもの有べき樣なし。後世戰國久しかりしより、士たるもの農をはなれ在所を出て、わたり奉公人などいふもの出來て、陣所の小屋がけに習て、城下に屋敷を多とり、役人にてもなきもの、馬まはりなごゝて、大勢たゞ居し、子共多出來れば、宗子一人は親の跡とりとて、部屋住に妻子を持、次男三男よりは、主君よび出さゞれば、牢人と名のりて他國をかせぎなどす。國々にさやうのもの多ければ、すぐれたる藝能あるか、よき肝煎なくては有付がたし。治世久しければ、牢人ますく多成て、遊民のごし。主君より祿を受て、生じたる子ども、親かゝりなれば、牢人と云べき理はなけれども、風俗あしく成くだりて如此。これ又亂世の端なり。足輕中間なごはなを以て農の餘民をつかへば、よき事多きに、城下に妻子を持て、家屋敷

をならべをれば、其子共後々はなすべき事なく、有付べきやうなし。習いやしければ、盗をもし、いろ〳〵あしき事有ものなり。後には國君もすべき樣なし。平生あしきのみならず、軍國にはなを以て大にあしく、數代集居たる武士の妻子、足輕中間の妻子までも城内に取入て、養はんとは成がたかるべし。其身に成ては、生なきにしかざる難儀有べし。農兵なれば在所〳〵にて、いかやうにもさくまひする事なれば、男子ばかり城にも入、出陣もすれば、何の費もなし。もし人じちとる事ありても、頭々庄屋などの母か妻子か、城中に入たるばかりにてよし。かの樣の事こゝにいらざる論のやうなれ共、聖人九經の政にそむけば、惡事多出來る證據をいへり。朝聘以時、朝は諸侯帝土に來て、天子にまみゆるを云。五年に一度なり。聘は年に一度、大夫を使さし、三年に一度卿を使として、天子に土產をさゝぐるなり。定數の外には、へつらひて使者土產等を奉るとあたはず。往來の路次も、一日にいく里と、大數定りていそぐ事あたはず。風雨等のさはり有て、をそきは何ほどにても不苦、一日も定數よりはやきをいましむるなり。故に道中いそがはしからず。往來すくなく、諸國しづかなり。時を以てする故なり。日本王代のときは、三年に一度の上洛といへり。小國にて近き故なり。京に三十日より多は居ざりしなり。尤人じちなし。德治の遺風なり。厚往薄來、諸侯よりの土產はかろく、歸國のときに天子よりのたまものは多し。近代諸大名の土產よりも、御暇のときに、大樹よりたまもの多も、此遺風なるべし。或問、天子畿內の地は、帝土の臣にたまはる所多し。かくのごとく、天下の諸侯に厚く給はり、うすく受給はゞ、何を以てか万事とゝのひ侍るべきや。云、これは往來の禮用なる故に、臣の奉るよりは、君のたまもの重し。諸侯皆在國して、帝土につめざる故に、定れる貢を奉るなり。賓には返禮なし。かろき貢にて

も、天下を合せては、大なるとなり。上にとなる驕だになければ、諸國にめぐみ給はる用はたれり。むかし奧州の秀平、平家にしたがはずして在國せしかども、天子に奉る貢は、毎年黄金を傳へて、京都にさゝげたり。頼朝にもしたがはざりしかば、右のごし。これいにしへの風なり。武家の代と成ては、在鎌倉久しくて、國用多つひやす故に、諸侯の貢やみたり。貢をさゝげて、在國する事は、諸侯も天下主も、大によきとなり。士民もこれによりて困窮せざれば、武士百姓ともにゆたかなり。頼朝北條尊氏、諸侯を在鎌倉せしむる事は、用心と見えたり。しかれ共むかし王代の二十分一も、世を持とあたはず。頼朝のときは、いまだ古風のこりて、物どにかろく、其上三代といへども、年數すくなかりしかば、在鎌倉ゆへ、諸國困窮の沙汰なし。北條は猶以て、儉約を宗としたるゆへに、九代までつゞきたり。高時に至りて、威つよく驕奢きはまりしかば、一國の一年の物なりにて、一度の在鎌倉の用とゝのほらざりしとなり。これによりて諸國虚し。士民困窮せしかば、大亂出來ぬ。足利家の天下、十四代といへ共、中比よりは公方と云名ばかりにて、今の公家の如し。是皆士民困窮して、國虚せしゆへなり。天子諸侯のたから三つあり。土地・人民・政事なり。しかるに土地虚し、人民困窮し、政事九經にそむくときは、亡びざるとあたはず。懐ニ諸侯ーは、此方に心ありてなづくるにあらず。諸侯より徳をしたひてなづくなり。懐にするとよみて、同心同徳の意なり。なづくと其中にあり

集義外書卷十一終

集義外書　卷十二

窮理上

一朋友問、大學治國平天下の理を論じ候事は、理をきはむるの一事にて候へば、位あらずして其政をはかるのたぐひにはあらじと存候。しからば尋申度事ども多候　答云、しかり、我等まれに申候も、大學治國平天下の義論か、或は五百歳このかた見え來候世中のあらましを申にて候。時務の政道は殘候て不論候。大躰の義論にて候はゞ可承候

問、執政の人としては親類知音中に能者ありても遠慮して、人品のえらびにも不申が能候や　云、それは私と申者にて候。尤親類知音の贔屓をするよりはまさり候へ共、執政の職はおほやけの儀に候へば、公儀にしては親疎のへだてあるまじく候。退て我家内におゐては、尤親疎の品なくて不叶候。たゞ君のため國の爲には、へだてなきが義にて候。是大公無私の天理なり。兄弟一門の人にても能人ならば、遠慮なく申上もし、すゝめもし、兄弟一門にても、國の害になるべきものを、あやまりてわきより申上もし、すゝめもいたされば、其實を明にして、おさへらるべき義に候。一門のよき人を遠慮して、能と不被申、私御座候へば其人の一門にあしき人ありても、わきよりあしきといふ事を遠慮いたされ候。しかれば天職とは申がたきにより、私と申候也

一門、余所目よりもしたしき内にては、善惡よくしらるゝものにて候へば、執政に一門知音有之は益はなくて、害有べく

ゆや　云、しからず、益ある事にてゆ。あしき者をばかねていさめみち引て、悪にいたらざる様に仕ゆ。つねの人の異見とちがひて、能きく者にてゆ。其上公儀の御用にふれてこそ可被申ゆへ。事なきに十人なみの事をもち出ては、可被申にもあらずゆ　問、國天下の政道は大事にて御座ゆに、君臣の禮義ふかく、窮屈なる躰にては、分別も心一ぱいは不出筈にてゆ。むかしはいかゞ御座ゆしや　云、むかしの禮と申ゆは、心の正くなる様に身持仕ゆ。君臣の禮義正く、きつと仕ゆほど心おさまりて、分別思慮も常より能理にてゆ。後世其法はたへたるゆへに、北條家の世には、天下政道の相談幷大事の口事などひはんの時には、昼なれば君臣の間に、ひとへの木丁か、のうれんなどやうの物をたれ、或は障子をへだてゝ、いかにも座をやすくおかれゆ。夜なれば同座にて、ともし火をけし、安座して相談御座ゆき。武家の天下と成てより此方の様子には、是も相應かと存ゆ。上古の代は、徳さかんに、知大に、無事行はれゆへば、天下の廣きといへども事しげからず、分別思慮すべき事も、さのみなくゆへば、相談のむつかしき事もなくゆき

問、金銀の拂の裏判等まで、執政の人のいたされし事ありしはいかゞ　云、大ぐくりはきかれずして不叶ゆ。常々の吟味裏判等は、執政の下に付て助に成人のいたさるゝ者にてゆ。小事にはそれぞれの助をつけて、大なる事ばかり聞せ申、常にいとまあるやうになくては、分別思慮も心一ぱい出べき様なくゆ。大國の執權職たゞ一人にてしめられゆだに、いかにもいとま多ゆき。武家の世となりて此かた、執政の人官位の名ひきくゆへども、實は三公の職にて御座ゆへば、こまかなる金銀の裏判までいたさせゆ事は有まじき儀なり。我とは身をたかぶるやうに人の思ふべきかとの遠慮も可有ゆ。さやうの爲に、古へは家に備たる大臣の筋は、政にあづからずして、官位高く祿ゆたかにして、脇

にのきて天下のうしろみし、執政の大に我まゝなるをばおさへ、又下り過ていやしきをばひきたて、事しげきをばはぶき、おこたりをばいさめなど御座候き。執政は筋目身代を撰まず、天下の知者賢者をゑらむであぐるものにて候。

問、天下の事はおほやけ成事ゆへ、隱密はなき事と申人も候。いかゞ　云、三皇五帝の成德の世には、さやうにて候。三王の時よりは、最早世の勢ひ替りて、隱密の義なくて不叶候。君たる人能をんみつになければ臣を失ひ、臣たる者能隱密になければ身を失ひ候。惣じて天下の萬事よく密ミツになければ事やぶれ候。政道評定の事は、其人々の外へは親子兄弟を初て、もらさぬ義にて候。君にはをかす事はあれども、かくす事はなく候。不合點なる親子兄弟夫婦フ知音などは、我にかくすと、うらむる事もあるべきか。心ある人ならば、親にても子にても是は公義の事なるに、いふまじき所にていふは、やくにたつまじき者と見かぎるべし。いふまじき事をもいふを以て、したしみとする事は、無下の小人のまじはりなり。いふまじき事をいはぬとて、親みのかけみちには少もならず候。君子の心は常に天地神明にまじはりて、あざむく事なく候。ちかいの言など申は末なる義に候。其誓言ばかり誠にして、其外は僞にて候や。ちかひまでもなく、一念の不信一言の僞は、みな神明の照覺明に御座候。皆天罰バツのいたる所にて候。道理にしたがふを以て忠共いひ、孝共いふ。道理にそむきて、忠をし孝をし候は、たとへば盜賊をして親をやしなふがごとくなり。養ふこころは孝に似たれ共、終には親子ともに其罪のがれがたし

問、執政の人は大身なるがよく候や。小身なるがよく候や　答、いにしへは大身にて御座候き。後世は小身なるがよきと見え候。其ゆへは、むかしは無事にていとま多かりしゆへ、大身にても事とゝのひ候き。後世ははぶくと申分が多事に候へば、我國家の政道いとまなく候。

我家の事はすきときかぬほどになくてはならざるゆへに、大身にてはなりがたく候。しかるゆへに、大身に德ある人御座候へば、子にわたし、隱居の樣にて、執政を命ぜられたるも御座候　間、執政は事多候に、老人多候は何としたる儀にて候や　云、よき不審にて候。執政の人は大方長命なるものにて候。思慮分別し、苦身する事にも私欲まじはり候へば、心を勞してあしく候。執政の苦身はみなおほやけごとにて、私欲のまじはりなく候ゆへに、いかほど事しげくても不苦候。其いとまなきにまぎれて、形氣のたのしびもうすく候へば、をのづから養生も候。我家の事は權勢の餘力にてをしてゆく事多候。人情をのづからしかる者にて候。又居は氣をうつし、養は躰をうつすの理にて、小事にはたえぬ氣力も、大事にはたゆるものにて候。又小國中國の仕置をさせては、けつく事ゆかで、大國を治れば能、天下に用れば彌よき人候。如此人を見しらですたれたるためし御座候　間、中國夏商周の初こそ賢聖の君もおこり給ひ候。漢の代より此かた、賢聖とおぼしきすぐれたる主もおはしまさず候。其初大かたの仁君名主と申ばかりにて、跡はさもなく候。しかるに三百年四百年つゞき候事は、德治にてなくても、大躰のしめやうある事にて候や。日本にても、王代は千五百餘年ゆるぎ不申候き。淸盛頼朝よりこそ武家に渡り候。其後國主も天下取も、間もなくかはり申候。時の運にて候や　云、をごれる子の不可用と申古語の心は、武家の代と成て、不長久本にて候。むかしは農と兵と分れず候き。農兵にて候へば、賢君名將おはしまさでも、大惡の君だになく候へば、おさまりかゝりたる天下は二三百年四五百年もつゞく勢と見え候。武家の代となりて此かた、兵が農を出て、陣屋の小屋の風を其まゝに、城をけつかうにし、屋鋪をひろくし、小屋がけ大になりて、天下國家の用に立べき務めもなく、翫あそびのやうな

る事にて、天下の財用をついやす事出來ぬ。つとめあるといふも、此無用の風俗あるによつてのつとめなれば、勞して功なし。實は遊民に近し。世主にても國君にても、君の威のつゞかなき內こそあれ、其間には必くらき君もあり、或は幼少にて跡をつぎ給へば、上の威うすく、諸士我まゝになりぬ。大勢の事にてぢねんにあしく成事なれば、後にこそおごろき候へ。そのはじめはしらず候。又しりても、勢にて誰をさゆべき樣もなし。下々は其勢を知て、いよ〳〵氣隨まさり候。主君の目の前や、家老の前にてこそ、ばかいんぎんにて、まぎらかし候。かげにての無作法、我まゝは日々月々にまされり。法度ありても不ㇾ用ば、主君はありてなきが如し。後〳〵は我臣下諸士といへ共、何ともすべき樣なし。ことわざに子をあまやかし、あしくそだて、かどむべきときかゞめざれば、のちはこはくなりて、かどめられずといへり。我子ながらも、親のまゝにならず候故に、をごれる子の用べからざると申なり。武士をあしくおさめなし候へば如ㇾ此成て、後には主君のちからにもならず候。やぶれと成べきまでに候。これを紀綱ゆるまると申候。紀綱ゆるまりては、やがて亂世となるものにて候　問、農兵は國の武道もつよく成、天下も久しく治り能事にて候へども、もはや今はなり申まじく候や　云、今の分にて農兵を取成候はゞ武士も同心有まじく候。民は大に迷惑可ㇾ仕候。士民ともによろしき樣にするとは、本才の人に任せられ候はゞ時の宜あるべく候　問、農兵になり候はゞ非法貢法の樣なる事にて候はんや。それにては上へあがる年貢少くて、今のけつかうに成たる世には、公方諸大名共に用たり申まじきと存候　云、日本もむかしは貢法にて候き。けつく今の藏入よりも、藏入は多なり候。扨諸士はあんどいたし、子々孫々牢人浪と申事もなく、其身子孫ともに堅固になりて、藝能に達し、民は今の民よりは大にくつろぎあ

んど可レ仕候。諸大名も其家長久に、公方はなを以百千歳もゆたかに御つゞき可レ被レ成候。上中下をしなべて能事に候へども、世の勢ひと申者にて、ならぬ事にて候。不レ成事を申てもせんなく候。其上其位なくして、其政をはかるの罪も御座候　問、公方の御藏入もかはらずして成申候や　云、公方の御藏入もいまの一ばいにも成可レ申候。扨天下の御用は今の半分いらず候ゆへ、金銀米粟あまり候。是を以日本の國を上國となし、水損日損の憂もすくなく、万々歳のほまれ不少樣に、いか樣の事を可レ被レ成候もまゝにて御座候。武家の業ながら、弓馬のくちさへおとろへ候へば、まして大道の業を知人なきはよぎなく候　問、其弓馬の道すたれ候はん事、にがにがしく候。つたへをきたき事に候　云、いにしへの人傳度事は山々に候はんづれ共、其人にあはざるにてあるべく候。其人にてなきに、傳置ては、後のやくに不レ立候。せめてかなりの人ありて傳ても、又それほどもなき人々傳られ候はゞ、けつく害に可レ成候。其上中々合點も參まじく候。國法軍法ともに不仁の人に傳へ候へば、こりなし樣にて桀紂を富するごとく、虎に羽を付たるがごとくに成候へば不レ傳こそまさり候　問、其秘傳までは及なく候。弓馬のすたれてあしくなり候、其あとばかり承度候。近年は弓馬共に末に成候樣に申候。むかしの樣成馬はありがたく候。世の末と申事にて候や　云、世間の武士鐵砲張・弓打・刀かぢ等をば知て、馬乘弓鐙の藝者軍法者をば知給はず候。其ゆへは鐵砲張に鐵砲をば好てはらせられ、弓打刀かぢにも我刀のほどをはかり、又は得たるやうに好て打せられ候。然に馬のりに馬の乘樣を下知してのせられ候事はなく候。手つまきゝのりつけて馬をば能乘候へども、武士の用かたの用ひやうは不レ存候。其何もしらぬ馬乘次第に馬をのせかへりては、馬乘のさし圖をうけて、あたら馬共をやくにたゝぬやうに被レ仕候。むかしの

名將武士の馬を持たるとをかたりてきかせ可レ申候。春は遠のりを第一とし、山をあげ山をおろし、すき田うねみぞをのりて、馬のともまへの強弱、尾の勢力をしり、岨細道のつたひの心持のどん利根をこゝろみ候。夏は水邊を第一として、川をおよがせのりてこし、手かけてこしなど、馬にけいこさせ、且は強弱を知、秋は責馬を第一として、むちうち馬上の弓等の達者をなし、冬は馬をよくかふべし。これは其大略なり。時としては夏の日中にも乘、冬の甚寒にも乘て、馬のやはらかにならぬやうに持候。平生少づゝの地ありきには、のりあひ者と申候自由なる馬が能候へども、すき田うち畠ともいはず、平をしに仕候時は間よはき馬にては必落馬多ものに候。常に手にあはず候とも、其時は間つよき馬ならでは用に不立候。瀨はやき大河、又はさかりに出たる川などは、間づよき馬にのらでは、先陣瀨ぶみはならず候。常に馬のかよひなき山坂も、間よき馬にて乘こす者に候。間づよき馬は、澤山にありがたく候へば、せめてつよ口ある馬を持、其つよ口をば平常ははづして乘、大川を越時など內々のつよ口にかけさせ、一あて當てこす事御座候。かやうの用どもは、名將と武士と人々の心持ありて持とにて御座候へば、馬乘の知とにてなく候。それゆへいにしへの馬乘をば、御馬せめと申候き。弓を射むちうちして、馬の口相あらくなり、山坂田畠をのり、川をけいこさせて、馬の口相あしくなりたる時、御馬せめをめして、此馬の口相をばかやうに乘候へ、路道多乘て口をやはらげよ、早道はいかほどのれなどゝ下知し、馬場乘させたる事に候。口を引折などゝいふとは、大にいみたる儀に候。上手は其口をはづしてのり、常はわすれさせて、用の時ばかりに出し候。大將は知レ此だん／＼に馬を持候者也。のりおらすに下地よりのり相能生付たる馬をもたしなみ、時によりて用ひられ候。獵士にも時により人によりて、それ／＼の

馬をたまはり候。小身の武士は用かたをも乘責馬をも乘こく上手に成て、間づよき馬をたしなみ候。なければつよくちの馬にても持、朝夕に切々乘て馬になれ、馬ものり手の心を知などして、平生も用かたも、大は小をかなゆる樣に持候なり。大身小身共に馬は上手にてなければあしく候。下手を自由にのせんとて、馬をよはめてのする事出來ぬ。何の藝も道だに傳はり候へば、はやくなるものに候。道は失て不レ知か、知ても渡世ゆへ教ざるか。馬乘は馬一色に一代かゝり居候へば、功にても乘事に候。弟子には道は不レ傳して、馬にならへこて、いつまでもかゝらせ置候。武士たる者は可レ習藝多ければ、一色にかゝりては居られず候。大身には猶以馬をよはめて下手を我上手の樣に仕候。我等或人に手にあまりたる馬の乘樣を習候。いつもは馬場にて地道も乘かね候馬を習ひ候とそのまゝはやみちまで心やすく乘候き。其後病者に成て、けいこもならず候。わかき時分に諸藝ともに如レ此よき傳を聞候はゞ、むかしの人のごとく二十歲より內には弓馬ともに達者に可レ成者に候。間能馬口つよき馬をば、そのまゝ置てねぢあひ道と、けいこの勞とを以乘おほせてこそ、用には可レ立事に候。われらわかき時、當世馬の前筋尾筋のべ候事は、あしさうなること存て、馬ずき共に不審いたし候へば、何も申候は、前筋のつるは、其馬の病なり。切てはなし候へば自由に成てはたらき能候。尾のかゞみてさらぬは、其馬のかたは也。切てはなしぬれば、本の馬に成候。けつくつよみにてよはみならず候。とも筋をのべ候ばあしく候。それは吟味したるもよきと申候間、其通を武士の用馬の功者に語り候へば、其人の云、道理の至極したる事にても、水かけあひに申候へば、情のこはき者申かち候間、馬に御たづね有べく候。我等は馬にたづねてしり申候。前筋のべたる馬は、下坂急なるにてあやまち仕候。田畠などにてもたふれ候。尾筋のべた

る馬は、川渡しにてつよく、水にうきしづみ候時、鞦はづれ候。其上獸は尾にちから有てこそ溝堀はとびこし申候。尾筋のべたる馬は、飛候事ならぬ者に候。とものべたる馬は不ㇾ及ㇾ申、かんしやうならず候。のぼり坂の急なる所にて、物のぐして乗候へば不參候。其まゝあやまち可ㇾ仕候。馬にもこはず、左樣の心がけもなくて、たゞ當世のはやり物に心をうつし候ゆへに、ともの筋もかくしてはのべ候由に候と申候き。右は今のついえによつて申候。いにしへの馬の道には十が一二にもをよばず。しかるにこれらほごの目のまへなる道理をも知人なく、武士の足とする大事の馬を、何のわきまへもなき馬喰次第にして、天下の馬をかたはにし、武士の心がけはゆめにもしらぬ商人同前の馬乘が、口相をなをすこいへば、いひしだひにして、よき馬どもを、用にたゝぬやうにいたし候。武士の道はこれほどにもおとろゆる者にて候や。此外の武藝の品〴〵も、大將こ武士こ根本をしらで、藝者にまかせ候へば、其ついへ馬に同じく候。それ武藝は弓馬を以て要こし、兵器は劍を以て第一こす。漢の高祖は三尺の劍をさげて天下をとり、源の賴光は髯切を得て天下を守り、義經はうすみどりを持して武將の名を得たり。甲冑は刀をふせがむため、鑓長刀は刀をとめんがため也。然共甲冑は用ひざる時有、鑓長刀はもたれざる處有。刀は武士の身をはなたざる寶也。しかるに近世鍛冶は刀の精神をうしなひ、硎は刀の利を亡す事出來ぬ。是鍛冶と硎との罪のみにあらず。武士の道を失てなさしむるものなり。武士たる人、刀の道を不ㇾ知ゆへに、無疵にして初より能きろゝを好めり。かなとこおろしにはゞかり付て、切てかゝれば、則打なをさせ、古身にしては疵にもならぬ事を、新身ゆへ疵なりといひてかへせば、代は下直なり。古作の法のごくうちては渡世なりかたきによりて、無疵に富分きるゝ事を仕いだせり。金やはらかな

れば、この好に應ずれども、かたなの精神はなき故に、當分はきれても次第におとりゆく也。一とき二こきの間も、炎暑に終日照付られなどせば、心もとなし。きれやみて是はいつの時代の打物とてすたる事あらんか。夫上作の法は、あらがねの性を損ぜず、此故に五百歳の後も新身のごとく成金色有、上作には疵多出來る子細あり、金をねり過さず、是疵の出來易き其一なり。つちうつ事つよし、是疵の出來る其二なり。刄をやくとひかへずして精中に通ず、是きずの出來る其三なり。此三の大難あれば、無疵ご出來の能とは變化の中に求て、鍛冶も不レ知處なり。此故に出來よからず、疵ありても、金能と切る事はかはりなし。むかしの武士はよはみの外は疵にかまはず、切りてかゝれば硎なをし次第にきれますをよしとす。小刀さへ能うちたるは、當分はなまきれにても、とぎ入るほご能きるゝもの也。いはむや刀は千歳をかけたる物なれば、うちおろしは十に五かゝるも有べし。古法のごく金よくきたひてきれぬといふ事はなき道理なれば、むかしの武士は刀はこかくきるゝにきはめて、打おろしをとぎてきれざれば、はをひきとぎ直してきり、或は土たんにて數千の砂きりし、其後硎てきればかならずきれたりといへり。此故に鍛冶も當座まかなひの手くろはしらざりしなり。或問、むかし賴光の髯きり・膝丸はうちおろしより能きれたり。今井上眞改が打物も上作の法なれごも、初よりきるゝは何ぞや　云、金かたくて、初よりきるゝは剛氣をかねて、刀に精神ある故なり。後世に至ては、たゞひすくなき上作なるべし。剛ばかりにて、柔をかねざるは、石のかたきがごくにて、却てきれず。柔過剛すくなきは、ほねをきらず。剛柔かねて精神あるを上作こすべし。是をきたひ能といひ、鈍にほひにあらはるゝ成べし。眞改云、きたひは知なり、にへにほひは仁なり、きれは勇也。上作は知仁勇の三德備といへり。眞改は本武士

二一七

なり。故に古主より知行をたまはり、鍛冶は物ずきにてうつことなれば、古作の法を守るものなり。昔は社家・出家にも鍛冶のさいくに得たるものありき。渡世一へんの鍛冶は、今の無疵と一は切の吟味にて、しかも直すくなければ、古法を不レ守はとはり也。この故に刀は無疵に當分きるゝ様にうつ事はやすく、精神を本として、疵に心なく、當分のきれにかまはずうつ事はかたし。武士たる者此理を不知故に、鍛冶多は下手になる事也。むかしの下作といふは、東の物とて、打出せり。是いにしへの南良物之といへり。昔のならものは近世のあつらへよりは金かたし。いかんとなれば當分のきれと、疵にかまはず、金をねりくださゞれば、後世に至てよくきれて用をなせり。下作なる處ははかゆきにうち出してにへ・にほひすくなく、つちとやきと不足なれば、やきはつれてはきれざる有。刄の有かぎりはきるゝ也。やきはつれてきるゝは上作なり　問、とぎやの刀の利を亡する事はいかゞ　云、是も武士のなさしむる事也。此刀は是ほどの直にてなければとぎがたきといふ事をしらで、下直にあつらゆるゆへに、金かたき物を、古法のどく礪ては、渡世なりがたければ、火にてあぶり、湯に入なごしてやはらげて礪なり。刀はきたひ能うち出しても、とぎやにて其精を亡すものあり。今もなら物は出來あしけれどもかねかたし。きずと當分きれとの吟味なきゆへなり。むかしの南良物は、奈良とぎとても、火は入ざりしに、今は大に火を入、なまがねにして礪といへり。此故に後世までもなく、今より用にたゝず。むかしは奈良物もほどにつけて今の様に下直にはなかりしといへり。金かたくときに手くろなくきれざるはすくなかりし故也　或問、むかしとても小身の武士高直の刀は求がたからん、いかゞしてさし侍りきや　云、むかしは親の代のゆづりあればさし、或は我一代の精力を出して、金よき刀を買とり、或は鍛冶に

たのみてうたせたり。鍛冶も一刀うてば、しばらく餘產あるほど直をつかはしたり。故に鍛冶も數をうたずして精神をこらして能刀をうち出せり。武士もきれの外は堪忍してさしたり。五郎時宗、箱根の別當よりうすみどりをこひうけて、親の敵をうちたりしも、十郎祐成の太刀は、三尺八寸にて幅ひろく、かさね厚し。うすみどりは貳尺七寸にて、幅せばくかさねうすし。力は兄にまさりたれば、大太刀を好べけれども、調がたきによりて、金の能を幸にし、ほそくみじかきは堪忍して用たり。むかしは太刀一ふりに、うち刀一こしにてたれり。今は小身の者も、刀二三腰脇指二三腰、いろ〳〵に好て所持す。數多ければ高直にてはならず。是鍛冶もこぎも古法を失て、手くろ出來利用あしき所なり。又近年のとぎは多ははじしをとぎおとせり。古身は一度はじゝをぬきてははをひくべき餘分なければ、百年の疵となれり。はじゝなければ大かけしつゞけてきれぬものなり。きりあひの時すへ物のやうに、はむき置にはなきゆへに、はじゝなければ損ずる事すみやかなり。刀にはにてきるゝと、精神にてきるゝとあり。精神にてきるゝは、はまぐりはに成てもきるゝ者也。はにてきるゝは、はじゝあればなまぎれなり。此ゆへにはじゝをぬく事出來たり。とぎの罪にあらず。なさしむるものあればなり　問、受領こていにしへのくにの守の号を申請る事は何ぞや　云、受領は鍛冶よりおこりたる事也。むかし國の守、鍛冶の道に器用にてなぐさみに刀をうちたるが、國の守なれば万事不足なく、鐵炭吟味して名物をうち出せり。上にもきこしめされて、命ぜられたる有。是を例として、後世刀鍛冶の上手に、受領の虛名たまはりてより、又例として他の職人商人も受領の虛名をゆるされたり　問、眞改が刀に三德をいへるは道理あたり侍るか　云、刀のうへに付ていへり、何事も至極にいたりぬれば、みちにかなふ所あり。心

の徳天下の用を以ていはゞ、刀の徳は勇之。威を以て國家を守るは勇中の仁なり。神武にしてころさず、ほこをやむるの道理にて無事なるは勇中の知之。知仁勇は心の一徳なり。有時は共にあり。故に仁あれば勇知其中にあり、知あれば仁勇其中にあり、勇あれば仁知其中にあり。刀劍は三種の神器の其一なり、不淨にしてうつべからず。このゆへに上手の鍛冶は、心清淨なる處あり。鍛冶の清淨にして、うち出したる刀を、不淨の者ぬぐひてだに、さび出來るこいへり。いはんやあしくときなすは、おしきとなり。其外は用る武士の清淨の心に有べし

集義外書卷十二終

集義外書　巻十三

窮理中

一朋友問、貴老書簡に、其人の姓名をしるし給はざる事は、何としたる御心持にて御座候や　云、令名も悪名も死後に可ㇾ定候。生涯に吾名の書にのせられたるは、目ばゆく、いやなるものにて御座候。人心惟危候へば、又過失も不ㇾ知候。生涯に人の悪名をいふは、しのびざる處御座候。改て善にうつる人も可ㇾ有候。其上死せる者にはあらそひなし。生たる人にはあらそひ有。此人情をしらで、生る人のことをほめあげたるは、他人のそしるにはおとる事御座候。其上道德のあつきか、善行の大なることなき人は、今にして何ほどほめあげても、後世まではつたへぬ者にて御座候。書簡に姓名をのせ候とも、其人に實德なくば、後世には誰申出る人も有まじく候。却て當世のそしりをまねくべく候。たゞ今姓名をしるさず共、其人に實儀あらば、その誠をば誰かをゝゐ侍らんや。大舜の君の、悪をかくして善をあげ給ひしは、有德の人の善をあげ、ほめ給ひしゆへに、世人もしたがひ申候。不德のわれらごとき、大舜のまねをいたして、人の善をほめ申候へば、そしるにはおこりて、其人のあだと成事御座候。一向に世間の人のほむるはよく御座候。志の相かなひ、我を信ずる人どちは、同志の善をもいひ、他人の善をもあげたるがよく御座候。人の悪をかくして、其人の一生いはざる事は、改て善にうつらん事をねがふなり。悪をいひたてられては、もはやすてぶちにて改べき心うす

きものに候。かくすによつて入微にはぢおそれて。改むるの期あるものに候。君子の人をすてざる仁愛の厚き處にて御座候

一朋友問、貴老以前は人馬武道具身代に過候き。奥方は身代よりもとのほか人少に。諸色かろく御座候き。今は内外ともにあまりにかろく、諸道具もかつて不足に見え申候。さやうなるがいにしへの道にて御座候や　答云、いにしへの道は時處位の至善をはかりて、行はれたる事にて御座候へば、其心は可ㇾ學、其事は不ㇾ可ㇾ學。われらの義は、時處にも定てかなひ申間敷候。たゞ自身の分をはかりたるまでに候。主君より知行をたまはりをかれ候へば、人馬諸道具みな主君のものにて御座候。われら親先祖より傳候ものは、牢人の内になく致候き。俄に國法の軍役をあはせむといたし候へば、内所をつめ候はんよりはつめ可ㇾ申處御座なく候。左もなく候へば、内所も身代相應にして、よのつねなるがよく候。男女ともに天地の内にある者、數御座候に、身代能人が多養ひ候はでは、何方にすみ可ㇾ申候や。又隱居して俄に人少に諸道具なき事は、無欲きれいなるにはあらず候。むかしの人馬武具、身代にあはせて持候も、よせいの滿足にあらず候。家人の多は、おほくの人を使やうなれども、多の人につかはるゝ處御座候。諸道具多持て、富なるやうなれども、諸道具の奉行を仕處御座候。人少にてことしげからず。しづかなるほどの樂は無ㇾ御座ㇾ候。人は氣力つよきゆへに、人につかはれ、諸道具につかはれても、いきいきとして餘勢あるがよろこばしきこと見え申候。われらは病者にて氣力乏御座候へば、人馬も諸道具もむつかしく候。公儀を仕りて軍役をうけばり候へば、我物ながら主君の物にて、國役をわけ預りたるにて候へば、無ㇾ是非ㇾ候。たゞわれらどときもののみにあらず、主君といへども

一國の物を上より預りなされ𛀁。たゞ國郡の主のみならず、大樹といへ共天の物を預り給ひて、天下の爲に所持なされ𛀁。隱居又は世事の國用軍役にあづからず、人にやしなはるゝ者が人を多つかひたがり、道具を好事は、冥加につくべき事の、しかも不心得と申者にて𛀁。公家などへおはしまし𛀁女事は、大名の息女たりとも、其先の身上に合せて、萬かろくしてしづかにゆう〳〵としたるを、たのしみとなされ𛀁やうにありたき事に𛀁。我といらぬ苦をもち、天下の用ならで國物を多ついやし給へば、御仕合あしく、子孫のおとろへになり𛀁へども、風俗のいやしきに習てそのまよひを知人なく𛀁

一朋友問、うけあきなひ、座あきなひと申事はやり物に御座𛀁。國主とあき人とたゞ二人の得分にして、天下の諸色高直になり、諸人迷惑仕𛀁と申𛀁。むかしもありたる事にて𛀁や　答云、さやうの事無案内に𛀁へ共、わかき時分老人の物がたりをきゝたる事御座𛀁。藤堂和泉殿へ出入の町人、伊賀一國の塩を御うらせ可ㇾ被ㇾ下𛀁、左𛀁はゞ五百枚の運上を指上可ㇾ申と望申𛀁。和泉殿聞たまひ、其町人はわれらの物をこそもらいてすぐべきに、我に過分の銀を毎年くれんとは、何のよしみぞ。伊賀一國へ他の塩うりをよせずして、一人にてあきなはゞ、塩の高直なる事常より三ばいすとも、百姓ども他より取事なるまじ。我に五百枚くれんといはゞ、五千枚も壹万枚も、其町人がとらんとの事なるべし。我一國のものを迷惑させて、其町人に大分の得をとらすべき事は何事ぞ。畢竟我に五百枚くれて、十ばいか二十ばいかの利を付てとりかへさんといふ事なり。我國の百姓の物を、あき人とあいたいして、あひ盜にぬすめとか、其百姓の痛みは誰が損とするぞ。其樣なるいたづら者は二度よするなとて、大にいかりたまへるとなり。又一人

の町人望候やらん、他の國主の事にて候きや、失念申候。一國の茶を一人にかはせ給はらば、運上をあぐべきと申候へば、茶によらず、蒔薪によらず、田作少き者が、さやうの物を作出して、年貢にもたて、米にもかへて食こするものなるに、たゞ一人のあき人より外にかいてなくば、いかほど下直にいふとも、すてうりにもうらずばなるまじ。たとへば茶をもつて、米千石の年貢に立るを、其町人が二千石にもして我にくれば、一旦利の有やうにても、民のなんぎかぎり有まじ。下々のつかれめいわくは不ㇾ及ㇾ申、我等の物をかたりてこる也。それほどの分別なくて、取次をするか、汝等にも何ぞくれんといふかとて、しかり給へると承候。一國のつかれは一國の主の損なり。天下のつかれは、天下の主の損なり。いにしへの王者は、一人を以天下を治む、天下を以一人に奉するにあらず、何ぞ一國を以、主侯の欲を養ひ給はんや。町人もなみ〳〵の大勢は迷惑して、富人五十人か百人がゑようにおごり、天下の風俗を亂し申までに候。其身も罸あたりて終に亡候。御代長久にて、大名も家老も、生ながらの上らふにて御座候。小身の武士さへけつかうに候へば、何も不ㇾ知候。さりながら聖人は夢にも見給はざる、凡人の上の事さへくはしく御存知にて候。生ながらの聖王賢君も、下々の情を能しろしめすゆへにこそ、仁政もおこなはれ、後世に名をもあげたまひ候

一朋友問、うけこり普請と申事は、小利大損と申候へ共、日傭の者の助などには成申事に候。その上武士の心安き事にて御座候へば、今時はやり候も尤にて御座候や　答云、日傭の者は使てうけとりはさせぬがよく候。たとへば池川の堤を金千兩にてうけとり候へば、五百兩は日傭頭のうけとりのもの取候て、日傭には五百兩ならでは不ㇾ遣候故、日傭もかじけて麁相に仕候。其上人數壹万入べき處へも、五千たらでは不ㇾ入候ゆへ、ほどなく破損に及候。得つく者

は日傭頭一人にて候。公義には千兩に又千金かさねて倍々の御損のみならず、度〻に田畠損毛仕候へば、其ついゑ申盡しがたく候。武士の能奉行を被仰付、其處々にて百姓の內、こがしこき者、庄屋の弟や子などやうの者をつえつきにして、日傭二十三十づゝあづけ、歩役壹万可ㇾ入堤には壹万五千も入、千金可ㇾ入には、千五百金も入候へば、永代破損なく候。一旦大分物入のやうに候へども、右にくらべ候へば、其得分大なる事にて候。其得分よりも武士たる者が、山川の地理にも、人のつかひやうにも、功者になり候事は大に能事にて御座候。屋作其外の事もこれをおして御がつてん可ㇾ被ㇾ成候。其堤近所の者、つえつき仕候へば、我身にかゝりたる事ゆへ、堤の堅固なるやうに情を出し申者にて候。日傭の歩もあるべきほど、賃をとりて身をすぎ申候。今時鐵飽役家中の出役など申者は、普請になれて功者過候ゆへに、かへりて堤堅固ならず候。日傭は日々我と我身をならはし、ほねをおりつけ候故に、常の人足とは一ばいも達者に有之候。奉行よく、つかひやうだによく候へば、ゝの外普請はかどりて、しかも堤かたき者にて御座候。堤にてつぼを割候事は、堤の堅固ならざる第一にて候。つぼをはらで不ㇾ叶は、土取ところにてなはばりしたるがよく候。池の根ぎりにはそこを入と云事有、あらてには生あらてと云事有。池の水をもたすあらてのきれ、堤のやぶるゝは、皆奉行の無功ゆへに候。惣じて天下の万事をうけとりにさせて、武士は心安きやうに侍れども、天下の山川の地理も、金銀米穀の運行も、財寶の万用も、皆町人の心にのみこみて仕度まゝに仕候。武士は町人にはからはれて、何と有やらん不ㇾ知候。さて金銀は皆町人の手にあつまり、才知町人長じ候へば、時有て亂逆のおこりこも成べく候也。みづからおこさず共、賊のためによきたくはへたるべく候。是は皆うけとりより初申候。其外色〻の事に入札有

事は、世中のけいはく、僞のはしにて御座候。木の生ずる事は久しく、切こる事は手間不レ入候へば、社寺の作事ははかのゆかぬも却てよく候。金銀の多入事は、まはりては天下の内に有之候。其上請取にて麁相に出來と、武士の奉行にて工商を下知し、武士の心より何事もはからひして、堅固に出來るとは、當分多入やうにても、畢竟はうけとりの半分もいらぬに成行事にて候。商の心は、やすき時に買、高時に賣。有所の物をなき處へ通ずるばかり也。工はたゞ其身の職分に心を入て、才力を盡すのみなり。大廻しの事は、武士のみ知て、彼等は手足の心にしたがふがごとくなる道理にて候。いまは手足の爲に心のつかはるゝに成申候

一朋友問、天文によつて時變を知と申事は、正しき事にて御座候や　云、むかし前漢の末に當て、日月やゝもすれば明をおほはるゝ事あり。是によつて四時の氣不正にして天災地夭多し。客星出て帝坐をおかす事有、星のひかり常にばいするものあり。時の賢者これをなげきて云、日月の光の雲霓のためにをかされ、客星のためにしのがるゝものは、君の位かろからんとす。星は臣の位なり、光の常にばいする者は、君の威をうばふ者あらんか。とかくして王莽が代を亂すの勢あらはれぬ。時の賢者に向て云、王莽すでに天下をうばはんとす、漢家のれき／＼高家の大名あり、何ぞ義兵を發して莽を誅せざるや。賢者の云、しからず、暗弱なれども上いませり、莽が惡逆をにくみて兵をおこす共、莽は上の左右にあり、上にむかつて弓をひくなり。漢の子孫高家の大名たりとも、天下くみするものあらじ。いかんとなれば、天下の漢をいたゞける事久し、ひさしければ變じがたし。莽が如レ此逆威をふるふとも、上いますからは、高家の義兵は却て叛逆と成て、天下の兵をいだすべし。たとへ少々くみするものあり共、大石を以てかいこをお

すがごとくなるべし。高家の人知あらば、兵をおこすべからず、したがつて莽に事べし　問、しからば莽終に天下をとり侍らんか　云、上のいますによつてこそ、莽をおそれて上のごとくするなり。莽が天下を奪ひすまし、天子の璽符をにぎりたらましかば、誰か莽を主とする者あらんや。漢家の子孫とあらば、民間におはすとも、天下こぞりて取たて奉らん。莽にさきだつてはたをあげ給はゞ、莽に天下をとりてつかはすになるべし。其まゝ置て莽に奪はするは、莽が漢家に天下をかへてまいらする也。凡人はかしこきやうにてもおろかなるものなり。鼠の社によつてたつとく、狐の虎の威をかるごとく、君によつて我威の有事をしらで、一旦の權威におそれて、人のかしこまるをみて、己につかんとや思える。もし莽に返逆の心なくして、如此威をもたば、猶以愚なり。天下を奪はんとおもひて、威を好まば、愚ながらも是非なき也。其心もなくて、人ににくまれうたがはれんは、其身の亡びか、子孫のおとろへとなるべき事をたのしむ者なり。何ぞ權威を君に歸し奉りて、身をへりくだり、天下の人に好せられて、身安く子孫さかへざるや。反心はありてもなくても、臣として威を持事甚しきは其國にも害に、其家にも凶なり。身安く子孫さかへ、名を後世にあぐる道をばとらで、心身勞し子孫亡び、惡名をながす事をとれるや。又其比篲星出たり。時の人賢者に問。隱者曰、天道ふるきを除て新をしかんとするか。漢の世のつゞける事二百餘歳なり。天下大に奢て風俗いやし、乘除は天地の勢なり、此まゝにして天下たちがたし。天よりかならず除べし。政を改て乘除をなす事は、今の分にてはなりがたからん、しからば一度は天下亂て。ふるきを除て新をしかんとするならん。其勢十年を過すべからずといへり。はたして王莽亂をおこし、天下を奪へり。光武帝漢の嫡孫として民間におこり、莽を亡し惡人をはらい退け、前漢のお

ごれる風俗をあらため、善政をしきほごこし給へば、漢家又起れり。是を後漢の初こす。又二百餘歳治たり

或問、われらの見及ゆても、淀川次第にあさくなり、舟のかよひ不自由にゆ。かやうにゆはゞやがて往來とまり可レ申ゆや。西國舟も後は大坂へつかぬやうになるべくゆや。大坂の川口のみならず、吉野川の末、紀伊の若山の川口、其外諸國の川〱うもれ、海もあさくなり、舟の通ひは難儀なりと申ゆ。何とぞ砂のとりやう、川のつけやうもあるべき事にて御座ゆや。今の体にては、何となり行可レ申ゆや。諸國の通路いなものになるべくと存ゆ　答云、川ほり砂どめなどの末なるとにて、自由をなさんといふは無功なる事にてゆ。まとの食のうへの蠅をおふどくたるべくゆ。水上の水、ながれの谷々、山々の草木を切盡し、土砂のからみたもちなきゆへに、一雨一雨に河中に土砂ながれ入て、川どこ高く、川口むもれゆ也。其本をよくせずして、末にての才覺は何こしてなるべくゆや。今は草木を切つくすのみならず。かくゐまで堀申ゆ。きりくゐほりたる山は、猶以土砂多く、川中にながれ入ゆ。後にとめ山にしても、木の根ほりたる山は、五十年三十年にては草木も有つかぬものにゆ。水上の山々あるれば、山澤の神氣うすく成て、水を生ずる事すくなければ、常には流ほそし。しかのみならず、大雨の度毎にもち出たる砂は、そことなりてあれば、砂の中をくゞる水も多し。水は川こいふものは、平地よりはひきかりしに、今は平地とひこしくなり、或は平地よりも高くたがるゝもあり。堤ばかりにてもちて有なり。これ皆山のあれてなせる所なり。むかしは川ふかければ、大方の大雨大水にては、田地家屋敷をそこなふとなかりき。今は川はあさし、山々に雨水をたくはゆる草木はなし。少の水も中水となり、中水は大水となり、大水なれば堤をこへやぶり、田地家屋敷をそこなふと多し。其上左の堤つよけ

れば右の堤をやぶり、左右ともに強ければ、川下をやぶるといへり。是皆川のむもれてふかゝらぬ患なり。夏商周の三代の末のほろびんこては、川々あさくなりたるとある事も、天下ひさしく無事にして驕り極り、山澤の地理をみだりて、古法を不用故なり。今の分にて山川のまつりどおはしまさずば、數十年の內には、大坂幷に諸國の川口の通路成がたかるべし　問、今から水上の山々谷々を法度して、草木をはやしゅこも、もはやうづもれ入たる砂はとれ申まじきや　云、山々谷々しげりて、ながれ入べき土砂とまりゅへば、大雨の度ごに今ある土砂は自然に大海に入て、川水ふかくなりゅ勢にてゅ。あとからながれ入事大なる故に、はじめの砂も海には落がたくゅ

一或問、今の木津川を、三ケの原の上より川ちがへして、南良の佐保の川筋へまはし、河內路を經て津の國の川口へをとせば能と申說有。さやうにてはよき事多ゅ。相調ゅへかしと願もの御座ゅ。もし又あしきとや出來侍らん　答云、さやうにしてよきつもりこそおはしますらんしらずゅ。愚が小知にておもへば大にあしからん。川ちがへせんこ物語の所より淀の大橋まで五六里有らん、川の勢ぬるく下に常にながるゝ大河を受たれば、旱りにも拾石舟は大方通ひ侍り。しかるを大和路へまはして、河內攝津國へ落さば、大和は地形高し、河內への落口にてうしの口をせでは、河水たもちがたし。てうしの口すれば、いまの十石舟もすぐにはゆかず。うちを持こさねばならず。若又此高下積なくて、てうしの口をせですぐにおとさんこせば、水上は水すくなし。水急にくだつて河水つきぬべければ、常の舟のかよひはやむべし。大雨の時は河內の上田へ砂石をはせ入て、國ついゆべし。此川は常は水すくなくて、大雨のときはとのほかつよく出なり。今の川はゞ貳町ある所も三町ある所もあり。それに一ぱい出て、なを堤のあやうき事度〳〵

なり。今の堤はむかし堤ゆへ、山も同前にかたきさへ折々きるゝ事有。近年は日傭のうけとりにて、堤のつきやうあしければ、二十里ばかりの新堤兩方にて四十余里なり。洪水にはくゆるやうにはいかゞあらん。かたきつきやうはあれども、その外むつかしき事にて候。さて二十里餘の所、川のはゞ貳町ならしにして、大和河内の上田畠をつぶすこと、山々あれて大雨どに砂をおとし入れば、ほどなく砂川となり、河どこ高く成べし。しからば後には大和河内はある〻事有べし。本の川跡田畠になるといへども、底まで砂なれば何にもなりがたかるべし。新川はゞせばくつもるものも有よしなれ共、大水の時の水勢を不知ゆへに候。せばくては中々かゝゑらるゝことにてなし。さて川の長さはいまの一倍に成候。此川常はほそき水なり。それをのべ候はゞ、方々にて水もれ、いよいよ水ほそくなるべく候。其上淀より下大坂までの舟路、少てり候へば舟すはり候間、木津川とまりなば、いよいよ難義なるべし。扨大和河内の上田のすたり大なる事ならん。吉野川もはしこの上よりは、舟となり筏となり、通路不自由に候。むかしかく不自由にしてをきたる事は、川の勢つよくて、急に地さがりゆへにすぐに舟を通ぜんとすれば、吉野川の水ひをちて、河水つくるゆへなり。大和は河内和泉紀州よりは地形高がゆへ也。むかしは大和川にもてうしの口有しときく。舟をかよはせんとてこれを切たれば、舟かよはざるのみならず、川あさくなりぬ。小水は砂中をくゞりて、昔にきこへし立田川も今は名ばかり也。備て本のごくせんとせしかども、天然の岩を切たれば、もはやなをされず　問云、江州湖水の邊、近年水こみて、田作ならず。高廿四五万石程水底に成ぬ。勢田の下しゝが瀬の岩を少打かけば、水落て作つくと申侍り。是もとりかへされぬ悪敷事や侍らん　云、大に悪敷事出来なん。湖水のとみといふは、一朝一夕

のゆへにあらず。しゝが瀨は天地自然のてうしの口なり。しかるにしゝが瀨の岩を切なば、湖水急におちて、淀川の水たぎり、湖水ほどなく落なば、淀川あさく成て、今の舟の通ひやむべし。彼是にあしき事多出來ぬべし。悔といふ共甲斐有まじ。又湖水のほこりのこみは、近年の地震に地をゆりしづめたりともいへり。さも有ぬべし。高嶋の水邊は常に水地にて、地やはらかなれば、大地震どにゆりしづむ事あらん。古の白鬚の鳥井は、今は水中に入て見えずといへり。天氣つゞきて能時分、水ひ落て作毛付、淀川の水も能程をつもり、それより高き水はおつるやうに、北國の方へ池水のあらてのやうに、水はきを付る事はくるしかるまじきか。古人は問學ありて、山川の地理に器用なる人をえらび、且山川の事になれしめて、其後山川池堤等の奉行をなさしめ給ひき。いまの人いかほどかしこければこて、問學もなく、生付の器用を撰ばず。其事にもなれず。古人のしをかれたるかんがへもなく、商人などの利にかしこきもの ゝいふにしたがはんはあやうき事也。其上山〳〵あれて砂石河水に入事、一雨〳〵にかさなりぬれば、川ちがひなどの末の事にて能成といふ事はなき道理なり。上田の每年すたる物成と、川堤の造作を水上の山人にとらせて、水上こ左右の山この木をきらず、雜木をはやしなば、ほどなく砂こまり、河水ふかく成べし。山〳〵きりあらすべからざる御制禁も出ゆへ共、明日の飯米さへたくはへなきもの多ければ、薪を買てたくことは思ひもよらず。明日くびをはねらるゝ共、それまでと申ゆへば、庄屋肝煎も可レ仕樣なきこ申ゆ。又此川ちがへによつて、大坂邊に新田多いでくると申說有。是は猶以あしかるべき事にゆ。日本はじまりてより以來、日本國中にて大和河内の上田といふ古地を川につぶして、其下に新田をせんとは大成ひがどなり。古地に少もかまはでさへ、川下に新田をすれば、川上の古地

あしく成して、むかしより心有ものはせぬ事にて侍り。まして古地をつぶして新田をする事は、大小の損徳はいふべき事にあらずゆ。悔て本のごくせんといふとも、やがて山〳〵よりながれこみたる砂は、世主の御力にものけ様あるまじくゆへば、もはや大和河内の上田は永代すたりに可レ成ゆ。大なるそしりを後世にながし給ふべし。其うへ下の新田は、やがてやくにたゝぬ事に成事侍るべし

一或問、河内國方〳〵の山川のたまり廣澤と成て、多の田地捨れり。是を國分川へ一所におとし、それより新川を付て難波の浦へながし侍れば、三万石ほどの古地おこりゆ。新川につぶしゆ田地は壹万石ばかり也。此儀いかん　云、最前木津の川ちがへよりはよく侍り。しかれども壹万石捨て、三万石を得は利也。人の難儀を考れば廣澤と成てすたれたる古地は、幾年以前よりの事やらん知人なし。むかしは是によりて、亡失の人有べけれども今はなし。此廣澤の田地とならざる憂はすくなし。新川の爲に壹万石の上田畠を失ひ、流浪し飢に及ものは多かるべし。仁者は人の存亡をはかりて、利の大小を事とせず。其上新川の堤普請堅固ならずば後日の損もまた大なるべし

一或問、數百歳後の事は遠きはかりごとにて、吾人共に知べからず。さしあたりて山家水邊ともに、安堵すべき術道あらんや　云、一の治水の道あり。古哥に、古川のへとよみたるにて心付、西國にて人に敎てなさしめたり。いひしとを半用ひて半は用ひず、されども大を助て、小のこれり。まつたく用ひなば水損も有べからず。今、山城津國河内の水損を留むべき事は易かるべし。淀の大橋のむかふ山崎邊より、あらてごし（ヲトシ）といふとをなし、すて堤をつき、あらて川はゞ二三町にして、洪水のとき兩川となすべし。かつら川は淀までつけず、半よりあまる水をあらて川へこさする筋

も有べし。しからば鳥羽伏見邊、津國河内の水損やむべし。あらてごしの田地のつぶれ高二千石ばかりならんか。助かる地は高拾五万石も有べし。十五万石より二千石をおぎなはゞ免にして一二分なるべし。堤の間の田地はそのまゝ田作すべし。五七年に一度當毛の損は有べけれ共、明年はこやしなく共大に豐熟すべし。五七年に一度の損毛は水損やみたる地よりつかはすとも、少しのとなるべし。其外諸國の水損、其地形を見ばよき道有べし。是大道行はれ、天下長久の基、本立業を始、統をたれ、川々むかしのごとくふかくなるまでの補ひこはなるべきか

集義外書卷十三終

集義外書　卷十四

窮理下

一朋友問、佛法は生國の天竺にはかたばかりのこり、もろこしにて文才ある者どもが、仏者に成て、空にかけはし、つけましたる事を傳て、たゞ日本にのみさかむに候へども、やがて亡べき前表あらはれ、無道にて富貴極り侍りぬ。然るに得道の法を起して、再興被成度と被仰候は、釋迦達磨の再誕にて御座候や。聖人の徒ならば無用の事と存候。今のやうに候はゞ、五十年の內外には、大變出來て、佛者大半は亡失すべし。百年の內外には大かた亡べし。數十年の間天下の害に成候とも、其內の亂世はこらへて見て居たき事に候。いまのとをりに候はゞ、やがて跡なく絕申べく候。貴老の仰られ候やうに、得道の法を起し給はゞ、よき出家出來のみならず、俗無道やみて、仏法長久なるべし。意地あしきやうなれども、俗無道を見て居たく候。もし得道の法起り侍らば、佛法中興せん事口惜く候と云。有べきほどのかずはあしくても有べし。よく成ても有べく候。人も病者にても命のかぎりは生候へば、とても生んとならば、無病にて生たるがよく候。佛者もとてもあらんならば、能なりてありたるがよく候。其上仏者此まゝにてあらば亂世となるべし。亂世よりすぐに吉利支丹にうつる事あるべく候。是ぞ大なる憂にて候。今時は後生のだましは一入惡敷時也。後生のまよひがおこりに成て、吉利支丹もひろまり申事なれば、かた〴〵以て仏者をもよくし、惡僧すく

なく成て、無我の仏者、おほくはあつかひにして、日本の國の、あしくなりぬるとをやめ申度義なり

一朋友問、治たる世のさのみ悪逆の事もなくて、亂世におよび、或はほろび、或は衰ふる事は何ぞや　云、其謂多といへども、日本の國の六七百年以來治ては亂れ、兵亂やむでまたみだるゝに大綱三あり。其一には誠の不立也。其二には奢て仁政を失ふなり。其三には仏者の得道の法を失て、堂塔寺多建るなり。其一にまとの立ざると云は、大君幷に執權の人々、道德の學を好給はざれば、たまたまよき政道をなされても、小人是をいひけし、小知を以あしき樣に申なせば、さもある事かとたゞよひ給ひ、こりて善政を行ひ給はず。扨人々の情にかなふ樣にしたまふ事は、小人の利を得る事どもなり。畢竟天下の衰微になる事にても、利害にたよりある事なれば、よき御政道とてほめたつる也。天下は義を以て利とすとこそいへ、善根はみないひくじかれて、利を以利とする時は、君臣父子の間も多は利のみ主と成て、其義其親は亡ぬ。たとへ兵亂いまだいたらざれ共、先以人道の亂なり。其二に奢て仁政を失ふとは、君も執權も大名小名も、不仁の人にはおはしまさねども、驕て用たらざれば、下を責とるの外なし。貨悖て入ものは又悖て出の道理必然なれば、たとへ兵亂まだしくても、天災地天生じて、天下の衰微と成ぬ。人道みだれて天下衰微するは亡びの本これより大なるはなし。其三に仏者の法を失て、堂寺多建るにありとは、前車の覆るは後車の戒たる眼前の事を語てきかせ申べく候。上代は仏法さかんなれ共、得道の法あり。末に成て其法を失ひ、僧になりたき者はなりて制止する事なし。こゝを以て多は身すぎの出家にて、道をばたしなまず。堂塔を建立して、中興といはれ、新寺を立て開山となるの名をむさぼり、西堂長老と成て座上になをり、法印上人とて人にたかぶるを至極とせり。諸人親先祖の墓あれ

二三四

ば不沙汰もならず。或は實に後世に惑などして、堂寺年月に多なりぬ。それ日本は小國なれども地繇よし、國のひろさよりは人多し。此ゆへに驕れば長久ならず。是を以て天照皇の御宮は、黑木作、茅葺にして、儉節をしめし給ひ、天照皇の御孫以前の日本の主は三輪太明神なり。是はいよ〳〵儉にして社をだになし給はず。山を社にて鳥井ばかりあり。その外上古は神木とて、杉や櫻の土地に應ずる木を以て屋どりさし給ひ、社のついゐにうへ給へり。やむ事を得ずしてあれども、日本の土地に叶て、宮社の作は木多いらず。日本を五十も百もあはせたるほどなる中國天竺の大國にて、作出したる堂寺を、そのまゝにて日本の小國に多建るとは、何のわきまへもなき僧法師の所爲なり　問、むかしのかしこき法師等、それほど愚にはあるまじき事なるが、仏法は一やうならず色々にいへども、畢竟物を絕國を亡すを以て極意とすといふにかなへるか　云、それにしても天理を知ざるの愚なり。人力にて天地の數をのべちゞめはならぬものなり。世中の文學に得たる者は多、木才にはうときものなり。木才と云は、天下國家政道の方に得たる才なり。木才に明なる者が、仏者に成てはをらぬ道理なれば、うは智惠ありて根はくらきに極りぬべし。せめて得道の法をよく立て、出家を少くし堂寺をすくなくせば、五十年にて亂世となるものは、百年ものび侍りぬべし。中國天竺は大國ゆへに、山ふかく野ひろし。日本は小國ゆへに、山野かぎりあり。其國に生ずる物は、其國の山野の力に叶て生るゝ理なり。天子大樹公家大名士農工商は、其役義有てそれ〴〵の屋作し、其用の叶べき福にして居給ひぬ。然れば其屋にはそれほどの人有。今出家の堂寺は、木像を一つ置て、空々としたる人もおらぬ堂をたて、客殿方丈庫裏などとて、人も少きに釋敎物を建ならべ侍り。あるひは新敷作り、或は建直し、日本國中に毎年六七個たくたつる

事にてゅへば、其山林をつくす事勝て計へがたくゅ。大火事など丶申事は、五十年か百年に一度の事なれば、何ほど夥敷ても、山のつくるほどの事はなき物にて御座ゅ。たゞ常〳〵たえず國用の外に、大なる事の多は盡る事程なき物にゅ。こゝを以て後世得道の法次第にやぶれて、堂寺多出來ゅへば、山林の力つきて、川〳〵あさくなりぬ。かくて世中ありがたければ、保元平治の世のみだれいで來て、淸盛世の權を執がごくなれども天下一統せず。公家にもかたつかず、武家にもかたつかずして、貳十餘年過て、後又源平の亂世出來ぬ。賴朝家三代より北條家の初までは、いまだ亂世の名殘にて、天下の用物不自由なれば、をのづから儉約にて、堂寺もおもふやうにたゝず。此間に山〳〵もしげり、川〳〵も深くなりぬ。北條の泰時、時賴儉を好て驕らざりしまりにて、九代はつゞきたれども、治世久しくて、堂寺年々に多なり、山川の神氣又うすくなりぬ。かくて世の中立がたければ、太平記の亂出來て、世中久しく一同せず。此間に川澤山林また深く成ぬ。足利家數代つゞきて、天下の奢長じ、堂寺立みちて、山川の力またつきたり。東山殿の時の物とて、結構なる物ずきの道具の今にのこりてあるをみて、其代の驕りしられ侍り。その後大亂出來て、天下我〳〵持にて、公方は名ばかりに成て、信長まで天下の亂世久し。此間に山々本のごくしげり、川々本のごくふかく成ぬ。尊氏の子孫十四代、二百四十年の內、信長の威勢をふるひ給ひしと、十二三年あり。秀吉公より以來、世の一統せる事すみやかに、世中靜に成ぬ。關が原大坂の軍は居ながらの事にて、たゞ一戰づゝにてすみぬれば、亂世にはあらず。實は秀吉公より今につゞきて、天下の奢は日々月々に長じぬ。其上に吉利支丹の御穿鑿出來て、仏者の榮る事、堂寺のおほき事、日本開闢より以來あるべからず。むかしのやうなる天下主執權ならば、こく亂世と成べし。

しかれ共御當家は天下を得たまひし始の次第もよく、君も正君仁君つゞき給ひ、執權もあしき人おはしまさねば、如レ此つゞき侍り。然れども山林の力つき〳〵て、今はなでぎりと申ものに成侍り。君も臣も慈悲正直におはしまして、私なく善行をつみ給ふ共、天下の根本すでにつきゆへば、數十年の間心もこなし。只今政道を以此乗ずる算を除ひ給はでは、亂世こ成てはらふべきより外の事なし。山林のあれたる事、開闢より以來なき大あれなれば、亂世も又久しからん。亂世こ成侍らば、公義ずくめの旦那は本より、仏法信心にてはなく、坊主の無道はにくし、皆はづれ侍らん。堂寺は軍勢にやかれこぼたれせば、たれか二度たてゆはんや。身すぎの無道の出家共、多は盜賊こ成て方々にてころされ侍らん。よはものはまとの乞食非人となりてうせぬべし。世中我〳〵取合と成て、陣屋の扶持かたにめいわくし、堂寺作る事もならざる事、百年もせば山々本のごくしげり、川々本のごくふかく成べし

一朋友問、仏者の驕りゆへ世中亂世と成とにてゆはゞ、仏者の上にこそ不慮の災出來て亡べきに、天下の災害と成ゆ事は、何ぞや　云、天道は無心なり、水はうるほへるに流るゝ理にて、神明の報應必然なれども、左樣に有心のものゝ裁判の樣に、さしあたりたる事はなきもの也。其上仏者は無知にして赤子のごし。世の政道のあやまりにてこそ、仏者ら驕りを極ものなり。且世間の驕りの十にして七は仏者が持こいふにてこそあれ、三はまた他の風俗にも掛りぬれば、畢竟は政道の罪なる故に、世中亂れて、其次手に堂塔も燒れ、僧も養ひ手なければ少くなりゆ也。山川のあれにつく其本のつもりを知らず、扨如レ此あれては、世の中たゝざる道理をしらず。天地のやぶるゝ時にてもなければ、乗除の算にて亂世と成べき天理をしらず。其亂世こなりざまに、仏法のゆへとし云ものなければ、亂世を成との他にあ

るを見て、其故このみて、本の故よりぞこのゆへを生ずる事を知らず。孟子の語にも、聖賢の德の餘慶にて、天下五百年六百年はつゞけども、畢竟天下は聖賢のたもつべきもの也。世を繼て代々傳る事は、天の廢する所なる故に、亡びんとて桀紂がごときもの出ることあるごとく、世中の奢に仏者の奢をうちそへて、山林川澤の神氣つくれば、ほろびんことはしなこそかはれ、さま〴〵の凶事ども出來、或は相模入道のやうなる悪人も出來、或は足利家數代の內、應仁の亂のやうなるわざはひ出來なり

一朋友問、王代の仏者の盛成しとは今に超たり。叡山は近江の內多く領知仕候。東大寺・興福寺・多武峯・吉野法師・高野山などの大名寺いくつも御座候き。其上に諸國の寺領はてしなく候き。今は五万石共一寺してとる寺はなきと聞え候に、天下の四分の一は仏者取と申說御座候はいかゞ　云、むかしは寺といふはみな山にかたより居候ゆへに、一所に數多候かはりには、今のごとく町屋在鄕にひしと入まじりたる寺はなく候き。ゑいざんなど大分知行取候へども、頭ばかりは坊主にて、其下に立候ものは皆俗にて候。近江寺領と申ても、坊主は叡山にあるばかりにて、領知の者はつねの者に候。叡山に居候ものも、つかはるゝものは小姓若黨六尺等にて、坊主は少候。今は町屋士屋敷と軒をならべ在々の百姓と地を並べてひしと立並び、其上に山々の寺もむかしより所々散になり候へば、叡山に寺數減候ほど、わき〳〵の山林の寺數にて入あひ申べく候。町在家に建籠たる、數百万の寺が、むかしより增たる分にて候。今は隱居の持庵のこて在家にまで入こみ侍り。知行とて高は多とらねども、國々所々にて靈地の山林は、十が九は寺內と成候。其外上田畠をつぶし、寺地といへば大にとり候へば、其つゐえ古に十倍仕べく候。扨又むかしの仏者はおほくて

も、女人酒肴をいみ候へば、ぞうさは今の半分もいらず候。其上に、今が多ければ、其ついへはごかくいふべからず候間、世間の驕て山林を盡す事、仏者のみにはあらず。禁中公家の御屋作もあれほどになく共成申べく候。今は天下の政道も不レ被レ成候。客人分にて御座なされ候へば、禮樂の法だに執行はるゝほどに御座候はゞ、質素にして風流に御座有度事に候。武家の屋作も、古風にかへり侍らば、今の樣にはあるまじく候。其上木具へぎ臺など、むかしは今のやうには有まじく候。ぬり臺ひとつあれば、其家にて音信物の肴などすへ候事は濟たると申候。今はあたらしき臺に居候はねばつかはさず候。又昔は何に成ともすへてつかはし、何箱に成共入てつかはし、其入物はかへりたると申候。今はかりそめの飾山成物にも箱をさゝせて納て不レ遣候へばならぬやうに候。此箱と臺とのついえばかりも寄り敷事にて有べく候と云、それらも夥敷事にて候へども、禁中幷公家衆は、たゞ京都御一所にて候。大雑作事もたまノ\の義に候。尤公家も武家もよく御合點參候ば、屋作なごはいかにもかろく質素に、禮義のかたはおごそかにきつと御うやまひなさるべく候。武家も今の城中の夥敷矢倉・多門・天守・屋形作はすまぬ物に候。外は敵に取まかれ、内は大なる木にてひしと作りならべられ候へば、火矢を射かけて燒立るか、内より火出るか、しのびにて火を付候か仕候はゞ、狹き城内にてのき所もなく、外は敵也。上下みな燒死申べく候。何事ぞの時はくづして小屋がけにすべきならば、時によつて大儀なるべし。器の費も大なる也。士屋敷は作事の夥敷儀多は江戸ばかり也。國ノ\の諸士は、今は中ノ\繕べき力もなく、それはさてをき、たふれかゝりたれ共、修理すべきやうもなし。居られぬはどの体になれば、やうやう新作事仕候ゝ共、これによりて借銀出來、其身一代は申におよばず、子共の代まで迷惑に及候。百姓はな

を／＼困窮いたし候へば、屋作は秋の取入もならぬほどの事也。町人も富てかひこみ仕候ほどのものは、屋作奢候へども、これも數少く、間口五間十間の事にて候へば、大方ほどあるなり。たゞ出家の堂寺は公儀よりの御沙汰も夥敷ことなれ共、それは千分が一にて候。山城の谷洛中洛外ばかりにても、五六十年以來の大小遠近をならして、一年の寺の修理建立、内半をとりて三千貫目づゝは入べきと申候。音に聞えたる寺は一寺もたゝぬと申分にて、千貫目二千貫目ほどづゝいらぬ年はなきよしに候。間には本願寺の大仏の御室のなどゝ申樣なるが出來仕候。さのみ大なるやうには聞えね共、當年東山に立候新寺にさへ、すきと仕舞候ば千貫目は入べきと申候。今二三ケ寺寺町田中に建候にも、合て千貫目は入と申候。此三四ケ寺の入用ばかりにても、三十万石餘の城下の士屋敷は不ㇾ殘修理して、五十年も堅固なるやうに可ㇾ成候。しかれば山城中の寺に、五千貫目づゝは毎年入つもりに候。此つもりを以て江戸大坂諸國の多少をならして、一年の堂寺の入用にては、二十ケ國の士屋敷は堅固に可ㇾ成候。三年にては國々にわたり可ㇾ申候。六年にては天下の町人百姓の迷惑、人の家のこらず修理可ㇾ成候。右はつもりよき者がつもりて申候。是ほどの夥敷費の者が、わきにのきて毎年／＼五六十年が間、天下をこりくづし候へば、日本のひろきといへども、五六十年の間にひた／＼と衰微仕候事尤に候。其外の費は尤有道の世にはなき事ながら、くらべてはわづかなることに候。ともし火きゑんとて光ますごとく、仏者の算乘し極て亡るとき至り侍れば、吉利支丹の御穿鑿出來て、佛者の奢いやましになり、唐僧來て大寺多建かさみぬ。君臣ともに仁君忠臣にて御座候へども、此一の乘除の理をあきらかに不ㇾ被ㇾ成しては、世中のつゞくべきやうはなく候。むかし大道心無我の僧ありて、仏法再興の法を立ん事をねがひ、上書したる

こいふと或書に見え侍り。五百年此かたの佛者の心にはかなはぬ事ゆへ、知人なきと見え候

一朋友問、世中風俗のあしきをば、何として直したるがよく候や。云、先善事をする事を教て後、禁戒を備べし。天理を存してこそ人欲も亡ぶべけれ。天理を存ずる事は、不教して人欲をされとばかりいましめたるにては、誰を主として人欲を去侍らんや。政道も善事の所作あらば、戒なくともあしき事はうすく成侍らん

一朋友問、むかしは所司代ばかりにあらず、天下の權職も一人なり。近代は萬事兩奉行にて候。むかしは大役皆一人して勤られ候き。心持ある事にて御座候や　云、道理ある事にて候。兩人は諍の端にて候。相師相役は威勢あらそひ有。またはたがひのかたぎも思入もちがひ候へば、事の滯りともなり、大に能事は行はれぬものにて候。國天下の事多如此に成行候へば、しまりなきものに候。たゞ古のごとく惣つがねは一人にて助と申もの有度事に候。軍陣にても、大將軍に副將軍御座候。助はなくて不叶ことにて候。軍陣にては忽勝負を見せ候へば、兩大將にては破れに成候ゆへに、古よりなく候。本大將討死のときの爲、又は助のために、副將軍はなくて不叶候。今の番頭與頭のごとくに候。無事のときは事のあしさ目に見えがたく候。少世中惡くなる時節に成ては、兩奉行のあしく、事のしまりなきとあらはれて、後悔多ものに候。乍去あしき人一人して權をとれば、はやくやぶるゝ事有。二人よりは三人よき道理御座候

一或問、人のほむるものにて、我も能と思ふものをあげて役人とすれば、實ておもひたる半分あればよきにて候。大方三分一か、五分一ならでは用達せず候。また昔てあしきも有、つかひ當たる事まれ成はいかゞ　云、一には人がらよ

きとて、人のよくいふものを奉行役人とすれば、あたらよき人すたる事候。才の得ぬヿはならぬものにて候。人がらは十分になくとも、才の得たる事をなさしめたるが能候。二には奉行役人は、其身利根にても、助と申ものなくてはあしく候。道に志ありてへりくだる人には、人が善を告る故に、其事の案內者助となりて、さて其事のよくなる事は、其人の德にある事にて候。今時大方よきと申奉行も、道に志なければへりくだりて、助をもとめず。人に問ふを恥とすれば、下知する所おほくは事の情にたがひ候。それよりは奉行の心ももつれて、人がらまで惡くみゆるものに候。三には加增と役義と一度に命ずれば、食事も調はぬものに重荷をもたするやうにて、其人の半分も用達せぬものこれあり候。役領は各別の事に候。いにしへの位田・職田は今の役領にて候。本より助と申者それ〳〵に備て御座候。其上に人は氣根よく事はすくなく候へば勤よく候き。兼て事になれたる助もなく、俄にしらぬ者を多くかゝゑ、事はしげし、人は氣根うすし、少〳〵人がらよきとても、其才有とても、成がたく候。役人によらず、身上取立の人も心持有。急にせずして有余を存し候へば、以來まで公私のためよく候。急に人をかゝえぬれば、あつまりものにて不吟味なればしまりもなし。さればとて大勢の者を出入もさせがたし、後まで家風惡く候。俄に大身の体をすれば、身上もつゞきがたし。下をめぐまざれば國郡もあれ行候。はじめ二三年のしまりなきゆへに、永代をむなしくするなり。天道も冬一時のたくはへなくては、來歲三時の生長收ならざるがごとし

一大國の郡奉行と成たる者問て云、今までの代官手代等、猥しきヿ多御座候間、初より急度可申付と存候。きびしくてだに後〳〵は亂たがり申ものに候　答云、貴殿一人として被成候は、それも能候はんか。相師あるヿ也。今まで

の代官手代もかはらずゆへば、事不案内にて、貴殿一人新敷なされゆはゞ、悪かるべくゆ。はや相奉行の心に隔心出來、代官手代氣すみ申べくゆ間、郡中の事大小となく直に申間敷ゆ。事をしらでは政道ごられぬものにゆ。先何事も前〳〵のごく、御したがひ有べくゆ。智をくらまして人のみちびきを御請尤ゆ。初より貴殿の心に、誠ばかりはきつご御立有べくゆ。扨無欲にして儉約なるが本にてゆ。何方を承ゆにも、町郡方の奉行となる人、初は清ゆへども、程なく亂れ申ゆ。其故は清だては被レ致ゆへども、驕を習とは人に同じくゆ。奢れば必用不足ゆ。用たらざればちねんに欲心出來ゆ。無欲のよきといふ事は、知て無欲を立させぬものは、奢成ことをしらざる故にてゆ。貴殿家内を儉約無欲の誠を以て治給はゞ、人の物をごらずして用達し可レ申ゆ。時節を以代官手代の仕置も可レ有ゆ。初より事を以清だてする人はとげぬものにゆ。一旦はしはきか、清からぬかとうたがはるゝ程にて、眞實を内より御立可レ有ゆ。心中の誠は一旦のほまれごはならずゆへども、年月をへて顯るゝ物にゆ

一朋友問、世はじまりて以來、鹿苑院殿と秀吉公の時ほご、一まいによく治たる結構成事はなきと申ゆ。其道にてゆや

云、鹿園院殿と秀吉公の驕の時は、日本の國狹く近く成ゆ故に、道しらぬ人の耳目には一まい成ごと被レ存ゆ。ゆたかなる世と申ゆは、日本の國廣く遠きやうにある物にゆ。雨ふらんとては山々近くみえ、天氣よからんとては、山々遠くみゆる物にゆ。雨天は小人に比し、晴天は君子に比す。世中ゆたかに治て無事なれば、何もなすべき事なくて、人道の禮儀に及ぶもの也。王代の盛成しときは、もろこしへまで衣冠の制、正樂の傳を習ひに被レ遣、人道の文武の法はいふに及ず、僧の得道の法まで正し給ひゆ。世中無事にゆたかになくて可レ成ゆや。至治の世にて世中ひろく緩々さ

したる所を、一まいになきと心得られゆや。いそがはしくては長久ならずゆ。よくしまらでは王代のごとく、千歳二千歳つゞく物にてゆや。秀吉公よく日本を一まいにして、高麗まで責られゆと申ゆへ共、只一代にて亡ゆ。貴殿のみにかぎらず、大道をしらぬ者は、博く書を見たる者さへ、合點不ㇾ參ゆへば、無二是非一ゆ。今も日出度御代の無事成と極ゆはゞ、必ず人道の古法に及ぶべくゆ　問、其制はいかゞ御座有べくゆや　云、いまの人道のすがたは軍國の遺風にて、治世の躰にあらずゆ。必治世の躰に可ㇾ成ゆ。官位なくても士と名の付たるものは、先以生れつきたる天爵にてゆへば、平士にても上下のかはりに、むかしのやうにゑぼし直垂になをり可ㇾ申ゆ。烏帽子直垂の下には、ちさ刀一にてゆ。わきざしは下々幷農工商のさすものにゆ。士はちさ刀の上に、軍中にては太刀を帶副申ゆ。かせ者下々は太刀はむつかしければ、わきざしの上に、長き刀をさしゆ也。人道は禮義を以こそ尊くゆへば、せめてこれほどの制は先あるべき御事にゆ。軍中の形を平生に用ゆへば、代長久ならずゆ。平生の形を軍中に用ゆへば、戰陣に威あらずゆ。今は軍中のかたちを常としたる物にゆへば、治國の風俗にはあらずゆ。それにても武道の嗜のたりにもなれば、一道とも可ㇾ被ㇾ申ゆや。武道の嗜のたりには少もならずゆ。けつく古のゑぼし・ひたたれ・ちさ刀ばかりの時の武士ほどは何事もなくゆ。此肩衣袴大小の風俗あらたまり不ㇾ申ゆはでは、せめて靜成日出度御代とは申がたくゆ。それまでにいとまなくば、とくとおさまらぬにて御座ゆ。暇ありても、人道を明にせずして、すさみをこたり給はゞ、いづれにてもよく治たる長久の御代とは申まじくゆ。此後世中かはり、時節を以治世と成ゆとも、大道なくして天下を一まいにせば、日本はいよ／＼狹く近くなるべし。然らば此國いよ／＼衰微すべし

一朋友問、今時いづかたにも誓詞はやり物にてをはしまし、神國の故にて侍るや　云、神國なるほどに誓紙誓言はおもくすべき事にてあり。重ずれば大方の事にはさせぬ理にて侍り。多誓詞をさすれば、さする人にもつもりては罸あり。する者にも罸有　問、さする人は、われらはそむかず、罸の有べき樣なし。する人も我心にちがひだになくば、何程したりとも苦かるまじきと存候は、いかゞ　云、誓紙をさせでかなはぬ道理つまり、さするほどなれば、用に立樣にさするは尤なり。よく吟味すれば、誓詞さするとは十に一、百に二三ならではなきものにて候。今は其吟味もなく、誓詞まで申付るほどに、吟味仕候へども、不屆の義出來候へば、無二是非一といひわけをせんために、誓詞の用べきことにてなき事は知ながらさすれば、我よりまづそむきたる心あり。其上人情時勢の、とても其云付のやうにはならぬ事を知つゝ、誓言の箇條にのすれば、誓紙のおかしさ思ひつゝ、無二是非一少づゝそむき侍り。そむく初はこはけれども、別義なければ次第〳〵にそむきもて行、後には神罸はなきものなりとおぼえたり。如レ此なれば誓紙誓言も町物と成て、酒を吞にも咄しするにも、愛宕〳〵八幡〳〵と、一言〳〵にいへば、きく人も信ぜず、いふ人もをそれず。是皆人に上たる人の神を重じ給はで、みだりに誓紙させ給ふより起れり。誓詞さすまじき義にさする所には、神は非禮をうけ給はぬ道理にて、照覽はなき也。愚人は其神の照覽ある事、なきとのわきまへはなければ、ひたすらにおそるゝに、照覽なきとにて罸なきに油斷しそめて、次第に神を慢り、をろそかに成もて行ば、我心よりおこる邪曲におゐて、神の照覽ある事にもなれて、誓言誓紙すれば、かならず罸に當る也。よのつねのいひわけ一通にて、神のかゞみ給はぬ誓詞とても、數〳〵つもりては、神罸なくてかなはぬに、ましてかくのごとく成行人を、罪におとしいるゝ事なれ

ば、誓詞さする人、する人ともに、終には冥加につくるもの也。誓詞させて後は、吟味すべき事もならず。それを吟味すれば誓詞をうたがふに成ぬ。とにもかくにも今のはやり物の誓詞ほどあしき事は侍らず。人力の不レ及所に可レ賴誓紙なれば、人力の及ぶ所にはさせぬ道理也。極意に賴置べき物なり。善惡に付て神にはさひ〳〵なるればけがす物にて候。神文をやぶるほど義なくては、武士の道はたゝぬなり

一朋友問、絹物は唐より渡らずとも、日本の物にてたるべきと申者有　云、今の分にて唐物とまり侍らば、當分日本物高直にて、諸人迷惑に及ぶべし。其故は民間からく侍るゆへに、女も女のつとめをなし得ずして、男のわざに手傳へり。女事をおさむべきいとまなし。女は女の事をつとむるほどに、世中ゆる〳〵と成侍らば、法を出して墻に桑を植させ、婦人に蠶させて、絹綿の多生ずるやうにせば、日本ほどの國にては、何かことかき侍るべきや。たゞ藥のみ、唐高麗倭相かよふて用をなし侍るべし。それも政を以て大かたは國土に生ずべきなり

一朋友問、われらの在所に知ある老人有、當代の大名の中に人のほむる人御座候をあげて申候へば、其人は大仏者にて候、とけてよくは有まじく候。天下の政道などにあづかりたまはゞ害有べし。いまの人のよく申樣にはあるまじきと申候。我等の申候は、能とて人のほむる人なれども、仏者成ほどに惡かるべきとはかたむきなる樣に存候と申候へば、仏者にはとかく心根にくらき所あり、明かにては仏者に成てはをらず。其人の能は氣質の美たるべし。鷹は心に禮を知たるにてはなけれども、陽鳥にて火氣を多くうけたれば、火氣の神は禮なり。此故に自然と行を亂さずして飛がごとし。心はいかにもくらき所あるべし。其理を爭はゞ、夜の明る事あらじ。今より後の人、心をつけてかく見給は

ゞ、我いふ所たがふまじ。證據はおほくの人の上に居大名にて、仏者なれば子孫のつゞき、國郡のよく成といふ事はなき事也。先日本第一の仏者は、聖德太子なり。　、それより以來幾千人と云數をしらず、證據は諸書におほし。近年目前にては備前中納言殿にてゐ。國中をしなべてをして日蓮宗に被レ成ゐ。これほどの佛信心にても、あとかたなく亡びゐ。今どき大名に禪學し給ふ人々有は、その行跡氣隨にて、亂行多し。國民しへたげられ、家中しまりなし。是皆亡國の相なりと我等の申ゐは、仏者にてなきに亡る人おほし。仏法の罪といふべからず。老人申ゐは、尤にてゐ。凡人のほろびはいづれの道の罪にもあらず、しかれ共あげて申ほどの佛法信心の人、もし神道者か、儒者におはしましなば、國かならずをこり、子孫かならず榮べし。大に力を入て佛道を取立るほどの人なれば、平人にはあらず。しかるに仏者にて皆々亡るは、法の罪ならずや。又儒者にて亡びたる人もあるとは、積惡の餘殃にて、亡ぶべき家なれば、天のあはれみにて道をあたへ給、其身もよき所あれども、善柔にてわざはひを轉じて福となすほどの德行なければ、終に亡るあり。中納言殿の國中法華にし給ふほどの力量なきゆへなり。人道にをゐてそれほどの力量あれば　禍もかならず福と轉ずる物にてゐ

一朋友問、日外執權は小身なるがよきと承ゐへども、時代にて今は事多く御座ゐへば、小身にては借金も出來てつゞきがたく御座ゐ。つゞきがたくては貪りも生じ、又は内々に奢侈あれば、國家の事をのづから疎そかに成行ゐ。大身よくゐはんや　云、むかし執權職の人には、米金にて祿を給はりて、知行なきと侍りき。たゞ心を專に國天下の事に用んがため也。執權の人は城も所もなくゐ。おれば却てさまたげに成ゐ。筋目身代をいはず、たれにても賢者善人を

二四七

あげ給ひ候へば、其身一代ぎりの祿にて候　問、しからば子孫のたのもしき事はなく候や　云、賢者は其時を助たるに心ありて、子孫に祿を傳たき心はなく候。然ども一代ぎりの祿にて、ゆたかにたまはり、城所もなく家中もなく、其時に用の達するばかりなれば、祿あまり候故に、子孫は不レ及レ申、一類までもすくはれ候。下地よりの大身なれば、國家は子にゆづりて、其身は一代ぎりの職に付たる祿を受られたるも候き。國郡も賞祿も、子々孫々とおもへども、古今のためし左樣につたはるものにてはなく候。執權の人のためにも、城所家中なき大祿は、其身ゆたかに其心やすく、その外よき事にて候。國郡は明地なく候へばさやうにたまはる事ならず、これによりて能人ありてもあげ給ふ事ならず候へば、次第におとろゆるものにて候

一朋友問、日本には氏筋を中國にて御座候に、近世は武士の氏筋は大かた亂てしられず候。名乘度氏を名乘ても、誰とがむる人もなし。本より氏系圖ありて、名乘人といへども、度々の亂世に、其系圖いづちへか行てしられぬゆへに、氏なき人が今名乘もたゞすべき樣なし。近年氏系圖つり出し候は、學文者を頼み候へば、何方へつりつゞけ候はんもまゝにて候。大系圖とてあるも、其大系圖こそはあれ、その系圖へ飛入者は、誰ともしれざる有。日本の士民の姓と、天神の姓と多はみだれ侍り。又上たる人の臣を召つかはるゝに、筋目々々に官職知行あたへ給へば、人情はよけれども、事不レ調候。人次第才知次第にあげ給へば、人情にさはる事おほし。是等の義は何と有べき道理にて候はんや　云、日本の古は、源平藤橘など天神よりのつりの正しき人の中にて、能人がらをえらびて官位をあたへ、才智あるをえらむで職を授給へり。土民の姓の中に才知の可レ用あるをば、其程々に下の事を命じ給へ共、官位をさづけず、知

行をあたへず、其役をつとむる間、藏米にて祿をくだされ、功あるには金銀などの時の褒美多侍り。土民の姓なれ共、德も才も勝れて、天神の孫の中にもまれなる靈質あれば、天のゆるせる精なるが故に、天子より姓を給はりて、初て天神の孫に准じ給ふ也。是は則其人に聖神の德有が故に、其人始祖となれり。又天神のつり有ても、粗なる人にて、庶人の業ならではならず。庶人にくだりて五世過れば、習姓と成て、土民にとなる所なし。靈質の子孫出來るまではあげられず、是を地士と名付て、庶人の中の氏持たる者也。如レ此たゞす時は不德の賤しきもの、官位をけがさず、士の風俗美成物也。近世此たゞし亂てより、不德にても當座の才覺あれば、賤しき者も尊き人の上におれり。本より何もしらぬいやしき習より、時の幸得たる者なれば、げすしき事をも恥とせず、をして國家の風俗をみだせり。其本は氏筋のたゞしなくて、小者にても何にても、其主人の幸にひかれて、主人だに大名になれば、德も筋もなき者が家久敷と云ばかりに大身になる故也。不才不德のものも、部屋住といへば、親の代の歴々にもふみこへて、權を執を其筈とゆるし來れるあやまりより、世中日々に惡敷成ぬ。又不知不才の人にても、筋目次第に召つかはれては事ゆかぬ義也。人次第才知次第になくては不レ叶。然共或は其家老の家などにして、わづかに生出たる者が、直に召つかはるゝ幸あるだにかたじけなきに、少目の前の才覺有けつかう者にて、人によくいはれなどすれ共、實は不德にしていやしき所有を、人の頭などさせて、其國の士大將もの頭の歴々の末子にても、小姓などすれば、其なりあがりの下知につき組子となれば、無念千万に思ふも理也。人がらの勝れて、天ゆるし人ゆるす者は、誰も無念と思ふ者もなき事也。不知無心得にて思ふ者あるも、ほどなく德に化して、したがふものなり

一朋友問、公家は肩衣袴の俗衣きるべき事にあらず、參內は衣冠なれば、下にてのありきも、狩衣きてありき給ふべき事也と申人侍り。尤成義に存ゆはいかゞ　云、げにもにて侍れ共、今の家領にては成がたき事也。位田職田と申物有て、何の官位からは、やどにての客、地ありきも狩衣、何の官位までは宿にての客には狩衣、ありきはかちなれば何衣と定持せて、先にてきる樣に成共定ゆはゞ可レ成ゆ。狩衣きては乘物にてなければならずゆ。太刀持などもいり侍り。御築地の內二町三町は步行も可レ成ゆ。町をこえ遠路をへて、狩衣にて步行あらば、正月の万歲がありく樣に、子共つき可レ申ゆ。一向に昔の樣に無官の士も、ゑぼし直垂をきる風俗ならば、目にも立まじけれ共、今の風俗の中にてはかへりていな物にて可レ有ゆ。今の時今の家に相應の義は參內さへ輿は過給へば、昔物語に菊亭殿善行をいひたる樣にこそ有度事にて御座ゆ　問、然ば武士の昔の樣に、ゑぼし直垂少刀(チサ)軍陣の太刀も今の分にては成まじき事にて侍らんや　云、中々今の分にては成まじくゆ。先奢と申物やみゆはでは、今の風俗の上に被仰付ゆは、却て諸人迷惑可レ仕ゆ。ぢねんを以成べき樣も可三有二御座一ゆ。とかく少にても道行はれて誠立ゆはでは、何事もならぬ事にて御座ゆ。最前に申ゆ人道の制法をこり可レ申と申事は、其心付からは必道へゆかではならぬ道理なる故に、そこはふくみて申侍り

集義外書卷十四終

集義外書　巻十五

雅樂解

一心友問、或云、今の樂は聖賢の樂にあらず、上古の樂は詩をうたひてそれに絃管を合たるものなり。今の樂の様に樂器ばかりにてはなきとの事也　云、五常樂は舜の樂なり。太平樂は武王の樂也といへり。其外にも聖賢の樂ありといへ共、その名を失へり。尤後世の樂も多し。或の云説のごとく古は詩をうたひ、それに八音を合せたるものなれども、其詩をば傳へを失て、聲ばかり殘りたり。もろこしにて孔子の時にさへ、三皇五帝三王の樂の聲ありて、言葉なきも有たり。聖人は其聲を聞て、其心を知給へり。後世の人其心を不レ知といへども、糸竹をしらべて精神を養ひ、心思を和するの益あり。この故にいにしへより、言葉なきの聲を傳て、樂をもてあそべり。五音は五行の聲なり。五臟に通じて氣血を順流する事あり。雅樂の音は天地神明に通ず。故に和漢ともに、むかしは樂を用て、雨をいのり、晴をいのりしなり。旱には雨ふり、長雨にははるゝ事あるは、五行の五聲、天地神明をたすくればなり。旱水のきはまり過るは五行の氣偏なる時なり。故に旱には盤渉の樂を用て、水氣の不足を助て雨をふらしめ、長雨には黄鐘の樂を用て、火氣を助てはれしむるものなり。天地鬼神をだに動く。いはんや人を變はさらんや。言葉なきの聲を用て、妄大なる事うたがふべからず。雅樂を面白からんと思ひて聞べからず。たのしびなるものなり。樂する人聞人、共に

自然と堯舜三代のときにあふがごくなる心地あり。樂のはやたちて靜ならぬは、樂の氣象をしらざればなり　或問、五常樂は新樂なり。太平樂は隋唐の遺音也といへり　云、いにしへの傳へを失ひて、これを用ひ是を傳へたる時代をさして、其代の作といへると多し。中夏の書といへど、秦火以後の說は證據となりがたし。此二の樂を大舜武王といへるはより所あり。但五常樂は急ばかり、大舜の樂にして、序破は失ひて後に作りくはへたるものか。五常樂の名も後人の付たるなるべし。急ばかりはたしかに聖作と見えて、他の樂音とは各別なり　問、今の樂は大方秦の代の樂なりといへり　云、尤秦の代の樂もあり、世人秦の代の樂といへるものは、我朝へ初めて樂を傳へたるは、秦人なればなり。又箏を秦箏と云說あり。尤二十五絃を二つにして、十三絃となしたるは秦人なり。しかれども秦人の私を以て、一糸ををも加損するにはあらず。伏犧氏初て五十絃の瑟を作り給ふ。後の人これを二十五絃とす。二つにしていと數の減じたるばかりにて、五十絃にかはりなし。秦人其格に習て、又二十五絃を二つにして、十三絃とす。五十絃二十五絃十三絃、ともに宮商角徵羽の五聲の備りは同じ事なるべし。糸數多きこきは、上調子下調子變徵變宮など有べし。十二聲もありて、まれに用る糸有べし。糸數減じては此餘聲略すべし。後の人これを作するにあらず。廣大の樂器、末の代には用がたきによりて、略したるなるべし。或儒者云、隋唐より此かたの樂は皆淫樂なり。古樂は皆亡たり、今の樂は、用べきものにあらずといへり。いかむ　云、尤隋唐の比より古樂は大半亡て、新樂をこりたりといへども、悉く亡たるにはあらず。あれども不用して、當時の淫聲を好みもてあそべり。古樂の亡ざりし證據あり。周子云、樂聲淡則。聽心平。樂聲善則歌者慕。故風移ッ而俗易ッ。妖聲艶辭之化也。然ッこれ周子古樂を擧

び、新樂を聞て知ところの證なり。隋唐に亡て跡なくば、周子いかなしてか古樂をきかむや　問、上古の樂は調子ひくし。其證據は、琴の聲微音なり。樂書の中に、琴の譜あり。合せてうたひてみるに、今の樂の調子とは各別なりといへり　云、其ひきゝといへるは、下調子の事なり。同じ平調の糸にても、二の聲よりも、七は高し。七よりも爲はまた高し。然れども調子は同じ平調なり。高下共に合せて、少もたがひなし。五十絃二十五絃の時は、今の箏の糸よりも、又たかきもひきゝも有べし。今の琴の聲はいにしへのしらべにあらず。上古の琴のしらべは、他の糸竹にひゞきわたりて、獨つかさどりたる聲なりといへり。今の琴の糸のしらべにては、順の調子にもあげがたからん。故に下調子におとして、その外に微音なり。これ琴のしらべの本意にあらず。たゞ大やういにしへの琴のかたちをうつして、琴にはあらぬ聲をなしたる物なるべし。むかし徐福と云人、日本に來儀せしとき、上古の琴の調子を傳て、專用ひぬれども、後世あまりに大事として、秘し失ひたり。おしくなげかしき事なり。其後もろこしには、箏・琵琶・笙・笛の樂、代々に作り失ひて、いにしへの樂はなし。いはんや琴をや。たゞ古樂は日本にのみ殘れり。琴も箏びわなどのごとく今にのこりなば、右のうたがひは有べからず。今の琴譜は後世の作也。上古の聲にあらず　問、もろこしより傳へし樂の、本國にはたえて、日本にのこりたる、其ゆへありや　云、もろこしの人は、音樂に達者なるゆへ、代々に作りかへて本を失ひ、我朝の樂人は作り改る事成がたき故に、むかしの傳のまゝをまもりて不レ失ゆへに、古樂は日本にのみ殘れり。後世もろこしに明王出たまはゞ、日本に來て古樂を學ぶべき也　問、琵琶は胡國の樂器なりといへり、いかゞ　云、琵琶は女媧氏の作なり。むかし四時の氣不順なりしとき、女媧氏琵琶を作て、四絃を四時にかたどり、

長久ならずノ傍書古寫本ナシ

雅聲を發し給ひしかば、春夏秋冬其時を得たりといへり。數千歳をへて中國にはとり失ひ、胡國に落とまりしかば、胡國の樂器といへり。樂は聖人神明の德なくては作る事なりがたし。聖作なる事うたがひなし。夫八音の中にては糸を君とす。糸の中にても、琴を上とす。宮の聲は重を主とする事あれども、微なるを學ぶの儀なし。今の琴聲は微音なり。是君の德を失へり。いにしへの音にあらず。又今の琴は其かたちうるし（にて）ぬりたるものなり。堯の時まではうるしなし。舜初てうるしをこり、器をかたくするとをなし給へども、日用飲食の器かたくして、けがれのしまざらんがためにして、いまだ琴をかざるにいとまあらず。其上聲に害あれば琴瑟にうるしを用べからず。今の中國朝鮮の樂器は、俗に落て、日本の俗樂のごとくなりと見えたり　問、正しき傳へもなく、詩の言葉もなきに、今の樂を正樂なりとの給ふ事は何ぞや　云、宮商角徵羽を以て、正樂といふ事を知なり。今の俗の鳴物、うたひ物は、いづれも五聲正しからず。雅樂は五聲正しくして、律呂備れり。後世道行はれ、生質音律に器用なる人、道を學び樂を習ひなば、代々をへて詩樂をこる事有べし。此樂亡びては、後世明王おこりたまひ、器用なる人生れたりといふとも、何によりてか雅樂をおこす事を得んや　問、平日の物語より、小哥さみ線のたぐひに至まで、五音にもれたるものはなし。何れにても五聲はしらるべきか　云、尤いづれにも五聲あり、しかれども正樂の五聲と、淫樂の五聲と、ふりといふもの各別なり。此ふりたえては、又おこす事成がたし。いにしへの琴のふりたえぬれば、和漢ともにおこす事かなはざるを以て知べし。其上淫聲は宮不立、俗のうたひ物に、宮の立たるもしはあれども、其聲和なし。和あるは宮不立（長久ならず）共に正樂にあらず。和なくして立たる宮は、まとの宮にあらず。武人大君となりたるがごとし。この故に物の始なれ

ば、清盛頼朝是に當れり。正樂は和して宮立ぬ。故に正樂たる事をしれり。後世のうたひ物は、宮かと思へば商にう
つりぬ。君位を臣のおかせるなり。故に五音正しからずといへり。これ淫聲のしるしなり。箏は秦八ふたつにして、
糸数減じたりといへ共、すがかきの一聲河圖の数にかなへり。一六二七三八四九五十是也。此格は五十絃・二十五絃・
十三絃かはりなかるべし。五聲一度に發して、一聲のごとくなるは、五倫和睦の象なり。一糸をならせば、聲すみ、六糸
一聲なれば、聲にごるがごとし。和する所には明察すくなし。樂は同をなすの本旨なり。春の日はうちかすみてうら
ゝかに、月はおぼろにしてのどやかなり。日月音樂ともににごるにあらず、和の至なり。光をやはらげ、塵に同きの
象なり。すがゝきの後小爪して、一糸をならすは秋陽のごとく、秋月のごとし。和にながれずして中立し、明白にして心
くもりなきの象なり。五聲めぐりて宮を相なすは、四時土用のたがひに應ずるがごとし。五音なれども、六糸鳴は、宮
に初て宮に歸す。政令君より出て、君に歸するがごとし。宮の糸に左手の色なきものは、宮の位をうごかさず。君を尊
ぶの義なり　問、何をか宮たちても和なきと云や　云、うたひにては、祝言修羅、鬼むきといふもの、宮は大方たて
共、吟こはくして和なし。和なくして立たる君は、ちからつよきがゆへなり。人質をとりちからを以てかためたるが
ごとし。人心腹なければちからおとろへぬるときは亡るなり。故に宮の立と云。正樂の宮の立たるがごとくにはあらず。
平家と云ものゝふしは、宮立といへども、宮の所には聲のゆりあり。君の位のあやうき兆なり。正しく立たるにあら
ず。事は清盛一家の事をいひ、ふしは頼朝北條の時代に出來たる成べし。うらみていかる聲に似たり。聲こはくし
て和なし　問、何をか和すれども宮不立といふ　云、うたひのかつらといふふし、和なれども宮たゝず、聲和なるが

ゆへに、ことばのよきは、うたひて人の心もなぐさむ樣なり。初めは祝言等の吟ばかりにて、かつらの吟は後に出來たるなるべし。今のうたひ物の中にては、うたひの吟はまされり。平家とひすべて今のうたひ物は、大方武家の代と成て出來たり。小哥は時代〳〵に下よりをこるものなり。風俗婬すれば小哥のふしも淫風なり。民くるしめばかなし。平家うたひのごく定ていひ傳るにあらず　問、平家うたひも淫聲ならば、なぐさみにもてあつかふまじきとか　云、平家の音は亂世の音に似たり、かつらの音は亡國の音に似たりといへども、これは作りたる時代の聲なり。又後世其音にかなふ時もあるべし。うたひのみならず、常の言語にも、其時代の音あり。平の清盛王威をけづりて、源の賴朝より武家の世となりたり。武家の代のもやう、平家うたひのふしにあらはれたれば、始て天下をとる人は武威盛なり。又傍輩たると近き故に、諸侯の交り親し。人傳なる事すくなきによりて、君の威臣にくだらず、平家と祝言のふりのごし。代をかさねて天下をたもてば、次第におも〳〵しくなり、諸侯の親みも遠く、位尊きやうなれども、君威の實はやがておとろへて、臣にうつるものなり。ゆるやかに物ごに結構なるやうにみゆるは、和なれごもかつらのふりのごし。宮かとおもへば商なり。又角かるなり。角は民なり、かるはちいさくなる也。世上をごれば民にとる事つよし。故に角のかるは、民の困窮の象なり。君子といへごも其代に生れては、其代の聲あり。宮不ㇾ立、五聲順ならざるは淫聲なれごも、淫聲の中にても彼は此よりよきあり、平家うたひこれなり。樂の唱哥は琵琶箏なくてはうたひがたし。今は琵琶箏も人により所によりて自由ならず。春のうぐひす、秋の蟬だにも、自然に吟聲發す、いはんや人は心知あつくして情思深し。うたひものなくて不ㇾ叶。後世明君出たまひ、道行はれて自然に雅聲のおこらむまでは、

二五六

せめては平家うたひ舞などはなぐさみにうたひてもくるしからじ。情をのぶるの一なり。今婦人に病人多きも、小哥は風くだりてうたひがたし。箏琵琶をしらざれば唱哥もしらず、うたひは婦人に似合ず。情をのぶべきたよりなき故なるべし　問、今小哥は世間にも婬風なりと思へり。あしき者のとりあつかひ、下々のうた物とす。五聲のみだれうたひよりも甚しきか　云、小哥は宮いよ〳〵たゝず、おもかげばかりなり。宮にすはるべき所皆商にすはりて徵となる。臣事をとりて、權威つよきの象なり。又羽めるなり。これ物の大になる也。物の大になるは驕奢なり。君に君德なければ、紀綱ゆるまりておごり長ずる故なり。故に小哥は淫にしづみたるものなれば、世間にも淫風と知所なり　問、小哥の羽のめる事、風俗にかなふとは何ぞや　云、羽のめるは、風俗より出たる聲なり。羽は物なり。めるは大になるなり。万事分に過たるは、羽のめるなり。これによりて、士貧く民困窮す。羽めるときは角かる道理なり。かるはちいさく成たる也。角は民なり。世間おごるときは、民困窮せり　問、つくし箏の小哥は、少しよきやうに聞ゆるはいかゞ　云、平調のしらべを用ひ、角羽の糸めるなり。羽のめるは小哥の音めるゆへなり。角は小哥の音、めらざれども、糸をめらするは、左手をはたらかしめ、おさへんが爲なり。角は民なり。民の苦しくるしむ象なり。樂には宮の糸に左手なし。つくし琴には、七篇に左手あり。これ君かろくしてをかしやすきの象なり。世俗の小哥にかはりなし。しかれども上らふの器をかりたれば、そのひゞきによりて、同じ小哥なれども、其聲色いやしからぬやうに聞ゆるなり。上らふのをちぶれて、下らふのわざをするがごとし。つくしはじまりてより、流浪人多も其驗なるべし

一日本の律の調は、角一律高し。もろこしより渡たる律書に、今の律の調はなし。もろこしより渡りたる音律なるに、如レ此あるとは不審なりといふ人あり。秦の代に初てもろこし人、日本へ來れり。中國にて名人の聞えある人は、大方渡れり。始皇が惡政をさけたるなり。故に日本の聲を聞て、應ずるやうになをして教へたるなるべし。これ國俗に應じたるものならん。もろこしは士と民との間近し。日本は士と民との間遠し。民は日本の土民なり。士は王孫にて姓を給はりたるものなり。天神の孫なれば、士と民と異なり。同く民間にすめども、士筋のものは民と座列各別なり。此他の國になき事なり。故に商角の間、二律へだたりたる聲あり。聲音の道、政と通ずる所なり。四五百年此かたおこりたるうたひものは、其商角の間、二律へだゝる上に、又角のかるとは甚過たり。困窮に近し。兵と農とわかれて、民困窮する前知なるべし　或問、うたひもあげの所は宮にてすはれるはいかん　云、權柄臣にありといへども、大禮には君の位を易る事あたはざるがごとし　問、日本の聲は角一律高しといへる、士民の体はさも有べし。箏聲音にをひて證據ありや　云、あり。もろこしの律書のごくにては、今のうたひ物いづれもうたはれざるなり。箏をしらべて今のうたひをうたひてみるに、律書のしらべにては、角めりてふしゆかず。其外のうたひもの、いづれも律書の角にてはうたはれず。一律高からざればふしゆかず。たとひいにしへは今とかはり、うたひ物の宮商角徴羽は正しくとも、此所は日本の聲の生付なるべし　或問、催馬樂哥に呂律あり。うたはれざる事は有べからず。いかん　云、催馬樂の呂律といへる、ふしはかせ何とか有けん、ふりたえぬればしりがたしといへり。角徴の間に二律へだてたるいきに作て、ふしはかせを付なばうたはるべし。されど日本にて自然にをこりたるうたひ物には、此いきな

し。中夏の律書のしらべにてうたひては、ふしゆかず。心ありて、作てなすは、國風にあらざれば各別の事也。日本のこうたに、たゞひとつ呂のいきのふしありたるを聞たると云ものあり。律呂の學ありし人、わざと作て、ふしをつけ置たるか。所により中夏の風のごとくなる所ありて、うたひ出せるか知べからず。催馬楽の呂律といへるは、黄鐘調を呂の樂といひし類ひにや。今黄鐘は律の調なれども、十二音を十二月に配すれば、林鐘は呂に當れり。林鐘を宮にして、黄鐘の樂となれり。黄鐘は平調と同じ律の樂なれども、林鐘によりて呂といひし類ひか。たゞし中夏にて、黄鐘の樂は呂ともいふべし　問、祝言平家のふし、宮すはりても淫聲なる事は何ぞや　云、平家は宮に聲のゆり有、商へ行をやらじとて、ゆりたるものなり。實に宮のすはりたるにあらず。祝言のふしは聲こはくして和せず。ちからを以ておさへたるがごとし。實に立たる宮にあらず。平家祝言ともに、宮のうごきたる勢也。かつらのふしは、宮の位商にうつりたり。一向臣にまかせたれば和する勢あり。故にかつらのふしは和なり。しかれども宮終に位を失ひたれば、眞の和にあらず。今殘りたる俗のうたひ物は、武家の代となりて以來、出來たるものなり。其中にては、平家のふし久しきか。其次にうたひのふし出來たりと見えたり。先祝言の吟をこりて後、かつらとなりたる体なり。まひは武家戰國の間に出來たるふしなるべし。宮いよ〳〵たゝずして羽はめらず。宮のたゝざるとは小哥よりも立ず。小哥は羽めれどもまひはめらず　問、何を以てか戰國の聲といへるや　云、戰國は國々我持なれば、君なきがごとし。羽のめらざるは、戰國に兵粮に迷惑して、をごる事あたはず。もの質素なればなり　問、戰國は君なし。宮たゝずともいふべからず。一向宮たきふしならずや　云、宮のたゝざるうたひ物多しといへども、又宮をたてざればうたは

れず。この故にをもかげばかりも宮はあり。戰國にも禁中ありて、官位をば申請られたり。政令出ざれども、君の位ばかりはありしなり。うたひ物のふりもかくのごとし。小哥もりうたつといふには少宮あり。其後の小哥は、をもかげばかり也。まひも大かしらは少宮あり。幸若よりは以前のふしなるべし　問、世間大かしらといへるは、本大かしはなり、大かしはといふもの、幸若が弟子と成て初めたるものといへり。いかん　云、かうわかは本武士なり。まひを好てよくまひて、後まひ人と成たり。大かしはがまひたるは、幸若より以前のふしなるべし。万のうたひもの、初はふしすなほなり、後ほど潤色するものなり。大かしははすなほに。幸若は潤色多し。故に以前のふしをおこ（イニナヲ）シしたること知ところなり。祝言修羅の宮は急度して和なし。平家はゆりて宮をたもつ、みな立がたき兆なり。頼朝尊氏家の天下をたもつは、ちからを以て威を持たり。祝言修羅の宮のごとし。北條は一向商になりて、代をかさねたり。宮にては立がたき勢を知ばなり。しかれども實は宮なり。立がたき所を立て、代をかさねたるは平家のゆりのごとし

一管は商一律かる所多し。これは臣はをごりやすきによりてをさへたる用心なるべし。めるは大になる也。かるはちいさくなる也。商は臣なれば一律からするは、へりくだりたる象なり。万物少き物ほど聲高し。人も幼少の子は聲高し。成人にしたがひて聲ひきくなるものなり。故に十二律次第にみじかくて、次第に聲高し。應鐘を宮とせずして、黄鐘を宮とするは、中にて大きなるものは長子なり。故に長子を宗とするの義なり

一笛は大かた羽一律かるなり。物は大になり易し。物大なれば民困窮す。これまた用心なるべし。物の大なるは奢なればなり

一三管・琵琶・箏、すりちがひてゆく所あり。しかれども合奏しては和す。皆同じやうにては國家の事行はれず。異にして和するを大同と云。同くして和するは小人の道なり

一箏の呂のしらべは上古の風なり。五より向は宮徴羽なり。伏犧神農の君たるがごとし。君みづから事をとり、物を始むるの象なり。五より後は、宮商角徴(セイ)羽の次第順なり。黄帝堯舜衣裳をたれて、天下治るの象也　問、宮よりも徴羽大なるは何ぞや　云、天地ひらけて万物あり。万物ありて事あり。事あれば君なくては不レ治。故に君を立たり。事物先なる故に如レ此し　問、呂の調は宮商角みな一律のへだてなり。律の調に異なるは何ぞや　云、是は日本の人もろこしへ行て、習ひとりたる調子なれば、もろこしの律のまゝにして、角徴の間に二律あるなり

一平調は我朝の神代、人皇の時のごとし。始より君上臈にて五位順なり。又太簇は寅正月の律なり。三陽調て盛なり。五調子の長なり。故に五常樂も平調にあり。一は師保の官なり。上にをるといへども勢なし。小にして聲高し。人臣なればなり

（我朝にては古寫本ナシ）

一盤渉調は冬の調子なり。一陽下に生ずといへども甚微也。いまだ春をなすに不レ及。陽は君なれども、いまだ下にありて微なるがゆへに、柱立かくのごとし。上古は太子といへども臣と相ゆづれり。又君在時の體なり。我朝にては さくや此花冬ごもり、難波の御子のごとし。七よりは五聲順なり。即位以後の象なり

一黄鐘調、七より向は君臣民よりも事物大なり。夏の聲なればなり。天下の事農より大なるはなし。夏三月は農業の最中にて、野も山も事なり。草木しげりみちて物大なるの象なり

一樂は樂なり。心のたのしびは一なり。其をもむき異なり。道をたのしむは雅樂なり。欲をたのしむは淫樂なり

一笙は大臣の象なり。ひとりならずして相竹六一度に鳴ば賢をすゝむるの義なり。笛篳篥は手こまやかなれども、笙は大やうなり。大臣祭に過るはあしければなり。笛篳篥は諸官のごとし。こまやかならざれば事とゝのほらず。大臣は大やうなるがよけれ共、明かならざれば下をこたりあざむきて、一人にてなすべき事を、二人三人にてする事あり。かくのごとくになりては、役人多く出來て、武臣すくなきものなり。武臣すくなく、役人多ければ武威よはし。手のこまやかなるは、人少にてよく用を達するの象なり。しかれども笛篳篥も宮に至ては、絃と笙に同じ。小官も家に歸りては家の君なり。至治は易簡なれば休息のいとまゆるやかなるの儀なり。徵のすなほなるは、事せわ〳〵しからず。大事は化して小事となり、小事は無事になるの理なり

一或問、平調・黃鐘調・盤渉調を律といひ、壹越調・雙調を呂といふは何ぞや　云、いにしへの律呂を以ていへば、十二律に律呂あり。六律六呂これなり。思ふに今の律呂の名は、日本人の言なるべし。壹越・双調の聲はやはらかなり。故に呂といひ、平調・黃鐘・盤渉の聲は急度したり。故に律といへるか。常のものいひも、唐人は聲にいふなれば、かたかるべき事なれども、やはらかなり。日本人は訓にいふなれば、やはらかなるべき事なれども、急度したり。中夏の音は角徵の間に二律をへだて、日本の音は、商角の間に二律をへだてたるちがひなり。故に壹越・双調は中夏の調にして、平調・黃鐘・盤渉は日本の調なる事を知也。日本は日の本にして陽國也。故に日本の調を律といひ、それに對して、中夏の調を呂といひたるとも有べし。本中夏の黃鐘・盤涉・平調の調は今の調にては有べからず。中夏の調には、變

徵·變宮ありて、嬰(ユイ)商なし。日本の調には嬰羽·嬰商ありて、變徵なし。故に變徵·變宮は、中夏の言にして、嬰羽·嬰商は、日本人の言なるべしと知(ル)ところなり　問、日本の音律には、變徵·變宮の聲なし。いろ／＼にいひて、此音をいふものあれども、道理にかなはず　云、今日本の樂にはなしといへども、變宮·變徵の律はあり。壹越調のときは、南呂より黃鐘へうつる所、二律へだて、聲和せざる故に、應鐘へつたひて聲和するを變宮と云。故に壹越調には、應鐘を變宮とする也。姑洗より林鐘にうつる所、又二律へだて、聲和せざる故に、蕤賓(スイヒン)へつたひて聲和するを變徵と云。故に蕤賓(ヒン)を變徵とするなり。双調は應鐘を變徵とし、姑洗を變宮とす。いにしへ中夏の樂には、此うつり有べし。變宮の道理君道に通ず。をり／＼は臣のわざにもくだりて、人情に達し、事あればみづから大將となりて四方を征し、或は諸侯を客とし、親みて君威をやはらげ給へば、人情時變君の心に通じて權威下にうつらず。仲哀應神の帝、みづから大將として、九州にをもむき給ひしは、變宮の道理なり。中夏にて秦王信反逆せしも、高祖天下を有てたのしめり、自身むかふとあらじ。大將をくださば、我に敵する者なしと思ひしに、高祖みづからむかはれしかば、信亡びたり。平生君は下すちかからざれば、却て威を失ふものなり。君たる人、君の位に執滯してはたらきなければ、次第にうつたかくそなはるやうなれども、下の事をしらされば、下に知もの出來て、君位おとろへ、亂世となるもの也。變宮の理をしらざればなり。變徵の道理も又政道に通ず、徵は事也。國家の事は定法あり。然れども時處位によりて、權を以て義にかなふとあり。禮法は根本義よりをこるものなれば、變通じて本に合す。これ變徵の理なり。變通ずべき所にて、變通ぜざれば、事行はれず。却てやぶれの端となるものなり。黃帝堯舜其變に通じて、民をして倦ざらし

むといへり　問、羽より宮にゆき、角より徴にゆく、いつも變宮・變徴なるべきか　云、かならずしもしからじ。これも時有べし。物やはらぎたるばかりにても、と、のほらず。急度したる所もなくて不レ叶時に、直に羽より宮にゆくべし。事よく叶ばかりにても流れ易し。時にゆきがたきをもつとむるを以て立べし　問、變羽・變商はいかん　云、變は物のわかきなり。物は備りやすく、臣は大になり易し。故に商羽皆わかきに退てみたざらむとす。平調にて姑洗は仲呂にゆき、應鐘は黄鐘にゆく、これなり。律の調皆しかり。物のわかきは聲高し。黄鐘はひきゝの始、應鐘は高きの極なり。しかれども應鐘よりたかきは、又黄鐘の半聲なり。淫聲は商羽めるゆへに、用心に一律からせたるにても有べし。物は大になるほご聲ひくし。めるは大になる也。臣は大になるにしたがひて、君位をうばへり。物の大になるは驕なり。其律よりも、めるは法を不守して、我まゝなるがごし。淫聲しかり

一壹越・斷吟・平調・勝絶・下無・双調・鳧鐘・黄鐘・鸞鏡・盤渉・神仙・上無、此十二は調の名なり。いにしへは十二調有しなり。今十二の律竹に名付るはあやまりなり。　黄鐘・大呂・太簇・狹鐘・姑洗・仲呂・蕤賓・林鐘・夷則・南呂・無射・應鐘、是十二律の名なり　問、黄鐘、林鐘を生じ、林鐘、太簇を生じ、太簇、南呂を生じ、南呂、姑洗を生じ、姑洗、應鐘を生じ、應鐘、蕤賓を生じ、蕤賓、太呂を生じ、太呂、夷則を生じ、夷則、狹鐘を生じ、狹鐘、無射を生じ、無射、仲呂を生じて成就す。仲呂より本の黄鐘にもごる所、もごらず、皆八にして相叶ときは、もごらざる理なし。八目〳〵にめぐる時、氣味よくあいたるご思ふは、少過る、故につもりては本の律へもどらざるか。今は其心してもごるやうにきるものもあり。いかん　云、もどるつもりは理屈なり。もごらざるは天理なり。春夏秋冬めぐりて春をかへすといへごも、過し春をかへす

にあらず。春は又あらたに生ずるなり。人の呼吸も入たる息の、また出るにあらず。出たる息の又入にあらず。出たる息は盡て、新に入。いりたる息は盡て、新に生ず。天地の理何にても跡へもどるといふ事なし。川の流も山澤氣を通じて、神化より生じ、ながれて海に入て、潮とともにつくるなり。潮汐のみちひは、則水の生滅なり。あなたこなたするにあらず。所によりてかはりあるは地の勢なり。夫仲呂より生ずる律は、本の黄鐘に少かりて、別に又黄鐘あり。黄帝の時、天にうかゞひ給ひて、黄鐘の律定りたるは、其時の天地人の氣に應じたるなり。いま聖人出て天にうかゞひ給はゞ、今の三才に應ずる黄鐘あるべし　問、しからば九寸も九寸ならざらんか　云、又今の九寸あるべし。然れどもなるほど微なる事にて、目にみゆる程のちがひにては有べからず。今十二律に二通あり。一通は中律よりはめり、一通は中律よりはかりたり。平調の宮の糸にて心むれば、糸のしめかげんにはよれども、二三分の上下あり。一分を二三にして、目に見がたきうごきにてだに、耳にたつめり・かりあり。いはんや二三分のちがひは、大なる上下なり。しかれ共律の竹にては、リンフンにも及ばぬほど微なる事也。又竹の空中にリンマウのちがひあれば、別の竹にてはしられず。中律にめりたる竹にさくさをあてゝ、中律にあはせ、又さくさをあてゝかりたるにあはせて知べし

問、音には尺度權衡の樣に、寸分リンマウの格法なし。何によりて中律とし、上下させんや　云、今のめりたる律にて、糸をしらべて樂をすれば、靜にてよき樣なれども、樂の後心氣うつけたるがごとし。不足の氣味あり。故に中律よりもめりたると知なり。今のかりたる律にて糸をしらべて樂をすれば急促しせまる樣なり。樂の後劳せるがごとし。故に中律よりもかりたると知なり。其上めりたるは、三管のうつり和に過て聞えがたきがごとし　かりたるは三管の

二月あり。十干十二支のまじはりめぐるを見て、三百六十日に六の甲子を立て、運氣を定め、四時をあやまらず。十干は、甲乙丙丁戊己庚辛壬癸これなり。五行各陰陽ある故に、十干と名付。十二支は子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥これなり。鳥獸の形と性との星に似たるを以て、人の知やすきがために名付たり。それ天に二十八宿の星有て、日月のやどりをしれり。しかれ共天はやむ事なくめぐれば、其所さだまらず。春秋の昼夜ひとしき時を以て、星の所を定め、これを地に名付て、二十四支と云。二十四支は十二支陰陽の名也。これをすべて十二支といへり。天は至動なれば地の靜なるによりて、東西南北の十二支を定め給ふ。二十八宿と二十四支とかはりなし。しからば二十八支あるべきに、二十四支といふは天のまどかに地は方なり。方なるものは圓なるもの丶角々四方かくる故なり。十二律もすぶれば五音なり。十二支もすべて五行なり。行はめぐるなり。めぐれば生々す。木を生じて水老し、火を生じて木老し、土を生じて火老し、金を生じて土老し、水を生じて金老す。生るばかりにては用をなさず。相せめうつによりて用をなせり。水火相せめて物を煮と丶のへ、火金相うちて鍋釜耜鍬太刀刀を作り、金木相せめて薪をきり、屋を作り器をなし、木土相かちて五穀を生じ、土水相かちて田をかへし、かまどをたて壁をぬるも五行かねよりて用をなせり。耕作も土をかへす、鍬は木金なり。水を入て苗をうへ、日火をてらして長成す。食物をと丶のゆるも土かまどをぬり、釜鍋となり、鍋に水を入、木に火をかけて煮と丶のふ。宮商角徵羽の五音備らざればかりそめの樂もならざると同じ。木火土金水は五行の形象なり。宮商角徵羽は五行の神聲なり。神ありて後形象あらはる。故に律呂定て万事万物の用備れり

一或問、雅樂は宮に初て宮に終といへり。しかるに正樂といへる中に、しからざるものあるは何ぞや　云、いにしへは格法なし。宮の位だにすはれば、初りは定らず。故に五常樂の序は、徵にはじまりて、急は宮に終れり。夫天地あれば万物あり、万物あれば事あり、事あれば君なくてはおさまらず。徵にはじまりて宮に終るの儀なり。又宮にはじまりて宮に終るは、事君より出て、君に歸する也。同じ道理なり。古詩は自然に出たり。其中に心なくして、宮の首尾あるをとりて定法とし、これにかなふやうに後世は作せり。故に首尾相叶ても、樂はさのみよからぬあり。作意せるゆへなり

一或問、聲音の道、天地神明に通じ、政と相應ずる事如ㇾ此親切なり。其初め人心の物に感ずるよりなれり。しからば洪範の休咎なをたがふべからず。肅なれば時に雨したがふものは何ぞや　云、肅は敬なり。篤恭にして天下平かなるの義なり。上下同心同德にして、禮儀の風俗となるときは、人心滋潤なり。故に天氣くだり地氣のぼり、陰陽和して時雨したがひ生育の功はじまれり　問、乂なれば時に暘したがふは何ぞや　云、乂は治なり。姦惡かくれず、盜賊消す。門戶とざゝず、貴賤氣づかひなくして心易し。天氣のはれたるがどし。故に時暘したがひて生物かたし　問、哲なれば時に燠したがふは何ぞや　云、哲は明なり。上の心明なれば、君子進み小人退き、文武禮樂の道盛なり。仁政行はれて、春風和氣のどし。あたゝかなるべき時にあたゝかにして、生々の功さぐるなり　問、謀なればときに寒したがふは何ぞや　云、謀は度なり。藏密の意思あり。知ふかくして家國天下紀綱のしまり堅固なり。故に寒すべき時に寒して、來歲春夏秋のたくはへ厚して五穀豐熟なり　問、聖なれば時に風したがふは何ぞや　云、聖は通なり。

通ぜずといふとなし。風は入也。よく物に入て濕（シツ）をはらひ、雷風相應じて物の留滯を通ず。故に先王樂を作て邪穢を消し、眞氣を養はしむ。堯舜の御代五風十雨風枝をならさず、雨土くれをながさず。万物生をとげて五穀豐熟たり。人は天地の德、神明の舍なり。天氣常に人心にしたがふ事明なり。人心は無聲無臭なり。其心に思ふ所事にあらはれざればしられず。事にあらはれて知はおそし。見聞の及ばざる所、心思隱微の地にをひて、正邪を知ものは樂なり。鬼神　知人知已知すでに糸竹の音に發するときは、つゝしまざる事あたはず。孔子云、由が瑟何ぞ丘が門にをひてせんと、子路むかし勇を好めり。知仁勇は本心の德なれ共、好むはすでに過たり。これによつて瑟の爪音に殺伐の聲ありし也。故にいにしへは君子、ゆへなければ琴瑟身をはなさずといへり。不知不識隱微に不正あらん事を恐てなり。たとひ聲音に通ずといへども、問學なければ及がたし。問學聲音かね習といへども、心術くはしからざればこゝに至りがたし。身の過を人格し、心思の妄を良知しるといへ共、箏の爪音に發し、琵琶のばちあたりにあらはれたる樣に恥て、ふかくかへりみる事なし。心術常に和せず、たのしまざれば、邪穢の氣したがつて入易し　問、肅・乂・哲・謀・聖のうち四は學て及べし、聖は及びがたからんか　云、末書に云、肅ニメ而貌ー事脩ル。貌ハ澤ー水有ニリ時ー雨ー之類應ースルコ。乂ニメ而言ー事脩ル。言揚レ火有ニ時暘之類應ースルコ。哲ニメ而視事脩ル。視ノ散木有ニリ時ー燠ノ之類應ースルコ。謀而聽ー事脩ル。听（キン）ハ收（シウ）金有ニリ時ー寒ノ之類應ースルコ。聖而思事脩。思ハ通ー土有ニリ時ー風之類應ースルコ。この聖は聖人の聖にはあらず。よく万物一体の恩を致して、民を子とするの心いたらずといふとなきをいふなり　問、狂なれば恆に雨したがふといへり。狂は肅の反也。肅雨何ぞ狂にしたがふや　云、肅雨は時雨なり　狂雨は時雨にあらず、雨の過なり。故に恆にいへ

り。狂は放蕩にして不敬なり。人氣隨なり。風俗淫すれば雨しげき類なり　問、僭は品をこえ禮にたがふ乂の反也。何ぞ恒に暘したがふなり　云、乂暘は時暘也。僭暘は過るなり。人倫序を失て、品をこゆれば、人心たかぶりて火氣多し。故に日てりがち也　問、豫なれば恒に燠したがふは何ぞや　云、豫は猶豫不明なり、天運自然に治世になりて、數十年すれば油斷して萬々歳と思へり。解緩して紀綱ゆるまり、万事結構に過てしまりなきもの也。道なき治世のやぶれは、剛惡と柔惡との二なり。剛惡は急に亂れ、柔惡はくらゐつめに亡るものなり。結構に過たるは、惡とはいひがたけれども、しまりなければ人心我まゝになりて、風俗をごり、貴賤ともに堪忍の情うすくなりて、万事過分なり。故に商人富に過て士貧くなり、國郡の主といへ共次第に藏乏く成て、民に取事倍す。士貧く民困窮すれは、人皆利におもむきて義を忘れ、人心のあしく成事くづるゝがごとし。人心あしければ天氣時ならず、燠暖の氣勝て、夏の暑秋に行てすゞしき事をそし。冬といへども寒氣うすく、たくはへすくなければ、來歲五穀實のりすくなく、凶年多し　問、昔日本の國南へよるといへるとあり。其道理は有べからず。しかれどもいひ出せる所には故あらんか　云、故あり。南へよるにはあらず。氣の北するなり。世中紀綱ゆるまり、人氣しまりなく、驕奢長するときは、氣北するなり。南の氣北にゆきて暖氣をほく寒氣すくなし。此故に世間に人多生れて、善人すくなく、氣体よはし。たゞ人のみならず、草木金石までも性やはらかになるものなり。中夏にても周の末には寒歲なしといへり。全く寒歲なきにはあらず、歲の惣体暖氣多し。故に俗に南へよるといへり。氣北すれば南へよるがごとし。人心の驕なり　問、其時にも十一月十二月に至て、時として甚寒ありし事は何ぞや　云、士民困窮の氣の感ずる所なり。時として嚴寒

あれども實は寒すくなし　問、さやうにては世も程なくつきぬべけれ共、又とかくつゞく事はいかゞ　云、紀綱ゆるまり驕奢長じ、士民困窮する時は、兵亂出來るものなり。戰國となれば、殺伐の氣流行するのみならず、軍國には戰陣の事にのみ心を用て、驕奢のいとまなし。兵粮に迷惑して、万事不自由なれば、をのづから人氣にしまり出來るものなり。故に天氣又南する也。北の氣南へ行ゆへに、寒氣勝なり。故は秦亡て燠年なしといへり。戰國なれば紀綱ありて、しまるにはあらざれ共、境界のしからしむるにて、無二是非一奢やみて質素なるがゆへなり。暖勝も寒勝もともに順にはあらず。其間凶年多しといへ共、寒の勝は暖の勝よりは人もつよく、物も堅し。又人の生るゝとすくなし。亂極ては治となる。人も亂世に退屈して治世をねがへり。賢人君子にはあらざれ共、其世中にては寛仁なる生付の器量ある人出來て、天下を一統す。久しき戰國の名殘にて、万事用たらざれば、いまだ質素なり。道德の紀綱にはあらざれ共、治世の初にてをのづからしまりあり。故に歲の惣体寒氣多し　問、暖勝ときは人多生じ、寒勝ときは人すくなく生じ、且すくなきときは善人あり、多きときにまれなるは何ぞや　云、四時を以て見べし。春生ずるものはすくなし。夏生ずるものは多し。春生には靈物多し。夏生には不靈の物多し。菓實も多ときはちいさく、すくなき時は大也。故に人すくなく生るゝときは、才器あるものあり。多く生るゝときは才知あるものまれなり。哲は明なり。豫は不明也。あきらかなれば時にあたゝかにして靈物生じ、不明なれば天氣否塞し、暖過て不肖多く生ずる也　問、急なれば恒に寒したがふは何ぞや　云、急は剛惡に近し。威勢にまかせて人をくるしめ、才知に自慢して賞罸つよく、殺伐の氣流行して寒氣すぐるなり。天道生々の理にそむくゆへに、不慮にやぶれ出來て亡る事あり　問、蒙なれ

ば恒に風したがふは何ぞや　云、心思蒙昧にして、善人をいみ、小人を近付、政令下にいたりて違逆す。故に不正の氣流行して、暴風しげく物をそこなふとあり　問　堯の時に九年の水あり。湯の代に七年の旱ある事は何ぞや　云、天地の間必然の理あり。或はしかるの數ありといへり。洪範に論ずる所は必然の理なり。堯湯の水旱は、或は然るの數なり。この數の變ありて、人倫みだれむとす。故に天より堯湯を生じてこれを消せしめたり。堯湯のために水旱なし。水旱のために堯湯生ず。聖人の天地の交をつゝしむとは、禮樂より大なるはなしといへり

一箏の糸は、河圖の數なりといひ、世間のうたひ物に、宮の不立箏の言は、近江國河合村の瞽者これをいへり。是に心付て考るとしかり。世に耳さとき瞽者多しといへども、學問なく、其上座頭の座に入て、其心世間にそみぬれば、かやうの所には心もつかず。いにしへのごとく瞽者を樂官にまじへましかば、樂音に益ある事すくなからじ。座頭の座といふもの、瞽者の心をいやしくなし、其耳をふさぐ所なり

一天地の化工無盡藏なりといへども、聖人これを助けざる時は、造化の功をなす事あたはず。聖人の天地をたすくる道は、禮樂を大なりとす。天尊く地卑して、乾坤定るは禮也。聖人これに則とりて、禮を制し式を作る。天地の間に万物生々す。和氣の流行にあらずといふことなきは樂なり。聖人これを助て、樂は人心を和するより先なるはなし。人心和するときは聲和す、聲和するときは天地の和氣應ず。天氣時にくだり、地氣時にのぼり、陰陽和合して、万物を煦嫗覆育す。時は禮なり、和は樂なり。かゞまり生ずる物達して草木茂し、羽翼あるものふるひ、蟄せるものよみがへり、卵生のものやぶれずして、羽を以て伏しあたゝめ、胎生のものさけずして孕育をとぐ、天は氣を以てあたゝめ、地

は形を以てあたゝめて、五穀みのる。万物の生々は天地の和化をもつてなり。聖人の和化をたすくるは樂なり。人氣の天地神明を感ずることを愼むなり。むかし琴を彈ずる者あり、螳螂の蟬をとるを見、琴聲をきく者、殺聲ありとす。殺心にあれば其感琴にあらはる。人これを知ものあり。いはんや天地鬼神にをひてをや。故に逆政の感ずる所には水旱の應あり。古今ともにみる所なり。逆政とて惡政のみをいふにあらず。强善にて賞罰つよきも、人心をいたましむれば、其感天地鬼神に應じて妖氣生ず。人不善の心あり。これを積こと多ければ、天地の氣を動す。疾疫をいだすものも常にこゝにあり。其本は物の人を感ずること窮なくして、人物に化し、天理を滅して、人欲をきはむればなり。これ禮樂の敎なきによれり。故に姦聲人を感じて、逆氣これに應ずといへり。寒暑時あらざれば疾し、風雨節あらざれば饑す。時あらず節あらざるは、姦聲の逆氣を感ずるものなり。樂記に云、治世の音は安してたのしめり。其政和すればなり。故に四時順にして、風雨節あり。五穀豐熟し、人生疾疫なし。亡國の音は哀て思ふ、其民くるしめばなり。故に五行の氣みだれて風雨節あらず。五穀豐熟せず人疾病多し。夫衆ありて禮なき時は讓ることを不レ知。終に相爭うつたへて凶人多し。禮なければ節なし。節なければ或は乏く、或は餘あり。有餘の者は奢て淫し、不足のものは困窮しかなしむ。哀情淫氣天地に感じて不正の氣生ず。たとひ禮ありて治といへども、樂なければ和せず。禮いたづがはしきときは、人心たのしまず。たのしまざるときはかへりて淫を好む。貧賤のものに至までみな淫亂の行ある事は、樂の道行はれざればなり　問、天生じ地育し、人助と云ことは、かならずしも聖賢ならでも、造化は助べきか　云、德を以て造化をたすくるは聖賢の事也。天地の氣聖主賢臣によりて、大に和するを云なり。才知を以てた

すくる時あり。聖賢なくても少し道に志あれば、造化を助る事あり。天地は生成して制するとなし。年に熟あり、不熟あり。豐熟の年の五穀をのべて、凶年に足は人才の任なり。是賢人君子の德ならでも、下問を不レ恥、天下の知を用てなす時は、大にたすくる事あり。我みても中の國の高三十万石ばかり少く積りて、藏入に千貫目、家中に三四千貫目、民間に六七千貫目、町に千貫目、合て壹万二三千貫目の銀のすたりしを度々見たり。天下を合ては數もしられぬ大なるすたり也。是をすてずしてまさば、天下の士民かくのごくの困窮はあらじと思ひしなり。上つかたの人しり給はぬはさも有べし。下に居者はまれに心付人も有べき事なるか。むかしより行はれし事をきかず。一年の豐熟十年にのびて、當年は貴賤上下ともに大に悅べし。是賢聖（聖賢古寫本）ならでもそのときに當て、造化をたすくる大切（功古寫本）業なるべし。豐年にて九十月までの間に助とあり。十一月に入てはまた各別たすけすくなし　問、さほど諸國に金銀は有まじきか　云、後世の借銀（金イ）の高の十分一も天下の金はあるまじ。しかれども損益の勢如レ此、貴賤共に富足て後禮樂行はるべし

（功古寫本も初稿本も功なり）

集義外書卷十五終

集義外書　卷十六

水土解

一心友問、博文の儒者にも三敎一致と見侍る者あり。先生は各別なりとのたまへり。一致と云も道理なき事侍らじ

答云、よきといひて二はなきとの事なり。吾道に慈愛といへば、釋氏は慈悲と云がごときの言語を取合する時は、一致ともいはるゝ事多し。白き物は皆白といはむがごとし。聖賢も平人にあらず、佛菩薩も凡夫にあらざる所は一ともいはるべし。しかれ共聖賢の善は玉の白がごとし。仏菩薩の善は石の白がごとし。天性各別なり。人の悪を變じて善をなさしむるといふ事は似たり。しかれ共敎を立の主意は各別なり。白玉は白の精なるものなり。白石は白の粗なるものなり。しかれども玉の中にも精粗の品多し。石の中にも又精粗あり。時處の習にて石を實とすれば、粗なる玉よりも高直なる石あり。是を玉よりも精なる物とはいふべからず。玉の粗にして疵あると、石の靈質ありて奇なるとを見れば、玉の用にまされる石あり。ときのならはしと、其人がらのよきとを以てする時は、仏者といへども儒者にまされる者あり。德ある人のいふ事は、人の心にこたへて感ずるものなれば、其言にしたがふものなり。釋迦より六祖までは其身に德あり、其外にも小德有し仏者多し。それ天竺は戎蠻の國なり。戎蠻の人は下愚多し。人心貪着昏沉にして、仁義を不ㇾ知、聖賢の道學傳はらず、文字通ぜず、禮樂を以て化すべからず。故に戎狄に生

れたる王侯賢者は、其國俗を知のみ。是故に其國俗に應じて教をなせり。戎蠻の人は死を哀む事甚し。これを以て恐懼せしめて、善をなし惡をさらしめむとす。夫人貴賤となく畏るべきは死のみなり。又理を不レ知ゆへに、死後の事なればいか様にいひても信ず。これを以てをびやかして、道に入むとす。道となりといへども、其心をば知べし。莊子云、死生亦大矣。釋氏一大藏經此五字の中より出といへり。戎蠻の教にしては可なり。中國と日本の教には不可なり。しかれ共中國も日本も、千歳このかたは、氣運否塞にあたれり。此運氣の間には仏法も應ずる所あり。ことに日本の今には相叶所あれば、此後とてもとぐくは亡ぶべからず。然れども今までのどくにはあるべからず　問、仏法の其國にはよけれども、中國日本には不レ叶とならば、儒法も日本天竺には叶べからざるか　云、儒法と云は跡なり。跡は其國にをひても時うつるときは不行と多し。況や日本にをひてをや。儒道神道仏道、みな明知の人の其時所位に應じて行ひし跡なり。道の眞にはあらず。日本は陽國なり。陽の始にして稚し。故に其水土に生ずるの人、生を重じ死をかろむず。人心悦多して哀少し。又祭禮を重して葬禮を輕す。神道いさぎよくして誠を盡し、敬をいたせり。これによつて心のけがれをあらひ、欲すくなく風清し。故に仁國にして壽（コトブキ）ながし。夫至清の道は仁にしくはなし。仁は生々の理なり。故に仁者にはけがれなし。水鳥の水に入てぬれず、魚海にすみて潮しまず。田畠の作物、種々あくたをけどもそまざるは、生氣有ゆへなり。いはむや生理にをひてをや。故にいにしへ神人の御代、其帝至清にして、民人至敦なり。上仁に下不欲なれば、不治に平か也。不教に誠あり。儒仏の法はかるべからず。佛法の此國に害あるのみならず、儒法も又害あり　問、儒法の中國の情にかなふ所は何ぞや　云、中國は大國なり。天地

の中國なり。故に天氣明かに地氣厚し。五行の至寶あつまれり。故に人情厚し。平人はいふに及ばず。貴人といへ共路に死せるものあれば、何として死せるぞと、手づからなでゝくはしく見といへり。日本へ渡りし唐人のしる人なりしもの死して後、又わたりてたづねけるに、なくなりたるとこたへければ、しばらく哀情顔目にみちたり。何のよしみもなき異國人にだに如レ此。いはんや其國にして親きものをや。此情を以て見れば、葬禮吊問の作法さも有べしと思ひ當れり。日本の情を以てみれば、作りごとの樣なる事あり。日本人は親子兄弟だに、死すればうとみさくる心出來ぬ。いはんや他人の死せるは、甚うとましく思はれてきたなし。此情にては儒法の禮にあたりがたし。これ日本の人の罪にあらず。地氣のしからしむる也。中古唐より官位衣服等の制を傳し時、父母の服一年暇五十日、祖父母五ケ月暇三十日、兄弟三月暇二十日と、哀情を節する數期水土によりて定められし時、死穢は卅日と定られたり。中國は哀情を節するの數期のみにてけがれの事をきかず。夫人情は禮法を受るの質なり。素に五色をほどこすがごとし。中國の質は白紙のごとし。五采皆ほどこすべし。日本の質は青紙のごとし、戎蠻の質は黑紙のごとし。五采全くほどこしがたし。戎蠻の人は多欲にして慈愛すくなし。生理の淸白を好む心すくなくして、死を哀の心多し。故に無常を觀ぜしめて欲をうすくし、悲の情より慈心をみちびかんとす。天竺の水土に應ずる所なり。これ其國にをひては可なりといふ儀なり　問、仏法の日本の今に應ずる所あるものは何ぞや　云、其始心は雲泥かはりぬれ共、末に成ては相叶所あり。火葬などの易簡なる事也。戎國にて釋迦の火葬を用ひられたる主意は、彼國の人は欲心あつく執着ふかく、其沈魂滯魄形体をしたひて殘りやすし。故に火葬にして沈滯の魂魄を散ぜしめんとす。戎國にをひては可なり。

日本の人は仁國なれば、欲うすく執着あさし。沉滯魂魄あるものは數千歲万億兆の中に一人だにたまさかの事也。たとひ一人ありとても、影のごとくにして散ずる事すみやかなり。夫神代には槇の木を用て棺に作り、土葬を用たり。其遺風によりて、今に貴人たる人は多くは土葬なり。士庶人にも用る者あり。それ日本は上國にして小國なり。ことに近世は人の多き事百倍せり。火葬なくば葬るべき地なからん。儒法の葬禮のごとくにては、民間の數しらざる人、地なく材木なし。十が一も用べからず。或は用或は不用は孝子の恨有べし。あまねく用ひなば、土地材木ともに百年はつゞくべからず。天地の理は乘除(ジョウジョ)なり。儒法の立がたきがために變有べし。土地人民うつりかはりなば、今の屋敷(寺地ノ)となるごとく、全き棺はほりかへされて、後人の心をいたましむべし。これ我國の火葬を用ひたる主意にはあらざれども、時の勢にはかなへり　問　火葬をも不レ用、棺ほり出す憂もなく、天下なべて用べき葬禮侍るべきか　云、時ありて可レ行。後世水土によりて制する人有べし。天下なべて用て心よき法は易簡の善より出べきのみ　問、しからば我國の仏法のみならず、儒法といへども日本には相應せず。神道を以て心をみがき、身を修、家國天下に及べき道學おはしますべきや　云、三種の神器、則神代の經典也。上古には書なく文字なし。器を作りて象(カタチ)とす。玉を以て仁の象とし、鏡を以て知の象とし、劍を以て勇の象としたまへり。知仁勇の三は天下の達德なり。親義別序信の五は天下の達道なり。父子の親は仁なり。君臣の義は勇なり。夫婦の別は知なり。これを三綱と云。長幼の序は禮なり。禮は義の宜に生ず。信は知仁勇の實理、天道の至誠なり。天道造化の常よりいへば、元亨利貞也。人性五倫の明德よりいへば、仁義禮智信なり。理本一理也。氣本一氣なり。しばらく天下の主宰として、達德となりたる所に、知仁勇の

條理あるなり。人に五体あるがごとく、耳目口鼻あるがごとし。耳の靈は仁のごとし。目の明は知のごとし。口鼻の通は勇義のごとし。合ていへば人なり。分ていへばつかさどる所の名あるのみ。皆一心の左右なり　問、知仁勇の名は中國聖賢の言なり。これを用るは儒にかゝるにあらずや　云、知仁勇の徳ありて後名有か、名ありて後徳あるか。耳目有て後名あるか。名ありて後耳目あるか。夫人生て後人の名あり、耳目有て後耳目の名あり。中國にては耳目と云、日本にてはみゝめと云。言葉はかはりぬれども、さす物は一なり。夫三極そなはりて後、知仁勇の徳あらはる。上古には名なくして徳行はる、あつきの至なり。後世に及て教なきこと不レ能。故に其時の聖人是に名付て教とす。もろこしの聖人は是を知仁勇の三徳と云、日本の神人はこれを三種の神器にかたどれり。神は心也。器は象なり。神璽・寶劍内侍所の象を作て、心の三徳をしらしむる經書とし給へり。其外神代の文字言葉は絶て不レ傳、ひとり三種の象のみのこりとゞまり、至易至簡にして道徳學術の淵源之。高明・廣大・深遠・神妙・幽玄・悠久こと〴〵く備れり。心法政教他に求めずして足ぬ。名号文字は人の通じやすきものを用べし。かると云とも可也。三種の神器の註解は中庸の書にしくはなし。上古の神人出たまふとも、此書を置て別に註し給ふべからず。たゞかす事不レ能、かる事不レ能ものあり。日本の水土によるの神道は、もろこしへも、戎國へも、かす事あたはず、かる事不レ能。唐土の水土によるの聖教も、又日本にかる事不レ能、かすことあたはず。戎國の人心によるの佛教も又しかり。文字器物理學はかるべし、かすべし。天地を父母として生れたる人なれば、中國・日本・戎蠻・北狄の人も、皆兄弟也。父たる天は一大にして二なく。地のかはりは腹々の子のごとし。兄弟の中何ぞ物我あらむ。人といへば耳目口鼻かはりなきがごとく、心の知仁勇は皆天理の

一徳にしてへだてなし。いづくにかかるべき。思はざるの甚しきなり。日本の土地には、金銀多く生ずれば、中國戎狄の者來て求む。其外日本より渡して用をなさしむる物多し。朝鮮國の人參は中國へも日本へもわたして、人の元氣をすくへり。中國の文字はよく理を含て學に便あり。今佛教の文字名号は皆中國の文章なり。仏國へは中國の文字は不ㇾ通。中國の人仏を信じてより、中國の文字をかりて仏道をひろめたり。有無をかへて用るは道理の必然なり。文字の通ずる國は、中國・朝鮮國・琉球・日本なり。仏者は通ぜざるだにかり用ひたり。いはんや日本にはよく通じて理學に便あり。其上神代の文字は亡びたり。學は儒をも學び佛をも學び、理ゆたかに心廣く成て、かりかされざるの吾神道を立べき也。學にかるべき儒道をばからずして、治道にかるまじき儒仏の法をかりしは不ㇾ可なり。故に日本を人至治の澤を蒙らざる事久し。神道の正心、修身齊家治國平天下の用をかねて、一人立する事不ㇾ能は、全く儒をからざる故なり。仏者は大に儒をかりて盛に成たり。今はかりたる事をいふものまれなり。かるべくしてからざるは神道者の過也　問、三種の象もいまだ出來ざりし時の神代の教學政道はいかゞ　云、天地は書なり。万物は文字なり。春夏秋冬行はれ、日月かはるがはる明かなり。これ神道也。上世至德至治の時には、何ぞ書を用ひん。元德感通して、木氣事を用ひ、霞立梅さき鶯なく。万物生々して天氣溫和なるは、吾に慈愛を教るなり。父母たるもの慈愛の心ありて、子を養育す。君たる人、慈愛の德ありて、天下平かなり。夫婦兄弟朋友みな慈愛の情によりて相睦じ。慈愛と云は生理の發見なり。唯此生理天道にありては元と云、人性に有ては仁と云のみ。天道の春の教によつて、仁慈の心のおこる事、同氣相求同聲相應じ、水は濕に流れ、火はかはけるにつくがごとし。何ぞ書を用ひん。世くだり人倫

にして、天地を師とする事不レ能。こゝにをひて象出來ぬ。日本の象は三種の神器なり。唐土の象は八卦なり。世いよ／＼末に成て、象さとしがたし。故に書出來ぬ。吾國王代の始はいまだ象のみにして足ぬ。漸く書出來べき時に及て、もろこしの文書わたり、其後佛書わたりぬ。故に字書を講ずれば、をのづから儒仏を講ず。ことに仏法盛なりし時にあたれり。吾國の神書のおこらざる所なり　問、佛法はじまりてより以來、天竺中國ともに、日本の今の様なる仏法の繁昌は有べからず。しかれ共天命はすでに亡びにおもむきたると見え侍り。唯人の勢のつよきのみなり。人おほき時は天に勝の時節なり。五十年の間には、天定てまたよく人にかち、仏法亡び侍らむか。其故は今の繁昌は仏法の實の繁昌にてはなし。唯驕奢無道の至極せるなり。無心のものだに物の盛衰は理の常也。いはんや無道にして奢極り侍らば、長かるべき道理なき事と。近世僧たる者、不慈悲、不作法ゆへ、人も大方信なし。吉利支丹の請人にとらずば、今時分は檀那寺を持たる者は過半あるまじ。寺も僧も今の十分一も殘り侍らじ。近年は吉利支丹にかゝりて、無道の佛者ども富侍り。しかれども吉利支丹は仏者其外平人の吟味にてはしられざるものと見え侍り。蛇の道は蛇が知といへることわざのごとく、同類ならではしらざる体なり。吉利支丹は猶以て寺をかゝへ、よくつとめをすれば、しらるべき様なし。用にたゝざるからは後々は請人にも取侍らじ。近年の仏者の奢は、灯消なんとて光をますかと思はれ侍り。此後は儒道興起して天下治り侍らむか　答云、道理は至極し侍り。予もむかしはさ思ひしが、近比日本の水土により、山澤草木人物の情と勢とをみれば、易簡の善ならではあまねからず。長久ならざる道理あり。仏法は戎狄の異端ながらも、日本の水土時節に相應せる所有。是故に千餘年に及てかく行はるゝなり。近年は仏法の

世にかなへる易簡を失ひて、奢きはまり侍れば、久しかるまじ。しかれども天より奢をそがれ、堂寺法師等すくなく、少し出家らしく成て、又々久しくつゞき侍らん。今の儒學の樣子にては、朱學も王學も、治道の助とはなり侍らじ。國君世主少し用ひ給はゞ、少し害有べし。大に用ひ給はゞ、大に害有べし。王學の者朱學を格法とて難じ侍れ共、心學者ともに多くは格法にまとはれたる体なり。世の儒學者より見ては、大簡にて莊老の道にちかきと云程になくては、日本の水土今の時節にはかなひ侍らじ。天下文明の運と見え侍れば、文學は次第に博くなり、學者多くなりて、禪宗律僧などの世に有ども、一流と成てあらむのみ　問、佛法は易簡なる所のみ日本の水土に相應すと被仰ゆへ共、親を葬るとて目の前に親の身をやきすてゝ、火葬などにする事は甚不仁なる事と覺え侍り　云、しかり。されど我なすとはせじ。佛法の流、世俗の習にてする事なれば、人をばそしるべからず。又今の時處にかなひたる勢も有。吾人共に世の勢さけがたくばまかせても可なり。たとへば戰陣にて、身方亡る時は、城に火かけ腹切、炎火の中へとび入て死するは義たり。敵の手にわたり古郷に送られて、棺槨に入にはまされり。何ぞ外物を必とせん　問、仰のごとくなれば、儒法はすきとやぶれ侍り。狂見とや申侍らん　云、吾子いまだ理と情と道と法とを辨へず。人死して魂氣は天に行、魄体は土に合す。是理也。上世は人死すれば中野にをくり、谷に葬れり。棺槨なし。是天地の理にしたがふなり。後世家屋衣服器物備りしより、空しきからといへども、俄に直に土に近付るに不忍情あり。故に木を伐ひきわり、箱にさして、からをおさめたり。此情や時にとりて尤なる事なれば、後世の聖人棺槨の制をなし給へり。はやく土に合するは理なれども、死に事ると生に事るごくするは孝子の情なり。天我を勞するに生を以てし、苦を安ず

ろに死を以てす。死生は晝夜の道なり、命をおしむべからず、死を哀しむべからざるは理なり。然れども別をなげくは人の情なり。伏犧と神農とは理にしたがひ、黄帝堯舜は理と情とをかね、三王周公孔子は情にしたがつて理存す。皆時なり。周の代は天地ひらけてより以來、大平無事の時運にあたれり。天地の物を生ずる事かぎりなく、財用の多き事水火のごとし。人民大に富てなすべき事なし。故に驕奢にながれ、人欲あふるべき勢あり。聖人これを憂給ひて、禮文法式餘多作ていとまなからしめ、喪祭のために用を費して欲をふせぎ給へり。其時にだに禮文あらはれていまだ取行ふには及ばざりし事ありき。後世に及て、政令道を失ひて、人心正しからざるより、四時の氣不順にして、地の物を生ずることすくなし。貴賤分を越て士民まづし。世事多していとまなし。是故に人民多欲に成て、情薄く成ぬれば、其國にをひてだに行がたし。いはんや他の國にをひてをや。近年は草木金石だに性よはくなれり。まして人は病氣無氣力のみ多し。其上に家貧しく世間事しげし。いかでいにしへの富有にしていとま多く、無病にして氣力あまり有し時の禮を行はむや。それ道は大路のごとしといへり。衆の共によるべき所なり。五倫の五典十義是なり。いまだ道學の名なかりし前より行はる、天にうくるが故なり。万古不易の道也。禮法は聖人時所位によりて制作し給ふものなれば、古今に通じがたし。よく時にかなへば道に配す、時にかなはざれば道に害あり。しかるに今の學者には、法をとめて道なりといへる者あり。故に時處に應ぜざるをも、是非かくのごとくせずしては不レ叶事と思へり。今日本の時處位は、理にかへりて情をやはらげ、道を專にして法を略すべき勢なり　間、日本にてだに近年文學少しひろまり侍れば、書をよまざるものも、耳に聞ふれ、いつとなく後世などにまよふものはすくなく成行侍り。もろこし

の文國にて、いかで仏法あまねくひろごり侍りけん　云、これも儒者のかたよりひろめさせたる也。周の代の富有なる時の氣を、其まゝに後世の貧乏困窮の民にくはへ、無事の時の法を以て、事しげくつかれたる士になさしめ、上世の氣力盛なりし人のなしたる事を、後世の衰へたるものに行はしむ。貴賤共に周の禮法にくるしめり。貧なるものは葬のために産業を失ふもの多し。董永が身をうりて葬をいとなみしにて知べし。富貴なるものは氣力乏し。このゆへに世の習にて儒法を行ふ者は、内外なき事あたはず。名を思ひ恥を思ふ士も、心勞し氣つかれ、或は財たらずして是非なく僞に似たる事あるとをかなしめり。時に佛法わたりて喪祭ともに易簡にて、財用を費さず、事すくなくて心氣勞せず。佛法にだに入ぬれば、あまたの憂なし。故に實に佛を信ぜざるものも、これを悦て、風に草のしたがふがごとし。高明博識の者も、多くは佛に入て助けしかば、仏學ますく靈明になりて、儒道は唯外さまの事と成ぬ。若此ときに明君良相ありて、時運の衰をしり、人情のうすく氣力の乏きを察し、財用の不足に應じて、易簡の禮式を作爲し、誠を立て太古質素の風をかへしなば、誰か戎國の仏に入むや。其後ちろこしにても、此あやまりをあらたむる人なきゆへに、仏法今にすたれず。いはんや日本をや。古は人すくなく、土地ひろく、用たれり。又質素なり。故に棺を作事易して、其かたきをとれるのみ。後世人の多くなるにしたがひて、土地せばく用たらず。かざり多して實すくなし。常の産あるものだにも、棺槨をかざるにたえざるものあり。況や民の常の産乏きものは、死の哀はわきに成て、葬のとゝのほりがたき事を憂さす。とりわき日本は近世人の多き事十倍せり。小國なれば猶以て土地せばく用たらず。庶人の末々は生て衣なく、死して棺なし。又葬べき地なき所多し。火葬も又時のついゑにあたれり。天地

ひらけて以來の人多時節なり。これ氣運ふさがりくらくしてしかり。時に仏法あるもかなへり。火葬も又可なり。今の時處に當て、家禮の儒法をあまねくなさん事は、聖賢の君出給ふともかなふべからず。今の時に當て、明君賢臣相逢て仁政を行ひ給ふ共、全く仏法をば退け給ふべからず。今の儒學者、道行はれば、仏法を破却せんといへるは不知なり。京大坂幾内の地、其外諸國をみるに、火葬をやめて葬るべき地なし。日本の人仏法を信じ火葬を安ずる事久し。これをやめて家禮の儒法をなす共、日本國中なべて行はゞ、土地材木共に盡べし。仏法にあづけたるよりはかへりて不仁にして不忍事出來べし。明君賢臣出給はゞ儒法を不用して、徳を以て治べし。神道仏道共に其まゝにて、ともに大道に歸する事あらん。今庶人は生る時の衣服食物だに不足者多し。家屋も風雨をふせぐにたらず。農人は農業のため、工商は渡世の爲にすれども、それだに用にかなひがたし。何のいとまあり有餘ありて葬祭の禮をおさめむや

問、氣運塞昧くして人多道理いかん

云、三皇五帝三王の代は、春のごとし。春の氣は溫にして悠々たり。鳥獸草木も靈なる物のみ生ず。多がごくなれどもみたず。秦の代より此かたは夏のごとし。夏の氣はむしたてゝあつし。過半は無用の物みち／＼て生ず。鳥獸魚草木の靈なるは、みだりにとらざるの制禁ありてだに、猶あまねく用ひがたし。夏の炎蒸の氣の生ずるものは、用なけれども人々是をかり殺し、ぬきすつるといへども不盡。くだ物も多くなりたる年は味ひうすし。少くなりたる年は風味よし。古は人すくなくて人あり。今は人多して人なし。氣運否塞によりて人の多事さこるべし。今の時に當て先王の徳かくれ、道をとろへぬ。道徳を興起せずして法のみ行はゞ立亦たかるべし。道おとろえ人多き時に佛法あり。易簡にして大成害なし。これも又命なり。道德なき儒法の行はれむに

はまされり　問、しからば儒道は行はるべからざるか　云、儒道と云は德のおとろへたる名也。大道には名なし。天地の神道は時に中して行はれずと云所なし。たゞ天理の誠のみを立て、禮法を必とせず。自然の勢にまかせて可なり　問、神書にも槇を以て棺槨に作るとあり。火葬の事は見え侍らず。佛者も土葬をしゐて戒むるにもあらざれば不レ忍心ある者の葬はいかゞし侍らむや　云、神書に槇を棺槨に作るとあるも、上世人すくなく、材木澤山に、土地あまりありて、なりやすかりし時の事なり。今の時庶人の末々までも棺を用ひ、墓を築て葬をせん事は成がたき事なり。山中の民薪塩木をかりて農業にまじゆるものは三日の食なし。日傭を事とするものは、明日の食なし。かくのごときのもの幾万億といふ數あらじ。それよりまされるものは、庶人の中の身上なれども、一衣を買べきあたへなきもの多し。米を食するはまれなり。かくのごときものには、上より葬の財用をくだし給はらでは成べからず。限なき事なれば今の勢にては叶がたかるべし。若道行はれ用節せられて、財用を給はる共、所によりて二十年三十年の間には葬の土地なかるべし。たとひ土地は國により遠所をもとめ、上のちからを加へて、百年のはかりごとをなさしめ給ふとも、山林の勢力つゞくべからざれば、材用たゆべし。成がたき大難三あり。日本は近世人多く土地せばきが故に、近比まで寺なりし所も屋敷と成、畑と成もの多し。いはんや百年の内には、人もうつりかはりて墓所とも不知なり、いにしへ念を入て葬たるものは、堀出されて後のうれひあり。もろこしのいにしへは、厚を以て情を安じ、日本の今は薄きを以て情を安ずる道理なり。たとひ富有なる人なりとも、五七年血氣の臭ある間に土に近付ずば、臭氣たえて後は、はやく土に合して理の本然にかなふを以て、孝子の情をやぶるべからず　貧なるものはむしろを用ひて、首

足のかたちをおさめて葬らば可なり　問、富るものは棺を用ひ、貧きものはむしろを用ひば、親に孝をするも貧にしては成がたき恨あらむか　云、理をしらしむべし、生る時の飲食衣服家屋器物等に至まで、富貴貧賤命有なり。恨べからず。いはんや死はむなしきからなり。土に合するは理なり。しばらくおほふは孝子の情なり。棺とむしろと何ぞわかたん。或は情を安じ、或は理に安ずべきのみ。其上所の奉行人の意得を以ても、二三年の形をおほふべき程の事は成べき事なり　問、近年儒法とて執行ふを見侍れば、大かた祭祀の事也。もつとも葬禮も家禮の法により侍れ共、死を送るの事ばかりなり。喪の作法は十が一二も見侍らず。祭の作法は略義ながらも大かたし侍り。儒法を用るほどならば喪祭ともに牛角に用ひ度事なり。一方用ひて一方かかむよりは、二ながらなきぞよく侍らん。祭はなし易く、喪には居がたき故なるべし　云、是も又日本の水土なり。日本は則文字にも日の本とかきて陽國なり。小國なるは陽のわかきなり。故に此國の人は悦び多して哀び少し。祭は吉禮にして悦也。故に日本の人これを好めり。いにしへも祭禮のみ精しかりしゆへに、今にのこりてあるは祭祀なり。葬禮も有たれ共、大かたの事なるゆへに、仏法にうつりて絶たり。神職に精きもの、たま〳〵しれるもあれど、古今時異なれば全からず。葬禮は凶禮なり。日本の人の氣質に不得手なる所なり。天竺は月氏國といひて、西のはてなり。月のはじめてあらはるゝ所也。陰國なるゆへに哀び多して悦び少し。故に禮も死を送るの葬禮に精し。教を立るも、無常をいひて、憂ひ多き所より惡をやめ、善をなさしめんとす。日本に葬禮のたしかならざるごとく、佛法に祭の吉禮は見えず。祭禮のごとくなるも年期月期とて皆とぶらひの体なり。故に其聲に憂あり。西戎の精きを持來て、日本の粗なるに加へたれば、みな仏者の禮に成

て粗はなく成ぬ。もろこしは東西の中なるゆへに、悦樂哀戚ともにかねたり。是故に喪祭の禮ならび行はる。仏法のとぶらひは神國の祭法にあらず。日本の今の祭祀は大社か、生所神（ウブスナ）などばかりにて、人々の親先祖には用ひがたし。此故に祭禮に志ある人は、儒の神道を悦てこれをとれり。然れどももろこしの法はとけて用ひがたかるべき所あり。日本の水土人情によりてあまねく用ひて久しかるべき祭法あらん。後の君子を待而已　問、後の君子を待てなすべきは又後の人なり。今日自分に用べき事はいかゞし侍らんや　云、物の初は誠あまり有て、禮たらざるをよしとす。大古は春秋に祭たり。夏冬を加へたるは中古よりの事也。今の時士民ともに事しげく、いとまなく用たらず、氣力うすし。しば〳〵する時は、誠敬盡しがたし。春秋ご期日ごに祭て可なり　問、或は公用なごしげくて、三日の潔齋なりがたきものあり。又病氣老衰にてたへがたきものあり。不レ祭も心よからず、祭にうなも不敬なり。かくのごき者はいかゞし侍らむや　云、日本の神道には一夜神事と云とあり。公用なごにいとまなき人か、病者老衰の人、無氣力の人これを用て可なり。去ながら春秋の祭は、親先祖を五行の神明に配して祭となれば、たとひ沐浴し衣服を改めなどする事こそ、一夜神事を用るとも、五辛を食せざるのたぐひ、神をけがすべき事をば、三日前よりいみつゝしむべし　問、寒氣の節酒を禁ずるによりて、寒にあてられ、病氣をもよほし、めいわくするものあり。三日の潔齋に甚くるしめるものあり。酒をいましめらるゝ道理はいかゞ　云、これも主意ありての事なり。ひたすらに仏者の飲酒戒の樣にいましむる事にはあらず。寒氣をふせぐばかりに用る事は何かくるしかるべき。祭の前に厚味の物、并に酒をいむ事は、相火をたすけ、心をふすべ、或は精氣をまして情欲の發すべき事を用心する也。或は病氣老

喪の人に肉を用ひ、或は寒氣をふせぐばかりに過ざるほど酒を飲事は、的當のくすりを用る也。一偏に成べき道理なき義なり　問、期日に肉食せざる事は何ぞや　云、期日は終身の喪なり。何事も樂にあづからず　故に飲食に味を調へず。干物しほ物のかろきはくるしからず。精進物にてもあぶら物などの厚味の物は好まず　期日はをやをしたしみ祭によりて、前一日の潔齋なり。春秋は親を尊びまつる故に、前三日の潔齋なり。是も又後の法なり。上世孝子孝孫の祭を初めし時は、此數なし。春の花を見、鳥の聲を聞、秋の風身にしみ、虫の音心に感じて、日月のうつり行事を思ひ、親先祖を思ふ事切なり。これによつて、俄に潔齋してまつれり。此時は大かた一夜神事なるべし。期日の祭は年に一度の日月なれば、兼て思ひまうけての事也　問、四時さへむかしは春秋ばかりとうけたまはるに、朔望の拜はいかゞ　云、朔望は親先祖の所へ禮に行道理なれば、潔齋はなし。君朝へ出仕する道理と同じ。たとひ時物などを神前に奉ずるも、備て不レ祭の義なり。春秋の祭は、親先祖の神と交る故に潔齋する也　問、期日の祭は上古はなき事也。中古よりの事也といへり。いかゞ　云、此理至極せり。父母死して三年の間の祭は凶禮なり。三年過ては吉禮に變ず。神道の理過たる凶禮をまた引出して、終身の喪有べからず。期日の祭は厚き事はあつけれども、理には不レ叶。しかれどもおこりし期日の祭を今やむべきにあらず。後世神道盛に行はれて、人皆祭祀に誠敬を盡す時あらばをのづからやむべし。今やめては人情うすくなる事あらん。止るもおこすも時あるべし　問、氣運衰て人の氣力よはく、財用乏く事しげく、情うすき事はさも有べし。もろこしにて地せばき憂をいひたる事をきかず。日本のやうにはなきかと覺へ侍り。田地を一年置二年置て作侍る事をきけば、地ひろき國と聞え侍り　云、運氣にて人の生ずる

事おほきとは四海同じといへ共、漢の代にあまりに國をひろくこりたるゆへに、戎狄の難多く、毎度戦陣にして人の死する事おびたゞし。この故に否塞の運に當るといへども、人多地せばき憂はなきやらん。葬の地にめいわくしたる一事をきかず。あれども其書を見ざるにや　問、人多死せずば、中國も葬の地なかるべきか　云、時に中する中興の明王出給はゞ、治世久しく戦死なくとも地せばき事は有べからず。人道の正き感によりて、天地の氣も清明なれば、春の運氣にかへりて、次第に人もすくなく生れてよき人出べし　問、火葬躰の易簡を仏法の徳と承ゆへども、それよりは地獄極樂の說にておどして、愚人の悪をするをふせぐ益すくなからず。これなくては今時の俗をすくふ事かたかるべきか　云、せめてさあらば可ならん。今の佛者は悪人をますものなり。凡人は小悪こそなり、小悪は大悪人となるものあり。いかんとなれば極重悪人無他方便。唯稱彌陀得生極樂の經文を引て云、主親を殺したる悪人にても、念仏の功力にて成佛うたがひなし。善行を修し戒を持は、却て難行なり。地獄に落べしといひ、われ／＼ごとき愚痴の凡夫、學文修行忍辱の善行はならぬものなれば、其儘に如来の方便にて、一念の念仏にて極樂へすくひとり給ふと云、一向宗是に同じ。日蓮宗も念仏か題目のかはりばかりにて、善をやめ悪を救る事は同じ。是悪人のゆるしを出すなり。そのまゝにてをけば、人々天性の良心ありて、悪をはぢ不義をにくむの良知あれば、悪人といはれては一命をもすつるものなり。しかるにわれ／＼ごときは悪をするはづとゆるして、恥心を亡す事は是非に事ならずや。其外諸宗共に品こそかはれ、同前なり。極重悪人とは、悪をするものにあらじ。くだ物にても何にても、物のくづを惡きといふごとく、人くづにて愚痴無知なれば、道理をいひきかせては得心せず。せめて念仏より外、他の方便なしと

なるべし。極重惡人（又は）とは、惡逆無道の者の事にはあらじ。至極愚痴なる者との事なるべし。西戎ゆへ言葉局なるか、たゞしほんやくのとき、文字をあやまるかなるべし。文字になづまず意をむかへて説べし。釋迦惡をやめ、善をすゝむるの主意をむかふるときは、今を仏者の説のごとくにてはなきはづ也。禪宗はさとりだにすれば、何をしてもくるしからずとゆるし、民の困窮するは、前世の因果なり。これをすくふは、因果をはたさせず。なるほどせめせたげてはたするが慈悲なりといふ、何ぞ祖師の主意ならん。其身たんな共（と）に民をしへたげて、富貴ならむとするなるべし。天台眞言はかへりて罪うすし。しかれども我慢邪知をたくはふる事をしらず。いのりきたうとて、自他の功利の心をますのみ。功利を長ずるは惡のみなもとをますなり。それ極重惡人となるものは、愚痴無知の生付にはあらず。才知平人にすぐれて非をかざり、過をとげ人をあなどるもの、大惡人とはなるものなり。さやうのもの念佛どきのまだるき、愚なる事を信ずるものにてはなし。愚痴蒙昧のものは、大惡をする才力はなし。故に佛説の極重惡人は、愚蒙の人くづなる事をしるなり。聖賢の御代にはかくのごとくの極重惡人も、德化にてしらずしらず平人の善にいたるものなり。天性の恥心を興起して、みづからはぢて惡をばせざるものなり

集義外書卷十六終

寛永六年己丑五月吉日

三條通烏丸東へ入ル町

帝都書肆（○以下初刷本ニテ補フ）　森島吉兵衛

堀川通佛光寺下ル町

同　河南喜兵衛

女御子草
如本御女
子ニ作ル

頭書絵抄 二十四孝小解

了芥熊澤先生著

全

（○虞舜）

虞舜は野人の子也。歴山に耕せり。いときなき時母にをくれ繼母かたましく、父かたくなに、弟おごれり。舜田に往て耕し給へば、象來て耕す。芸給へば鳥くだりて芸る。誠孝天地を動し、鬼神を感ぜしむ。帝堯きこしめして賓客の禮を以て九男の御子に馳走を命じ、女御子娥皇女英をくだして舜の婦妻とし給ひ、つねに天下をゆづり給ふ

大舜力を勞し心を盡して仕へ給へ共、父母共に悦びず。田にゆき不孝の罪を天に仰てなげき給へり。内外のつとめ形氣の數に過るを以て天、象鳥に命じて其勞にかはらしむ。父母弟力を合せて殺さむとす、さけず、おちいらず、出人神のごし。帝堯きこしめして聖德なるを知給ふ。始は賓客とし、中比攝政を命じ、終に寶位をさづけ給へり

漢の文帝は高祖第三の子也。諸侯に封ぜられて代王と号す。諸臣其仁賢を知てむかへて帝位をさづく。生母は高祖の側室也。文帝天下を知給て後薄太后とす。帝母に事て至孝也。薄太后病こと三年。帝安を忘れて帯をとかず、ねむりを忘れていぬることをせず。湯藥みづからこゝろみざればすゝめず。久しておこたらず。仁孝天下に聞ふ

漢朝は高祖にはじむといへども、四百年の基本は文帝の孝に根させり。夫孝は生々の至實也。宇宙ありてより此かた、日として生ぜずといふことなし。天地生々の德これを受て性命とす。萬物皆しかり。唯人は五行の精靈を得て明

に　草加本をニ作ル

心　草加本むねニ作ル

年ノ下草加本にしてアリ

徳あり。萬物にすぐれたる處なり。明徳の感通孝より先なるはなし

周の曾子名は參、字は子輿、大賢也。孔門道統の宗也。親につかへて至孝也。ある時山林に入て薪をとる。家に客來れり。母參を思ふて指をかむ。曾子たちまち心胷いたみぬ。母の我に求るヿを知て、いそぎ歸て其故を問。母の云、急客あり、吾指をかんでなんぢをさとす

人天地の中に居て一氣流通す。故に寒暑身に應ず。唯煩熱の人寒をわすれ、瘧疾の人暑をしらず。私欲の一体をへだつるヿ熱病瘧疾の寒暑を通ぜざるがごとし。況や親子は骨肉をわけ、氣をつらねて一体の情身に切也。この故に母ゆびをかめば、子の心忽痛めり。母子呼吸相通ず。孝子の情至れり

周の閔子名は損、字は子騫、賢人也。はやく母にをくれたり。父後妻をめとりて二子を生ず。實子の衣服には綿をいれてあたゝかにし、損には芦の花をわたにかへてきす。若年寒にたえがたし。父車をひかしむるにおぼえず索をおとせり。父其身のかじけたる故を察して、繼母を出さんとす。損これを聞て哀で云、母いまさばわれひとりさむからん、いまさずば三子共により處なからん、と。繼母聞て悔改む

芦のほを綿とするは貧者の服也。成人の者は心を用て寒をふせぐべし。幼少の人は甚寒にたゑがたし。夫己につらき者の悪行あらはれ、所を失ふは凡情の悦なり。閔子騫はこれを恨みず、繼母去ば二弟のさむからんヿを思ひて、父

裀草加本裀

紗羅草加本縠トス
黒、草加本墨ニ作ル

のいかりをなだむ。終に繼母の姦を變じて慈母とす。其孝の至れるのみならず、知も又大なり。孔門三千の中にて顔子閔子と稱せられし事尤なり

周の仲由、字は子路、孔門の高弟也。家貧して常の産なし。藜藿の食を食す。親あるがゆへに百里の外に米を負てあたひを取り、父母の養とす。親沒して後南の方楚國につかふ。從車百乘あり。粟を積こと萬鍾なり。•裀をかさねて坐し、鼎をつらねて食す。なげいて云、親の爲に米を負、麁飯を食せんと思え共かなはず

子路は勇心强力の人なり。貧賤に生れて勇力ある者は、多はその强を用るところ無道なるもの也。しかるに子路は其力を父母の孝養に用たり。たゞ力のみならず、人みな天質の得たる處あり。これを人欲のために不レ用して、忠孝の事に用ひなば、天下は不レ治に平かなるべし。子路のごときは万歲の師とすべし

漢の董永は家きはめて貧し。父死して葬べき物なし。富家に身を賣て錢をかり、葬禮をいとなめり。かくて主家にゆきやつことならんとす。途中に一婦人に逢、みづから永が妻たらんといひて、ともに其家にいたれり。•紗羅を織て文を•黒こと一月に三百疋也。かりし錢をつくのふに及べり。主家おどろきてゆるせり。歸時にはじめ相逢所に至て、婦人永を辭して去

生る時は身のいとなむ處全く親に奉じて妻子なし。死する時は身をうり、一生を親になげうちて葬をなせり。死生

剡　底本「たん」ト傳訓セルヲ草加本「エン」と訂セリ

革ノ下草加本一字「翁」は次アリ

うつり　草加本かへりニ作レル

共に我身を有せずして親の物とす。至誠天に感ず。神女来て其身をたすけ、やつこたるの難をまぬかれしむ。終身不測の富、仙姫と夫婦たる事古今董永一人也

周の剡子、生質篤孝なり。父母老てともに眼病あり。鹿の乳を得て食せん事をねがへり。まことに得がたき物なり。然共これを得ば父母の眼疾いゆべし、得ずばいへざらんことをかなしみて、鹿の皮を衣て深山にゆき、鹿のむれに入て鹿乳を得て親に供す。獵者鹿と思ひて弓をとる。剡子起てそのゆへを告

鹿の皮を衣て、鹿群にまじはる人は、遠く望てあやまるとも、鹿近して何ぞまがはんや。しかれども孝感の至神を動す。このゆへに鹿もさけずして乳をあたふ。至誠得がたきことを分別せず、小知のおよばざる處なり

後漢の江革いときなき時父を失ふ。ひとり母と相依れり。長ずるに及てます〳〵孝行也。乱に逢ひ母を負て難をのがる。途中盜賊多し。革をおびやかし。たづさへ去んとす。老母あることを告て泣。賊といへども殺すにしのびずしてゆるせり。下邳といふ所にうつりおれり。母子一物なし。人の爲にひようをとりて母を養へり。得る處の物皆母の衣食となして私用なし

江革身の難を忘れて母のより所なからんことをかなしみ、母にはなれんことをなげけり。慈母の子をふところにして全体の精神赤子にあるがごとし。親の子を思ふは和應なれば、人皆つとめずしてよくす。子の親につかふるは、敵應

なるが故に孩提の恩に報ずる者すくなし

二枚草加本三枚ニ作ル

後漢の陸績、字は公紀、年六歳の時九江の袁術に見ゆ。袁術橘を出して兒の前におく。績橘二枚を懷中す。歸るに及て拜する時、地におちぬ。袁術云、陸郎賓客となりてくだ物をふところにするや、と。績ひざまづいて答て云、吾母のこのむ物なれば、歸て送らんとす。術大に奇なりとす

六歳の兒みづから食することを忘れて、母の性の愛する事を思ふ。かくすにあらざればおさむるに心なくして地に落ぬ。貴人いさむといへども、心に恥る處なき故に赤面に及ばず。至誠大人を感ぜしむ。天性教をまたず。禮を失するがごとくなれども禮の本存せり

唐の崔山南が父の母唐夫人、姑につかへて至孝なり。姑は長孫夫人也。年高して齒なし。唐夫人毎日髪をおさめ身をきよめ、堂に升りて其姑に乳をのましむ。姑粒食せざる事數年なれ共堅固也。一日長孫夫人終命の病あり。長幼皆あつまる時に云、言葉にのべてよめの恩を報ずることなし。たゞ子孫の婦たる人、新婦の孝敬のごとくならん事を願のみ

し草加本ナシ

老大の姑に乳を飲しめ、姑もまた辭せずしてよめの乳をのむこと、常の人情を以てみれば共に心もおこりがたき事也。唐夫人姑の老衰を見ること兒のごとし。常の食を食しがたきを見て、至誠に乳を飲しむ。姑も其仁孝に感じて辭せず。老てふたゝび兒となるの言は、此姑婦にはじまるといふとも可也。凡情の及ばん處にあらず

しこづる　草加本ソシルと傍訓す周南（八頁）の解にシコズと傍訓せり

晋の呉猛、年八歳、親につかへて純孝也。家貧ければ夏の夜といへども蚊をふせぐべき帷帳なし。夜蚊おほく肌膚にあつまりて、膏血を嘬ふ。呉猛親のかたはらにいねてこれを不レ驅。己をくらはすは、去て親の身にあつまらんことを恐れて也

よの常の人は親の勞にかはる事だに中心悅でなす者はまれ也。つとめてつかふるをよしとす。蚊の身をさすは慈母の愛といふとも先はらふべし。しかるを我身にあつめて親の所にゆかしめざらんとす。八歳ははじめて小學に入といへども、父母兄長に事るの容儀を習のみ。たとへ書を讀もいまだ義理に通ずべからず。天性の聰明、教をまたざるの良知良能、呉猛におゐて知べし

晋の王祥、字は休徵。はやく母を失り。繼母朱氏慈あらず、父の前に祥が不孝をいひて、譖をたびかさなれり。これによりて愛を父に失ひ、天性の恩にそむけり。母生魚を食せん事を思ふ。時に天寒して氷あつし。求るにたよりなし。祥衣をぬぎ氷に臥す。氷忽とけて双鯉躍出づ。とりて歸て母に供す。朱氏が思を慰て祥が心もまた安し嚴寒の厚き氷は人ふみてだに落いらず。衣をぬげば身先こゞえぬ。氷にふすとも何ぞ解べき。氷をのづから解て鯉出。至誠天地を動す、孝感のいたす處也、今に至て河水の上一片氷に臥すのかたち生ず、と晋の王祥天下の一人あり。如此の孝子をだに、繼母不孝の事をあげて譏すれば、父といへどもこれを信ず。君子の譏を恐るゝ處なり。曾

（三〇）

漢草加本後漢ニ作ル
賜ノ下草加本孝子ノ二字アリ
とる、奪草加本前後ス
あ草加本なニ作ル
搤草加本ニキルと訓ぜり

子の賢と母の情あるも三たびすればおどろく。後人何ぞ思はざるや

漢の郭巨は貧者なり。三歳孩笑の児あり。巨が母この孫を愛して、みづからの食をわかち與ふ。郭巨妻に告て云、貧乏なれば母に供する事思ふにかなはず、子又母の食を減ず、此子を埋んにはしかじとて、坑を掘こと三尺に及て、黄金一釜を得たり。上に記して云、天賜ニ郭巨ニと、奉行とる事あたはず、民奪とを得ず

祖父母の孫を愛して食をわかつは常の事也。たいてい凡心は幼なる時は父母をしたひ、長じては妻子を愛す。父母を思ふ事日々にうすし。しかるに郭巨は親の養に害あるが爲に、三歳の児を土に埋んとす。幼少の時父母をしたひて、天下にかふべき物なきの心を不レ失。妻又同心同徳にしてそむかず。天下この夫婦のみあり。故に天も古今又なきたまものあり。釜は量の名、六斗四升也

晋の楊香、年十四歳の時、父にしたがひて田にゆく。父の豐粟を穫ば香これをおさむ。常に力に應じて父の身を助く。時に虎出來て父を取て曳去。楊香身幼弱にして又手に鐵器なしといへども、たゞ父あるとを知て身ある事を不レ知。おどつてむかひすゝみ、双手にて虎の頸を搤る。虎もおぼえず嚼をすて香をはなれて去。父子共に害をまぬかれたり

楊香みづからのよはき事をはからざれば、虎も勇猛をわすれて去。孝感天地神明を動す。古今武勇のほまれある人といへども、或は勇力をたのみ、或は利刀弓矢をたのみ、或は知謀をたのみ、或は身方をたのめば也。楊香はすべ

てたのむべき事一もなし。至愛に出たる大勇也。仁者は必ず勇ありと、まことなる哉

宗の朱壽昌は妾の子なり。父の正室を母とす。七歳の時正室壽昌が母を他方に出し嫁す。相不レ知こと五十年也。神宗の時に官祿をすて、秦の地に入て生母劉氏を尋ぬ。母を見ずば不レ歸とちかふ。終に逢ことを得たり。時に母の年七十餘也

朱壽昌は我朝のいにしへならば公家のごとし。武家の代にははた本のれき／＼に同じ。家人をつかはしたづねてやまざるとは人もなすべし。みづから官祿を去てたづぬるの至情、世人これをかたしとす

南齊の庾黔婁づかへて孱陵を治む。令となりていまだ十日ならざるに、父の病發するの日時俄に心おどろき身汗をながす。官をすてゝすみやかに家に歸る。醫の云、病の輕重をしらんと思はゞ糞を嘗て苦きは可也。黔婁これを嘗て甜し。心はなはだ憂て、身を以てかはらん事をいのる。父終に死たり

遠方にして病を告る者いまだいたらざるに、はやく父の病の發するを知て、奉行職を辭し、官祿をすつることやぶれたるわらぐつのごとくにして、すみやかに古郷に歸れり。糞をなめ死にかはらんと願ふは孝心の至り、人情のかたんずる處也

時ノ下草加本はアリ

漢草加本後漢トス

順ノ下草加本字は君仲アリ

三草加本二ニ作ル

は草加本ナシ

周の老萊子は至孝のきこえあり。二親に奉養すると其甘爽をきはむ。行年七十歳にして老たるとをいはず、父母の在が爲なり。家に居る時は身に五色のはなやかなる衣を着し、嬰兒のたはむれを親のかたはらになせり。ある•時いつはりてつまづきたふれて、嬰兒の啼をなす。双親口をひらいて笑ふ。春風彩衣を動かし、喜色門内にみてり

老萊子父母在ストキハ言不レ稱レ老の禮を學ぶのみにあらず。双親子の老を見て心に感慨おこらん事を思ふ。この故に五色の衣、嬰兒の戯をなせり。是一日の狂言に非ず。平生父母をしたふ事三歳の時に異ならず。父母の見る心も又孩提のむかしを改めず。大躰の凡情は親に向ては貞心恭敬の氣象あり。妻子朋友にはたはぶれを云り。ひとり老萊子は常人に異なり。父母に順なる者か

•漢の蔡•順幼少の時父を失ひて孤となる、ひとり母に事て至孝なり。時に王莽が乱に逢ぬ。年も又凶荒なれば、母に供給すべき物なし。桑のみをとるに器を二にしてこれを盛る。赤眉賊見て怪で其故を問ふ。順が云、黒きものは母に奉す、赤きものはみづから食す。賊其孝をあはれみて白米•三斗、牛蹄一隻を與ふ

桑のみの黒きものは味甘く、赤きものは味酸し。はかたきくだ物といへども至味を母に供す。全体の精神親の上にありて、みづから味を好むことをわする。此一事にをゐて他の常を知る。賊といへども父母あり、妻子あり。孝慈にあらざれば立がたし。本心の發見亡る事なし。故に其誠を感ず。有道の代に生れては•不義をなすべき者に非ず。中人の質は習ところを性とす。後人何ぞ恐れざらんや

漢草原本後漢ニ作ル

漢草加本後漢ニ作ル

後漢の黄香、字は文彊。年九歳の時母を失ふ。思慕してやせます。里人其孝を稱す。父に事て至孝也。夏天炎暑の夕には父の枕とむしろとを扇ぎ涼しくし、冬月寒天の夜には身を以てしきねの床をあたゝむ。其他のつとめをしるべし。太守劉護奇なりとして其孝を表はす

九歳の童子躬勤苦を執て、子たるの職を盡すことを知る。教學のいたす處に非ず。母を念て父を痛めり。此日ふたゝび得ず。親ゆきてかへらず。孝子は日を愛す。唯この孝事從容として禮にあたる。天質の美也

漢の姜詩、母に事て至孝也。妻の龐氏、姑に奉ずること恭謹なり。母好て江水を飲めり。龐氏出て遠く江中の水を汲て姑にすゝむ。勤勞をはゞからずして順從す。又魚の膾を嗜めり。姜詩常に生魚を求め膾に作る。母また隣母を召で共に食す。舍のかたはらに忽甘泉出づ。味江水のごとし。日に双鯉躍る

姜詩みづから母に孝なるのみならず、妻にも仁にして誠あり。此故によく夫の志にしたがひて姑に孝也。夫婦家業をつとめて衣食をなすは、貧にしていとまなき身也。しかるに遠く江水を汲、生魚を求む。母は厳にして心なき者なるべし。隣母までをよび、みづからひとりなぐさみて、子婦の勞をかへりみず。夫婦共にいとふ心なく、母のたのしみを悦とす。至誠天地を動かし、江水鯉魚、屋のかたはらに生ず。古今此夫婦のみなり

裒ノ下草加本「字ハ偉元」一アリ
奔草加本到ニ作ル

魏の王裒、親に事て純孝也。母存日、雷聲を怕る。すでに沒して山林の間に葬る。雷聲を聞ごとに疾風猛雨といへども墓所に奔て拜跪し、泣て告て云、裒こゝにあり、おそるゝ事なかれと。其心母を死せりとせず。父は司馬昭が爲に殺さる。後晋天下を一統す。王裒終身西に向て坐せず。晋に臣たらざるの義也

震は乾坤の長男也。春夏の時を得て聲を發す。これを雷とす。人は雷聲を聞て氣血流通し、病滯を消す。萬物は雷聲によつて沈滯を散じて長盛す。雷よくふるはざる時は五穀豐年ならず、虫氣作物をからす。此理を知人は愛すべくして怕るべからず。王偉元母に怕るべからざるの理をさとさゞるか、教てもさとらざるか知べからず。孝心死生をへだてず

漢の丁蘭幼少の時父母共に失て孤也。奉養することを得ざれば、父母の我を生して劬勞せし恩をおもふとます〱切也。思慕の餘に二親の像をきざみ、これに事ると生るがごとし。其妻久して不敬なり。たはむれに針を以て其指をさせば血流出。木像蘭を見て眼中涙たれり。蘭その實を知て妻を去

丁蘭懷哺養育の恩を報ぜざる事を恨、二親の木像を堂上に列し、朝夕生る親の奉養をなせり。木像を主としてみづから終に家主の座におらず。蘭は木像たることを忘れて生に事るがごとし。妻は木を以て見るが故に此たはぶれをなす。尤像は枯たる木なれども、蘭が孝行生るにたがはず。故に生る人の應あり。信の歸する處には神よれり

性草加本ナシ

晋の孟宗、字は恭武、いときなきほどに父にをくれて孤なり。母老て疾篤し。冬月笋のあつ物を食せんことを願ふ。人力の及べきにあらざれば、竹林に往て竹を抱て泣く。孝天地を感じ須臾に地裂て竹の子數莖出たり。持し歸りてあつ物となして母に奉す。食しおはりて疾愈

天の物をなす春生じ夏長じ秋收め冬藏す。冬の閉藏の時に當て、盛夏四五月の笋を思ふとも、いかで得べき。宗常に意に先だち旨をこひ、親の願としてしたがはずといふ事なし。笋の得べき得べからざるをはかるにいとまなし。無心にして竹林にゆく、嚴寒に笋生じ、孝感の神物良藥となれり。神明不測の理也

宋の黃庭堅、山谷と号す。元祐中に太史の官となる。●性篤孝なり。身富貴なれども母に事て其誠を盡せり。每夕母の溺器を洗ひ、婢妾の事をみづからなせり。榮顯を以て孝性を移さず

それ人卑賤の事に習者は士君子の業をなしがたし。身富貴なる人は小人のわざを手づからせず。其にならはぬ事をよくする者は德なり。山谷富貴にして臣妾多しといへども、老母に事てみづから至情を盡す、天性の德にして、勉强の及ところにあらず

大舜は性命の父母につかへ給へり。大孝とする處なり。父母の舜を殺さんとする者は其本心に非ず。象が殺し得たりと悅ぶものも後來のまどひなり。舜の生ておはするを見て心におどろき、君を思ふといひしは過を文り慝を掩ふ

ゝ章加本 が二作ル

悪人の常態なり。然どもいまだ一點の靈明不レ亡が故に、兄を愛するの義をしる也。この故に舜其靈所あるとを悦び給へり。唯自己一團の天理のみにして、一毫の私己なきがゆへに、その性命を父母とし、弟として、後來の姦悪を見とゞめ給はず。悪をかくして善をあぐるの至なり。或問、烝々（ぜうぜうとして）乂（おさめて）不レ格レ姦。此意は舜身を脩め善を行て、父母弟を薫烝して心に恥あらしめ、姦悪をとげしめざるとの義か。云、舜何ぞ心ありて父母弟の悪を見て、これをおさゑんが爲に薫烝して姦にいたらざらしむる事をし給はんや。もししからば其悪性に激して化する事あたはじ。父母弟の姦悪を見とがめ給ふ心は少もなし。薫烝するといふは他より見る處なり。子たるの孝を盡し、兄たるの愛を盡し、雞鳴ておき、終日善をなし、徳を養ひ、身をおさめて父母弟の姦悪をとがめ給はず、たゞし給はざれども、是を薫烝して刑罰に落入の大悪をなさしめ給はず、とわきより見る處のしるしなり。舜に此意あるにあらず。もし舜姦を見てたゞしふせぐの心あらば、舜とするにたらず。むかし陽明子の郷に父子訟る者あり。陽明子これをにくます、おしへて云、舜はこれ世間大不孝の子、瞽瞍はこれ世間大慈愛の父也。舜はみづから大不孝の身と思へり。故によく孝也。瞽瞍はみづから大慈愛にして、赤子より如レ此養育し、成長せしむ。今我心に不レ叶は不孝の子なりと思ひて、後妻の爲にうつさるゝとを不レ知、この故に不慈なりと。訟者父子手を相とり泣て去。又云、人生の大病は一の傲の字也。子として傲れば不孝也。臣として傲れば不忠也。父として傲れば不慈也。君として傲れば不仁也。友として傲れば不信也。いにしへの聖賢諸の好人の名譽をなせる處は、たゞ一の無我なり、我あれば則傲也。我なければ謙なり。謙は万善の基、百福の歸する處なり。傲は衆悪の魁、禍災の源也。舜の大孝大知一の無我より大徳をなせるも

ん、ノ下草加本とアリ

知草加本ぬニ作ル誤カ

傚草加本ナシ

の也。問、孝經ニ云、父ニ有ニ爭子一則身不レ陷ニ於不義一。如レ此なる時は非あればこれをみる。これを見ればいさむ。しかるに姦を不レ見、不レ格とはいかん。云、悪をかくして善をあぐるは、たゞし給はされ共、無心自然の爭也。今もよく相叶たる父子兄弟は、常のごとにこれはよからん、それはあしからんの相談あり。各の異見多し。和すれば其よきにしたがふなり。師弟朋友君臣皆しかり。これ爭多によりて其和をしり、たがひに非を見ざる事を知也。父母弟は不和といへども舜は孩提の時の和を不レ失。父母弟の鄕人にうとまれぬべく、刑罰におち入べきやうなる悪をなす時は、もと如レ此人に非ず。一旦の心得ちがひとおぼして、常の人の思ひよりをいふごとく、かくては如レ此との給なるべし。其我を殺さんとするをも知給はざるにはあらず、何の姦悪かこれにまさらん。しかれども父の本心如レ此ならず、我赤子孩提より養育せられて成長せしもの也。今我を不レ悅者は、我不孝となげき給なり。終に頑嚚懷を化して常に歸する處なり。董永・王祥・郭巨・孟宗の篤孝のごとき天下各一人也。平人凡情の及ばむ處に非ず。至誠天に感じて、天下古今二つなき神應あり。孝子の至情をつくせる處にをゐては、いふべきやうなし。しかれども父母にをゐては或は情欲の父母につかへ、或は口体の父母を奉養するに過ず。故に天應も又神女をあたへ、厚氷をとかしめ、魚をおどらしめ、金をたまひ、寒筍を生じ給のみ。大舜にをゐては德聖人たり、尊天子たり、富四海をたもち、壽百有餘歳子孫万々歳の大福をたまふ。明君の諸臣を下知し給ふも如レ此。一事〳〵の奉公をぬきんする者には、そのほど〳〵の賞祿をたまひ、才德衆にこえたる者には、高官大祿を命ぜらるゝことはり也。たとへば百歩の外に射が如し。舜の孝は黒星に當るがごとし。他の孝子は的に當るがごとし。ふち矢までもゆかざる者の及處に非すと

いへども、日當とする者は黒星なり。故に後學の人は大舜を師とすべし。其天よりたまふ處のしるしを期すべからず。たゞ天然性命の父母を奉養して、後來の情欲を父母とせず。其非は目に見るべくとも、心にとがむべからず。惡のどきはをさへふせがずといへ共とぐるに至らざるの苦心至誠を學ぶべし。父母平人ならば好人となるべし。本より好人ならば親たり師たるべき也。問、董永何を以てか口体を奉養せし。云、喪祭は家の有無にしたがふべし。親の精神去て跡のむなしきからの爲に、子の一生を人のやつことなさんと、何ぞ親の心に心よからんや。此一事を以てみれば、先祖よりの田宅諸物ととどく親の奉養となし、みづからいとなむ處も皆親に供して、妻子なきなるべし。親の口体の爲に先祖の統を絶んとは、親をも又不孝の罪人になすなり。親を養ふも、家の有無にしたがひ、妻子ありて共に孝を盡し、葬も産をやぶらざるほどの分有べし。董永にをゐては天質の美也。神明を感動するの篤孝なればいふべきやうなし。其時所位の勢も後世よりは知がたし。のちの人の手本にはなりがたき事也。世間の人親の身を我身のごとく思ふ者あらば、大孝の聞へ有べし。董永は我身よりも親の身を愛せり。妻子は人の欲する處なり。しかれども親を養ふにさはり有と思へばひとりおれり。人のやつことなる事は人のにくむ處也。しかるを親の葬の爲に一生をやつこになげうつ、みな人情のなしがたき事にして大力量の人といふとも及がたき處なり。其志をば愛すべし、其事は學びがたし。問、王祥が後來の情欲の父母に事るとはいかん。云、繼母祥を不孝といひて、父に讒す。愛を父に失て天性の恩にそむけり。實にわれ不孝なるがゆへに如レ此と思ひて、繼母の責をうらみず、繼母は孝を欲するにあらず、かゑつて孝行をいみねたむといへども、祥は其非をとがめずして、生母よりもたゞ孝行なり。

故に母生魚を欲すれば此願を叶へざれば不孝たりと思ひて、其得がたきを分別せず、至誠にこれを求む。其志の篤實は美稱するにこと葉なし。神明の靈感をいたす處もなり。其志は愛すべく感ずべし。其事はならひがたし。嚴寒厚氷の時節の生魚は、富貴の人の夏秋よりたくはへおかん事はしらず、貧賤の者いかで俄に川澤に得べきや。もろこしの中國は海遠して海の生魚は天子諸侯といへども用給はず。たゞ川澤に求るのみ也。嚴寒には衣をかさねてだに火を用ひざれば居がたし。しかるをはだかにて厚氷に臥ば、大病を發すべし。此身祖父母より傳たり。親の口体の欲の爲に生々の本をそこなはゞ、親は不孝の罪人也。他人だに小慈心ある者は人のいたみをいたまずといふ事なし。父母の本心何ぞこゝろよからん。王祥にありては是非を論じがたし。後世の人これをよしとせば後來情欲の父母に事るに流ずべし。問、郭巨はいかん。云、一家の至味を調て親にすゝめ、夫婦は麁食を食するは子の志なり。親また孫を愛して食をわかつことをたのしむは、親の志なり。本心慈仁の發見によりてみづから口体の嗜欲をわするゝもの也。たゞ親の本心に順從して其志を養ひ、至味たらずば麁飯を供ずべきのみ。親の獨味のために、子を殺さば、親の本心大に痛むべし。この事をよしとするにあらず。しかれども全躰の精神親を愛敬するにありて、已をわすれ子をわする。妻又夫の心に順從してそむかず。天下古今衆人の及ばざる處なり。道理をしることは、學問による時は易し。郭巨が篤孝は老師大儒といへども、其十が一を得ともかたし。神明の靈感は其至誠純孝の心にありて事にあらず。學者も又その跡を學ずして、郭巨が親あることを知て、已と妻子あることを不レ知の孝をこいねがふべし。孟宗はいかん。云、冬月の生笋は天子大樹といふとも得ことを不レ能。雪中にぼたんの花を見んといふがごとし。たとひありとても

分章加本
黄ニ作ル
但誤カ

時ならざる物なれば食すべからず。無病の人なりとも愼むべし。況や病人をや。此願ひ道理にそむけり。性命の本
心にあらず。舜ならば求め給はじ。其時にあらざれば求むべからず、たとひありとても、食すべからざるの道理を
のべ給べし。孟宗平日其家に得がたき物をも親に奉じ、子弟のさいかくになりがたからむ物をも求め出して供ずれ
ば、其きどく常となりて、箏をも願たるなるべし。時ならざるの物は毒氣ありといへども、これは孝感の神物なれ
ば、良藥となりて病いゑたり。至誠無心の孝にして、天地を動かし、鬼神を感ぜしむるほどの事なれば、孟宗に在ては是
得たるの神助あるべし。至誠神を感ずる道理なれば、平生も人力の及がたき事共、孟宗の誠によりて不意に
非を論ずべからず。其跡を學ぶ時は性命の父母を失て、情欲に事るのあやまりあらんことをいふのみ。夫孝子とはい
ふべくして君子とはいふべからざるものあり。君子ならざるの孝子は、天下國家を治べからず。舜は父母弟大惡人
なるが故に、孝子の名あり。靈感あり。もし舜の父母を董永・王祥・郭巨・孟宗の父母のごとくならしめば、孝子の
聞えもなく、靈感も有べからず。君子の道德にして孝無事なるがゆへ也。他の聖賢に孝子の聞えなき處なり。問、
いかなるをか孝行の通用とすべき。云、其位々其分々に應じて家業を失はず、子孫を不レ亡。子の身善人と成て父母
の心を安ずるを通用とすべし。孝經の五等につまびらか也。小學などに記せる孝行は、もろこし上古の代の事也。
末代に通じがたく、日本にわたりがたし。いかんとなれば時勢人情大にかはれり。もろこしの上古は上質素に、下
ゆたかたりしかば、男女共に人のやつこととなりて出る者すくなし。この故に子と婦と、父母につかふべきより外人
なし。世のならはし無始より此かた如レ此ものと思へば、つとめてなせるに非ず。後世は上おごり下くるしめり。故

に親子兄弟離散して男女共に人のやつことなる者多し。父母共に分々相應に奴婢をつかひて、子婦をつかはず。此習久して常となれば、人皆如レ此ものと思へり。今俄に婢妾をしりぞけて、子婦をつかへしめんとする共、人情の習にて、父母子婦共に安ずべからず。又婢妾なき賤男賤女はみつぎもの多ければ、衣食たらず。晝夜の家業せは〳〵しく勞役すれば、父母につかふべきいとまなし。たとひ二三人の男女ありとても、其業のつとめあれば、私用にはつかひがたし。たゞ朝夕の心術、孝慈の本を不レ失して、一家和睦し父母順ならば、今の世の至孝なるべし。前漢の文帝宋の代の山谷どきは天質の美也。孝行の一事にをゐては生知安行なり。つとめてなせるにあらず。天子の身としてみづから母につかへ、富貴にして婢妾の事を手つからなせり。この人だにかくのごし、といひて下つかたの者のおこたりをはげますべし。不實にして跡をならはゞ、孝子の狂言をなさんことを恐る。至善を期して其爲によるべからず

此廿四孝は息游軒熊澤了芥先生の注釋なり、附錄に、ある人の問に答へて孝道至理を敎授し給ひたるを梓行して世にひろくせり

寶永庚寅冬　　小山知常誌

天保六年未初冬求版　　高麗橋壹町目　藤屋善七

詩經

周南之解　（〇表紙）

女子訓

周南

文王生ながら聖人也。后妃又聖女なり。其時いまだ周一國の主なりき。周の東は紂なり。柔なる者はその淫にうつり、強なる者は其悪に習へり。西は昆夷、北は玁狁（ゲンイン）也。皆ゑびす國なれば種類異也。道徳を不レ尊、禮樂を不レ知。たゞ南國のみ男は文王の化を被り、女は后妃の徳を聞て風俗美也

關々タル雎鳩ハ。在二河之洲一ニ。窈窕タル淑女ハ。君子ノ好逑（コキタグヒ）ナリ

我思ふ事をいはんとて先他の物をいふ。是レ興の詩の躰也。詩人文王后妃の事をいはんとて先雎鳩をいふ。雎鳩は水鳥也。河は北方流水の通名也、洲は水中にすなゝど出て小嶋のやうなる地也。關々は雄鳥雌鳥相應するの和聲也。

此相ゞ和せる聲の水鳥河の洲に有。此鳥天然別あり、雌雄の居ところ常に一丈ばかりをへだつ、他の鳥の雌雄よりも中よくして相なれず、夫婦の禮儀有がごとし。夫婦の能相和して永久なる者は賓主の如し、是を別ありといふ。如此いへば比の躰也のやうなれども、詩人の心はしからず。詩人は何心なく文王后妃の聖男聖女夫婦と成給ひし、其始中終をいはん爲にふと雎鳩をいひて、言をおこしたるなり。窈窕は幽深閑靜のかたち也。坤の德也。君子は文王をさす。文王の德は乾の至健なるが如し。至靜の德ある淑女よく配すべし。淑は善也。女は大姒いまだ父母にやしなはれ居給ふ時をさす。好逑は天下の至靜能天下の至健に配すべきをいふ也。詩人聖女を賛美して窈窕の二字を以てす、かぎりなき意味有。後世詩人の及がたき所也。先覺幽深而閑靜の四字を下す、唯その一端をいふのみ。幽深のかすかにふかきといふは、たとへばうちむかひたる人にも、さだかに見ゆまじきやうに、やうだひけだかく、物ふかく上らふしき躰也。閑靜としづかなるといふは、たとへ女しくをもりかに、なれあたどりがたく見ゆれども、又けはしき處なく、よく人を養育する慈愛の心のふかき事、地の萬物を生長するごとく也。淑の字萬善をふくめり。其ふくむ處の善わづかに左に見えたり。窈窕はやうだいより德を見る、淑は德より女容を見る。或問、人だにも聖男聖女はまれなるに、雎鳩の水鳥別道を得て文王と后妃とにも比すべきが如くなるは何ぞや。云、夫婦の別は知也。知は水神也。此水鳥は水氣を多く受て生ず、故に自然にしてしかり、たゞ是のみ也。他の事はみな鳥也。或問、大姒を聖女といへども道德の語も名言も聞えず。云、世間に聖女賢女といへば金言妙句もあらんやうに思へり。行儀高にすくみかへらんやうに思ふはあやまれり。何のわきまへもなき愚夫愚婦の目にも扨も女しく見事なる躰かなと

見ゆるが聖女也。言語に發明らしき事ばかりにもなき理也。女の物しりがほにさとしだてなるは見ぐるしき者也。にわとりのめどりの時をうとふ類也。道德禮儀の言の聞えざる處則聖女也。其心にはくらき事なく、又文字も有といへども自の爲ばかり也。時の人聖女と見たてたるは、唯やうだひの窈窕たるより其德其心をおしはかりて知れる也。文王の后妃になすべき人は此人の外に又天下に二人ともなし。故に君子の好逑といへる也

參差タル荇菜。左右流トルレ之。窈窕タル淑女。寤テモ寐テモ求レ之。求レテ之不レ得。寤テモ寐テモ思ヒ服ノ。悠ナル哉悠哉。輾轉反側ス

荇菜は根水底に生じて浮んで水面にあり、上ウヘ青く下シタ白し、いさぎよくやはらか也。祭に神にすゝむべし。故に流にうかむで取がたしといへども、ながれをよひで左右となく是をとる也。こゝに華國の女大姒窈窕の女德あり。その時文王いまだ周の國主也。大姒も又有華の女也。傍鄰の諸侯なれば、父母の心、諸臣の異見、親戚の思ひ人まち／＼なれば、たやすく調ひがたし。是以宮人宮女たる人々晝は其才覺をなし、夜はその思慮をめぐらし、求めてやまざる也。中間事滯りて得がたき時は、寐てもねられず。輾は寐ぐるしく身を半ゆるぐ也、轉はふしまろびめぐる也。反側はいねかへり過て留る也。皆思ひありて身あつくいねられぬ躰也。いそげどもいそがれず、其中には久いかやうなるさはりかあらんと思ひ思へば、いひかけてより此かた久しき日月をかぞふる也。此人この德、よの常にあらざれば也。臣たる人忠心の至也

參差タル荇菜。左右采トル之。窈窕タル淑女。琴瑟友トスレ之。

參差タル荇菜。左右芼レ之。窈窕タル淑女。鐘鼓樂レ之。

采は荇菜をとり得たり、大姒の父母同心し給ひて婚姻の禮とゝのひ、すでに夫婦と成給へる時也。琴は舜の作り給ひし五絃の琴也。後に文武の二を加へて七絃にも成たり、長さ三尺六寸六分といへり。瑟は二十五絃也。伏犧氏初て作り給ひしは五十絃といへり。後に二十五絃になりたり、長さ八尺一寸、廣さ一尺八寸といへり。又十九絃のもあり。又長さ七尺一寸、廣さ一尺二寸のもあり。今ある箏のことは二十五絃を二にしたり。故に十三絃也。古者琴は堂にたんじ、瑟は堂下にだんずといへり。琴瑟處へだゝるといへども、其聲音は相通じて相合す。文王后妃別道正しといへども、其德同じく、其心和してへだてなし。琴瑟の類同じくして友たるがごとし。友は同類を云、位祿年德大方相似たる者常に友としてしたしむ者也。尊卑異ナレども德を友とするものあり。是又道德同じければ也。夫婦は終身の友なり。王は日に配し、后は月に配す。文王后妃の夫婦と成給へば、天に日月のかゝりたるが如し。又文王の后妃太姒と遊び給ふを見れば、琴瑟を翫び給ふのみ也。芼は荇菜をとゝのへて神に奉る也。鐘鼓は樂の備はれる也。大姒の后妃と成給ひて文王の德に配して夫婦和睦し給ふのみならず、日月を經るにしたがつて其德澤宮中に及び、國中に至て人民皆その樂しみを樂しむ事八音よく調て樂の備れるが如し。天氣くだり地氣のぼり、萬物生育するごとし。天地の氣和すれば万物生長して各其悅樂を得が如し。此時に及て宮中の人悅のあまりにその上の事をゝいつねでゝ此詩を作れり。比の躰もありといへども、その詞聲皆興なり

葛之覃ハフテ兮。施ウツルニ于中谷ニ。維レ葉萋々タリ。黃鳥于コヽニ飛ンデ。集ルニ于灌木ニ。其鳴コト喈々ケイケイタリ

是は賦の詩の躰也。賦といふは直にあり事をつらねていふ也。是は初夏の時分をいふ也。葛のつる生延て谷の中にはいうつる時は葉も萋々と盛也。其節は黄鳥のうぐひす其邊に飛て鳴し也。灌木はしげり木也。喈々はやはらげる聲の遠く聞ゆる也。此詩は后妃大姒のみづから作り給へる也。男女ともにそのつとめは時に先だちて同意するをよしとす。古しへは葛をとりて布を織たり、初夏の時分は葛いまだ不刈といへども先だつて女工の思ひを動かす故に時に感じ給へり

一　葛之覃兮。施于中谷。維葉莫々。是刈是濩。爲絺爲綌。服之無斁。

葛の葉の莫々とさかんにしげれる時は葛すでに成ぬ。此時に刈て煮て布とす。絺はすゞしとよむ、綌はさいみとよむ。葛の精くよき所をばすゞしとし、あらき所をばさいみとすといへり。是を着ていとはずは后妃みづから女工の勞を知給ふゆへに、その成ことの安からざることを思召ば、やぶるゝに及てもきる事をいとひ給はずと也。農業のかんなんを知人は飲食するに耕作の勤を不忘と同じ。故に勤むる者は自然に儉也。驕奢はをこたりつとめざるより起れり。又服之無斁とよむ時は此女事のつとめをなしてたいくつなく常に不忘をいふ。兩說の心をのづからふくめり、かねて見るべし。聖賢の代には民間の婦女だもいそがわしからず。後世のやうに女の男のなす事を手つだひ、男の女のする事をなすやうなる事はなし。男は男事を勤め、女は女事をなして、男女ともにおこたらず、せはしからず。心ゆる〳〵として家業をつとめたり。况や后妃などは琴瑟の遊びをもし給ひ、又女工の勤めにもつき給ひて、うちかゝりてせは〳〵していそがはしき事は下々までもなき事也。しかれば女のなすべき道理の事なれば、葛の初

て生じ、つるのび葉出る時、うぐひすの聲に感じても、初夏より盛夏に至ては女工の事に有べき事を知給ふ也。心にわすれ給はざれば也。夫男女ともに上たる人をこたり給へば、下に及て奢生ず。又勤め過給へば下に及でせは／＼しき者也。女事も凡情は好てなすものはうちかゝりていとまなし。庶人の妻などにしては今の時節にはよし、士以上の妻にしては過ていやし。心いやしければ不仁にも隋る者なり。上臈しき心づかひ風情なき者は事に觸てあらき事もあり、忿戾などもたやすく出て、女しからぬ者也。又遊を好て女工のつとめをしらざるものは、たを以て心いやしき者也。いやしければ必奢ものなり。奢ものは必不仁也、不仁成者は忿戾嫉妬なる者也。心いやしければ飲食の友をあつめ、かるた、かけすご六などやうなるいやしき遊びをするもの也。音聲を好どもよき事をしらざれば淫聲のみ也。如此なれば家業やぶれ、男子女子ともに習あしく成て、子孫おとろふる者也。故に昔の賢女は女事の勤めを常として不忘。其間には春の日のながき、休息には琵琶箏をしらべ、秋の夜の宵の遊びには文學し、或は糸竹をもてあそべり。如此なれば、心けだかく風清く成ていやしき事なし。いやしからざれば奢なし。奢はけつかうなるやうなれども、いやしき者ほどおごりつよき者也。世間を見るに生ながらの上らふは大方ゐんぎん也。成あがり者に不禮なる者有、下のかんなんを經てのぼりたる者は思ひやりも深かるべき事なれども、却て人使などあしき者あり。農業女工の勤なども忘てかへり見ず、みないやしき心よりおごり生じてしかり。上臈は天命を愼てへりくだりよく下のかんなんを知給へり

言(コヽ)ニ告(ツゲ)テ師氏ニ。言ニ告テ言ニ歸ルヲ。薄(シバラク)汚(アラ)ヒ我ガ私(ワタクシ)ヲ。薄ク澣(スヽガ)ン我衣(キヌ)ヲ。害(イヅレ)ヲカ澣ヒ害(イヅレ)ヲカ否(アラハ)ザラン。歸(カヘ)リ寧(ヤスン)ゼン

父母一二

師氏は女師也。昔は女師あり、婦德婦言婦容婦功を敎たり。今のつぼねなどいふものゝごとし。此師氏を使として父母の國へ見廻に行たき事ある事を告しめ給ふ也。言告言歸とは師氏文王へ告して歸國の御いとまとゝのひたる也。文王后妃同心同德にて夫婦と成給へば、たぐひなき和順なれども、直には歸國の事も告給はず。吏を以てとゝのひて以後、文王よりいつ比歸國し給ふぞと仰らるゝ時に、その悅を告給ふべし。したしく成給へども禮容おとろへず、なれ／＼しく心やすぶり成ことゝなし。凡心より見てはへだてのやうなれども、少もきやくしんにはあらず。年さかりになり給ひても、上らうしくものはづかしきやうなれば、心のへだてなき所をあらはし給はざる也。凡人のなれて心やすぶりなる所に、かへりて心のへだては出來る者也。春より此かた、こがひの事、布の事などの女工、大かた終たる故に、歸國のいとま告給ふ。いまだせんだくなどもてには及ばず。こがい布の事ある間は、すゝぎ物はうちすて置給へば、歸國の御いとま出て俄にみづからのすゝぎ物させ給ふなり。私はふだん（不斷）めし也。御やすみ所、又は女工の事ある時などに着し給ふ衣服也。衣は禮服也。文王の御前へ出給ふ時、琴瑟の遊びなどに侍り給ふ時の服也。父母の國へ歸給ふとて、あかづきたる物もめされず、皆あらへば日數とゞこほり、歸り給ふ事遲し。何ㇾをかあらひ、何をか先さしおかんと、此時ぞ心いそがはしく思召也。凡情の習にて幼少の時は父母をしたへども、夫妻子女有時は父母をしたふ事ゆるく成者也。しかるに大姒は常はなるほど靜にゆる／＼としたる御心ざまなれども、父母の國へおはします時斗は、心あはたゞしく、おさなき時のごとくし給ふ也。父母を歸り寧ぜんとは、父母の我を

とひしく思召さん心をやすくせんと也。此詩は此所根本也。父母に久しく對面し給はざる思より、月日のへだゝりたる事をかぞへ給ひて、初夏の時分より盛夏までの事をいつゐでゝ此詩を作り、いさゝか情をのべ給へり。此詩の言外に聖女たる所明かに見えたり

采々タル卷耳ヲ。不レ盈ニ頃筐ヲ。嗟我懷レテ人ヲ。寘ニ彼周行ニ

是も大姒の自ら作り給へり。賦の詩の躰也。崇侯虎と云諸侯が文王を讒して紂王がために羑里にとらはれ給ひて、土の籠に推こめ置たる時の事也。文王を思ひやり給ふ御心のかなしみにやつれ給ひて、粧などもしかく〳〵まいらねば、宮中の人々是をなげき、せめてのまぎらはしに進めたすけ奉りて、園に出てつみ物をする也。今の人つくし、よもぎ、はぎなどをたづねとるごとく也。大姒はやつれ給ひて、さやうにたづねとり給ふ事は中〳〵なり給はねば、卷耳のみをとり給ふ。卷耳はなもみとも、いしみのともいふ一所に多く生ずる物也。故にとりやすし。頃筐はあさきちいさきかご也。一所に多き物をとりて、あさきかごにひたと入給ふと思召せどもみたざる也。嗟はなげきのことば也。懷人は文王の事のみ思召せば、園に出給ひてもまぎらはしにもならず。そなたの空のみながめられて、此頃筐のそばだてるかたみを道のかたはらにすて置給ふ也。周行は大道也。たゞ園にて宮女の桑つみなどに行中道のひろきなるべし

陟レ彼ノ崔嵬ニ。我馬虺隤ス。我姑ク酌ニ彼金罍ヲ。維レ以テ不ニ永ク懷ハ一

土山の石を戴けるを崔嵬と云。とひしき方を望には高き所へのぼりてながむる也。故に託していふ。我思のせんか

たなきは、せめて高山にのぼりて君子の方をながめんとすれば、のりたる馬も罷病(ツカレヤン)ではたらかざるが如し。虺隤は馬のつかれ病て、高きにのぼる事あたはざる也。金罍は雲雷の象をきざみ黄金を以てかざりたる酒器也。人常に思のある者は、酒を飲てゑひふして、少わするゝ事をする也。此故に詩人も酒は憂をはらふはゝき(箒)ともいへり。是も託しての給ふ也。大姒の金罍は酒器の事には非ず、天命をさしての給ふ也。文王の聖徳にてかゝる難に逢給ふは命ある事也。又長くとらはれにくちはて給はじ、此逆にをはり給ふやうなる命にては、文王の文王たる聖徳を天より命じ給はぬ道理なれば、やがて歸國し給ふべき儀分明也。是はたゞ無道の代に出給ふ聖人のしばし浮雲の難有也。ともに命有事なれば、ひたすらに永く思にしづむべきにあらずと思召す也。然れども其明に知給ふ道理を直にの給ふ事は恥かしく思召て、たゞ世間常人の上の事となして、金罍の酒をくんで憂を姑く忘れんとの給ふ所尤妙也。たゞ酒を飲てとか何とその給はで、金罍と酒器の美なるをの給ふ所に天命の語(ゴ)意ふくめり。道學に心をすましたる人の、風景人情を詩に作り哥につらぬるを奥より口へ出ていふといふ事有、光を和げ塵に同する心也。此詩そのけむよ(權輿)なるべし

陟(ノボリ)二彼高岡一ニ。我馬玄黄ナリ。我姑(シバラ)ク酌(クン)デ二彼ノ兕觥一ヲ。維以テ不(ジ)二永ク傷(イタマ)一

高岡は山脊也。高きみね也。又託しての給ふ。こひしき人の方を見のぞまんとて、山のみねにのぼれば、我乗し玄の馬が黄になりたり。精きわまりて色を變ず。たのむ所なく、せんかたなきたとへ也。兕觥はつのゝさかづき也。兕は野牛とて青色にて角一あり、重さ千斤といへり。是も美なる物なれば初のごとく天命をふくみての給ふ也。我

力のをよばぬ所はいかがせん、天命をはかりてしばらく思ひをやめんと也

陟ニ彼砠一矣。我馬瘏矣。我僕痡矣。云何吁矣

砠は石山の石をいたゞきたる也。のりたる馬もやみ、つれたる人も病てをきあがらずとは、心の憂の何ともすべきやうのなき事を託して述給へり。吁はうれひなげく心也。金罍兕觥の酒も愁を排事あたはず、いかんせんと也。天命をばしり給へども、君子の幽拘のかすかなるとらはれと成給ひておはしますをば忘れ給ふべきやうなし。天命の道理も何事も我心の憂をとく事あたはずとなげき給ふ也。此じぶん(時分)は后妃の御年四十餘五十に近かるべし。武王周公も此大姒の御腹(ハラ)也。其時分は國政にあづかり給へる御子なればをして知べし。常人はおさなき時は父母をしたひ、年ざかりには夫をしたひ、さかり過ては夫を思ふ心うすく成て、子をしたふ者也。しかるに大姒は御年ざかりに父母をしたひ給ふ事幼子のごとく、御年たけ給ひて君子を思ひ給ふ事御さかりの時のごとし。貞靜專一の至りにて情欲の交りなければ也

南ニ有二樛木一。葛藟纍(メグレリ)之。樂(メル)只君子。福履綏(ヤスンズ)レ之(ヲ)

興の詩也。南は南山也。樛木は木の枝の下へたれてさがりまがりたる也。葛藟はくずかづらの類也。君子は后妃大姒をさして云也。樂只とは德有て心ひろく体ゆるやか成をいふ也。福履は幸也。綏は天より百のさいはひを下して此たのしめる君子をやすんずる也。上に立人不樂は下に至ていそがはしく苦むもの也。樂も俗樂はかへりて下の迷惑となる者也。凡夫の樂は富貴になるほどいろ〳〵の食好をし酒もりをし、遊ぶ者をあつめなどする故に、奉公の男女

は夜も安くいねず。夏の短夜にも夜話をして蚊にくはれ、あつきにくるしめり。主人は涼しき所に居て、人にあをがれなぐさめば、下の苦は不知。冬は寒夜に下々さぶく、ひだるく、めいはくすれども、主人は火にあたり、いろ／＼の飲食をとゝのへさせ遊べば、下の難苦は不知。明日も我はいねたきほどいねれども、下々は左様にもならず。おそくいねて早くをくれば、病人もたえず。其臣妾の又召つかふ者は猶以めいわくする也。扨用たらざれば民をしぼりとり、過役をかくる事も出來る也。然ば凡人の樂は國家天下のめいわくとなる也。それよりは職人商人色々自由なる事、けつかうなる美をなし出て、上の奢を助くる故に、士たる者次第に貧く成、商人富て士民困窮す。流浪人多くなりて、時節を以て盜賊おこり、天下亂るゝ者也。ひつけう、うへ／＼たる人の樂所あしきより起る也。君子の樂はしからず。天下國家の志の人々其處を得て安きを樂とし給ふ也。自ら遊をし給へども、それによりて下の苦むことあれば、其遊樂とならず。其上君子の遊は、或は靜にして心をすまし、或君臣父子夫婦和樂して遊とする也。文王后妃の樂とし遊とし給ふは、朝は事なき時は平旦に經典を見て心を悅ばしめ給ふ。晝は君子は國家のつとめ、或は弓馬のならはしなどあり。后妃は女事のかへり見、家内の用あり。夕には夫婦琴瑟をもてあそび、その間により／＼うかゞひ給ふ事、たづね給ふ事も有べし。近く召つかはるゝ官女はいふにおよばず、した〴〵までも晝の勞、明日のつとめをかへり見て、皆いねしめ給ひ、たゞみづからばかり夜の靜なる心をすまし、琴音をしらべて遊給ふべし。とのゐにあたりたる人々一二三人はあるべけれども、番に當るを悅として、君子の遊びに侍るべし。まいり物なども、朝夕は其役人あり、其禮ある事なれども、夜などはかゆ湯づけやうのかろき物ならでは用ゐ給は

す。手間のいらぬ物なれば番の人々には下まで及べし。上如此恭儉なれば、下質素にして用あまり、天下太平にして長久也。君子の樂には如此の吉慶をふくめり。故に天より福を下して君子をやすんじ給ふ也

南ニ有ニ樛木一。葛藟荒ヘリレ之ヲ。樂メル只君子。福履將タスクレ之ヲ。

荒は蔓よりもさかん也。將は綏ずるよりもふかし。天より命をかさぬる也。大姒の御子十人おはします中に、武王周公の聖人出來給ふ。天地ひらけて此かた不聞處也。同じやうなる物はつゞきがたき事なれば、聖人の御子に聖人はまれ也。しかるに文王の御子二人まで聖德おはします事は、后妃の聖女にて天地の德のごとくおはしますしるし也。天の福履を以て助給ふその第一なり

南ニ有ニ樛木一。葛藟縈メグレリレ之ヲ。樂只君子。福履成ナスレ之ヲ。

縈は荒よりもかたし。成は王業のくらひはじまり天命の大なる所ある也。詩人の心にかく思ひたるにはあらず、只助よりもあつくかたき事をいへり。然ども自然に天命なる所備りたる也。三章共に君子といへるは后妃をさして云也。此詩宮女の作也。后妃の德下に及でめぐみのいたらざる所なし。嫉妬の心なくして衆妾とやはらぎむつまじ。故に宮女その德に化し、その行に感じて、后妃のさいわひおはします事を悦て云。南に樛木あり、大木ののぼりそびへて高きには葛のとりつくべきやうなし。大木なれども其枝下へさがりたる故に、葛もとりつきて其生をとぐる也。今后妃大姒も其位を心に持給はゞ衆妾とははるかにへだたり、むつまじかるまじけれども、みづからの位を忘れ給ひてへりくだり、衆妾を友のごとく心やすくし給へば、衆妾もうちとけてたのみよる也。葛藟の樛木にまとへ

るが如し。かくいへば此の詩のやうなれども、詩人の心に初より比していへるに非ず。只ふと興じていひぬれども、自然に此心あり。或問、夫(オット)文王なれば、たとへ凡女を后妃に備へたりとも嫉妬あるやうなる事はたし給ふまじ。然るに大姒を嫉妬なしとほむる者は何ぞや。云、心に嫉妬ある者はことわざに法界りんきといへるごとく、よその事までもはらたてて、いはれぬ事をいふもの也。たとへ夫(オット)正しくていふべき事なきとても、心に嫉妬ある者は慈愛の心すくなく、ゆるやかになき者也。其上文王は其時諸侯なれば九人の定りあり、后妃につゞきてだん〳〵の宮女あり。主人ながら傍輩のやうなる人々あり。夜のおとゞにも番有て后妃の出給ふ夕あり、餘の宮女の夕あり。今日本にて禁中の作法古禮のこりて如此、番にてなき時は后妃といへどもみづからの休所におはします也。如此禮定たる事なれば、今時世間のやうに嫉妬はいはれず。然れども和順にして中よき事はまれ也。大姒は八人の我に相つゞきたる宮女を妹のごとく子のごとく思ひ給ひて、たらざるをたすけ、かけたるをおぎなひ、容儀心ざまの行たらぬをばおしへみちびきなをし、君子の御心にかなふやうに、我娘子などを介抱するごとくし給ひ、君子に侍り給ふ宮女には、衣服よりはじめてよろづ事かけぬやうに、その人々に合て似合たる色々を好み給ひ、みづから染出したる百花の天質の如くしなし給へば、后妃の御介抱にて生かはりたるやうによろしくなる人あれば、其人はいふにおよばず、わきの見るめも子のごとくなる御いつくしみなれば、親の恩よりもふかく感じてなづきしたがひ奉らぬ人なし。八人の宮女にも皆男女の御子多し。后妃の御腹にのみ聖徳の君のおはします事を少はそねましく思ふべき事なれども、我子のよき如く我に福あるごとく悦び賞し、后妃の幸をいのりたるにてをしはかるべし

螽斯ノ羽　詵々タリ兮。宜ナリ爾チノ子孫。振々タリ兮

螽斯は蝗の屬也。一たび九十九子を生といへり。詵々はやはらぎあつまる躰也。爾は則螽斯をさしていふなり。振々はさかんなる躰也。蝗の子のさかんに多きをいふ也。其性柔順にして和集す。故に子多してさかんなり。是は比の詩也。比といふは彼物を以て此物にたとふ。后妃の大姒嫉妬なくして子孫衆多也。故に宮女螽斯を以て比していふ也。此德あれば此福有と也

螽斯ノ羽。薨々タリ兮。宜ムベナリ爾チノ子孫。繩々タリ兮

薨々はむらがり飛聲也。繩々はたへざる也

螽斯ノ羽。揖々タリ兮。宜也爾ノ子孫。蟄々タリ兮

揖々は會聚也。蟄々は多き心也。三章ともに比の詩の躰也。古への詩は心の情をいひたる者也。作するに非ず。故に一度いひ出て不足、又別にいはん事もなければ、同じことをくり返して云り。皆誠也。日本の小うたも情をいひたるは同じ事をいへるがごとし。唐の聖代に此詩どもを日本の小うたのごとくうたひたる也。男女のうたひて遊びたるをあつめたる者也。樛木は后妃の妬なきに親みなづきて祝せる也。螽斯は后妃の妬なきによりて、子孫の衆多なることをほむ。上嫉妬のこゝろなき時は、下怨恨の意なし。和氣充溢し瑞慶流行す。多福の門也。婦人の德、妬なきより大なるはなし。大躰人情功容は勉べし、情に根ざす者は自克がたしといへり

桃ノ之夭々タル。灼々タル其華アリ。之子于コヽニ歸ル。宜ク其室家ニ

興の詩也。夭々はわかき也。灼々は花のさかんなるなり。木少き時は花盛也。之子は女子の嫁する者をさしていふ也。于歸は夫の家へ行をいふ也。婦人生ては父母を家とす、嫁すれば夫を家とす。故に嫁するを歸といふ也。仲春は陰陽交る。故に聖人天の時に順て婚禮をなし給ふ。桃の花の咲時分也。室は夫婦居ところ也。家は一門の內也。宜は一家一門和順する也。一家の人たがひに和順して乖戾の心なきを宜といふ也。后妃の化家より國に及び、女子たるもの忿戾の凶德なし。皆恭儉慈愛を尊べり。故に詩人その女子の賢を歎じて必ずその室家をやはらぎむつまじくせん事を知ぬ。婦人の賢は家を宜しくするより大なるはなし

桃之夭々。有蕡其實。之子于歸。宜其家室。

蕡は實のさかんなる也

桃之夭々。其葉蓁々。之子于歸。宜其家人。

蓁々は葉のさかんなる也。家人は一家の人也。室家家室家人は文を變じてうたひよきやうにいふ也。灼々とあざやかなる花を見て、時物によりて興を發す。すでに其花を詠じ、又其實を詠じ、又其葉を詠ず、他の儀あらず。國中の婦人后妃の化をかうぶりて、年わかしといへども夫の父母に孝あり、夫に敬有、家內の男女に慈あり、夫の兄弟にむつまじ。故に詩人その賢を感じて歌詠する也

肅々兎罝。椓之丁々。赳々武夫。公侯干城。

此詩も其心興也といへども、又賦の躰也。興にして賦ともいふべし。肅々はとゝのひたる躰也。兎罝はうさぎのあ

み也。此うさぎあみつかろき物といへ共、能とゝのより備て堅固也。丁々はあみをはる杙を伐聲也。赳々は武勇ある貌也。武夫は農兵也。昔は唐日本ともに在郷より軍役を出し、士と民と同居せし也。兵は鳥獣をかり魚をとり農業にてつだひ、寒暑風雨にあたつて身を堅固にならはさゞれば全く用に立がたし。故に兎罝の野人則武士也。故に公侯の干城といへり。干は盾也。公侯は文王をさす。其時いまだ諸侯なりし故也。此兎罝の野人といへども、文王の盾となり城となりて用に立べき人々也。杙を伐聲の丁々とひゞくにも勇盛の音あり。其かたちを見るにも、たけき武夫也。周邦および南國の人文王の化をかうぶりて文武のつとめにおこたらず。故に才ありて兎罝といへども、其なれる躰かくの如し

肅々タル兎罝。施ス二于中逵一ニ。赳々タル武夫。公侯ノ好仇也

前に同じ。中逵は九達の道といへり。兎の通る道をかんがへて、何より往來しても大かたはづれぬやうにあみをほどこしはる也。よきたぐひとは文王には知仁勇の德全し。此農兵の武夫もその勇力ある事は文王の耦と也。良將の下に弱兵なしといへる心也。此時紂王が政のあしきによりて天下困窮し、文武の業おこたれり。故に夷狄來て中國をおかせり。紂王文王に命じて是を討しむ。夷狄は大國にして兵多し、彼が國都ははるかに遠し、行て討事は民の勞役かぎりなし、却て中國のついえとなる也。故に文王よく文をおさめ、武をとゝのへて、内をつよくし給へば、賊をのづから退キ伏しぬ。一たびはいかりて天下の民を安ずる時也

肅々タル兎罝。施ス二于中林一ニ。赳々タル武夫。公侯ノ腹心也

前に同じ。中林は林の中也。腹心は同心同德也。たゞ農兵の勇の文王にたぐひするのみならず、仁ありて人を愛し、知ありてまどはず。幸にして聖人の出世に遇、又幸にして聖人の國に生る、その化の及べる處しるべし。今を以て見ればみづから罝をすき、杙をうち、山中に獸をとる者は、甚かろき者のやうなれども、伊尹孔明もみづから田がへしたる人也。いとまを以ては如此事をもなすべし。上明かにして樂み、下ゆるやかにしてつとむる時は、恭儉質素也。故に文に達し、武に習へり。武にならふ事は、かり、すなどりにしくはなし。後世に奢て身やはらかなる故に物うくなりて、文武ともにつとめにおこたる也。魚鳥も產業の手にのみとりつくして、武夫の武をならはす爲にはならざる也。古者は宿鳥をとらず、腹ごもりを不殺。魚は尺にみたざれば網にとゞまらず。鳥を射るもあらはれて向よりかゝり、上手を以て射とれり。獸を狩も、かりづめに至て、一方あけ、自由にのがれしめて、達者を以て射とるやうにしたり。故に鳥獸つきずして武を習はす事間斷なし。馬をのるも馬の氣力をやしなひそだてゝ、上手を以てのり得たり。故に聖代の士民は武益達者にして勇猛威あり。王侯の干城たる事宜也。文武の藝その術の道ある時は彼こと遠也

采々芣苢。薄言采之。采々芣苢。薄言有之

芣苢はおふばことよむ、車前也。葉大に繁長し、よく道の傍に生ず、或は人の精力をますといへり。或は其實難產を治すといへり。文王后妃の化行はれ俗美也。婦人女子その職事をつとめておこたらずといへども、任業せはしくしからず。故に時に感じてはうちつれて閭閻曠野に出てつみ物をし遊べり。すなはちその事を賦して相樂む。室家

和平にしてもとる事なければ也。賦の詩也。婦人時に此詩を作てうたひたるもの也。初の二句は芣苢を求る也。後の二句は芣苢のある所を見えたる也。無心にして小蝶の園にあそぶが如し。天道の至樂その中に存す。聖人の民は日出てつとめ、日入て休す。生死を見る事晝夜に同じ。造物者と共に動靜出入してねがひなし。各その分の義を安す、何ぞ迷ひあらん

采ニ々芣苢一。薄言掇(ヒロフ)レ之。采ニ々芣苢一ヲ。薄言採(ミトル)レ之

多きが故によきをひろいとり、又其實をとるなり。前に同じ

采ニ々芣苢一。薄言袺(ツマトル)レ之。采ニ々芣苢一ヲ、薄言襭(ツマバサム)レ之

手にあまる時は衣のつまに入て、そのすそを手にて持也。彌多とりて手くたびるゝ時は、衣のつまを帶の間にさしはさむ也。此時うたひて歸るべし。言外に見えたり。曾點の暮春には春服すでに成ぬ、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風して詠じてかへらんといへるも是也。胸次悠然として春風和氣の中に遊べるが如し。從容として自得す、樂でその處を得る初より人欲の煩なし。初芣苢をとりに出る時に、入物をも用意せず、ふと時に感じ興に乘じてうちつれ出て、或はつまどり、或はつまばさみて歸る、自然にして無爲也。期する處なし。今も七八歳の女子など野遊して土筆よもぎはぎなどつみてつまどる者あり。聖人の民は二十歳三十歳の婦人といへども七八歳の女子の遊のごとし。國政ゆるやかにして物の自然に成事見つべし。明道先生の詩に云、雲淡(アハク)風輕シ近午ノ天。傍(ソヒ)レ花ニ隨レ柳ニ過グ前川ヲ。時ノ人不レ識予ガ心ノ樂ミ。將ニ謂フ偸(ヌスンデ)レ閑ヲ學ブト少年ニ。明道先生は學て天遊の樂を得たり。芣苢の女子

は不知不識至樂を得て天遊す。或主樂をよみたる哥を吟ず。夕良のさけるのきばの下すゞみ夫はてゝら妻はふたのして。云これ康寧なり、至樂とはいひがたし

南有㆓喬木㆒。不㆑可㆓休息㆒。漢有㆓游女㆒。不㆑可㆑求思。漢之廣矣。不㆑可㆑泳思。江之永矣。不㆑可㆑方思

興にして比なり、喬木は木の枝の上に向て、すくなきをいへり。江漢は河水の名也、游女は、今俗にいへる遊女にはあらず、江漢の堤に出て、つみ物などしてあそべる女子也、江漢の俗、初は淫風にて、物つみに出る女子も、衣服をかざり、形たはやぎ、言やはらかにて、淫夫のたよりありしが、文王后妃の和及で、婦女のあそべる體、前にかはれり、衣服かざらず、言葉たはぶれず、端荘靜一なれば、前日のごとくあなどるべからず、夏は大木のしげりたるかげによりて、暑をしのぎ、休息すべし、此喬木枝すくなければ、木蔭なくして休息すべからず、女子貞にして、なれ付近べからざるが如し、小河のはゞ一二町にて、深みすくなきは、水くゞりおよぎてもゆくべし、婦女の淫なるには、かくれたるまじはりなるべきがごとし、たにゝてもいかだにして、さほさしよるべきは、かろくいひよりやすきがごとし、江漢のとをくひろくして深きには、いかだにてさほさす

事もたりかたし、いはんやくどりおよぐべからず、舟ならではわたり亦たし、女子の貞正たるには、禮義備りて、明かに婚を求ざれば得がたし、文王后妃の德惠、葛覃、卷耳、樛木、螽斯の詩にいへるが如し、其風化近きより遠きに及で、江漢の淫風變じて、婦人女子しらず／＼其德心にうつり、其體端莊靜一にして、前日のごとくたれ近付べからず、淫風の改れる事を、詠歎して作れり

翹々錯薪。言刈二其楚一。之子于歸。言秣二其馬一。漢之廣矣。不レ可レ泳思。江之永矣。不レ可レ方思

翹々はひいでたる也、楚は薪となるべき物なれども、荊のたぐひにて、かり取がたきと也、故に錯薪を以て興をおこして、江漢を比して作れり、子は女子也、歸は婚をいへり、言其馬に秣かはんとは、謙退していへり、親迎せんと也、親迎とは、陽は陰に先だつ道理にて、みづからむかへに行也、江漢の女子を見て、初は心やすくいひよらんとせしかども、女德の端莊靜一にして、求むべからざるを見て、終に禮義のさたに及べり、發二乎情一民之性也、止二乎禮義一先王之澤也といへる是也、江漢の男女、ともに文王后妃の化をかうぶる事、深きにあらずば、よくかくのごとくならんや

翹々錯薪。言刈二其蔞一。之子于歸。言秣二其駒一。漢之廣矣。不レ可レ泳思。江之永矣。不レ可レ方思

是も又前章に同じ、蔞は艾に似て、水澤の中に生ず、楚よりも猶かり取がたし、駒は馬のちいさきもの也、文

をかへていへり、江漢の同じ文を、三章ともにいへるものは、情あまり有て言盡しがたし、中夏にては、詩にふしを付てうたふ故也、日本の村里のこうたも、同じ言をくり返しうたふは、同じ人情也、或問、衣服は、男女ともに身の文章也、しかるを江漢の女子、衣服かざらずとは何ぞや、云、女子かみ形を治め、衣服を調のふるは、家にしては父母につかへ、夫家に行ては、夫舅姑につかふるの禮義也、外へ出る時に衣服をかざり、他人の見物となるは、心得のあしき也、外へは粗なる物を著、人の目に立ざるやうにするを、婦人の用心とす、こがいの時分は、女子婦人、形をおさめずといへるも、事いそがはしきといふばかりならず、桑つみに出る者なれば、人目にたゝざるの用心也、まして野邊川堤などへ、うちつれてつみ物などに出るには、わざとも衣服をあしくすべし、欝散のため、花見などに出るにも、まとの花見ならば、此心得有べし、みやこの花紅葉の時、おとこも女も見物に出る有、或は田舍人も、此時上りつどへるあり、女の出てあそべる體、その形を作り、衣服をかざれるは、花を見て樂とにはあらで、人に見られんと思へるにや、甚しきは、花見小袖などとて美をかざるを、淫風のならはしなる事をわきまへず、男は僧俗うちまじはり、花見にことよせて、女を見に出ると也、外には男女ともに心なく見えぬれども、心は色の求也といへり、性情の正しからざる事いふばかりなし、此風俗あらたまりがたからん事を思ふに、江漢までに美風の行はるゝ、聖人の化を思ふべし

遵二彼汝墳一。伐二其條枚一。未レ見二君子一。惄如二調飢一。

隄也、遵はしたがふ也、汝は水の名也、墳は大なる堤也、條枚は木の枝也、惄は飢たる意也、調は朝也、汝州

の國々、文王の化を蒙る者也、其時いまだ紂が政にて、國々の民、役にゆきて、勤はてゝ家に歸たるに、その婦人よろこびて作れる詩也、夫の留守ゆへに、婦人みづから樵薪の事をたすといへども、男子のやうなる事はなしがたし、故に川の堤に出て、木の枝などを折て、薪とする體也、或は舅姑を養ひ、或は子をはごくみて、夫を待わぶるの情、止事なき事、うへたる者のごとし、いまだ歸らざる時、思望の情かくのごとき事をのぶる也、詩の體尤感情あり

遵二彼汝墳一。伐二其條肄一。既見二君子一。不二我遐棄一。

肄は復生する木の枝也、枚を切と前の詩にいひ、またひこばへを切といふて、年を越て歸らざる心こもれり、今夫の歸りたるを見て、三年歸らざれば、他心も有べきに、我をさけすてずして歸りたると悦べり、自は夫を思ふ事重く、饑たるごとく忘るゝ事なければ、夫も又かくあらんと思はんは、人情の常なるに、いさゝか夫の是非に心なく、自己のみ勤め、今夫の他心なきをめづらしきやうに思へるは、性情の正也、文王后妃の徳化の、遠きに及びぬるを思ひ見るべし、つら〳〵思ふに、汝墳の女も、みづから薪を取とあれば、庶人の妻と見えたり、しかるに此詩を作れる事、聖人の化をかうぶれば、賤の女といへども、賢女の行にひとし、今の世おとろへたり共、士以上の女は、古の庶人の妻におとらんや、自志をおとして、先覺にもたづね、聖賢の經傳をも見て、其道を求めなば、などか女といはんからに、しらず學びずしもあらん、たゞ暴棄を安じて、女は成がたき物とのみ思ひて、打過るよりして、いよ〳〵ゆがみ、ひずかしくなりゆく成べし

魴魚頳尾。王室如レ燬。雖ニ則如一レ燬。父母孔邇

比也、魴は魚の名也、本尾白し、網より取あげて舟などに入れば、魚勞するゆへに、尾あかくなる也、王室は紂が都する所也、燬は焚也、父母は文王をいへり、孔は甚也、邇はちかき也、此時文王天下を三分にして、其二つを有たまひ、商の叛國をひきいて、紂につかへ給ふ也、故に汝墳の人、猶文王の命を以て、紂が役に行也、其人勤苦するの勞、すでに魴の尾の白が、あかくなるが如し、王室の政のはげしき事、火にて身をやくが如し、しかれども文王仁愛の德のあつき事、父母のごとくなれば、是を思望するに甚ちかくして、勞をわするゝ也、今實父母ある者、夫家に行て、舅姑甚つらくとも、實父母の命を思はゞ、其つらきをも堪しのぶべし、是父母を大切に思ふ故也、汝墳の民も又か　のごとし、文王の風化の美の、人心に誠ある事を見るべし

麟之趾。振々公子。于嗟麟兮

麟は、聖王の時出る毛蟲の長也、性仁厚なるゆへに、趾も又仁厚にして、生蟲生草を踐ず、振々は仁厚のかたち也、文王后妃の御德、身を修め給ふあまり、子孫宗族に及で、皆善人となり給ふ、故に詩人麟に興じて、趾を以て公子にたとへ、麟に其德あれば、趾も仁厚なるがごとく、文王后妃に美德おはします、故に武王周公の聖子はいふに及ばず、其外の公子も、みな仁厚の德行ありと也、此時文王いまだ諸侯たりといへども、其德は王者也、故に聖王の瑞とする麟を以て興とす

麟之定。振々公姓。于嗟麟兮

定は額也、麟は頭を以て人にふるれども、麟は仁獣なる故に、ふるゝ事なし、公姓は公孫也、文王后妃の御徳、御子より御孫に及べると也、成王のごとき、文武の御徳には不ㇾ及といへども、後代には又ありがたき賢王也、是其徳のより來る所ある也

麟之角。振々公族。于嗟麟兮

麟は一角あり、角の端に肉ありて、物にふれて害なし、角あるは武備の形也、害をなさゞるは仁也、公族は九族也、麟の徳たる、趾ふまず、定（ひたい）ふれず、角そこなはず、一身の間みな仁なる事をいへり、文王后妃の御徳、又かくのごとくにして、公子公孫よきのみならず、近きより遠きに及び、せばきより廣きに至る、公子は、富貴の中に成長して、驕淫輕佻なるべき物なるに、其仁厚如ㇾ此なる時は、他人の戒愼知べし、佛家にも、一子出家すれは、九族天に生ずといへり、出家とは、世間の凡俗を出て、心のけがれを去をいふ、其淸心を以て、親族一門をおしへ道びき、眞如一體の佛性をさとらしめば、九族天に生ずる理也、惠能云、正見名出世邪見、是世間内心謙下、是功外行ニ於禮一、是德除ㇾ邪行ㇾ正即無ㇾ罪といへり、一人の御徳にて、九族天に生じ給ふ事、文王に於て見奉る也、此麟之の一篇を、關雎の應なりといへり、文王の聖にして、后妃の聖女を求めて配遇するより初て、御子孫に及び、その徳化かくのごとし、周南一篇のごとき、反復して見る時は、聖人聖女を、まのあたり見奉るがごとし、詩に非ずして、いかでその徳容をしる事、かくのごとくそれいちじるしからんや、

召南之解 （○表紙）

女子訓卷第二

召南

召は地の名也。召公奭の采邑也。今の知行所也。召公は文王武王成王康王四代に仕たる賢臣也。文王の庶子ともいへり。武王殷に勝て後北燕に封ぜらるといへども、召公をば留て政を助けしむ。封國遠き故に采邑を周にて給へり。日本にても奥州仙臺の城主江州に知行所有が如し。太公望周公旦召公奭は武王成王の時の三公也。文王の時、周公國中を治め、召公諸侯の國を治む。文王后妃の德の國中より南國に及者を周公にかけて周南といひ、諸侯の德のその下に及ぶ者を召公にかけて召南といへり。實はみな文王后妃の德化なれども、そのつかさどる所に付ていへる也。國中は天下の本なれば外を治るよりはかたし。故に聖德ある周公をして内を治る事をつかさどらしめ、賢德ある召公を諸侯の長として外を治る事をつかさどらしめ給へり。周公召公の功にゆづるといへども、實は文王のよく人を

用ゆる故也

維鵲有レ巣。維鳩居レ之。之子于歸。百兩御レ之

興なりといへども比の躰あり、興にして比なるべし。維鵲有レ巣は諸侯の國を立るに比す。維鳩居レ之、女道は成ことなくして終有に比す、乾坤の道也。之子于歸は諸侯の女子の諸侯に嫁するをさす。婦人は夫の家を我家とす、貴に嫁を歸といふ也。百兩御レ之は諸侯の禮、其をくりむかへ車百乘也。御は迎也。陽は陰に先だち、男は女に先達。故に夫家より先達て迎る也。百車の御將はきはめて美なれども、其費百姓の憂とならず。公夫人共に德の位にかなふ事を悅て嘆美する也。或問、何を以てか鵲鳩を男女に比するや。云、鵲を男の才にひし、鳩を女の德にひす。唯諸侯大夫のみならず、士庶人といへども、男は才有て屋をよくし、家業を立、女は女德有て男の家に來て家人を和睦す。鵲は能巣を作る鳥也。冬十一月冬至に作り初て、春成就す。時に先立て用意し、速成ならざる故に巣完く固し。鵲すでに子を生じ、雛飛去たる古巣に、鳩來て子を生也。鳩はみづから巣作る事拙しといへども、鳥の古巣多き中に鵲の古巣をもとめ居て、子を生ずるは鳩の知なるところ也。巣作る才は拙けれども、子を生じて全き所をえらび居は、勞せずして生をとぐ、人なれば人に取て善をするが如し

或問、拙きを女の德といふ說あり、いかゞ。云、鳩を女にひし、巣作るに拙きとあるを取あやまりていひ出せり。鳩は柔順專靜の氣象あり。其一端をとれるのみ、拙きをとるに非ず。男の才ありて家を立、女は女の德ありて子孫さかへ、女工の事を治む。女は男の事をなし得ず、おとこは女の事をなさず、陰陽男女天質異也。天は至動地は至靜

なるが如し。幽閑貞靜を女德とする說は有て、拙きを女德とする說は見えず。もしありとも周子の拙賦のごとく主意有べし。弊ある語なれば用ひ難し。諸侯の婦人などは貞靜慈惠の德だにあれば、諸事はそれ〳〵の役人ありてつとむれば、才は拙きがごとくにてもよき也。士庶人の妻はたすけなし。一人して諸用を勤む。夫の留主に他所よりの使用事等あれば大躰の事はとりはからはではならざる勢ひもあり。殊に庶人の妻は家内の用をうけとりてつとむる者也。拙きばかりにては事とゝのをらず。後世はよろづせわ〳〵しき故に、農人などは女も男のわざをなし、士の妻も夫の留主にはおもてむきの事を聞されればなりがたし。男女ともに時所位ある事也。たしかなる家老あるほどの家なれば婦人排儀のおもてむきにさしいづるは凶し。大身ほど害あるもの也。知ある婦人は子の代にもひそかに子に心を付て、みづから男事を取持事はせず。世間に拙と愚を同じやうにおぼゆるものあり。拙は知ありて才なき也。愚は知はくらくしてかしこだて也。男には面の勢虚多し。女はうつけはまれ也。俗にあほうといふも、女のあほうは男のあほうほどにはなきもの也。女はことに愚にてはあやまちあり。邪道にもまよひ、淫夫にも欺れやすし。この故に女は貞を德とす。貞は正固也。心法作法共に正して、守り固は知ところ明なれば也。貞は水神にして知也。女も女により、男も男による事なれども、利發にても女は十人が七八人までも知淺し。何かといへばむつかし。男は男らしく、女は女しきがよき也。世中心にかなはず、いひかたるべき友もなければ、妻にさる事ありといひたるに、何の思慮もなく、ともになげくけしきもなきは、つきなきもの也。さやうの女もはらだゝしき事、しつとなどには、ものいひあざやかに、大かたの男をばいひつむる者也。男も人の難曲を云て相そしり、あだ言出來口などを利口に

いふものは多けれども、事とある時は分別なく、いひ合すべき人はすくなし。無事の時飲食の友としては異あるも、人の災難おちめをみとゞくる友は少なし

或問、高祖の后呂氏利發にてすでに漢の代をくつがへさんとせし故に、呂氏こと〴〵く亡たり。楊貴妃才有て玄宗大難をかうぶり、其身凶死し一家亡たり。　保元の亂起り、　女の拙き害はすくなく、才知の凶は大也。しかれば拙きを女德といへるも可ならずや。云、男女ともに才知は善惡の兩階也。仁愛無欲の人に才知あれば其慈しみこまやかに、其惠み廣し。不仁有欲の人に才知あれば、其人をそこなふ事深し。漢の呂后は不仁有欲にて才器剛强なりし故に其害大也。畢竟不仁の罪にして才の罪にあらず。故に女子には溫恭を敎る事第一也。女の利發過て女しからぬは多は不慈愛也。不仁なれば凶惡をなして家をやぶり、子孫亡ぶるもの也。如此ならんよりは少愚にて事不足とも拙きがまされりといへるなるべし。たゞ女しき婦人は貴賤ともにかたはすといふ事なし。源氏の明石のうへは知も才も有て、よろづに達せる婦人なれども、よく女しくけだかくして、身へりくだり、事にふれて人の感ずる人なり。中宮の若宮いとけなくおはしますほどは、湯のたびごとに湯殿にくだりて、みづから下人のするわざをとられしといへり。女樂の時女三の宮、女御紫のうへと同座にて樂ありしに、皆木丁しとねをまうけられしを、明石のうへはしとねに琵琶ばかり置て、其身はその上には居給はず。后女御としてもうてぬほどの人にて、かく所にしたがひて謙讓ありしはよくかしこき人と聞えたり。父の入道は大臣の子也。母はあぜちの大納言の女也。其俗姓もいやしからず、女御の母うへなれば大かたの人ならば、まうけられたる座に居らるべき

を、きどく也。入道は前のはりまの守にて世をのがれ隱居せり。時の國の守しきりにいひよりけれどもなびかず、源氏にも哥の返しばかりにてやまんといひて、もとめにしたがはず、終にまげておはしましたり。父入道の一生の大願なりしかば、やむ事得ずして見え初たり。歸京のゝちよび給ふとも姫君なくばのぼるまじき心也。始中終心入よく見をとす所なし。よのつねの才知に非ざれども、いたりて上らふしきにかくれて見えざるべし。又小身の妻にても、其家業にくだるべき人也。たとへば旅行戰陣などの留主に置たりとも心もとなき事なかるべし。是なん婦人の手本とすべき人なり。今の小身の武士の妻などは、よろづにかひせうらしからでは時にあはざると見えたり。されば俗語にも、人の妻には福神有貧神有、夫の家の貧福は婦人によるといへり

或問、源氏は作り物語なれば、明石のうへもなき人ならん歟。云、明石の濱に入道のつかあり、岡部を今は岡越といへり。入道の屋敷跡とて今は田になりてあり。其外琴の橋、月見の松など、源氏の琴の音これまで聞えたると、所の者いひ傳ていえり。須磨にも源氏屋鋪とて今にあり。植られし若木の櫻も其種失ずしてあり。其人なくてはかくいひ傳る事有べからず。たとひなきにしても、明石の上のごとくなる賢女有まじきにも非ざれば、ありとして女のかゞみとせんは益有事也。巣父許由を莊子の寓言にてなき人といへども、上古の事にて有無分明ならず。有まじき人にも非ざれば、ありたるにして狂狷中行の心地をいはんに害あらじ。嚴子陵が行跡は許由よりも慥しけれども、近き世の事にてかくれたなければ人うたがはず

維鵲有ㇾ巣。維鳩方ㇾ之。之子于歸。百兩將ㇾ之

方は有也。將は送也

維鵲有ㇾ巣。維鳩盈ㇾ之。之子于歸。百兩成ㇾ之

三章ともに興也。盈は滿也。成は禮とゝのをりて完き也。南國は諸侯文王の化をかうむりて、よく國を治む。婦人は后妃の化をかうむりて、よく家を有ち、子孫繁榮なる事を嘆美して永歎する者也。鵲巣の完固なるに、鳩來てこれを有ち、子多生ずるに比していへり

此三章居方盈御將成の六字のみかはりて、同じことをくり返していえる物は自然のゆへ有べし。音曲は返しといふものにて序破急もしめやかになり、首尾とゝのふもの也。陽關の曲の二重がへし三重がへしあるやうに、行歌曲の類はみなかへし／＼するにて幽微也。詩經を義理ばかりにて見ては三章四章別の事なきやう也。詩は韵律に調て餘情かぎりなきもの也。本朝の万葉集の哥も同じ事をくり返していえり。たゞによめば無要なるやうなれども、調子の風味より見れば、いかばかり餘情あらん。三章四章いひ返したる意味何の章も同じかるべし

鵲巣三章々四句

于以采ㇾ蘩。于ㇾ沼于ㇾ沚。于以用ㇾ之。侯公之事

賦也。蘩は白蒿也。ひたし物などに用といへり。沼は池也。沚は渚也。事は祭の事也。公侯の事には祭より大なるはなし。故に事といふ時は祭の事也。蘩を采は夫人自身にのみ采るに非ず。いづくの沼池、いづくの沚の蘩かよき

と下知せらるゝ也。たま〳〵は自身も取給ふ事も有べし。本朝の子日も中古以來は遊びごとのやうになれり。上古は王公の事に后妃公卿などの自身姫小松を引れたるも、誠敬といひ、勤事といひ、情ふかく見ゆ。后のみづから蚕室にかひごし、機殿に女事をなし給ふも、上古の美風也。光孝天皇の、君がために若菜つみ給ひし御衣手に、雪のかゝりたるなど、忠孝の餘情かぎりなきを思ひ合すべし。魚肉等はをもてがたにてとゝのへ、野菜菓子のたぐひなどは、女中にてとゝのふれば、夫人誠敬を盡していさぎよくとゝのへて神にすゝむる也。祭は夫婦みづからす。子孫相續し、代々祭を不レ絶、人倫の本なれば婦をめとるを祭祀の助といへり

于以采レ蘩。于二澗之中一。于以用レ之。公侯之宮

別義なし。宮は廟なり

被之僮々。夙夜在レ公。被之祁々。薄言還歸

被は婦人の首のかざり也。かんづゝみとよめり。首は一身の上なれば、男はかうむりし、女はかんづゝみす。古はこまやかに美なるを禮義とせし也。日本にてもすべらかし、十二ひとへなど禮義のかみかたちと見えたり。今もわた入の時はうちかけ着、あはせかたびらの時はさげ帯禮によりて長かづらをかけ、大かたはさげがみと見えたり。かみかたちの禮義によりて心の敬をますもの也。いはんや祭祀に婦人神に事ることをつゝしみて誠あればかみかざりまでも僮々と正しき也。夙夜在レ公は、云所潔齋の所也。祭の備の用意習禮など有べし。被之祁々は、かみのかざりの衣服の躰までゆるやか也。薄言還歸は、祭終て私室に歸る時、其躰ゆるやかにて歸ことをいそがす、愛敬の至

也といへり。大全細註云、熟玩レ之如下シ叢ニ出シ箇ノ賢婦人ノ來上ルガ。其ノ意緒精神皆可シ見ッといへり。追レ遠の祭はいにしへよりかたきゆへに、祭に眞實あらば、人心も歸すべきと曾子もの給へり。殊に婦人の身としてよく如レ斯ば厚の至り也。今の世とても佛事祭禮は宗ごとに執行といへども、心の誠を盡すべき思ひはなし。佛者は世のなみにて不誠をつくすものどもしらざればさもありなん。たま〱其非を辨へ、聖神の道を篤信して追レ遠の祭禮をなす人は、愛敬の至情をおこして誠敬を盡すべし。采蘩のごとくならでは神を祭の本旨に非ず

采蘩三章々四句

喓々草蟲。趯々阜螽。未レ見ニ君子一。憂心忡々。亦既見止。亦既覯止。我心則降

賦也。草蟲阜螽はいなごの類也。喓々は鳴聲也。趯々はおどるかたち也。草虫鳴とき阜螽躍てしたがふといへり。忡々は心やすからざる也。此時いまだ紂が政にて南國の諸侯大夫都に仕て勤勞の事あり。夫の留主に婦人獨居して、草蟲なき、阜螽のをどり、わらびの生ずるを見て、時物に感じて其君子を思ふ心ます〱深し。戀の詩なれども、夫婦の至情に出て思ひ邪なし。君子の歸來り逢事あらましかば、我心落つきぬべきものをと也

陟ニ彼南山一。言采ニ其蕨一。未レ見ニ君子一。憂心惙々。亦既見止。亦既覯止。我心則說

蕨はわらび也。惙々はうれふる也。南山にのぼるは託していへるなり。こひしきかたを望むには、高所にのぼりてそなたの空をながむるところ也

陟二彼南山一。言采二其薇一。未レ見二君子一。我心傷悲。亦既見止。亦既覯止。我心則夷

薇は蕨に似て大なり、今のぜんまいといえるにや。首章に忡々といひ、次に惙々といえり。忡々よりも惙々は憂深し。また傷悲といえるは、惙々よりも甚し。是いまだ君子を見ずして憂の深き躰也。不仁無道の紂王を君とし事れば、氣遣のみにて安からざる意をふくめり。降は心やゝ放下するをいふ。說は悅也。夷は心氣和平常にかへる也。君子をみざる間は心常ならざる也。虫鳴采蕨、是皆時物に感ずる思ひ也。忡々惙々傷悲これまたひとしき思ひにして、一節々々よりも深し。降說夷も一般の意思にして、一節〳〵よりも喜のあつき也。其人の性情の正言外にあらはる。卷耳は后妃の其君子を思ひ給ふ也。草虫は太夫の妻の其君子を思ふ也。汝墳殷其雷は行役の者の妻其夫を思ふ也。尊卑の分は異也といへども室家の情は則一也。行役の久しき、別離の思ひはありといへども、貞正純一のこゝろざしのみにして怨恨の情なし。これ國風の正しきとする處なり

草蟲三章々七句

于以采レ蘋。南澗之濱。于以采レ藻。于二彼行潦一

賦なり。蘋は水上のうき草也。藻は水底に生ずる草也。蘋藻ともに清水に生じていさぎよければ祭祀に神にすゝむる也。是も婦人自身とるのみにあらず、南澗行潦の蘋藻をとれと下知する也。諸侯の卿大夫も大身也。百乘の家なれば、軍陣に七千貳百の人數あり。行潦は流水のわかれてよどみとゞまる所也。南國文王后妃の德化をかうぶり、

太夫の妻よく祭禮を奉ずるを、其家人其事を叙て美る也。采蘩は諸侯の夫人の誠敬をほめ、此詩は太夫の妻よく祭事を勤る事をほむる也

于以盛レ之。維筐及筥。于以湘レ之。維錡及釜

筐は方也。筥は圓也。何も竹器也。湘は烹也。錡釜はかなへがま也。何も食物を烹とゝのふる器也。蘋藻とる所を令し、とり來れば筐筥に入置、祭る時に及で、かなへがまにてとゝのふる事まで皆自身是をみる、誠敬の至なり

于以奠レ之。宗室牖下。誰其尸レ之。有ニ齊季女一

宗室は大宗の廟也。諸侯は適子一人其國を相續するゆへに、二男三男庶子あれば、愚不肖は庶人とし、善なるは士とし、大夫とするもあり。それを其家の大宗として祭ときは、太夫の始祖にして廟あり。末の世諸侯の末子に領地を分などする事は先祖の不孝也。聖人の道に非ず。牖下は室の西南の隅也。これを奥といふ。誠敬を盡してとゝのへたる物を、婦人みづから持來りて神にすゝむるを奠といふ也。尸は主也。齊は敬也。季女はをとめとよみて、年わかき婦人也。年若きは事になるゝの功もすくなきに、此季女婦人がたの祭祀の事をつかさどりて、齊敬おこたる事なく、其序に順て常あるをほめたり。季女の質美にして父母の家のならはしふかき故也。後世老師宿儒といふともよく及ぶものすくなからん。聖人聖女の德化の及べる事遠し

采蘋三章々四句

蔽芾甘棠。勿㆑翦勿㆑伐。召伯所㆑茇

賦也。蔽芾は盛なる皃也。木の枝葉のしげれる也。甘棠はあまなしとよめり。今の水なしなるべし。白きを甘棠とし赤きを杜といふ。杜は澁く酢し、今のきなしといへるなるべし。翦はその枝葉を切也。伐は其大なる枝本幹などを切也。召伯は召公方伯たり、諸侯の長也。茇は木の下にとゞまる也。召伯南國を巡行し給ふとき、甘棠の下に居て文王の德教を令し、民の訴へをも聞給ふ。其後民人その德を思ひ慕のあまり、其樹を愛してかくいへり。予近比江州小川に至り、中江氏の舊跡を尋侍りしに、中江氏の住給ひし屋鋪に大なる藤あり。是によりて門人藤樹先生と號すと也。村翁の云、遠方より來る旅人、先生の事跡をたづね藤樹をみて愛する人多しといへり。中江氏は田舎の隱士といゑ共、其德義のおほはざる所あれば、世人其實をしたふ事あり。況や召公德位兼備り澤を民に施す事年有し世を經るまでわすられずして其德をしたふ事むべ也。其物をみて其人を思ひ、其人を思ひて其樹を愛す。人心を得るの至り、古今同じき所也

蔽芾甘棠。勿㆑翦勿㆑敗。召伯所㆑憩

敗は折也。因よりも折はかろし。憩は息也。木の下にしばらく休み給ふ也

蔽芾甘棠。勿㆑翦勿㆑拜。召伯所㆑說

拜は屈也。說は舍也。召公の德化をかうぶれる民久しくして其德容を不㆑忘、故にしばらくこしかけ休み給ひし棠梨の枝をきるに忍びざるのみならず、手折かがむるにも忍びざるは愛する事のますますあつき也。木陰にとゞまるとい

ひ、いこふといひ、やどるといふ。思ひ出る事のいよ／＼深き也、召公の德の人心に浹洽することを見るべし。或曰、周公の聖德にて民其德を稱する事の召公に不及事は何ぞや。云、國中の人は近く文王后妃の德行を見きくによりて也。又周公の德の廣大なる故に皆文王后妃の化に歸するにても有べし。諸侯の國は遠ければ直に召公の德行をみるゆへなり。或云、漢唐以來は官廳とて公舘を美々敷かまへて、それにて政令を行ひし也。末の世は少の事にも庄屋名ぬしかれこれよびよせ引つけ、時過るまで久しふまたせ、路次宿所の雜用といひ、農のいとまを妨といひ、無要の權威に高ぶりて、下のいたみをしらざるに、召公の樹の下へ出て政令せらるゝは、召公一人の德にも非ず、古代の易簡の風を鑑むべし。詩の風を見るといふもかやうの所なるべし

甘棠三章々三句

厭浥行露。豈不二夙夜一。謂二行多一レ露

賦也。厭はうるほへる意也。行は道也。夙は早朝なり。南國の人召伯のをしへにしたがひ、文王の化に復して前日の淫亂の俗あらたまるゆへに、女子禮義をもて自守り强暴の者にけがされず、みづから志をのべ此詩を作りて其人を絕也。我早夜に行事をねがはざるにはあらず、道の間に露ふかくして衣ぬれうるほさん事をおそるゝと託していへり。かいこの時桑つみにいづる者、いまだ明はなれぬ早朝よりやどは出れども、歸りには暮る事あり。さやうの事もその以前には心づかざりしが、今は心を用るなるべし。事なくとも常にうたがはしき行跡のなきやうにするは賢

女の道也。婦人たる者は此たしなみ肝要也。女子は父母にしたがひてよすが定まるものなれば、父母の心へよからざるは、或は富貴にめで、又は自の助けにならん事などをはかりて、禮義をかへりみずして嫁せしむる者あり。女子はをろかにして親にまかせ、もしは少々心の付者あれども、其恥にあらざる所恥廉そのことはりをいふ事なく、不義の夫に行て、のち〳〵は身の害も出來、父母のなげきとなれり。みづからの禮義を以てよく守り、父母の命にてもかやうの事には順がはざるも又孝也。況や父母の命なくして、淫夫の道びきに順ふ者はいふに及ばざる事也

誰謂雀無レ角。何以穿二我屋一。誰謂女無レ家。何以速二我獄一。雖レ速二我獄一。室家不レ足

興也。嫁は媒をもて求て室家の禮の調たるをいふ。速はまねきむかへんとする也。貞女の自守り禮なき夫に不レ順時男子は兼て室家の約ありとして召公に訟る也。時に女子詩を以てことはれる也。雀に角あるがごとく我屋をうがてども、實は角なし。なんぢに室家の禮なし、しかるに我を獄にまねきて娶るべきと云。たとひ獄にまねくとも實に禮のたらざるには順まじきと也。是は父母兄などにものいふがごとし。召公は諸侯の長なれども、萬民にのぞみ給ふ事父母のごとくなれば、人心の歸する事、子の親にをけるがごときは德化のいたり也。さすが女の身として、君上の前へ出て、みづからものいふにしのびず。又上への訴狀に書もいかゞしければ、求る男への返答の文の詩に作りて、志をいふ事尤殊勝也。貞女の志を自ら伸しむる者は召伯の明也といへり。鎌倉泰時の時分阿佛房といふ女房、嫡子の爲氏不孝にして兄弟共不和たりしかば、泰時に訟し時、訴狀を短歌に作りて、歎を以て思ひをのべたり。鎌倉の評定衆感ぜられ、本より阿佛が道理なれば願のとをりになりぬ。是又泰時の人民の情の下に隔せざるやうにせ

られし故也。中古までは日本の女もかくのごとくこそありしとなん

誰謂鼠無レ牙。何以穿二我墉一。誰謂女無レ家。何以速二我訟一。雖レ速二我訟一。亦不二女從一

鼠に牙なしといへどもあるかごとく墻をうがつと也。前章に不レ足といふは禮なきをせむる也。此章に不レ從といふは義を以て斷る也。意は前の章に同じ。貞女の志禮を守り義を取、召公の化をかうぶり禮をなす事深し。古人室家の禮をとゝのふるには納采とて、男女の才德氣質相叶ふべきをえらぶ也。身代の貴賤貧富をたくらべず、人がらのよきたぐひを媒せしなり。問名(トヒナ)とて女子の父母の姓氏生所等を問也。納吉(ナフキツ)とて卜筮して吉凶をみる也。納徵とて互の音物土產物などを定る也。請期(セウゴ)とて婚禮の日を定る也。如レ此ならざれば、婚姻の禮備りたるにあらず。或云、行露の女子貞心にして男女は強暴也。文王召公の教化の女に及て男に及ざるが如し。云、此時南國の人商の惡に染れる事年久しく、周の法をかうぶる事久しからず。或は變じ或は不レ變。固に一同に非ず。文王の化これを大陽にたとふるに私照なしといへども、陰崖を照す事はひとり後也。春陽私なしといへども其陰谷にいたる事は稍をそし。事勢則しかりといえり。其上女は南國にのみありて、文王后妃の德行を見聞のみ也。男は他國に行て、紂が淫惡の風に習ふ者有べし

行露三章一章三句二章々六句

羔羊之皮。素絲五紽。退食自レ公。委蛇委蛇

賦也。小なるを羔といひ、大なるを羊といふ。皮は裘也。大夫の常の服也。白き糸にて皮と皮とを縫合せ、ぬい目に五所かざりをする也。古代の服ゆへ今はつまびらかならずといへり。退レ食は朝に勤仕して食事に公門を出て私室に退なり。委蛇は自得の皃也。ゆるやかにゆたかなる躰也。南國文王の德化をかうむりて、大夫の諸侯につかふる者、中心愧怍の事なく、外皃威儀あり、衣服常の制ありて節儉正直也。德義可レ法。容止可レ觀。進退可レ度の氣象を詩人のほめて作れる也。孝經に非二先王之法服一不二敢服一。非二先王之法言一不二敢言一。非二先王之德行一不二敢行一。との給へり。君は深宮に在て皇極也。其德行みがたし。下のみる所は大夫の服、言行にあり。天道も大極はあらはれず、隱れて陰陽五行の事となる。みる所は日月星の運行、四時の錯行也。日月の代明に四時のうつりゆく、常に違事あれば、天下の耳目をおどろかす。大夫の服言行法に不レ叶ときは、人民の視聽をおどろかすこととなれば、聖人卿太夫の者に於て委く說給へり

羔羊之革。素絲五緎。委蛇委蛇。自レ公退レ食

革は皮の毛をさるをいふ。緎は界限也。紽緎總三字何も皮のぬい合せやう、ふさを付るなどの事とみえたり。今も位官の服には所々かざりあるが如し

羔羊之縫。素絲五總。委蛇委蛇。退食自レ公

縫は皮をぬへる也。此詩の賢才をいへる周南に兎罝あるがごとし。文王の德春風和氣のごとくにして在所に光耀を生ず。故に人才の成就する者、野にとゝろなれば逵々の武夫公侯の腹心有、朝にあるをみれば委蛇の太夫有て節儉

正直也。聖徳の及こと淺深遠近なき事をみるべし。三章ともに大夫の言行を美しくいはずといへども、其言行をまのあたりみるがごとし。是又詩人の妙也。詩哥ともに表に道理をのべ、かど〳〵しきは本意にあらずと也。ある儒者論語の言葉をそのまゝ用て哥をよめり。人々よき哥と譽りしに、或公達聞給ひ、かくのごとくつゞけんは論語を其まゝ吟じたることそまさらめ、との給へり。其道を心得たる人は又異也。月花を興じ、山水草木の風景をいひ出し、人情を何となくいひのべても、其性情の實よりよみ出れば、人の感慨を催し、人の教となり、忠孝貞順の道も一二字の中にこもることそ詩哥の本意なるべけれ。詩哥ともに道哥道詩といへるはかど〳〵しくかたきやう也。二南の詩の言近して旨遠きを吟詠すべし

羔羊三章々四句

殷其雷。在ニ南山之陽一。何斯違レ斯。莫ニ敢或遑一。振々君子。歸哉歸哉

興也。殷は雷の聲也。山の南を陽といふ。何斯の斯は夫を云。違レ斯の斯は此所を云。莫敢或レ遑は行役の君子、何事のありて歸る事のをそきや、と其勢をかなしみて、婦人の作れる詩也。振々は信厚也。雷は定所なしといへども、聲南山の陽に有。我君子は何として此常のあるべき所を去ていとまなきぞと思ひやれる也。旅に行者の雨にあふ時は、居る者の安きをおもひ、居者風雨にあふ時は、行者の勞を思ふは人の情なり。まして夫婦は人倫のはじめなれば、能和して互の志通ずべし。しかるに今時婦たる者は、夫のたらざる事をみてはかくこそあるべき事をと思ひて、

わがみの不足をばいさゝかもかへりみず。夫たる者も、又婦人の不足のみとがめ、あるひは全からん事をもとむる凡心よりして一家和せず、子孫親族もはなるゝ事あり。婦人は貞正純一を守る者なれば、たとひ夫は不足なりとも、振々の君子と思ふこそ女徳とはいふべし。夫を君子といえるも、名のみいふにはあらじ。その女の心には、君子のごとくにおもふ也。君父に事るも同じ道理也。世の婦人たる者、此賢婦の心ならましかば、天下に不足の夫なかるべし

殷其雷。在ニ南山之側（ホトリニ）一。何斯違レ斯。莫ニ敢遑息一。振々君子。歸哉歸哉

息は止也。南山の陽といひ側といひ下といふ、ことばをかへていえり。異義あるに非ず。或云、南山は王都をさして云、雷は震の卦長男也。君子を云ともいえり

殷其雷。在ニ南山之下一。何斯違レ斯。莫レ或ニ遑處一。振々君子。歸哉歸哉

始は敢て暇あらず、中は敢止まらず、終は暇あきをらずと、一節〱よりもきびし。是詩人の法度也。三章を諷詠するに、其勤労を思ひやる事深く、其徳を好する事重く、其事おはりて早くかへらん事をねがふの情あつし。みな誠に出て欲を速にするの心なく、怨咎のこと葉なし。紂王が代なれば、下にきづかひなる心あれ共、眞實あつき君子なれば、無事にかへらんやとなり。豐城朱氏云、何斯違レ斯は、其久しきを念也。莫レ敢或レ遑は其勞を閔也。振々君子は其徳を美る也。歸哉々々は其至事を望む也。往レ役者は君子上に事るの義也。思念する者は婦人夫を憂するの情也。二の者ならび行はる、詩の性情の正を得ると云もの也

殷其雷三章々六句

摽有レ梅。其實七兮。求レ我庶士。迨二其吉一兮

賦也。聖人の禮、仲春を以て婚姻の禮をなさしむといへども、故あれば五月まではくるしからずといへり。五月雨を梅雨といひて、梅の色づく時分也。熟しおちて木に七ッのこれるはすくなき也。時分をそけれ共いまだ婚をなすべし。諸士の中に我女子を求る者あらば、吉日をえらびて約すべしと也。末代の風俗貧家の女は婦德あるもの嫁しがたく、年過るまで父母にやしなはれ、富貴の女子は時に及ばずして早く嫁し、媒もよきことのみいひてほこらしむ。かやうの事にて家道おとろへ、人品いやしくなりゆく事也。夫婦は人倫の本、子孫相續の道なれば、金銀衣服器物等を事とすべきに非ず。女子は婦德婦言婦容婦功を本として婚禮をさだむるならはしならば、外に谷しき夫なく、內にうらみの女なかるべし

摽有レ梅。其實三兮。求レ我庶子。迨二其今一兮

木に三ッのこりたればいよいよ少し。吉日をえらぶにいとまあらず、近日に約すべしと也。當世男子も年若くして妻を娶り家をも相續したる者は、その子の年過るまで方住にて居者の苦勞をも察せず、ことに婦人は思ひやりすくなき者なれば、その身十五六歳にて嫁し、やがて家持となり、我まゝに暮し來る者は、よめなどの年過まで部屋住にてある者のくるしみもしらで、家を渡し、隱居すべき思ひはかりもなし。或は娘などの廿あまりまで父母に養はれ居る者の苦勞なる情をもわきまへざる也。又世中の人情といふもの、處女の時はいづかたにか定るべきと思ふよ

りして、つゝしみもふかく女事をもつとむるもの也。よすが定りぬる後は夫の愛になれ、或は身のかたづきぬるにつけて、しらず〳〵愼もおとろへゆく也。しかれども、いまだ夫のあるに恥て、少はつゝしみありて、色欲などにはさしてうごかず。もしは年わかき內に夫にはなれ、親兄弟にかゝり居、又は男子ありてやしなはれゐるひとり身の婦人は、いつしか心ゆるみ、つゝしみもわすれ、かへりて色念もおこりがちにて、人品おとりゆく者あり。同じ一人の人なれども、境界のしからしむるにて、かはりゆく事あり。この故に父母のをしへよく、女子の心ざしよく、つゝしみて終身一ならん事を思ふべし。詩のみならず、和哥も至情をいひて、みなをしへとしたるものなれば、詩哥をみて其人の心をしり、今の人情をしるの助けとせば、詩哥も人道の益となる事大成べし

摽有レ梅。頃筐墍レ之。求レ我庶士。迨ニ其謂一レ之。

梅落盡たり、媒の人求る士に告語て約を定べしと也。右三章女子の自作にあらず、家人の作也。父母兄伯父叔母などなるべし。女子すでに嫁すべき年也。仲夏も過なばもはや來年まで延引する事なれば、家人氣毒に思ひてかくいゑる也。或問、諸儒の注みな女子の自作とす。自作に非ざるべしといゑる者をば非とす。女子自心事の實をいひて羞情なく廉恥なし。文王の化にあらずば此に臻じといへり。しかるに吾子女子の自作に非ず家人の詩也といゑるは諸賢の非とする所にしたがふがごとし、いかん。云、此說漢宋以來諸儒あやまりを傳へ來れり。異端懺悔の說に習へる者也。宋儒異學を退けて異學をはなれざる所ありといへるはかやうの事にや。夫婦男女の情は父も子に得ず、君も臣に得ずとて、慈父はしゐて子に令せず、仁君はをして臣に命ぜず、各其情に任ずる者也。賢男賢女を懼夫愚

婦のごとく令するはをしき事也。凡男凡女を賢士貞女のごとくするも却て害有。男女の情欲には氣質に厚薄あり、其人々の愼に淺深あり、一同にはなき者也。しかれども恥の心は天性にて非ずといふ事なし。ことに文王后妃の化の及所なれば、后妃の德は幽深にして閑靜也。年たけ給ひても處女の物恥するがごとく、女しく、あらはにものなどの給はず、文王と天地陰陽のごとくなるたぐひにて、御子達ありても事により直には物もの給はず、女師してうかゞひ給ふごとくなれば、其德行の及ぶ南國の婦人至情をあらはにいふべきに非ず。此詩を女子の自作と見ては、女しからず、才發に聞ゆる也。其上陽は陰に先だち、男は女に先だつ、天地自然の道理なれば、女の方より先達て婚を求る事をいふべきや。神代二ばしらの神めぐり逢て女神の方より言を出し給へば、不祥也と立歸り、かさねて男神先言を出し給ひて、夫婦となり給へり。我と云字になづみて自作といひ出し、それに理を付ていひたるもの也。先覺といへどもふと心得ちがひ有ては、それに道理を付る者也。詩は字數定りて易簡なれば、我女子と詩人の心に思ひて、三字用ひがたければ、略して我を求るといえる也。日本の言にも中略下略など略の例多し。詩は尤字を略する事多し。詩のみならず、語にも字畫にも略ある事はめづらしからず、隱情なく懸志なしといふは、かやうの事にはあらず。人皆情欲あれども、恥の心ありて不レ言不レ爲、恥心うすく情欲をあらはさば禽獸に近し。父母兄伯叔など取はからひて、心志を盡すなれば、女子の言をまつべきに非ず

摽有梅三章々四句

嘒彼小星。三五在レ東。肅々宵征。夙夜在レ公。寔ニ命不レ同

興也。嘒は微なるかたち也。三五は星のまれにみゆる也。肅々はつゝしめる貌也、宵は夜也。寔（ショク）は實と同じ。南國諸侯の夫人后妃の化をうけて、妬忌の心なく、其下の衆妾をめぐみよみする事ふかし。衆妾の君所に至る事あへて夫人にひとしからず。星をみてゆき、星をみてかへる。故にその見る所に於て興をおこして云、星は東にあり、われは今公所にあり。かく君前にすゝむは夫人のめぐみの及所也と深く感じて述る也。われ昏時にゆきて旦時にかへり、往來に勤勞する者は卑妾の分にして夫人の命と同じからずと安ずる也。男子の文を學び、道理をいへる者もひとり安ずる事はかたし。殊に婦人の身としてよくかくのごときは文王后妃の德の及ぶところ也。いにしへ天子の后は每夕とのゐし給ひ、五日に一度づゝ休息の事あり。その夜九嬪かはり〴〵君所にとの居する也。數定りてわたくしにめさず、わたくしにすゝまず。こゝを以てをのづから上に妬忌の心なく、下に怨咎の思ひなし。或問、后夫人おはしまさねども妾其夕にあたらずといへるは何ぞや。云、后夫人おはしまさずといへども、后夫人のおはします座にはとのゐせざる也。妾は妾の居べき座あり。又后夫人病氣などにて出給はざれども、令なきには其夕に出ず。后夫人より御とのゐすべき夜なれども、如此事ありて出る事あたはず、此間はいづれもかはりて御とのゐまいらるべしとのたまふ令をまちて出る也

嘒彼小星。維レ參與レ昴。肅々トノ宵征。抱ニ衾ト與一レ裯（サウ）。寔命不レ猶（ヲナシ）カラ

參昴は西の方にみゆる星也。衾は今の夜着（ヨギ）なり。袖なかりしと見えたり。裯は衾を包てゆき、下に敷ていぬるもの

と見えたり。十二人は官位ある宮女にて、つぼねにてはめしつかひ多し。路次までむかひに出て、うけとるべけれども、后妃に同じくせざる禮にて、君所をばみづからいだきて退く也。命の同じからざる事を知は敎化の至也。宵には東の星をみて出、旦には西にある星をみてかへる。宵は西山の入日の餘光にかくれて星みえず。あかつきは東方の大陽出る近ければ、星さだかならず。宵と旦とは光つよき星も大陽のかげにて微光也。十二人の宮女つぼね／＼より君所にいたる長緣などを行事なれば、いまだ夜分ながら人顏も大かた見え、足もともたど／＼しからぬ時にいづる也。はじめよりさぶらひたる宮女かはりてかへる也。朝がはりの宮女も又しかり。君朝に出御の時なれば、御ぐし御衣冠などたてまつる役人未明につぼねより出る宮女をまちて、夜中とのゐせし女中はかへる也。后妃といへども朝出る宮女をまちてつぼねにかへり給ふ也。君は朝に出御なり、南面しておはしまし、諸臣北面して君命をうけ、うかゞふ事あれば奏する也。諸臣事終り朝を退ても内所へは入給はず、晝の間は別殿の御休所におはしまして追々告來る政事を聞しめして、或は讀書或は講習或は六藝などをこゝろみ給ひ、夕に入所有也。故に女中は終日つぼね／＼に在て自分の用をも達し、琴書をもてあそび、女事の公用あれば后妃の命を聞也。諸侯夫人も又然り。或云、德化ならでは婦人などに志をとり道しることはかたかるべし。このゆへに唐日本ともに女に道學ある人はすくなしとみえたり。しかるに今翁問答、女子訓等の書の行はれて何の益ありや。答云、女は閨の内にのみありて外のまじはりなきゆへに、聖學の志ある婦人も世にしられず、父兄夫もしは他人にても正しくしたしき人ならでは師として學ぶべきにあらず。故にもろこしの文國にてさへ列女傳に書のせし外に多かるべきなれども、大躰の心ざしにてはしれ

さるべし。日本にても昔は女の哥人皆文學ありし也。哥も道理に通ぜずしてはよくは有べからず。古人は詩哥ともに皆心の助となしたり。中比より質すたれて學文詩哥ともに遊びごとのやうになりたり。女も志あり、よき師だにあらば、などか道を學びざるべき。朱文公も婦人の爲に一部の書を作るべきあらましありしが、餘力なかりしにや、その題目ばかり殘れり。一に正靜、二に卑弱、三に孝愛、四に和睦、五に儉質、六に寬惠、七に講學と七の品あり。いづれも文字の義によりて思ふに、尤なる教なるべし。予が同志の友の妻、或娘妹に女子訓等の書をみて志を發し、孝經四書まで能よみたり。輪廻後生などのまどひなく、貞正純一を心にかけ、眞志ふかき婦人四五人もあり。婦人也。其上年も久しからざる故に人しらず。猶世中に有べけれども、いまだ聞えぬなるべし。是ひとへに先覺の德化によれる所也。上に聖賢の君おこり給ふ時は、國天下なべて善に化し、下に其人出る時は天命ある者のみ男女ともに其教をかうぶるといへり

小星二章々五句

江ニ有レ汜。之子歸ク。不ニ我以一。不ニ我以一。其後也悔

興也。江水よりわかれて川となり又江に入を汜といふといへり。もろこしには江水より流出る川多き故に汜とゝかしこにありと也。之子は嫡妻をいふ。我とは媵みづから云也。以はをのれをつれてともに行べきをいふ。いにしへは諸侯の女子の嫁するに娣姪を媵とす。八歳の時其約あり、十五まで父母の家にありて　それより嫡の方に行て、

二十歳にして嫡にしたがひ君子に行也。此時汜水のかたはらに約あれども嫡妻の行ときにつれられずして國に年を經る媵あり。其後にかの嫡后妃の化をかうぶり、よくみづから悔さとり媵を呼むかふる也。媵は君子の妾と成ものなれば、人がらのよきをえらび約してともに行也。中にも容色よきをば妬忌有夫人は殘してつれざる事あり。時に江水の汜あるをみて興をおこして作れり。江には汜あり、しかるに我を共にせず。今すでに悔てよべるとうらゝかにいひのべたる躰餘情あり。世中我に道理あれば、其理を立て人の非をとがむるは凡情の常なれば、ことごとくもて出ていえるゆへにやぶれに成事あり。何事も世のありさまはかくのごときものと思ひ過せば、人皆一躰の誠ありて、後にはみづから其非をわきまへて無事になり行也。世の婦人此媵の心を心とせば和せざる者あるべからず

江有レ渚。之子歸。不二我與一。不二我與一。其後也處

渚はすざき也。水のわかれて出來る也。處は安也。妬忌にてつれざるは欲心なれば安からず。悔さとりてよびたるは理にしたがひたれば心安き所を得たる也

江有レ沱。之子歸。不二我過一。不二我過一。其嘯也歌

沱は江のわかれて小水となる也。過は我をつれ行ざる也。嘯は口をほそめて聲を出し、いきどをりの氣をのぶる也。悔る時の躰也。哥はその安ずる所を樂む也。慶源輔氏云、從レ欲者躁急ニシテ而褊狹也。復ル禮ニ者ハ安舒ニシテ而和樂ス。從レ欲ニ而悔ツ。循レ理ニ而樂シム。得ニ性情之正ヲ一也といへり。小星江有レ汜の心ざしをみるに、聖化おこなはれて美俗よりなれる所也。高きもくだれるも嫉妬の情甚しき故に、召仕の女房などに氣づかひをする事凡情の當也。里本より來し筋目の

者ともいはず、少の事にも追戻し、或はもとの根ざしいやしからず、女事の勤などよき物にても、ねたみの心よりはいさゝか堪忍の心もなく家を出せり。里がたもこれをよしとする風俗なれば、おちめのとのやうの者も同じ心になりて、人をにくむ事甚し。このゆへに女しく能ものはながらへざる也。心やさしく形も見にくからぬ者は、色あるやうなれども風よきもの也。心はげしく形くだれる者、色なきやうなれども人がらいやし。このいやしき者をこのむやうなる風俗なるゆへに、諸侯大夫の家〳〵の奥がたのならはしいやしく、女子の習まで次第にくだりて、かくなりもて行も、この妬忌のいやましたるよりおこる事なれば、よくつゝしむべき事にこそ

江有汜三章々五句

野ニ有ニ死麕一。白茅包レ之。有レ女懷レ春。吉士誘レ之

興也。麕は鹿の類にして角なし。懷レ春は天地交感万物滋生の時也。聖人天地萬物の情にしたがひ中春に媒をして男女婚姻の禮をなさしむ。家人媒親しき者などかれこれいひあつかふ事なれば、女の心に感じて、春はいかに定まる事ぞと思ひあり、一生のさだまりなれば也。南國文王の化をかうぶり、女子貞潔にして自守り、強暴の男女におかされざるを詩人よみして云、善士あらば眞實の情よりわざと禮義を備へて來り求むべし。野に死せるくじか有をとりて、白茅にて包み物がましくみせて、禮ありとして求るやうなる欺きにはいざなはれじとなり

林ニ有ニ樸樕一。野ニ有ニ死鹿一。白茅純束。有レ女如レ玉

樸樕はつま木也。鹿は角あり。純束はつゝみつかぬる也。玉のごとしとは美にして物にけがされず、おかすべからざるのかたち也。前の詩につらねて其意を得べしといへり

舒而脫々兮。無ㇾ感ニ我帨一兮。無ㇾ使ニ尨也吠一

賦也。舒はしづか也。脫々はゆるやか也。感はうごかす也。帨は巾也、手拭をいふ。古しへは婦人の腰に帶たり。今もかゝへ帶とて手ぬぐひを用、女事のいとなみ桑つみ菜つみなどの時、ほかへ出る時用る也。女子のしづかにゆるやかなる德をいひて、其身に近付べからず、家にも來べからずといへるなるべし。帨をうごかす事なかれは、その身に遠ざからしむるをいふ。犬をして吠しむる事なかれとは、其家に來る事なかれと也。家に他の人の來る時は犬のほゆるゆへ也。禮儀の求ならでは隨ふまじきに求る事なかれと也。三章ともに字々にして意見をなす事なかれといへり。無禮をにくみてふせぐの心言外にふくめり。初には詞ゆるきがごとくなれども、後ますます切也。凜然としておかすべからざる事をみるべしといへり

野有死麕三章二章々四句一章三句

此章に無ㇾ感ニ我帨一といふは、我女子の帨を動す事なかれ也。尤古註の心も詩人女子の心を察して作れりといへり。しかれば摽有梅の詩に求ㇾ我といへるも女子みづから作るに非ず。家人の作なる事明か也

何彼穠矣。唐棣之華。曷不ニ肅雝一。王姬之車

興也。穠盛也。唐棣は木の名、大木あり、花咲實なるといえり。肅は敬也。雝は和也。王姫は周王の女子也。周は姫姓なるゆへに王姫といふ。王姫下りて諸侯に嫁し給ふ時、車服のさかんなる事唐棣の花のごとしといへども、富貴をさしはさみて夫家におごり給はず。其車を見るに能敬し能和し、婦道の善有べき事を詩人の美る也。二南に后妃夫人大夫の妻士庶人の妻までの德行をいえり。此詩王姫の下り嫁する美をいふ。遠近となく上下となく、文王后妃の教化の至らざる事なきことをあらはす也。二南をみて天下みな善には必化するの德治をしるべし

何彼穠矣。華如桃李。平王之孫。齊侯之子

桃李ともに花も實も美なる物也。桃は濃和に李は潔白なれば、王姫の女しく齊公の子の男らしきにたとへ、侯子皇女ともに德容の盛なる事をいえり。平王は文王也。文王の孫なれば武王の皇女也。文王を平王といふ事は德よく天下を正平するの義也。詩人の言葉の類如此の例多しといへり

其釣維何。維絲伊緡。齊侯之子。平王之孫

伊もまた維也。緡は綸也。いとを合て綸となる事男女相合て昏禮の調ほりぬるが如し。陽いざなひ、陰和し、夫先じて婦したがふは自然の道也。王姫の尊貴といへども婦の道にしたがふ事は、公侯大夫士庶人の女にことなる事なし。故に舜匹夫なれども帝の二女を妻とし、虞によめつがへし給ひき。王姫の身にて諸侯に嫁して肅雝の德ある事、文王大姒の化の及べるところ也。秦の代よりして後列侯の皇女を娶の禮すたれ、尚公主といひて、男をして女につかへ、夫の婦にしたがふごとくになりたり。これより人倫上にもとり、風俗下にやぶるゝといへり。夫婦の道は人

倫の本にして天地陰陽の理なれば、上より下に至るまで一夫婦は一天地也。しかるに里方の威勢をさしはさみて夫をないがしろにし、或は自の才知藝能にほこり、又は容儀外飾の人にまされるにおごり、或は夫の貧賤不才をあなどる。主人かくのごとくなれば、をちめのとつぎ〴〵の女房に至るまで、夫がたを見あなどる事、世中のならはし也。皆是地をして天の上にあるがごとし。わざはひ是より大なるはなし

何彼襛矣三章々四句

彼茁者葭。壹發五豝。于嗟乎騶虞

賦也。茁は生出てさかんなるかたち也。葭は芦也。生じやすき蘆を假かりて草木のしげくしげりたるをいふ也。豝は牝豕也。一矢にて五の豕をつなぎに射とりたるは鳥獣の多く弓の達者也。騶虞は仁獣也。尾身よりも長し。生草をふます、生物を不食といへり。諸侯の仁徳にたとへり。南國の諸侯文王の化をかうぶり、身を脩、家を齊へ、國を治め、民に仁ありて庶類に及び、草木しげり禽獣多し。しかれども田獵をなすは義也。田畠の害を除き武をならはす事田獵にしくはなし。鳥獣多からでは士民ともに武事達者ならず。聖代の政教文武かね備りたる事を知べし。これを物に賦比していえば騶虞の勉強によらずして自然に仁厚なるがごとし。周南は關雎に初りて麟之趾に終り、召南は鵲巣をはじめとして騶虞に終る。人道は夫婦閨門の内をつゝしむに初り、仁政國中より天下に及び、草木鳥獣に至るまで繁殖する事詩の意言外に見えたり。二南をあめる人の微意を思ふべし。或問、矢一筋にて獸五つを射と

るといふ事は實しからず。云、杷五つ一矢にも射つべき程獸多しと、武藝と蕃息とをあらましにいひたる物也。實に矢一筋にて五豕を射ふせたりと事實を必としては説べからず。春秋經などはよく事跡をふみて斷り、詩經は世の風、國のさまをおほよふにうつして、事跡の有無にはかゝはらざる處あり。是詩の餘情也。此詩のみならず、すべて詩哥の情かくあるべし。朱子の注も四書の格のやうに道理づめなる所ありて、詩の注にはいかゞと思はるゝ所あり。陽明子の鄭衛の論も經理よりみて詩には少うときやうなり。詩哥は理屈を先とし、又事實を專としては説がたし。風躰と吟情の上にあるべし。源氏物語などを詩經に同じといえるもかやうの事也。和漢ともに詩人哥人は景氣字法に專にして、道學にくらく、儒者は理義に專にして風興吟律の上にうとし。陶淵明、杜子美、紀貫之、藤定家などに聖學の心法をしらしめ、加るに音律の雅樂を得せしめて周詩を説せたらましかば聖意にもかなひ侍らん

彼茁者蓬。壹ニ發五豵一。于嗟乎騶虞

蓬は多して生じやすきもの也。豵は小豕也。麟之は興也。麟によりて興し騶虞はすぐに是を賦す。或云、仁厚の德を美るの詩に、多の獸を射殺す事を云はいかゞ。云、そのかみ仁政の行はるゝや鳥獸は腹ごもりを殺さず、魚尺にみたざればとらず。時を以て山林に入。これみな物に及ぶの仁也。しかれどももしげきをかり、多をのぞくは義也。神事祭禮にいけにへを備へ、且士民の武をならはさん爲に山野に狩す。是仁義ともにならび行はるゝの政也。遊樂の爲に殺生し、肉味を好てこれを殺すにはあらず。みもすそ川の鮎を取て大神宮の神前にそなへ、春日の神前にも常に魚をそなへ、若宮の祭には大和國中より數々の鳥獸を奉り神前にかくる也。神代よりの禮なれば、社僧もとゞ

むる事あたはず。魚鳥獸は人の爲に生ず、天地乳養の理也。このゆへに魚鳥獸はとれば跡より生じ、とらざれば漸々すくなくなるもの也。これをとるに制法有のみ。故に一草一木も其時に非ずして切は不仁也といへり。賢君の代には仁政にて造化を助け、天地の間に備る故に草木魚鳥獸多く生ずる也

騶虞二章々三句

或問、孔子謂二伯魚一曰。女爲二周南召南一矣乎。人而不レ爲二周南召南一。其猶三正二牆レ面而立一也。又曰、不レ學レ詩以無二乎言一との給へり。詩のかくのごとくいたれる事は何ぞや。云、齊家治國平天下に至るまで、人情事變によく通ず、されば其用行はれず。饒氏曰、詩ハ本二人情一。人情有レ好ムコト有レ惡ムコト。讀テレ詩ヲ而有レ得ルコトと云り。人民の境界さまざ〳〵ありて其思ひ千々也。人の氣質品々にて好惡こと也。しかるに凡人は我情の正不正さへしらざれば人情は猶しることなし。いさゝかこれをしれりと思ふ人も委しからずして、人に對して其情に通ぜざる故に、自己の心地も安からず、親族和せず。家の齊ノホラざる事常にこゝにあり。垣を隔て立るがごとし。一歩も行べからざるをいふ。況や人情によく通ぜずしては、ものいふとも郷黨隣里にも行はるべからず。周南召南は作者の至情をのべ、人の情に能通じて是をいふこと精密也。學者此道理を明辨して人情物理をつまびらかにする人は、詩を學びたると云べし。かくのごとくならば、四方に使するともよくひとりとたへ君命をも恥かしむる事有べからず。是二南を學ぶの益也。云、しからば變風に淫奔の詩の多きは何ぞや。答、詩經の始終をみるに、淫詩は十にして一二也。淫奔の詩の多き

とみるは、主意をしらで纔に正邪ある事をわきまへざるによれり。既に三百篇思無邪といへり。いかで淫奔の詩多しといはんや。朱子の注も脩身正心の學理より見給ふゆへに、淫奔の詩と注せられたる所多けれども、夫婦の情をのべたるばかりにて、淫奔とは見えがたき詩多し。陽明子も鄭衛は漢の増補ありて聖人の眞作ならぬやうに論ぜられたれども、是も道理を主として見給ふ故也。詩經は今の米つき哥、物もらひの小うた、さうと女海人旅行などに、貴きも賤もとり／＼に口すさみたる古風也。八歳にて學校に入、大學に入て理學より作出し、又君子になりて作たる詩ばかりにはあらず。このゆへにしばらく道理をすてゝ風俗を吟詠し、のび／＼として調にかけて感ある也。尤心ある詩どもは、文字のてにをは、心の優美もある物なれば二段にもみるべき事也。第一はたゞ風情まで也。古も盲者にうたはせて閨門房中部屋ずみの太子、民間の兒女までにうたはしめたるものなるゆへ、女子婦人の事に託したるも多し。或は父母の孝、君臣の禮、兄弟のしたしみよろづを夫婦の情によせたり。男女の情は自然に出て實たり。其誠の正しき時は外正しからずといふ事なし。是詩の主意也。是をしらぬ人は淫奔多しとみるもの也。古人さへ思レ無レ邪の一句に滞て多鳥獸草木の名を識と孔子の仰られし御心を察せざるに近し。詩經はまづは女わらはべに世のさましらせんとて、淺／＼と鳥獸や草木の名を知しめたる也。此淺／＼しきが聖人の至公にて詩經の意味ある事也。又淫奔の詩もあり。聖人のけづり給はざるは奥儀あるべし。何ぞ孟子の齊宣王にものいひたまひしやうに、道理のみにて詩をみるべきや。云、淫奔の詩は殘らずけづり給はずして、少にても殘せるは何ぞや。答、男女の情は實たれども、ながれては却て誠を失ふもの也。故に聖人禮を立給ふ事嚴也。二南には男女の情の實にして正しきをあら

はし、變風には情に過て風俗の下れる事を歎しめ給へり。日本の哥は情以和を本とせり。此國の人は心たけ過て和をやぶり治がたき勢ひあり。人と生れ誰ものがれぬ男女の情によりて哥をよみ、たけきに過て野人なる者もみづから恥るやうに、いにしへの神人をしへをなし給ふ。和哥の道のおこる所也。故に禁中の宮女にても數の外は月花によそへて哥をよみ、たがひの志をいへば、君もその情をあはれみ給ひてゆるさせ給へり。中宮にめしつかはるゝ女房に文をつかはしたるを御らんじつけて、あはぬを恨みたる哥也とて、やがて中宮の御媒にて夫婦となし給へり。武國の風俗にて上代はかくのごとくならざれば武き勇士の心をやはらげがたし。是和哥の戀を奥義とせし心也。しかれども愛情の眞實より出て淫亂不仁の行はなし。末の世になり武國の風俗もおとりゆき、哥の道もしらねば、高の師直などが好色は淫亂不仁也。男女相たはぶれ、不義の行も出來しより、哥の衰へたるにや。詩哥の性情の正によれば人道美也。不正にながるれば風俗くだり、いやしくなりゆくと見えたり。紫式部源氏物語に、人情の正と不正といにしへより和漢の書にありし事を、其名をちがへて書置たるも此道理をしらしめん爲也といへり。變風に淫行不正の詩を聖人のけづり給はざるも、人情をしらしめんため也。後世は誠すくなく、人情正しからざれば、戀を本としては和の助とはならで害あり。此國の武も衰へたれば、いにしへの風俗は今の大罪となり、男ともに殺さるゝ也。人情時變古今異なる所也

問云、源氏物語を詩經にならべいへるはいかゞ、答、生魚生鳥の肉味はたゞそのまゝに調えても美味也。精進の調菜はごまいり酒沙糖などを用て其味をたすけて美味となれり。然どもその用に至りては風味のおとりたるといふば

かりにて助けたるをいふことなし。その本をみれば肉味とは違有事也。二南の詩のごときは自然の美味のごとし。源氏は聖學の心を以て助てみる時は美也。そのほかの和書多しといへども益すくなきは、野草のごとくにして助ても調菜成がたきがごとし。世の學者の源氏物語を淫亂不節の書といへるは、人情の正不正を知といふ詩の奥旨にもいたらざるか。中夏日本古今人情同じければ、詩は人道の益たる事すくなからず。源氏は和國の風俗人情をいひ、古代の貴素の風をあらはし、禮樂を傳たる書也。故に人心の感を催する多し。好色の物語は源氏の皮膚也。たとに理を知り事を覺えたるばかりにて、心情に通ぜざれば、道も行がたく、詩哥も益少なし。故に定家卿も和哥に師匠なし、心を古風にそめ、言葉を先達に習といえり。二南を見れば直に聖代に逢が如し。源氏物語をみれば王代の古風と共に遊べるが如し。問、二南の解の内、先儒の注にも見えざる說あり。新說なりとて世人不審し侍らんか。答、そのみる所の品は千變萬化なれども理は則一也。聖賢の敎る所、學者の學ぶ所、そのをもむきはさまざまなれども、入德の助となる事は一なり。何ぞ一定になづみて變通せざらん。易は聖學第一の書なれども、文王のみ給ふ所孔子ののゝべ給ふ所一定ならず。程子の傳、朱子の義又たがへるが如し。しかれども理は則一也。聖人の言、含ところ多し。古人の注解に其理を一ツ云二ツ云、段々に云來り、七も八もいひのべて、もしは二ツ三ツの殘れるも有べし。其を一にても半にても人心の靈にて今の人も見出ていふ事あらん。世間の文學者は古人の注にある事ならでは用ざるゆへに、今の學者の抄物は古注のごとくなれば、今の人情事變に通ぜず。文學の爲によからめど、人道には益すくなし。哥をよめるも古哥に似たるをば古きといひて嫌へり。心言葉ともにあたらしくよみ出るにあらざれば用ひ

す。數百年よみ來ればもはや趣向もあるまじき事なれども、人心の妙にて珍哥も多く闕、然れども理は古哥ともに一なり。聖賢の書をよみて見立は古人にかはれりとも、一理によりて人心をひらく益あらば、古人の心に違へりとはいふべからず。その上其詩にかくのごとくの注解はなしといへども、他の理を以てをしてみる時は、みなより所有、出所有て論ずる所也。今日の私言にあらず

女子訓上

○謹云 婦徳婦容婦言婦功云々婦徳ハ柔順貞節ノ徳ヲ云也。婦容ハ身ノ飾リヲ云也。婦言ハ物イヒヲ敬ム也。婦功ハ織縫ノ事ヨリ續書畫ヨミ箏ヒク等ノ事迄賤シカラヌヲ云也。女子幼年ノ時雛遊ヲサセシムルハ惣テ此女ノ禮節ヲ、ヒイナニ事ヨセテ習ハシムルト也

女子訓上

婦人あり問て云、鏡草を見侍れば、女は嫉妬なきを賢なりとすと見え侍り。まことにしつとの心より家もさはがしく不仁の事有て、子孫の災のたねとなりしためし高麗唐倭國ともに多く侍ればつゝしむべき事の第一也。さて婦人は賢女になり侍りて、男子の作法古事に見えたる人々よきとも申がたく侍らん、女により得かたたる教のやうにおもひてうけひき侍らず、賢夫賢女の夫婦たらんこそ世人の手ほんともなりぬべけれ、此あいだうたがはしく侍り。こたへて曰、

まことによき不審にて侍り、つたがぬ船のうきてたがるゝためしもあれば、婦人のあまりうつくしきに過て、夫の亂行(らんぎやう)をとゞめざるはかへりてかろきかたにて侍り、妻もちたるかひもなき事也。夫を大切に思ふ心より制すると、ねたむ心にてふせぐとは似たるやうなれども大に心かはれり。いかりはらだつこゝろより制(せい)せばこそ嫉妬(しつと)とも申侍らめ。上らふしくうらなき心にてにくからずうちかすめ、夫のうきたる心をしづむべきやうなる人をこそ貞女とは申侍らめ。夫もはづかしき心よりみだりなるこゝろはやみ侍るべし。人の家のあるじにはかゝる人こそあらまほしけれ。業平の北のかた紀氏(きうじ)のためしあり。これは上らふに生れそだちて、言葉に出るをはづかしくおもひて色には見えざりしかども、夫を大切に思ふこゝろの誠通じて、河内がよひをとゞめしとなん。それ地(ち)はからやまとこまなどゝ國々わかれたれど、天はたゞ一なるごとく、夫には位によりて妻妾の數あれども、婦はたゞ夫一人のことはり也。このゆへに我夫のほかには、天下に夫なきの心を貞女の道とは申侍り。こまもろこしあし原の地いづれも一の天に配して二なきのことはり也。紀有常の息女は、夫の我に二心ありておろそかなるをもひたすらに思ひて、其行衛を心もとながりしは貞女の心也。文明(ぶんめい)の時に生れて道を聞ましかば、もろこしの名だかき賢女にもおとらぬ人にておはしまさん。これらは夫のよからずして女のよきなり。夫よければ貞女も知がたく、父母(ぶも)舅姑(きうこ)(しうとしうとめ)、慈(じ)なれば孝子孝婦もあらはれず。歳寒して松柏のしぼめるにおくるゝことはり也。夫賢ならば、今の人情時勢には妾もおき侍るまじ。曾子は後の妻をだにめとり給はず。後妻(ごさい)をめとらぬをよしとするにはあらねども、其身の時所位の勢によりて也。況や妾をや。今の時所(じしよ)の人情をもはからで、聖人もゆるし給へる男の道なりとて、妾をとりあつかふは、多は好色の口實と見え侍れば、世中の婦人の得かたといへ

るもことはり也。今、日本にて端正清浄なる人に妾のあるはまれ也。妾のなきをよしとするにはあらねども、時勢人情をしれば也。しからばかくのごとき正人の妻に嫉妬はあるべからざる事なれども、その心おさまらず、上らふの用意しらぬ婦人はよその事までいひあつかふてはらだつもの也。ことわざに法界悋氣といへるもの也。世中の人大かたかくあるものなれば、たとひ外ざまは道理に伏して、しつとなきやうにても心より服せざれば家道和せず。夫婦は一家の天地也、不和にては子孫さかゆべからず。夫を大切に思はざれば、うしろぐらき言葉も行ひもあり。父子の親もこれよりへだゝりぬ。妻に子なきか、又妻のこゝろいれよくて妾をおかんは各別の事也。さもなきには今の勢にては違慮有べき事也。古しへの聖人の妻妾を定め給ふ道理は、第一には本妻に子なき時のため也。第二には、妾は妻のためにはよき目付也。夫の留守などにみだりなる事もならず、若不道人有とても、妾におそれてちかづく事なし、たがひの爲也。人倫を正しくせん爲也。第三には妾ならぬ女は久しくめしつかひがたし。夫の病中など、妻の手がはりになり心やすきが爲也。その外如此の益多し。この故に古しへは貞女の道を思ふ婦人は、こひうけて妾をおきぬ、我身を正しくせんが爲也。たとひ其身正しく、心清くても、わきにきづかひのものなくて淫夫等のよりたらんは、一生の難事也。心つよくさくるといへども、同心なきは亂人の爲には大ゝに心もとなければ禍を生ずる者也。或は惡名をかうぶり、あるひは身ころされぬ。聖人の定め給ふには、如此の奥儀多し。此道理を知てだに時勢にもとり、人情にそむく事は君子はせず、いはんやいまの人共道理もしらで聖法をゑほゝしに着て淫行をなし、家内不和子孫衰あらず、これらはいふにたらず、世中を見侍るに、賢夫と貞女の夫婦となる事はまれ也。貞女は愚夫に嫁し、賢夫は凡女をめとるの

み多し。男女ともに賢なるはまれにして愚なるは多きゆへなれば、是も又世の勢ひ也。しかれば貞女は夫の無道をとがめずして婦道を盡し、賢夫は婦の不足をとがめずして、己を正して敎みちびき、大かたのあしきはよの常と思ひて忍びすぐすべき也。男は志だにあれば、文學する事易(やす)し、女は親か夫に學ぶべきより外師友を求る事かたし。文學なければ、よむべき書もすくなし。鏡草は女の爲にあらはせる書(しよ)なれば、女のよきのみをあげて夫をゑらばず、作者の得(え)かたにはあらざれども、得かたにとりあつかふ男あれば、婦人のとがめもことはりにて侍り

婦人問て曰、女は內を治て外事をいはずとうけ給り侍り、いはずしてかなはざる事も侍るべき歟。こたへて云、めとりの時をうたふは家のほろぶる天姓也といへるは、婦人の公儀むきにさし出て、陽事を取行ふは、其家のつくる凶事也。めとりのあしたするが如しといふ心也。古しへより賢女の才覺にて男事にてつだいたるためしはなし。婦人は上らふしくつたなきやうなるを德とし侍るなり。內をおさむるは地の道にならふ者也。天は春夏秋冬間斷なく日月上に明かにして、萬事万物の始をなせり。地は天のほどこしをうけて万物の終をたもつくたり厚(あつふ)して天の高明に配せり。夫は天にのつとる故に外をつとめて大やう也。女は地にのつとるゆへに內を守てこまやか也。飲食衣服をつかさどりて、家內(けない)の男女の、うへこゞへぬやうに心をつけてほどこしめぐむは、內を治るの第一也。おごりて必ず用たらず、たらざれば家人をめぐむ事もかなひがたし。この故に賢女は女事(によじ)に遊びてついへをなさず。家人の男女ともにその家に心をとゞむる事は、婦人の慈愛にかゝれり。夫は常に內におらず、其うへ大やうにて定まれる事のみしれり。又心付(づけ)ても、おとこの身にてはならぬ事もあり。家人の惡をかくして善をあげ、あやまちをあらため、難をのがるゝ事も、つね

に婦人の恩徳にかゝるもの也。如此なれば、人の歓心を得て吉神應じ、家門福有て子孫さかゆるものなり

女師訓に曰、夫を見る事常にはづかしき客にあふがごとくせよ。かみかたちをおさめて言葉すくなく、立居しづかにせよ。心けだかく身へりくだり、おほどかに上らふしき心ばへを女容の事とすといへり

女師云、天は一つにて下に數の國あれども、地に二つの天なし。夫に妾妻の品あれども、女に二人の夫なし。このゆへに貞女は我夫の外に天下に男はなきことを心とす。心二つなければ、つらきにもうらむる事なし

あだなりと名にこそたてれさくら花年にまれなる人も待けり

七夕のちぎりよりも遠けれども、夫を待より外の心なし

風ふけばおきつしら波立田山夜半にや君がひとりゆく覽

人の太刀衣裳をうばひとるの盗賊をしらなみといふ事漢書に出たり。日本にて山だちといふもの也。我身の捨られて、他に心のうつりぬる事を露も恨ずしてしのびたる、立田の山路夜中に强盗の憂あらん事をのみ心許なく思ひやりて、まどろみもやらぬ躰也。此誠のこゝろかんじて、なり平の婬なるも河内通ひやみしとなん

或問、夫其婦を愛せばこそ婦もおもはめ。夫の婦を心に入ずして、他に心あらば、大切にはいかでか思ひ侍るべきや。云、是愚夫愚婦の事也。不慈忿怒の婦人といへども、夫の他念なく愛するは夫を思はずといふ事なし

介婦の云、家事はなに〳〵にてあらん。女師云、女は地の道なり、人を養ふべき物をつかさどる食事のいとなみなり。小身の家にはみづからとりあつかひ、大身の婦人は人に下知す。男女のめしつかひ人多きはとりわき婦人のめゝみに

かゝる事多し。みづから事にせずといへども、見つべき功あるは賢女の徳にして、上らふの風也。むかし北條武藏守の北のかた、寒夜に在番の人々のいかに寒からん、粥を煮てあたゝかにして勸めさせよと有ければ、用人に其旨を申つけられけるに、十一月より春正月中までさやうにつかまつり候はゞ、其費すくなからず、成がたきよし申けり。北のかたに聞給ひ、みづからが正月の衣服おり物などをはぶきなば、其ついゑのつぐのひはなるべきか、と、又尋給へば、用人其量を考て、大かた調ひ侍るべし、されどもさはいかゞと申入けり。北のかた、われ新しき衣服をきずとてもさむき事はあらじ、其大勢の寒をふせがん事は心よき事にあらずや、とて毎夜の食を命ぜられけりとなん

介婦云、女事はなに〳〵なるべきや。女師曰、麻をしたて、うみつむぎ、蠶をかひ、糸をとり、はたをおり、くみ物をし、たちぬひすゝぎあらふのたぐひは皆女事也。むかしは世中せは〳〵しからず男女ともに無病にて氣根つよかりしかば、男はおとこの事をなし、女は女の事にのみかゝりゐて、賤の妻娘などは、ひとりして此かずの事をかねなしたり。ことしの夏なしをくものは、來年の夏のかたびらとなり、今年の冬なすものは、明年の冬の小袖となるがごとくなりしかば、さきをあてゝいそぐ事なく、寺まいり、茶のみ物がたりの人そしり、佛なぶりのあたなる事なきいとまに遊びながらなしたり。その内いづれもかねるもあれども、重きところをとりていはゞ、あさをしたて、かひこをかひ、苧をうみ、はたをおり、すゝぎあらひなどは、中より下の人に重し。糸をとり、たちぬふ事は中より上の人に重し。これはあらまし也。下より上をかね、上より下をかね返ぜずと云こととなし。はたも、かみはたといふは、上臈のおるはた也。いかなるよき所にたておきても、上らふのおり給ひてもいやしからぬもの也。下はたといふ物こそ賤の妻のわざ

と見えたれ。中將姫もはたはおり給ひき。右馬頭の妻女だに、たちぬふ事は織女の手にもおとるまじきといへり。上らふほど、みづからなし給ふ所作すくなければ、琴書の遊び、たちぬふの事より外には、なにをなぐさみとして日をおくり給はんや。今はあそぶべき所に遊び給はねば風俗いやしくなりぬ。上臈の身もち所作男女ともに常を失ひ給へば、おごり日〳〵に增長す。上おごれば下困窮す。世のいとなみせは〳〵しくなりて、賤の女も女事は得せで、男の農作に手傳ひ食事かた〴〵いとまなければ、夫婦きるかたびら布の小袖も人をたのみてたちぬいす。世中の人を養ふ農人のみ男女ともに苦勞しくるしむでやすきおもひなし。工商の女子は、すこしいとまあれば佛事にかゝり、武士の妻子は無用のあそびを事とす。みづからはたおり、たちぬふべき者も、物ぬいをかゝゑて我はせず。是によつて家内用たらで、年の暮につもりあはねば、利欲の心ます〳〵ふかく、下をせめとるのはかりごと、不仁のこゝろいやましになりぬ。これによつて天罰のがれがたければおごり無道の淺深に隨て二三代五六代の間には目のまへにうつりゆきて、國郡の主の子孫といふものも、いやしき者のつかはれ人などにくだりたるも有。富貴の家も程なく亡ぬ。北のかたの不仁無道のわざの、人のうらみいきどをりをまねき、子孫の氣ちがひ惡疾など生じて跡たえゆくものあり

女師云、女はかたちたをやかに、顏うつくしく、かみながく多して、ひとつ〳〵いはんに、なんなくきよらに、あざやかなるをのみほむるものかは。よし野のさくらを見るに、千本しでかけの花の雲のごとく咲つゞきて、にぎはゝしきは見るめにあかぬ心地してたぐひなければ、世人の目おどろかすばかり也。人も花もたゞ心しらぬどちのながめなるべし。東國の仙谷のさくらは、かずさへ多からで、ところ〴〵に咲たるも、ちり過たる名殘までなつかしう、見どころ

有。これは谷のかゝりなだらかにて、しかもあとなさくまぐ／＼に生立たる木どもなれば、花の色も一しほ匂ひふかく、木立しづかに見ゆ。まことに繪にかゝまほしきありさま也。古しへの千枝（ちえだ）つねのりも心あまりて筆およびがたからん。女もうつくしき顔形はかきとる繪師もあらむ、されどようでうのゆほびかなる德色は筆かぎり有て及べからず。顔はひとつ／＼いはゞなんあるべく、かみなどもすこしそがれたる心地して、うつくしとは見るべからざる人に、見るにしたがひ、なるゝにまさりて、心のとまる女あり。へだつるとはなけれども、物はづかしきにうちとけぬ心づかひにて、なつかしくあいぎやうありて、かりそめにもいやしきわざ（とを）かろ／＼しきたちゐ、はらだゝしき色などなく、あまりに女しく、上らふめきたれども、久しき旅のやどに殘しおかんにはたのもしく、心もとなき所なき人は、是なん女の手本とすべきもの也

介婦（かいふ）云、一とせよし野の花見にまかりけるに、仰らるゝ千本雲井ぬのびきなどの花は散過て、青葉がちに見えけるに、奥山にわけ入て侍れば、今をさかりと咲みだれたる谷のさくらあり、花の色香はかはらぬよそほひにて、あなうつくしと見えたれど、あらしはげしき所なれば、木立そらに（高く）と生のぼり、かぎりあれば末にてしげりたるに、花のみだれ咲たるは、いなか女の顔は、あなうつくしと見えたるが、帶たがへしめて、すそながにすが／＼しく、あいなきに似たり。花さへ所がらのありさまとおかしく見侍り

女師云、世に生付よき女は多けれども、用意心づかひ有ものまれなり。ふじの山も見るかたによりて景氣まさりぬ。ひえの山も、あふみのかゞみすがたの社のあたりより見れば、みやこのふじともいふべし。生れつきて、いづかたより見

ても、なんなき女は、萬人に一人もまれなるべし。楊貴妃をもあざむくばかりうつくしく、いはん所なく生れ付たる人の、ほこりかにて心なからんよりは、いひたつれば、なんある人の、心づかひよういにもてかくしたらんこそ、あらまほしけれ。かゝる人こそ夫婦となりて、ながきしたしみもとぐべきものなれ。かたちよき人の、ものいひさがなく、たちゐにつけて、上らうしきよういなきは、見るたびに見おとりするなり。士太夫の家に生れて、かゝる人は其親の家風まで思ひやられ、いかゞしてかくはならひけん、とけうさむるわざ也。男のけたかく、人がらよきに、女のしたゝきはふさはしからず(不肖)、目のながき人かなと思はるれど、月に村雲、花に風、思ふにわかれ、思はぬにそふとやらん、世の有様なるべし。または中だちする者の、人をしらぬもあり、女のしなたかく、心ばへつねならぬに、男の何心なく野人なるは、あたらしき人をとなげかるゝ也。此ふたかたは、公家の公達の、世の亂れなどに、山中に忍びかくれ給ひたるを、山ぶしのむこ君としたるがごとく、内裏上らふのとらはれて、山がつの妻となりたるがごとし。男も心なきものは、ぼたんの花のやうにみめよく、にぎはゝしき顔かたちなる女をよしと思へるもあり。鷄頭花のくきふとく、ふつゝかにたちのびて、いやしげなるをも、くれなひの色にや色よすらん、うへてもてあそぶ者も有。花しれる人は見るにむねわろく(無味あしく)なりて、二目と見ず。野にさけるなでしこ、女郎花は、世にもてはやすぼたん、さ月つゝじにはまさりたれども、たづね見る人もなし。遊女などの、はけ〳〵しく作りて、巳がこゝろをやりてさし出たるを、おもしろくおもふ人もあり。よのつねの男は、しなを見しらず、五月まつはなたち花には、かへり見立よりて、心をとむる人まれ也。くれなひの色はなけれど、花のこのかみなる梅とも、さくらとも立ならぶほどなる、けたかきもの也。富貴の家に生れ

て、げすしき人あり、貧賤の家に生れても上らふしき人あり。男女ともに上より下にくだし、下より上にあげてなりとも、人がらのたぐふべき人を夫婦となしたらましかばよからん。今は此さだめをかなはゞ、女は夫にかまひなく、おのれひとりは人らしかるべし。女子をもちたらんには、母の心をもちひ、身のたしなみこそ師とはなるべけれ。父親のかく心なきに、此むすめ子いかでかくすぐれたるらん、母のたゞ人にあらじと思はるゝは、むぐらのやどに、やむごとなき人のこもりゐたる心地やせん。人のかよはぬ深山にも、ふぢばかまはひとりかほりふかく、あるじなきやどの櫻も春におくるゝ事なし

介婦云、士太夫の家に生れたらん思ひ出には、女なりとも琴書を友とすべし。男女は天地なれば、女なりとてみづから身をすつべきや。賢人といひ賢女といふともいふなればたがひなし、天理を存じ養ひ、人欲をしりぞけさり、生死苦樂の道にまどはず、天地鬼神の理にくらからで天命をたのしむほどの學問はなどかせざらん。しかれども、ものしりがほに口才(こうさい)なるは、にくきもの也。女はつたなきやうに見えて、女しくやはらかなるこそよけれ。箏琵琶は女の一しほもて遊ばでかなはぬもの也。上らふ程内にのみさぶらひ給へば、情をのべ給ふべきかたなし。心むすぼゝれ、氣くつすれば、わづらひもいでき、心もひがみもてゆく事あり。よきあそびをしらねば、終にはあしき遊びにながれて、はしたなき風俗となる物なり。ことびわをもてあそぶとも、うとき人にはきかせぬこゝろづかひ有べし。さびしきゆふべ、ふけ行月の夜、しのびやかなるしらべ、心にくきものゝ音には、人がらもたちまさりて覺ゆ

介婦云、しんめうといふものより上づかた幾人も見つらん中に、顔形大かたに目にかゝるなんすくなき女二十人はかり

はあり、此人に心有てしなをしらしめ、よういあらましかば、いかなるたかき人の御だいとなしぬとも何かくるしかるべきと思はるゝに、おもゝちあらはにしてかくるゝ心づかひなきもあり、上らふの身もちしらぬも有、女しく、しづかなるたちゐなきもあり。笑がほ、ものいひにけうさめて、よきと思ひしみぬかたちも、いづくへかいにけるもあり。いかりはらだつけしきあらはにて、しづの女の夫婦いさかひごとき事もなすべく、下女などにはつゐとるわざもとそあらめ、とおもはれて、すさまじくなりゆくも有。金銀の事、うりかひのさたなど、はゞかる所なくいひて、あき人にやならんとすらんと見らるゝもあり。さてもおさなき時よりをしへおほしたてなば、此中にはなどかよき人なからん、美人とおぼしき人四人ありき、二人は顔のみうつくしくて、かたちたをやかならず、二人は顔かたちともにいはんかたなき人也けれども、心なき男の見んにはあく事あらじ、よき人のためにはをりふしのことゝある時は、いひかはすべきよの花もおぼつかなくやあらん。めしつかひ人などにて、大やうに見んにはよからん、妻とさだめば、紅梅の匂ひなき心地やせまし。女には形よき人は世に多かりけり、心ざま、やうだいのすぐれたる人は見がたし

女師云、夫の心はうつろふかたありとも、女のかたより見しらぬさまにてすぐさば、さすが夫も見そめし契りをおもひて、十分ならぬ中なりとも、さるたよりにおもひて有べきを、その様なることのまぎれにあひて、中たゆべきわざ也。人間世のならひ、夫妻のみならず、さまざまむつかしく、心ぐるしき事多きもの也。何事も堪忍して言に出すして、世の有さまとわきまへぬれば、無事にとをるもの也。氣みじかく、我ともていでゝは、事のやぶれし出すためし多し

女師云、すべてまゝ子をば愛せよ、大切にせよ、と父兄も教、他人もいさめ、其身もさやうにおもへるゆへに、かへつ

てへだてと成て、にくむ心いでくる也。いかにとなれば、實子の中にだに、愛の厚薄はあるもの也。ましてまゝ子は他人なれば、無理には愛せられず、我を後の母とたのむ子なればにくむはひがごと也。愛せん、大切にせん、とおもはずして何心なきがよき也。愛せんとおもへども、子の心だてにては愛せられずとおもふより、あるまじきにくき心もいでくるもの也。無心なれば、其あしき所見えても心にかゝらず。慈母の名までこそなくとも、不慈のそしりは有べからず。又大身小身ともに我に子などいできて、欲心より有まじきひがごと出來るたぐひも有。是幼少より親の家にて上らふしき教なきゆへ也

女師云、女の物まうで、物見などに、衣服をかざりて、こゝをはれとし、人のめにたつやうにするはあしき事也。それゆへに恥がましき事も出來、よからぬ亂のはしとなることもあり。心ある人は常の服よりもかろく、しのぶべき所なるに、人のめをおどろかすごときのよそひは何ぞや。男子の君のまへに出る毎に衣服をとゝのへ、禮儀を盡すごとく、婦人君前（きみまへ）とする所は、夫の前、舅姑の所也。其ほど〳〵につけて心を用ひ、かたちをおさむべき所也。其外は、はれといへども男子の朋友の往來の如し。友だちのまじはりは、君のまへのやうに心を用ひず、女どち禮ありてまじはらば、分に應じてのはれはさも有べし。夫の外に女の心だしなみ、身のかざりあるまじきか。しかればにや夫死しては髮を剃、さなくてもかたちをかざらず、美服をきず。夫のある時はかざるを禮とし、夫なくてはかざらざるを禮とする也。されば禮は義理より生ずるにや

むかしはたけ山殿の御内に、なにがしといふ者の妻美色の聞えあり、傍輩の武士、いかなるつてにか一目見てわすれ

す、出入する老女にふかくまいなひしてたのみ艶書をつかはす。女手にもとらでかへしぬ。又文をつかはす。つよく成まじきよし返事す。三度に及びぬれば、大にはづかしめやりけり。しかれども此男たゆべくもあらず聞えければ、いかなる野心をもおこし、我夫を害すべき事もやと、二つの文を夫に見せ、此手みしり給ふやといへり。夫見てこれは誰某が手跡なりと云、妻の曰、親のかたきと妻かたきは天下のゆるせる法也。此文をふところにして、かの者をうち給へ。然らずはかへりてわざはひあらんか。夫大に感悦して、かの文をふところにして彼者に路次にて不圖行あひ名のりかけて、難なくうちて、すぐに奉行所にゆきて、此よしを申す。はたけ山殿聞給ひ、神妙なりとて、夫には時のほうびを給り、妻には田十町を永代給はり、艶書をやりてうたれたる者の子は、國をはらひ、兄弟伯父甥等には遺恨有べからず、もしかたきなどとおもはゞ、不義に同心の者也、一門をはたさるべき道理を云きかせ給へり

むかし夫の留守に妻の寐屋に忍び入て無理になびけんとせし者あり。女とかくの返事もせず、大に聲をあげて、とゝに我をおかさんずる者あり、出合〳〵とよぶ。男急ににげ出たり。それより夫の他出には刀をはなたざりけりと

〔静嘉堂文庫本、附箋。〇女師云、いそがはしからでいときなき者は… 右ノ段此處ニ入ル此次ニ〇婦人問、心ハいかなる物ぞ ト云ヨリ末 皆墨消也 〇婦人問云、渡るが妻ハ… 此段被除之如何可尋也〕

婦人問曰、渡が妻は賢女とも申侍らんか。云、死すべき期をのべずしてよく死たり。ずいぶんの武士たりといへども戰死などすることは思ひきふけたる也。おもひよらぬことにて難にあひたるとき、死すべき期をはづさず死をする事はかたし。母はむすめとちがひて不孝人也。娘にこれ〳〵の事あり、此刀にて我を害せよといひしは、娘を不義者になびけ

と思ふ心也。たゞいひたらんには同心すまじき女と知てかくいへり。娘に此事一言もいふべき義にあらず、娘聞ては死なんより外の事はなし。同心せずば母をころさんといひ、同心せば女の第一の不義をなすのみならず、終には夫にきこえて恥の死をすべし。又母をころさば、殺しだいともいはれじ。我身死するより外なし。かくのごとき目の前なる大難を娘にいひきかする母なれば、若き時不義なくともそれは仕合ならん、事あらば不義をなすべき者也。盛道に此ことはりをいひきかせ、それもきくまじくば不レ及二是非一我をころせといひて、害せられてよし。その上如レ此大不義をするからは、急に人をおどす者なれば、殺せといひたりとも殺すべからず。たとひころされたりとも、老たる身の、わかき子にかはらん事本意なるべし。當惑して其はかりごとなくとも歸りたる跡にて、文をかきてやり、身の必死を以て不義をいさめば、人皆本心あり、恥ざることあるべからず。死はよくせしか共、母にひかれて、心ならずといひながら、一言も不義の者にしたがひたるは、此女には玉の瑕也。とても死なん身なれば、したがはずして死たらば、賢女とも貞女ともいふべきに殘多し。年ゆ若し母におどされて當惑すべし。その時代には學道の明なる敎もなければ、其知さし當りて出ざるなるべし、賢女の名を得せしめざる事を惜む也

女子訓下

婦人問て云、世中なべての事ながら、男は文學して書を見ても物の道理を知侍り、女は學問の志ありても師もとりがたく、書をよみ侍らねば、たゞうつゝのやみにまよひぬるばかり也。後生をねがふといふことのみ我も人もことゝし侍れども、たしかなることとは、むかしより見聞たる人も侍らず、出家は人をばすゝむれども亂行無作法なれば、もし後世といふことはなき義かとも不審に侍り。死したる親の子の災難に逢べき事を告しらせたるためしは侍れども、後生の事をしらせたる事はなし。人の親の子を思ふほど誠有ものは侍らねばまことに極樂地獄のあらば、まれには告しらする事の侍るべきを、さもなきは死したる親の神は有て地獄はなきものとみえ侍り。うたがはしき事ながら何をもしらぬ事なれば、念佛をとなへ、後世をねがふより外のわざは侍らじ。佛道をば何とか修行するものにておはしますや。〔靜嘉堂本田附箋。外のわざは侍らず、さて世間僧俗男女ともに往生極樂をねがひ侍り實に西方に…〕答て云、よきうたがひにて侍り、あみだは無量壽佛と翻譯(ほんやく)して、かぎりなきいのちのほとけとよみ侍り。佛は無の稱とて、なにもなき空々としたる心のことなり。色形あるものは始終有てかぎり有、たゞ本心のみ形なき故に始終の量りなし。この故に本心をあみだと名付たり。是を己心のみた唯心の淨土とはいふ也。よろづの色形ある物、世間のことわざは夢のごとくまぼろしのごとくいなびかり(電)のごとく、水のあは(泡)のごとし。有てなきもの也。〔靜嘉堂文庫本頭注。金剛經一切有爲法如夢泡影如

也ノ下池田本「これを念佛と云」アリ又寒山詩ニ云々アリ

一物を著へず池田本何もなしニ作ル

等如電」しかるにかりの世、かりの物に心をとめて、貪欲執着するはまよひ也。夢をとめてうつ(現)ゝとし、夢中にうつゝの心を忘れたるがごとし。今妻子より合居所(あひゐる)はたびのやどり也。常住の淨土に立歸るべしと敎て念佛せしむる也。念佛は佛をおもふと書り。本心の空々寂々として一物なきところ、すなはち唯心の淨土已心のみた(彌陀)也。即心即佛也。悟道する時はまよひの雲はれ、眞如の月ノ光ヲ明かに娑婆すなはち寂光の土なり。〔靜嘉堂文庫本頭書。寒山子ノ詩ニ云々、吾ヵ心。似ニ秋月ニ、碧潭淸ニシ皎潔ニ」 問、しかるに西方極樂世界は十万億土といひ、南無西方みだ如來とねがひ侍ることは何ぞや。答て云、西は萬物滅スルの方也。時にとりては秋也。金氣殺伐の處也。春夏の生物草木に至るまで秋の金氣に遭てかれしぼみ滅す。日月星も西に至りて光かくれて見えず、故に西方とをしへ、滅と願はしむる也。佛法には輪廻をゝそる念によりて生ずると見る故に、西方を念じさせ、念々西方にあれば死して西方に往(ユク)、其時彼殺氣に逢て跡形なく滅す、滅して殘りなきは佛也。これを西方極樂世界に往生すと云。諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂、これを成佛得脫ともいふ。寂滅するときは上に君なく下に臣なく、父子夫婦兄弟朋友なし。寒さ暑さもろ〳〵の苦樂一つもなし、これを極樂といふ也。火葬を用るも滅し盡して殘りなからん事を欲して也。問、日蓮宗に妙法蓮華とゝなふるはいかなる心にて侍るや。答、人の身に五臟あり、心(シン)の臟(ゾウ)は未開の蓮華のごとし、〔靜嘉堂文庫本、頭書。未開蓮とはいまだひらけずして、すでにひらけむとする時の色形をいへり」其中方寸虛にして一物を著へず、其空虛則心也。かくものいひ、手足の自由するも其虛中精神の靈明よりなせり。故に蓮花の上に佛像を置り。心は形なけれども形をまふけざれば人に示しがたき故に、慈悲柔和のすがたを作て、心の靈にかたどれり。蓮花は心の臟也、妙法は心也。故に号ノ

相ノ上也、田本詞アリ

レ心ヲ為レ妙ト と天台の祖師もいへり。心の物に應變するを法といふ。又蓮花は譬喩の相にて泥中に有て不レ染マを本心の渥にすれどもくろまざるの儀にとれりともいへり。語を立る處の文義少し異りといへども、共に本心をさしていへる也。極樂とていろ〳〵の結構なる事を說、地獄とてさま〴〵のおそろしき事をいひ、或は禽獸六畜、或は人のいぶせく、むつかしく、蛇むかでみゝずかわずなどに生れかはるといひて人をおどし、皆人の惡をやめて善をなさしめん爲の方便也。然れども如此はうべんも用にたゝず、長老上人などいへるも、大かた惡念惡行のみにして、慈悲善根のさたはなし。人の信仰せざるいひわけには、貪欲愚痴の凡夫ながらみだをたのみて極樂に往生すといひ、いかやうの惡逆をなしても妙法をとなふれば成佛うたがひなしといへり。是は惡を敎て惡のゆるしを出すに似たり。をしへずしてをかば、人みな天の靈あり、惡をなして惡人といはるゝ事を恥しく思へば、をし出して無道を眉目とする者はなからん。しかるに我も人も凡夫は此はづ也。この故にみだ如來あはれみ給ひてみだをたのむの衆生は狀惡ながらすくひとらせ給ふと敎る時は、恥の心も亡び失て、貪欲無道をはぢとおもはず、今の坊主は人の本心をほろぼすを以て渡世とす、醫者の病人を療するに半は殺して渡世とするにまされり。坊主も在家と同じやうにまよひて居侍るもあり、少道理をわきまへても、有るべきやうをいひては渡世に便あらされば、方便と名付て僞をいひ、人をたぶらかすのみ也。ある禪僧の云、とかくうそをつかず、ありていを云ものは貧乏也。むかしの出家は樹下石上とて、明日のたくはへをもせざりしは、うそをつかざりし故也といへり。婦人問て云、後世の道はいかが。答て云、その方の子則後生也。云くそれにはあらず。死して後みづから我精神の行所の事也。云、死はともし火のあぶらのつきて消たるがごとく、何の念もな

地虫は：蟬となる也ヲ池田本きりうじの數つきてなくなりたる其からより蟬生ずトス

きと知給へ。問、目のまへにきりうじ（根切虫）の蟬になり、けむし（毛虫）の蝶と成て飛を見侍れば、佣むしの飛ふ虫をうらやましく思ふ一念により、かく生れかはると見え侍り。釋迦佛もまさしく三世輪廻をとき給へり。云、天地の物を生ずる事、氣化形化卵化變化の四つ有。〔靜嘉堂文庫本頭書。釋ノ四生、胎卵濕化〕氣化といふは蒸たてられたる氣にてわき出るもの也。ふゆう（蜉蝣）水中のぼうふりむしなどのたぐひ也。形化とは人丼に四足の物形にて生るゝ類也。卵化は鳥魚の玉子にて生ずる類ひ也。變化はきりうじ〔地虫キリウヂ也〇傍注〕のせみになり、山のいもの、うなぎになる、此變化一色を見て、西戎の人生れかはるのうたがひをなせり。精神が殘りて生ずるには非ず。•地虫（キリウヂ）は本ト地虫（ヂムシ）也。夏のきて陽氣に蒸たてられて蟬となる也。米にこくぞうのわくも同じ。あくたの中より虫のわくもおなじ。塵芥に何の念かあらん、變化といふも本は氣化也。形化、卵化の物も昔氣化に生じたり、人も人のなきむかしは天地を父母として、氣化にて方々に降りわきたり。男女の形出來て形化にゆづりて後は氣化なし。しかれども實は今も天地の氣化也。魚のなき水に、初て魚の出來るも氣化也。そのうちは魚もたまごにて生ずる也。天地の造化にめぐりて、あとへかへるといふ事は何の上にもなき道理也。人の鼻より出入息も、出たる息のいり、入たる息の出るには非ず。出たる息はきえて、又新タに入息なり。入たるいきは盡きて又新に出る息也。川流も山澤氣を通じて無中より神化を以てわき出て海に入てつくる也。潮（ウシホ）汐も水の生滅なり、あなたこなたへゆくに非ず、少しほ時のちがひ有がごとくなるは地形の勢也。人も萬物も無中よりわき出て、形氣の數盡てなくなる也。雲の空に生じてきゆるが如し。問、しからば佛の三世輪廻をとき給ふは非なるか。云、釋迦の生國の西戎は偏土なれば常ならぬ事もありと見えたり。人にも虫の變化のやうなる事たまさかには有

べし。その上北西南の國は種類異にして、もろこし日本の人のやうにはなき所あり、北は狄といふ毛ものへんに書けり、西をば戎といふ獸にかたどれり。天竺といふも則西戎の國也。南を蠻と云、虫をかけり。此三方は人の形あれども性は禽獸に近き所あり。鳥獸は欲ばかりなり、一向鳥獸にして無知也。北西南の者は人の知識ありて欲厚して鳥獸に類する事多く、利欲情色甚し。この故に執着ふかし。人生見ぐるしきのみならず鬼となりても沈魂滯魄の變有て、生れかはるがごとくなるもの有、しかる故に釋迦佛三世輪廻をいひて教をなせり〔静嘉堂文庫本、頭注。鬼ハ歸也トイヒテ死シタル人氣ヲ云也。〇陽ノタマシイヲ魂ト云ヒ、陰ノタマシイヲ魄ト云フ。滯コホリタル死氣ガ殘リ□〕西戎にありてはさも有べし。しかれども皆まよひの教戒にして實理に非ず。かるが故に佛法もさとりては三世もなく輪廻もなき所に至る也。問、中國の外は皆同じかるべきに、三方のみ種類異也との給ふて、東夷を殘し給ふはいかゞ。〔静嘉堂文庫本、頭註。中國外四方ノ異國八九夷、八蠻、七戎、六狄也〕云、文字にも夷は一弓人と書て獸虫のかたどりなし。太陽の出給ふ國なれば人心靈也。仁義禮知信の五性を備て明德明かなる事もろこし人に同じ。とりわき日本の皇統は此土の性に非ず。王孫は人となりて民間に居といへども人間の種にあらず。この故に生て天竺の執着なく、死して沈魂滯魄の變なし。問、さやうに地獄輪廻もなしと知侍らば、惡をやなし侍らん。云、日本にて佛法の渡りしは人王三十代欽明天皇の時也。其以前はもろこしよりも仁國、君子國といひしやうに、風俗うるはしく侍りき。人々の心に、天より稟たる神明あれば、善を好み、惡をにくみ、不義を恥とす。その上に欲のすこしあふるべきには、王道の禮儀法度有て、天神地祇人王の御代數千歲ゆたかにおはしましき。もろこしにても伏羲神農黃帝堯舜禹湯文武との久しき代

々は、佛法はなかりしも、後世の手本となるべき治世也。佛法わたりて後、唐日本ともに治世久しからずして亂逆多し。惡人も古しへに千萬倍せり。必しも佛者の罪にはあらざれども、時運否塞の時に佛法出來たるたり。末の世にをいて僧の心行其祖に近かりし者は、人によりて利益なきにもあらず。後世佛法の害多きにはくらべがたし。問、しからば釋迦佛も後生はなきとしりながら方便に說給へるか。云、釋迦は心迷ふときはありとし、悟る時はなしとす。すべて地獄があるとならば、ありといへるばかりにてすむべきに、或は有と說き、或は無しと說。悟りとは何をさとれるぞ、釋迦一代の說法は、馬にも車にもつまれぬほど多き事なるに、迦葉に一枝の花を見せて微笑せられたればいんかせられしなり。是にて佛法の極意はしられたり。諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂。諸行無常とは世界のなせるもろ〳〵の事は皆常なきわざにて、夢まぼろしのごく、青天に浮雲の出來ルかとおもへばきゆるに似たり。是生滅法とは逢ものはわかれ、生ずる者は滅す。生ずるものは滅する理りのもの也。生ずるところに、はや貪心あれば、それにも着せじと也。生滅々已とは、生ずるもの輪廻執着なくて滅しをはり、空々寂々として何もなきところ則極樂なりと也。佛法以前に莊周といふ人出て此意を發明せり。莊周行くれて野にやどりし時、されかうべを引よせて枕にして、曰、いかに髑髏、我に再生の藥あり、二度人間になりたくば、骨にそゝぎて本の人となすべし、夢に返答せよ、といひていねければ、髑髏告て云、我死して上に君なく、下に臣なし。左右に朋友なし、あつき事なくさむき事もなし。南面の王樂といふとも及ぶべからず。しかるに再生せしめて我を勞せしめんといふかとて、大にいかりたり。これ髑髏が夢に返答せしにも非ず、莊周枕としていひたるにもあらず。死しては空々寂々として、なにもなきといふことをいはんための寓言

也。又死するを驪姫がよめいりにもたとへたり。驪姫はゑびす國の封人の女なり。中國の諸侯ゑびすを討とき、とらはれと成てゆくほどは、故郷をはなれて遠國におもむく心ぼそさをなきかなしめり。行て後は諸侯の夫人となりて、見もせず聞しにもまさる美麗安樂の身となれり。かやうのよき所へ來るとて、何とていやか物うくはおもひたるぞ、とおかしく思へり。人の死は驪姫がよめいり也。人みな死をいとへども、死たるほどよき事はなきとなり。佛說は莊子を本として、漢土にて書きたるとは、かやうのたぐひなるべし。〔靜嘉堂文庫本、頭書。私云、最初天竺ヨリ佛法ヲ漢土へ渡シタル時ハ四十二章經バカリヲ白馬ニ載テ渡シタルトイヘリ。其後漢土ニテ附會スル事多シト也。謝靈運ガ廬山ニテ法華經ヲ書寫ノコトナド唐書ニアリ。惠恩法師ナド此時ノ人トイヘリ。陶淵明ノ同時也〕寓言といふ事を莊子はじめていひ出せり。寓言とは其事はなけれども道理をふくみて、それにことをよせていひたる者也。佛經には權說とて一向道理もなき事なれども、方便にいひたる事多し。又幻術とて放下のやうたるおびたゞしき術をして、神通力と名付たる事多し。是は佛法の中にてもあさき末の事也。地獄極樂等は、權說をも信せず、實理をばしらず、なにともみちびきやうのなき者にきとく(奇特)をして見すれば、もと凡夫なる故におどろく也。それより佛道に入むがため也。しかれども、これは西域にての事也。中國へ佛法をわたしぬる時は、佛在世の節の事にて、末代なき事といひて幻術をばわたさず。中國は知ある國なれば、下民など一旦は信ずるとも終にはあらはれて、眞の佛意にてあさまにならんとはかりて也。もろこしにても仙家に少ゝ傳ッてありしを、空海など習來て、身より光を放ち、栗を手の内にて燒きなどせし事も有。しかれども空海も學知ある僧故、實は正法にきとく(奇特)なしといへり。此幻術は元來南蠻人上手也。南蠻には釋迦の徒生の說にもと

〔じノ下池田本是故ニアリ〕

づきて、此幻術を以て人をひき入きりしたんなど云もの是也。釋迦は南蠻の幻術を習て、佛法をひろむる方便となせり。佛經にある處のさま〴〵のきとく不思儀は皆此幻術也。大佛といふも此幻術にて身を大にして說法せられし時のすがた也。日本にては聖武帝初て作り給へり。其實をしり給はで後世の煩を殘し給へり。釋迦の死ざまには純陀〔蕃嘉堂文庫本、頭注。純陀。私、釋迦ノ菌ニ中リテ死セラレタルヿハ法華雙林ト云書ニアリ。叡山ニテハ今ニ釋迦ノ佛供ニハ茸ヲ供ヘザルト也〕が家齋にゆきて、せむだんの木に生ひたるくさびらを調菜にせしを食してより背痛といふ病出て死せり。其故今の世に至るまで佛供に茸をばいむ也。方便說にいふやうに神通自在の佛ならば、木のこの毒をしらぬといふ事はあらじ。無下の凡僧などはいみていはず。しかれども實は釋迦の疵になる事にてなき故に、禪の悟道者などはいふことを忌まざる也。達磨もあまりに實をいひ過て世渡りわざの僧にやはり毒害せられたり。これも達磨のたんには成ざる事也。惣じて妙きとく不思議をいふは利心なれば悟道の禪師等は大きにきらへり。むかし趙州和尙に、和尙の死後は如何、と問ければ、一株〔蕃嘉堂文庫本、頭書、一株　一本ノ心也〕の茅葦と答ありしと也。死して火葬にすれば、こがれのこるものは、もえぐゐのごとし。これより外には何もなし、といふこゝろ、これ眞の成佛得脫無上道也。問、釋迦の妙奇特をいはれしも利心ならんか。云、釋迦は其國俗の下愚を威して惡をやめ善をなさしめん爲の方便にて利心はなし。もろこし日本の人々は妙術、きとくなくても教らるゝに、妙奇特をいふは僧の愚か、扨は我を尊信せられたくおもふ利心也。この故に達磨は唐へきて見て、生國のきとくは用られず。問、今時は禪にも妙きとくをいふ有、いかん。云、人をたぶらかし渡世にたよりせんのこゝろにてなけれども、妙奇特を好むは利心なり

或婦人問て云、儒道は聞侍らねども、佛道にかはる事侍らじ。夫法性眞如の秋の月は無欲の心水にかげ淸く、大慈大悲の春の花は濟渡衆生の爲に發し。聖賢と申侍るとも心、無欲にして段々に慈悲の行あまねくおはしまさば又加ふる事や侍らん。禮樂制度のごときは濟渡利生の備なるべし。何ぞ儒佛のあらそひおはしますや。答て云、うけ給はる所のごとくならば、佛法を尊信ありて修行し給ふとも何かくるしかるべき。但高遠神妙を好て虛見に住し給ふな、くだりついて實理を取給へ。夫こゝろの位ひきゝ者は仰て高明を好み、心の位高者はくだりて實に付侍り。實に過てたかき者は侍らず、日月は高明の極也。この故に下土を照臨す、心の躰は明鏡のごとし。程子曰、聖人ノ情順ニ萬事ニ而無レ情と。釋氏も又いへり、應ニ無レ所レ住而生ニ其心ヲ一と。王陽子云、明鏡應レ物ニ妍媸一タビ照シ而皆眞と。これ聖人の情萬事に順なる所也。佛氏のいへる其心を生ずる所也。妍媸ともに一たび過て留めず、空々如たり、これ情なき也。住する所なき也。かくのごとく見る時は儒佛のたがふ事なし。毫釐千里の誤り有といへ共、過てあやまる人の爲にいふべし。貴方中間のよき所をとり用ひて、人道に害なき人なれば排ずべからず。それ慈悲ふかければ必ず無欲也。無欲にして必しも慈悲あらず、かへりて無欲より心けはしくなりて、不慈悲にながるゝ者は侍り。凡夫といへども我子に物をおしむ者は侍らず。しはき病有て一生子にも不自由をなさしむる者有といへども、死する時は子あれば思ひのこす事なし。金銀多たくはへたる者の、子なき者、又は出家の金持て死するは大かた死ざまあしきものにて侍り。君子は民の父母なり、人を愛してたからを愛せず。天地万物皆我身に備はれりといへども、財用は天下の財用にして私の有なし。無欲其中に有。わきて無欲をいふは、かへりて溺きに似たり。君子の心しづかなる事山のごとし、寂然として不レ動ク。こゝにをいて初

也ニテ池田本壹卷終トス

て無欲の眞を見るにたれり。夫釋迦佛も衆生の母たる大慈大悲の心有、大藏經皆此こゝろより出たり。民の父母たる心も聖佛相近し。吾人眞に及べからず。むかし佛在世の時に、釋迦を信ずる女人あり、身に病出て法座に望む事もならず、しかも遠方なれば心もとなく念じ居たるに、有時釋迦忽然と至り給ひぬ。女人拜して、しか〴〵の事をかたる。釋迦其時に藥をあたへて、これを煎じて身にかゝるべしとて去給へり。かの女、をしへのごとくせしかば、たちまちに病癒て本の身のごとし。いよ〳〵有がたく信仰おこりて、やがて遠路を經て靈山に至り、不慮の來迦、藥のしるしを申せば、釋迦我はしらず、其比他行もせずとの給へり。諸弟子も女人も不審しあへり。其時釋迦ノ云、我レ世を救はんと思ふ慈悲至らざる所なし。女人の信心にたゝかれてそこに現じつらん。我不レ知との給へりと也。老尼出て云、釋迦佛は黃金のはだへと申侍り。生れながら佛にてかくおはしましきや。しからばあらゝ仙人を師として難行苦行三十成道の期有べからず、成道の後生れながら佛となりて黃金のはだへとなり給へるか。答て云、其往古天竺に世眞といふ人ありき、身の色黃也、子孫に傳て皆しかり、釋迦は世眞より十世の孫也。世尊と云へり。世尊は世眞の末孫なるがゆへに、とをり字によりて釋迦の名を世尊と云也。慈悲ふかふして知識其國の人にこえたり。天竺國には聖人出たまはざるゆへに、貴賤ともに道を知ざれば、心くらく作法あしくて國治まらず、或時釋迦つく〴〵とおもはれけるは、我生れしはいづくより來りたるぞ、父母未生以前の我は何としたるものぞ、死して後此ノ心は何となるぞ、今も此心の本躰を不知と不審。しく思はれし折ふし、中國の老子周朝に八百歲をへて後青牛にのり西關を越て西域に入ぬ。仙人と成て山居せり、釋迦是を師として學問す、あらゝ仙人これなり。或問、老子の西域に入られしは釋迦の時代よりは後の事也といへり、い

後世の……分明ならず及ビ問釋迦は誕生なりといへり池田本ナシ

かど。云、中國天竺（西戎）正朔通ぜず、佛法の中國へわたりしは漢の明帝の時にて、老子の西域に入れりしよりは六百年余も後の事也。老子の周朝にゐられし時分までは佛法の名もきかず、後世の佛氏いつの時分といひたるも證據分明ならず、又老子をあらゝ仙人といへるも分明ならず、いかさま天竺に釋迦の師子に成べき者はあるまじければ、老子をあらゝ仙人といへるもことはり也。•後世の人いづれの時代といひたるも分明ならず、しばらく見る所をしるすのみ。•問、釋迦は天竺國の世眞といふ人の末裔なりと仰られ候。親は何人にて侍るや。答、釋迦の親は天竺摩竭國淨飯大王の子也。母は摩耶夫人といふ。卯月八日に誕生なりといへり。釋迦妻あり、子あり、人間の樂、飲食男女の欲一歳万歳同し事也。たゞひたすらに山水に心をすまして此道を得ん事を發心し、君臣父子夫婦兄弟をすてゝ山に入ぬ。十九歳の時也。故に十九出家といふ。十二年の學問修行を積て初て三世一心に外ならざる理リを悟れり、是を三十成道といふ。さとる時は生ながら佛也。釋迦は天竺ことば也。能仁とほんやくす。仁を能するは心の德也。もろこしにて聖人賢人と德の位によりて名付るがごとし。眞實道心の佛弟子には段々に學問せさせて此道理を敎るといへども、愚痴の凡夫は敎ュべきやうなければ、地獄極樂と云事を根とし、慈悲善行の者は極樂に往生し、邪見惡業の者は地獄に落るといひきかすれば、本より愚痴にて何のわきまへもなき凡夫なれば、死して後の道理知べきやうなければ、まことゝ心えて、惡をする事をおそれて、慈悲善根をなせり。いまだうたがふ者あれば幻術といふ事にていろ〳〵のきとく不思儀をなして見せおどろかして信をおこすやうにしたり。釋迦の心にしゐて方便を好めるにはあらざるべけれども、やむことを得ずしてなしたるならん。後代の出家のきとくきこのむは、或はまよひ或は利害の心也。この故にさとりの僧はわれ[illegible]

を信ぜずといへり。世間の釋迦を尊信するは大かた釋迦を狐狸の精となして尊べる也。さるほどに佛誕日ニ雲門上堂ノ曰。佛今日降ニ誕ノ於西天ニ七歩ノ指ノ曰。天上天下唯我獨尊ト。我レ昔年若シ在ラマシカバ一棒ニ打殺ノ與ニ狗子ニ喫却セシメン、貴圖天下泰平ナラシメンヲ。此ノ語釋迦を蔑したるやうに聞ゆれども、世間の凡僧の佛如來とて拜し尊ぶよりもほめたる心なり。釋迦生れ〳〵七足あゆまれたるも僞也。唯我獨尊といはれたるも僞也。生るゝとそのまゝさやうに知惠ある人ならば、仙師につかへて十二年の修行も三十成道も前後相違也。出家が佛の道ならば若き時妻子ありしも相違也。七歩獨尊もまことなきこと必然也。若ありたらば狐狸にてあるべきほどに、打殺して犬にあたへんと也。後の世の釋迦をたつとべる者は皆佛を狐狸となして尊信する也。其故に數千歳天下の人まよひて、世中おだやかならず。打殺して犬にあたへなば如此のまよひなく、天下泰平ならんとなり。天上天下唯我獨尊といへるに心あり、釋迦一人の獨尊にあらず、生れ落たる所は誰も獨尊也。孟子に大人は赤子の心をうしなはずといへる心を用ひて、此語を出せるならん。聖人の語は假說とて彼物を以て此物をさとす者也。莊子是を變して寓言とす。寓言はなきことなれども、道理分明也。佛說は又寓言を變じて權說とす。權說は一向なき事也。なき事なれども方便の爲もうけたるといへり。此獨尊の語も權說也。されども此語は少シ道理ありて寓言に似たり。世間に尊ぶ釋迦はまよひの釋迦也。さとりの釋迦をあらはさん爲に雲門禪師かくいへる也。問、まことの地獄極樂の世界なきならば、何とて釋尊幷に佛弟子あまた此世はかりのやど、後生一大事とて、父子の恩をすて、妻子をすてゝ出家遁世し侍るや。〔靜嘉堂文庫本、頭注。流轉三界中、恩愛不能斷、棄恩入無爲、真實報恩者〕云、地獄極樂はなけれども、輪廻とて此身の精神生れかはると見たり。今人と生れて知惠ある時悟りをひ

らかでは、鳥類畜類などになりては最早成佛する期なし。うけがたき人身をうけ、逢がたき佛教を聞ぬれば、此時に解脫して輪廻をまぬかれんとて、心念の着する處をたちすて、此世界に一念もとゞまらず、空々寂々としたる處は則父母未生以前本來の定体にして三世なき一心也。即成佛也。衆生は此處まで及ことならぬ故に、父母妻子を帶して後世を願ひ、善をすれば極樂にゆき、惡をすれば地獄に落るといひきかせ、世間の仕置にする也。南蠻天竺はすぐれて人の心愚癡なる故に仁義の道は聞しらず、佛法のやうなる教ならではあはぬ國也といへり。問、今どき淨土宗一向宗日蓮宗のすゝめには、盜賊火付又は主親を殺したるほどの大罪の惡人にても、一度あみだをたのみ、一聲だいもくをとなへぬれば、極樂に往生し成佛する事うたがひなしとをしへ侍る。若此事實事ならば、今時の佛法は仕置のたりにはなるまじきと思はれ侍り、如何。〔靜嘉堂文庫本、頭註。私云、題目ハ妙法蓮華經也。妙法蓮華經トハ妙法ハ心德ノ微妙ノ讚美ノ詞、蓮華經トハ心經トイヘル心也。心臓ハ其形ヲ未開蓮ノ如ク也。故如此イヘル也〕答云、道理の明かなる人をこそ聖人とも神とも佛とも申事なれ。たとへば地獄極樂あるにしても、鬼神に横道なしといへるに、佛をたのみたる者をば、惡人なりとも成佛させ極樂へつかはし、佛をたのまざる者を、善人にても地獄へおとさんといふやうなる、をとなげなきひが事はいかであるべきや。少あきらめ有ものはいはされどもしらるゝ事也。出家は地獄のなきといふ事をしりながら、渡世の爲に人をすゝむる事也。善人は成佛し、惡人は成佛せずといはゞ、先其出家惡人也。其上寺參をし、坊主をたのむに及ばぬとあれば渡世ならぬゆへいふ事也。たとひ此義經に有とても、佛の說にてなき事うたがひなし、黑白よりも明かなる道理なり。問、堂寺をたて、僧に金銀をあたへて、後生に極樂へゆき成佛するといふ道理侍るや。

云、むかしは深山多して虎狼人居にせまり魑魅魍魎人を犯せし程に、木を伐て堂寺となし、山林をうすくして魑魅を退け、虎狼を遠くるたよりとなりし故に功德ともいふべし。中世より此かた人民次第に多くなり、人家の用木薪をとる事だに山林遠くなりて人民勞せり。しかのみならず、草木根たえて、山土川をうづみ、洪水民屋を害し、山澤の氣うすく成て用水田地に不足せり。此時に當て相爭て材木を多くきり、堂寺の爲に山林をあらしなば、國勞し民くるしみ、亂世のもとゐとなるべき事なれば、達磨旣に無功德といへり。〔靜嘉堂文庫本頭書。云、達磨ノ無功德トイヘル一功德ヲナシタルト思ヘルノ□有心ヲオサヘテ□ヘルヲ本說トスル歟。今如此イヘル、一義トスベシ〕況や不慈無道にして渡世の出家に金銀をとらせ、肉食婬亂を助くる事は論ずるに不及儀也。後世は世閒多事にして用たらず、其上堂寺を建立し、僧坊を信ずる人は、民をしへたげとる事ます〳〵甚し。民閒の涙をあつめて僧を養へり。佛のこゝろは萬民安穩の慈悲心なれば、いかで滿足あらんや。問、堂寺を立るも今は功德ならず、僧に物を與ふるも後生の善根にあらずと申侍らば、出家はみな飢寒に及なんや。云、達磨の佛祖にて無功德といはれしだに用る人なし、況や吾人のかくいひたればとて、千万人に一人もしたがふべからず。貴方一人の心の迷ひをとかば可也。又賢君の仁政は君佛を信じ給ひても、儒を用ひ給ひても〔靜嘉堂文庫本、君佛……給ひてもヲ、佛者儒者のえらび也ト訂ス〕天下に一人も飢寒に及ぶ者は有べからず。古しへ達磨の流は心もなし佛もなし、天道も神もなし。死すれば何もなし。やけば灰、うづめば土、きのふはけふの夢、生れぬ前をおぼえざれば、死して何もしらず。獨來獨行今のこゝろは五躰のある閒内の付物也。五躰やぶる〻時は空なりといひて、地獄も極樂もなき道理をさとれども、學問の威德にて人に尊敬せられ、大寺をたて、紅衣紫衣

を身にまとひて、人多くつかひ居侍り。たゞ禪宗のみならず、もとより經說にも如ニ薪ノ盡テ火滅ユルガ一と說て、死して後何もなきものと落着するなり。學力だにあれば、法力とてむさぼらず、求ざれども生產はあるものなり。今は禪家も妙奇特をいへり。その身に知德學力なくて、法力かなはざれば、人をたぶらかして渡世とす。古人のいへる國賊也。人をたぶらかし渡世とする心はなくとも、奇特を好むは利心也。是故に禪の祖師も野狐精なりとそしれり。女師云、いそがはしからで、いとまなきものは、聖王の御代の人なり。今我心から古しへの時を我身に得ん事安かるべし。民の貧なるが子ども多くもちたる者こそ、晝よるいそがはしく、髮（おう）をあぐべき隙もなければ、夫婦ばかりにて渡世する者も、いまだ子のなき間はさのみいそがはしからで、ほどにつけたる生樂有。すこしのぼりて男女もつかふほどの農工商は、手前富ならねども、いたづらあそびをする者多し。一休和尙のいはく、〔靜嘉堂文庫本頭注、私ニ此詞上卷ノ中ニ被入也〕

〔○校云、下一字下ゲは挿入也〕

女師云、いそがはしくていとまなき者は聖王の御代也。いにしへの時を我身に得むことも我心からなるべし。末の世は何となくいそがはしくて、しかも貴賤ともにいたづらあそびをなすものなり。そのうへ近きよのならはしは、上下ともに我國日本神明の眞の道の本をとりうしなひしよりこのかたは、後生輪廻の迷ひふかく、祈念祈禱あつかひなどばかりにてあだなるわざに日をむなしくするは、終に其家衰微し、子孫おとろふるに及ふべし。又すこし富る家の人は友だちあつめして、たがひにゆきゝしげく、うちよりては世俗の雜談、或はかけすぐろく、はなはだしきは、こと三みせんなどさまぐ\あそびわざをなし、家事のいとなみ女事のつとめをなさず、これより家風みだれやすくして、

其所の人々は皆おこたりがちなるさまに成行。これ又一家のおとろふべき中だち也。たゞ上らふの風にこゝろざしあらん人は、家事をつとめ、女事を學んで、あまりのいとまには、手ならひしゆへあるさうしをみ、音樂すべき程の人ならば、箏琵琶を手ならし、樂のせうがなどやうのよきわざにて日をゝくれば、其いゑをのづから風たゞしくて、しかもゆうびなるもの也。かやうのわざにて、其家の親しき人〳〵とむつび、外の人は來るに應じて、其程よきあいしらへあるべし。とかくいづれにもあながちなるわざはよろしからず。など女ならんからに、あだものとのみなりはてんは口おしのわざなるべし。つとむべき事をつとめ、なすべきわざをおこたらずして、おり〳〵のあそびわざにも、いにしへの上らふのあとに心をよせば、たとへ身はいやしからんにも、心の花の咲べきおりあらんかし。心の花だににほひなば、朽木の老のゝちまでも、たのしみもつくるよなからん。此外には一花五葉を開くのつたへもむつかしからんか。あなかしこ〔靜嘉堂文庫本、頭書。達磨傳法〇事苑一華五葉之偈〇正宗一華開五葉結果自然成〕

一私云、婦德は柔順貞節を本とす、故によく身を敬み、おもりかにして、かりそめにも色にめづるの心なく、嫉ありて父母につげ、人にゆるされねば、男に近づく事なく、扨わが夫と定りたる人には、いさゝかもわくる心なく、人にうたがひをうけぬやうに、常にたしなみ、すこしも心のねぢけゆがみたることなく、靜かにさだまりて、いさゝかもうしろめだきかたなきを貞節と云也。貞は定まりしづかにおもりかなる心也。節はすなほに正しき事、竹の節の程よきを見るがごとし。第一には我夫を親君と思ひ、其正しきに和らぎ順ひ、若又夫の身に不正の事あれば、何とたく是をいさめ、毛頭嫉妬の心なく、ひたすらに夫を大切に思ひ、其心にしたがふこと、水の方圓の器に隨ふがごとくな

るべし。其上にたちぬふわざよりはじめ、よみかき箏ひく樣の事にもつたなからず、すべて詞多からず、物ふかく品たかきを女德の第一とす。詞おほきは品をくれてみえ、詞すくなきはをのづから心のおくふかくみゆる也。婦人の家にゐて兩親につかへ、夫に嫁して夫婦のかたらひをなし、身老夫死しては子にしたがふ。是を婦人三從の道といふ。是又柔順貞節を本とするの義也〔○以上〕

わかき女の寺參とて、ぺにつけ、かねつけ、身をつくろひ、衣裳をかさねて、發心比丘尼など其外同行をかたらひ寺まいり、こゝの談義、かしこの法談、千部万部、千日万日の廻向、いつくの靈法、たれの十念、念佛講たどいひて、むなしく日を送る者あり、何といふ事ぞや。四十五十に及べる女は、宿にても佛につかゆる事にかゝり居もあり、同行たがひに往來して、茶のみ物語に人事いひ、よめしうとめそしり、貪欲邪見の習ひ、此後生ねがひよりおこるなり。僧も慈悲正直の心を佛なりといはんとすれど、身すぎのためによろしからぬによりて、たゞ佛につかへよ、後生願へ、とのみいひて、欲惡ながら成佛すると敎ゆる也。此後生とりあつかひ女の第一の難也。家にゐては父母を釋迦多寶とし、夫に嫁しては、しうと姑を彌陀彌勒（觀音）とし、飯器茶器を佛具花さらとし、上を愛敬し、下に慈惠あらば、人又我を愛敬せん。足事を知て欲なきは富貴の至り也。『とく〱とおつるいは間のこけしみづくみほすほどもなきすまゐかな』『 さくとも（けれど）よしやまたくむ人もなし我に事たる山の井の水』人みな天命あり、何をかねがひ、なにをか求めんや。又佛書云、天竺にては釋迦となり、日本にては明神（神明）となると我主君をすてゝ他の君につかふるを二心といふ。日本の神明こそ眞のほとけならめ。とてもつかへんとならば、何ぞ日本の神につかへざるや。三社の神詫をよく〱得心すべし。心仁愛あるも

のは、をのづから無我なり、をのづから無欲なり、無我無欲にして慈悲なる者は、佛にあらずして何ぞや。惠心僧都の歌に『佛とは何をいは闇のこけむしろたゞ慈悲心にしくものはなし』いけるときほとけとならで死してたにが佛となるべきぞ。我身みづからまよひの惡人にして、阿彌陀、釋迦とて在世にもあらぬをたのみたればとて、何の佛になるといふことのあらん。ながれ川に筆をたてゝ物をかくがごとく、木にのぼりて魚を求るよりもはかなし。又佛緣をむすぶといへども、緣は心にてこそむすばんなれ、慈悲なる者は慈悲なる者と中よし、似たる者は友となるといへり。まことに不仁なる者は不仁に同志し、同氣は相もとめ、同聲は相よる也。佛といふは大慈大悲のものといへば、慈悲なる者こそその佛の同座はすべきなれ。又死してなにもなきが佛ならば、世中に佛とならぬ者は一人もあらじ。輪廻して佛にならぬといはゞ、欲心無道なる者こそ、輪廻はするといへば、今時の出家も、後生ねがひのうば、かゝも、みな欲心無道の者なれば、これこそ輪廻の罪人なるべけれ。女はたぶらかしやすきものなれば、女は一ほ罪がふかし、佛になりがたきなどとて、おどしをきて、さて此法にては佛になるといふを聞ば、又とのほかになりやすき事也。とにもかくにも商人の手くらうとだに見ればすむ事也といへり。此後生あつかひ祈念祈禱ざんまい（三昧）が女の第一のきず也。その家衰微し、子孫おとろへ、心よからずなりゆくの前兆也。又少なりのぼりて、工商の富たる家の女、武士の少しよろしき家の女は、碁すぐろく（雙六）、友だちあつめて、たがひにゆきゝ（往來）して、家事のいとなみ、女事のつとめをしらず。これより家風そこね、子孫おとろへゆく事也。かくのごとき人のもてあそびには手習あり、書物あり、箏びわあり（今のつくしごとにはあらず）樂の唱歌あり。友は親の家にては女兄弟をばめい（伯母姪）あり。夫の家にては相よめ、しうとめなどあり。娘あれば、むすめを

友とす。へだてなく相したしむには、これに勝りたる友あらじ。たとへ棊双六なりとも此家の内のしたしき人々と折々のあそびはくるしからず。富貴の人なりとも、女といふしるしには、家事のいとなみ、女事のつとめ、ほどにつけてはなどかなからん、かへりてなぐさみともなるものなり

〔靜嘉堂文庫本附箋〕或婦人問、中將姫はまさしく西方彌陀佛の來迎おはしましてすくひ取給ひたりといへり。しかれば極樂世界たきにはあらずや。云、當麻(タヘマ)は金剛山(コンゴウセン)の麓なれば、古狸(フルタヌキ)が彌陀の來迎二十五の菩薩にばけて取たる者也。狸穴にいたりてくひ殺すべき時さこそかなしかりつらん、いたはしき事也。こゝに遠からぬ昔物がたりの侍り。或里とほき寺のありける、その所へ老女、やもめまじりに行て宵の程念佛講をせしに、或夜管絃の音しきりに聞えて、阿彌陀佛二十五の菩薩達のあらはれ來りて、其中の女人ひとりをすくひとりて行ぬ。其よりその男女老若いよ〳〵信心おこりて、每夜より合、念佛三昧にして、われ一〻すくひとられん事をねがへり。其後も折〳〵は彌陀來迎ありて、一人づゝむかへとれり。其中に若き男なれども、少し分別ある生れつきにて、日比弓をもけいこせしが、其母のとし老たるが、件の彌陀來迎に逢てむかひとられん事をひたすらに願ふにとゞめえずして、母をいざなひて彼寺に行けるに、夜半ばかりにもなりて、例の彌陀來迎せり。其時彼のおのこ、たとへ生(イキ)如來にてもあれ、目の前にわが母を取行むは親のかたき也、さればのがしがたし、一矢まいらすべし、若生身の彌陀ならば、たとへ射るともあたり給はじと思ひて、來迎を待とりて、矢ごろになれば、中尊とおぼしきたゞなかを、たゞいにいけるに、手ごたへして、はたとあたると思へば、光明もきえ、音樂もやみぬ。夜の明るを待てみれば、門前に血こぼれぬ。それをしたひてみ

れば、ちかき山ぎはに穴あり、其穴のかたはらに、古狸のたゞなる射とをされてふしぬ。これより後は佛の來迎もたく與さめぬと或人のかたりき

女子訓異同篇

〔○前掲出ノ女子訓ニ無クシテ池田家所藏本ニノミ有ルヲ書出シタルナリ今假ニ異同篇ト名付ク〕

熊澤了介女子訓　完

〔○表紙〕

女子訓

熊澤了戒述

乾坤

此女子訓上下二卷ハ熊澤息游軒了戒ト号俗名次郎八。備前侯ニ仕所著也。詩經周南召南ノ詩ヲ和解シテ女子訓ト名付此書ハ其附錄也

女子訓壹卷

或問

息游軒著

或婦人問て云、世中……〔○全集本一五頁ノ始〕外のわざは侍らじ〔○同頁十行ニツマク〕さて世間僧俗男女共に往生極楽を

ねがひ侍り。實に西方に極樂世界ありて、阿彌陀佛いまし、地獄有て、惡鬼死人をせめさふらふや、ゑんま大王ありて、人間一生の善惡を記し置て、善人は極樂へ通じ、惡人は地獄に落し侍るや。答て云、右これを惠能に問り、釋迦佛舍衞城中に在て西方の行化を說、凡愚の衆生心に十惡八邪あれば本心に遠き事十萬八千億土を隔たるがごとし。十善八正を行て自性を悟る時は去ルヿ此ヲ不レ遠カラ。故ニ迷フ人ハ念シテ佛ヲ求ムレ生ヲ於彼ニ。悟ル人ハ自ラ淨クス其ノ心ヲ。この故に佛の言に隨二其ノ心一淨土キ。即チ佛土淨シといへり。自性を悟て心淸き所を極樂淨土と名付、自性即阿彌陀佛也。故に平直の心を彌陀といふ。能淨の心を釋迦と云、慈悲を觀音と名付、貪嗔を地獄といひ、愚痴を畜生と云。貪嗔愚痴の邪念を惡鬼と名付、我身をせむれば也。ゑんまは共生神也。人の心に在て善惡を知靈明なり。人の言行善なる時は心廣く躰ゆるやかなり。是大王の極樂を與ふるなり。人惡をなし惡をいふて、身惡人と成たる時は、恐るゝ事氣遣なる事多してくるしめり。人にあしくいはれては肝をけし赤面し、或はいかり或は追放せられて飢寒に及び、或は刑罰に行はる。惡人の爲には皆鬼也。これ大王の地獄に落せる也。又あみだは無量壽佛〔〇同頁十二行ト續ク〕〔〇一六頁五行寒山詩……〕淸ニ皎潔ナ。問十惡八邪は何ぞや。云、必しも數にかゝはらず、八十は陰數の極也。邪惡は陰味より出て心くらければ、每日每夜の邪思邪念悟道成佛の道をへだつる事十万八千億土のごとし。妄念積て邪思と成、邪思積て惡念と成、惡念の者を惡人と云也。人の惡は邪見より大なるはなし、邪見は不慈悲の心をいふ也。昔死してゑんまの前に來る者あり、大王此者の一生の善惡の帳を出されたり。善の卷物は細き事箸のごとく、惡の卷物は大なる事太鞁のごとし。業のはかりにかけさせられたれば、はしの細さなる卷物は重く、太鞁のふとさなる卷物は輕し。則極樂へ通されたり。惡き帳は凡人なれば每日の非あり。

善の帳は此者慈悲心深き事を記したり。一慈心方悲を消して往生せしと也。これも方便説にて慈悲は善根の第一菩提の種也。邪見は悪業の本なる事をしめさん爲也。問、佛法僧を三寶と申事は何にや。云、佛は覺也、法は正なり、僧は淨也。心明覺なれば迷ひなし。心正なれば家齊り國治り天下平か也。僧は清淨にてよく邪見の者を敎て慈悲心を生ぜしむ。故に三寶と云也。今の僧は多くは邪見なり、邪見は十悪八邪の本也。三寶にはあらで民の賊なり。龜泉菴老僧云、外いかつなる者は心おだやか也。外やはらかなる者は心はげし　かのしゝはすさまじき角あれども其性柔なり。いのしゝは角なけれども其性たけし。牛は角あれども幼少の子供にもあつかはる。馬は角なけれどもくいはねしてたけく、武士は大小さし鑓長刀持せてたけく見ゆれども、心慈悲なる人多し。坊主と女は丸腰にてやはらかにみゆれども、大方心けはしきもの也といへり。此龜泉菴は本は相國寺の長老にて博識の僧也

問、坊主と女の心けはしきはいかなるいはれにて侍るや　云、皆然るにはあらず、多分をいへる也。武士にも心共にけはしきもあり、坊主女にも心共に柔和なるもあり。さて坊主と女の柔和ならぬは其生れ付にあらず習なり。何にもよらず、人の物をもらひて一生を送る者は、多くは心ひがみて、慈愛禮儀の心うすきもの也。是故に吝なる者多し。女は親の内にては父母に養はれて我物なく、夫家に行きては、夫の物を所帶し、子に養はれては子の物也。一生我物とてなければ、人の氣をかねて心ひがみぬることはり也。坊主はなを以て一生人の物にて渡世すれば、往來の禮儀少なく、人を養ひほどこす事薄ければ、仁義の心うすもれて習性となるもの也。武士は知行ありて人を養ひ、往來の禮儀しげゝれば、心を仁義に用る事多く、この故によき方也　問、然らば其習なき事びはいかゞし侍るべきや　云、

其親心あれば、幼若の時人に物をほどこし、めぐみいたはるごときの事をば、女子に其使をさせて、費のなき事をならはし、少おとなしく成にしたがひて女事をなさしむ。女子器用なれば、人を助け救ふ事を父母にすゝむ。夫の家にゆきては、夫を助けて家事を治め、女中におこたらずついゆる所を收斂して、夫の一類の困窮をすくはしめ、家人をめぐみ、子ありて父にかはる時は、子の慈悲の心をひらき、禮儀の行をみちびき奢を制し、費をやめ、子孫長久ならしむるは賢女の始終也。一人善をなすのみならず、父母夫子と共に善を行ふは、善の大なるもの也　問、今は何方も用たらず、左樣にほどこしめぐむ事をし侍らば、夫家も子の家もいよ〳〵困窮に及びなんか　云、祿ある家公用私用の定りたる事には用の不足はなきもの也。品こそかはれ欲の好む事に費るは覺へずして多きもの也。それが其積りて貧乏に及べり。借金出來て諸へひけぬれば、後には定りたる公用私用も不レル足事あり。貧乏になればむさぼる心出來、不仁に成、義理をかくもの也。左樣にならざる前に親をも夫をも子をもいさむべし。妻はすみかといひて、夫のうちとけ心安きものなれば、あしき事さへ妻の□〳〵に云事にはなびくもの也。ましてよき事を夫の機嫌を見ていはんに、したがはざらんや。たとひ公用の事、文武の器にても、分に過るは驕也。用だに達せば可也。況や屋作器物衣服飲食等皆分の宜しきあり。ことに衣服は妻よければ二年着すべきは三年に及び、十の物は七にて事足れり。左樣の有餘は常にあり。人の落目はたまさかなれば、などか救はざらん。たとひ家貧乏なりとも、妻の心入にて家內を惠むほどの事はなるもの也。家內の男女をめぐむ第一は飲食也。夜長き時、寒き夜など、夫外に出ておそく歸り、家に客ありて夜更る時は、定りたる食にては飢るもの也。それより風をもひき、寒を煩ひなどす。夏の日長き時、供使などすれば、常の食

ばかりにては躰氣つかるれば、おり〳〵ごとに心を付て不時の食をあたふべし。男女十人の内外つかふ家なれば、小袖一つのあたへにても、これほどの惠みはなすべし。男一人女一人使ふほどの家ならば、帷子一つ二つのあたへにても足べきか。それほどの事は妻の力にてともかくも成べし。又夫や子の他出の諸扶持、男女他出の諸扶持をのけ置て、不時の食に與ふる者もあり。とにもかくにも慈惠の心だにあらば、事はいか様にもとゝのふべし。昔主の男夕べに門に出てながめ居たれば、みめ形ことがらよき婦人家をさして來れり。いづくよりぞと問ば、福神也といひて入ぬ。又みめかたちあしき女來れり。いづくよりぞと問ば、貧の神と云。先のは我婦也。家主の心慈愛なれば姉事をつかさどりて富有なり。主の心邪見なれば妹事をとりて貧乏也と云て入ぬ。夫婦共に心清く慈愛なれば、男女共によき者は、とても奉公せんならば此家也とおもへば、年をかさねて居、或は不律儀、或は短氣にて爭論などするはあれは期をまちて出す。彼家には無事に律儀なる者ならでは不答といへば、次第によき者集りて、家風よく和氣みちて求めざれども富有也。故に慈惠は一旦費ある様なれども富貴、本より聖人の代には天下の仁者を撰びて富しめ給へり。仁者富る時は其富有を私にせず、よく人にほどこしめぐめば也　問、さきに十惡八邪の十八は陰數にて陰昧の義とのたまひ、又十善八正をの給ふは何ぞや　云、陰も本善也。正也。迷を解て本分に歸る也。十全は全き善也。八正は寛仁の正也。善は純一に全きを至善と云、大極是也。正は過れば其弊へ不仁に至るもの也。陽數は九に極まるといへども、極れば理屈に落て賞罰正し惠不仁に流る。故に一を太極に歸し、八を用て天地万物の理を盡すは聖人の正なり。寛仁の意也。同じ數たれども、惡邪に用ると善正に用ると義のみ様異なる也。天理の無窮なり。人の目も怒る時の目、悦時の目して二つは

なし。心のおもむきにてにらむ目はすさまじく、愛はる目は温なり。心も凡夫に成心、君子に成心とて二つはなし。善を好めば君子と成、利を好めば凡夫と成なり。佛書にもいへり。悟る時は衆生も佛、迷ふ時は佛も衆生也。衆生の自性佛性なれども、迷ふが故に衆生なり　問、女のいらざる事なれども、道理を知學問にて侍ればたづね申也。賞罰多くし過て不仁になる事は何ぞや　云、（鎌倉の時ィ）むかし藤榮と云者あり、兄死して其領地を我まゝにし、兄の子を押こめ置たるを、時頼公聞給ひ、藤榮をめされ、汝は無道輕からず、死罪流罪にも行ふべけれども、慈悲は上よりくだる。汝が自分の領地は其まゝ下し置なり。宗領知不ㇾ殘兄の子に扶助せしむる也。甥を守立べし、と下知し給へり。藤榮が罪死刑に當りぬ、なだめても遠流のがれぬ者なれども、許し給ふのみならず、其身の本領あて行はれ、甥を守立しめられしは寛仁の至なり。賞罰の理屈にせまらず、慈は衆を使ふ心にて、慈悲は上より下ると云て、變化し下知し給ふは、仁君にして知勇あり。太皞伏犧氏八卦の理に叶へり。其時いまだ此學理（聖學のィ）は知給ふまじけれども、氣質に知仁勇ありし君ゆへに、自然にかくのごとき事多し。北條九代の治世は泰時時頼の遺澤也。此二君は學道明かなる時に生れ給はゞ伯者に終まじき君也。或婦人問曰蓮宗に…〔〇一六頁十一行ト續リ〕…おそろしき事をいひ〔〇一七頁三行ノ、或は禽獸六畜或は人のいぶせくむつかしくトアルヲ、雁鴨鶴白鳥などは、鳥の内にてもよきもの也。とびありきておもしろくも見ゆれば、人のうるさくむつかしくおもふトシテ蛇ニツヾケリ。二四頁七行我不ㇾ知との給へりと也ニテ池田本卷一終ル〕

〔〇二四頁一三行不審しくノしヨリさて又天下國家は何として給はるべきぞ、人の惡をやめて善をなすより外の事あるべからずとおもひ、國を治めん謀事を工夫せられしと也。時に中國の老子　…アリ〕

〔〇二五頁一四行、信をおとすやうにしたりノ下、地獄極樂は本よりなき物なれば、ありと思はせん爲の方便なり。極意に至ては正法に奇特なしといへり。釋迦の心にトツヾケリ〕

〔〇二九頁四行、野狐精なりとそしれりヨリ提頭シテ、傍ニ朱ニテ「是より元本になし」ト書キテ〕婦人問、釋迦生身の佛如來にておはしまさば、戒敎行化釋迦如來にて是侍るべきに、西方極樂世界の阿彌陀佛を賴めとの敎は、いかなる事にて侍るや　云、釋迦も存生の時は常の人也。心に見性悟道ある（りイ）といへども、それは菩薩の位に至りたる弟子こそ心の位も知侍るべけれ。他の人の目にはさのみかはりたる事なく、今の人の釋迦如來とて尊信する樣には在世にはなき也。是故にかりに西方を立て空佛の名をまうけて、後生の往生をねがはしめられたり。西方の中にて、西方を淨土とし、彌陀を立て願はしむるに奧儀あり、〔〇以下一六頁六行、西は萬物滅スルの方也、以下十一行、欲して也マデト大略同ジ〕

或婦人長老に問、愚女十念を受侍りてより以來晝夜念佛懈怠なく候。臨終には定て阿彌陀佛の來迎して救ひとらせ給はん事疑ひなく、敎のまゝに修行し侍り　長老云、中々の事何の疑ひかおはしますべき。いよ／＼信心に念佛し給ふべし　婦人云、日本の小國にてだに、一日に千人死して千五百人生るゝと神の仰せられたるよしなり。天竺は日本を二三十も合せたるほど廣き國也と承はる。然らば一日に三万人も死し候はんか。もろこしはなを大國にて雲夢の澤さへ長さ七百里と傳へ侍れば、是も天竺になぞらへては一日に三万人も死し候べし。六蠻八狄九夷の數の大國は略し、唐國も儒道大分と申侍れば、三分一にしても一万も彌陀を賴む者あるべし。日本も日蓮宗の外は皆念佛なれば、五分一を日蓮宗にしても、一日に八百人は往生の者あるべし。天竺殘らず念佛と承はれり。然れば內證を取て一日に四万八、

百人の往生極樂彌陀の來迎にあづかる人數也。彌陀一躰にてそれを一人〱むかへ取給はん事は、何として成給はんや。阿彌陀佛に成てもさぞ〱開はしき御苦勞なる事なるべし。御手はまはり給ふまじければ、愚女ごとき者は往生極樂疑はしく侍り。略せし東西南北の諸國三國にても彌陀をたのまぬ人數をのけては、百分一の人を受取せ給ふてだにかぶりもふられぬほど多き事なり。ゑんまは惡人善人地獄極樂の人皆取込て改められば、一日に幾千万と云數はあらじ。これ亦なをゑんまの帳叶ひがたかるべし。鬼も一日に何十万共なき罪人を取入ては何といたし侍らん。一日だにかくのごとし、一月一年の積り、算にかゝり侍らじ。何千年何万年かの事なれば、佛もゑんまも鬼も極樂地獄も至る所侍らじ。皆やぶれて空になるより外はあらじと思はれ侍れ　長老公佛の神通力にて何千何万にも分身變化し給はり、大王も亦然り。鬼も通力の者なれば、惡人に隨て分身を地獄極樂も善人惡人に隨ふ也　婦人云、然らば一日に四万餘の死人は四万餘の阿彌陀なり。唯心の淨土己心の彌陀也。釋迦と共に入滅て極樂世界也。彌陀を頼まぬ幾十万の死人は幾十万の鬼也。伸るを神といひ、屈するを鬼といふ。來るは神也。歸るは鬼也。彌陀も鬼も一躰空なり。故に佛の言に云、迷人は佛を念じて彼に生ぜん事を求む。悟人は自淨其心、其心淨に隨て佛土淨し。所住の所に隨て恒に安樂也と、我今よりは即心即佛を供養して、身外の佛を求べからず。長老拜して云、悟道の人也〔〇三三頁四行、或婦人問、中將姫……ヘツマク。三三頁八行其より云々同ジ事ナレド文章イタク異ナレバカ、グ〕

折々彌陀の來迎ありて一人づゝむかへとれり。其中に若き男子持たるやもめ有り。此子弓をよく射けり。彌陀にてもあれ母をとらんは親のかたき也。一矢まいらすべし。眞の佛ならば、我矢にあたらじと思ひ、人不ㇾ知隱れうかゞひけ

るに、或夜亦例の來迎あり。矢ごろになれば立出て、彌陀とおぼしき中尊のたゞ中を射けるに、手ごたへしてはたと當り、光明もきへ管絃もやみたり。夜の明るを待て、寺の前を見れば、血こぼれてあり。それをしるべにたづね見れば、山ぎはに古狸を、たゞ中射とをしたるがたをれてありしと也。夫より彌陀の來迎なく、西方に極樂世界もなく、彌陀もなし。何か來迎すべきや。來迎と云は皆狐狸のわざと知べし。南都にて或家の妻死して、夜な〳〵奥の庭に鬼の形見ゆ。とぶらひ祈禱などしてもやまず。家の者皆恐れて他出す。其近里の若き者つく〴〵と思案して、我に見せよとて、夜に入て、戸のすきより見れば鬼形あり。此男戸をあけゑんに出立てにらみたれば、鬼形消失ぬ。それより二度不出、人たづねければ、狸也と云。狸の形ち見へたるかと問へば、それは見へざりつれども、鬼形を見れば、羅生門の能にする鬼形にて、はつぴ半きり着たり。春日山の古狸が人にばけて能を見て、此家の女の死したるを聞て、能の鬼形にばけて、人をおどすもの也と見とゞけて、にらみたれば消失たりといひしと也

或婦人問、極重惡人無他方便 唯稱彌陀得生極樂の經文あれば、出家の惡人も成佛疑ひなしといふとも罪にてはあるまじきか　云、此惡人は惡逆無道の者にはあらず。人の糟粕といふ意也。くだ物にても何にてもよしあしをいへり。其中にてのくづをあしきといふがごとし。人くづの惡人と云は、愚痴無知にて何の辨へもなき者の事也。惡逆の惡人は平人よりも才知ありてかしこきもの也。念佛などの樣なるおろかなる事をいひて、坊主にしたがひて居者にてはなし。虫だにも毒虫は知覺さときものなり。極て重々愚痴なる者は、見性悟道はならざる故に、一心不亂に念佛を唱へて、極樂に往生するをいひ聞すべきより外の方便はなきと也。道なき我國の風俗思遣べし。或婦人問、佛をば皆是作

座に載侍る事何にや。釋迦も見性悟道して生たがら佛と成給ひて後は、蓮花にのり給へるか　云、釋迦も存生の時は常の人と同じ座也。說法の時聲を遠く及さんが爲に、高座にのぼられたる事もあるべし。さては阿彌陀釋迦のみならず、おの〳〵我等も只今蓮花にのりて居也。人の心の臟は未開の蓮花のごとし。其中方寸空虛也。竅ありて外に通す。世間に精神三あり一ありなどいへるは、心の臟の竅の數をいへり。聖人の心には七竅ありといへり。心の空虛の形色聲臭なき靈明を本心と云也。此本心を日本にては神といひ、西戎にては佛といふ。蓮花座ばかりすへては、人のよろべき樣なければ、像を作りて其上にのせ、慈悲溫和のすがたを以て心の理を形容す。手の印にて彌陀釋迦などをわく。印は心を定る法也　　問、何もなきものに何として視聽言動の用をなし、種々分別思慮を出し侍るや　云、神は形なくして用あり。空なる殿に身の主と成て身を脩め、家を齊國を治め、天下を平かにす。千變万化神道妙用窮りなきは、心の空よりわき出るもの也。心の竅を耳目に鼻に發す。故に目空にして五色を見、耳空にして五音を聞、口空にして五味に通じ、鼻にして淸香惡臭をわかつ。空は天地の本也。万物の祖也。聖人の心は常に空々如たり。故に至明至公にしてよく變に應ず。富貴貧賤禍福順逆死生の境の前にかはる事寒暑風雨の序のごとし。好む事もなく惡む事もなし。富貴なれば富貴の道を行ひ、貧賤なれば貧賤の道を行ひ、禍逆にあふては、患難の道を行ひ、幸福來れば幸福の道をおこなふ。今にして自待せずと云事なし。死生一貫にして晝夜のごとし。これを聖學の見性悟道とす。仁の德なり。手足のしびれなへたるを醫書に不仁の症と云。我身ながら我身にあらざれば也。君子は死生順逆皆心中の一事也。或は生を好み、死を惡み、富貴に奢り貧賤に苦しみ、福を願ひ禍を憂る者は心の不通所ある也。不仁の病のごとし

問、富貴貧賤の道を行ふとは何ぞや　云、富貴は天の親かたとして人を養はしめ給ふ命なり。故に其富貴の分相應にほどこし惠むを事とするは、富貴を得て富貴を行ふ道也。貧賤は天の事を勤めしむる命也。農工商と成ては、よく其職事をいとなみ、或は人の臣僕と成ては、奉公勞をつとむるを貧賤を行ふと云也。富貴にも淫せず、貧賤にも樂むを堅と云。凡人の位をぬけて天を樂み命を知もの也。人の患難にあふは寒暑にあふがごとし。仕合あしければつゞきて凶事つどふものあり。十一月十二月の寒氣に痛み、春を待わぶれば、正二月に成ても餘寒甚だしきがごとし。漸く三四月に成て寒からず、暑からず、暮しよきものなり。五月になれば雨しげくふりこめられて、濕に痛み、六七月は甚暑にたへがたし。漸く八九月に至て涼しく成ぬ。九月の末十月は亦霜いたく置、木がらしはげし。一年十二箇月の中漸く三四月中氣にあふといへども、月に村雲花に風といへるがごとし。或は花のさかりに雨つよくふり、風はげしく吹、さては人事のわりなき事などありて、年毎の花の盛に、花見てなぐさむ春は少なく、八月三五夜のころは曇りがちにて、名におふ月に心をすます事はまれ也。人間世の禍福も亦かくのごとし。この故に君子は樂を境界に求めず、心の道理に求めて、月花もおふにしたがひてなぐさむものなり

問、釋迦の王の太子にておはしまさば、本意も心のまゝなるべきに、乞食し給ふは何にや　云、出家佛道の修行なり。昔は天子諸侯公卿太夫士農工商の家を出て、世のいとなみなければ、乞食せんより外はなし。其上乞食は佛法修行の第一なり。其初は樹下石上麁衣草座して里を去こと十五町より近きはなし。寺にて食をかしがず、毎朝食時に里に出て乞食す。一人不レ出必ず友の比丘あり。同行なき時は一心に念佛すといへり。路次にて桑つみ菜つむ女にあふ事もあり。夫の留主に女一人居所へはらにゆきかゝる事もあ

れば、不律の事あらんかとの用心なり。釋迦だにも必比丘と共に出られたり。佛書に世尊食時に舍衞大城に入て乞食すといへり。一食なり。明日の朝、飯時までは不食。今時の一食の樣に多くむさぼる事なく、一食の外に、木の實ならでは不食。餅粥南蠻菓子を食する事もなし。朝飯ばかりよきほどに一食すれば、起居步行靜かにし、たかく不笑、多言せず。万事用心せざれば、明日までこたへがたし。食乏しき一つに百欲をわすれて戒律をたゞしくせんとなり。又乞食の修行は老子の天下の谷となるの意を受けたるもの也。世に乞食ほど賤しき者はなし。身乞食と成るは天下の谷なり。凡情しなぐ\ありといへども、發しやすくして制しがたきは火氣なり。怒氣は多くは賤心より出。人に上たらんと欲する心爭ひの心是なり。天下の谷と成とは勝心をすきと去たるものなり。故に憎は忍辱慈悲の者なり。身人間第一の賤き乞食と成て不レ辭、勝心火氣を去て忍辱慈悲なれば凡心をぬけたるものなり。心は凡心なきほどにたかく尊きはなし。身天下の谷となれば、心は天下の高山なり。世に尊きこゝろにて世尊といへども、西戎國にては父なき人なればさも有べし

婦人問、承はるごときなれば、極樂地獄は作り事にて實はなき物にて侍るや

いはく、なき事なり。愚人をおどして惡をやめ、善をなさしめん爲の方便なり。これを賤むる所を以て人に敎ゆるといふ也。釋迦一代の說法、極樂地獄などの事が眞ならば、迦葉に悟道の印可はせられまじ。悟道とは自性をさとりて凡心を解脫したる心の位を成佛とす。生身の如來是なり。惠能□□云、不思善不思惡焉麼時那固是明上座本來面目、惠明言下に大悟すといへり。如來は來る如くなり、父母未生以前本來の面目たり。生る時悟道して成佛道を得ざれば、死して佛になる事はなし。若し空々寂々

として何もなきが佛ならば、佛にならぬ者はあらじ。それは闇所の佛なり。悟道の心は明所の佛也。今佛氏のいふ佛は闇所の佛也。これも亦賤むずる所を以て人に教る也、皆二心なり。聖人の教は自己の尊ぶ所を以て人に教ゆ、彼是の二心なし。仁を好で學明かならざれば、其弊愚なり。釋迦慈悲やみがたくして種々方便權說を以て衆生を教へられしはきとくなれども、戎國の學にて理明ならざる故に、其弊愚に落入て、衆生の愚に愚をかさねたり。地獄輪廻の說を以て人に迷ひをつけ、其迷ひを信ぜさせ、明敏なる者は悟りとて地獄のなき事は知れども、輪廻のまよひは終にとけず。五帝三王の民には初より此まよひなければ、悟るべき事もなく、佛者悟道して、堯舜の民にも及ばず。西戎は偏國にて日月の照臨も偏也。春夏秋冬溫暑涼寒のかはりもさだかならず。南へよりて日の下なれば冬はなをあつし。この故に人の氣質も偏にて、性理の照し全く明かならず。中國の文章禮樂共に不通。左樣の偏國には釋迦の教の樣なる偏なる道なくては通ぜざる事もあるべし。中夏日本のごとき日月の照し中會して人の氣質正しく、明德あきらかなる國には無用の事也。しかれども天地否塞の運には佛法も相叶ふ事あり。もろこしは周の末より宋朝まで凡千五百年、國運否塞せり。此間に佛法渡りてさかんなりき。宋朝に周元公出世、孟子以後千五百歲後たる聖學の流を繼給ひ、程子兄弟其道學を繼給ひてより、朱子王子其外諸賢出世せり。中夏の國運少しあらたまりて、一陽下に來復す。日本は千有餘年以來國運否塞におもむけり。欽明天皇十三年壬申に百濟國より釋迦佛像幷に經卷を日本へ渡す。それより貞享元年までは千百三四十年なるべし。周元公以前は氣質高明なる人、實儀なる者は多くは佛に入ぬ。故に佛學日々に高明玄妙に成たり。儒には難事ある故なり。然るに今の朱學者其難事を以て此道學を興起せんとす。大道いよ／＼ふさがらん事を不

知、主學者も半は朱學の難事を棄て道とす。これ皆佛法のために天質よき人をからんとするもの也。さなきだに日本の今の時勢は、佛法なくてはならざる事あり。賢君おこり給ふとも、天下の衆は其まゝ佛法にあづけ置給ふべし。天質よき人のみ聖學に入て、天下泰平ならば、佛者も亦一助と成て害なかるべし。これ君子包荒の仁政なり。くはしき事は三國水土の解に見へたり

女子訓貳巻　終

源語外傳卷之上

ある婦人云、いにしへより男がたの教をかけるさま〲の書の中には、女がたのまねぶべきことも有べけれども、文學きものはよみとき難く侍れば、むかしより書おけるかなの物語をのみ見侍りて、いさゝか心を得んより外の事侍らず。其中にもはか〲敷教となるべき物も見へ侍らず。源氏物語は色好みの事のみを作りて書侍ものなれども、さしもかしこき女の書きおける物なれば、かきざまのやさしき故やらむ、又はおなじ女ざまの心のかよふにや、よろづの事をみるに心得よく侍る事多く侍り。さやうならむものにても、おのづからおろかなる女の教とはなるべき事にや侍らむと云、源氏物語はおもてには好色の事をかけども、實は好色の事にあらず。此故に源氏物語を好み見る人にも、正しきに過たる人あり。此物語を書たる意趣は、よろづの事世のすゑになり行ば、上代の美風おとろへて、俗にながれん事をなげきおもふといふとも、あらはに正しき書は、人いみてちかづけず。見る人すくなければ、世にあまねからず。教をたてゝ書たることは多けれども、詞すくみて人いとふ心あれば、其書久しからず。又有てもみる人なければなきにひとし「なきにひとし（衍）」ければ、書をきても其詮なきことを思ひはかりて、しひておしへがましき筆法をあらはさず。たゞ好色のたはぶれごとゝなして、其中に往しへの上﨟の美風心もちひを委しくしるし殘せるものなり。それをもとの心「之」もとなるの（衍）

なく、一向の作り物語として、よくいへり、よく書りなどいひて、尋常の口にまかせてかきたる物語のやうにおもへるは、淺見の人の和漢の書にくはしからざる故なり。尤莊周が寓言に類して、彼を是と比し、昔の人のうへを今の人のとのやうにいひ、もろこしの事をやまとのことゝなして書たることはあれども、其實は皆證跡あることゞもなり。故に古人も實事なることは司馬遷が史記の筆法なりといへり。近代の人のことをかくさんために、源氏君といふ好色人の名を假にたてゝ、作り物語といひなし、古今和漢の故事または其世のことまでもとりあつめて、おふせかきたるなるべし。紫式部が父爲時は博學達才の人にて、國史をかきつがむとて下書しおける〔玉ひける〕を、式部とりて此物語にかきなしたるともいへり。されば一條院も此物語を御覽じて、日本紀をこそよくみたるものなれと仰られしとぞ

さて此物がたりをみむには、好色淫乱のことを心とせず、作者の奥意に心をつけて、書中の能き事を知べし。是を知らずして好み見る人は、損多くして益すくなし。夫日本王道の長久なることは、禮樂文章を失はずして俗におちざるを以てなり。剛强に過たる者はながゝらず、寛柔なるものは久し。齒は剛なれどもはやくおち、舌は柔にして終りを保つがごくなる事は、すべての物理なり。武家は强梁の威をもつて一旦天下の權を取といへども、齒のおつるがごとくにして久しからず。王者は柔順に居て位を失ひ給はず。然れども柔にして徳なき〔時〕は人の敬うすし。人の恥て敬する所なければ、存すといへどもなきがごとし。終には絶るにちかし。絶たるをつぐべくして、古への禮樂文章をみるべき物は、此物語にのみ殘れり。故に此物語におゐて、第一に心をつくべきは、上代の美風なり。禮の正しくしてゆるやかに、樂の和して優なるてい、男女ともに上﨟しく、常に雅樂を翫ていやしからぬ心もちひなり。次には書中人情をいへる事辭なり。

人情を知らざれば五倫の和を失ふ事多し。是に戻りては國治らず、家とゝのほらず。此故に毛詩にも淫風を殘せるは、善惡ともに人情に達せんが爲なり。國民みな君子たらんには、政刑もその用なし。たゞ凡人をおしへんための政道なれば、人情時變をしらでは成がたし。さるにより此物語にも、さま〴〵のとによせて人情をつくししらしめ、且時勢の移りゆくさまをよくしるせり。哥をはじめ詞の末迄も、それ〴〵の人の氣方を繪がきいだすがごとく、かきあらはせり。是また此物語において人情を得たる所尤妙なり。然れども哥においては、其詞幽玄にして、其さかひにいたらずしては知りがたし。其上哥をよむと、むかしの人は今の人の文をかくがごとく、其心の思ふ所をすぐにいひのべしを、人の心言葉次第に俗にちかくなりゆき、哥とふたつになりて、哥道といふもの出きて、むつかしくなりぬ。かくなりもてゆけば、古人の詞の風流もゆく〳〵は知がたく、いよ〳〵俗にながれゆくべきなれば、此書中において、文章の妙なると、ふるき詞のきゝしりがたき所をえらびて心をつくべし。されば古人も詞につきて不審をひらくには、源氏物語に過たるはなかるべしといへり。すべて此物語は風化を本としてかけり。中にも音樂の道を委くしるせり。糸竹の遊は君子のわざなり。ゆへに管絃のあそびをしらざれば、上﨟の風俗たえて凡情にながるゝ物なり。いかにとなれば、人の心は生物なれば動かずといふ事なし。樂は遊びの正しく美なる物なり。故に此正しき道のこもれる遊びによる時は、おのづから人柄上﨟しく、風俗けだかくうるはしくなるものなり。然れども樂の道に疎き人は面白からず。すこし其心をうれば、またなく淡くおもしろき物なり。淡くしてあく事なきはいたれるわざなり。古語にも君子の交りは淡くして水のごとしといへり。音樂は君子の〔道を樂〕たのしむ心の行すゑなれば、すこし心あらん人のしらでかなはぬわざな

り。此故にむかしはつくしのはて、みちのくのすへまでも、少し心有人は男女となく樂を翫びたり。まして公家などにはしらざる人もなかりしを、近き世となりては、上﨟の遊びも俗にながれて、あらぬわざをし、音樂の事などはつとめしる人もまれに成行、それ〴〵に家をたてゝ、やう〳〵つとむるばかりになりたるなり。家〳〵の業となりて、君子の遊びも伎藝におちて、役者のやうにおぼへてより事のあさくなりゆき、互ひに家をたつる「の」我心出來て、却て小人の心のたよりとなる事あり。其道に執心の人あれども、秘事大事とて我家の外には出さねば、後には知る人稀になるなり。知る人まれなる事は終には絕るに至る物なり。君子の道はあまねく人に知らしめん爲なれば、秘事大事とする事はひとつもなきなり。人にいひきかせ書殘して、普く知らしめん事をねがへども、知る人まれになりゆくをのみ君子のなげきとする所なり。然るに秘事大事を立るは道を重んずるに似たれども、おほくは小人の我慢我立の利術勝心によるなり。音樂の道も此物語にかきとゞめずば、今の世となりては知る人なかるべし。其道にふかゝらず、其傳とする所の意味には通じがたかるべし。すべての道其ふりたへぬる事はおとしがたきものなり。故に此物語には隨分に其ふりを書殘せり。ふりはすなはち其風躰なり。此物語にも當時家々の秘事口傳とする事は、書面にはとゞ〴〵く書あらはしがたきにより、大略を書とゞめて後の君子をまつ物なり。道はすべて君子に出れば、後世においても君子たる人はすこしの端をして其道の意味に通じ、すたれるをもおこすべき者なり。且風を移し俗を易る「に」は樂よりよきはなしといへり。此物語において音樂の道とりわき心をとゞめて書おけるは此故なり。風化の道をつくして人自ら鼓舞を得。これ此物語の政道にたより有所なり。すべて上古の風は純素にして厚くけだかし。末の世のならはしは驕奢にしてう

すくいやし。禮樂の教も代々におとろへ、風俗の優美なるも時にしたがひて遷りゆき、九重の貴風も〔末の世となりては〕俗にながれ、公家の風俗も終に〔は〕絶果なんとを悲て、彼魚をとりて筌をわするといへるがごとく、此物語りは自然と人の好める好色をつり糸にして、普く世の人にもてあそばしめ、明君の興り給はむ時まで殘しとゞめんの志なり。されば此物語なくば、いかでか上世王者の遺風をあふぎ知らんや。是故に順徳院も此物語を日本の至寶と記し置給へり。然るに其至寶たる所は、すべて禮樂の道に達せざる中人以下の人は、其深意をば知べからず。婦人云、うけ給りゆにて其心をえ侍り。作物語とききながら、みるにいさゝかもさやうに思われ侍らぬは、有事を皆さまぐ\に取なしてかける故成べし

〔○校云源氏見聞ニハ、婦人云以下

女師云、それ一門の和不和、家人の安危は、多は妻の心の慈不慈にかゝるもの也。子孫の盛衰、妻の仁不仁による事おほし。男子女子のかたちこゝろざま、母に似るもの也。よきには似がたくて、あしきにはよく似るものなれば、一大事のかゝる處也。愚痴なるも事ゆかず、才發すぎたるも、牝鷄のあしたする禍あり。驕れる者はたちぬふわざならずして、人の産をやぶるもの也。大かた女事をよくする女は、無用のあそびを好まず。女事をつとめぬ女は、いやしきあそびをこのむもの也。とりわき女子は母の心術躬行にならふものなれば、人の家の産業までをやぶれり。家内貧乏なれば、夫の公役軍用もとゝのをらず、はてはその身も事たらはでくるしめり。事たらはされば、むさぼり生ず、天下の悪の源也。又一向女事にのみかゝりたるも、庶人の妻にしてはさも有べし。士以上の婦人の

文の道、絃哥の遊びをしらざるも野也。優なる處なければ、家道せわし。一度は張、一度は弛すは、文武の道なれば、正しき事にあそぶ事なくてかなはず

ドアリ」

倩、桐壺の巻の中に、更衣の事によりてみかどの寵愛に過させ給ふを、もろこしのためしもひき出つべしと云るは、玄宗の故事と聞え侍り。さやうの人だにも色に乱れ給ふ事は、いかなる事にて侍るや。其外巻々の内心得がたく侍る所々をしるし侍り。其斷りを承りたくと。度也(たしや。玄)云、唐の玄宗もよき生れ付の人にて、はじめは太平の天子といひ、孝經の序までを〔も〕作り、堯舜の道をも興さむと思ひしほどの人なりしかども、楊貴妃が色に本心を失て、世のさわぎも出來たり。桐壺の帝もよき御人がらなれども、かく甚しくいろを重んじ給はゞ、後にはいかやうなる事か出來なむ。玄宗楊貴妃がためしもよそならじなどいへるなるべし。然れども寵愛の甚しき所ばかり少似て、其外は大にとなり。玄宗は初威強かりしゆへに、宮中の后夫人をはじめとして、心にはそねみても、外にあらはれて苦しめなどする事はせざりしなり。楊貴妃に皆おされたり。貴妃も才智明慧、善巧便佞、先意希旨といへば、甚しく利發なりしと見えたり。然らばかたちばかり美人にて、樣躰のゆたかに上臈らしき德はあるまじ。大かた生付よくて、品なき女は、心けはしきものなり。けはしき上に威の有者なれば、權をもとり、人をも推つくるものなり。然れども不德にして心根くらく、分別なき故に、叔父昆弟をすゝめあげて富貴を極めしめ、兄の國忠權をとりて天下に悄まる。國忠ゆへに玄宗をうとみ、楊貴妃

をにくみて乱出來たり。貴妃終にくるしみに沈みて凶死せり。桐壺の更衣は上らふしく、心うつくしき人なり。兄弟一家の者をもすゝめ出したる事もなく、何のさわりに〔も〕なるべき人ならず。誠の賢女聖女といふは、世間の才覺は拙なきやうにて、女しく上らふしきものなり。更衣は天然と賢女の風ありし人なり。さて更衣は父なくて、うしろみは母君にて、宮仕へをもし給へば、とある時はより所もなく、心細き事尤なり。楊貴妃は其身の富貴はいふに及はず、兄弟姉妹まで富貴を極めて甚しく美をつくし、此更衣とは各別〔ちがひ〕なり。然るに楊貴妃の例し〔も〕といへるは、人情といふ物、時勢の威勢ある人もとより備〔れ〕る人の上には、あしき事ありてもいはず。ふとさし出たるやうなる人をば、あしからでもと〴〵しくいふ物なり

○まうけの君とは、春宮をいへるにや、春宮といふ事はいかゞ

先天の時、乾坤南北に位し、震長男にて北東に立て春をふくめり。後天の時、乾坤西北西南の無用の地に退て、震正東に位して、天下の春をつかさどれり。　難波津にさくや此花冬ごもり今は春邊と咲や此花　といへるも此心なるべし。夏は春の事を長じ、秋は春の事を収め、冬は春の事を藏したる道理なり。春をつかさどるは天下を知の義なり。此故に嗣位をつぎ給ふべき皇子を東宮と申すなり。震は乾坤の長子にて北東の居、冬こもりながら春の初をふくめり。春に正東に出て天下を知るの義なり

○おぼえいとやむごとなくとはいかゞ

偕に武士の實德ありて其聞えあるを、おぼえの者といへり。さやうの心にて此更衣も女德女容備りて、やむごとなき聞

え有をいふ成べし

○御遊びの折〳〵、何事にも故あるとのふし〴〵には

上﨟しき人は上らふのなすべき事には器用なるものなり。其所作がら迄もよきもの也。此故に御遊びなどのおり〳〵は、必絃の一方に召れしなるべし。みめかたちよくても、琵琶箏にかゝりて、所作がらあしく、常のかたち迄も見おとりする人あり。みめかたちはよからねども、絃にかゝりて下座おかれず、日比のよきといふ人には、たちまさりて見ゆる人あるなり

○坊にもようせずば

夫婦男女は子孫相續の爲なれば、子ありて後は母の威德もまし、人の思ひ入もちがふ物なり。それにつれて御もてなしも重かるべし。右大臣の息女女御ばらの一のみこは、東宮たるべき事疑ひなけれども、あしくせば此更衣腹のみこにと帝は思すべしと、女御の疑ひ給ふなり。一のみこはやむ事なくおも〳〵しく、世とゝものかしづきにて、源氏の君は帝御一分の御愛子におぼしたり。世俗にも嫡子をば大切に、弟は愛ふかき物なり。いとけなきは他人さへ當分の愛ある ふかき物なる故に、兄よりも弟を愛するやうにいふ物なり。帝の御なぐさみにちかく愛し給ひて、ひき「こ」すべきやうに思したる躰にはあらず。然れども凡俗情といふものゝねたみ「に」て、色々の事を沙汰するものなり。下々も本より備りし人の最負をして、位おとりたる人の愛を「も」そねみ、あしざまにいふものなれば、あしくせば御位も此更衣腹のみこにぞゆづり給はんなどつぶやくを、女御もおのづから聞傳へ給ふべし。もしさやうにもなりなば、帝崩御の後

は、世のさわぎともなるべしとなり。人情時勢如此なる事を知るべし。聖代の天子は妾十二人、諸侯は九人とさだめ給ふ事は、御子多からんが爲なり。人の子は多は母方に似る物なり。其中母方の好きに似、また母方の先祖のよき人などに似て、多くの御子達の中に賢人〔君子〕生給へば、えらびて太子に立、御位につけ奉らん〔が〕爲なり。〔後世〕此主意道理とも後世廢れて、勢次第にて徳のえらびなければ、世も末になり行、國も乱るゝなり。然れども大によき事の道理〔の〕至極なる事とても、君の徳に不相應なる事を取行へば、かへりて乱逆の端となるものなり。大方の惡事をなしたるに〔は〕おとれりといへり

○うちはしわた殿、こゝかしこの

かよふ道に不淨をちらし置て、衣のすそを汚し、さきへも跡へもかへさぬやうに戸をさしこめなどするやうなる、はらあしき事は、賤の男賤の女も尋常にてはしがたき事なり。嫉妬の凡情ふかく、火氣さかんにして、心くらくなり、氣動きては、有まじき邪思も出來るものなり。〔酒狂の類也〕皆大臣公卿の息女なれば、かゝるいやしきことわざをば知り給ふまじき事なれども、ねたしにくしと思ふ者の身ばかりに、よき事あればきげんあしく、あしき事あれば悦喜よき物なれば、其主等の心にうけて、下々の者どものしたるわざ成べし。今大身の人々の、民を苦しめよといふ下知はなけれども、主人の利を欲する心にうけて、それにあたる小人ども、樣々の非道をする事なり。上にはしらぬ事といひながら、上の好む所にしたがふものなり。帝も政務諸道の御つとめおこたり給はずば、御心のいとまもあるまじければ、きうのぼり給ふ事禮儀のまゝなりとも、まち遠にもおぼされじ。御こゝろざしだにふかくおはしまさば、待遠なりとも

更衣の恨もあらじ。然らば人の譏りもあるべからず。牽牛織女の枕の一夜ははかなきやうなれども、世々を經てつきぬちきりこそあらまほし「き事」（な）けれ。何事も生つきて、命數命分と（など）いふもの「あり」甚しければ、とりこして久しからぬ物なり。此更衣も帝あまり過て（甚しく）、かたはらに人なきやうにもてなし給へば、更衣の命短くなりて、思ひの外なる御歎あり。更衣にも色々のうきめをもみせ給へり。只帝の御身の慾のために愛し給ひて、畢竟更衣の身をいたはりまぼさぬ故なり。うしろみなき人なれば、事にふれ別にうち〳〵の御惠みなどあるは別段の事なり。さやうの所には御心もつかず、或ははゞかりなどし給て、やもめの母君に任せおき給ふはかひなき事なり。心なき人の子を愛するも如此。我なぐさみに愛して、子の苦しむ事をしらざる者おほし。わすらるゝ身をば思はず、といへる情は、あつき古人のこゝろなり。△帝にも此心おはしまさば、さま〴〵の人のひが言をも引うごかし給はじ。更衣苦しみ給ふべからず

○心ことなる物の音をかきならし

上らふの遊には、糸竹にしくはなし。爪音撥當り、上手にても、位のなきあり。樂にはさのみ功（巧）なくても、其ひとゞきに位ありて、ゆたかにしめやかなる「も」あり。みな心のうつり人がらの位なり

○はかなうきこえ出ることのは

惣じてうれしき事にも悲しき事にも、はき〳〵と始終のこらぬやうにとばおほふなるは下らふのわざなり。かりそめにはかなくいひ出るも、詞すくなにて優なる言葉づかひ、ものいひの上らふしきを人よりことなりしといひし（へる）成べし

○月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞし給ふなる

常は遠音に糸竹の音の聞へたる〔は〕おもしろし。殊に月には一入興ある事なれども、御心に愁有ば主上の御心を思ひやりもなく、時節不相應なる遊びをすさまじく聞し召なり。音楽は上らふの事なれども、時の風情なくかきならしたるばかり〔たる〕は、詮なき事なり。臣妾にいみなき禮義なれば、公界むきはとからずといへども、心ある人はかくはあるまじき事なり

○あさまつりごと

君が國（は）天下に何事かありつらん、遠方より告來吉凶、近臣の夜のまの事にあくるを待も有べしと思し召せば、早朝に出御あり、諸臣は奏すべき事のあるはいふに及ばず、さもなき人も君の仰どやあらんと、未明より出仕する事なり。いにしへは太政官の人々も早朝（天）より出仕ありしなり 太政官とは左右大臣大中納言參議辨小納言外記史等なり 此人々むかしは天下の諸事をすべて沙汰せしなり（したる）。後三條院は末代の賢王にて、朝まつりごとに出御有て、諸民のうれへ望みを自ら聞し召たるといへり。延喜天暦の御時もとより朝まつりごと有べきなり

○今はうちにのみさぶらひ給ふ

今はうちに、〔一ニ〕今は公もうちにトアリ

うらとは禁中を云〔也〕。それは心を内といふ義なり。心は一身の主宰なり。天子は天下の心なり。一身の万事心より出るごとく、天下の命令皆天子より出ればなり。又禁中といふ事は、不正を禁ずる義なり。王道は人道なり。正道なり。道術のかはりたる者、形體の異なる者などは召入せざる法なり。僧尼も異形異道なる故なり（にや）。名醫〔度緣〕の事、蕃客と同じく玄蕃寮のつかさどりと見えたり。今も太神宮には入られず。宮中には神事の時はいまるゝなり。高麗（こま）人、相人など

は異術の者なる故〔に〕古風にて宇多の帝の御誡にはゞかり給ふなるべし

○さう人

人の形氣を見て吉凶をしる者なり。善人には吉の相あり。惡人には凶の相あり。氣にあらはるゝなり。文形に生付相〔も〕あり。是は先祖の善惡なり

○桐壺の更衣のあらはにはかなくもてなされしためし

人情といふ物、いける程は本よりの后叉は女御〔など〕おはすれば、其最屓をいひて時めく人をねたむ者なり。たゞ人にても本妻のひいきをして、妾などをばあしくいふ物なり。終に憎みおほせて、其人死して後はあはれぶ心出來て、死したる人のよき事を擧、本妻の不仁なる心根あしき事をいひたつるものなり。はじめは桐壺の更衣をそねみて、いろ〳〵にくみしかども、なくなり給ひて後は、其罪春宮の女御一人に歸して、人々あしくいへば、閉つたへ給て、かくのたまふなるべし

○なめしとおぼさでらうたくし給ふへ

なめしとは無禮なり。源氏のちかづき給ふを無禮とおぼさで、いたわり給へとなり。これ帝の愛によりて用心おはしまさゞりし故に、後のひがども出來しなり。男女の情は律義の外なりと俗にもいへり。此故に聖人禮を作りて淫の源をふせぎ給へり。川に堤をつくるがごとし。禮なくしてへだつれば人の恨もあり。禮と定りて別の道正しきは、常となりて邪正をえらばずして無事なり

○うへのつねにめしまつはせば

上古には大學寮あり。其外源平藤橘氏の院と〔し〕て學校あり。又國々に〔も〕國學ありしなり。應神天皇は百濟國より儒〔師〕を召よせて、御子達の師とし給ふ。是によりて仁德天皇の御兄弟、〔御〕位を讓り給ひし善行もおはしましき。天皇の皇子といへども、生ながら御位をさづけ玉はず、たゞ人と同じ〔く〕學校に下し給ひて、文武の藝をならは〔さ〕せ奉り、人情をも知ろし召たるゆへに、威を下に奪れ給はず。文武を御手に握りて、天下を知ろし召たり。仲哀天皇應神天皇自大將として西戎を征し給ひしにて知べし。末の世となりて、此政敎おとろへしかば、十二三元服の御子をだに學校にくだし給はで、女中とひとしくうへの局ずみをさし給へば、好色の心も時に先だちて發し、身のならはしやはらかに、人情時變うとく成給ひぬ。是王威の下にうつりて、天下を失ひ給ひし本意なり

○御かた〴〵の人々世の中におしたべたらぬをえりとゝのへすぐりて

葵の上の官女種姓も心もかたちも、おしたべたらぬよき人々を尋て、さぶらはせ給ふなり。男の爲にはよきにはあらねど、女がたの心得には上らふしき嫉妬なき風俗なり。葵の上の母宮の人がら上﨟しき故なるべし。此里をやすみ所として、學校にのみ置給はゞ婬風の乱も有まじきに、禁中にては局ずみにて、母御息所の女房ども、ちらすつかへなどさせ給はあしきおしへなり。王德のおとろへし事尤なり。我は我娘にまさりたる女房をきらひ、あしきをあつめぬれば、娘の心ざま容儀までも次第にあしくなりぬれば、夫の心とまらで外へうつり、家道そむき婬風にたるもあり。これは娘に思ひつかせんとて、外へおひ出すなり。葵の上のごとく、本妻のかた心やすくして、外の乱なきやうならば、うるはし

き風俗なるべし。惣じて此物語斯のごく（き）「のたぐひ」善悪ともに有のまゝに記して、ほめずそしらず。みる人の心にのこし、心をつけたる書様妙なり

○もとの木だち山のたゝずまひ、おもしろきところ「なるを」

木はさらにうへたるよりも古木はよき物なり。山も苔むしてものふりたるは見どころ有ものなり。後世に神社の大木を伐あらし、社を結構に作りなどするは、なさけなき事なり。人のすみかにさへ、古人は心有て、古木をばのこしたりとみえたり

箒木

○かくろへごとをさへ「かたり」つたへけむ

かくれしのびて人はしらじとおもふ事も、終にはかくれなく、遅速はあれども、かくれはてたるためしは無事なり。善悪共「に」誠のおほふべからざる道理也。人の心は形色聲臭ともになき物なれば、しらるべきやうなし。殊にわろき心などは、よくかくして、人のしらじと思へども、彼人は此心だて此かたぎとよくしりて、世人の△普くとなふる物なり。此故に君子は吾心に恥るなり。吾心の知ところは天下の是を知なり。凡人は心くらき故に、外人（ほかの人）のみる所ばかりをつゝしみて、吾心の神明を恐ざる物なり

○おのづからかしこまりもせず（をかず）

誠の友といふは互に尊卑をわすれて、誠の道を以て心の友とする物なり。漢の光武帝の厳子陵を友とし給へるがごとし。子陵も光武の尊位をみず、光武も子陵が庶人たる所を忘給へり。凡人のしらざる道を、此道理をしらずして、暗にかなふものも有なり

○人をばおとしめ、かたはらいたき事おほかり

其身長じたる所ありて、へりくだりゆづれば、その善いよ〳〵大なり。其上ゆづりくだる心の徳は、萬善の上なり。其能にほこれば、其能を失ひ、其功にほこれば、其功を失ふ。大なる損なれども、其道理人情をわきまへざるは愚痴の至なり

○さはいへど猶異なり

男は才智器量ありて、なりのぼりぬれど、其実の内は思ひの外に本の賤しき風俗にて、妻子などは夫のおぼえにたぐひがたきも(心)多し。内外ともにとゝのほりて登る人も有べけれども、それはまれなる事なり。又位ひきく、時代のおぼへなき人の家のうち、おもひの外によくとゝのほりて、妻女のやういたかき人にもおとらず、心はづかしきあり。これらは内々の實事なれば、外に知がたし、こゝには世間の大躰をいへるなり。もろこし人も聟をばえらびて、婦をえらふ事くはしからず。男はみやすく、女はみがたきゆへなりといへり。好色のえらびにはあらで、よくえらむべき事なり。子の身心ともに母がたに似る者多ければ、つゝしむべき義なり

○心は心としてことたらず

是は中人の質なり。よく取たつれば、上臈しくなり、世におちぶるれば、心もともにくだり、手跡なども世にありし時よりはおとり、琵琶箏の爪音もむかしのやうにはなき物なり。器量なき人は常に斯のごとし。才徳器量ある人はさあらず、身はくだり〔て〕おちぶれても、心はわろびたる事なく、浮世の富貴にまぎれて事しげかりし時、おもふ様にもなじまざる文の道をも學び知り、糸竹の遊びもしづかなるいとまに心にいれてなし得れば、何事も富貴の時よりは一きはまさりて、心恥しきけはひ多し。明石のうへ是なり。上の品の人にも肩たぐひ稀なるべし。我物とせんには本より位高く、生れ付もてなしともによくそなはりたる人よりは、これこそあらまほしかるべけれ。然れどもかくのごとき人は世に稀なれば、多きかたにてかくいへり

○すべてにきはゝしきによるへきな〔ゝ〕り

此源氏のとがめ尤なり。富貴の中にのみよき人多きやうにいへるは、かたおちたるなり。それにはよらぬ物なり。右大臣の女にも弘徽殿女御のやうなる人あり。大納言の女〔に〕も桐壺の更衣のやうにすぐれて上臈しき人あり。下の頭の中將の詞は、過をかざりだるやうなる歟

○うちゝゝのもてなしけはひおくれたらんは

富貴の家の子はいとまもあり、師もまねきやすし。詩歌管絃文の道にもうとからじ。より近付ものもいやしからねば、下臈の事は知聞敷なり。もてなしがらにて中品の生付も、上品に及べきと思はるゝに、無藝文盲にて樣躰もおくれたるあるは、よくゝゝ生付あしきか、親の家の風俗あしく、教もなきなどうたがはるべし

○大かたの世につけてみるにはとがなきも

とがなきは子細なきなり。何事もよそにてみる時は、子細なき人も、立いりて見る時はきず多きものなり。まして一家の骨肉とたのむ人をえらむに、我心のごとくなる人はあるまじきなり。世の中といふもの、何事につけても、思ふに叶ふたる事はなき物なり。慾にて思ふやうなる事のあらんやうに願は惑なり。家風のあしき歟、悪疾ある歟、親兄弟の人がらあしき歟。其身の不具「なる」歟、人げなき生れ付か、頑愚なるか、怒氣多き歟。大かたかくのごとく大なる疵だになくば、縁にまかせて定たるがよきなり。在がたき者なるを、有べき事のやうに思ひて、あまり「に」えらびすぐれば、かへりてあしきに定ると多し。諺にも刀えらびする者は、後には朴の木をさし、馬ずきする者の、はて〳〵は牛にのるといへり。嫁えらび人にとえたる者は、大かたは取そこなふ物なり。又男子の器量すぐれたるが、一向たぐひがたくあしき女もちたるもあり。女の生れつき心ざま万人に勝れて、世に有がたげなるが、頑愚無器量の夫に随ひて、一生空しきがごとくなるもあり。男女夫婦の道は人力の及びがたき所あり、命ありとみえたり

○試のうつはものとなるべきを、とりいださむにはかたかるべし「かし」

古しへより才有がたしといへども、君たる人には眞の徳有て、其心にかなふべき志だにおはしませば、國天下のひろき中には、賢者も出來る物とみえたり。徳不孤、必有隣の理なり。上に德なく學校の政なくて、たゞに才德の人をえらび求めては、いつの時いづれの國にも有がたき者なり。たま〳〵有てもあぐる事なく、あげても用ふる事なければ無きに同じ

○上は下にも助られ、下は上になびきて

國天下の政は相談にて事ゆく物なれば、其中才德不足なる人有といふとも、さのみ心にたゝず。人君たる人は自才智あれども、おさめたくはへてさきだてず。寛裕虚中にしているゝ事天地の量のごとくなる時は、官々職々の者、己が天質を盡して、上をたすくる者なり。衆說のまち／＼なるをえらびて、時所の中庸に叶たるを取用給ふは君の德なり。諸臣の及びがたき所、うたがはしき事は、畢竟君より出べき事は才智をもつて上を助くるといへども、實は上の德になづきしたがふ者なり。君にたとへば心のごとく、臣にたとへば手足耳目のごとし。是を心服といふべし。是に加るに學校の政、禮樂の教をもつてせば、道ある世なるべし

○せばき家のうちのあるじとすべき人獨りを思ひめぐらすに、たらはであしかるべき大事どもなむ、かた／＼おほかる

一家の主は壹人のはからひにまかすれば、却て大事なり。それ一門の〔和〕不和、家人の安危は、多くは妻の心の慈不慈にかゝる物なり。子孫の盛衰も妻の仁不仁による事多し。男子女子のかたち心ざま、母に似る物なり。よきには似がたく〔し〕て、あしきにはよく似る物なれば、一大事のかゝれる所なり。愚痴なるも事ゆかず、才發過たるも牡鷄のあしたする禍あり。驕れる者はたちぬふわざならずして、人の産を破る物なり。大かた女事をよくする女は、無用の遊びを好まず、女事をつとめぬ女は、賤しき遊びを好む者なり。とりわき女子は母の心術躬行にならふ物なれば、人の家の産業までを破れり。家内貧乏なれば、夫の軍用公役もとゝのほらず。はては其身も事たらはでくるしめり。事たらざ

れは貧生ず。天下の惡の源なり。又一向に女事にのみかゝりゐるも、庶人の妻にしてはさも有べし。士以上の婦人の、文の道絃哥の道をしらざるも野なり。優たる所なければ家道せはし。一度は張、一度は弛すは、文武の道なれば、正しき事に遊ぶ事なくては叶はず

〇必しも我思ふにかなはねど、みそめつる契ばかりをすてがたく思ひとまる人は、物まめやかなりとみえて必我心にかなはねども、あはれみをくはへて、とかく堪忍しとぐるは貞心仁厚なる人なり。女子といふものは我と嫁をさだめて來るにあらず。父母兄弟のはからひ次第に嫁する者なれば罪なし。然るを我心にあはずとて離別するは、其女一人の恥辱離儀になる事なれば、不便たる事なり。不仁不義の凶惡だになくば、おしへみちびきてよかるべし。慾心にて我一人よからぬ妻をもちたるやうに思ひ、よきにかへんと思へども、よからぬは大かた世の中の常なり。或は妻の父兄一門の前を思ひ、或は君命をはゞかり、人口をはばかりて、一日〳〵と過る内に、子など出來ぬれば、子を不便に思ひなど、とかくして一生過る者多し。また氣方にあひたる緣にて、外よりみたるやうにはなきもあり。男女ばかりにもあらず、君臣朋友の交も心にあひたるはすくなし。智者は世の中はかくのごとくなるものと知り、君子は物を以て物をみて、此人は本より如斯なる人と思へば、とゞむる心もなし。或は故者の故者たるを失はず、或はすぢめを思ひ、或は禮義をもつてして、心のあふとあはざるとをとはず。君たる人よきをとり、よからぬをすつるやうなるは不仁なり。不仁にしては國の亂となる事はかたし。直きをあげてまがれるをえりすてざる時は人服し〔民〕安し

〇物まめやかに、しづかなる心の〔おもむきならんよるべ〕

古は女德女容の備りし婦人も稀には有しかど、源氏の時分には漸有がたし、しばしは色よきにめうつる事あれど、夫婦となり常に友とすれば、心だての眞實によるもの、なりかたちよくても、たのもしげなきか、慈愛の心なき人は、年月にそへてうとまるゝ物なり。かたちはよからねど、貞心慈仁の眞實ある人は、おりふしに見まさりする事あり。年月にそへてしたしくなるものなり。しなも自然に德につきたる品あるものなり。わかきうちは色を好み、あなたこなたたづさはりたる人も、つひには色にあきて實に歸する者あり。右馬頭など隨分のすきものなれど、こゝに至て得心したる躰なり。河たち〔は〕川にてはつるといふやうに、好色もあだめきて、つひに得心せぬ人は必あやまちし出す者なり

○あまりのゆゑよし心ばへうちそへたらんをば、よろこびに思ひすごし、おくれたるかたあらんをも、あながちにもとめくはへじ

ゆゑよしは文章詩歌管絃のたぐひ、風流の心ばへなるべし。實躰なる人は日用の事に心を入て、風流なるわざには心をもそめぬ者多し。また風流に過たる者は、實躰常行の事におろそかなり。此德あれば此病有なり。うしろやすくは夫の留守に、おきさしはなちなどしても、たしかなる人がらなるべし。のどけきは人の主人にして、優にゆたかなる人なり。心たしかにてゆたかなるは、家主第一の德なり。此本だにあらば、他の事はなくても可なり。禮樂をばほどこすべき質なるべし。實なくて愛敬なるは輕薄にも近く、あだめきたる難も有べし。實ありて後の愛敬はすこしありてもよかるべし。妻子のみにもあらず、君子の人を用るにも備はらん事を求めず、人の頭とりし上におくべき人がらは、才たらずとも眞實の德ある人をえらむべし。其人の下につきて、ひとつ〴〵えたる事をつとむる時は、たとひ實うすき人も、

上に居る人の實にひかれて、才の一品はとぐべきなり。上におる人眞實の德うすく、才智(知)を事とする時は、其下いそがはしく、僞りがちになりて、事繁き物なり。人の才をもつくすとあたはず

○にごりにしめる程よりも、なまうかびしては、かへりてあしき〔道にもたゞよひぬべくぞおぼゆる〕

佛は無のねといひて、何もなき物なり。釋迦も達磨も衆生も、死して何もなくなりたる所は同じ佛なり。人々佛性(の)これなり。草木國土迄も(△)無より生じて無に歸す。いきながら此理をさとりたるを佛ぼさつと云。生身の彌陀如來なり。されども佛といふ物ある樣にいひおきたるを、うけてみ給ふべしといへり。凡俗のまどひたる心を濁といへり。佛法に〔は〕輪廻とみたる故に、五倫をまぬかれ、無に歸したる心を成佛といふなり。〔出家はさとりて出離解脫の境界なれ共、形斗〕出家にて心にはなれぬ所あらば、かへりてあしき道に輪廻すべき(し)といへり

○心はうつらふかたありとも、み初し心ざしいとおしく思はば、さるかたのよすがには(ム)思ひてもありぬべきに夫の心に(は)うつらふかた有とも、女のかたよりみしらぬさまにてすぐさば、さすが夫もみ初し契りを思ふて、十分ならぬ中なりとも、さるたよりに思ひてあるべきを、その樣なる事のまぎれにあひては、斷絶すべきわざとなり、人間世のならひ、夫妻のみにあらず、さまざま六かしく心ぐるしき事多き物なり。何事も堪忍して言出すして、世の有樣とわきまへぬれば、無事に過る者(とを)なり。氣みじかく我ともていでゝは、事のやぶれしいだすためしおほし

○えむずべきことをば、みしれるさまにほのめかし、うらむべからんふしをも、にくからずかすめたさば、それにつけてあはれもまさりぬべし

誰となく有べき事なり。いにしへの人は妻に大罪有て、止事を得ず離去すべきにも、小罪をいひ、我身の短慮になして出したりといふ（いへり）。朋友の大過ありて義絶するも又同じ。厚〔き〕の至なり。頭中將も随分は上らふしき人なれども、かやうのたらざる所あり。源氏はつひに人の噂〔を〕の給はず。天質の美、仁厚の生つきの故なるべし。此故にあしきくせは有しかど、行末さかへ給へり

○三史五經のみち〳〵しきかたを

三史は史記前漢書後漢書也。五經は易・書經・詩經・春秋・禮記也。三史と同じやうにつらねいふべき〔書〕にはあらされ共、其比は道德の學なかりし故に博學をもとゝせり。此故に近〔き〕頃までも學者をば物知りといへり。道〳〵しきといふも其跡斗なり。男さへ物知りがほなるはにくきに、まして女の道知りだてなるはあしく（し）、誠の道〳〵しき女は、自然に此上品の位に叶べし。男の男しく、女の女しきは誠の人なり。誠の人は賢人賢女なり。聖女と云ふ（へ）は吉祥天女のたぐひ〔のやう〕に思へどもさにはあらず。文王の后妃は聖女にておはしましゝかど、道だてなどして、かど〳〵しき事もなし。心の明なる所、少も外にみえずして、いかにも女しくすぐれたる上らふの風情なり。男も女も心のくらき所より、萬事の（事）惡は出來る〔もの〕なり。男女とも〔に〕道德をしらで叶はざる事なり。もろこしの婦人は詩を作り、日本の婦人は哥をよめり。詩哥ともに道理をしらでは何事をかのぶべき。たゞ學びやうに善惡あるとなり

○うたよむと思へる人の、やがてうたにまつはれ

哥だてする事を此段に〔は〕戒たり。すべてよき事にても、それだてといふ事はよからず。忠孝の道も孝だて忠だてな

は　三八
必、全菴
ハ則

ればあしきなり。物知りだて武勇だて、みな見にくき物なり。其善にほこれば、其善を失ふ〔道〕理なり

〇いはまほしからんことをもひとつふたつのふしは、すぐすべくなん〔あべかりける〕

一二のふしはいはずして過すなり。男さへまた人もなげに、我知たる事心得がほなることわりを、人に先だちていひとりたるはあしく、古の人の言のおそかりしは、知ことのかたきにあらず、行ふ事のかたき故なり。言に行の及ばざるは、はづかしき事なれば、知たる事もたやすくいはず。いふべき人だにあれば人にいはせて、我は其跡にしたがひ、やむことを得ざればしひられて、かくもあるべきなどいへり。我是をたつる心なく、ゆづりてさきだゝぬ心は虚なり。虚は明〔らか〕なり。明〔らか〕なれば其言理にあたる。己虚明にして言理にあたれば、人の争心生ぜず。人より其理をたつる物なり。況や婦人は年老てもはづかしげに靜なるを德とす。心わだかまりねぢけていはざるにはあらず。上臈しく物はぢする心より、大事の事はしらずがほにて人にはからはせ、いはずしてかなはざる事も、何となくひとつふたつはすぐして、やむことを得ずしていへば、人其いふことをいとはず。誠のおほはれぬ道理なれば、其人たしかなる心だにあれば、人おのづから主本とするものなり。男女ともに德ある人は言すくなし。天地不言して四時行れて万物生ず。德のいたりなり。

〇かの人々のすてがたくとり出し、まめ人にはたのまれぬべけれとおぼす物から、餘りうるはしき御ありさまの、とけがたく恥かしげに〔思ひしづまり給へるを〕

塞上の絆おもめだかにてけだかき上臈なれども、たをやかに愛敬づきたる所すくなきなるべし。然れども心身ともに上

蕃樂にトアリ。互ノ草躰字ヲ樂トアヤマレルナラジカ

賤なるゆへに、けはしきやうなる事、物怨じなどは少もなきなり。あさ／＼しくうしろめたき事なければ、本妻としてうちたのまんにはよき人なり。顔色柔和に形容うちたをやかにて、心の貞正なるは聖女なれば、さやうの人は世に有がたし。此德有ば此病あり。そなはらん事を求むべからず

○もてはなれてうと／＼しう侍れば、世のたとひにてむつれ侍らず

繼母繼子の間なり。すべて繼子をば愛せよ大切にせよと、父兄もおしへ他人もいさめ、其身もさやうに思へる故に、却てへだてとなりて、にくむ心出來るなり。いかにとなれば、實子の中にだに、愛の厚薄は有ものなり。増てまゝ子は他人なれば、無理には愛せられず。我を後の母とたのむ子なれば、にくむはひがごとなり。愛せん大切にせんとはおもはずして、何心なきがよきなり。愛せむと思へども此心だてにては愛せられずとおもふより、あるまじきにくき心も出くる物なり。無心なれば其あしき所みえても心にかゝらず。慈母の名までこそなくとも、不慈のそしりは有べからず。殊に紀伊守空せみのごとき、身上よろしき中は、禮義の往來ばかりなれば、愛惡のかゝる所にあらず。大身なる人も我子など出來ては、慈〔心〕より有まじきひが事出來るたぐひもあり。是は幼少より親の家にて、上らふしきおしへなきがいたす所なり。またこゝに世のたとへにことい(ひ)へるは、たゞ遠々敷といはんためばかりなり。空蟬若く紀伊守おとななれば、互ひに(樂)遠慮有べきほどなり

○めでたき事も我身からこそと思ひて

萬事にわたる事なり。いかに過分なるとにても、我身不相應なるとはいかゞとなり。分別思慮に及ばず、義をみては進

み、不義を知てさくるは上品の人なり。善悪是非の得失利害損益を分別して、心に好ましきことにても、不義なればせず。心にきらはしきことにても、義なればつとむるは中品の人なり。此中品の工夫、我人の大切なる所なり。勇なくては決斷なりがたし。空蟬は此決斷の所明なり。女といひ、もつとも奇特なり。天性智勇の靈あきらかなる人なり。得失利害をもわきまへず、情欲のひくかたにとゞむは下品の凡夫なり

空蟬

○やがてつれなくてやみ給ひなましかばうからまし。しひていとおしき御ふるまひのたへざらんもうたて有べし。よきほどにかくてとぢめてんと思ふ物から、只ならずながめがちなり

空せみの心つよきに思[ひ]とり給ひて、頓て此まゝつれなくて、音つれもなくやみ給ひなんは、うつせみの爲には本望ながら、またかなしくも有べし。しかればとて心よわき躰を見せて、たへず音信あらんは迷惑なり。よき程につれなくてはてんと思とぢむるなり。情に發するは民の性なり。禮義にとゞまるは先王の澤なり、との心にて、たゞならずながめがちなるは、男女の情に發する所なり。然どもしゐておもひおこして、つれなきは、禮義にとゞまるなり。尤殊勝なり

○いとつらくもうれたくもおぼゆるに、しゐて思ひかへせど、心にしも[したがはず]

好色を心として、其事をやめむと思ひかへすともやむべからず。正しき道を心とする者だに、時として好色の意念お

ころは凡情のならひなり。然れども常に正しきによる心有れば、其意念は知やすし。少きざしおこる時にははやくやめて、他の事にうつるべし。心に事とするとある者は、邪路におち、いらざる者なり

○昼より「は」にしの御かたのわたらせ給ひて、碁うたせ給ふ「といふ」

こゝに碁の事をいひたるは、碁などは精を入るものなれば、身上もわするゝ事なり。さやうの所を思ふべきおしへなり。空蟬「と」軒端の荻との樣躰ども、よく〳〵思ふべし。道學をことゝし、六經に遊ぶ人の爲には妨なれども、所作なき者は碁に精を入て、他のあしき事をわするゝは、せめての事なり。其爲に聖人の作り給ひしなるべし。三百六十目は一年の數にかたどり、石の黒白は陰陽の交にかたどれり、後の人はその理其心を「ば」しらずして、跡により「て」石の生死を知のみなり。其理を得ても德を知れる人の爲には無用の事なり

○かほなどもさしむかひたる人に、わざと見ゆまじうもてなしたり

空蟬の用意ふかき躰なり。物しづかにふかく幽なるは、容躰の第一なり。されば關雎の詩に、聖女の德を稱して窈窕といへり。窈窕は幽閑の心なり。かくうちとけたる家の內にて、しかも碁などには心をとられぬべき折ふし、其用意「を」不失はさすは奇特なり

○心ちぞなほ、しづかなるけをそへばやと「ふと見ゆる」

ふとみたる所も一かどあるよき生れ付の人なれども、女しく靜なる氣象なし。世に大かたよき生れ付の人はおほけれども、用意知りたる人まれなれば、能き生れ付もあさまになりて、おしあはせてあしくみゆるものなり

○いよのゆげたもたど／＼しかるまじう見ゆ。少し品おくれたり

軒ばの荻はいよの湯桁をもかぞへつべしとなり。女の物かずかぞへ過たるは、はしたなかるべし。上臈しからぬさまなれば、下ざまの事よく知たらんとなり。下の事知たるはよけれども、上らふの心ありて知たるは、めぐみの及べき道なり。下らふの心にて知たるは、たゞにいやしきのみなり

○いひたつればわろきによれるかたちを、いといたうもてつけて、此まされる人よりは心あらんと、めとゞめつべきさましたり

人は用意心ざま也。ひとつ／＼いへばよき所〔は〕なく、あしき方なる生れ付なれど、心ざま用意のよき故に、おしあはせてよくみゆるなり

○ありしながらの我身ならばと、とりかへす物ならねど

空蟬の心中始終此こゝろあり。女の緣といふ物あり。生の初より天命あれば、人力の及ばぬところあり（る也）。よき生れ付よき心ざまの人、何の心しらぬ野人の所へゆきて、あたらものとみゆるあり。あしき生れ付、よからぬ心ざまの人にて、かくても人の女といはるべきかと思ふ人の、おもひの外によき所へ行て、有付栄るあり。天命を安じてあしきをもいとはざるは賢女の道たり

夕顔

はかるべき〔三〕有べき〔審〕けがるべき

○いづこかさしてとおもほしなせば、玉のうてなも同じとなり

世の中はいづこかさして我ならん行とまるをぞ宿とさだむる。富貴に本心を失ひて奢たる人の目には、玉の臺をのみ好て、はかなき住居をばあなどるものなり。道知れる人は、玉の臺は好ましからず。七年〔の〕夜雨しらずして過し事をおしめる詩人も、草庵のしづかなる樂を始てさとれり。悅盡ては悲み來たる。盛なる者は必おとろふ。道なくして富貴に奢れる人は、哀衰をいだきて死する者なり。その心物あはれにて、何のわきまへなきものなり。あしふけるわらやに心をすまし、死生の道にもまどはざる人こそ、あらまほしき事なれ。貴賤上下のまじはりわらはべの遊事のごとし。下となりてはかるべきにあらず。上となりて驕るべからず。堯舜禪受三盃酒、湯武放伐一期〔朝〕碁といへり。聖賢は富貴貧賤に心なし。あふ所の境界なり。此故に天下をたもてどもあづからず

○こゝのしなの上にも生れ〔給はめ〕

九品上生也。阿彌陀は無量壽佛とて不生不滅の心をいふ。生も假死も假也。只常住なる者は即心即佛の阿彌陀なり。まよひの目には生死あり。さとりの目には生死なし。されば悟道の心の位を無量壽佛と名付たり。文殊。普賢。勢至などいふも、皆心の位を釋迦といふ人の名付たるものなり。九品の淨土極樂世界といふは、心のまどひとけぬれば、道のたのしみ〔有〕、悟道の心の位によりて、道德の樂も淺深ある所を九品に立たり。道心の樂は何ともいふべきやうなければ、しばらく凡心の好みしたふべき事をいひつらねて、いろ〳〵ねがはしき有樣をいひきかする事なり。黑繩に書たる松風の音なり。まよひの心よりみれば、十万億土の外にあるやうに遠けれども、悟の心には娑婆世界即〔則〕寂光の淨土

なり。唯心の淨土己心の彌陀、こゝをさる事遠からざるなり。されば佛とはほどけりといふ和訓なり。まよひのほどけたるをいふなり。此故に生れながら佛とならざれは、死して佛になるといふ理はなき事なり。然れども死すれば上に君なく、下に臣なし。飢寒の事なし。何事もなく空々寂々としたる所は、生れぬさきの心なり。これ極樂世界ともいふべし。又佛といふとも可なり

○かやうのなみ〳〵まではおもほしよらざりつるを、ありし雨夜の品定の後、いぶかしくおもほしなる

大人の耳には細事を入ざる事なり。人は善惡の友によるなれば、ことさら人の上たる人には、善人をえらびてちかづくべき事なり。初よりあしき事を聞ざれば、あしきならひはつかざる者なり。心すでに善に定り、物の道理明らかなる後は、世の中のあしきならはしなど聞ても、政道の心もちにはなりて、我心のけがれにはならざる者なり。いまだ心さだまらざるわかき人には、かりそめの物語も大事なり。いにしへは狂言などいふはかなきたはぶれにさへ、貴人の下の情しらであしかるべき事どもをいひて、心をつけしとなん。近比はそれにも貴人は夢にも知り給はぬ下〳〵のあしきならはしをいひて、我心をつくるなり。貴人に知らすべき細事は、上に居て下をなやまし、富て奢りを知らざる類の、政敎にたより有べき人情時勢の事どもなり。民の艱苦をよく知れば、禮義の外の榮耀俗樂はなすに忍びず。李紳が詩に、誰知盤中餐、粒々皆辛苦

○となりの家々、あやしきしづの男の聲〳〵、めさましてあはれいとさむしや、ことしこそなりはひにもたのむ所すくなく、ゐなかのかよひも「おもひかけねば、いと心ぼそけれ」

此段貴人たる人のよく心をつけて知り給ふべき所なり。庶人はやすく寢るのいとまだにもすくなし。昼は終日はたらき、夜るは夜更るまでの仕業あり。曉は鷄の聲に先だちて〔おき〕さわぐ。夜の食もあたゝかならざれば、冬はねざめがちにていとさむし。夏はふせ屋のあつきにくるしくてねられず。なりはひは業作なり。賴みなきとは、五穀のみのりすくなく、年をとるべきたのみなしとなるべし。他國へ商賣せむも思ひよりなし。いかゞして妻子をもはごくまむと心細きなり。あきなひ耕作ともにいとなみの品はかはれども、貧なる者のより合は同じ事なり。千人萬人の辛苦あつめて、貴人へまいらするものなり。其辛苦より出たる衣食金銀なる事を知らで、榮耀の奢にのみ用て、世のため民の爲になるべき仕業なきは、無下に愚なる事なり。位高き人の仕合あしく、子孫ほろびおちぶれなどするは、皆其天罰なる理を知らず。むかし民間に孝子あり、城下に出て家老の家居の結構なるをみて、此結構なるは千萬人の辛苦と淚とのあつまりなる事と思へば、堪がたしといへり。平氏の世ざかりの驕は人のにくむ所なれども、おちめのあさましくあはれなりしは、いたましき事なり。此故に聖人臨の陽盛におゐて、八月に至の凶を示し給ふ。十一月に一陽來復し、十二月に二陽長ず。來歲六月〔天山〕遯の陰盛を、今年早く戒給ふやうに、世盛のときに身の驕をかへりみ、民の辛苦をいたみなば、子孫の衰へ有べからず。公家はいにしへの禮樂を不失、淳素にして風流に道學を能つとめ、詩哥のわざにうとからず。位に應じて身もちけだかく、人道の法をとるべき本となりておはしまさんには、代々おとろへ給ふ事有べからず。武家は恭儉剛直にして、弓馬の道を失はず、公家を尊び士をおしへ、民を撫安し、天下を警固して、凶賊おこらず。萬民皆其利其樂を得ば、亡ぶる事有べからず。むかし公家の世盛に驕奢遊樂の風流のみ事とし給ひ、民の

辛苦をかへりみ給はざりし　、かくおとろへたり。尊氏の末より信長の比までの公家の衰へは、目もあてられぬ事といへり。公家一統の時に合せては微なれども、近年公家中へ入所の米金は、武家の内緣のつゞきを合せば、いにしへ五畿内五箇國の貢物にはまさるべしといへり。むかしは日本も軍役民間にこもりたる故に、貢物は十一に當れり。畿内五ケ國の貢とても、十一なれば甚だかろし。惣じて公用は大なるやうにても費多からぬ物なり。私用の著は目にみえずして費おびたゞしきものなり。むかしは驕者ながらもつとめあり。今は人道の本たる務もみえず。世俗のいやしき事のみをもてあそへば、實は何の業もなくて、民間の辛苦をあつめ費やすなり。大名緣邊にて内に入ところの物は、猶以て諸國の辛苦なり。此後はいかなる禍にかあふべき。其時のあはれをおもへば、いたましき事身のうへには知らざると、是非なき事なり。武家もまた是におなじ

○さきのよの契りしらるゝ身のうさに行末かねてたのめがたさよ

前世の宿緣つたなければ、今世かくのごとしと、たゞ身のはかなきを觀じて、未來はたのむ所もなきよしなり。西戎の佛法には前世現世後世をたてゝ、世界を輪廻とみたれば、三世をいふなり。中華の儒道にては、三世をいはず。天地陰陽の理は山澤氣を通じて出る泉あり。川の流て本の水ならぬごとく、萬物皆無中より來り、形色は數ありて消失ぬ。殘る物は何もなし。生れかはるといふこともなく、輪廻はなしと知なり

○御まくらがみにいとおかしげなる女ゐて

御まくら上は、枕がみなり。女は御息所の念なるべし。生靈死靈といふ物、億兆の中に一人あるかなきかなり。昔の

人は魂神つよく魂精あつく、萬事のつとめ通りて根ぶかゝりしなり。此故におもひ入ふかきもの靈となりたるためし、唐日本ともに有し〔事〕なり。近世は人の魂魄うすくなり、萬事のつとめも深からず、思ひもあつからざるゆへに、靈になる者稀なり。むかしよりいひならはしによりて、さも有かとおそるゝ者あれば、其心の靈に乘じて、狐狸などやうの物など、靈のまねをして人を誑かすとみえたり。實の靈はなき事なり。稀に死靈になりたるも數ありて、後は消失する物なり。また子孫を立て祭らしめ、或はほこらなど立てゝ、神のより所をなせば、其靈やむ物なり。夕良はおそるゝ心ふかき故に、我となくなり給ふなるべし。御息所の靈にては有べからず。狐は罪なくてもよはきものによる、常の事なり

○物にけどられぬるなめりと、せむかたなき心地し給ふ

物の人の氣をうばふにあらず。自ら恐しと思ふ心より、氣を失ふ物なり。むかしある法師夜更てやみに寺へかへるとて、日ごろ猫またの事を聞て、おそろしと思ひける所に、手飼の犬むかへに出てあまへけるを、暗の夜なれば犬とも知らず、猫またと心得て、よばひさけびて、氣を取失ひしとなり。草も木もばけ物にみなし、昼は何の事もなき物どもを、夜はいろ／＼にみる事、皆心の迷ひなり。その迷ひによりて狐狸も變化するなり。人は万物の靈長なれば、本心だに失はずば、何物も害する事はならず。むかし天狗の人につきたるがいへり。慈悲なる人ほどおそろしきはなし。其門前も過がたし。邪見なる者は我同類なれば、誑らかしやすし、となり。我心まづ邪暗になりて後、邪氣もいるものなり

○なにがしのおとゞ、〔を詮〕おびやかしけるためし

昔は山澤しげり、荒廣の所多かりし故に、魑魅魍魎の厲鬼有しなり。常に形あるものにあらず。人の心によりて時に形をあらはす事もあり。厲氣なり。邪氣は正人にふるゝ事あたはず。其上幽明人鬼境界別なれば、打交る事なし。魑魅のすみかに行てはみる事〔も〕有。わざと魑魅に犯されじとて、勇だてにて行は、此方の心先邪氣となりぬ。悪鬼の犯す事尤なり。魑魅の有る所へ〔も〕ゆかで叶はざる道理有て行は我に道理あり。邪氣犯すべからず、鬼神に横道なしといへり。もし見えても害をなさず。むかし大剛強の者の悪をなし罪重き者を、深山の境の番に置て、魑魅魍魎を防しめたる事あり。厲氣を退て人家を廣くせむ爲なり。悪氣も人に勝事はならざる道理なる故に、剛強にて恐れされば、次第に退き消ずる物なり。またすぐれて勇ある者を、悪氣のたぶらかし試たるためしあり。貞信公其類なるべし。古狸は剛弱ともに人を誑かすものといへり。昼は陽明によりて人心明なれば犯しがたし。夜のくらきにたよる者なり。理に明なる者は昼夜のへだてなし。故に恐るゝ所なし

○ものゝ足音ひし〳〵とふみならしつゝ、うしろより〔より〕くる心地す

昼は心もひろく氣も散じ、或は世間もさわがしく、我心もうきたる樣なれば、大かたの事は聞もいれず。夜は世間しづまりぬれば、少の事も聞ゆるなり。廣き所には間の風もあり。風の物にあたるもあやしくきゝなされ、ねづみいたちなどやうの物ありくも、人か何かと思はるゝ物なり

○しのぶとも世に有事かくれなくて

凡人の物をかくすは、鳥のかしらをかくして尾の顯はるゝ様なり。一旦はかくるゝやうなれども、善悪ともに誠はかくれなし

○うかびたる心のすさびに、人をいたづらになしつるが、と負ぬべきが〔からきなり〕

うかびたる心のすさびは、浮氣のすさび〔事〕といふ心なるべし。外慾にひかれて本心の放心するは、主なき宿のあれたる〔が〕ごし。色に奪れ浮氣になりてなすとは、皆本心なきなり。よき友などありていさむれば、うかびたる心もしづまる者なり。わかき人のよき師なきは危ふし。あやまちして後、夢のすこしさめたるやうなるもせんなし

○世にたぐひなくゆゝしき御有様なれば、世に長くおはしますまじきにやと、あめの下の人のさわぎなり

源氏君人がらの世にたぐひなければ、長命ならじと思へるなり。惣じて清靈なる者は、氣うすく躰よわし。櫻はいのちみじかく蘭は消安し。名もなき草は引すてゝもかれがたきごく、聰明なる人には短命多く、愚不肖たる悪人には長命多し。氣濁り質しぶときは强き物なり。靈質にして人道を知らざれば、色にうつる者あり。義經義貞杯〔の類〕なり。源氏の疵も好色一にて、生れつきは仁慈聰明の美質なる人とみえたり。時代の風俗なれば好色も其時は只今の心におもふやうには有まじ。今は好色のもやうかはりて、實は同事なり

○女はたゞやはらかにとりはづして、人にあざむかれぬべきが、さすがにものづゝみし、みん人の心にはしたがはんなむあはれにて、我こゝろのまゝにとりなほしてみむにはなつかしく〔おぼゆべき〕

女は三從の道とて、幼少の時は親にしたがひ、成人して嫁すれば夫に隨ひ、老ては子にしたがふといへり。順從を以

て道とする者なり。此故に物やはらかにて、我をたてぬ者なり。柳の枝に雪折のなきやうに、あしきかたへはなびかぬ心の貞信〔堅固〕なる人ならでは、本妻としてうしろやすき事はなし。夕貞は今の世の奉公人などいへる類ひなるべき賤。親もなくおちぶれて、たれにてもはごくむ人にまかせたる身なるべし。本妻としうちたのまんにはたらはぬ心地すべき人なり

〇此ほど迄はたゞよふなるを、何れの道に定まりておもむくらんと〔おもほしやりつゝ〕

七々日の間、中有にたゞよふといへり。輪廻の說よりかやうの事もいへり。四十九日・百ケ日・一周忌・三年忌・七年・十三年・三十三年忌などゝて、弔ひをするも、皆輪廻を助る說なるべし。月忌とて每月の忌日に精進をする事は、佛說にもなしといへり。唯一念の稱名にて往生うたがひなし。一度の題目にて成佛すといひながら、又重々の弔ひをする事は、念の爲か冥加のためかと、一休はいへるとなり

若紫

〇よろづにまじなひ、かぢなどまいらせ〔給へど〕

まじなひは厭術なり。もろこしの醫術わたらざりし以前は、みなまじなひにて諸病をいやしたり。三輪の明神・五條天神其祖などゝいへり。むかし〔の〕人は慾すくなく、氣躰すくやかなりし故に、病もねぶかゝらず。みる所甚しき樣にても、病はうきてかろかりし程に、まじなひにて氣を轉ぜしかば愈たりき。〔今も世に厭術の少し殘りて有は、其名殘

あるもあり。また後の人のむかしをまなびて作りたるも見えたり。石針などは唐の上古のまじなひなり。藥補も常に食物として、朝夕用ひば何の事もなき〔物〕を〔も〕、少し匙の先にかけて用れば、死生を定め大病をいやす事、是またまじなひと同〔じ道〕理なり。食は我彼に勝〔て〕、我生をやしなふそなへとすれば別義なし。藥は我彼にまけてうくるゆへに、病をいやすものなり。道理〔は〕まじなひと同じ。人心多欲〔なる〕にしたがひて、病も根にふかく入故に、まじなひも次第におもくなりて、針灸藥と漸々に實に成たりと見えたり。或人いふ。近江國に醫師ありて、病人に藥をあたへけるに、病氣の家人、邪氣の祟りといふ者あり。祈禱すべきやといひつれば、醫師藥に神靈あり、邪をしりぞくる術は藥にしくはなしといへり。其道に得たる者は其理明なりとなり。今も癪はまじなひ祈禱などにておつる者多し。うきて輕き病氣故なるべし。根に入て重きは藥ならでは愈ざるなり。醫師祈禱者も其術に得たる、命ある者はしるしあり。命は即神なりといへり

○すゞめしたひ給ふほどよ、つみうることぞと、常にきこゆるを

飛鳥を籠のうちに入てなぐさみとする事〔は〕不仁なり。彼雲をこふるの心あり。惣じて何事によらず、物をくるしめて已が樂とする事は、君子のせざることとなり

○かやうなる人のしるしあらはさぬとき、はしたなかるべきと、たゞなるよりはいとおしう〔思ひたまへつゝみてなん〕

萬一驗なき時は、ひじりの爲いかゞなれば、しのびたるとなり。人の爲手持あしからぬやうにとの氣づかひ奇特なり。厚き心なり。〔萬事の事かくのごとく有たき事也〕

○僧都よのつねなき御物語り、後の世の事などきこえ〔しらせ給〕

佛氏は生死をもつて無常とす。生死あるは是常有なり。もし生死なくば、却て常なき成べし。草木の春花咲、秋かるゝは常〔理〕なり。もし常にはなさかば妄ならん。此理なければなり。畢竟佛氏は世界をもつて幻妄とす。終には天をも幻として無に歸する物なり。其上天竺の人は情慾(欲情)あつく執心ふかし。此故に萬はかなき有様、常なき事をいひて、其貪慾愚痴をやぶらんとする故(教)なり。日本の人は慾(欲)情執心ともに淺し。却て便利の慾(欲)とて、物六かしき世をいとひて氣隨になる者多し。世のはかなきを聞ては、いよ〳〵後の愼もなく、結句(局)さしあた〔りた〕る情慾をほしいまゝにする者多し。日本〔の〕人には無常の說はあひがたし

○まして後の〔世の(罪)〕いみじかるべきをおぼしつゞけて

後〔の世の事地獄の說は、愚人のおどしごと(ぐさ)となりといへり。地獄極樂の沙汰、道心執行の事、佛經にくはし。是にて實つき事すむべくば、悟といふ事は有まじきなり。然るに迦葉に一枝の花をみせ、微笑したれば、印可せられたり。其上無量義經にも、四十餘年未顯眞實と說り。これにて諸經に說所の地獄極樂の義(等)、實說にあらざる〔道〕理をしるべし。然どもいにしへの佛を願ものは、地獄を恐れて惡をやめ、極樂を求めて善をなしたれば猶可なり。此故に源氏も後世の事を聞ては、先非を恐れ、山居もせまほしくおぼせり。今佛を願ふ者は、不願者よりも惡人多し。佛教古にあらず、願ふ者の心むかしにあらざればなり

○こゝにものし給ふはたれにか、尋ね聞えまほしき夢をみ〔給ひしかた〕

惣じてわがかくしたきと思ふ事、ふといひいだしにくき故に、夢の告といひて取たつる事おほし。今の男山へ宇佐八幡を勧請の時〔も〕、出家の夢にみたるとて取建たりといへり。菩薩号をつけ、佛法繁昌に隨ひ、男山のみ盛りになりて、根本の宇佐は廢れたり。昔の人は理直にて、さやうの事を信じたりとみえたり。今は文明の運にめぐりたれば、夢の告などいひても人信ぜざれば、坊主などえいはざる勢ひになりたり。時頼鶴ヶ岡八幡宮〔の〕夢想の告により、青砥〔の〕左衛門に加増せられたれども、左衛門はうけず。物のはかなき事は夢〔の様なる〕といへり。罪なくとも左衛門が首を切れと夢想あらば、切給ふべきかといへり。如此有智の者一人二人世に出て、次第にはづかしく成たる者なり

○すくよかにいひて、物ごはきさまし給へれば

〔世間の事を思ひ入ず、すぐ〳〵しき體也、僧には似合たり〕。今はすくよかなる様〔なる〕は、邪見にて慈悲なし。柔和なる様〔なる〕は世間を諂へり。慈悲無慾にて世間をはなれたる僧は世にまれなり

○法華三昧おこなふ堂の懺法の聲、山おろしにつれて〔きこえくる、いとたうとくたきの音にひゞきあひたり〕

昔は經をよむも、思入たるつとめなれば、其聲の殊勝にて人の心を感ぜしなり。今は其心あらずしてよむ故に、音聲もよからず。昔の人は人がらよく、眞實なり。しかれどもいまだ物の道理をば明らかにしらざりしなり。箱の中に何ありといへば、さあらんと信じたるやうなり。今の人は人がらおとり、眞實うすけれども、文明の運にて物の道理を知る事次第に明なり。此箱の中に何ありといへども、あけてみざれば信ぜざるやうなり。それによりて後世の教を信ぜざる者多し。佛者の心行あしければ、佛法も衰に向た〔るな〕り

○れいのひちりきふく隨身

むかしは隨身に樂人多かりしなり。簫籟は其聲笙笛の樣にうるはしからずと云へども、十二律を全く備たる物なり。此故にひちりき吹者は調子に入事早し。上手にてなければかしましき物なり。夷狄の樂器といふ說あり。琵琶も胡國より渡たるといへどもさにはあらじ。樂は聖人神明の德なくては作り初る事能は（しむ）ず。賢人の力にもならざる物なり。夷狄には賢人だに中行なるは稀なり。琵琶簫籟ともに夷狄に初るべき道理なし。古書に此巴は女媧氏の作なりといへり。其後中夏に中絕し、胡國におちとまり〔て〕かへりたるなるべし。ひちりきも左樣なるべき歟（なり）

○さうの笛もたせける（た）

笙は黃帝の時初て作り給ふといへり。鳳凰の雄聲は六律にかよひ、雌が聲は六呂（宮）にかよへり。此故に鳳の羽を二つ合て、頭をつけ口をかたどりて、聲をなしたるものなり

（上古ノ下（書）漢来本朝之條句論也ニ作ル下モ漢文樣ニナレリ）

○僧都琴をみづからもてまいりて

此樂器（器曲）上古本朝へ渡り來るなり。允恭天武已下令彈之給ふよし、日本紀にみえたり。其後延喜の比迄も〔まゝ〕彈する人あり。中古以來樂曲斷絕なり。又白虎通にいふ、琴〔者〕禁なり。禁追於邪氣、以正人心なり。〔云々〕或人云、琴は舜はじめて五絃の琴を作りて、南風をうたひ給へりといへり。後世の人五絃にして彈じがたきゆへに、文武の二絃を加へて七絃とすといへり。變宮變徵にても有べし。上代の人命をかけて遠〔き〕國にわたり、傳來しつる曲たるに、餘り〔に〕大事に祕して、彈ずる人稀なりしかば、終に〔祕〕失たりとみえたり

○おこなひのらうはつもりて、大やけにも知ろしめされざりけることと〔たうとがりのたまはせけり〕
出家は樹下石上麻衣草座して、世間の富貴をはなれ、里に入乞食（にして）、これ其行なり。今の僧は寺院を結構し、衣服をかざやかし、位を昇りて富貴をきはむ。これ凡俗の心ざしにて、出家の本意にあらず。行の勞つもりて上にも知ろし召れず、阿闍梨にもならざるは尤殊勝なり

○女君れいのはいかくれて、とみにも出給はぬを
夫婦の間は心はよく和して禮うや〳〵しく、賓主のごとく成をよしとす。おも〳〵しくうしろやすきは、本妻にして〔は〕第一のたのみどころなり。葵の上は此貞正の徳は備りたれども、愛敬におきてはかけたる所あり。此故に和しがたし。愛敬ふかき人は又たをやぎ過て、うしろめたき疵あり。柳の枝に雪折なきやうに、物和にしてあしきかたになびかぬを貞順の徳といへり。いにしへ夫婦とする人をえらぶには、其徳其氣質の類ひたるを考て合せたり。葵の上の夫をえらはゞ、正道をこのみ、大様におとなしく、言少なきやうなる夫ならばよく和すべし。源氏には逢がたき人なり。道ある世〔に〕は富貴貧賤のえらびもなく、たゞ徳のたぐひたるをえらびたり。今〔日〕は身代の位のみを吟味して、人がらの合不合をしらざるゆへ、取ちがへて男女ともになんぎする者多し

○行さきの身のあらむことなど迄もおぼししらず。たゞとしころ〔たちはなるゝおりなう、まつはしならひて〕
おさなき子の、父母などのなく成たるを悲むは誠なり。君子の悲に似たり。凡夫も悲は誠なるやうなれども、まじはりあれば誠といひがたし。はやくはなれて我身の迷惑する事、此人なくては世間の思ひ入、身のためあしき事などおもふは、

死を悲しむなり。死は常の理なればかなしむべきにあらず。君子は別を悲むばかりにて、身の爲のまじはりなし。此故にかなしむといへども、心に苦勞なし。凡夫は悲しむよりは心の苦勞多し

○女は心やはらかなるなむよきなど、今よりおしへ聞え給ふ

唐にも桃花を女德に比したるは、温和の色にとれるなるべし。俗にむくりとしていとおしらしきといふやうなる事なるべし

○御かたちはさしはなれてみしよりも、いみじう淸らにて、なつかしう〔打かたらひつゝ〕

餘所〳〵にみしと、遠かたちよりも近まさりしたるなり。都て形はおとりても、心のよき人はそひよりしみまさりするものなり。かたちよくても心のよからぬ人は、よそよりみてはよけれども、馴るゝに隨ひてみおとりする者なり。夫婦は内にしての友なり。色かたちをいふは、わかきどちその初、一二〔ケ〕月の間の事なり。後には互に心を友とするにうちつくものなり。心の能人は、かたちもおのづからいやしからず

○にび色のこまやかなるがうちなえたる

外祖父の服は三〔ケ〕月なり。其内なれば着服なり、服の輕重により、志の厚薄によりて、色も淺深有〔事〕なり。もろこし上世の喪服の制は、日本の今の人の氣質にはあひがたし。服の輕重によりて志の淺深ある事知なり。服の輕重も日本の人氣に應じてよろし。天地の間の風氣〔は〕うつりゆくものなれば、五百年千年にてはあらぬ樣にかはるものなり。いにしへの人は玉の冠を着〔し〕たり。今の人は一日も着しがたし。人の氣力各別なるゆへなり。何事も時處位と

いふものあり。かはらぬ物は五倫五常の〔道の〕みなり。其外の禮樂法度はうつりゆく、風氣に隨ひて損益有べし

○よからねどむげにか丶ぬこそわろけれ

こ丶は惣じての人の事にかけてみるべし。まづ何事も沙汰してこそす丶む道もあれ。何の藝能も初よりよき人はなし。上手となるは習得て後の事なり。よからざるを恥てならはねば、一生無藝無智なり。是を其恥に非らざるを恥て、恥心ほろぶといへり。聖人には常〔の〕師なしと云〔へるは〕、人ごとに尋學び給へばなり。俗にも問は當座の恥、不問は一代の恥といへり。尤なり。されども問は當座の善なり。積て〔は〕一代の德なり。不問は當座の不善、一代の愚なり。其事は初心にてよからざれども、よく人にくだりまなぶの心は、初より善たり。不知にして知に隨かはず。無能にして能に學びず、己が我を立て知能をそしるは國家の不祥なり

○きたのかたは、は丶君をにくしと思ひ聞え給ひける心もうせで、〔我心にまかせつべうおぼしけるに〕

心もうせては、て文字濁るなり。うせずしてなり。ま丶子をにくむ事は慾心と嫉妬との二よりおこる物なれば、上﨟には有間敷事なり。少し道理を聞たらば、さやうのまどひ有まじき人多し。今はおしへたくならひよからざる故に、大かた氣質のよき人も、か丶るいやしき心になり行とみえたり〔をしむべし〕

末摘花

○物の音がらのすぢことなる物なれば、聞にく丶おもほされず

琴はこと樂器に合せぬれば、ひとゝきわたりてつかさどる聲なりと云り。上古には甲にしらべたるもの〔なる〕か。近年唐人の傳とて彈ずるは、乙のなるほど下調子にしらぶるなり。今の琴は他の樂器合奏のなるべき物ともみえず。たゞし今の琴もひとゝきは遠く聞ゆるものなりといへり。或書に、太宰帥經信卿の申されしは、あがたの唐坊にてひきしを聞しは、蠅といふ虫のあかり障子にあたる音に似たりとぞ物語り侍りけるとあり。珍らしきやうに云れしほどに、上古の琴の音は絶て後の事なるべき歟。只今の琴、上古の琴とおなじ事〔なる〕歟同じからざる歟。上古のやうにては糸のしまりも六ヶ敷、傳も大かたうしなひたれば、今乙に調ぶる事歟。今の調子にては糸のしまりもいらざるほどに、夫に隨ひて細工などをも略したるか。琴に限らず、唐人は聖代の樂はと〴〵くうせて知らざるなり。音律達者なるゆへ、代々樂をも作り直して、古樂をばみな失ひたり。日本は音律不達者なれば、一度傳〔へて〕來〔りた〕るを大事に守りて傳へぬれば、むかしの儘なり。此故に古樂の殘りたるは日本ばかりなり。唐土に明王おこり給はゞ、かならず日本に來〔り〕て傳へかへすべし。今の唐人の樂は、一向もとの姿の殘りたる物にあらざれば、唐人の傳る琴の調べ、むかしの物にて有べしともおもはれず。日本にても琴をば傳へうしなへり。おしむべし

○中々なる程にてもやみぬる哉、物聞わくほどにもあらず、ねたうとの給ふ

琵琶箏尤雅聲にして淡き聲なれども、箏はすがゝきに風韻はれて、上手下手其人柄早く聞とらるゝ物なり。琵琶はまとの音をひきしむる人古今稀たる物なれば、大方の稽古にては耳にとまらず。琴は律呂ひゞきつよく、とりわき淡き物といへり。然らばいよ〳〵聞わきがたかるべし。和琴だに其風をうつしたる物なれば、調べ出てすがゞくほど、其人の

姿はやくはきゝわきがたし

○さらばもろともにとて、御かゆこはいひめして

むかしは毎朝、先かゆこはいひを用て出仕して、退出以後飯をば用ひたりと見えたり。先粥にて〔朝の腹中をやはらげ、こはいひにて〕身の力をもち、これにて朝の食はすみたり。此末の巻にも嵯峨にてとまり給へるに、御くだ物こはいひ〔斗〕とあり。純素の風なり。此時分源氏頭中將などより上の大身は多くはあるまじきなり。今の歴々の國主にも劣べからず。今ならば振舞何かといふなるべし。粥剛飯などは鷹野のさきにても用ひず。むかしはかやうに質素なりし故に、人民豊かに、公家の代千七八百年ゆるぎなく續きたり。民の貢物もろこしの貢法にて十分一を捧たり。此故に年貢といひて、貢法の貢の字を書り。此時は軍兵農に有。軍を出し陣をなす事〔も〕すみやかにして驕なく、文武の勤怠らざりしゆへなり。〔武家の世となりて三百年ともつゞかず。わづかに〕五百餘歳の間、清盛頼朝北條足利信長秀吉とうつりかはりて、治世の短きことは、純素の風過美にかはり、農兵貢法やぶれて、上下怠り人民苦む故なり。堯曰、四海困窮、天祿永終と、天下の人民困窮する時は、天下の威德おとろへて、長く亡るとなり。聖人の言葉、數千歳の後、何れの國に至ても違ふ事なし

○行幸の事を今日ありとおもほして、君だち集りて宣ひ、各々舞どもならひ給ふ〔を、その頃の事にて〕

行幸に歴々の公達舞人になりてならひ給ふは、上代の美風なり。かやうの事を晴わざとして、常に禮樂に怠り給はぬ故に、風け高くして俗に落ざるなり、末の世は雲〔の〕上の風もおち、心怠りて賤しくなり行に隨ひ、禮樂いとはしたなく

なる故に、末々の人に次第に譲りもてゆきて、上たる人は人に見物せられても用なし。たゞしらざるが増れりなどゝ利口をいへり。上臈のすべき事はせずして、心のみおとたりぬれば、日々にいやしき事のみをならひて、子々孫々に至りては、俗をさる事遠からず。諸國の人の見あふぐ所もなきやうになり行なり。心志躬行いにしへの公家ならぬは、徹したふべきやうもなし。禁中の衰微する基たり。禮は有職とてさしてもなき事を、家々に了簡を加へ流義を立、我も〳〵と祕すれば、肝要の事を〔も〕ともに祕し失て、次第に知ル人も絶々になるなり。又其知る人も我一人とおもへば慢心生じ、人に高ぶり意地を立れば、禮にはあらで人の心をそこなへり。樂は樂人に預け、たま〳〵普代して取扱ふ人も、家とたてゝ渡世のやうなれば、外に委しく人のしらむ事をきらへる故に、さま〴〵の傳も殘り少く、いにしへの御遊かゝりなどいふ風も聞へず。されば君も何によりていにしへを忍び給ふべき便〔も〕なし。公家のみにもあらず。武家の風も又おなじ。古は大樹國郡の主といふ共、弓馬の遊びも自らし給ひ、諸士を打まじへて遊び給へば、君臣睦じかりき。今は自ら弓馬の道を知り給はねば、人になさしめ給ふべきやうもなし。たま〳〵なすといふとも、實なき習なり。諸士も弓馬の上手は藝者のやう〔に〕なるを、なまじひに理屈をいひて不知を恥ともせず。弓馬ともに藝者にあづけて、其身は不案内なり。此故に渡世となりて、是も大事は祕し失へり。適〳〵心に入て學ぶ者も、弓にて一生終るほどならでは、大かたにもなしがたし。馬も又おなじ。いにしへの武士は十七八廿歳ばかりにて〔は〕、弓馬とも達し、武功をあらはし、文道にもうとからざる人多かりき。是文武ともに藝者におちずして、祕する事なかりし故なるべし

○樂の昔ども常よりもみゝかしがましくて、かた〴〵いどみつゝ〔れいの御あそびならず〕

我も／＼と稽古する物音しげく、かしがましきなり。其上絃管の遊びは左に聞合せもちあひて〔位を〕大事にする物なれば、靜にして感心あり。稽古はおぼえのため面／＼にする物なれば、耳かしましきやうにも有べし（き也）

○大ひちりきさく八の聲（ふゑ（全・齋））

今の世のよりも大なるひちりきむかしは有しとなり。物はちひさき程聲すみて高し。雷は百里を驚かすほどの大聲なれども、殊の外調子〔は〕ひきし。人も稚き子の聲かへりて調子高し。尺八の聲はなるべけれども、調子は卑かるべし。然らば能はあるまじきなり。それにより常に〔は〕用ざる歟

○しがくなどのゝしる

試樂なり。樂のならしなり。試樂は稽古熟して後、絃管にあはせてとゝのふべき位をとゝのふるなり。よく熟して無心にしてするとなれば、當日の樂よりは試樂能出來る事あり

○我ならぬ人はましてみしのびてんや（こ）

末つむのかたちをみあらはし給ひては、いよ／＼みすてがたしとなり。容よきを見ては愛におぼれ、惡をみてはすてゝかへり見ざる事凡情〔の常〕なり。然るに源氏常陸の宮のあしきかたちを見給ひて、いよ／＼見すてがたくして、後まではぐゝまれし事尤奇特なり　仁愛の深き故なり。此故に末々迄〔も〕さかへ給ひたるなるべし。かやうの事にて作事にあらざる實を知るべし。源氏といふ名こそかはるべけれ。如斯人はありたると知るべし。一向作り事にして實をとらざるは遺恨の事なり。同じ好色にても不仁者の好るはいやし。平淸盛などの類なり。天質は仁愛聰明なれども道德

四六七

を知らず。善政善教なければ、ならひにひかれて、好色なる人は其本不仁ならざる故に、其好色いやしからず。奇特なる處あり。大かた生質仁愛聰明なる人は、多くは色を好り。斯ごとく人道ある世には、直に道に趣く故に此煩なし。道なく教なければ、靈なる氣質好色にうつるとみえたり。古人の色を好める中には、有道の世「と」ならば、君子と成べき「靈質の」人多し。近代の好色は大かた「心ね」不仁にしていやし。此故に德にうつらず。今は好色の實はむかしにまされども、好やうの風かはりて、昔のやうにはあらず。むかしの人に今の好色を聞せたらば、甚しく憎むべし。不仁を恥とおもはざれば、むかしの人とははるかにおとれり。今風義のかはりたる眼より源氏を「見て、あるまじき事の樣にそしる人有。源氏を」今の世におきたらば、善政善教はなくとも、昔のごとき好色はあるまじきなり。其世にはさやうなる風俗にて、さのみあしきことゝも せざりしやうなり。たゞ不仁を恥とせしと見えたり

○つゝみにころもばこのおもりかに、こだいなるうちおきておし出たり。これをいかでかは、かたはらいたく思ひ給へざらむ

物の笑止なるといふはかやうの事なり。古流のかたき事のみならひおぼえて、風氣のうつり行今の世の公界をしらで、一大事と傳をとりおこなひたるには、みぐるしくおかしき事あり。今武家にも小笠原流などいひて、ことゞゝしき進退は、當世のかどゞゝしからず「かろく」とりおこたふ中にては、人の笑ひ草となれり。送り物捧げ物なども、いにしへは己が志をつくして土産品かはれり。今は手のつかざるやうに、太刀目錄轉代などにてかろく取行ふ中に、くだゞゝしき土産など人多き中に持出たるも時に合ず。井中の蛙といへる樣に、時の風をしらぬ市中の人の、公界へにさし出たる

類ひさま〴〵あり。末摘より源氏への音物はよきにしても似合ざるなり。貧き者は財用をもつて人におくらず、老たる者は勞をなして人に禮せずといへり。貧たる者は身をもつて手足の勞をなして志を行ふべし。ものをとゝのへやる事はあしゝ。其上末つむは本臺にあらず。貧なる故にみすてがたく、はぐゝまるゝ事なれば、うけてのみ居給ふべき事なり。命婦などにも問合せず、ふる女房〔など〕のわざ成べし。今も男女となくかやうのにが〴〵しき事おほし。皆信をして、せざるにはおとりたる〔つきなき〕事あり。人情時宜をしらず、身の程をしらであしく意得たる故なり。〔是も一のをしへなるべし〕

○袖まきほさむ人もなき身に、いと嬉しき心ざしにこそ〔はとの給て〕

我ならぬ人はましてみしのびてんや、といふよりこれ迄は、仁愛深く年たかき人にもありがたくおとなしき心なり。しらず〳〵天質の能所なり〔このぶんにてすゑの詞なくば、あつき風俗なるべし〕

○かうやうのかいなでにだにあらましかば

かいなでは箏より出たる詞なり。末の巻にもみえたり。大かたに引得たる人々をも、かいなでの心やりばかりといへり。拍子に合ひて大かた樂の方にあふなるべし。よきといひては爪音けだかく、位ある事なり。それ程までこそなくとも、大躰のなみならばといふ心なり

○人々まいればとりかくさむや、かゝるわざは人のする物にや〔有ん〕

とりかくさんや、といふばかりにては、心こもりてよかるべし。かゝるわざは人のする物にやあらんとは、憤り背たる

嗣なり。凡情皆如斯たる物なり。まへに仁にしておとなしきにはとりあはざるなり。道をしらざる人はよき生れつき（賢なる）の人もならひにひかれてとげざる物なり

〇只梅の花の色〔の（衍）〕どみかさ山のおとめをば〔すてゝ〕求子の哥なり。常陸宮の姫君をのたまへり。此哥のこゝろ、最前の奇特なる心いれとは不相應なり。前の心は本性なり。これは習ひなり。またわかき故にても有べし。富貴の人の何にふそくなる事もなく、心おごりしたる人は、隨意我まゝにて、少も氣に合ざる事〔に（衍）〕は、機嫌あしく、すてむち打事あり。今大かたさやうなり。〔それにあはせては、源氏の君仁ありておとなしき事たぐひまれ也〕

紅葉賀

〇まひのさま、てづかひなん家のことはことなる。此世になをえたる舞の師のをのこどもも、げにいとかしこけれど、こゝしうなまめいたる〔すぢをえなんみせぬ〕こゝしうは大やうなる心なり。其道の者どもは、練磨してならひなどはあれども、大やうに風流なる事は、堂上のやうに〔は〕得舞出さぬなり。なまめいたるすぢを見せぬとは、餘情なきなり。居は氣をうつし、養は躰を移す。道理ありて、堂上地下の舞格別なり。むかしのみにもあらず、寛永の始二條亭行幸の時舞樂ありて、輪臺青海波などは堂上の人々舞給ひしなり。台徳院殿（大樹公）御感悅大かたならずして、關東下向の後も、度々是をしたはしめ給へりとなり。おなじ管

絃にても、御遊はしづかに位ありて各別なり。舞樂も地下の役人には上手あれども、堂上の舞とは雲泥なり。舞の位より初、容躰已下各別なり。禁中の風俗にことなる事おされざるとなりとて、それより信心崇敬の心もつき給へりとなり。こゝしき躰は、家筋よく位たかくて、居の氣を移したるなり。舞は樂人功ある事なれば上手なり。されども氣象は習による事なれば、樂人は及ふべからず。位につきて備はりたる物なり。また家高く官位にすゝみても、其人柄による事なり。おなじ堂上にて其人柄をえらべば、其氣象をあらはせり。地下にては人がら上手をえらびても、此氣象はなき事なり。舞のみにもあらず、箏・びはの爪音・撥當り、堂上は各別なり。何程功をつみ上手になりても、地下の及ざる事あり。箏琵琶とりたるかゝり、手つき所作がらよりはじめ、地下は優にけだかき所なし。ふき物うち物はたまさか〔には〕よきも有べけれども、樂人の達者上手には及ふべからず、と。それは堂上は稽古未熟なる故にてもあるべし。手跡も平人は能筆も位なし。あしくても堂上には位あり。武家の大身の手跡又各別なり。皆居の氣をうつす故なり。此ことはりを辨へずして、平人に絃管を傳ふる事をおしむ人は、一向無案内なる事なり。天下に普く知らしめてこそ、初めて公家の各別なる所をも知り、信心恭敬の心も出來べき事なれ。樂をしらで〔は〕爪音撥あたりのけだかきも知べきやうなし。平人は雅聲を一向しらざれば、能囃子にはおとりて思へり。是をおしみて知らせざるは、いよ〳〵公家の衰微なる事をしらず。聖神は雅樂を作りて、普く天下におしへ婬聲を防ぎ給ひしに、今は漸々少し殘りたる雅聲を祕して、知る人稀なりければ、婬聲日々に盛になりて、雅樂は大かたたゆるに近し。神聖の罪人なり。婬聲とは宮商角徵羽の五音、其位を失へる物をいふ〔也〕。今堂上に朗詠とて、詩をうたはるゝ、大かた亡びて三四首のみありと聞ゆ。ふしはかせ

他の諷ひものとは各別なり。興に乗じてよき折ふし能き聲にてうたひ出給はゞ、人のこゝろを感動すべき物なり

○詠などし給へるは、これや佛の御迦陵頻伽の聲ならん〔と聞ゆ〕

迦陵頻は鳥なり。此鳥日本に〔は〕出たる事なし。聲よき鳥なり。釋迦の聲生付てよかりしかば、此鳥にたとへていへり。惣じて聲のよきをほめては此鳥に比するなり。佛の聲は第一生付にても有べけれども、又聲能き子細も有ことなり。男女の道を忘れて、腎水かたくとゞめぬれば、聲匂ひありて言舌あやある者なり。〔佛は輪廻を恐れ、生々の道をたちて、此修行第一なれば、こゑよき道理なり〕

○むかしの世ゆかしげなり

佛氏は世界を輪廻と見たる故に、前生今生後生の三世をいへり。現世の果報は過去の宿縁の故なり。されば今源氏のめでたきも、前世の善功ゆかしきとなり。聖人は造化に輪廻なき故に、一貫にみ給ふなり。然れども一貫の中に鬼神は福善禍淫の理にて、善人には福あり、悪人には禍有なり。又善人なれども禍ありて、悪人に福ある者あり。是は先祖父母の故なり。先祖父母悪をなして鬼神に感じ、禍の運命めぐりくる勢のうちには、子孫の善人共しるしなし。子孫の善行先祖の悪にかつほどの善なれば、轉じて福となるなり。先祖の善をなして鬼神に感じ、福の運命めぐりくる勢の中には、子孫の悪も禍をうけず。然れども其〔運〕命おとろへてはかならず災害いたる物なり。かやうの道理佛教の三世に似たり。佛氏も畢竟は輪廻をまぬかれて、三世なき所にいたらむとす。是を解脱といふたるべし

○心うつくしく、れいのやうにうらみのたまはゞ、我もうらなく〔うちかたりて、なぐさめ聞えてんものを〕

すべて本妻の夫を眞實大切に思ひ入て、うしろみあつかふ人は、少しかたちふそくなるかた有ても、終には本妻に思ひつく物なり。妾は一旦珍らしきやうなれども、心底あさはかなる所あれば、終にはあく物なり。まして葵上のやうに容躰とゝのほりて、其上に源氏にしたしからば、他にうつる心は薄かるべし。夫に大やうなるは本妻の疵なり。夫の心もあだ／＼しく、はじめは心につかぬ妻も、他事なく大切にみゆれば、夫も感心おこりて、他のこゝろにいらぬ事はわすれて、したしくなるものなり

○なやらふとて

追儺は禁中よりはじめ、諸家にも有し事なり。むかしは山澤深かりし故に、鬼神も靈に、人心もたけかりき。故に病氣も邪氣の煩ありて、人をなやますにより、唐朝日本ともに儺をせり。今は山澤淺く、鬼神の靈も薄く、人心もよわくなりたれば、病も人の腹心に入て、みる所甚しからず。然れどもむかしの甚しきは治し易く、人をそこなふ事も畢竟すくなし。今の甚しからざるは治しがたく、人をそこなふ事もふかし

○おとこ君はなどかさしもと、ならはひ給ふ、御心のへだてとも〔なるべし〕

惣じて妻がたのいきおひをさしはさみて、夫をかろしむるは見ぐるしき物なり。男も女も下つかた〔の者〕ほど、此ほこり有ものなり。源氏のおしけちて、其驕をさしはさまぬやうにしたまふはよし。されど葵上は上らふなれば此習ひなし。歷々のむすめにても夫にほこるこゝろあるは、上らふの下らふなり。始よりのあへしらひあしくて、妻〔方〕に權をとらすれば、奢れる子の不可用ごとくなる者なり。妻にまかれたるも口おし。とり直さむとすれば不和になり、やぶれにな

る事あり。妻といふ物、はじめは物はづかしきばかりなる物なれば、とかく夫のならはし次第たり

○弘徽殿などのうけはしげにのたまふと〔聞しを〕

愛レ之欲二其生一。悪レ之欲二其死一。〔是惑也〕。天命ある事をしらざればなり。弘徽殿女御も桐壺の更衣をにくみはたし給へば、また藤壺立かはり給へり。藤壺死し給ふとも、又立かはるべき人有〔べき〕を知り給はず。人のあしき〔を〕我身の利と思ふは凡情のまよひなり。〔弘徽殿女御我身の上らふがましからぬ心有故に、みかどの愛薄きをば知給はで、いよ〳〵下すしき心つのりて、よき人のみ失ひたくねがひ給ふは、口おしき心なり〕

○さうのことは〔漢書、黄帝命素女鼓瑟、帝悲不止、故破五十絃〕

箏を秦聲といへるは深からぬ說なり。伏羲氏五十絃の瑟を作給ふ。中古二にして廿五絃となれり。然れ共〔廿〕五聲のそなはる事は五十絃・廿五絃おなじ事也。堯舜の時より孔子の時分迄は廿五絃を用ひたりとみえたり。秦の時〔に〕樂音に達せる人、また二にして十三絃とす。五十絃。二十五絃。十三絃ともに同じ〔道〕理なり。いにしへは人の躰大に、氣すぐやかなるに、心ゆるやかにして長し。此故に五聲各十にして五十絃を用ふ。天地人の風氣うつりかはりて用ひがたき故〔に〕二にして廿五絃とす。二十五絃また人の氣根にあひがたければ十三絃とす。箏の十三絃自然に河圖の數に相應せり。一六二七三八四九五十是也。秦の世には聖神出給はず。如斯の神器はじむべき人なし。たとひいにしへの跡によりて聲音の學術深ければ、平人といへども二つにする事はなるべき事なり。秦の聲にあらざる事明なり

○かきあはせばかりひきてさしやり給へば

はじめ壹越調のしらべにて有しを、平調にしらべ給へばかき合せをし給ふなり。かき合せにて糸のよくあひたると、むらのあるがよくしらるゝなり。又樂よりもかき合はむつかしきものなれば、ひきて聞せ給ふも教なるべし。かき合は位第一なり。上手の位よくしらるゝものなり

○さしやりてゆし給ふ御手つき

由は左手なり。左の手取と推と由〔と〕なり。律のしらべには、六八斗巾はおすなり、九はとり十はゆる也。とりゆといふ時は九十の事也。ゆすると云時は十也。十は柱のちかけれども、柱のちかくにてゆしたるはよからず。柱とをくゆしたるがよきなり。其上ゆの時は人指を糸の下へさし入、中指と人指とにてさしはさみて、〔やはらかに優にゆる事なれば、さしやりてといへる〕是にかなへるか。八の糸の左の手もかさねて、二度おすことなれば、ゆともいふべき歟。平調は柱の立やう、六八のあたりは手遠なれば、おさなき人は手をさしのべざればとゞかざるなり

花宴

○弘徽殿の女御、中宮のかくておはするを、おりふしごとにやすからず〔おぼせど〕

弘徽殿の女御、藤壺の宮に立后をこえられしをやすからずおぼせば、藤つぼとは同座もなきなり。然といへども、今日はやむことを得ずして參り給ふなり。かりそめながらかやうの事は君威のおとろへの端なり。易云、履霜堅氷至と、聖人の用心を示し給〔ふ所也〕へり。陰の長じて陽をおかし、臣の奢て君の威を奪ふ事、一朝一夕の故にあらず。少の所より端あ

らはれて大になる物なり。君たる人の用意有べき所なり。后女御は皆臣なり。臣下の位錄は君のまゝなり。立后を人にこえられたるとて、君前の同座せざるは君をなみするなり。かやうの所より后・女御の親里も、まして君をしのぐはじめとなれり。又親里の威勢より斯なり行事もあ〔る事た〕り。君に智勇の德おはしませば、かやうの時節よきしりぞけ所也。後の災をふせぐ道なり。智仁勇の德一日もかけては君位長久ならず。平清盛源賴朝はじめて　たるやうなれども、一朝一夕の故にはあらず。もと〔は〕かやうの所よりはじまれり。霜の置たるをみて、頓て堅き氷にいたる事知らるゝなり。臣差たる者少し我儘有所にて、其末の代には君をなみし、威を奪ふにいたる〔事を知也〕。天照太神三種の神器を、帝王の御かたはらはなれずおはしまさ△せ給ひし御おきてふかし。一つもかけては天下をたもち給ふ事〔は〕成がたし。　其元〈本〉百年二百年の催しとはみえず。

大臣の王威をかろんじそめたる事、大鏡などにもおほく見えたり。婦人の威をとりて夫を蔑にするもこゝにあり。女とおもひゆるして大かたの事は咎ざるより、後堅氷に至ておさめがたくなるものなり。漢の高祖呂太后〔はすでに天下をかたぶけんとし〕、賴朝の二位の政子是なり。弘徽殿女御も此二女にはおとるまじき人なれども、そだちあしからざるゆへに、それほど迄にはいたらざる歟。もしそだちよからずば、惡もはげしく、威も桐壺帝崩御の後は、猶ほしいまゝなるべし

二位の政子ヲ〔賢〕室終に賴朝の天下を亡せしもニ作ル

○日いとよくはれて、空のけしき鳥の聲も心地よげなるに

二月の廿日あまりの景氣、宮中の有樣、上代の躰を思ひやりてみるべし。此時は帝王の天下知ろしめしたる日にて、日

本國中の人はいふに及ばず、高麗百濟よりも來朝し、大禮行るゝ事なれば、王城も廣かるべし。然れども上代に遠からず、文華漸く備るといへども、猶質素の古風に近ければ、火災たどもなく、古木ものふり、鳥も靈氣を見て下りすむべければ、空の氣色鳥の聲、後世みがたき風氣なるべし。末代の眼にてみるべからず

○ましてみかど春宮の御ざえかしとくすぐれておはします。かゝるかたにやむ事なき人おほくものし給ふ〔ころたるに〕

むかしは君臣ともに文學ありて、不學なるはなかりしなり。君として君の道を知らず、臣として臣の道をしらざるは、大なる恥〔辱〕なれども、今は我人ならひに成て、人並のおほきに安むじ居なり。さしあたりたる當座の失禮をだに、人毎に赤面せり。まして貴人高位となりて、何をも知らず、威勢ばかりにて人をおしつけ、上にたつは恥しき事なり

○春宮かざしたまはせて、せちにのたまはするに遁れがたくて、たちてのどかに袖かへす所を、ひとおれけしきばかりにまひ給〔へるに〕

春宮の御所望なれば、舞給はぬ事もなるまじきなり。去年青海波の事おぼし出ての事なれば、舞すまし給はんもいかゞなり。けしきばかりにてやみ給ふ、おもしろし。〔萬事かやうの事心づかひ有べき事なり〕

○頭中將いづら、おそしとあれば、柳花苑といふ舞を、これは今少〔すぐして、かゝる事もやと心づかひやしたりけん〕

頭中將は源氏の少ばかり舞て入給へるに、同じやうなるも興なかるべし。是は少ちと久しく舞すまし給へるがよきなり。

萬の事に、時處位のおもひはかり有べき事なり

○まづかのわたりのありさまの、こよなくおくまりたるやと〔ありがたうおもひくらべられ給〕

葵の上のあたりなり。あふひの上の母宮上らふしく、様躰心もちひおくふかく、葵上は猶おもりかなるゆへ、する〲の女房一家の作法迄も、それに隨ひておくふかくて、卒爾に人の入べきやうにはなし。弘徽殿は父右大臣より、よろづはなやかにいかめしき事を好み給て、上らふしきかたはおくれたりとみえたり。弘徽殿はきとしたる人なれば、女房なども正しかるべき事なれども、其身心もちひしづかにおくふかく、上らふしき所なければ、女房なども淺はかに物ふかゝらず。〔それによりてかゝるあやまちも出來たる成べし〕

○只大やけごとにそしうなるものゝしどもを、こゝかしこ〔尋ね侍しなり〕

そしうは訴の字なり。かたましきなり。公儀の用には出べからずしてかくれ居たる心なり。惣じて物の上手は無欲にて、人つきなく、すねしき所有ものなり。或ばうち氣或は物むつ〔かし〕がりして、世間に出る事を好まざるもあり。されば時代の威勢ある貴人は知り給はず。また末々はしりてもあげざるものなり。さる故にさまでよからぬなれど、さし出るものは時めく物なり。ときの奉行下すちかく、よく〱明らかに勇もなくては、彼是にさはりありて、とり出る事ならざる物なり。道學明なる時に源氏生れ給ひてよく教へよくならはされ給はど、すぐれたる人なるべし。只一つのあしきくせに、よき事をみかくして、とり出る人なし。其世に上下ともになびきて、此君を光にし給ひしは、此德有故なるべし

○ましてさかゆく春にたち出給ましかば

おきなもほと／＼舞出ぬべく、と左大臣の宣ひをうけて、とてもの事に左大臣立出給はゞ、當時の面目ならんとなり。今は親子聟舅杯かゝるあいさつは有べからず。いにしへは人倫よく和したる故なり。左大臣舞給ふべきにはあらねど、興あり感有し事を、立も出ぬべきと有し返答に興有しを、頭中將の御花園にゆづりて、さかゆく春に立出させ給はゞとの給ひし返答は、〔和したる〕よき〔返〕答也。當時の情にてはおもひよるまじきことばなり。古への美風思ひやるべし

○よからぬ人こそ、やむごとなきゆかりはかこち侍なれ、といふけしきを〔み給ふに〕

こゝにてはたはぶれにいへる事なれども、〔かりそめながら〕是も一のおしへなり。いやしき者のよき親類にかゝづらひ、とかくいひあつかふは、みぐるしき物なり。よきかたより尋られて、是非なく應ずるは可なり。また富貴の人のわびたる親類をしらずがほにてたづねざるは、いよ／＼あしき心なり。富貴になりたるは先祖の積善の餘慶にて、一朝一夕のゆへにあらず。先祖よりみるときは、其子孫皆富貴貧賤ともに同じ子孫なり。其上富貴は人を惠み救ふ事、富貴の道なり。ほどこしの次第は先近きよりする物〔なれば、親類遠類までも尋てめぐむもの〕也。凡心は賤しき親類もちたるを外聞あしきやうにおもへり。皆人知りたる事なれば、尋るをば却て人も奇特におもひ、尋ねざるはいやしまるゝ事を知る人すくなし

葵

○世中かはりてのち、よろづものうくおぼされ、御身のやむごとなさも〔そふにや〕

父御門位を去給ひ、我をにくむ人に威うつりぬれば、淺官にてさへあやふきに、官職ものぼりては、いよ〳〵立がたし。威をとりたる人、何事につけてかとりたをさむとおもふ時なり。さあるに愼みなくては禍のまねきなるべし。父帝は昨日までの主君なり、今上は皇子なれば、何事にもかはる事有まじきやうに思へども、天威のうつりかはる所にて、勢各別なる者なり。諸侯にてもそれよりくだりても、其勢は同じ物なり。かくある道理としれば安くすれども、其情勢のわきまへなければ、〔怒り〕憤り父子中あしくなり、諸臣に惡み出來、〔色々〕あしき事ども有〔もの〕なり。惣じて帝王の隱居といふ事は、其いにしへはなき事なり。天無二日、國に無二王とわりなれば、今上の尊位の上に、また先帝の尊位をならぶるは、日の二つ王の二人なり。此故に君勞し給へば攝政有。黄帝は崩御の跡みえ給はず、〔御〕沓ばかり殘したり。生れながら神となりて、天上し給たるといへり。〔それより天子の御位を去給ふを脫履といへり。〕黄帝は位を去たまはで叶はざる事ありたるなるべし。院になりおはしましては二つの日なり。天理に非ざれば跡をかくして去給ひたる成べし。又神聖なれば其理に當つて〔は〕生ながら化し給ふか。日本の讓位のはじめは皇極天皇なり。孝德崩御の後重祚あり。〔齊明と云〔ふ〕〕。其後持統天皇元明元正等皆女帝なり。聖武天皇遜位の後落飾、此以後は毎度の事なり。二の王ある事をいみて、院の御所を仙洞といひて、此世の外に出給ふ義なるべし。また黄帝を道家の祖師として仙家のもとゝすれば、黄帝によりていへる事にても有べき歟

○人の爲はぢがましき事なく、いづれをもなだらかにもてなして〔女のうらみなおひそとの給ふにも〕

人の名のたち面目なきやうなる事をするはあしき事なり。恨をおふはじめなり。古人は妻に大罪あるだに、其罪をかくしていはず。いさゝかの事にことよせて追出せば、人は夫のおとなげなきやうにそしるなり。自其罪を負たるは厚き心たり。まして罪もなきに、我心のすさみにまかせて、人のためあしきやうにするはひが事なり。御門の御詞ふくむ心ありておもしろし

○かやうなる程、いとゞ御心のいとまなくて、思しおこたるとは無れども〔とだえおほかるべし〕

御息所などへとだえあるさまなり。男女は子孫生々する爲なれば、子ある時は夫の心入大切まさるものなり。人のおもひ入もかはり、女の威もまさるものなり。〔源氏のわくる心なくあだ〳〵しきも、心のさだまる所あれば、おのづから他へはとをかるべし〕

○おほやけごとにそふ事多く、みどころこよなし。〔人がらと見えたり〕

同じ子にても人がらよきをば、父母も別して馳走し、心入有ものなり。〔貴賤共に其情おなじき也〕

○ひまもなくたちわたりたるに、よそほしうひきつゞきてたちわづらふ

かやうの物みには威勢あるか、人多く召具する人は、かねてより其處をとり定て出るものなり。人数多ければ、他人の心をつくして、かねてとりおきたる所ともいはず、よき人の忍びておはする所ともわきまへず、すゑ〴〵の者は主人の威〔勢〕にほこり、味かたの多きをたのみて狼籍なれば、あまたの人の心をいたましめ、其親子兄弟の憤りをおふ物なり。かやうに俄なる事ならば、いかにもそれとなきやうにやつれて、人のかたわきにたつるやうにすべし。さやうに

也。：僻事據ニヨリテ補

なるまじくは、出さざるがよきなり。此時左大臣知り給ふか、家司など應〳〵有べきに、かゝる事の勢は常の事なれば、其諫有べき事なり。大かた富貴の人威〔勢〕ある人は、揚々として奢りくらせば、人情にくはしからで、心もつかざるとみえたり。人の心をやぶる事は、主君にてさへおもき罪なるに、まして臣下たる人は第一にすべき事なり。況や雑人にもあらず、よき女車のある所をみすまし〔て〕、あまたの車をさしのけさする事、大なるひがど〔也。愛子を失ひ憂にしづみ給へる事尤也。かやうの僻事〕は貴人の常にて、心のつかずして、さしもなき所に心をつけて禮などし給へり。古人は下賤に居る賢者を求めて友とし、貴賤をわすれて語り、萬のいさめ下の情を知り給ひしは、かゝるにつけても心ふかきためしなり

○人だまひのおくにおしやられて〔物もみえず、心やましきをばさる物にて、かゝるやつれをそれとしられぬるが、いみじうねたきことかぎりなし〕

座敷の着座は位次第なり。其上身がらよき人は、互にあいさつしかるべきなり。また出行などは位ある人とても無人なれば、人數多き人にはものげなくおしやらるゝ事ある物なり。召具の末〳〵の者はたれともしらず。又少はしりても、勢のなきかたをばあなどりて狼籍する事あり。主人も心たきは直に面を見合せざれば、輿車のうちよりほのしりても、しらざるふりにて下〳〵にまかせ、人をおしやりなどするは、凡人の情、常の事なり。たかき人の無人にてさやうの所へ出給はんは、かねて心得有べし。其覺悟有て出れば、何事有ても恨はなきなり。くるしかるべきとおもはゞ遠慮したるがよきなり。

○心のかぎりつくしたるくるまどもにのり、さまことをさらび、「心けさうしたるなん」よからぬ人のさまなり。わざとこのましく、人のめにたつやうにとするなり。女の物もうで物見などに、衣服をかざりて(へ)、こゝをはれとし、人のめにたつやうにするはあしき事なり。それ故恥がましき事も出來、よからぬ乱のはしとなる事あり。心ある人は常の服よりもやつれて、しのぶべき所なるに、人目をおどろかさむとする事は何「の心」(御)ぞや。男子の君朝に出仕する事には(ごとに)、衣服をとゝのへ禮儀をつくす如く、婦人(へ)の君朝とする所は、夫のまへ舅姑の所なり。其程〳〵に付て、心を用ひ、かたちをおさむべき所なり。其外は晴といふとも、男子の朋友の往來のごとし。「朋友の交りは君朝のやうに心を用ひず、女どち禮ありてまじはらば、分に應じてのはれは、さも有べし、」夫の外に女の心だしたみ、身のかざり有(用)べき事なき歟。然ればにや、夫死しては落髪せり。さなくても不ㇾ謗ㇾ容「不着美服」。夫のある時はかざるを禮とし、夫なくてはかざらざるを禮とす「る也。されば禮は義理より生ずる也」

○あたらおもりかにおはする人の、物になさけおくれて「すくだ〳〵しき所つき給へるあまりに、みづからはさしもおぼさゞりけめど(も御)」

葵の上のみならず、母宮もおもりかに上らふしき斗にて、なさけ〳〵しくいたはりふかきかたは、おくれ給へると見えたり。下々の人も主人の心掟のやうにあるものなり。葵上は人を「ねたみ」あしくとはおぼさゞれども、なさけおくれたる所より、下〳〵に及てはなさけなきやうになりたるなり。「上には人を迷惑さする事はきらひなると、常にいひふれ聞ふれてあれば、かやうのなさけなき事は出來せまじき也。」惣じて此度の事、葵上(の事)がた諸事宜しからず。御息

所には道理あれば、甚だ(その)無念の所によりて、邪氣のたゝりも有べし。父左大臣の家のおきて不足なる故に、知り給はぬ葵上一人の難儀となりたるなり。もとより物見などは好み給はぬ人の、懐妊の折節といひ、そゝのかし出す事よろしからず。「人々のこのめる心にまかせて、主の爲めあしき事をし出す事、今もか樣のたぐひ世におほし」

○むまばのおとゞ程に、たてわづらひて「かんだちめの車共おほくて、物さわがしげなるわたり(かや)など、やすらひ給ふに」

かやうの所までも、源氏は思ひやりふかく心づきて、奇特なる人なり。かねてより所を取をかむも、人知りてとゞへし。また人々多く召具して、はらひのけんともせさせ給はず。忍びて「やつれて、すき間もあらばと」立煩ひたる躰、富貴の人には殊勝なり(る事也)。「葵上も源氏のはからひにて出し給はゞ、人うらみも有まじき也」

○袖ぬるゝ戀路とかつは知りながらおりたつたごの自らぞうき

此哥眞實の情より出て、何の作意もなければ感あるなり。奥の源氏の返哥は巧なるやうなれども、作意に出て實すくなし。「この哥に人のあわれをもよほす事はなき也。」御息所になりて此返哥をみたりとも、我「を」思ふ實はうすくして、心かしこくいひおほすやうにし給ふと却つて腹立も有べきか。「かやうの歌は男女の相交りたる實儀なれば」詞にかゝはらず。實ありて感あるを本とすべき歟。「歌の作意にまどはされたる人は、其作意心境にふさがりて、却て其感知ざる事有べき也。抄には夷の歌も心詞たぐひなしとあれ共、猶此歌はその情眞實にして、心直に詞艶に、しかもよくとゝのほりて、其感ふかし。心詞共此歌には及がたかるべし。」惣じて心かしこく利口にいひまはし、理屈にちかき歌は、にくい

けして、大かたはよろしからざる物なり

○此御いきすだま、こちゝおとゞの御らうなどいふもありときゝ〔給ふ〕

木はうるほへるにながれ、火はかはけるにつく。邪氣は邪念につきて生ず。然れども鬼神は（に）權道なし。邪氣も神なれば、無理なる邪念をばたすけず。御息所のは道理にて、其無念に思ふ念をさめられざれば、邪氣是をたすけたる成べし。御息所の精神ゆきて靈になりたるにはあらず。故父大臣の靈またはたれのたゝりなどいふはみなそら言なるべし。巫の口よせ、よりましにうつすなどいふ事は、ならひ有てなす事なり。これ〔は〕西戎より傳來の一の幻術なり

○うつゝにもにず、たけくいかきひたぶる心いできて

是も邪氣のたぐひ、御息所の念にたよりてする（なす）事なり。夢は少たよりあれば、うつゝの心になき事をもみる物なり。下々の女など、夫をうらみ妾をねたみなどして、是は實にゆきてうちかなぐりもし、いのりても靈に（と）なりても、とりころさむ〔な〕と思へど、其しるしもなし。まして御息所などねたしと思ひ給はゞ（とも）、下臈のごとく〔なる〕心根は有べからず。たゞ邪氣も狐やうの物もはやり物なり。はやらかせばさまぐ〵の妖怪をなすものなり。今も下々の愚痴なる中には、生靈死靈とて、いろ〵〵の事有。是はみこ山伏などをよせて、色〵〵心を迷はすゆへに、幻術にて作りいふ事の中に、狐たどのしわざ、間（まゝ△）だにまじる事あり。むかしは歴々もかやうの事もてはやされし世のならひにより〔て〕、御息所の名をたてし（て）狐狸のしはざも有べし。近年〔は天下〕文明の運に〔めぐり來〕て、次第に歴々はさやうのまどひなきゆへに、生靈死靈の沙汰もなし。〔下々など實に思入て、生靈死靈になりたく思ひてもあたはざるは、文明の時に當りて〕、人の心

むかしのやうに恨に入てはまどはず。うたがはしき念ある故に、邪氣出來せぬなり

○人にかりうつしたまへる御ものゝけどもの、ねたがりなどふけはひ、〔いとものさわがしくて〕

他人に靈を祈りうつしたるなり。其隙に生れ給へるを、物のけどものねたがるなり。かやうの事も幻術の一色なり。實なき事なれば次第になく成なり。香にても幣を切、竹木にはさみ、座中におほくたてゝいのりを〔どら〕するやうの事ども、今もするものあり。知らざるものは奇特とおもひて驚くなり。しりてはたれもなる事なり

○たいらかにもはたとうちおぼしけり

此念は凡情のくせなり。我身に敵する人うらみある人の大病を聞て〔は〕、大かたは死すべきと思はれ、よろしきと聞ては本意なき念出るなり。惑なり〔にくみては死ん事を思ふ。和漢共に凡心のまどひはおなじ事なり〕

○たゞ芥子の〔かにしみかへりたり〕

祈禱の時護摩と芥子をたく事あり。その芥子の香御息所の衣裳にとまるなり。是にて御息所の靈にはあらざる事をしるべし。精魂ばかりかよふならば、此香にしむ事は有まじきなり。神は形なき物なれば、狐などの妖物のかくする事なり。御息所の體をしてみするも妖物のさする事なり。〔うらみの道理なる念にたよりてする事也〕

○はかなき事のおりに、人の思ひけちなき物にもてなすさまなりし、〔みそぎの(後)〕

事あらそひの時、我をなき者におもひけちたる遺恨忘れがたくて、其心のしづまらざるなり。他人におしけたれ給はゞ、〔心は〕遺恨〔ながら〕さまでは有まじけれど、葵上は本妻といひ、御息所にしのびかよひ給ふといふばかりにこそ

あれ、ともに大臣の息女なり。前坊の御息所なり。まさりはすともおとるまじき身にゝ、まゝ物ねたく、あたとなるゝとおぼす「より」恨「猶にとをりて」散じがたかるべし

〇のぼりぬる煙はそれとわかねどもなべて雲井の哀なる哉

人を繼したひては、何となく「ひとり」空のみながめらるゝ物なり。まして嫦となり「て」い「匡ゝ」り給ひしを思ひ給はゞ、かく有べき「事」なり

〇かぎりあればうすゞみ衣淺けれど涙ぞ袖をふちとなしける

限り有ばとは、定法にまかせて輕服を着給ふなり。此兩首は哀深くかんあり。作意もなく哀情より出たる成べし

〇宮はしづみ入て其まゝに、おきあがり給はず

此程は産かたの經營のみなりしに、おもひかけざる事の出來したるなり。凡此物語は盈をかくの理をふかくあらはせり。今葵上は夕霧を生給ふ（誕生ありて）。思ふ事もなく十分なるべきに、此事の出來たるなり。人は高卑ともに我身一代の盛あるものなり。凡「心の欲」にて其さかりを「ば」しらで、行末にてはなをよき事もあらむやうに思ひて、何となく月日をくらすうちに、盛すぎ、おとろへにむかひぬれば、變にもあひ「て」、心しづかにこのましきあそびなどすべき日比は、空しく暮しゝ事後悔する物なり。孝子は日を愛すといへり。今日の「日の」無事なるは天の慈命なり。學問禮樂弓馬などの藝にあそび「五倫の交り和する事を」たのしむべし。形あるものはかくる所なくてはかなはず。是命の自然なれば、まさん事をねがふべからず。そのかけたるをませば、かへりて大なる所そこなはるゝ物なり

○「こきあをにびのかみなるふみつけて、さしをきていにけり

評。今俗にも弔の使、又文などは當意に返事をせず、憂にしづみて心やましき時なれば也。それ故さしおきて歸りたるなるべし」

○中納言の君といふは、としごろ忍びおぼしゝかど、この御思ひのほどは、なか／＼さやうなるすぢにもかけ給はず。あはれなる御心哉と「みたてまつる」

としごろ中納言の君に心はかけながら、此ほど御なさけのかゝらぬを、「かへりて」中納言の「君の」あはれとみるなり。天眞の靈あれば、義理に感ずる「は誠」也。たとへ我によき事にても、其人の不義をばみかぎる心有べし。情欲の醉狂のみだれさめて後はづかしかるべし。源氏も奇特なり。中納言の君もさすが人々の中にすぐれたるほどあり。本性のよき人は變におひてみゆるものなり。源氏の君も心のすさみにまかせ給ひて、葵上の在世日比の無音今さらに後悔にて、一人なげきもあれば、忌中に眞實を盡し給ふなるべし

○少納言はいとかうしもやはとこそ思ひ聞えさせつれ、あはれにかたじけなく、おぼしいたらぬとなき御心ばへを、まづうちなかれぬ

嫁娶の差別もなく、いつとても「なく」有べきと思たれば、かやうの所まで源氏の心のつきたるをうれしくおもふなり。紫上其身がらといひ、寵愛類ひなかりしかども、二條院六條院にてもみな對に住給ひて、寝殿にはすみ給はず。六條院の寝殿には、後に女三宮住給へり。紫上は婚禮なくてむかへ給へる故なるべき歟。「一云とゝ」。むかしは如此禮儀正

しかりしなり。もろこしにも、無下以レ妾爲上レ妻とみえたり。尤種姓よく心ざまあしからぬ人は、嫡婦なくてむかへたりとも、本妻としてよかるべけれども、それにならひてすぢなくいやしき者の、しかも心ざまあしく、色のよきばかりにて、本妻となる者あれば、家道みだれて、子のそだちまであしき者なり。近世は正しき媵侍も、かたもなくすたれたりとみえたり

○すゞか川やそせの波にぬれ〳〵ずいせまでたれかおもひおこせむ。ことそぎてかきたまへるしも、御ていとよし〳〵しくなまめきたるに、あはれ「なるけ」をすこしそへたまへらましかばとおぼす

（五）頭云流布本葵卷末尾に榊卷に屬すべき「鈴鹿川」の歌ありて、之れに對する評語は、榊卷初條「ものはかなげなる云云」の評語中に混入せり。同條につき參照。ト云ヘリ流布本系統ハ凡テ誤レリト見ユ正スベシ

源語外傳卷之下

禮儀をノ下脫シ、ツヾキテすゞか川云々ノ條脫セルナリ。（[illegible]）ニヨリテ補フ但前卷尾ニ誤リテ出デタルハ除クベキナリ

榊

○ものはかなげなるこしばがきをおほがきにて、いたやどもあたり／＼、いとかりそめなめり。くろ木の鳥ゐどもは、さすがにかう／＼しくてみえわたされて、わづらはしきけしきなるに、かむづかさのものども、こゝかしこにうちしはぶきて、おのがどちものいひたるけはひなども、外にはさまかはりてみゆ。火たきやかすかにひかりて上世の風おもひやるべし。かくてこそ國ゆたかに、世長久なるべき道理なれ。こゑやすき小柴を太垣にて、かろき板屋はなれ／＼にみえて、あさはかなるやうなれども、かへりて宗廟に行にくきやうなるは、禮儀の備はりたるゆへなり。古人は宮殿〔城〕やぐらを以て要害とせずして、禮儀を〔以て山谷のかためとせし事を思ひ知べし。黑木の鳥居の神さびて、殊勝なるも古風なれば也。火たきやかすかにひかりて。人氣すくなくみゆる夜の躰、神つかさのこゝかしこうちしはぶきたる、とりあつめてたぐひなかるべし

○すゞか川やそせのたみにぬれ／＼ずいせまでたれか思ひおこせん。ことそぎにかきたまへるしも、御ていとよし／＼しくなまめきたるに、あはれなるけをすこしそへたまへらましか〔ば[illegible]〕とおぼす」

御息所はいたはりふかく、しめやかなる所すぐれたる人と聞えたれども、物のあはれしり、なさけ／＼しき所おくれ給へる人とみえたり。此故に葵上失給ひてのち、本妻にもなし給はざりし成べし。本妻にして〔は〕なさけすくなきは第一の疵なり。物のけなどの悪名をおひ給ふも、慈愛のうすき故なり

○大將の御事、侍つるよにかはらず、大小の事をへだてず、何事をも御うしろみと思せ。〔よはひの程よりは、よをまつりごたんにも、をさ／＼はゞかりあるまじうなん〕

物語のうへにてみえたる源氏にては、好色にのみかゝりて、何をなすべきいとまもなくして、國政などにあづかりては、用にも立間敷人と世におもへり。しかれども詩哥作文管絃に長じ給へる事は、物語にもみえたり。文學達才にして弓馬にもうとからぬ人とみえたり。生質仁厚にして人をすて玉はず。此所大臣の器量第一なり。惣じて其代にてみると、後世よりみると〔は〕相違の事あり。其世には治世無事の時と思へども、其世の凶事どもとりあつめ、一處に書つ（集）らねたる記（△事）をみれば、治世の〔間も〕なきやうなり。又戰國の記をみれば、朝夕軍ありて（ばかりにて）いそが〔わ〕しきやうなれども、世間無用の多きみやみて、却て隙なるものなりといへり。されば戰國の士には弓馬はいふに及ばず、文學どもに達者なる者あり。合戰の事のみとりあつめ書たる記なる故〔に〕、書にてはさやうにみゆるなり。源氏も〔好色の事のみとりあつめて書たれば〕一生好色の人のやうにみゆれども、さありては人の交りもなりがたかるべし。いにしへの書をみるは萬事の思ひやり（△て見るべし）あるべし

○おほぎさきもまゐり給はんとするを、中宮のかくそひおはするに、〔御心おかれて〕

堯の子…譲給へば…諸ナシ…抄ニアリ

此弘徽殿の振舞は、只人の夫婦の中宜しからぬ様なる事なり。天子には后女御ともに臣妾たれば、上よりちかづけ給ふまじくば是非に及ばず、我かたよりさくると云事はなき道理なり。臣君を侵し、陰の陽をしのぐ、これ無道の至極、大亂の源なり。禮の立ざるとは是より大なるはなし。畢竟君に智仁勇の徳おはしまさゞる故なり。天照皇御遺教すたれたる事なげくべし

○御位をさらせ給ふといふばかりにこそあれ、世の政事をしづめさせ給へる事も、我御代の同じごとにておはしましつるを

唐朝のいにしへ徳さかむに、みち行はれし時は、天子の御位を去給ふといふ事なし。大老になり給へば攝政あり、皇子は皆臣にして諸臣ともに齒し譲り、諸臣下の志(心)をも人品をも、委しく知ろしめし、天下の諸侯にもしたしく交り、下の事をも自ら知給へり。本朝上古又同じく攝政し給へり。下より上を見る事は見やすく、上より下をみる事はみがたし。故に下に居て下の事、人情などよく知り給ひて、天子崩御の後、位につきて君となり給へば、天下の權の臣下にくだるべきやうなし。生ながら尊位におはしまして、下の事知り給はざる故に、下に知人出來て、天下の權うつる事古今皆然り。又天子は天下の尊位なり。御子とても人君なり。父とても位を去給へば、人臣に准ず。祭給ふも天子にて崩じ給ひしとはかはるべし。生ながら父君は臣となり、臣子は君と成給ふも理ならず。况や死後をや。又院ながら天下の政務知ろし召は、攝政に似たり。さる程ならば其儘「御」在位にて有べき事なり。大舜の天子たるは、尊の父は初より庶人なり。其上堯の位を禪給ひて、堯の先を祭り給へば堯の子の道理なり。父は(瞽)または本生たるばかりにて養給へば、

父ニヲ蕃自身ハ天下ヲ取、父母凡夫なればトス

何の慾もなし。出て公卿諸侯百官に交り有にあらず。舜も父母にまみえ給ふ時は御位の用なし。德を尊謙を愼み、其時に中するのみ。父には孩提赤子匹夫の時の心にて仕へ給へば何心もなし。漢の高祖父に太上の号を奉れるは本理にあらず。たゞ舜のごとく高祖一人の父母にして無位を以て養て可なり。後世に此非禮に從ふのみ

○「さえわたる池のかゞみのさやけきに

みなれしかげをみぬぞかなしき

とおぼすまゝに、あまりわかく〳〵しうぞあるや

評、孝は六十になりても、父母をしたふ心は三歳の時のごとし。此時のうたは艶に妙なる詞もなく、只物がたりの様に、うちむきてかなしきばかりの事なるべし。わかわかしといへるは此意にや」

○大將の君とし月ふれど、なほ御心はなれ給はざりつるを、かうすぢことになり給ひぬれば、口おしとおぼす

父兄の勢盛なる時、奢らず時めかず、謙退質素にして引籠りぬる者は、威勢なき時もかはる事なし。さやうなる人は、世人もいたはり思へば、盛衰ともにさのみかはらぬ者なり。又世に色好ざる人は、けはしき所あり。いろめかずしてはなれがほにもみえず。かた〳〵謹の姫〔君御〕〔は〕よき人がらとみえたり

三十輻本ハ姫ノ下□アリテ程カトセリ全書本ハナシ

○只此大將の君をぞ、よろづにたのみきこえたまへるに、なをこのにくき御心のやまぬ〔に〕

源氏とふじつぼの事、斯のごとく大不義は可有事にあらず。かやうの事有ては、行末源氏さかへ給ふべきやうなし。仁者〔は御〕一旦あやまち有ても、終にはさかゆる事をつよくいはむとて、如此事書出せる歟。此物語の大躰實事を記せる

に不相應也。たゞし此物がたりは好色を釣いとにして、上古の美風を殘せり。後世其魚を得ずして、つり糸にまどはん事を恐れ、其釣糸なる事をあらはさんとて、斯のごとく大不義の人の、似せがたくめづらしき事を作りまじへて、物語の興としたる歟。都てむかしの物語は、〔世になく〕珍らしき事を好めりとみえて（たり）、竹取の物語など〔も〕、一向信ずるにたらざる事どもあり

○九重に霧やへだつる雲の上の月をはるかに思ひやるかな

むかしも今もおなじ大内ながら、今宵の月などを〔ば〕よその事に思ひやるとなり。其時の勢にて心にかゝる事なれば、自然と言葉の餘情にもあらはるべし。又御外戚の上下をへだてゝ我儘なるを、霧によそへていへる〔にて〕も有べし

○心もと〔なき所（ふ）〕なく、世にさかえ時にあひ給ひし時は、さるひとつものにて、何につけてか世をおぼししらん、とおしはかられたまひしを、今はいといたうおぼししづめて〔はかなき事につけても、ものあはれなるけしきさへそはせ給へるは、心ぐるしうもあるかな〔な御〕ど〕

人は難にあはざれば心もみがゝれず、知ふかゝらざるものなり。生れながらさはる事なく成長したる人は、無下に事の心を知らざれば、大事にはあたりがたし。此故に古より乱をしづめ世をたすけし人は、〔おぼくは〕人倫の變に處し、事の難にあひたる人なり

○つかさめしのころ、此宮の人は給はるべき司も得ず、おほかたの道理にても、宮の御給はりにても、必有べきかゝいなどをだにせず

私の遺恨を以ておほやけ事を抑損するは、君をたなみするなり。たとひ人は非にして我は是ありとも、私を以て公事にまじふべからず。いはんや大后の態は人のよきをそねみ、自の非を知らざるものなり。〔是は女子の常也。〕右大臣大后と光にして、ほしいまゝに依怙せらるゝ事、これよりうしろぐらき事有べからず

○このとのゝ人どもゝ、又同じさまにからきことのみあれば、世の中はしたなく、おぼされてこもりおはす

大將左大臣などは、私の遺恨を以て、人の官位をおさふる樣なる事をする人にはあらず。中宮も我につらかりし人にあたる樣なるこゝろおはしまさず。是を以てみれば、弘徽殿の后、右大臣などは各別の人がらなり。これは大なる事なれども、世の人さやうの善をあげずして、一の非あれば其非をのみあげていへり。全躰の小人たる人には、かへりて咎め罪すべき非はなき者なり。一事の非を以て全躰の善人をすて、かしこく罪におちいらざるを以て、全躰の不善人世にさかゆる事、道なき世のごとくみえたり

○よのおもしとものしたまへるおとゞの、かく世を遁れ給へば、〔おほやけも心ぼそうおぼされ〕

車あらそひの時下々の奢りたる躰をみれば、思ひやりふかく人情時變を察して、よくおさめたる人とはみえざれども、其躰おも〳〵しく大臣めきて、二條右大臣の樣に分別なく、かる〴〵しき人とはみえず。右大臣のはえ〴〵しさにはたとひ當今の外祖父なりとも、大后おはせずば權威かくのごとくには有まじきなり。大后は右大臣より〔は〕根ふかく惡〔心〕ある人なり。〔君かろければ剛惡の者權威をとる物也〕

桐壺の帝のいかに左大臣を朝家のおもしと、思しおきたりとも、忽用に立給ふまじき勢はみえたる事なり。大后を退

けずして立置給ふは御誤りたり。君に對して無禮「我儘なる」罪顯はれたり。「御在世にかくのごとし。況や崩御の後を
や」
○其道の人々、わざとはあらねどあまためしたり。殿上人も大がくのも、いとおほうつどひて、左右にとまどりに、か
たわかせ給へり
此時分「は」文學盛たりしとみえたり。常の事にて珍しからざれば、わざとがましくかくべき樣なし。物のついでに心な
くみえたるにて、あまねかりし事を知べし。人に上たる人の文盲「なる」はあるべからず。源氏三位中將など博文の人と
みえたり。「美賞といひ、聖人の實學傳らざりし事おしむべし」
○かやうなるおりのまをならぬと、かずかずに書つくる、心地なきわざとか、つらゆきがいさめ「たうるゝかたにて、
むつかしければとゞめつ」
か樣の事につけても、古人の人の爲に忠有心づかひ殊勝なり。心なく折ふしはからず書とゞむるさへ、人の爲いため
り。いはんや人のよき事をいひけち疵のみとりあげて披露する心思ふべし
○文王の子武王のおとうとゝ、うちずんじ給へる、御なのりさへ「そげにめでたき」
此心おごり凶事の出來し先兆成べし。わかく「し」て文才に長じたるを不祥といへる是なり。これより人を見くだし、何
とも思はずして愼「も」うすければ、必凶に入者なり。此時分唐朝本朝ともに華を好み、心をみがく學術なかりしかば、
博學達才をもつて聖賢と思ひしなり。故に周公の德を知らずして、其才の美ばかりをしるゆへに、文學に長じ詠を博く

しり、時人にさときを至極とせり。ことに源氏をば其代には時の有職と、天下よりゆるして、博學の名を得たる人なれば、恥を知り給はでは、心の驕も生ずべき事なり

○中將、宮のすけまいりつやなどの給ふけはひの、したゞにあはつけきを

大臣の器にあらず、不德の躰なり。君惡王ならずといへども、智勇おはしまさねば、如此〔不德〕の人勢にのりて天下の權を執。是を道なき世といふ〔也〕

○おとゞは思ひのまゝに、こめたる所おはせぬ本上に、〔いとゞおいの御ひがみさへそひたれば〕

思慮なく、物ごとに急なるはあしけれども、これより以下おとゞの申されやうは皆ことわりなり

○おほやけの御かたにうしろやすからずみゆるは、春宮の御よこゝろよせとなる人なれば〔ことわりになむあめる〕

朧月夜の事につきて、〔重々〕立腹はことわりながら、當代にうしろぐらく、春宮の御代いそがるゝことあるは、跡もなき事なるべし。春宮も源氏も立がたく、あやふき勢なれば、さやうの所存あるべきやうはなき事なり

○などきこえつる事ぞとおぼさるれば

源氏と朧月夜との事、〔右大臣の腹立（立腹）はことわりなれども。弘徽殿の心を知ながら、遠慮もなくいひ出し給ふは智なきなり。

須磨

○世中いとわづらはしくはしたなきことのみまされば、せめてしらずがほにありへても、これよりまさるともやと〔おぼしなりぬ〕

うと／＼　書御抄ニヨリかと／＼トス

退てとがなしといへり。憤る者の心も少はやはらぎ、にくしと思ふ其心もそしりおほせたる所あれば、いよ／＼いひだつる罪薄くなる、人情大かたしかり。其世に勢ある人のにくみをうけ、又其かたの小人たちまじり譏する時は、其身に罪なしとても、たのみにはなりがたきなり。他人の上には平常のことも、取なし様にて咎になる物なり。機をみてよき程に身退ずしては、必害にあふ者なり。さるゆへに人の上に立給ふ人は、小人〔の譏〕を信じ給はざるを明とす〔る事也。〕常人は何心なくすぐるに、小人は才覺をして罪におちいれむとかまふる事なれば、上たる人よく／＼明ならでは、一度はおちいる物なり。君子をさへいであしくせんと思へば、罪におとしいるゝ事和漢ともに昔より其ためしおほし。いはんや常人の少づゝ過失なき事能はず。いひたてゝ罪におとさんといとやすし。君臣ともに國天下の政〔道〕にあづかる人は、後世の恥を思ひて、小人惡人諂諛の人を近付ざるやうに用意すべき事なり

○今は世中はとかるべき身にも侍らねど、いちはやき世のいと〔おそろしう侍なり〕

いちはやきはすみやかなる心なり。急に物のうと／＼[か(御)]しき心なり。物に遠慮〔をも〕し閒合せ、自の見察をもくはへて明白なる時にこそ、善惡をも沙汰すべき事なるに、我心の怒にまかせ、少の事をも大にいひなして、憎き者に當り、又人のあしくいふを證據にして、急に沙汰する樣にてはやすき事なし。惡人は諂ひ善人は身退くより外の事なし。されば小人に威勢つき、出頭する時は國天下の風俗日々にあしくなるものなり

〇〔いひもてゆけば、たゞ身ひとつのおこたりになん侍
評。たとひ先祖の宿悪か、身の生付に難にあふ所あり共、善大に徳いたりなば消すべし。禍を轉じて福となすもの也。
身の罪なしとても善行なきはおこたり也」

〇にごりなき心にまかせて、つれなくすぐし侍らんもいとはゞかり多く、これよりおほきなる恥にのぞまぬ先に、世を
のがれなんと〔思ふ給へたちぬるなど、こまやかに聞え給ふ」
韓退之作羑里操云、臣罪當レ誅〔矣」。天王聖明。程子云、道二得文王心一出來。〔此文王至德處也」と。むかしより君子の
罪をならして遠流せらるゝ事、實に罪有にあらず。然れども君子は自罪なしといはず。道を學ぶ者も〔凡心清くつきゝ
れば」身の罪なきいひわけ〔を」して、小人の讒をあかし度と思ふ〔心」あり。我罪なしとて身退ず、〔つれなくあり〔て」
は、讒人の憤りいよ〳〵深かるべし。身退む事は尤なるべし

〇なほさるべきにて、人のみかどにもかゝるたぐひ〔おほう侍けり。されどいひ出るふしありてこそ、さることも侍け
れ」
尚侍は夫ある人も任ぜらるゝ事なれば、女御更衣とはかはれり。此時代には朧月夜の事などを罪〔科」といふべき風俗に
〔は」あらず。弘徽殿の大后〔源氏をにくみ」何事にかよせて退けたきと待給へる折ふしなれば、〔日頃のいきどをり出た
る也」。當今に利あらざるよし〔實は」の給へるなるべし

〇〔所せくつどひしむまぐるまの、かたもなくさびしきに、世はうきもの也〔けり御」とおぼししらる

許。我勢につく者は、我身衰る時は又人の勢につく事、凡夫の常也。畢竟何の用にも立ぬものなれども、人の從ひ付をよろこぶは凡情のまどひなり」

○臺盤などもかたへはちりばみて、たゝみところ〴〵ひきかへ「し」たる（り）古風の質素面白し。今はいらざる所のたゝみも其日（その儘）にしきおきて塵にうづみ、用の時用にたゝざるなり。やぶれざるたゝみをかへなどするなり。如此費つもりて「下民」困窮し、天祿とと〴〵く（永く）絶て乱國となるものなり

○ちゝみとはいとおろかに、もとよりおぼしつきにけるに、ましてよの聞えをわづらはしがりて、おとづれ聞へ給はず去がたく親しき中は人のゆるしもあり、問給へばとて罪にもあたり給はじ。たとひ罪にあたるとも、問べき人にて「、その」義あらば、無是非事なり。世のゆるしなき他人だに義を知る人は、か樣の時節の心ばせ見所あり。「ひとへに君父の命のみ守るをよしとする人有」、事に當りてはとがめられたるもよし。「歳寒見松栢、亂世知忠臣。といへり」

○あなゆゝしや、思ふ人かた〴〵につけて、わかれ給ふ人かなとの給ひけるを、さるたよりありて、もり聞給ふにも、いみじう心うければ、「これよりもたえておとづれきこえ給はず」凡情のならひ、互にかげにてはとかくいへども、我事をいはるゝを聞ては腹立するものなり。往來の女房など、あなたこなたにつけて追從する故（事也）、姉姑あひよめなど中あしくなる所なり

○はしらがくれにゐかくれて、涙をまぎらはし給へるさま、「なほとゝら見る中にたぐひなかりけりと、おぼししらる」尋常のかなしび（み）は哀情そのまゝみゆる物なり。たをふかゝらぬは、心に思ふよりは言葉「と樣子は」、かなしきやうにい

ふ物なり。至りてふかきなげきは、かへりてはづかしく、おもはれ〕てしのぶ〔ものなり〕。業上に出しらず、なにおおく

れて〕なみだをまぎらはし給へるさま、いたりて親切なり

○御はかはみちの草しげくなりて、〔わけ入給ほどいとゞ露けきに〕

古人の墓は天子諸侯といへども、たゞ土のみかきあげて、其上に草木しげれり。何のつくろひもなし。路の草もしげく、分入につけても感慨のみおこり、〔本心の〕孝心發出すべし。後世墓〔を結構し道〕をきよめ〔はらひたるは〕人の目を驚かし、見物のたよりとなる事、よからぬ人の仕業なり。古〔人〕質素の陵は今に傳て有。後光嚴院後圓融院以下代々の御墓あるも、石塔などいふ事（にし）もなく、只松柏或はつばき植たるばかりなり。たとひ主しらぬも只土のみ高くて（きにて）、人のあばく事稀なり。後世の結構過たるは、其子孫ある時ばかりにて、程なくくづれ、木石などとりあばかれて、哀なる跡になることなり。其代には孝孫の情をふさぎ、後世に〔は〕人心をいたましむ。古人の心の深きにしかず

○有し御面影さやかにみえ給へる、〔そゞろさむきほどなり〕

其上にいますがごとく、〔其左右に在がごとし〕。孝子の心は親をなしと思はず。〔其神のぼりくだりて在がごとし。〕かゝる難にあひたる時は、〔時の情欲〕世事ともにまじはりなければ、眞實の孝心〔あらはれて、夜月の古墳〕一入なるべし

○よゆすりておしみきこえ、〔したにはおほやけをそしりうらみ奉れど〕

今の風俗より源氏をみれば、大にあしきやうなれども、其世の風俗とみえたり。其代にも少過て不義（なる）の事は一二〔は〕有とみえたれども、其時は知られざりしとみえたり。〔又君子は、惡居下流、天下之惡皆歸焉。の心にて〕、源氏好色の下

流にたち給ふ故に、人の國の事むかしの事まで〔も〕とりつけていひたつる事も有べし。〔此病あれば此徳有。好色は病なれ共、慈悲の徳すぐれたる人と見えたり。此故に世人あまねく其疵を見かくして、其徳をしたふなるべし。むかし物語に云、死者有て焰魔の廳にいたる。其者の悪をしたる巻物を取出たれば、大なる事太皷の筒の如し。善をなしたる巻物はほそき事はしのごとし。これを業のはかりにかけたれば、はしのごとくなる巻ものは重く、太皷のごとくなる巻物はかろし。大巻に記したる悪事は數萬なれ共、小巻に記したる善は慈悲善行也。一の慈悲心に萬の悪事勝事を得ずして、極樂に往生すといへり。源氏一旦病によりて身沈みぬれ共、後榮え給ひしは慈善の徳なるべし〕

○生けるよの別れをしらで契りつゝ命を人に限りける哉。〔はかなしなど、あさはかにきこえなし給へば〕源氏の心〔に〕は、只今の別頓て死別になるべきかと思せど、紫上をなぐさめて〔かりそめの生別のやうに宣ひなしたるを、あさはかに聞えなし給ふといへり。すべて我心に思ふ事を殘りなくいひて、人の心をいたましむるは、よからぬ人の實なり。我悲しみの深きをも淺はかにいひなし、立歸るまじくと思へども、やがてかへらんといひて（やうにいひて）、人〔の心〕をなぐさむるは、人をいたはる〔の仁心深き故〕なり。〔なほ〕よからぬ人は〔心には〕さほど（まで）思はぬ（ざる）事を〔も〕いひて、人のなげきをますやうなる〔にする者ある〕は不仁なり

○〔よる浪のかつかへるをみたまひて、うらやましくもとうちずんじ給へるさま、さるよのふるごとなれど、めづらしくきゝなされ、かなしとのみ御ともの人々おもへり許。時にかなはざる事はめづら敷事も興なし。時に當りては、常の事うちいひたるも感あるもの也

○こしかたの山はかすみはるかにて、まことに三千里のほかの心地するに、かひのしづくもたへがたし計。度々往來する道はちかくおぼえ、はじめて行所は遠きもの也。其上遠國へ行とても、やがてかへりくる事のしられたるは、さもあるまじき也。程近くてもかへる期しられず、した數人〳〵にもあふをかぎりにわかるゝ事なれば、三千里の外の心ちすべし〕

○月のいとはなやかにさし出たるに、こよひは十五夜なりけりとおぼし〔出て、殿上の御あそび戀しく〕

いにしへ〔は〕禁中の天下なれば、政道事しげく、打すてゝあそびし給ふ事もなりがたければ、明月を待つけ、花の時にことよせて、詩哥管絃有。心和し樂みてゆたかなりし故なり。此故に世中もゆるやかなりき。近代はいとま多き人も、詩哥管絃怠りがちなり。心和せずたのしまざる故なり。此故にいやしき事のみ胸中に入なり。〔和歌の會はあれ共、詩管絃にはいたらず〕。管絃する人は哥をしらず。哥をよみ管絃する人も、詩に達せる才學〔は〕なき人多し。文學なくては詩哥に實なく、管絃（の遊びを以て人の眞樂を）にて心の樂をみちびく事知らざる人は、詩哥けだかからず。源氏みる人多しといへども、かやうのたしなみなき人〔は〕遺恨なる事なり

○恩賜の御衣は今こゝにありとずんじつゝ入給ひぬ。御ぞはまとに身をはなたず、かたはらに〔置給へり〕

古人君邊をわすれぬ志尤殊勝也。聖廟源氏ともに其恨み忠臣の恨にして、却て君をわすれざる上世の美風思ふべし。もろこし人もいにしへは日本をば君子國といひしとなり。〔今のうらみを以て昔の恩を忘れず。古人の厚き也。〕天子を（顧）拜する事なければ御衣を拜し給へり。菅丞相の詩に（聖廟御詩）

去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣今在此、捧持毎日拜餘香

○よろづのことさまかはり、み給へしらぬしも人のうへをも、み給ひならはぬ御心〔ち〕にめざましう〔かたじけなうみづからおぼさる〕

これは上らふしきにすぎたるなり。在位の人は民の父母なれば、賤のしわざはわざともくだりて知給ふべし。幸にかゝる所に住給ひてみ給ふは、天下政〔道〕の本を知給ふ事なり。〔實學なく世のならはし〕文に過て下にとほくなり、終に公家の天下の權を失ひ給ひし事、一朝一夕の事にあらず。心の上臈しくけだかきは、利欲なくけだかきをいふなるべし。身商人にくだるとも、心利におちず、好む所義理ならば、淸白の人なり。〔其身に位祿有とも、心に利を好まばいやしき人なるべし〕。されば事のうへにて〔は〕黑白をいひがたし

○琴をひきすさみ給ひて、よしきよに哥うたはせ、大輔横笛吹て、〔遊び給〕

哥うたはせといへるは、唱哥なるべき歟。管絃の時唱哥をするは、笛の唱哥をする事となり。されども此時は横笛吹人あれば、唱哥は笙にても有べき歟。笙の唱哥も、笛ひちりきに應ずるやうに、ふしよく絃の調子にあひたるは面白き物なり。笙は舌にて調子定り、絃も笙を聞てしらべ、ひちりきも笙を聞て舌を調ぶるなり。笛ばかりしらぶることとなく、笙ひちりきを聞て、それに應じて吹ものなり。ことに絃に笛一管は吹にくし。調子さとからでは、絃に合ずして和せざる物なり。笛よければ面白きものなり

○〔入かたの月のかげすごく見ゆるに、たゞこれにしに行なりと、ひとりごち給て

許。費發枉芳牛目閑　三千世界一周天　天廻玄鑒雲將霽　唯是西行不左遷

題世事　劉元甫

世事不齊君莫嘆　試看日月左青天　一般造化都相背　日月右旋天左遷

天文の學は昔より說々多し。然共天・日。月・星共に皆左遷也　日は一晝夜に周天す。故に十二時を以一日とす。月は廿九日餘を以て周天す。故に三十日を以て一月とす。大小を立て餘を定る也。天は一晝夜に周天して一度四分度の一を過る。故に十二月にして周天す。日は天よりもおそく、月は日よりも遲し。故に天に對して見れば退くが如し。退くを以て右遷と見ゆ。さやうに見ゆるによりて右遷といへ共、實は皆左遷也。東に起て西に行也。十干十二支皆左遷也。北を背とす。右を尊ぶは乾の方なる故也。故に位を退るを左遷といへり。日本にて左を尊ぶは陽の故なるべきか。日月を左遷といふは、時にしたがひて左より起て右に行故か。地は西北高し。乾に上洛するが如し。乾より左にめぐりて西へ行也。又乾に歸着する也と云り」

○大とのゝ三位中將は、今は宰相になりて、人からのいとよければ、時よのおぼえおもくてものし給へど、世中「いと(闕)」あはれにあぢきなく、ものゝおりごとに癒しくおぼえ給へば、ことの聞え有てつみにあたるともいかゞはせんとおぼしなりて、俄にまうで給

其ころは文武わかれずして、公家武家の名もなかりしなり。故に如此人々の義理ふかし。しらざる人はかゝうなるを大やけにそむくといへども、さにはあらず。かほどの義勇ある人ならでは、主君の用に「も」たゝざる者なり

〇〔碁すぐろくばんだきのぐなど

許。碁は役なく善をせざるものゝために用たりと見えたり。とかく善をすべき人ならず。農工の所作もなければ、悪をせんより外の事なし。故に碁になりとも精神を用て、他の念なからんと也。善をもなすべき人、役もある人のこれにかたぶくはあしき事也。双六などもこれによりて後に發りたるもの也。彈碁は今の世にはつたはらざるもの也〕

〇夜もすがらまどろま〔れ〕ず、ふみ作りあかし給ふ

上代の人の心よろしき所みえたり。久〳〵にて對面、すこしの內のことなれば、世上の事人の上などかたりあかさむ（△す）に〔いとまもあらじ。然るに〕大やけの〔御〕事、したしき中の事いふべき事、尋問べき〔事〕大躰ありて（ばかりにて）、はや詩哥によりて情を述、なぐさみ給ひし事よき風俗なり。心ゆたかにして、當世の利害に戚々たらざる事おもしろし

〇さいひながらも、ものゝきこえをつゝみていそぎ歸り給ふ。〔いと〳〵中々也〕

おほやけの下知よからぬ故に、私の情をのべ、義を思へども、とけて後は又おほやけを恐る〔る〕道に歸着す。しのびてなすは公を重んずるなり。しかれば久しき滞留はあしき故に、はやく歸り給ふこと尤なり

〇かくかたじけなき御馬にとて、黒駒奉り給ふ

此時まで文武いまだわかれずといへども、源氏は大將をかけ給ひて武將なりつれば、無事の時にこそ身退てゐ給へ、武の備〔へは〕、用意あり〔たる〕とみえたり。須磨のすまひ万事略義なれども、馬は數をたてゝおかれたる躰なり。此物語は女の筆にて、男女の交りのみ多く書たれば、弓馬のことはみえがたし。此所にて前後におほくあるべき事をかゝざる所

みえたるなり

○やよひのついたちにいできたるみのひ、けふなむかくおぼすと有人はみそぎし給べきと、なまさかしき人のきこゆれば「うみづらもゆかしうていで給」

公義をおそれ遠慮ふかき躰なり。此心にて好色におかしあるは、時の風俗をば今よりみる故歟。又下流に立給ふ人なればつけましたる歟。さては其身の美質が不祥となりたるにても有べし。しかれども今の時ならば源氏のあやまちは有べからず

○「海のなかの龍王のいといたうものめでするものにて、みいれたるなりけりとおぼすに、いとものむつかしう、このすまゐたへがたくおぼしなりぬ

評。龍宮とて海中に都はなき事なれ共、あるやうにいひつたへたれば、實に有かと信じたる人多し。此まどひによりて瑞夢をもあしく心得給へり。龍宮のまどひなくば悦の夢と知給ふべし。西方極樂淨土、蓬萊仙宮など、昔なき事をこしらへたるもの也」

明石

○猶風雨（雨風(御)）やまず、神なりしづまらで、「日ごろになりぬ」

弘徽殿大后の剛惡のこゝろより、ひがどおほくし給へるとがめに、大雨雷風常にこえて久しきなり。心の思ひ（鬼△）におそれ

あれば、これより愼も出來〔ぬ〕とみえたり。是天の慈命なり。〔或人〕云、大后は剛悪の心ありと〔いへど〕も、後世の悪にくらべては猶かろき事なり。然るに後世咎なき事はいかゞと。云、上代〔と〕後世と天下の人品風俗各別なり。古はなべての人の心位よかりし故に、今よりみれば悪かろしといへども、其時にありては大なり。其上山林しげり、川流深かりしかば、鬼神の霊もさとくて、咎はやかりしなり。悪も又大ならざるに、さとし甚しければ、恐れて改る（こりて改なをる事）とはやし。〔故に亡びに至らさりし也〕。後世はなべての人品悪人小人多し。ゆへに小悪も〔悪共せず、悪積〕てとくべからず。風俗大に亂て、故がた〔くなをりがた〕し。後世の悪は多は柔悪なり、〔柔悪は亡をそし。驕奢は天下に及で、山林あれ川流淺し。この故に鬼神の霊も薄し。さとし有といへ共、人おどろきがたし。古のさとしは甚しく、物のそこなひはすくなし。後世のさとしは甚しからぬ様にて、物のそこなひ多し。おどろきさとるに及ては、改べきやうなし〕

○〔いと物わびしき事かずしらず。きしかたゆくさきかなしき御有様に、心づようしもえおぼしなされず

評。變にあたりては、凡人はかねておもひし大かたの心づよさもかはる物也。きしかたゆくさき・かなしき御有さまに、心づようもえおぼしなされぬ事尤也〕

○猶これより深き山を求めてやあとたえなましとおぼすに〔も〕、波風にさわがれてなんど人のいひ傳へむことと、後の世まで、いとかろ〲しき名をやながしはてん〔とおぼしみだる〕

勇に疵あるを恥とするは武士の情なり。此時迄はいまだ文武二にあらざる故也。此物語の筆跡なれば、やはらかなる事ばかりかき顯はして、武備の事は書もらしたれども、自然に所々に如斯武の備へ、みえたり

○「みちのかひにてだに、人か何ぞとだに御覽じわくべくもあらず。先をひはらひつべきしづのをの、むつましうあはれにおぼさるゝも、我ながらかたじけなく、くしにける心のほどおもひしらる

評。上にゐては下をなやまし、富ては驕をしらず。さかふる者は貧者に遠く、衰見て下を親むは凡情の常也。此故に君子は上に居て下のなやみをしり、富ておごらず。禮を好み、施をことゝす。榮る時げすちかく、衰へてはひとりすめり。衰へてげすちかくなるは、逆境に心の屈する故也。我ながらかくも心の屈しけるよと、自反し給へるは奇特也」

○君は御心をしづめて、いかばかりのあやまちにてか、このなぎさに命を「ば」きはめむと、つようおぼしなせど、「いとものさはがしければ」

生質仁愛ふかき人なる故に、勇氣も有しとみえたり。上臈そだちにて、此書又女筆なれば、つよき所はみえぬ樣なれども、動なき心のいさみを見るべし。文武未別れざりししるしなり

○人のみかどにも、夢を信じて國をたすくるたぐひ、「おほうはべりけるを」

殷の武丁などのとなるべし。夢は晝の心の影なりといへり。思ふによりてみる夢有。聞見によりてみることあり。見聞せずおもはざることも、大かた世間にあるとを見るも有。感ずるによりてみるともあり。（皆晝の意念のごとし）つきなき夢をみるは、つきなき意念のおこるがごとし。苦しみ勞してみる夢もあり。恐れてみる夢もあり。如是「類」の夢は聖人にはなし。（き夢也）聖人には正夢のみあり。正夢と「いふ」は晝の正思のごとし。晝通ぜざる經典（傳）の「文義の」夢に通ずる「事あるは」正夢の類

なり。學士に志〔といへども〕深ければ此〔正〕夢あ〔る事あ〕り。先兆陽夢も正夢なり。平人にもまれにはあるとなり。武丁の傳說を夢み給ふは正夢也。且武丁のかねて大臣諸士の許容せざらんとをはかりて、天帝の夢にみえ給ふとのたまひしといふ說は、〔此〕功利の覇術〔の習ひによりいへる事也。左樣の心〕にて大道は行れざる〔もの〕なり。武丁至誠のこゝろにて賢を思ひ給ふ故に、同氣相求めて夢見給へり。〔此理ある事也〕。これらは正夢の中の瑞夢成べし。孔子の兩楹の間に祭らるゝと見え給ふは、後世至聖文宣王の號をうけ給ふべき先兆〔にして終に知給ふ正夢〕なり。源氏の父帝を見給ふは正夢なり。〔然れ共、其罪を終るほどいとまなくて、海に入、流にのぼりてなどいふ事は、闇符給ふ事なるべし。〕近比も正夢をみたる者あり。妻死して子二三人ありしが、奥の間に子供はねたり。次の間に父〔は〕ねたり。ある夜夫の夢に、かの妻〔有しすがたながら〕來〔り〕て、こはなどうちとけて〔は〕寢給ふぞ、〔おき給ふ〕といへるに、〔夢とも覺えず、ありし時の心地して〕、ふとおき〔上り〕たれば、奥の間におきし櫃より〔煙みち〕火燃上れり〔家にうつらんとす。おどろきて〕急ぎ〔燃る〕櫃をなげ出して、〔火を〕滅したり。〔もし〕おどろかずば、夫も子も燒死すべきなり。此〔時〕妻平生貞正和順に〔し〕て〔慈愛ふかく〕世に稀なる人なりき。此故に死して不亡もの存ぜるなり。これ神明不測の理也。〔ある事も有、なき事も有。はかられざる所則理也。〕其時の火は猫のくびたまに火のつきて〔あつかりし故に〕衣櫃の上に行てすりおとしたるが、櫃にうつりて燃出たるとなり

○いにしへの物をもみしりて、ものきたなからず、よしづきたる事もまじれゝば、むかし物語せさせて〔聞給に〕人はふるきを用ふといへり。常人だに老人の物いひたる〔に〕に〔聞しらぬ〕面白き事まじる物なり。ましてかどある人

進ず、三十幡本注釈本げすニ作ル蓄本すゝまずトス底本進ノ草躰也。遺ノ草假名ト見アヤマリシカ

は思ひやるべし。本のねざしいやしからぬ人の、民間におちぶれゐたらんは、一入政道に助ある事有べし。源氏はおぼやけの御うしろみ、政道にあづかり給ふべき人とおぼしをきて、これはかやうの所をも人をもみ給ふこと後學なるべし

〇おやたちのかく思ひあつかふを聞にも、にげなき事かなと〔思ふに、たゞなるよりはものあはれなり〕人情誠にしかり。然れども、禮義をまちてみづから進ず、人のいざなひにもなびかざりし〔は〕貞女の道なり

〇是は女のなつかしきさまにて、しどけなふひきたるこそおかしけれ〔と、おほかたにの給を〕箏は年わかく手しなひてやはらかなる時より、稽古の勞をつみたるがよき物なり。とりわき早只拍子早搔は、糸のひたく〵としなひて、糸と手と別ならぬ様になければ、まとの音は聞えぬ〔もの〕なり。されば箏は女に上手有べきたり。清搔（ガキ）のはなれ、小爪などのずみてつよく奇麗なる音は、又男の勞をつみたるに有べきか。年より手こはく成ても、勞ある人のは、からめいておもしろかるべし。上手のひきける音の耳にはとまりて、心ばかりはゆけども、手のかなはざるは、勞のたらざる〔故〕なり。古人は志し深く根氣よくて、稽古の勞をつみたる事各別多し。長き曲をも五反七反彈ぜしたり。何の藝も所作と心と相叶はされば、上手とはならざるものなり

〇てづかひいといたうからめき、ゆのねふかうすましたり

ゆは左の手なり。九はとり十はゆる故に、とりゆといへり。とりゆといふ時は九十なり。然れども、九もとりてゆり、十はすくひてゆるなり。此曲を後世は左〔手〕のしなとのみ心得て、古人の心傳を失ひたりと見えたり。此物語によりてこゝろづきて、不傳の曲をおこしたる人あり。左手の色といひながら、こゝろのゆくに付て、ふかくすめる色あり。必

めに見えぬノ條既ナシ蕃ニヨル

しも箏の上手下手にもよらず。これは心のゆくへなれば、堪能といへども、其人ならざればしらざるとみえたり。筆紙のおよぶ所にあらず。口傳ならでは傳がたし

○あかしにはれいの秋ははま風のことなるに、一段〔ひとりねもまめやかに物わびしうて、入道にもおり〳〵かたらはせ給ふ。とかくまぎらはして、こちまいらせよとの給て、わたり給はん事をばあるまじうおぼしたるを、さうじみはたさらにおもひ立べくもあらず。いと口をしききはのゐ中人につきて、さやうにかるらかにかたらふわざをもすなれ。人かずにもおぼされざらんものゆへ、我はいみじきものおもひをやそへん、かくおよびなき心をおもへるおやたちも、よごもりてすぐす年月こそ、あいなだのみに、ゆくするへ心にく〳〵おもふらめ。中〳〵なる心をやつくさんと思ひて、たゞこのうらにおはせんほど、かゝる御ふみばかりをきこえかはさんこそ、おろかならね〕

明石上の心づかひ、何につけてもみおとりせず、とゝのほりたる人なり。男子の賢者だに君臣の間においてよにたびかぬ獨立だに、あしくすればこゝろよわき事〔あり〕と見えたり

○〔めに見えぬほとけ神を頼奉りて、人の御心をもすくせをもしらでなど、うち返し思ひみだれたり許。惣じて佛神を頼む事は、事のいまだ見えざる時の事也。既に事來りては、其時勢と人情の道理と有。是をすてゝ神佛にまかせがたき事也〕

○君はすきのさまやと思せど、〔御なをしたてまつりひきつくろひて、夜ふかしていで給〕

明石のうへの思はるゝ所道理なれば、終に源氏まけておはしまさで叶はざる事なり。其けしきをみて、入道もいざなひ

五一一

入たるなるべし

○やゝ遠くいる所なり〔けり〕

今は岡邊を岡越といへり。入道の濱の家といふ所より、十七八丁有となり。〔今〕源氏月見の屋敷といふ所も今あり。明石第一の風景なり。淡路島山のかさなり、海上の〔様〕躰、此所殊に勝れたり。〔是より東も西も其景格別おとりたる也〕

○二條の君のかぜのつてにももり聞給はんことは、〔たはぶれにても、心のへだてありけるとおもひうとまれ奉らんは、心ぐるしうはづかしうおぼさるゝも、あながちなる御心ざしのほどなりかし〕

平生は何とも思はざれども、ほど經だゝりなどしては、我を大切に思へる妻の事をば、思ひ出る者なり。かりそめのすさびは一旦興あるやうにても、おもひ入各別なれば、それにつけても一入戀しき〔もの〕なり

○かういみじう物おもはしきよにこそ有けれ〔と、かねておしはかりおもひしよりも、よろづにかなしければ〕

女子は父母の家に世ごもりて有しよりもまさる身のかたづきは十人に一人なりといへり。大かた〔は〕むかし戀しき者なり。おしはかり思ひしにはたがひて、さま〴〵心ぐるしき事おほし。世中はかゝるものぞとしれば恨〔も〕少しなきもの也

○なだらかにもてなして、にくからぬさまに〔見え奉る〕

明石の上の心ざま奇特なり。なじみもなき人を恨はらだちなどするは淺はかな〔る心な〕り。〔只〕我身のほどをおもひしりて、源氏に恨の色なきは賢なり。〔これによりて源氏も月日にそへてあはれまさりたるなるべし。又なじみふかき人の恨べきふしあるをうらみざるも、かへりて物たらはず也。紫上のにくからずかすめ給へる、尤あしからず〕

〇二條の君も物あはれにたぐさむ「かたなくおぼえ給おりおり、同じ様に繪を書集め給つゝ、やがて我御ありさま日記の樣にかき給へり」

紫上心もちひ奇特なり。夫の久しき留守に、うたがはしき事なきやうに、毎日「毎夜」の有樣ゑに書て、さぶらふ人〳〵にもしらせ「ぬ謚」。わざとならぬ日次の記に、慥にし給へるなるべし

〇終に后の御いさめをも背きて、ゆるされ給ふべきさだめ「いできぬ」

其ひとゝなり仁愛深く、我にあだせし人にても、おほやけごとに私の恨をむくひず。おとなしき心とみえたり。其上學力才智ともにかね給「て當代の有識なれば」、さやうの人は又とたぐひ有がたかるべし。沈倫「し給ふ」を「時の」人のおしみ思ふはことはりなり。「物がたりの上より見れば」好色の人にて「何の」用にも立まじきやうなれど、夫は時の風俗なれば、其世の人も疵とは思はじ。又付ましたる惡名も多かるべし。今も美男にてすぐれたる「事有」人には、一向なき好色の名「をも」立ことあり。「おほせていへる事有。物語は好色を面にたてゝ書たれば、政道才學の事はみえがたし。折ふしありたる好色の事にても、取集てそれのみかきたれば、みる所一生好色にかゝりて居たる人のやう也。左樣にては當世の有識といはるべき學問のいとまも有まじ。政道をはかる事もなりがたかるべし。前後を以ておしはかりてみるべし」

〇ありしよりもあはれにおぼして、あやしうもの思ふべき「身にも有けるかなとおぼしみだる。女はさらにもいはずおもひしづみたり」

はじめはあしきにつきての思ひ、後はよきにつきてのおもひなり。人間善(美)悪につけて思ふ事なき日はまれ〔なる者〕なり。智者は世間如斯なる物と知り、愚者はかくもある物かとなげくなり。はじめは明石の上〔に〕遠慮あるべし。其上なじみもなき事なれば、京のこと一入おぼし出たるなるべし。又京の聞えをはゞかりなどして、おもひの外のとだえ有べし。此比となりては、宣旨いまだくだらざれども、歸り給ふべき定出來て、京のはゞかりもうすく、其上去年の秋よりの事なれば、やう〳〵互にむつまじくみなれ給ふ(ひ)、明石上はみなれ給ふほどよき(よろしき)人なり。〔かた〴〵かよひ給ふ事しげかるべし。〕思ふことなきやうになりての別なれは、なげきも一入深〔かるべ〕し。かくあるうへにもつひに精のたち〔は、明石上出られず。おも〳〵しく色めきたる所なき人とみえたり。〔さやうの人は〕又なさけおくるゝものなるに、明石上はけだかく女しく、〔大かた〕とゝのほりたる人なり

〇〔しほやくけぶりかすかにたなびきて

評。岡べは海も少遠ければ、鹽やく煙もかすかに見へて、風景面白かるべし。今は須磨あかし共に鹽をばやかざる也〕

〇〔かきつめてあまのたくもの思ひにも

評。おもひは火也。七情はみな火也。身の病も國家の亂も、七情の火より生ずる者なれば、神代のむかし人王のはじめは火をしづめて天下無事なる政敎有し也〕

〇入道の宮の御琴の音〔を、只今の又なきものに思ひ聞えたるは、いまめかしうあなめでたと、きく人の心ゆきて、かたちさへおもひやらるゝことは、げにいとかぎりなき御ことのね也〕

女子の箏をよく引得たるは、五聲あやありて、糸のいろつや各別「に聞ゆる物」なり。手やはらかにて、よく糸にしなぶ故歟。賤はしきやうに聞ゆるあり。此故にいまめかしうといへるなるべし。ことさら位高き人なれは、けだかき音もそひて、たとへんかたなかるべし

○これはあくまでひきすまし、心にくゝねたき音ぞ「まされる」

明石上の躰人の手本となるべ「き事共也」し。少し心得たる事さへ人に所望せられては、もて出やすき物なるに、二とせなれし源氏につひに聞せ奉らず。別のきはに源氏にも父にも催されて、涙のとゞめがたき紛らはしに、少し引ならしたるはやむことを得ざるなり。又なきものにいひし薄雲、女院よりも上手なれば、其世にはならびなきなり（ぶ人有べからず）。調子にも達しさとき躰なり。忍びやかにしらぶるとは微音に（は）糸合の聞ゆるか聞えざるほどにしらぶることなり。調子さとく功なくてはなりがたし。但し常の心がけならはしにてなる物なり。生得聲にさとき人も心がけならはねば（ければ）、ならざる物なり。ことに女のしらべは忍びやかなるべきことなり。むかしは笙の調子を吹出す宮の竹を聞とりて、やがて調子のうちにびは箏をしらべたる「と」なり

○「あくまでひきすましたり」

「評。年月の稽古の労きこええ、十分とゝのほりたる音なるべし」

ねたき音ぞまされる

箏の群芸すぐれておなじすがゝき小爪なれども、各別に聞ゆ（えて）となり「人の及ぶ「○たき」き音なるべし」

蕃山抄ハ此處ニ須磨明石アリ。底本ハ巻末ニアリ

○耳なれ給〔は御〕ぬ〔手御〕

今は絶(た)ぬる手たどむかしはあまた有て、家々に秘したる手など多く有たるとみえたり。さやうの事ども〔は〕秘し失たり。涙のまぎれにかきならし(らはしきに)たれども、猶忍びがたければ、ひきさしたるを、かほどまであらん事ともおぼさで、月ごろしのび給はざるは一入なごり多かるべし

○〔いまやおもひ叶ふとこそたのみ聞えつれ、心ぐるしきことをも物の始にみるかなと、なげくを見るにも、いとおしければ、いとゞぼけられて

評。人間世萬事かくの如し。花にさかぬ間待くらして、咲たるよとうれしく思へば、盛すくなきのみならず、風雨などにて心しづかに見る目もなくて、散すぐこ(ママ)〔〇るヵ〕がごとし。又心しづかにみるべき日有(ある)にも、油斷してむなしく打過、後悔する事多きもの也〕

○〔おぼしいでたる御けしき、たゞならずやみたてまつり給らん。わざとならず身をばおもはずなど

評。あまり心うつく敷きか(ママ)ざるやうなるも、事たらはず。又くね〳〵しくねたみうらむるも、和なかるべし。紫上は源氏を大切におもふ心より、とがめぬにもあらず。又和をもやぶらず。さればうらむるによりて、いよ〳〵したしみまさるやう也。是詩歌の徳なり〕

澪漂

本文ヲ脱ス今(ニ)(ニ)シテ假ニ補フ

(二さやかにみえ給ひし夢の丶ち、院のみかどの御ことを心にかけ聞え給て、いかでかのしづみ給らんつみ、すくひたてまつることをせんと(二)

鬼神の事はなきと窮てみれば、靈妙なみすべからざる事あり、〔有〕と思ひてみれば、しるしなきこと多し。此故に聖人は不測との給へり。〔不測にてよくすみたる事なれ共明らかならざるゆへ、或は有とし或はなしとす。かたよるは心にまよひある故也。〕子の難にあはむとする時、親の神靈の告たるためし、むかしも今も自然にある事なり。〔さ〕あるかとみれば又かさねてはなし。不測〔なる故〕なり。源氏の沈困きはまりて、至誠に父帝を思ひ給ふ故に、〔さやかに〕夢にみえ給ふなるべし。罪に沈みてなど帝の宣ひしことは、眼病空花をみるなり

(二さやうのこと繁き職には堪へずなむ、とて、致仕の大臣攝政し給ふべきよし、讓り聞え給ふを(二)

〔評。執政の器にあらずと謙讓し給て、葵上の父大臣を攝政にしたまふ也〕

上幼主にて、政を心にまかすべき人のみづから權をとらんよりは、我をそむかぬ人の、しかも勞ありし人にとらしめて、うしろみしたらんはよかるべし。よき事はうちまかせはからはせ、いかゞと思ふ事は議論し〔をくはへ〕、外にたてみることは心虛にて明かた〔るものた〕り。自らあづかりては〔心實して〕見えがたき事あり。〔又後見して議論を加ふる人もなからんにはあやうかるべし。〕葵上の父大臣は先代に功ありし人なり。〔源氏の親かたながら〕源氏にはそむかぬ人なれば、一段とよろしき事也

〇うけひき

致仕の大臣攝政の事承引なきなり。實病にあらざる事は我人しれり。世のみだりがはしさに謫居といへば、直過て害臣の非をあらはす事しのびがたき故に、病といへる事はことばなり。〔緣によりて威勢あるを、時を得たると悅びて、一旦は我儘にふるまへ共、天道にも叶はず、人情にもとれれば、終にはとげがたし。むかしをしのぶ時至れば、謫居の人出世するもの也〕

○二條院にも

〔評。紫上の方にも也。源氏のめしつかひし人々を、すまのうつろひに紫上へつけられた、そのまゝたらぬを、ことさらあはれをかけ給ふ也。時を失ひたる時はさんじ、さかふる時は集る。凡情の習也。しかるをしづめるをみはなたずして年月をへたるは、義理の本心を失ざる也。忠臣貞女のたぐひ也〕

是人情をよく知給へり。凡人は我身富貴なれば、氏筋ある人のおちぶれともいはず、我に隨ふべきやうに思へり。心には口おしと思へども、わらびを折、首陽にともなひがたければ、時にしたがひて手を屈し、膝をかゞむるものなり。源氏は皇子なれば、心おごりし給ふとも、人も咎べからず。さるにかくあれたる所にもみづから立より、心中を思ひやりて、たのみ給へる事は尤奇特なり。古今いやしき者のなりのぼりたる人は無禮なり。〔本より上らうは、かへりて禮儀ふかきものなり〕

〔大后は憂きものは世なりけりと思しなげく。大臣は事に觸れていと恥かしげに仕うまつり、心よせ聞え給ふもなかなかいとほしげなるを、世の人も安からず聞えたり〕

恩にてあだを報ふといへるも猶心あり。人にめいわくさする心あれば、外は恩を以てすれども、内は人の心を責る所あり。孔子は徳を以て徳に報ひ、直を以て怨を報との給へり。是は心なし。源氏先朝の大后に事る道を以てうしろみ給ふは直也。「私の遺恨を思ひてすべきにあらず。」後白川院の小松の内府にあだを恩にて報ぜられしと宣ひしも、重盛の心はしからじ。父入道を教訓せられしは、道理の至極なれば是直也。凡人は道理を外にして、氣味のよき事を好むものなれば、源氏の「今」時を得給ひし折から、大后につらくあたり給へかしと、もどかしく思ふなり

○兵部卿のみこ

紫上の父なり

須磨へ源氏のうつろひの時、兵部卿宮は世間の聞えをはゞかり給ひて、音づれ給はざりしなり。弘徽殿大后がたをはゞかりて、外人のおとづれせざるは、自他の爲あしき事なれば尤なり。したしき人をば人情のゆるす所あれば、兵部卿はとぶらひ給ひても、源氏の御爲、宮の御ため苦しかるまじきに、はゞかり給ひしは聞えざる事なり。したしければ源氏の恨みもさ有べき事なり。兵部卿の宮は心うつくしき人なれば、又心をおこして義理を立る所「は」なきなり。須磨のうつろひを問給ふ程の心「有人」ならば、紫上をばとられ給はじ。繼母の姦も出すとなるまじきなり。「たとひ紫上をぬすみ出し給ふ共、源氏も面目なき事有べし。無事に取得給ふは、兵部卿のなだらかなる心ゆへなれば、哀へをも又問れざるなり。其人を以其人を見ればうらみすくなし。念頭にてこそ有まじけれ、大かたの事は人の目に立ざる程に有べき事ならんか」

（あそび共のつどひまいれるも、上達部ときこゆれど、わかやかにとこのましげなるはみなめとゞめ給ふべかめり。……をのが心をやがてよしめきあへるもうとましうおぼしけり）

世に鶏冠（頭）花をもてあそぶものあり。色の美しきばかりにて随分いやしき花なれば〔見所なし。〕遊女も心といひ、妹といひいやしき物なり。〔すぐれたりといふも〕鶏冠（頭）のごくなるべし。〔遊女〕傀儡おなじ物なり。〔舟中には遊女といひ、陸地には傀儡といふ。旅人のため也。〕洛中におく事は下々の若き者妻を持べき勢なく、倫を乱らん（さ）とするを防がむために置たるものとみえたり（いへり）。後にはいろ／＼かざりをつけ、藝能をならはして、富貴の人の妻子持たる者（有者△）のもてあそびとなれり。〔或は大病をうけ一生〕人にうとまれ、或は人をそこなひ、様々悪事のなかだちとなれり

〔蓬生〕

○おやの御かげとまりたる

〔おもしろくあはれにかきなせり。〕今もおとろへたる家屋敷、〔富貴の人望む事也。〕金銀にめでゝ賣はなつ者多し。又其身の勢によりて、はなさでかなはざる事もあるべけれども、大かたは舊宅をうりて、行末のよき者まれなり。おとろへながらも親の屋敷守りて、忍び過せばとかく一生はおくる者なり。賣て一旦價をとり、よき様なれども、頓て其直なくなりて後悔するものなり。末つむ孝心にてはなち給はざるゆゑ〔に〕孝をも得給へり

○〔わざと好しからねど

評。男の方などの文の事にはあらず、女どちの事也。文かよはしなど女どちもあまり切々あるはこのまぬ事也。されどかやうのつれ〴〵なるあたりは、くるしからぬあたりの文かよはしなど有べきを、ちゝ宮のもてかしづき給ひし時の心をうしなはで、人にもうとくおはすると也」

○もとよりありつきたる

末つむのおばの事をいはんとて、まづ世にあるなみ〳〵の人の事をいへり。さやうのなみ〳〵の人とは、受領などの品の人の、世中ゆたかになどあるは、中〳〵位をも身をもちあげんと、上﨟しき事を好み〔まねび〕、心をもたつる事あり。此末摘花のをば君などは、心のおとりなる故に、やん事なき筋ながら、かやうの受領などの妻になりて、心も〔なを〳〵しく〕下すしきをかくいへり

〔さる藪原に年へ給ふ人を、大將殿もやむごとなくしも思ひ聞え給はじなど怨じうけひけり……更に思ひ出で聞え給ふ氣色見えで、月日經ぬ〕

人跡などもさせる事なき所も、よき人のすめる跡をばなつかしく人の思ひ、めなれたる岩木も一かどあるやうなり。あしき人の住たる所は風景よくてもおもひなしよからず。されば此おば君も、人がらよくけだかく上﨟しくば、受領の妻になり給ふとも、おしき事なり〔な〕といひて、人おしむべし。よからぬゆへ此譏有成べし。いにしへ男女の縁に位のたづみはなかりしなり。男女の生付相應に、尊き家の女もいやしきにくだれり。歸京〔の〕ありても、月日ふる迄問給はぬは、忘はて給ふなり。末摘の心中なり

〔〇蕃山抄云。本文を缺くこと流布本に同じ。按に、蓬生卷末の方にて、源氏落着の末摘花を訪れ、後二條の東院に引取りしことに當する評語にて何れの句と指定し難しト云へり」

貞をみすつるは不義の心にて「は」、また榮えに付て媚へつらふを恥とも思はぬものなり。「年寒くして松柏をしる」、平生はきのみかはりなきやうなれども、心に義理の守りある人は、時にあひてしらるゝなり。貞をみ捨ず、權勢にも禮義の往來の外は求なし。好色の人は色の爲に尋よる事なれば、あしきとみては二度かへりみざるなり。好色「なのめならん」下ざまの人はうとむべき末つむを、源氏の「好色にて」みすて給はざる「は」、慈仁の深き故なり。末摘富有の人ならば、かく迄はかへりみ給はじを、きはめて貧しき故なり。万悪一慈に不勝といへり。源氏の末の榮え給ふ事むべなり

關屋

〔〇蕃山抄云。本文を缺くこと流布本に同じ。按に、「昔童にていと睦まじうらうたき者にし給ひしかば、爵など得てまで云々」より「などて少しも世に從ふ心をつかひけむ、など思ひ出でける」までの評語ならん」ト云へり」

源氏罰をあさくして功をおもくし給ふなり

水いたりて清ば魚なし。「人至て察すれば德なし」。凡夫は大かた不届なる者がちなり。失をとがめては世に人有がたし。其すてられたる者已があしき事はいはで、かへりて其人を謗り「悪口し」仇となるものなり。凡情は如斯物と思ひて、むかしにかはらぬやうにし給ひしは奇特なり。又我によきものをすゝめて位祿をますは私なり。公儀の位祿は公儀の奉公の功によるべければ、我によきあしきにはよるべからず。「我に心入あるものには、私の物を以て其志を報ずべし。又奉公の功ある者、人によき者も我がたの者とてすゝめざるも私也」

后、女御などにしては綸を好ませ給ふ事さも有べし。天子にはあまりやわらか過たり　王威うつりて武家の天下となるべき前表なり。淸盛賴朝も此漸なくては奪べからず。一朝一夕の故にあらず。平氏の亡たるも、賴朝の末三代にて絶たるも、尊氏の子孫中比より威のおとろへたるも、皆風流に過たる故なり。鬼神の福善禍淫をみるべし。皆風流に過て威大臣にうつれば、末の亡をはゞからずして、君に威をかへしては、我威なくなりて自由ならざらん事を憎み、いよ〳〵君をば結構に馳走過て、下の事を知り給はざるやうにする〔事〕なり。唐日本ともに古今の凡情なり

〇一、才がくといふ者

〔才がくを世におもくする故にや、壽命と幸と相兼たるはまれなると也〕

才學のことはり面白し。〔玉みがゝざれば器と成がたし。〕人學ばざれば道をしらず。才は天質なり。不才の人は學びて已が徳をとり、徳を〔知のみ也〕。才ある人は天下國家の用をなす者なり。生れ付才ありても學ばざれば其事業いやし。故に才學を兼たるを尊ぶなり。〔才知ある人學をよくすれば、古今の才淸時變に達す。政道に重ずる處也。〕大かた才學兼たる人は難に逢がちにて、幸を得る事まれなり。氣質靈明なる故に、いのちも長からざる人多し

〇ほんさいのかた〴〵の

〔可文才ばかりにかぎらず、詩書糸楽いづれもなるべし。可世をまつりごつ事をば能々をしへ給也〕

是は本才か、然らば政にしたがふ才たるべし。文才に器用なる者は、本才にうとき事多分也。〕本才ある人は又文才に

可は河海抄、岸は花抄の略

もすぐれざる者多し。本才文學かねたるはまれなり。本才は人情時變に通ずる才なり。國天下を治〔す〕る第一なれば、本才といふなるべし。文才〔等の〕藝は一能なり。〔本才の人に隨ひて用をなすべし〕

松風

○なにばかりのおぼえなりとて

〔心もちゐしかるべき人也〕

惣じて今の身の位をわきまへず、先祖の富貴也し事などいひて、身を高ぶるはみにくき者なり。身はへり下り、心はいやしからねば、よき筋の人なるにとて、とりたてたき心出來るは人情なり。明石の上是にかなへり

○おくりにだにと〔せちにのたまへど詮〕

〔だにの字、入道は二度都へのぼるべき人ならず。又明石の上の下らんこともかなはざれば也〕

入道が二度の都の地に入ざる事は其義あり。尼公の夫婦はなれて、都の住居は有まじき〔事〕か。當分のおくり又は折々の登りはさも有べし。明石上の下らるゝ事叶はざる事は公儀なり。然れ共道ある世ならば、折々老父のみまひに下り給ふ事あるべし。文王の后妃も女事のつとめ成就しては、年々國をへだてゝ父母を歸寧し給へり。人生第一の孝行だになりがたきは、公儀重きに過たり。君重きに過ればかならず下に遠し。下に遠ければ君威かへりて輕くなりて、終に國天下を失ふ者也。〔是を道なき世といふ事、知ざる事久し〕

薄雲

姫君をとりはなち給ひて、やう〳〵明石上の心中をおもひ知給へり。なみ〳〵の人は其子をさへいたわり思ふ心はなきを、奇特の事なり。文王の后妃はあまたの女中を子のごとくにし給ひ、「我に心をおく氣づかひなく」、たらざる（足ず）をたすけ、不及を補ひ、衣服などをもそれ〳〵には（その人に口に）へあるやうに、「好みふかく」いたはり給ひしかば、宮女は皆父母のごとく「うやまひ」したしび（み）たり。自らは事そぎあらへる衣をつけ給へども、女しく愛敬ふかく、けだかき容躰ありしとなり。是を以て聖女といへり。道々しくかどある金（玉）言妙語は一つもなし。もし「男」子の賢聖のごとくたらば、聖女とはいふべからず。聖人は人倫の至なり。故に男は男しく、女は女しきなり。「今は」琵琶箏も心にいらずして稽古もしめやかならず。数のみ覺ゆるもあり。もよほされて役儀のやうにするもあり。明石の上のやうに心に入てたのしみに引人まれなり。此故に上手有がたし

〔〇春山抄云、本文を除くことと流布本に同じ。按に、「かしこき御身の程と聞ゆる中にも、御心ばへなどの」より「功德の方とても勤けるにより給て云云これはさやうなる事なく」の邊の評語なり。トアリ〕

威勢にまかせ權門だてするをいへり。此女院は其身權威をふるひ給はず、（ざると也）牝鷄の朝するほどとそなけれ、國母王侯の母公、めのとなどに至て、我子の代となれば、威勢にほこり、世にむつかしくいひあつかはるゝ事ある者なり。然るに此女院は世人に苦辛（勞）をかけらるまじき爲なり。「其頃人の我も我もとゝりはやしたる佛事をさへ、人目に立べき様にし給ざる事も奇特也」。美質の人とみえたり。道有時に生れ給はゞ、賢女ともいはれ給ふべき人がらなり

乙女

○藤衣きしは

除服の御祓〔の事〕なり。藤衣を着たるは昨日今日のやうなるに、月日のはやくたちて、今日除服あるこゝふとなり。古人のあつき情に相應せり。末の世のうすきにならひたる人は、喪の間一年を久しく思ひて、除服をまちかぬるに、ぬぎすつるを殘り多く思ふは孝心の至なり。此齋院は美質の人なるに、としごろ神事に心をすまし、しづかに居給ひぬれば、いよ〳〵古風にかなへるなるべし。〔たかき家の子として世間の事をあげての給ふ也。位高き家に生れ、官位にのぼり富貴になりぬれば、學問など心ざしあるはなしと也〕

〔○蕃山抄云、本文を缺くこと流布本に同じ。按に、「みづからは九重の内に生ひ出で侍りて、世の中の有様も知り侍らず云云」の評語なりトあり〕

ほど〳〵につけて心のまゝにおひたちぬる者は、文武ともに藝能に心をかけず、文盲無智にして成人する者多し。賤しき家に生れたる者には、藝能にも長じ、才智かしこきあり。是は我身の程を口おしく思ひ、よき事を學びて人らしくなりたく思ふ故なり。後〔世〕には筋よき人の子も無才なれば事にあづからず、次第におとり行、賤〔き〕者も才力有者(あれば)なりあがれり。賤者は藝能〔才知〕あれども、本利欲の心より長じたる者なれば、人〔がら〕よりはじめ、家風高事よろしからざるなり。學校の本は尊(高)き人の家の子をくださず、おひたちをよくせんとの事なり

○時ゝつりさるべき人に

〔時代かはり權威有し親などにおくれたる時、けぢめ見ゆる也〕

此等は今もある事なり。武家などにも親の器量あり、時のおぼえ位祿もふそくなき家の子の、親のためにもてかしづかるるをばしらで、いつもかく有べきと〔事のやうに〕思ひ、學文才藝のつとめもなく、〔心の儘に過行ほどに〕、親におくれて後、おもひの外に人にあなどりおとしめらるゝ〔有。〕主君もつひえなる者〔のやう〕に思ひはなるれば、立のきなどして〔も〕、本より〔無能〕無才なれば〔何方に〕身を立べきやう〔も〕なく、〔後には〕飢に及者も有〔事也〕

○こゝろみさせ給ふ

先習禮し給ふなり。是は寮試うけさせんとて、まづ習禮し給ふ事をいへり。學生を大學寮にて試るを寮試と云。試〔に〕は史記をよましむるなり。能讀得たる人を擬文章生に補す。擬進士ともいふ〔なり〕。凡儒業つとむる人の次第、道をふるには先補大學生、灯燭料を給はりて、九年の間螢雪の勤をなして功をつみて後、大學寮にて試らる、史記をよましめて難義をとふ。五條の中に三條に通ずるを及第とす。即文章得業生に補す。さらに橡樟七年といひて、樟の木は七年を經れば用に立にたとへて、七年の間學問して其後式部省にて課試をとぐ。先詩賦を作る、次に策の文をかく、昔是に秀才進士の二科有。秀才をば方略と云。方略は無端の大事といふ心なり。獻策の時問題に答てかくことと究めたる大事なり。進士をば時務策と云。書にみえたり。今の世には文章得業生二人あり。秀才のためにはじめより給料を給ひて學問したる人なり。此〔は〕方略の宣旨を下されて式部省にて課試せらるゝなり。又入學の衆の中に器ある時、博士是を舉すれば、大學寮にて是を試て、又史記を讀しむ。及第の人を擬文章生に補す。〔かず〕二十人有。是を式部省にて試て、詩若くは賦を作らしむ。及第の人を文章生に補す。是を進士と〔も〕いへり。昔は御前にて勅題を下されて試

らるゝ事有。文章生に補して後さらに方略の宣旨を蒙りて課試をとぐるも有（事）。進士は時務策たりといへども、方略の宣旨を蒙れば方略の試なり。文章生の方略を蒙りて献策する事は、當職の時と又外國の掾になりたる時と散位の時とに蒙るなり。京官に任じて後は献策せざるならひなり。或は又文章生、さらに得業生に轉じて課試の例もあり。或は文章生にとゞまりて、方略の式に及ざる事もあり。源氏夕霧の君は今此例なり。朱雀院の行幸の次でに、御前試に詩を作りて及第し給ひて、進士に成て頓て侍從の官に任じたり

聖代の學校の躰にはあらず。漢唐の徳おとろへ、文もてあそびし（のみにて）時の風なり。それだに日本にて盛に取用られしは奇特なり。此〔時〕節もし上古學校の政教をうつしたらば、今に至りて君子の風は有べきを（也）、聖代には大學小學ともに轉樂弓馬書數の六藝を教たりとみえたり。〔小學にしては藝を學びて藝をなし、大學にては藝に遊て道德を養ひ修めたるもの也。おなじ六藝にても、教學ともに其品はかはれる也〕

○御覽じ得る所有て

源氏君（の）みしり給ふ所ありて師につけられたるなり。質直に古風なる故、當世には叶はざるなるべし。世をはなるべき出家さへ、時にもてははやさるゝは、時にあはする心あり。とは〳〵しく人そひなきに、誠の出家はある事なり。〔とやうなる僧心内は却て慈悲なる者也。儒者出家共にかやうの人師にしてはよかるべき〕

○むかしおぼえて大學の

只今源氏の御興行にて夕霧の入學し給ふ故に、〔一入さかへて我も〳〵と〕志す人多しとなり。〔かみなかしもは上中下

也。」何のげいも勝れたる上手には「などあれば」人多く隨ひ學ぶ者なり。たとひ上たる人、文學藝術おこしたく思ひても、師達者ならずしては「學ぶ者功なければ」成がたし「きもの也」。此故に古は勝れたる者の出來る様に文武ともに有しなり。「源氏文道の藝器用にてすぐれたる所有し故に、再興せしなるべし」

〔○華山抄云、本文缺くこと流布本に同じ。按に、「世の中の事どもまつりごち給ふべく讓り聞え給ふ」より「公事にはかしこくなむ」に至る評語なり」

此徳あれば此病あり。かどありてなだらかならぬは病なければども、須磨のおちめに身をすてゝとはれしは義有。なり(三)かどなき人は又「斯様の」義「理」にうとし。き者也「源氏もそのおりの志を忘れ給はずば、事にふれて報禮有べき義也」

〔○華山抄云、原流布本に同じく前條に續けたれ共、本文を脱したる別の評語なり。按に「秋風樂にかき合はせて唱歌し給へる聲いと面白ければ」の評なるべし」

今樂人の譜を唱ふるは、笙篳の覺の爲ばかりなれば、音にかなはずして糸にあはず。さればば絃引にくきなり。絃に委き堂上の人々の唱哥は、音に叶て「ひく」よく糸にうつり、絃も引よきなり。笙の譜も笛ひちりきの甲乙、いろうつりによくあふ様にいへば面白し。是を唱哥の譜といひたるにや、日本へわたりたる樂は皆聲有て辭なければ、別に有べきやうはなし」。樂人は大かた唱哥にはふしをきらふなり。これふし息にも手にもうつりて、管しだるゝなる故なり。尤ふし過たるはあしけれども、音に叶はざるは一向いやしきなり

〔○華山抄云。本本を缺くこと流布本に同じ。按に、「人の御宿世々々のいと定めがたく」の評語歟」

人を擧、進退などするも、人力のやうなれども、畢竟天命あり、あがるべき命ある人をあげ、廢すべき命ある人を退けては人力と思ふなり。福命有人は一旦おとしても終によくなるもの也。威勢に任せて一旦あげてもとげざるあり。「凡人は命を知ざる故に、威勢ある時は我儘にふるまひ、衰ればうらむる也」

〔○華山抄云。本文を缺くこと流布本に同じ。按に「命長くてかゝる世の末を見る事と取返さまほしうよろづを思しむつかりける」

世間に浪人ひがみ隱居ひがみとて、たゞさへ凡人はひがみ心出來て腹立る事あるものなり。ことに大后盛世の時、道理

の評語缺〕

の外に心のまゝにふるまひ給へば、必しも大后をおし付るとなくとも、道理のまゝならば、我にあしきと思ひ給ふべし。世主國君ともに隱居すれば、天命にて威おち、諸人の思ひ入ちがふものなり。其勢をしらざれば嫉妬おほし。君子は世の勢ひをしりて、かく有事とおもふ故にとがむる事なし

〔○蕃山抄云、本條流布本なし。本文を缺く。按に「彼岸の頃ほひ渡り給ふ」とある「彼岸」の說明なりトアリ〕

〔評。仲春・仲秋・日卯より出て酉に入を時正とす。此時晝夜ひとしけれ共、時計を以てはかれば猶日ながし。陽數なればなり也。時正を過て晝夜共數ひとしき事有。陰陽敵する故に時正とせず。日の少し長き時を以て時正とす。君臣夫婦の則をしめす也。近年時正の名を取失ひ、佛家の詞によりて彼岸といへり〕

玉鬘

〔○蕃山抄云、本文を缺くこと流布本に同じ。按に「容貌はいとかくめでたく淸げながら、田舍びこちごちしうおはせましかば、いかに玉の瑕ならまし」の評語なりトアリ〕

惣じて人は利發にもていでたるは、人がらよろしからざるなり。とに女はおんびんならざるはみぐるしく〔もの也。とに〕女は陰なり。地なり。靜なるを性とす、されば男子よりも一しほ驕をいましむる事なり。〔驕りて後はいやしきにながるゝもの也〕。心は利發にてもさやうにみえず。つたなきやうなるをよしとす〔る也。〕かたちきよげなれど夷中そだちたる人は、幽深玄遠の女德ありがたし。〔物はぢしたるもかたくなしきやう也。さあらされればもていでゝ女しからず。〕今は都そだちといひて、風躰はよけれども、人にかくるゝ所うすし。夷中人ははづる心より人にかくるゝ事ふかければ、女德のかた〔に〕はかへりて夷中そだちや增るべし。〔風俗のくだれる也〕

〔○萬山抄云、流布本にては前條に續けたなれど、按に本條は「すべて女は」より「たゞ心のすぢを漂はしからずもて靜めおきて、なだらかならむのみなむ、目安かるべかりける」までの評語なりトアリ」女嫁しては好色のかたにいざなはれず、一命のはたし所と思ひて、かたく貞心を守りて、たゞよはさゞる人の妻「たる」第一とするなり。〔他の不足はありとも、こゝにをきて夫にもうしろやすくおもはるゝならば、賢女たるべし」

初音

さすがにうちとけて

〔評。萬一にいふごとく、きらびやかなる物から人の心もおかれず、一家の上下義氣和風の中にやしなはれて、下々に迄氣づかひなく、人心和してうちとけやすらかなる也。人主けはしくてはかくのごとくは有まじき也」人主自然に威有て仁愛なれば、家風ゆるやかにゆたかなるものなり。和ばかりにては作法みだりがはしくなりて、和を「も」とげず、かへりてゆたかにもなき物なり〔○萬山抄云、流布本亦本文なし。按に「年立かへる朝の空の氣色」以下の評語なりトアリ」寔に此時節、一時千金、寸陰をおしむべき時なるべし。其世にすむ人はさもおもはぬとみえたり。「心を用ひざる故也。」今も人々たのしむべき天の時を空しくする事多し○〔○萬山抄云、流布本亦本文なし。按に「心なき人の列にて云云」の評語歟トアリ」浮きに心かろく、又心みじかく、いら〳〵しくては物の成就しうちつく事はなき物なり。心ながらでは、久しくたもたざるものなり○〔○萬山抄云、流布本亦本文なし。按に「細やかなる御調度はいとしも整ひ給はぬを、さる方に物清らに住なし給へり」の評語なりトアリ」家居は事だにとゝのふべくば、かろくみどころありて住なしたるをよしとす。屋の結構なるは、氣づもりて養生にあしゝといへり。柱ふとからず、戸かずのみゆるを養生には好めり。〔「心なき」人

の家居、ことゞゝしくなして、道具とゝのほり過たるは、うちみるより主の心淺く思はるゝものなり〇〔〇蕃山抄云、此布亦本本文なし。按に、「水驛にて事ぞがせ給ふべきを」の「水驛」の説明なりトアリ〕〔案、水むまやとは男踏歌にいひつたへたる事なり。踏哥の人を饗應するにつきて、酒或は湯づけなどを用るを水むまやといふ。事をそぎて簡にする心なり。又飯むまやとも、わらむまやともいふは、ひきつくろひてもてなすなり。踏哥の人の所々をめぐるを驛路にたとへ、其驛に〔は馬をはせてとほれば〕水ばかりを人ものみ、馬にもかふは、水むまやといふ。又人は飯を食し、馬にはわらなど〔を〕かへば、いひ驛、わらむまやといふがごとく、酒肴ばかりを〔用るを〕水むまやと〔いひ、饗膳を用るをば飯むまやと〕名付た〔け侍るな〕り。〔又〕厩牧令〔に水路をば船をもてわたる、これ〕の水驛といふ。〔今〕その心にてはなきたり

〇〔すく〳〵しき

評。天下輔佐の道、政道の方をのみつとめさせて、かやうの遊興のかたなどをば、心がけさせじと思ひしと也

我身の賢をば願はずして、子は孝子ならん事を思ひ、臣は忠臣ならんことを思ふは凡情也。父賢を願て誠あらば、子は十人に一人も賢なるべし。父不賢にしては、子に求むるとも得がたかるべし。君臣も又しかり〕

胡蝶 〔此巻底本シナ〕

〔〇蕃山抄云、本文を缺く。按に「亀の上の山もたづねじ船のうちに老せぬ名をばこゝに残さむ」の上の句の「亀の上の山」即蓬萊山の説明ならんトアリ〕

〔評。蓬萊。仙宮の事は皆寓言也。佛家に極樂淨土といへるにおなじ。人間世の樂を極ても、悟道の心樂には不及事なれば、人間世の不及事をさま〴〵いひあつめて、本心の樂を形容したるもの也。不老不死と云も、本心の天地にきさだ

ら、天地におくれて生々不息の道理をいへり。藥とは心法也。死生を離たる心法は不死の藥也。氣を養ひて長生し、氣をねりて飛行したる者あれ共、それは地仙の術とて道家にもいやしめり。天仙の心法は形色をたゝず、飛行を事とせず。形色を忘るゝを長生とし、心の滯なきを飛行とせり。唯常人の何の奇特もなき所也。願なく慾なく迷なくして、靜なる心を至樂とす。俗樂は思ふまゝにきはむる程、盛衰の變ふかし。蓬萊の蓬のしげりたる草ふかきかげなるべし。何の作意もなき所には盛衰の悲哀なし。是を常世といひ仙宮と云。七年夜雨きかざりし事を悔たりしも、此心にかよへり。

螢

〔○湖山抄云、流布本亦本文なし。按に「人樣のわらゝかに、氣近くものし給へば、いたくまめだち心し給へれど、なほをかしく愛敬づきたるけはひ見え給へば」の評語なりトアリ〕

世に今貞女といふは、心けはしく女しからぬ所多し。是は貞正にはあらず。又愛敬ありてみゆるは、おくそこもなく和かにてたのもしげなし。玉かづらは愛敬ありて、心のそこたゞよはからず。是誠の貞女なり。〔女の手本なるべし〕

るべし

〔○湖山抄云、流布本亦本文なし。按に「げに僞り馴れたる人や、樣々にさも酌み侍らむ」の評語なりトアリ〕

思じて人の僞り〔はかる事ある〕を、よく斟辨して推察するを〔ば〕、我ながらかしこき事のやうに思へり。こゝにてみれば、かしこきにはあらで、我心僞りなき故なり。我正路なるにはあらざるべし。然らば常に僞りはかるべきやうなれども、さにはあらず。無情者不ㇾ得ㇾ盡二其辭一といへり。〔我にまことあらば、人の僞る心あるべからず〕日本紀などはたゞかたそばぞかしといへる、日本紀を何にもあらぬやうに云なして、玉かづらに弄し給へるなり。但日本紀人皇紀には天下の大略〔ばか

り」をしるべし。神代上下には日本の道を顯はしたる物なれども、面授口決さま〴〵の神秘多く「て、たやすく」女の入たつべき道にはあらず。されば人情時變のこまやかなる事、女の心もちひになるとは、かへりてあるまじきほどに、日本紀といへども此物語に及ばざる所有べし。惣じて此物語は「一に」女の敎に書たる書なり。緋木にも三史五經の道〳〵しきかたを明かにさとりあかさむこそあいぎやうなからめと云云。「などかは女といはんからに、世にある事のおほやけ私しにつけて、むげにしらずいたらずしもあらむ。わざと習ひまねばずとも、すこしもかどあらん人の耳にも目にもとまること、じねんにおほかるべしといへり。」その比清少納言などいひしは、博學多識にして、歴々の學士などに口あかすべくもあらざるなり。されば女どちの物語にも、おのづから古語をつかひなど、女しからず、こはゞ〳〵しき事のみなり。それをきらはしく思ひて、三史五經に達せん事を戒たり。さりとて又人情事變をしらさらむも口おしければ、敎へんために此物語をあらはして、女の上の事變をつくし、心もちひをさま〴〵敎たるなり。一部の趣意皆女を戒しむるに有り。女のうへ第一の守りは嫉妬にあり。それによりて此物語、夫はかならず色にふける者に「し」て、女のかたに堪忍する事を本としたり。されば源氏の仁厚なるも、博達儒士の鬚黑夕霧も、佛道を專としたる薫も、ともに色にみだれ、上天子より右馬頭藤式部「□」にいたる」迄、一婦をのみは守らざる事「を」さま〴〵しるし「つくし」てみせたり

常夏

〔○蒼山抄云、本條流布本なし。本文を缺く。按に「うはべはいときよらなる御中の、昔より流石に隙ありけるに」の評語なるべしトアリ〕

〵評。才學威勢等何事につけても、我に相ならぶ人とはあらそひある事凡情也。他人にはおとなしき人も君子の心地にいたらざれば、此まよひはまぬかれず。

〔○蒼山抄云、流布本亦本文なし。按に「女は常に心づかひして守りたらむなむよかるべき」以下内大臣雲居雁に對する教訓の評語なるべしトアリ〕

男女とも子のおしへは家風根本なり。家風は主の德を本として、能人のあつまるにあり、其上に心だて身もちなどのしつけは有べし き事也

篝火

善惡のけじめきは〳〵しきは、よろしからざることにや。よろづ急なる事は、おほくは後悔あるものなり。但我身の惡をさり、善に移りぬれば、滯なく速なるをよしとす。人を用捨する事などは、よく〳〵考有べき事なり

〔○蒼山抄云、流布本亦本文なし。按に「いと際々しう物し給ふあまりに、深き心をも尋ねずもて出でゝ心にも協はねば、かくはしたなきなるべし。よろづの事もてなしがらにこそなだらかなるものなめれ」の評語なりトアリ〕

野分

○世のありさまに〔にたり〕

春のおとゞにて花をみては、秋も及ぶまじき樣にいひ、又たゞ今は春を思ひすてたる有様、世人の時にしたがひ勢にうつる鉢に似たるとなり。〵又時にしたがひ勢にうつるにてはなく、春を悦び秋に感ずるは天下の時を樂める也。是賢者の

事也。又春秋の時を得る事、所によりてまさる事有。吉野にて春にあへるは、春の色一入也。鳥のさへずりもおもしろし。吉野程にこそなけれど、梅櫻など春色をふくみたる、木どもおほきやどの春ははへあるもの也。明石にて秋に逢たるは、月の光こと所にまさりて、心もすめる様也。扨は秋の野の草〴〵、虫の音あはれなるさびしき宿の月は、市井にかわりて感深し。君子の富貴を得て富貴を行ひ、人と共にたのしめるは、天爵人爵相應の常也。春の花にあへるが如し。秋の紅葉は見ごとなれ共衰色なり。君子の患難に逢て患難を行ふは、富貴の道を行よりも感ふかく、見所有がごとし。春は溫暖の氣をたのしみ、花をもてあそび、秋は月を見紅葉を愛し、野邊の千種、虫の音鴈の聲までも、逢にしたがひてもてあそぶべし。秋に心をよするものは春をおごれりといふも、時と共に天を樂(ママ)はあらざるか

○一、かくなんなきことは

評。難のなき人はまれなると也。私なん詞字にても有べきか、如此なき事はかたし也。才有人は德なく、德ある人は才□(不カ)足なるといふ事にても有べき也

世の人を見るに小心に懇切なる方はなけれ共、父母兄弟親類に至迄、大やうにはごくみ養ふ人有。其人の才德の餘慶なれば、勞せずしてしかり。又人をはごくむ事はならざれ共、懇切によくつかふる人有。人情は養ひの恩は尋常となりて、忘れて大やうなるをうらみ、小心ある人には心よせある物也。兩樣共にかねたる人もあれども、それはまれなる事也。內大臣は大やうなる方也。大身なれば養の事はいふに不及、懇切より外の功有べからず。すぐれて孝子といはるゝほどにこそならず共、今少しは念頭にあるべき事也。敎學明らかならざる時は、及べき人も及ざるおほし

評。〔○雅山抄云、本條流布本なし。本文を缺く。按に「女の御様げに兄弟といふとも、少し立ちのきて異腹ぞかしなど思はゞは、などか心過ちもせざらむと覺ゆ」の評語なり。トアリ〕男女の情は格別なる心のものなれば、男女別有とて、兄弟をも成人にしたがひてへだつる様にし給へり。聖賢の用心也。詩に淫風をまじへ給へるも、凡情はかゝる事をもゆるかせにすればある物ぞと、政道の心持に知せたる事といへり」

行幸

〔○雅山抄云、流布本亦本文を缺く。按に「なほなほしき人の際こそ今様とては氏改むる事のたはやすきもあれなど思し廻らすに」の評語なりトアリ〕氏姓を正して不乱に王者の政なるに、本姓の氏姓を改て時〔勢〕にしたがはしむるは、大道をしらざる人のなす事なり。中国にて漢の世〔に〕此あやまち盛也。日本にても源氏の時よりはしばしありたると見えたり。武家の代となり〔て〕梶原は平氏なるに、源太と頼朝の源氏のごとくよばれしあやまちを傳へて、後世盛になりしにや。秀吉の時は多く〔は(ま)〕羽柴をなのれり。源氏の時迄上らふには上古の王風残りて殊勝の事也

○たてたるところ、むかしより〔いとけだかき詮〕

内大臣の氣性をのたまへり。一度いひかゝれる事はおれがたき性となり。情のこはき意地あり〔と見えたり。〕凡情といふ者、腹立のまぎれにふといひ出して後悔多き事也。人のいひしにおれたくと思へども、おれかねて、過をかざり非をとぐるあり。内府も最前は尤其理ありつれども、よく思ひめぐらし給はゞ、なだらかに禮儀をまうけてゆるさるべきことなり。夕霧はゝのことはなし。然をいひさはがしくて、子にも疵をつけ、母公のうらみをおひ給へるは大なる失錯

なり。短慮のいたす所なり。〔萬に此たぐひ多し〕

◯くだ〳〵しきなほ人の〔中らひに似たる事に侍れば〕

〔評。夕良上の事は平人などのなからひのやうなる事なればと、あらはにあらはし給はぬ也
萬事に人にかくす事あれども、大躰をば諸人知もの也。諸人知といへ共、又あかしてはいよ〳〵み〔ぐ〕るしさを引出
すもの也。心へだてぬどちかたる事も、いひ出しつる事をば、他人聞傳ふるもの也〕

光こそまさり給へと言まで〔は〕源氏のことなり。かくしたゝかといふよりは内大臣のとなり。しどけなき大君（臣）すがた
の光こそ、源氏もたぐひなき様なれ、ふとさたかさなれあひてしたゝかに、有〔宿禰本〕徳の大臣らしさはなずらひてもみ
えざるとなり。少しいやしきかたなるべし。たけたかく〔ふとさもなれあひ、〕容儀〔躰たらく〕いはんかたなきを、おし
たてよきと世俗ほむる〔者也。然どもそれ〕は平人のよきなり。容儀はほむべきところなれども、風情けだかく、何
となく平人ならぬ人あり。上品の生れ付なり。〔平人は不知ばよしといはず。〕ほめたる内大臣よりも、ほめざる源氏の
かたはまさりて聞ゆ〔る也。〕女も〔みめかたちをほむるは世俗の事也。〕容儀はすぐれざれども、女しく愛敬ありて、ま
たけだかく上らふしき風あるを、（上品の生つきとすべし）よきとすべし。〔心なき者はみしらざるべし。男女ともに心の徳也。されどあるまじ
く〕

〔〇番山抄云、流布本亦本文を缺く。按に「されどあるまじう拗けたるべき程なりけりと、思ひ返すことこそはあり難きまめしさなめれ」の評語なりトアリ〕

〔評。雲井鴈を思ひかけながら、又玉かつらへ心をうつさんは、ねぢけたる事也と思ひかへすは、夕霧の實法なる心な
りと、草子の地なり〕

夕霧學者にて、いにしへの道德禮儀を見聞給へば、情に發〔す〕れども禮〔儀〕にとゞまり給ふ心あり。後世學で益すくなきは、よる所有て學ぶ者多き故なり。〔工人がらよからぬは、少し益ありてもみへぬなるべし。〕夕ぎりは人がらよき故に、學のしるしもすみやかなるべし

〔○細流抄云、流布本亦本文を缺く。按に「世の人は恥ぢがてら、はしたなめ給ふなどさまぐ\いひけり」の評語なるべしトアリ〕

人をあなどりなぶることを好む者世に多し。わきよりみては笑止なる者なり。かへりてみぐるしき事出來、恥をうくる類も有。〔遠慮なき者は近き憂ある類也。物をもて遊べは德を失ふといへり。人をなぶるもてあそぶ類也〕

眞木柱

○いかばかりのむかしのあだ〔かたき〕にこそおはしけん

あだかたきぞとみる人に、尤生れ付て人のため意地あしき者も自然にはあれども、多くはみづからとれるとなり。玉かづらのとは、源氏の心のまゝにもならざるとなり。王女御の事は北のかた紫上にもしたしくし、源氏へも相談し給はゞ、源氏の心にてはよそにはおもひ給ふまじきなり

○さいへどおもひやり〔ふかうおはする人にて諺〕

螢兵部卿宮は思ひやりふかき故に、よく分別有て、源氏の謀略にあらざる事を、よく明らめ給ふとなり

〔○細流抄云、流布本亦本文を缺く。按に「身をつみて心苦しうなむ」の評語なりトアリ〕

日ごろ我心をとゞめて、何とがなと欲せし事のたがひしを、我心をすてゝ相手の餘儀なき情を知りて、恨とせぬ事は、

思ひやりふかゝらではかたき事なるべし
〔色〕にまよひては、我と等同の人にてさへ、人の心をやぶりひがごとをするもの有。ましてすこし無理にても、俗に〔い〕へる主得分なるべし。ことにみかどははじめよりおぼしよりてのたまへば、御道理も有。しかるを身をつみてと、將の御心にて禮儀をやぶりたまはぬは、殊勝の事也」

梅枝

〇位あさく
〔評。淺位なる程は、身もちもおのづから聊爾なる故、あしき事あるとなり〕
淺位の人は身もちふるまひもかろがろしく、平生ならひ、人もめにたてざれば、自然によからぬ行跡どもまじる者なり。高位の人はさやうのふるまひ思ひながらも、ふるまはれざる事多かるべし。〔是又居移氣、養移體ことを見るべし〕
〇つひによかるべきこゝろを
人のため我爲〔つゐ〕に然るべきこゝろをつかへと也。人の爲によき事は、我ためにもあしからざる物なり。つひにといへる面白し。當分形氣にひかるゝ事は、終にはあしきことになる物なり

藤裏葉

○何ごともおもふまゝにて

此段は前に御息所葵上の事を宣ひて、扨世間はさだめなき物ぞとなり。因て只今源氏の心のまゝに榮花をもつくしたくおもへども、行末〔の〕殘り給はむ子孫の、おとろへとならん事をおもふ故に、榮耀をも究めざるよし、案上にかたり給ふなり。盛衰は理の常なり。心なき草木だにのがるゝ事なし。いかに人をや（いはんや人たる者）、〔盛にして衰へざる者なし。其中に盛なる時欲をきはめず、儉にして施しすくふ事を好む者は子孫長久也。源氏の心入きとくなり〕

須磨

○世の中いとわづらはしく、はしたなきとのみ〔まされば〕

其世に勢ある人のにくみをうけ、また其方ざまの小人立まじり讒する時は、身に罪なきとてもたのまれず（たのみになりがたし）。人の上に尋常なる事も、とりなしやうにて咎〔に〕なるものなり。機を見てよきほどに身退かでは、かならず害にあふ〔もの也。さるほどに人の上に立給ふ人は、小人〔讒〕を信ぜざるを〔以〕明〔なり〕とす〔る事也。〕常人は何心なく過るに、小人は才覺を以て（かまへて）、おとしあなにいるゝやうにする事なれば、上たる人能々明ならでは、一度はおとし穴に入ものなり。〔君子をさへいであしくせんとおもへば、罪のこしらへやうあり。むかしより和漢共にためし多し。況常人はすこしづゝのあやまちなき者はなければ、記し置、いひ立て罪におとさんことやすし。君臣共に國天下の政道にあづかる人は、後世の恥と思て、小人惡人讒諛の人をちかづけざる樣に用心すべき也〕

或人いはく、源氏は内侍（おぼろ月夜）のかみのとによせてかくなり給へば、罪なしともいひがたかるべきか。云、其時代の風俗を考るに、他人に有ては罪とがになるべからず。尚侍はさだまりたる后女御更衣にてもなし。既に王〔君〕は夫を持ながら、尚侍をかけ給へり。おほやけざまの宮仕へなり。されども是は天子の御志も有る人なり。人もゆるさぬ事〔私の交り〕なれば、今の世ならばかろき者ならば死罪、重き人〔なら〕ば流罪にもなるべきなり。又當時は常の事になりてあるとに、むかしならば重き罪となるべき事あり。〔何事も〕時代〔にて〕かはれば、其時代を以て論ずべし。或問、末代おとろへたる世にさへ、なりがたき男女のたはぶれを、上世禮法の盛なりし時、みだりがはしき事は如何。と。云、いにしへは此國の人の心たけく勇に過たり。八幡宮は天子の御身ながら、みづから大將となり給ひ〔て〕合戦し給へり。〕其御母〔神功后皇〕は女性にて〔だに、八幡帝御成人の間は〕大將軍となり給ふ〔朝夕戦場におはします〕いはんや、諸臣〔諸士〕百姓にいたる迄、〔只〕心たけ過て和をやぶり易く、治がたかりしかば、人と生れたる者もたれもいがれぬ男女の情にたよりて歌をよみ、たけきに過て野人なるものは、自らはづる様にし、后女御の定り給ふ數の外の宮づかへの人々は、詠哥〔の〕月花の折々につけて志をみせ、人がらやさしく、思ひいれ〔まことなるにはなびきなどし、〕或は忍び或はあらはれしも、ともに罪ありし事を聞ず。日本は四海第一の武國なれば、上代質素の時には、かくあらでは和をむすびがたし。是和哥の戀を主〔本〕とせし心なり。末代文備り〔過〕て奢長じ、風俗やはらかになり、武勇おとろへたり。此時にあたりて、戀を本とし、男女相たはぶるゝ様にては、いよいよ王道〔も〕おとろへてみぐるしかるべし。むかしは戀を以てたけきを和げ、人倫を睦じくし、國を治む〔の道としたれば、戀歌を以て本とせり。〕後世はかへりて人道のみだる

ゝはしとなれば、是をいましめたり。源氏などの時〔分〕よりやう〳〵和の用にはならで、害をなす〔はじめなりき。〕然れどもむかしの名殘にて、禁法もな〔かり〕し〔也。〕朧月夜〔など〕ほどの事にて、罪とする時〔節〕にてはな〔かり〕し〔也〕。されどもむかしとは天理人情のかはりたれば、いひたつれば罪にもなりたり。今も一向の野人の死を何ともおもはず、男に過て立がたき者は、和哥の道なくばしづまるまじきと思ふ者あり。哥をよみ戀の情出來ての事にはあらねども、古哥を一〔首〕二首きゝおぼえ、心に感じたるばかりにても、其身の凶をまぬかれ、人をそこなはざりし者ありしなり。〔そのたすけにもかゝはらざりしは、終に人をそこなひ、身をほろぼしたるものありし也。〕或問、もろこしには男女の情欲を用ひて國を治たる事なし。日本に〔さある〕は道なき故〔なる〕か。云、もろこしとても上古には同姓めとらずといひし法もなし。男女の別道とて、後世の樣にきびしく立たる法度もなかりしなり。中和の國なる故に、武の過るといふ事〔も〕なく、文の勝といふ事もなし。〔古は質朴なる斗にて何の跡もみえず。〕日本は武國なる故に、〔はじめは〕男に過たり。もろこしより禮樂制度わたりて後、自然に法も立たるなり。むかしはさやうの事もなかりしかば、男女の情欲を用るとは思はざれども、〔此病あれば此德あることとわりにて、〕自然に戀といひて、たけき心を和げたり。〔野人になさけをおしへたる也。〕今もこゝろのおちつかざる若き者には、〔時分はやけれ共〕おさへのために妻子をむかふなどおなじ事なり。學校の數正しく〔して〕、男女ともに時分〳〵のつとめいとまなく、みだりがはしき事〔も〕なく、時分よく婚姻を結ぶ〔は〕上々の事なれども、それは有德の代の事なり。德ある君にても時を得給はざれば、急にはならざる〔事〕なり。〔むかしは歌をよみかはし、志の叶ひたる者夫婦になりたり。〕もろこしにても上古には媒の禮も〔いまだ〕

備はらず。〔人の心に邪僞なく、情欲淡き故也〕。後世〔は〕事しげく情欲厚く、人の心邪僞になりて、男女〔の〕心にまかすれば、亂になる故〔に〕媒を定たり（といふもの定れり）。〔此媒男女にかわりて、其德其身の相かなひ、夫婦となるべき人がらをはかりて合たる也。〕後には媒も又僞出來て、〔双方へ〕巧言をいひてたばかりぬれば、〔合する樣になりたる也。其故に〕誠にも媒ことばといへり。〔そのしるしには離する者多し。〕是非なく堪忍すれども夫婦和せず、家おさまらず。終に〔は〕家道貧しく（乏して）、公役を欠に〔も〕いたれり。上古には大身小身富貧をいはず、唯男女の德のたぐひたるを、〔婚見の志に叶たるを〕合せたりき。〔後世利にめづる鄙風おこりてより、〕娚は大身を取べく、妻は下よりとるべしなどいふ事もはじまりたり。舅姑に仕へ樣のよきとある事も、貧賤の家にはさも有べし。されども人から心だてによれば（よる事なれば）、一篇にはいひがたし。賤しきより成あがりたる者と（は）、思ひやりもあらんかと思へば、かへりて下々（に）けはしく、人をつかふ事あしきものなり。もとよりの上﨟はおごらで、なりあがりたる者はおごる者なれば、夫婦は大身小身をいはずして、いにしへのやうに人がら次第〔志しだひ〕にあはせたきものなり。今は上らふほど慇懃に。下らふほど無禮〔なる者〕多し。是時代のかはり故歟（にて）。〔何事にも時處位有ものなれば、時に中する道なくてはならず〕

〇かのすまは、むかしこそ人のすみかなども有けれ。〔今はいと里ばなれ心すごくて、あまの家だにまれになど開給へど、人しげくひたゝけたらんすまゐは、いとほいなかるべし。さりとてみやこをとをざからんも、ふるさとおぼつかなかるべきを、人わろくぞおぼしみだる（へ）ゝ〕須磨にいたりて、右は一の谷ひよ鳥越、左りは海なれば、地せまく（ば）、要害〔よく〕よき所なる故〔に〕、むかしは關所なりき。

されば昔しは人しげかるべし。王道行はれ天下平なりし後は、さして用心もいらずして、住人稀なるべし。兵庫明石などより〔は〕里ばなれ、あまの家も所々にちひさくて、さびしきゆへに名を得た〔る所な〕り。山谷の景氣〔とかく〕繁昌はすまじき地なり。〔古來かはらぬさびしさなるべし。公義よりつかはされんは各別也。我とゆかんには、おほやけのかしこまりある人は、さびしくかすかなる住居を求むる事尤なり〕

○萬のときしかたゆくすゑ〔おもひつゞけ給に、かなしき事さま／＼なり。うきものと思ひすてつる世も、今はとすみはなれなんことをおぼすには、いとすてがたき事おほかり〕

大も小も親の世に出頭したる者は、子の代には大かたあしく成ものなり。〔凡情の習にて方すみの者、我も／＼と時をえん事を思ひ、人の上は氣にもねらず、あしざまにいひなせば、子の氣にはおほくはたがふもの也。〕世の中の婦姑になるごとく、ゆきめぐりて又身の上になる事なれども、時を得たる者は心のまゝにおどり、後の望ある者は人をおとしたく思ふ事淺ましき心どもなり。〔世つぎ君も方すみの者といへば、才德なき者をも取立、親の世に労ありし者をも、おしこみなどするは不孝也。〕大かたは人のいひなし、世のあしき習にあやかりて、ふかき思ひはかりなき故なり。ことに罪なくて〔罪を得〕時をうしなひたる人は、世のいとはしさも一人なるべし。〔され共今はとはるゝきはには、離儀なる事おほかるべき事尤也。〕君子なればかねて心得て、身しりぞき〔て〕難にもあはず。〔もしは小人の讒により難にあひても〕天命を知る故に、〔小人の讒を言〕かなしむ事もなし。（心は少もなき也）此時代に〔は〕かやうの學問もなかりしかば、よき生れつきの人〔といへども〕凡夫にて終りし事をしむべし

〔　〕等ナルヲ湖月抄ニテ補塡セリトス

○中にも雛君のあけくれにそへて〔思ひなげき給〕へるさま、〔の心苦しさは、何事にも勝れてあはれなるを、行めぐりても亦逢ひ見むことを、必ずと思さむにてだに、なほ一二日の程、よそ〳〵に明し暮す折々だに、覺束なきものに覺え、女君も心細うのみ思ひ給へるを、幾年その程と限ある道にもあらず、逢ふを限りに隔たりゆかんも、さだめなき世に、やがて別るべき門出にもやと、いみじう覺え給へば、忍びて諸ともにやと思しよる所あれど、さる心ぼそからむ海ずらの、波風より外に立ちまじる人もなからむに〔〕、かくらうたき御さまにてひきぐし給へらんもいとつきなく、我心にも中々物おもひのつまなるべきをなどおぼしかへすを、女君はいみじからんみちにもおくれきこえずだにあらばと、おもむけてうらめしげにおぼいたり」

眞實の配流にもあらず。みづからしりぞき給へば、紫の上本臺といふにもあらず。苦かるまじき賊。されども遠慮あるは尤なり。たとひ配慮なりとも、夫婦はもろともにつかはさるべき事なり。唐にては夫婦〔は心次第に〕つきしたがひたりとみえたり。日本にてはいつよりか妻を〔ば〕はなちとゞむる事はじまれり。〔夫婦の情は父も子に得ず、君も臣に得ずとて、人の至情なるに、無理にはなつ事は〕人情にあらず。源氏などのはそれよりもかろし。〔領地はその儘にて、〕當分官位ばかり〔を〕削り、位田職田のみはなれ給へりとみえたり。明石入道は任國して、〔一任の〕後〔すぐに〕都にかへらず〔して〕引こもりたりと見えたり。如是の類もろこしにも〔例〕多し。源氏〔君〕は女君に難儀なる配所をみせ給はむと、いたはしと思したるを、女君はたとひ死におもむくとも、一所にこそと思ひ給へる尤至極なり。〔夫婦の情は左樣にこそ、家もとゝのふるべき也。死といはずして、いみじからん道といへるおもしろし」

○〔入道宮よりも、もの〻きこへや又いかゞとりなされんと、〔我御ため謌〕つ〻ましけれど、しのびつ〻御とぶらひつねに有。むかしかやうにおひおぼし、あはれをも見せたまはましかばと、うちをもひ出給に、さもさまざまに心をのみつくすべかりける人の御ちぎりかなと、つらく思ひ聞へ給

評。難に望で筋目ある方のとぶらひは義の常也。公儀よりも義をとがむべき事にあらず、平生無事の時に、女がたより男がたへしげき音づれは遠慮尤也〕

○おとゞこなたにわたりて給ひてたいめし給へり。つれ〴〵にこもらせ給へるほど云々〔なにとは侍らぬむかし物がたりも、まいりきてきこへさせむとおもふ給れど、身のやまひおもきにより、おほやけにもつかうまつらず、位をも返し奉りて侍に、わたくしざまにはこしのべてなんど、もの〻聞へひが〳〵しかるべきを、今は世中はゞかるべき身にも侍らねど、いちはやき世のいとおそろしう侍なり。か〻る御事をみ給ふるにつけて、いのち長きは心うくおもひ給へらる〻世のすへにも侍るかな、あめのしたをさかさまになしても、思たまへよらざりし御ありさまを見給ふれば、〕よろづいとあぢきなくなんときこえ給ふ〔ひて、いたうしほたれ給〕

これ實に病あるにあらず。女院御在位の時は、東宮御外戚の右大臣をさしおきて、世の政をとり行ひし人なれども、當今御代になりて、御母后の御心のま〻にて、〔御外戚の威勢つよく〕難儀なる事のみ多き故に、こもられしなるべし。故院の御世の事を思ひ、又御遺言など思ひては、いかなる事ありとも、源氏などのか〻る事に成給ふべきとは思はれずと也。〔たとひ大なる罪あり共、一日も二日もいさめたゞして、その上に猶〕世のさはりにも成べくば、左遷なども有

するもの
カ

べきとなるに、年老たる左大臣(身の)にさへ諫め給へるなど〔と〕の内意もなく、〔さして重き罪になるべき事もなきに、かく〕なり給ふと〔は〕忽ち先君の命を背きたると、かた〴〵にしほたれ給ふなるべし。〔いちはやき□(はヵ)急速なる心也。物に遠慮をもし、くわ敷開合せ考へ、みづからの見察をもくはへて明白なる時にこそ、善惡のさたを(ママ)すもるものなるに、我心の怒りにまかせ、少の事をも大にいひなしてにくきものにあたり、或はあしざまに人のいひなせば、それを證據にして急にさたする樣にてはやすき事なし。惡人はへつらひ、よき人は身退くより外の事なし。さる故に小人に威力つき出頭する時は、國天下の風俗日々にあしくなるもの也〕

○〔とある事もかゝる事も、〕さきの世のむくひにこそ侍るなれば云々〔いひもてゆけば只みづからのをとたりになん侍。さしてかく官爵をとられず、あさはかなることにかゝづらゐてだに、おほやけのかしこまりなる人のうつゝざまにて世中にありふるは、とがをもきわざに人の國にもし侍なるを、とをくはなちつかわすべきさだめなども侍るなるは、さまことなるつみにあたるべきにこそ侍なれ、にごりなき心に任せて、つれなくすぐし侍らんもいとはゞかりおほく、是より大きなるはぢにのぞまぬさきに、世をのがれなんとおもひ給へたちぬるなど、こまやかに聞へ給ふ

評。何事も前世のむくひといひて、また此世に善根をうへて、後世に善をうくべきといひ、惡事をなして後生に苦界に落るといへるは佛說の心也。それに付て因緣物語さま〴〵有、諸書に見へたり。「いひもてゆけばたゞみづからのをとたりになん侍る」とかけるは、又儒道の理也。〕造化のはじめに陰陽五行のまじはりによりて自然と人の一生の福禍定るとなり。其上に親先祖のなしたる善惡の行の造化の神に感じたる所、子孫に應ずる事有。ともに鬼神の功用なり。

然れども〔只〕今の人心〔人〕よく、行事よければ、たとひ凶禍の命を生付ても、妖は德にかたざる理にて、ひるがへして吉福いたるものなり。たとひ福分よくうけても、此身の心行あしくては、かならず凶事いたるものなり。畢竟とがは其身に歸する〔道〕理なれば、いひもてゆけば身のおこたりと〔なり。〕自反のこゝろ尤奇特なり。先祖の善惡の感應、造化の定りにて禍福の大にちがひたるは稀なり。大かたは今の人の心と行がらにて、よくもあしくもなる事なり。源氏の身のゆだんとはいひながら、かやうになるべき罪のおぼえはなし。后方の人々のいふ樣なる事は、少しもなき事なれども、誤まりなき心をたのみにて其儘あらむは無禮にもなるべき歟。主君の御前にあしきといふ斗にて、さしたるとなきにてだに、かしこまりたる躰にていひわけなく、自然に聞し召わけらるゝ樣にするが臣下の禮なり。〔人の國はもろしこをさす也。和漢共にかかるためし多き事也。其上〕遠く流罪すべき〔など〕有たくみも〕聞ゆれば、大なる恥に望み給はざる先に、世を遁るべしとなり。〔今は〕遁世を〔といへば〕出家〔修行者〕の樣に思へども、むかしの遁世は和漢ともに〔しからず〕只世中のまじはりをやめて引こもり居るを〔遁世と〕いふ。〔流罪によらず〕あしざまになりたるを恥と云るは、今俗に無面目といへる類なり。身に不義惡事あらば、罪にあはずして仕合よくとも恥なり。〔罪に落たり共身に不義惡行なく、たゞかへりて道あらば、却て後世のほまれとなるべし。北野天神の遠流に進給へども、後世儒家の聖賢といはゝれ給にても知べし。遠流の禍なくば、却てそれほどのほまれは有まじき也。〕人は只當世の毀譽を心にかけず、身の直義を思ひて、後世の名をよく考べき事なり〔とぞ〕

○罪無き身のまこそ

伊勢太神宮は佛法をいみ給ふ故に、其詞までいむ事なり。佛をば中子とも、立すくみともいひ、經をそめ紙、寺はかはらぶき、塔はあらゝぎ、堂はこりたき、僧はかみなが、比丘尼はめかみなが、齋はかたがしはといへり。〔いはで叶ざる時はかく替名をいふこと也〕

いむぞとて其名をいはぬ事なれば西にむかひてねをのみぞなく

念佛申すといふ事いはれざる故に、かくいへるなるべし。大和姫の世紀にも〔佛法のいきを絶と有(云)。西南の法は人の國をすゝめとるの謀なれば、頓て此國も佛にすゝめられて、〕神道王道(法)衰へん事をみ給へば、つよくいみ給ひしなり。御息所は佛法を信じながら、齋宮の地にゐ給へば、後世をねがふ事ならざる故にかくいへるなり。伊勢と加茂には齋宮(院)おはしまさでかなはざる事なり(いはれなるに)。〔絶たる事なげか敷事也。ことむつかしくしなして、造作なる故に絶たりとみえたり。〕けだかくいやしからぬ風だに(より)あらば、事はかろくして質素の(に)古風にして取立たき事なり。大和姫は内侍所をかしらにいたゞき給ひて、三室山を經て伊勢の山田の地にいたり給へば、むかしはおごりたる事にてはなかりし事明なり

明石

○帝王のふかき宮にやしなはれ給ひて云云〔色々のたのしみにをごり給ひしかど、ふかき御うつくしみおほやしまにあまねく、しづめる共がらをこそおほくうかべ玉ひしか。今何のむくゐにかこゝらよこざまなる波風にはおぼれ給はん。〕天地ことわり給へ

當今の母后の、源氏の母更衣をにくみねたみ給ひし餘りに、源氏までをにくみ給へば、此人東宮の御代の御うしろみと定りたれば、東宮の御代を急ぎて〔當代に〕不忠の逆心ありと〔年月〕譏し給ひしなり。內侍のかみの事をついでにして〔日頃罪をいひ立て〕官職を削り給へるなり。逆心の罪は源氏には少もなき事なり。無實の讒言を天地とわり給へとなり。

源氏は帝王の御愛子にて、朝夕御かたはらに置せ給ふ、其上才智勝れて世の政にもあづかるべき器量たる故に、わざと親王にもなし給はず、人臣にくだして萬事ならはしめ給ひしなり。仁愛あり人もたのみたる故に、しづめるともがらを多くたすけうかべ給ひしなり。好色のたゞひとつのみ此人のきずなり。然れども道ある世ならば、其不義には至まじき生れ付なり。〔好色の生付に二色有。不仁にて好む者有。仁愛の質にてこのむ者有。〕好色も不仁の者の好色はいやしく好むもの也。〕夫ゆゑに人をも多くそこなふ者なり。仁愛才智の人は氣質靈なり。靈なる性は物にうつりやすし。此故に教學なく道なき世には色にうつる物なり。然れども心〔の〕根よき故にそれを以て人をそこなはず、風俗も上らふしき者なり。〔たとひ道なく共、今の世に生れ給ひなば、その世に有しほどのあやまりはあるまじき也〕

〇なにがし延喜の御手よりひきつたへたると、三代になむ〔なり侍ぬるを、かうつたなき身にて、この世の事はすて忘れ侍ぬるを、ものゝせちにいぶせきおり〳〵はかきならし侍ぬるを、あやしうまねぶものゝ侍こそ、じねんにかの先大王の御手にかよひて侍れ。山ぶしのひがみゝに松風をきゝわたし侍るにやあらん。いかで是しのびてきこしめさせてしがなときこゆるまゝに、うちわなゝきてなみだおとすべかめり〕

〔計。「山ぶしのひがみ、」〕山ぶしは山をめぐり樹下岸窟をふしどゝするをいふなるべし。すべて法師の名とするとみえ

たり

〔松風を耳なれにける山ぶしはことをこと共おもはざりけり〕

今俗にもてあそぶつくしごとなどはいやしき物也。何もしらざるものゝ面白思ふなり。正樂の箏びわの音は、田夫野人は松風もおなじやうに思ひて、一向面白くおもはざるなり。すこし律呂もわきまへたる人、又は學問して古風をしたふ人ならでは、雅樂を好まざるものなり。入道我身を卑下して、田舍山伏なれば、娘のびはをよしと思ふも眞實よきやらむ、またひが耳にてよからぬやらんしりがたし。よく聞人にきかせたきとなり。延喜帝は前代後代類ひまれなる琵琶の御上手なり。然るを入道の父大臣直につたはり給ひて上手なり。入道又父よりつたはりたり。然れども延喜帝の遊されし御撥音、眞のびはの音といふものには入道も及びがたし。さればかやうなる物とて、人におしふるともならざるに、此娘は何としてか自然にまことの音をひきとり、ひきしづめるは撥あたり、前大王の御手に通じてよく似たてまつりたり。これを何とかしてきかせ奉りたきとなり。其返答に源氏などの物の音などは、琴をとゝも思はれまじきに、はづかしとてやめ給ふなり。源氏もまた古哥の心をとりかへて、明石の女はさてはたぐひなき上手成べければ、源氏などの琴をことゝも思ふまじきとなり。〔惣じて詩歌共に、ふるき御心を用かへてとりあつかふ事、詩歌ともにしかり〕

右源氏物語抄五卷熊澤了芥翁所作也。會聞、全部五十四卷各抄出之。中院內相公通茂潤色之、且擇切於時事者、爲五冊也。

全部之本者今出納大藏幽藏之。抄(三) 乃各冊内相自以朱批挍之本云、以執齋之本敬寫畢。

享和庚子夷則初九　堯臣

余嘗聞蕃山先生罷仕在京之日始采國讀之而至源語喟然歎曰　本邦　王朝之盛其禮樂之可觀者賴有此書乃爲之解以授亞槐源公通茂云余心久願得其本頃偶搜某氏所藏見源公所抄其稾之本而乞之得借歸則家大人乃爲手寫以賜余然所恨原本挍讐未精差謬頗多余暇日一過之次姑以愚意訂改而尚俟它日遇好本考正矣余雖好源語而又欽先生之爲人竊此本出於家大人手謄之賜者乎謹以珍襲藏于匿中家大人時年七十健實猶能作蠅頭字

天明四年甲辰冬十月　高昶拜識

蕃山全集　第二冊　（全六冊ノ內）第四回配本

編纂者　東京市神田區神保町一ノ三　正宗敦夫

發行者　蕃山全集刊行會　小川鐵之介

印刷者　東京市小石川區高田豐川町三七番地　厚德社印刷所　長宗泰造

發行所　東京市神田區神保町一ノ三文川堂內　蕃山全集刊行會　振替東京一六八五〇三番　電話神田二三六七番

昭和十六年九月十五日印刷
昭和十六年九月二十日發行

一冊豫約價　金四圓五拾錢
全六冊　金貳拾七圓也

製本　柏谷製本所

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

（日本出版文化協會會員番號 128079）